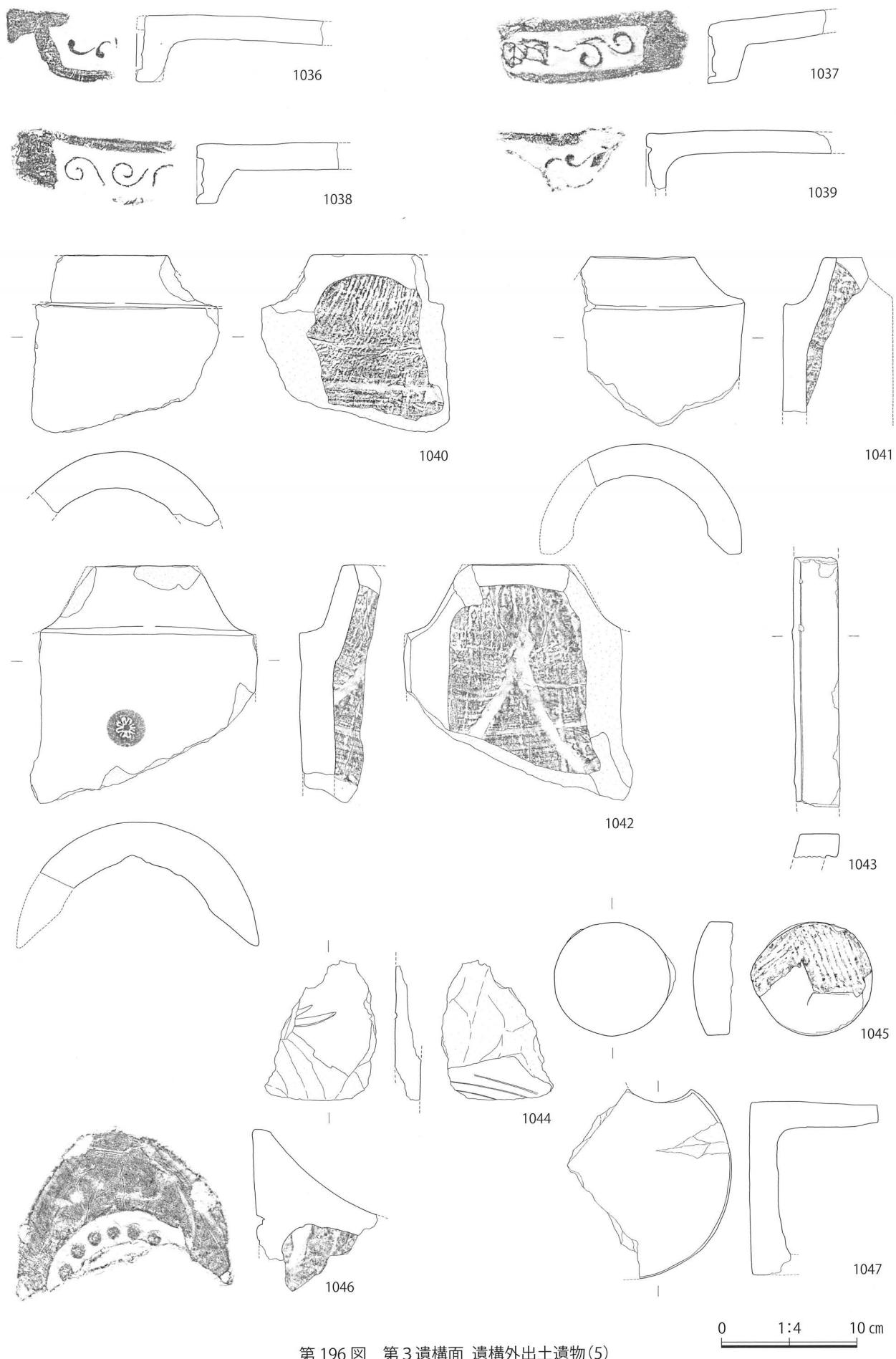


は丸型の連歯下駄で、外面に黒漆が塗られていたようである。前歯、後歯ともに右側の磨り減りが激しい。前緒穴前方に指の痕跡が残る。1029は陽物形の木製品である。1030は箱物あるいは折敷の側板と思われるもので、黒漆が塗られており、片面上部に目釘が1ヶ所打たれている。1031は折敷の側板と思われるもので、下端部以外に黒漆を施す。1032は栓である。1033は樽の蓋板で、面に円孔が2ヶ所開けられている。1034はヘラである。1035は羽子板で、片面に引掻き傷が見られ、もう片面は金彩が一部残存する。

瓦

1036～1047は瓦である。1036は軒平棟瓦で、中心飾りの左右に唐草文が配されるものである。1037は軒平瓦で、中心飾りに葉脈を入れた3葉を置き、その左右に2つずつ唐草文を配するものである。1038は軒平瓦で、中心飾りの左右に2つずつ唐草文を配するものである。1039は軒平瓦で、中心飾りに五葉を置き、その左右に唐草文を配するものである。1040・1041は丸瓦で、内面調整はコビキBである。1042は丸瓦で、外面に菊花文のスタンプが押されており、内面調整はコビキBである。1043は丸瓦で、内面調整はコビキBで、さらに紐の痕跡が残るものである。1044は鬼瓦の一部である。1045は万十である。1046は特殊な軒丸瓦である。1047は鬼瓦の一部であろうか。



第196図 第3遺構面 遺構外出土遺物(5)

第5節 第4遺構面(第197図)

第4遺構面の概要 第3遺構面の形成土とその下層の生活層と思われる土層を取り除いたところ、黄色系の山土が厚く堆積し、これに形成される面が調査区全体に広がるため、これを第4遺構面と認識した。

第4遺構面は北屋敷の遺構面の中で最も遺構の残存状況が良く、屋敷地の空間利用について具体的に推定することができた。大きくは、庭園遺構 SG01:池、SG02:池、SX01:植栽跡、SX02:花壇とそれを鑑賞する建物跡 SB03・04 といった表向きの空間と、その横の空閑地 SA08:堀跡、その後 SK28:廃棄土坑など、堀跡 SA07 と素掘溝 SD06・07 を隔てた長屋跡 SB05 といった奥向きの空間とに分けられると考えている。

また、詳しくは第6章で述べられるが、屋敷境を示す素掘り溝 SD01 が調査区に南端で検出されている。この北側には杭列が並ぶ部分(南 SA02)が認められ、遮蔽施設が存在した可能性が考えられる。

なお、トレンチによる確認調査で、詳しくは第7章で述べられるが、この遺構面より下層で遺構を検出しているが、この遺構が調査区全体に広がるものではなく部分的に存在することから、第4遺構面が城下町を造成した時の最初の屋敷地にあたるものと考えている。

SG02:池(第198・199図)

SG02 調査区南側で第3遺構面から掘り方を確認し調査を行った遺構であるが、前節で述べたとおり、SG01 と SD01 で繋がった平面ひょうたん型の池が存在していたことが分かっている。改修の痕跡を見つけるために、追加で部分的に調査を行った。

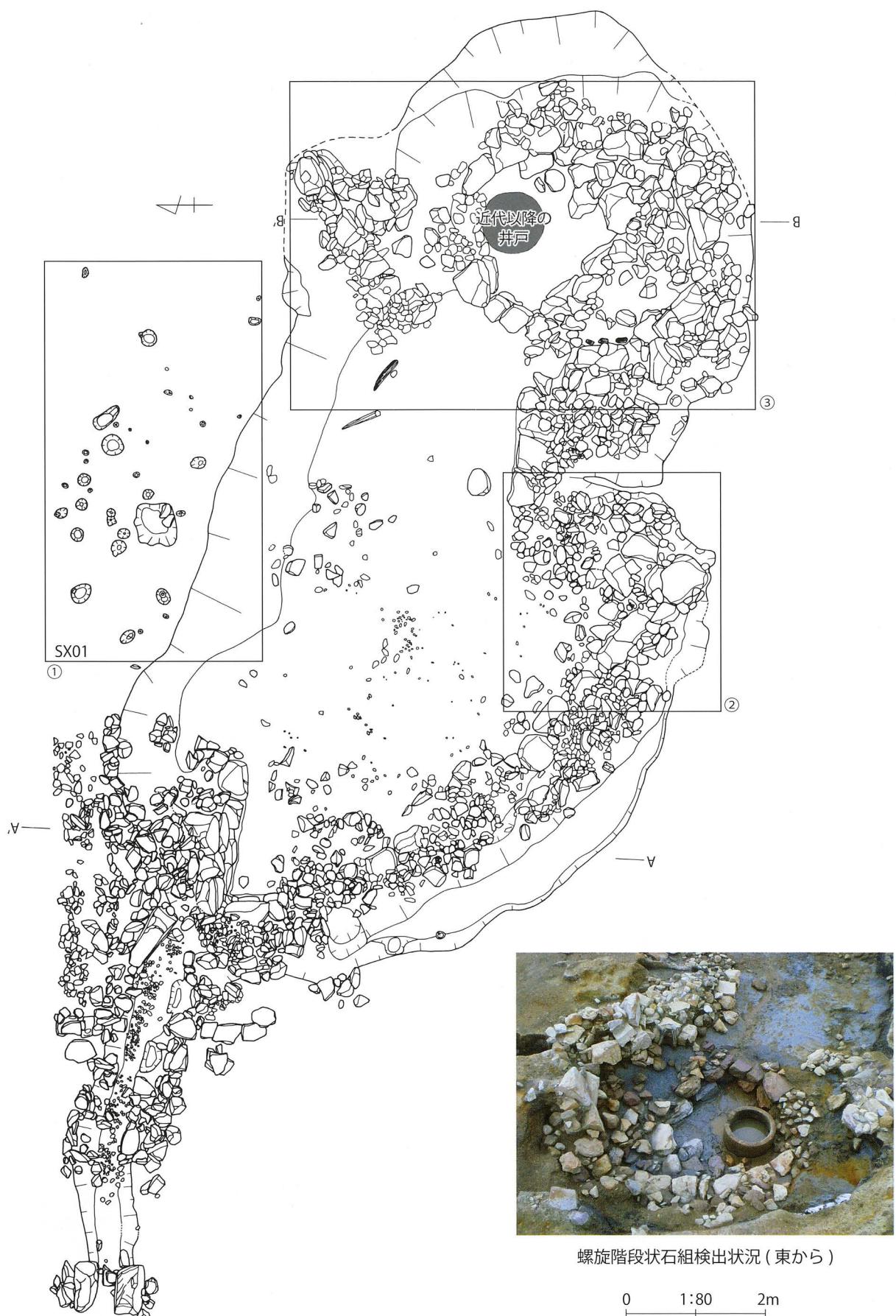
第3遺構面に伴う石をはずし精査したところ、深さ約 15cm 程度のピットをいくつか検出した。これらのピットの下端は先細りし、またピットの並びに規則性が見られなかつたため、植栽の痕跡 SX01 と推定した。ピットの規模から小形の植物が植えてあったと思われる。ピットの埋土は池の底面で検出される玉砂利と砂質土が多く含まれていた。また、池の護岸にも、玉砂利を含む砂質土を使用している箇所が認められたことから、この部分が改修された痕跡と思われる(第198図の枠線内の範囲①)。南東側の護岸に使用されている扇紋の刻印を持つ石の裏込め土にも、玉砂利を含む砂質土が認められ、改修時に積み直されたか改めて積まれたものと思われる。また、南側の第3遺構面に伴う石を除去したところ、池の改修による掘り方が検出された。この埋土とこれに乗る礫石を除去したところ、大形の割石の並びが検出できた。これにより、池が形成された当初は大形の割石で護岸されていた可能性が高いことが判明した。(第198図の枠線内の範囲②)

また、東側においては、底面に敷かれていた玉砂利を除去したところ、下部に石積が見つかり、この石積が螺旋を描きながら上部につながっていくことが分かった。なお、この石積の北側に、導水及び排水施設がある可能性が指摘されたため、精査を行ったが、導水及び排水施設の痕跡は見つからなかった。その他、北東側の石積の下に改修の掘り込みの痕跡が見られ、この中から中国磁器の青花の細片とロクロ成形の土師器皿 751 が出土した。(第198図の枠線内の範囲③)

SG02 の改修時期について、改修に伴う拳大の石を除去中に桔梗文の瓦 755・756 が出土しており、第3遺構面の屋敷境の裏込めからも同様の瓦が出土していることから、第3遺構面で行われたものと考えている。

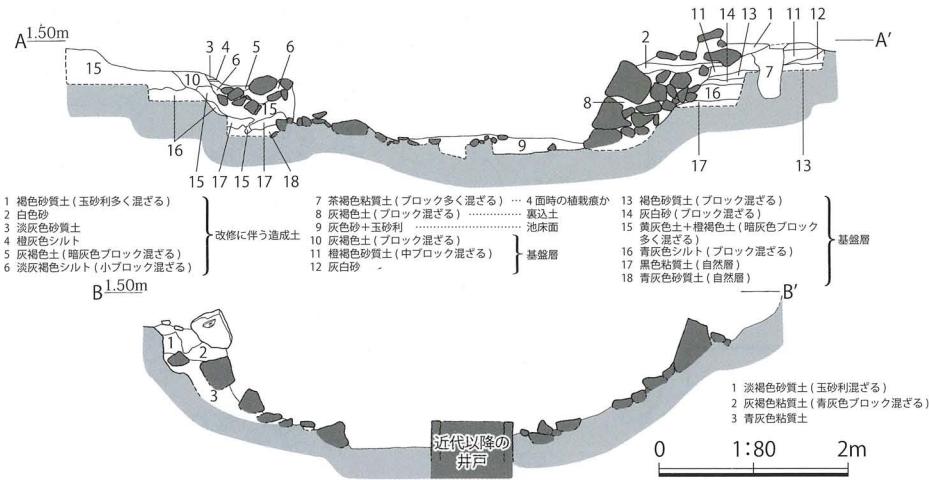


第197図 第4遺構面 全体図



第198図 SG02 平面図

*□の範囲は追加調査部分



第199図 SG02断面図

SG02刻印

SG02で検出した石材の刻印の拓本を第200図に示す。地紙型の中に「一」が入る。

SX02：花壇（第201図）

SX02

池SG02の北東側で検出した植栽の痕跡を含む隅丸長方形形状の大形土坑である。中央の直径約1.0mの皿状の土坑に黒色粘土が堆積しており、この土を除去したところ、コモのような網状の痕跡を検出した。おそらく樹木の根巻きの痕跡と思われる。この樹木の痕跡の東西両側には、黄色土が2条の帯状に認められ、西側は溝状を呈し、東側は土坑埋土が盛り上がった状態で検出されているものである。帯の中心を通るようにピットが4穴並んでおり、枝の支え木跡の可能性も考えられるが、帯状の黄色シルトを意識して掘られているため、植栽跡の可能性もある。根巻き痕からは根が張った形跡が見られないことから、根付く前に撤去された可能性が高い。また、これらの遺構を囲むように黒色土が、南北に約4m、東西に約7.5mの範囲で広がるのが確認できた。黒色土のプランの一端で、人頭大の石が3つ並んで残っており、本来は石がこの黒色土の範囲を囲い、植栽の境を形成していた可能性も考えられる。この黒色土が広がる部分に断ち割りを入れたところ、大きく掘り込まれた土坑に黒色土が入れられたことが判明した。このことから、植栽をするために土坑を掘り、土を入れ替えたものと推測した。この黒色土からは、陶磁器や木製品などが廃棄された状況で出土している。

SX02出土遺物（第202図）

国産陶器

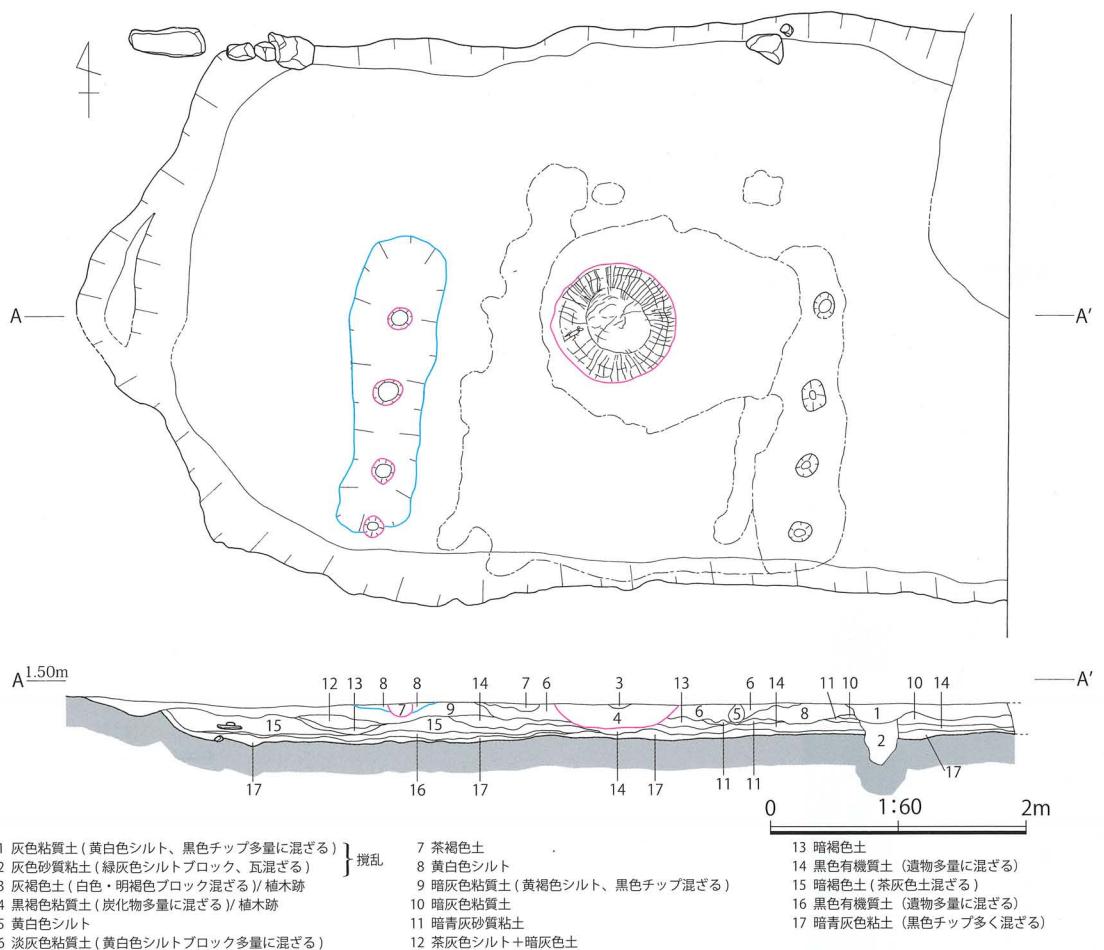
1048・1049は肥前陶器の皿で、内面見込部分に胎土目跡がある。1050は肥前陶器の水差と思われ、底部外面に貝目跡が残る。1051は志野の蓋と思われる。



第200図 SG02刻印拓影 (S=1/4)



SG02刻印石検出状況

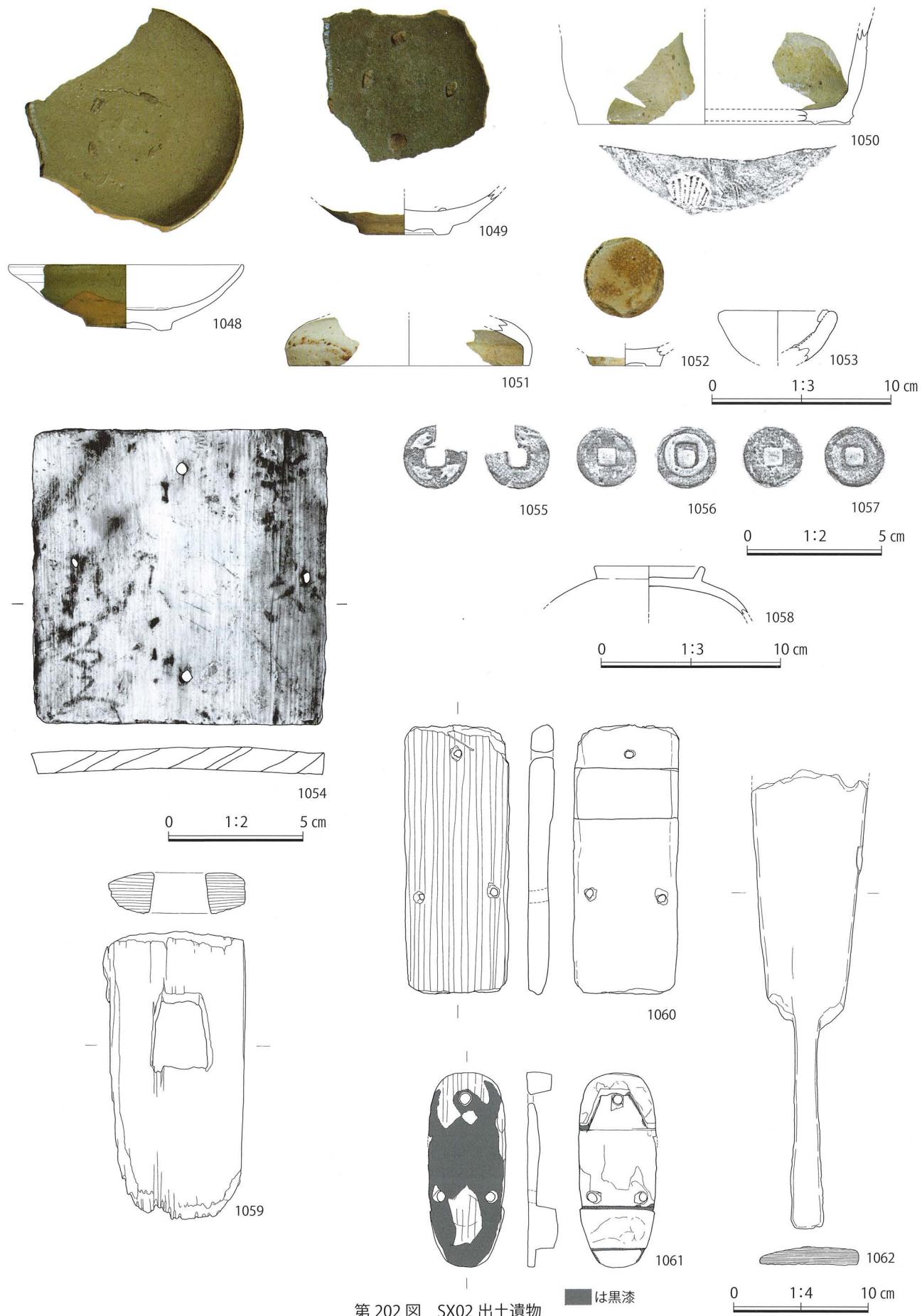


第201図 SX02平面図・断面図

1052は志野の小碗で、長石釉が全面に施釉される。1053は小形のるつぼで、詳細は第8章で述べられるが、内面の溶着物を科学分析したところ、鉛と銅の成分が検出された。これにより、鉛と銅の溶融に使用されたものと判明し、この遺構面で銅の鋳造が行われた可能性が考えられる。1054墨書木製品は墨書のある木製品で、文字の解読はできていない。4ヶ所目釘穴が確認でき、何らかに転用されたものかもしれない。1055～1057は銭貨である。1055は「□元通宝」で、他は不明である。1058は漆椀の蓋で、外側、内面ともに赤塗りで、把手部分は黒塗りである。1059～1062は木製品である。1059は鍬頭で、この先に鉄製に鍬先を装着して使用したものと思われる。1060は角型の連歯下駄で、歯がなくなるほど使い込んでいる。1061は丸型の割り下駄で、比較的小形のため、子供用の可能性がある。1062は羽子板である。



SX02検出状況(東から)



第202図 SX02出土遺物

SB03：建物跡、SD02：石積溝、SD04：石積溝、SD05：素掘溝（第203～206図）

SB03 調査区の中央で検出した建物本体が東西9間×南北4間の建物跡で、1間約1.98mを測るものである。建物本体の北側に増築の可能性を考えられ、それを含めると東西9間×南北6間の規模になる。また、礎石が部分的にしか残っていないが、建物本体の東側と南側に縁側が周っていたことが想定できた。この縁側から渡り廊下SC01が南側に延び、礎石列SB04へとつながるのだが、礎石の残りが悪く、建物の規模までは想定できないが、おそらく比較的小規模な建物が存在したものと思われる。茶室のような離れ座敷があったのであろうか。SB03とSB04は池SG01・02と花壇SX02を鑑賞するための建物と推測する。

また、池SG02とSB03の間に植栽跡SX01を検出した。この植栽跡が建物の縁側と近接することから、当初、縁側は存在せず、植栽を取り除いた後に、縁側を付け足した可能性も考えられる。

SD02 さらに、SB03西側でSD02を検出しており、SB03に付随するものと思われる。SD02は前節でも述べたとおり、第3遺構面まで存続するものである。SB03北東側では石積溝SD04と素掘溝SD05を検出しており、SD04はSB03に付隨する雨落ち溝と考えられる。SD04とSD05は層位的には同一層から掘り込まれているため、時期差なく形成されたものと思われる。土層の切り合いなどの前後差は不明だが、SD05を埋めた後に増築し、SD04をつくり直したと考えたほうが自然のように思われる。

SD04 SD04出土遺物（第207・208図）

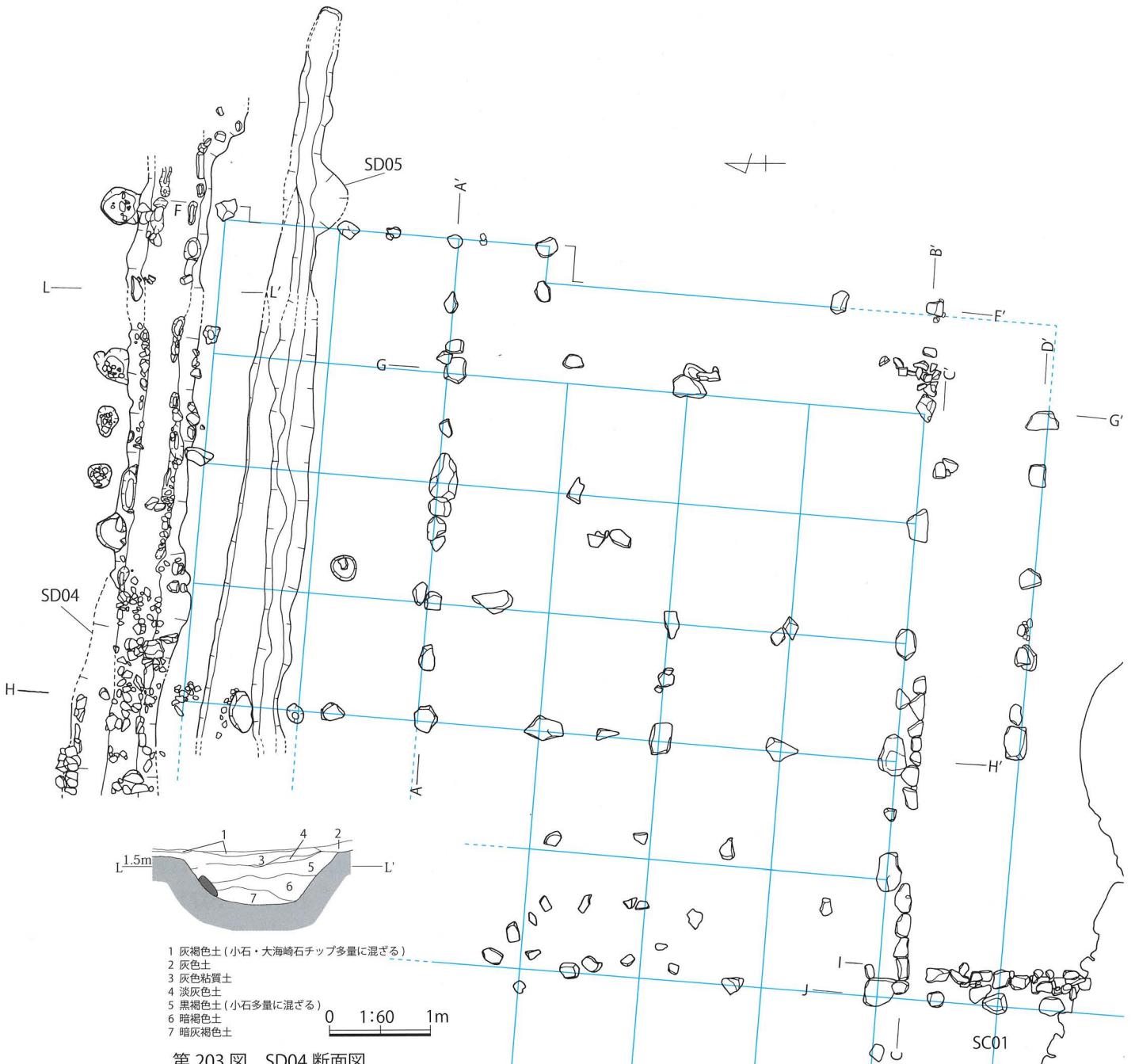
国産陶器 1063～1072は陶磁器と石製品である。1063～1065は肥前陶器の天目碗である。1063は外面に鉄絵が描かれるものである。1064は内外面に鉄釉が掛けられるものである。1066は肥前陶器の大皿で、内面に鉄絵が描かれており、内面見込み部分に胎土目跡が残るものである。1067は備前の鉢である。1068は肥前系擂鉢である。1069～1071は中国磁器である。1069は漳州窯系の青花碗で、1070は漳州窯系の青花皿と思われる。1071は景德鎮窯系の青花皿と思われる。1072は火打ち石と思われ、玉湯の花仙山でよく見られるタイプの碧玉を使用している。石の稜部に擦痕とつぶれが見受けられ、使用頻度が高い印象である。⁽¹⁵⁾

貿易陶磁 石製品 土師器皿 1073～1086は土師器皿、木製品である。1073・1074はロクロ成形の土師器皿である。いずれも中皿で、1074は油煙痕が残る。1075～1084は手づくねの土師器皿で、1075は小皿である。1076～1083は中皿で、そのうち6点が口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたと思われる。また1076～1078は、口縁端部を軽くつまみ上げて成形してある。1084は大皿で油煙痕が残る。

土師器皿 漆椀 1085は漆椀で、外面は黒、内面は赤に漆塗りが施され、外面に赤草と紅葉文が描かれている。1086は木製品で、何かの脚部と思われる。上下側面に貫通する鉄釘が2本打たれている。この他、下駄2点に加え、貝類（テングニシの蓋）、魚骨類（スズキ属、マダイ亜科）、獸骨類（ニホンジカの肩甲骨）も出土している。

SD05 SD05出土遺物（第209図）

1087は肥前陶器の大鉢で、底部外面に貝目跡が確認できる。1088はノミのような工具の柄部分と思われる。



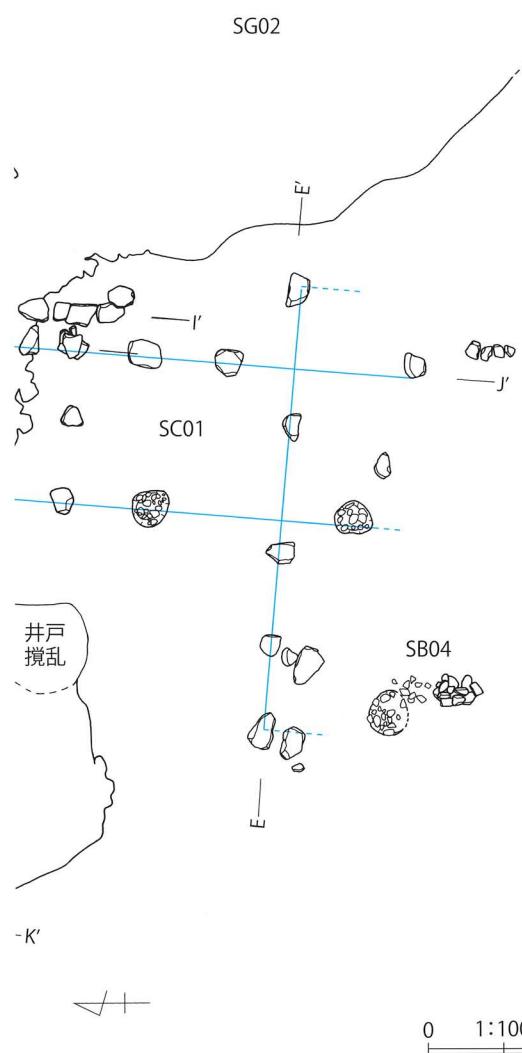
SD04 完掘状況(東から)

SB03

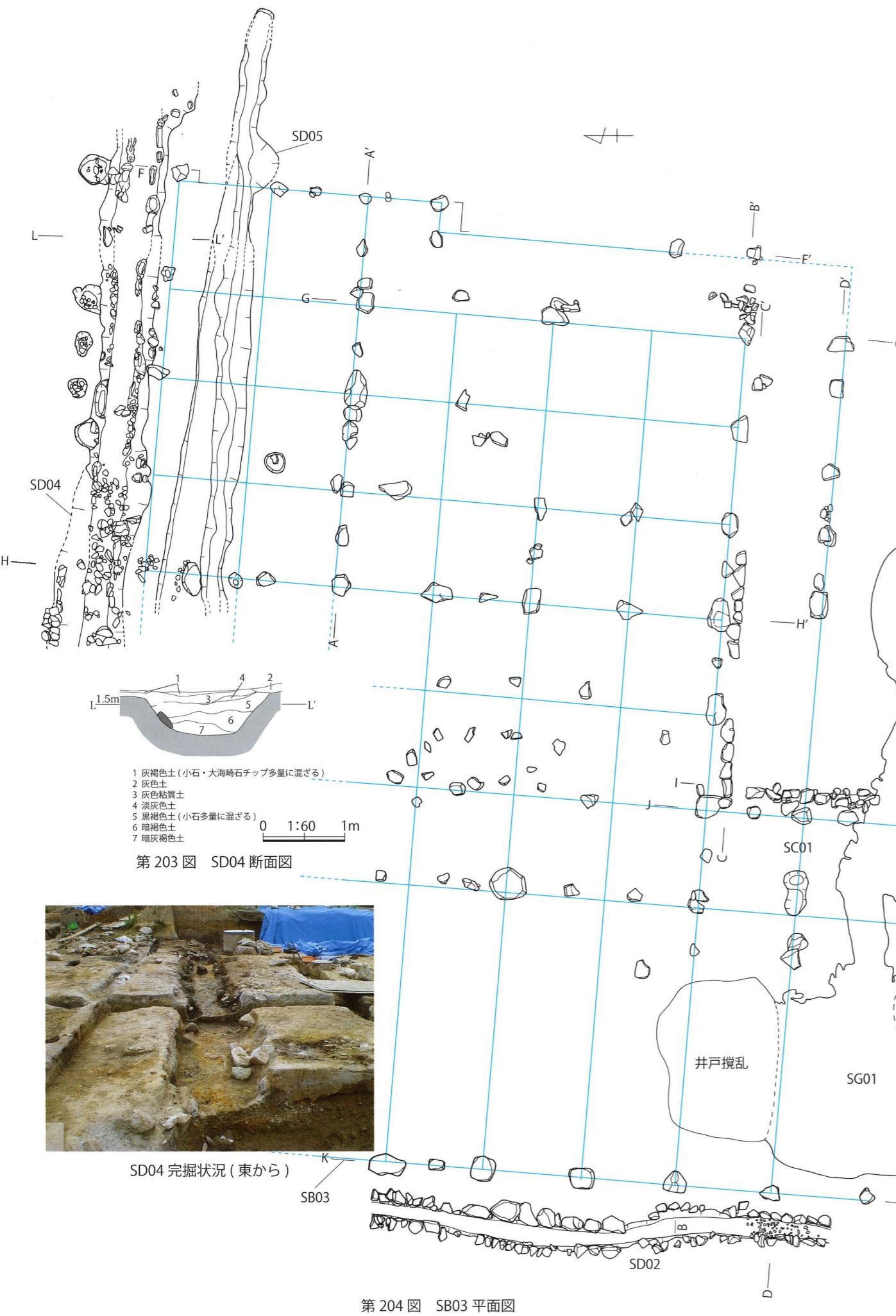
第 204 図 SB03 平面図



SG02 と SB03・SB04 検出状況

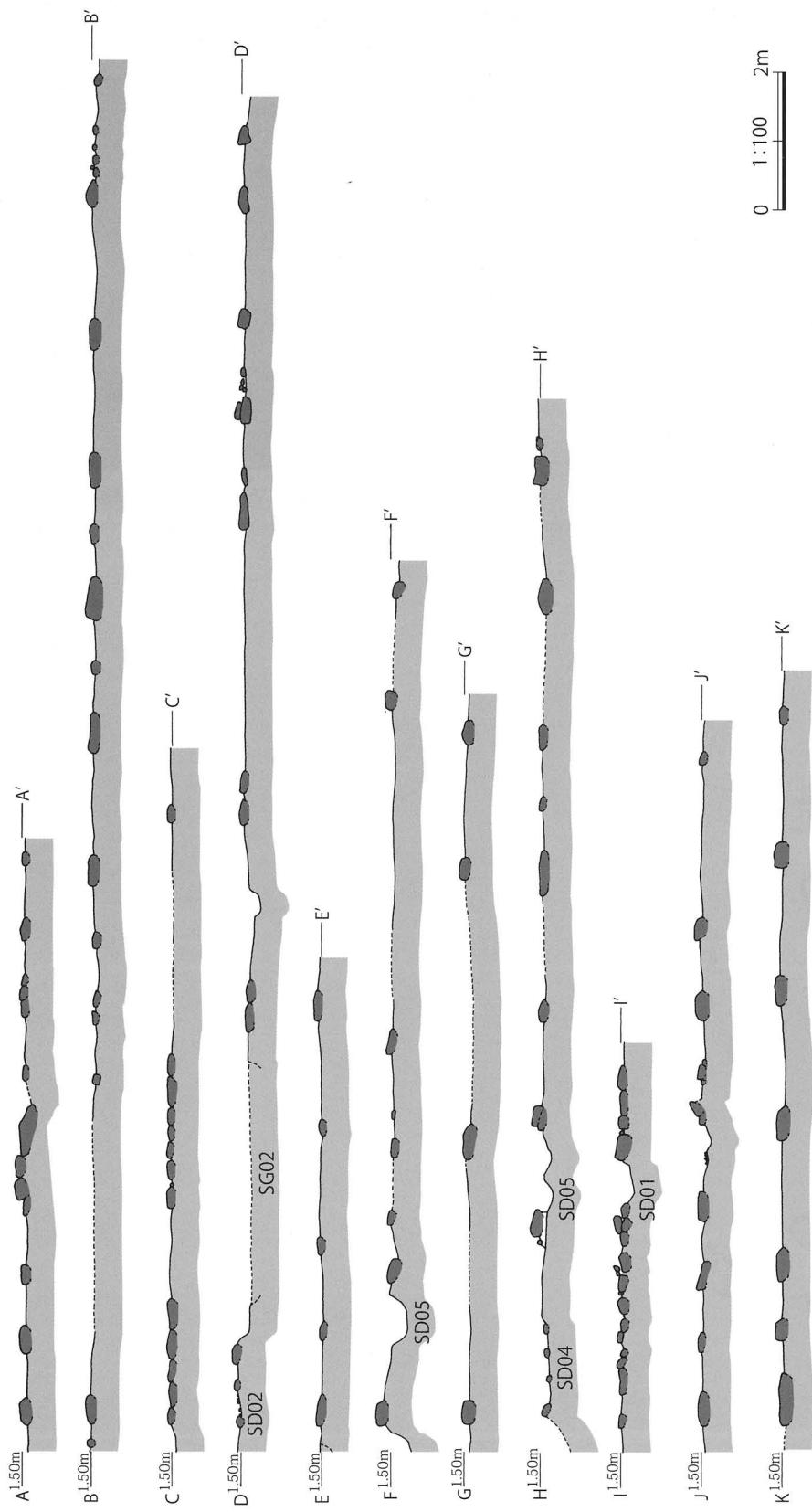


第205図 SB04平面図

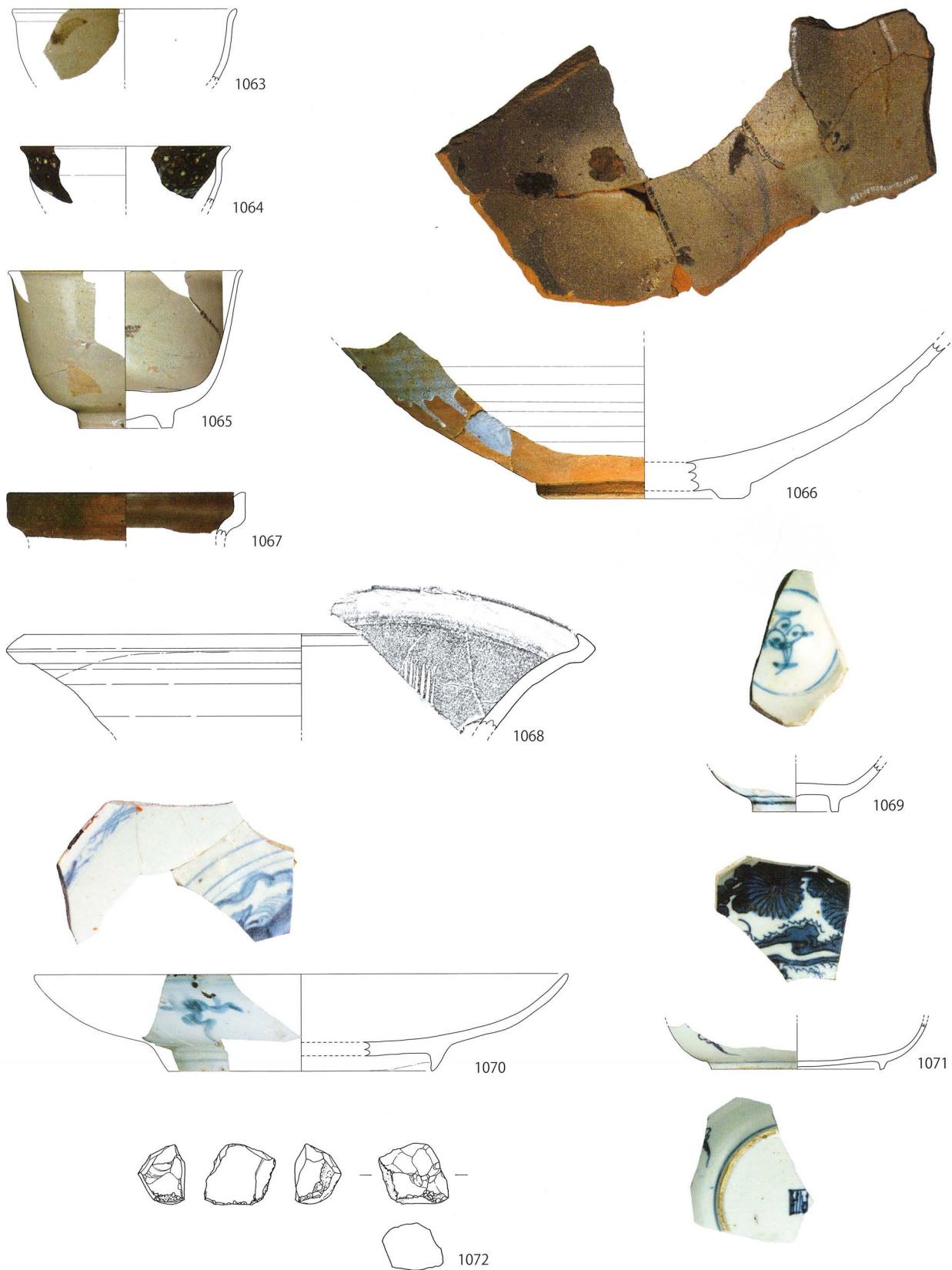


第203図 SD04断面図



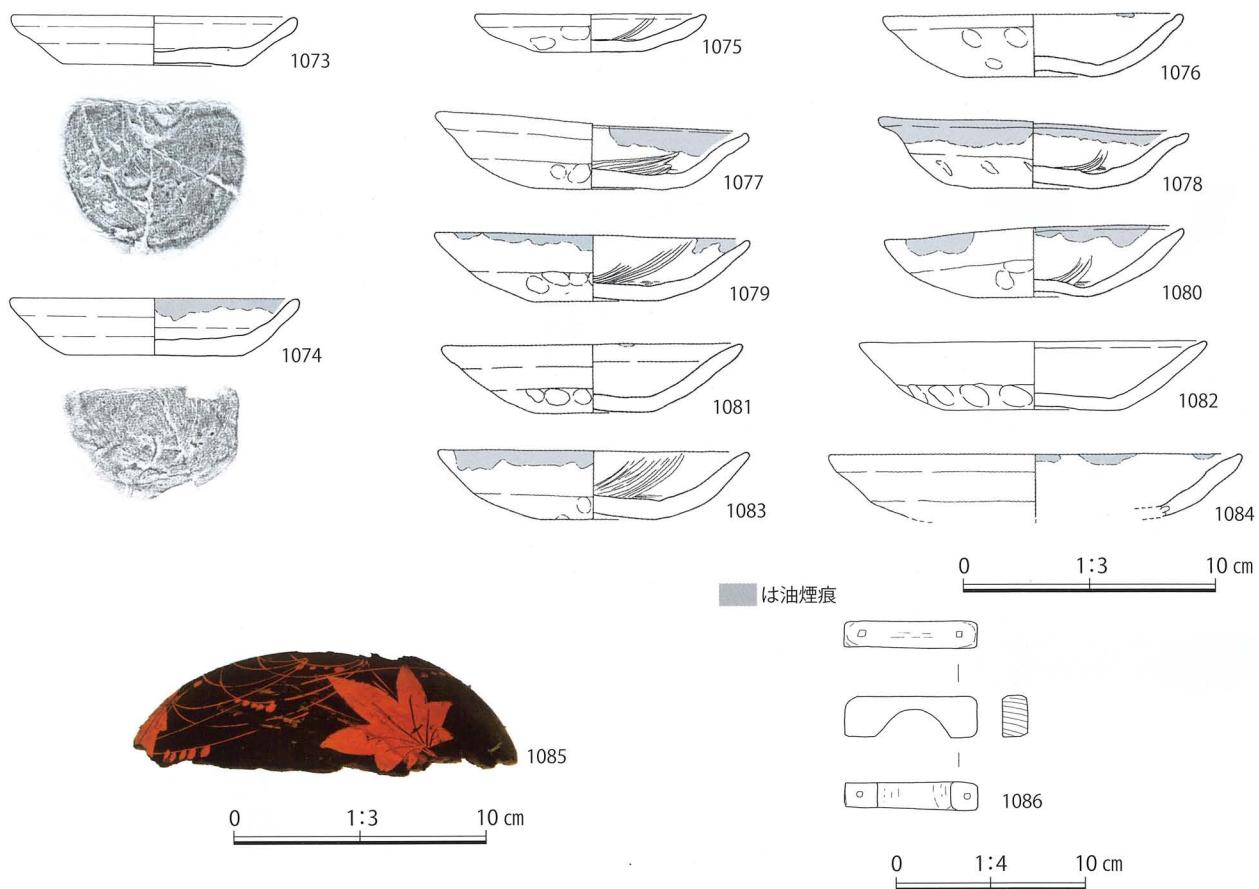


第206図 SB03・SB04断面図

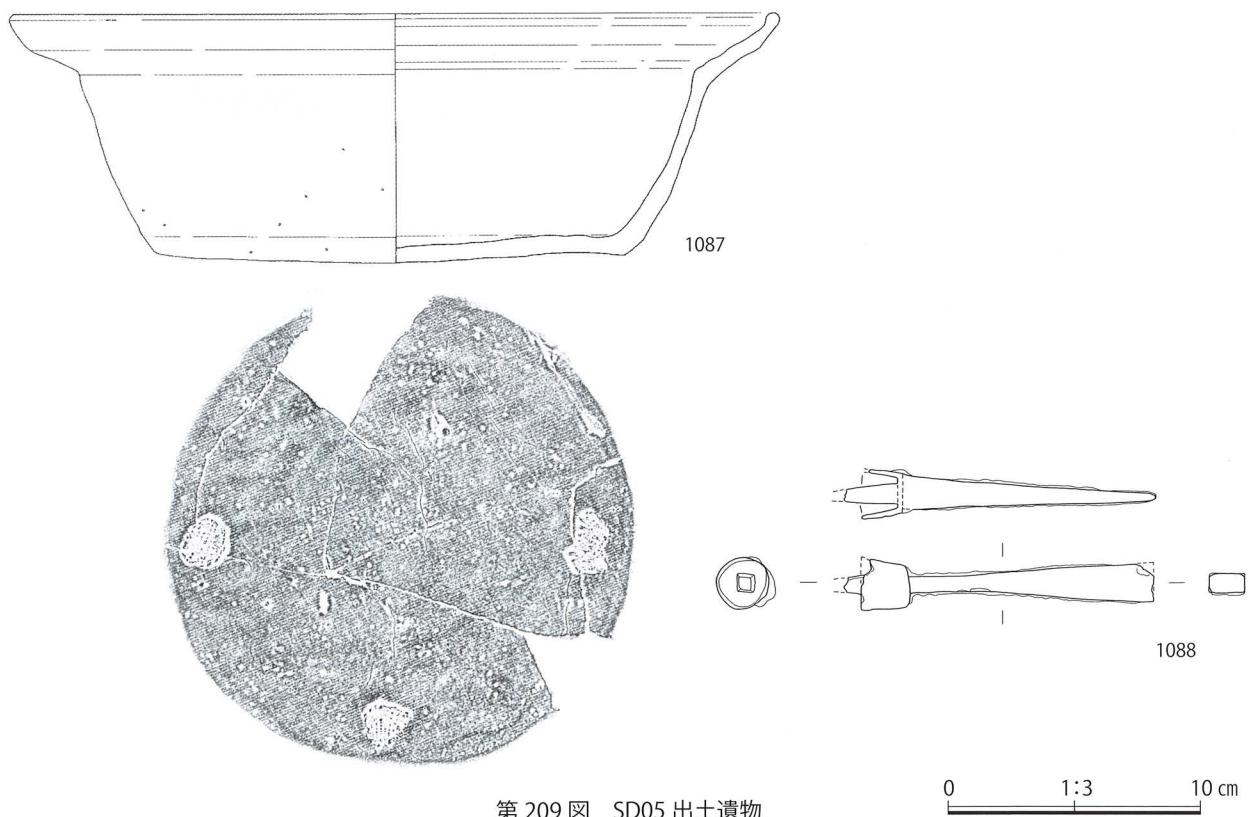


第207図 SD04出土遺物(1)

0 1:3 10 cm



第208図 SD02出土遺物



第209図 SD05出土遺物

SB05・06：建物跡（第210・211図）

SB05

SB05は調査区の北側で検出した建物跡である。東端の礎石がほとんど抜き取られてしまっているが、1間約1.98mを測る東西2間×南北4間の建物の存在を推定した。この建物跡の北側に、約60cm離れて東西に並ぶ礎石列が確認でき、SB05がさらに北側に延びると考えれば、この礎石列は東柱を支えるものであった可能性がある。

SB06

SB06はSB05の南側で検出した建物跡である。西端と中央部の礎石とがほとんど抜き取られてしまっているが、東西2間×南北3間の建物の存在を推定した。この建物は基本的に1間約2.0mを測るが、南側の1間分は南北の幅が1.64mと異なる。この建物の南側には、SD06とSD07、SA08が隣接していることが分かっている。

これらの遺構については、当初、SB05とSB06を合わせて東西2間×南北9間の南北に長い1棟の礎石建物跡を想定していたが、その後、見識者を加えた検討の結果、空間利用の視点から見ると、東西に長い2棟の長屋が存在した可能性の方が高いとの結論に至った。⁽¹⁶⁾今回の調査で確認できたのは、2間×4間の建物跡SB05と2間×3間の建物跡SB06であるが、これらの建物跡は調査区の東側に広がる可能性も含んでいる。

SA07：塀跡・SD06：素掘溝・SD07：素掘溝（第212図）

調査区の中央からやや北側で、東西に延びる杭列SA07とその両側に溝SD06・07を検出した。

SA07

SA07については、杭1～15が東西方向に直線状に打ち込まれたもので、杭の間隔に規則性が見られず、遮蔽するための塀があったものと推測する。使用された杭は、打ち込まれた深さや加工に違いがあるため、同時に設置されたものではない可能性がある。杭2だけは、角材でホゾを入れたものを使用しており、建築部材の転用と思われる。また、下端の1方向から斜めに加工して、打ち込みやすくしている。さらに、全体的に炭化している。杭10、杭13、杭15は丸材で他の杭より太く、杭の下端は2方向から荒い削りを施している。また、いずれも下端部を炭化させている。腐食防止のため、杭の下端部を炭化させているものが多く見られる。

SD06

SD06は幅約0.3～0.6m、深さ約0.1mを測る東西に延びる素掘溝で、SA07と同様に空間を別ける施設と思われる。

SD07

SD07は幅約0.8～1.2m、深さ約0.2mを測る東西に延びる素掘溝で、SD06との切り合の関係は不明である。SA07と同様に空間を別ける施設と思われる。

SD07出土遺物（第213図）

国産陶器

1089は肥前陶器碗である。1090～1095は手づくねの土師器皿である。すべて中皿で、

土師器皿

灯明皿に使用された痕跡があるものは、1090・1091・1093・1094の4点である。1096

墨書き木製品

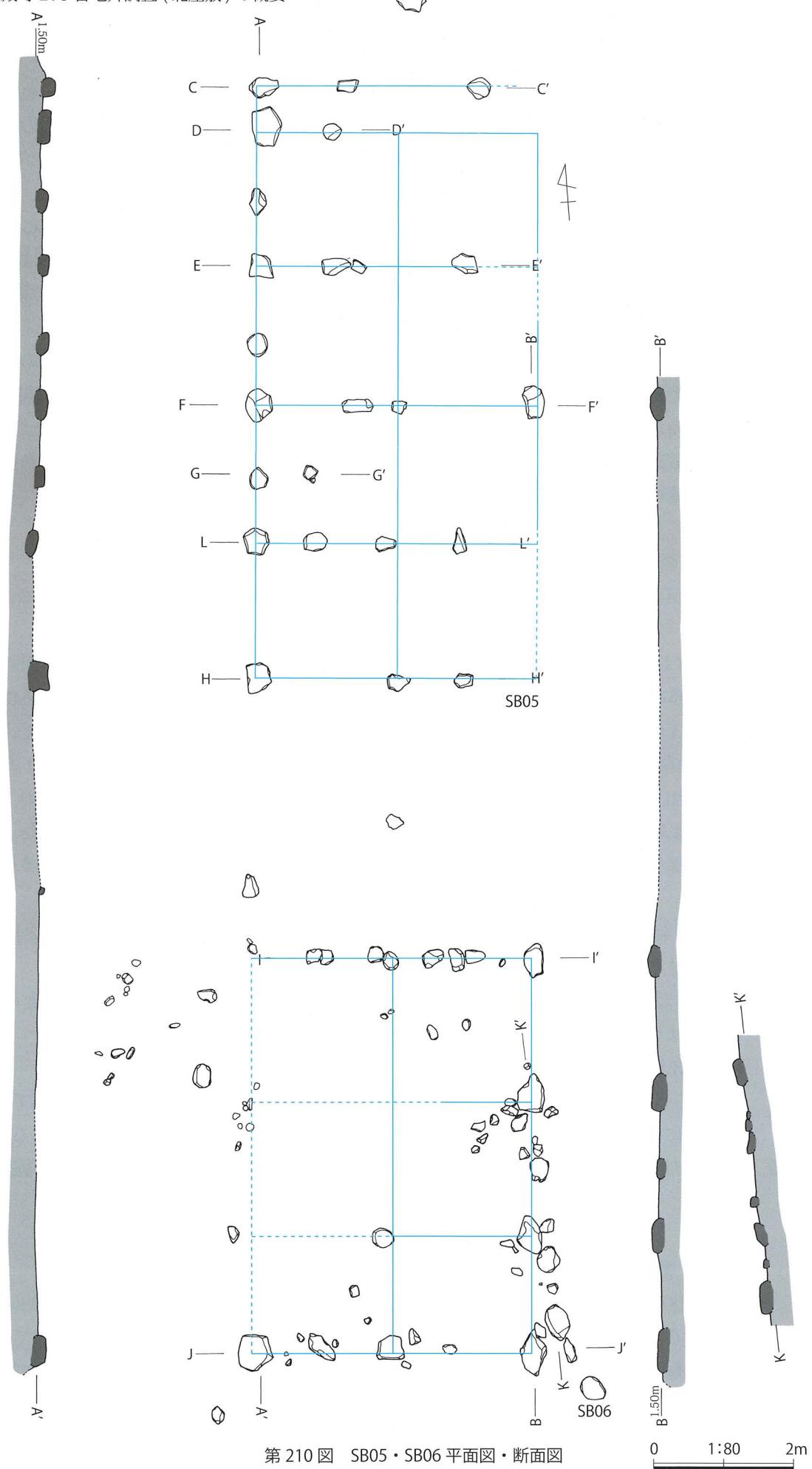
は墨書きのある木製品で、片面に「四月十七日」と書いており、もう片面の墨書きは確認できなかった。

SA08：塀跡（第214図）

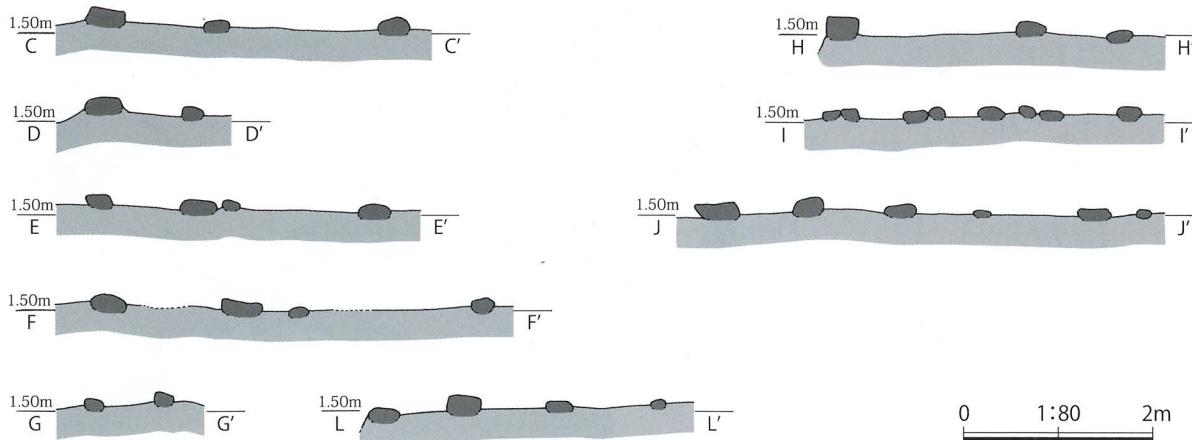
SA08

調査区の東側で検出した15cm程度の根石をそれぞれにもつ柱穴1～5が、直線的に並ぶものである。柱穴2を除けば、柱穴の間隔は約2.0mを測る。柱穴の上面が削平されているが、本来はもっと深さがあったと思われる。これに相対する柱穴は調査区内では認められなかつたため、塀跡と推定しているが、根石が多く、規模の大きい建物の基礎である可能性も否定でき

第4章 殿町279番地外調査(北屋敷)の概要



第210図 SB05・SB06平面図・断面図



第211図 SB05断面図

ない。この柱穴と相対する遺構があるとすれば、調査区外に広がっているものと思われる。この下からは廃棄土坑SK28が検出されており、廃棄土坑を埋めた後にSA08が設置されたようである。

SA09：塀跡（第197図）

SA09 調査区南東側で検出した礎石列で、1間1.65mを測るものである。1間の幅から考えて建物の基礎ではなく、空間を遮蔽するものと判断した。

調査区南端で検出した屋敷境については、詳しくは第6章で述べられるが、屋敷境を示す素掘り溝（屋敷境SD01）が検出されている。この北側には杭列が並ぶ部分（南SA02）が認められ、遮蔽施設が存在した可能性が考えられる。

この他、SB03の東側で廃棄土坑SK26・28などがいくつか検出されており、これらはSA08とSX02の下から検出されたもので、SA08とSX02がつくられるまでは、この部分が空閑地として機能していたと考えられる。また、SD07の北側にも用途不明の土坑やピット、廃棄土坑SK27を検出している。

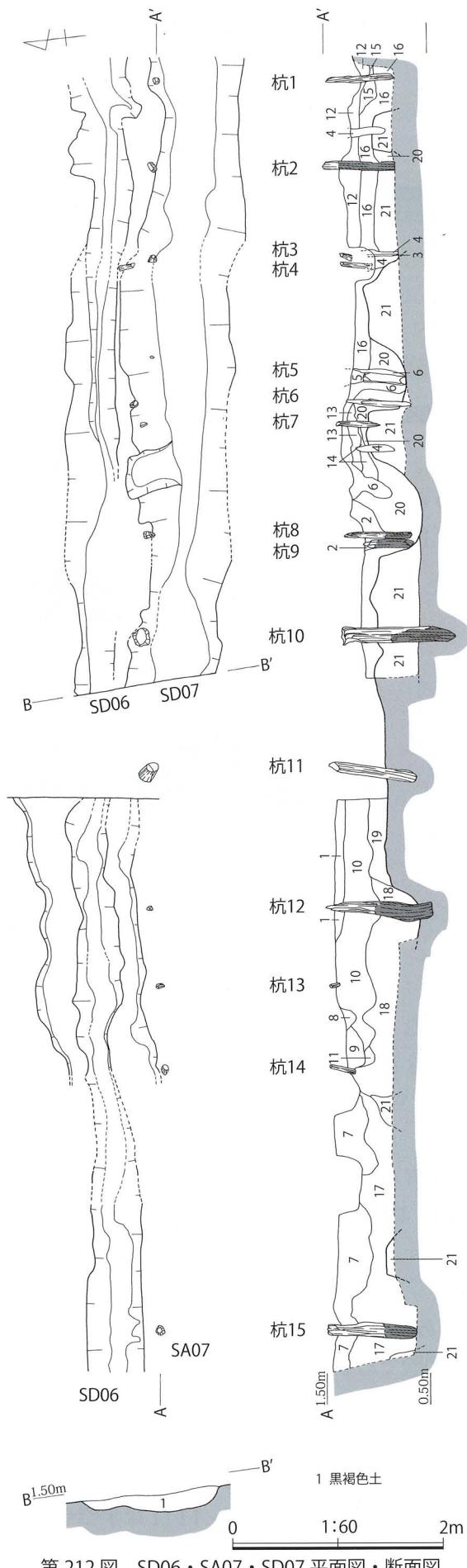
以下は、詳細な遺構図は掲載していないが、第4遺構面の年代的特徴を表す遺物を掲載したものである。出土した遺構の位置については、第197図の調査区全体図を参照していただきたい。

SK26：廃棄土坑出土遺物（第215・216図）

国産陶器 SK26は調査区の東側で検出した廃棄土坑である。1097～1098は陶磁器、土師器皿、鉄製品、漆碗である。1097・1098は肥前陶器の碗である。1099は肥前系陶器の瓶で、やや青味がかった灰釉が掛かるものである。1100は肥前陶器の大皿で、内面見込み部分に胎土目跡が残る。1101は中国磁器の大皿で、内面に赤絵が施される漳州窯系の五彩である。1102～1104は口クロ成形の土師器皿である。1102は小皿で、1103と1104は中皿であるが、1104のみ煤が付着しており、灯明皿で使用した痕跡がある。1105～1111は手づくねの土



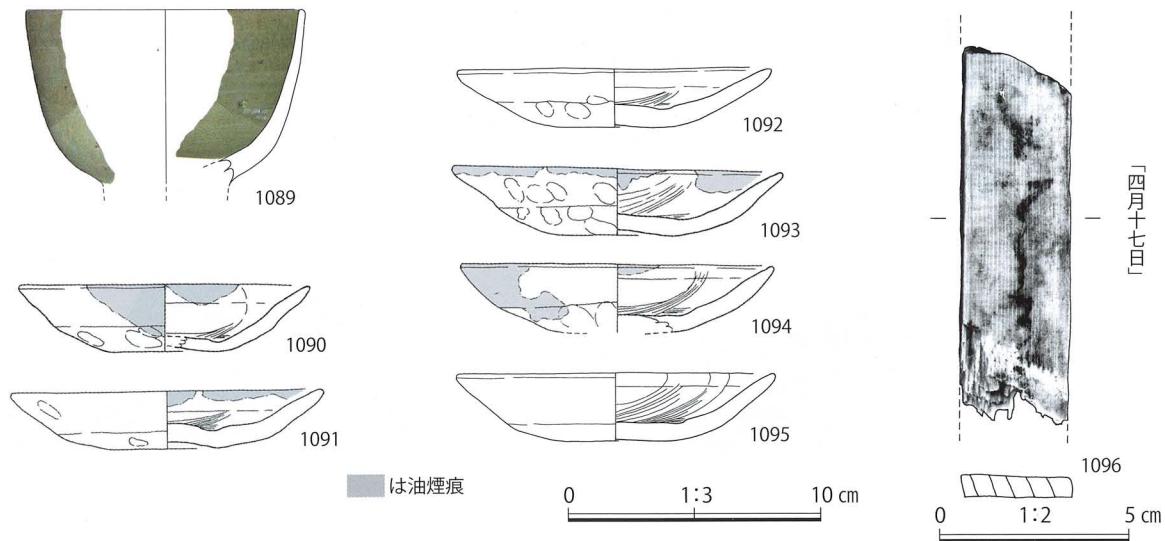
SB05・SB06検出状況



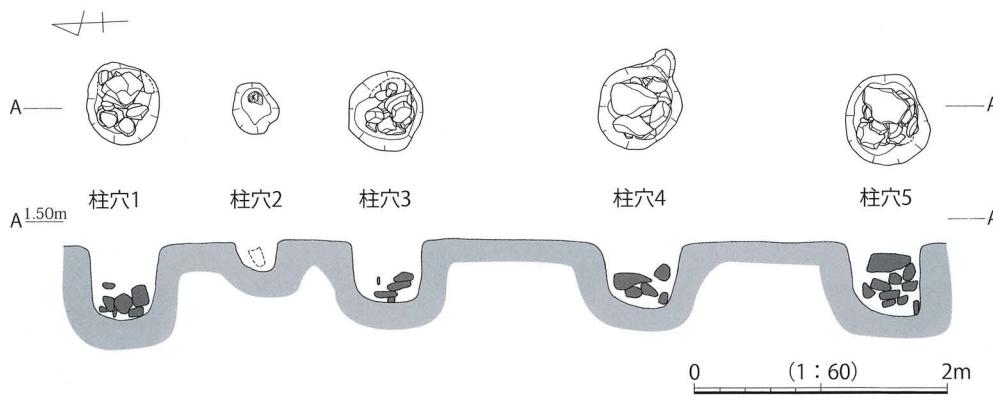
- 1 淡黄色シルト
- 2 淡黄色シルト+白色ブロック
- 3 暗灰褐色粘質土(木質含む/杭跡)
- 4 暗灰褐色粘質土(杭跡)
- 5 淡灰褐色土(杭折損後の埋土)
- 6 淡灰褐色土(ブロック混ざる)
- 7 黄灰色シルト+灰色土(灰色ブロック多量に混ざる)
- 8 淡灰褐色土(ブロック少量混ざる)
- 9 灰色粘質土(白ブロック混ざる)
- 10 灰褐色粘質土(ブロック少量混ざる)
- 11 灰色粘質土(白色・暗灰色ブロック混ざる)
- 12 灰褐色粘質土(炭少量混ざる)
- 13 淡灰色粘質土(白色ブロック混ざる)
- 14 暗灰褐色粘質土(小ブロック少量混ざる)
- 15 茶灰色土+暗灰色粘質土
- 16 灰褐色粘質土+黒褐色ブロック(白色ブロック少量混ざる)
- 17 黄褐色土(灰色ブロック多量に混ざる)
- 18 暗灰褐色土(暗灰色ブロック多量、白色ブロック少量混ざる)
- 19 灰白色シルト
- 20 黒褐色土(緑灰色ブロック混ざる)
- 21 黒色粘質土(自然層)

…炭化部分

第212図 SD06・SA07・SD07 平面図・断面図



第213図 SD07出土遺物



第214図 SA08平面図・断面図

金属製品
漆器

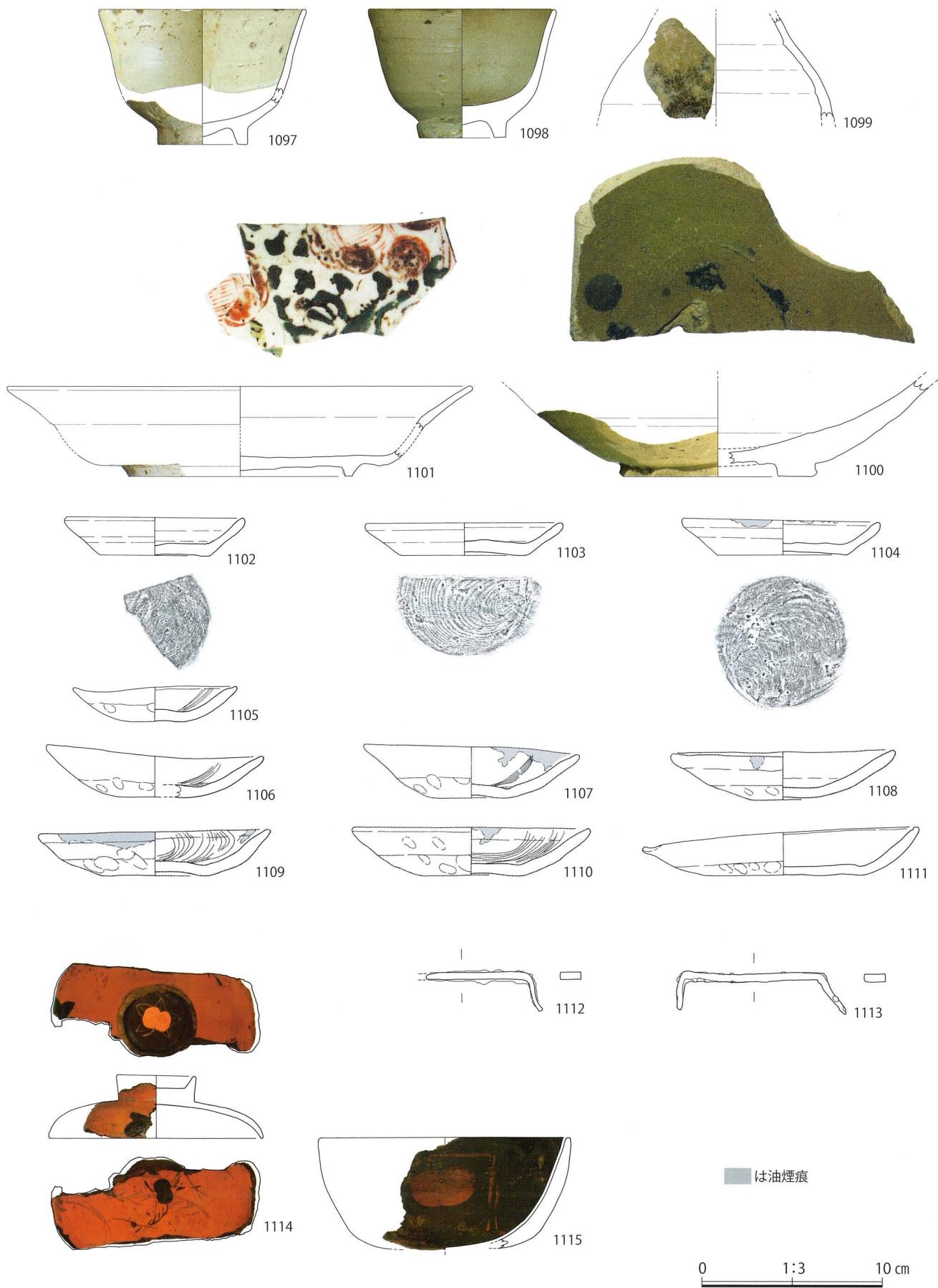
師器皿である。1105は小皿である。1106～1110は中皿で、灯明皿に使用されたものは、1107～1110の4点である。1111は大皿で、ロクロ成形した後で指押さえによって手づくね風にみせている。1112・1113は鉄製品で、かすがいと思われる。1114は漆椀の蓋で、高台内が黒漆塗り、その他は赤漆塗りである。高台内部に赤漆で草文と果実の文様が、外面は黒漆で草文が、内面を黒漆で草文と果実の文様が描かれている。1115は腰丸椀で、外黒内赤の漆塗りが施されるものである。文様があるようだが、風化のため不明である。

木製品

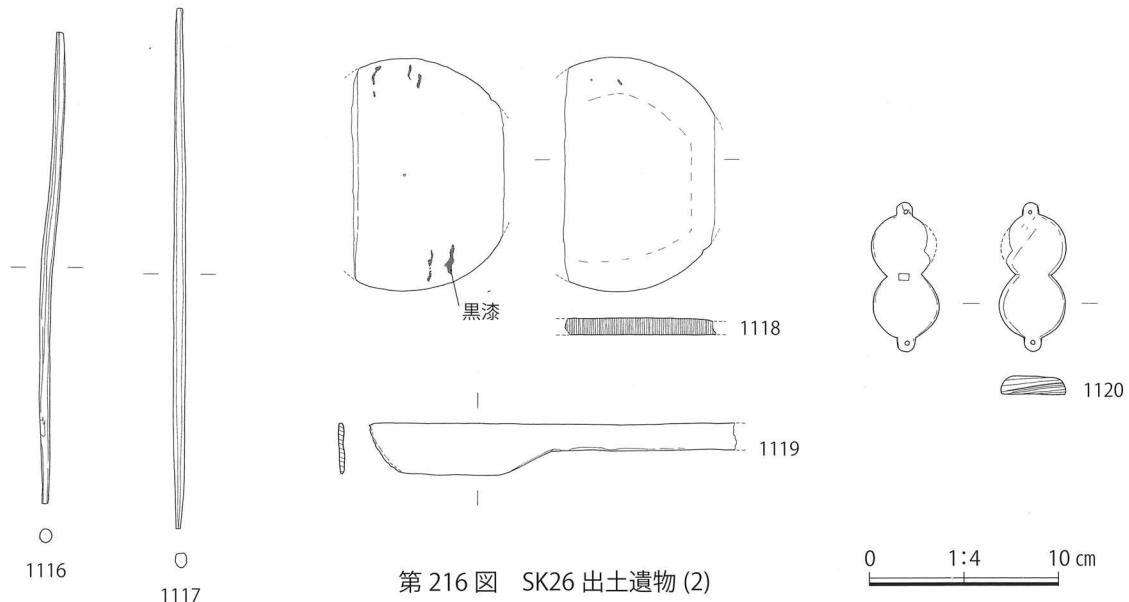
1116～1119は木製品である。1116と1117は白木の箸で、1116は一方が平らで、もう一方は尖っている。1117は両端が尖っている。1118は曲物の蓋板で、片面に黒漆が塗られており、面中央に目釘穴が1ヶ所認められる。1120は建具の飾りであろうか。両側突出部に孔が設けられており、裏面に目釘穴が1ヶ所ある。1119は片刃のヘラである。



SA08検出状況(北東から)



第215図 SK26出土遺物(1)



第216図 SK26出土遺物(2)

SK27 SK27: 廃棄土坑出土遺物(第217図)

国産陶器 SK27は調査区の北東側で検出した廃棄土坑である。1121・1122は肥前陶器碗で、1121は小碗で高台がほとんどないものである。1122は高台内側に胎土目が残るものである。

土師器皿 1123は口クロ成形の土師器皿で、口縁部が欠損している。1124～1128は手づくねの土師器皿である。1124は小皿で、油煙痕が付着するため、灯明に使用されたものと思われる。

金属製品 1126・1127は中皿で、灯明皿で使用された痕跡がある。1128は大皿で、口クロ成形され

墨書木製品 た後に指押さえによって手づくね風にみせている。1129は銅製品で、部分的に金メッキが残り、用途不明のものである。1130は墨書の書かれた木製品である。墨書は両面に書かれており、片面は解読不能で、もう片面は「戌霜月十」と読める。この遺構面に該当する可能性のある「戌年」は、1610年、1622年、1634年が挙げられる。1131は丸瓦で、内面の調整はコビキBである。1132は角型の連歯下駄である。1133はヘラである。1134は木製の栓で、桶、樽あるいは徳利に使用したと思われる。栓の頭になる部分は、角状を呈し、栓として機能する部分は頭より径が小さく、円状を呈する。1135は木製桶の蓋か底の部分で、約1/2が欠損している。1136は木製の蓋と思われる。口クロ挽きの痕跡が見られる。

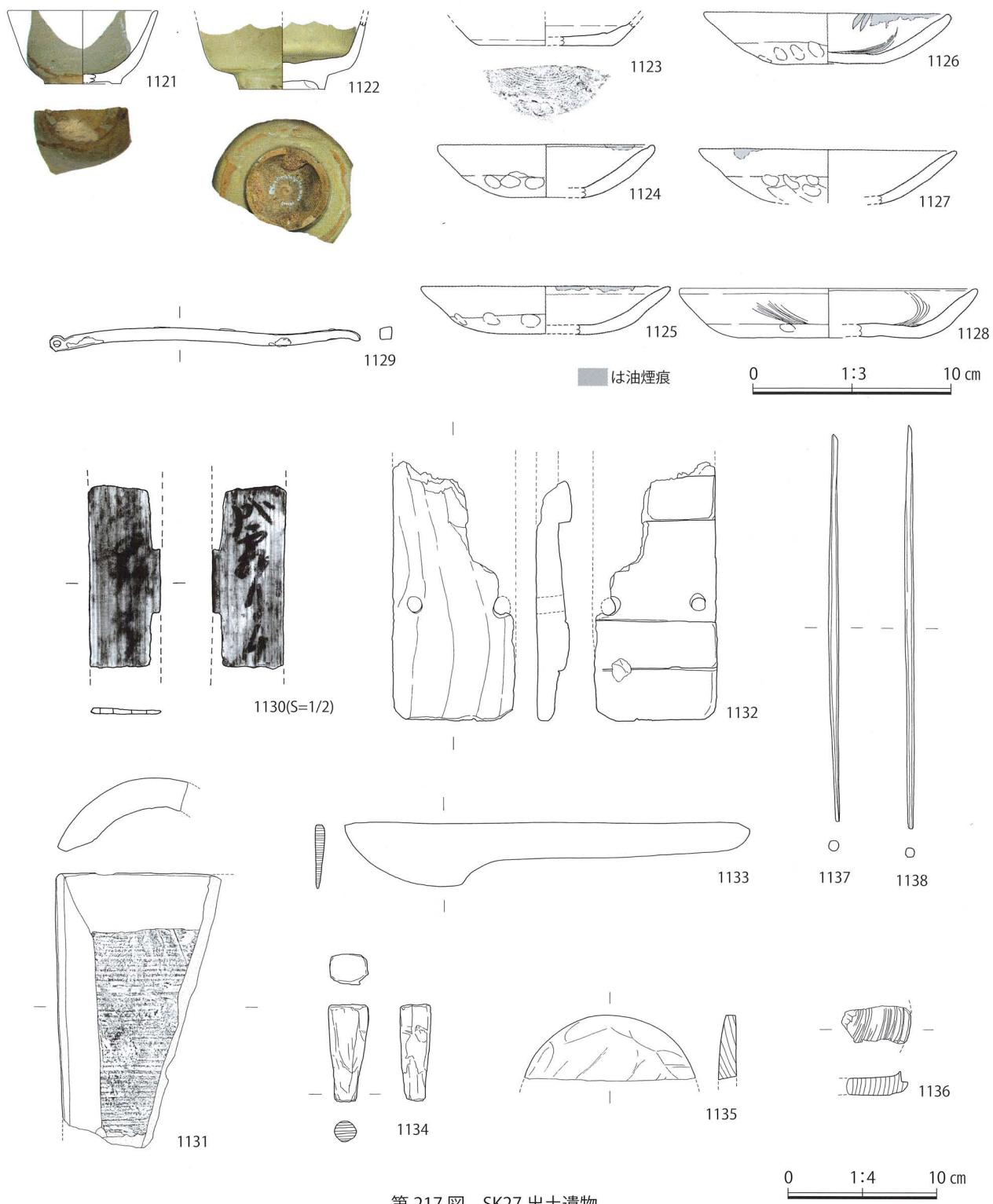
この他、貝類(サザエ)、魚骨類(スズキ属、マダイ亜科)がこの遺構から出土している。

SK28 SK28: 廃棄土坑出土遺物(第218、219図)

国産陶器 SK28は調査区の東側で検出した廃棄土坑である。1139～1150はSK28から出土した陶器、土師器皿、木製品である。1139は肥前陶器の碗で、外面に鉄絵が描かれるものである。

土師器皿 1140・1141は手づくねの土師器皿である。1140は底部中央を押し上げて成形している。

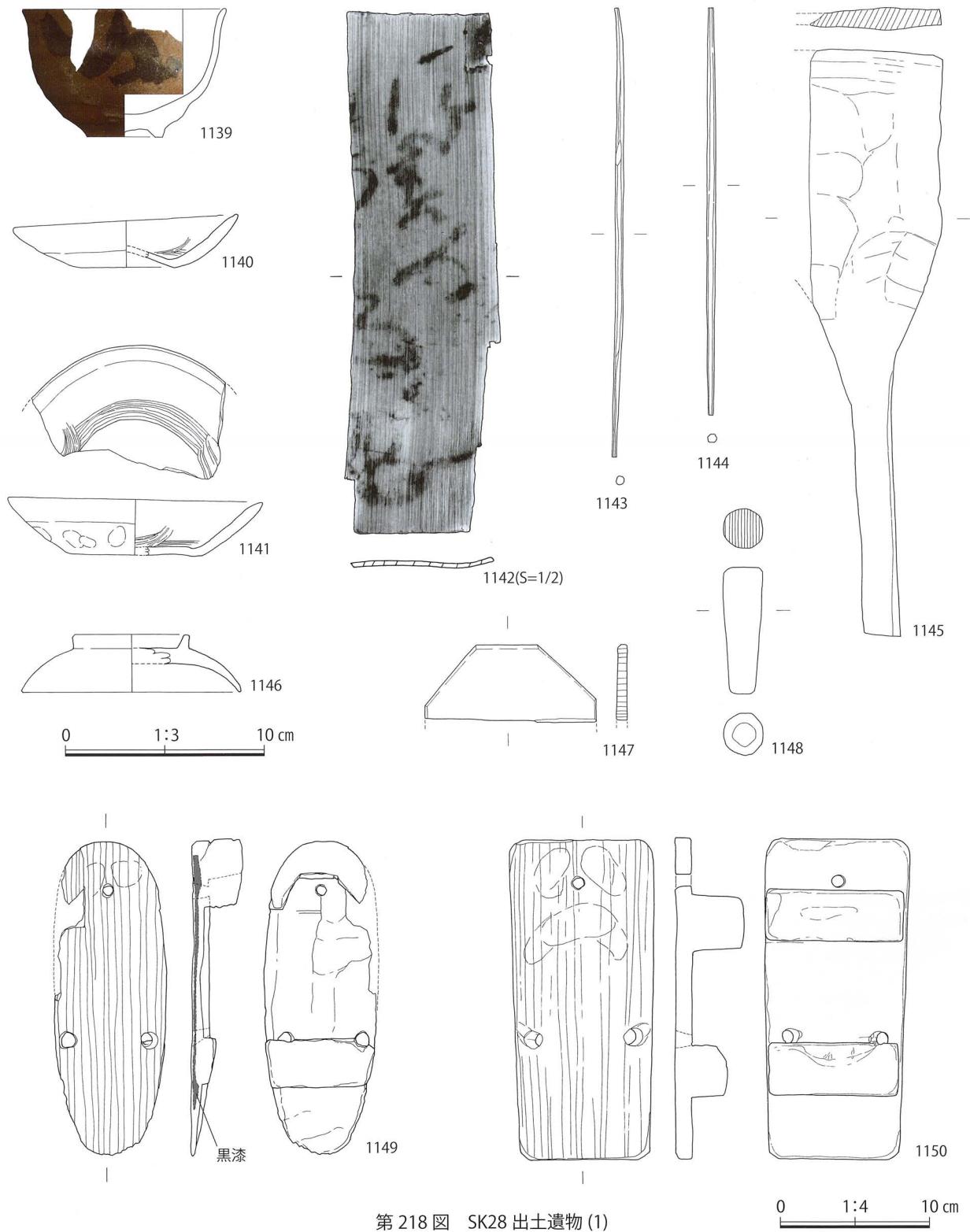
墨書木製品 1141は、内面のナデ上げ調整をやり直している痕跡が認められる。1142は墨書木製品で、片面に墨書が確認できるが、「御□ぬ」と読める以外は、内容は不明である。1143・1144は白木の箸で、両側にむかって先細りしている。1145は羽子板状の木製品で、不整形な上に工具痕の残りも目立つため、作成途中のものである可能性がある。1146は漆椀の蓋で、把手内部は黒塗り、他は赤塗りである。1148は栓である。1147は用途不明の木製品で、八角形状の板が半分に欠損しているようである。側面に目釘が残ることから、何らかの底板の可能性がある。1149は丸型の削り下駄で、後ろの歯がかなりすり減っている。1150は角型の連歯下



第217図 SK27出土遺物

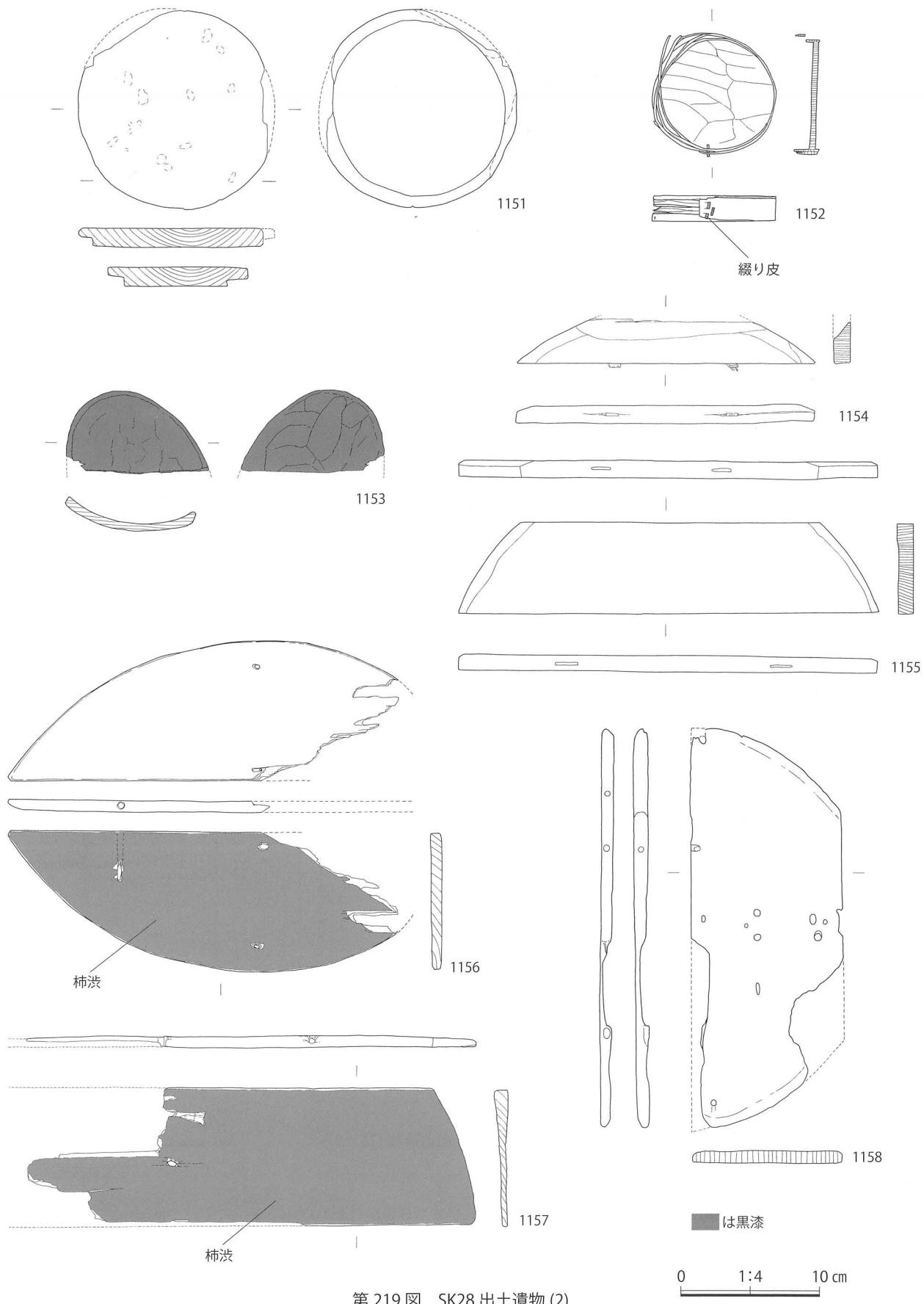
駄で、後ろの歯がかなりすり減っている。

1151～1158は木製品である。1151は曲物の底板か蓋板と思われ、片面を段状に加工している。1152は曲物か柄杓の底板と側板の一部と思われ、側板を留める綴皮と側板と底板を留める目釘が認められる。1153は用途不明木製品で、内外面に黒漆が塗ってある。1154は1155と同一個体になるもので、側断面に目釘が2ヶ所確認できる。1155は桶か樽の底板と思われるもので、側断面に目釘穴が2ヶ所ずつ計4ヶ所確認できる。1154と接合するもので



第218図 SK28出土遺物(1)

ある。1156は桶か樽の底板あるいは蓋板で、片面に柿渋が塗られている。側断面に目釘穴が1ヶ所認められ、面に直線上に2ヶ所穿孔が施されている。1157と同一個体になるものである。1157は1156と同一個体になるもので、面に2ヶ所穿孔が認められ、側断面に目釘穴が1ヶ所確認できる。1158は樽の蓋板で、面に2個対の穿孔が2ヶ所とそれに直交するように長辺に沿って穿孔がいくつか施される。また、側断面に目釘が4ヶ所打たれている。



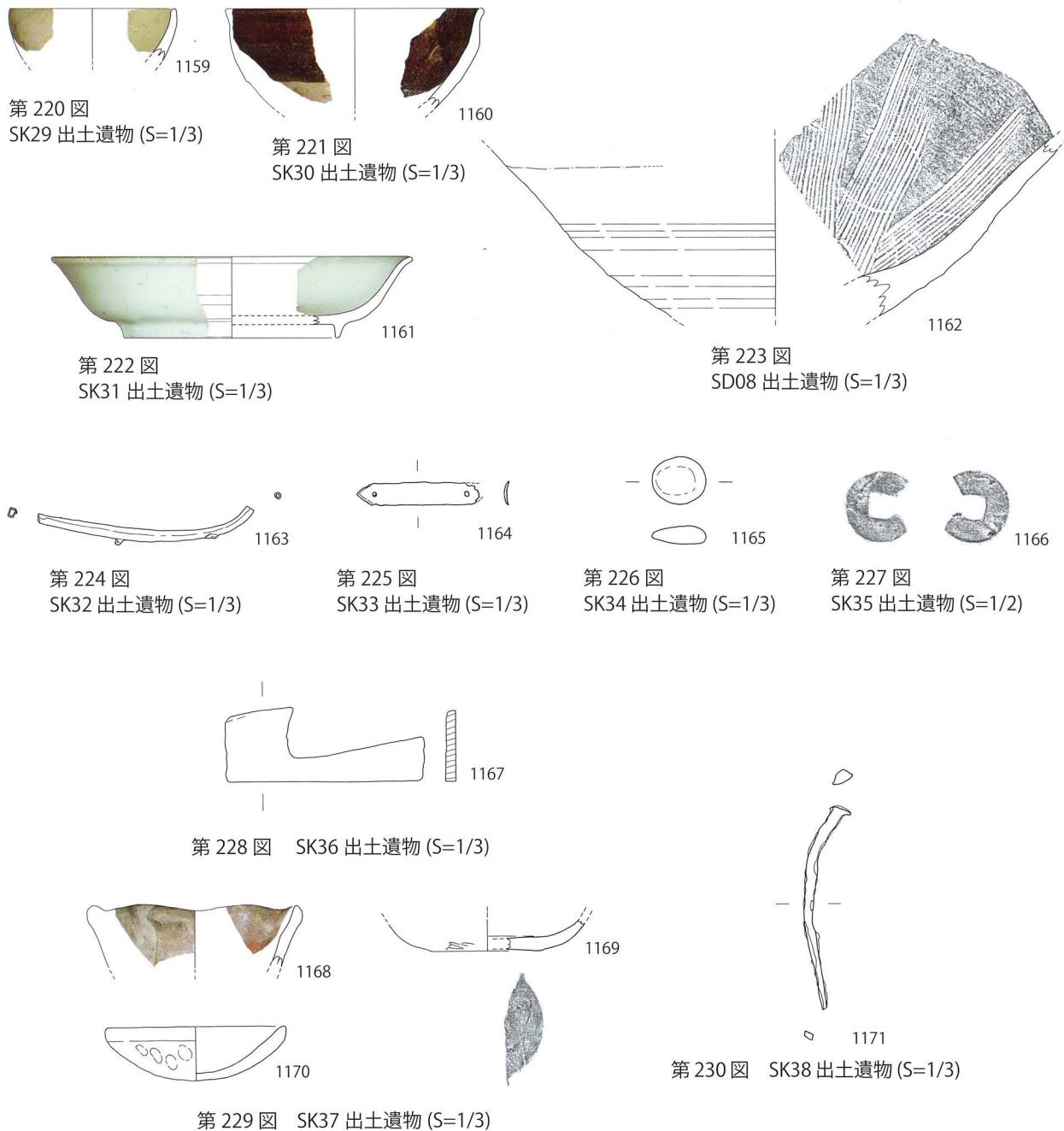
第219図 SK28出土遺物(2)

- SK29 : 土坑出土遺物(第220図)
調査区の中央で検出した土坑から出土した遺物で、1159は肥前陶器の小碗である。
- SK30 : 土坑出土遺物(第221図)
調査区の中央からやや西側で検出した土坑から出土した遺物で、1160は瀬戸・美濃の天目碗である。
- SK31 : 土坑出土遺物(第222図)
調査区の中央で検出した土坑から出土した遺物で、1161は中国の白磁皿である。
- SD08 : 素掘溝出土遺物(第223図)
調査区の東側で検出した素掘溝から出土した遺物である。1162は肥前系の擂鉢で、擂目部分に貝目跡が残る。
- SK32 : 土坑出土遺物(第224図)
調査区の北東側で検出した土坑から出土した遺物である。1163は真鍮製の煙管の羅字部分と思われる。
- SK33 : 土坑出土遺物(第225図)
調査区の北東側で検出した土坑から出土した遺物である。1164は銅製の建具の留め金具と思われる。
- SK34 : 土坑出土遺物(第226図)
調査区の北東側で検出した土坑から出土した遺物である。1165は碁石で、黒石として使用されたものと思われる。
- SK35 : 土坑出土遺物(第227図)
調査区の北東側で検出した土坑から出土した遺物である。1166は銭貨で、銭種は不明である。
- SK36 : 土坑出土遺物(第228図)
調査区の中央から北側で検出した土坑から出土した遺物である。1167は用途不明の木製品で、片面に柿渋が塗ってある。
- SK37 : 土坑出土遺物(第229図)
調査区の西側で検出した土坑から出土した遺物である。1168は肥前陶器のなぶり口を呈する鉢である。1169はロクロ成形の土師器皿で、灯明として使用された痕跡がある。1170は手づくねの土師器皿の小皿である。
- SK38 : 廃棄土坑出土遺物(第230図)
調査区の中央からやや東側で検出した廃棄土坑から出土した遺物である。1171は鉄釘で、断面方形を呈する。

第4遺構面遺構外出土遺物(第231～236図)

以下は第4遺構面の包含層から出土したものである。

- 国産陶器
1172～1189は国産陶器である。1172から1175は肥前陶器の碗である。1172は小碗で高台がほとんどないものである。釉薬が白っぽくなってしまっており、火を受けたものと思われる。1175は鉄釉の上からいっちゃん掛けが施されるものである。1176は志野の碗の可能性がある。1177は肥前の陶器か磁器かの見分けがつきにくいもので、外面に鉄絵が描かれていたようである。肥前磁器とすれば、初期の頃のものと思われる。1178は肥前系陶器碗で、内外面に青味がかった灰釉が掛けられるものである。1179は志野の小碗である。1180・1181は黒織



部の凸形碗である。1182～1187は肥前陶器の小皿で、1182～1185は胎土目跡が残るものである。1186・1187は口縁部が溝縁状を呈し、内面見込み部分に砂目跡が残るものである。1188は肥前陶器の小壺と思われ、外面に鉄釉が掛かるものである。1189は産地不明陶器で鉢の取手部分と思われる。釉薬が白っぽく、火を受けたものを思われる。

1190～1193は肥前陶器の大皿である。1190は内面に鉄絵が描かれるものである。1191も内面に鉄絵が描かれるもので、見込み部分に胎土目跡が残る。また、火を受けたようで釉薬が白っぽくなっている。1192は素地がかなり分厚いもので、内面中央に沈線が残るため、粘土を充填して成形した可能性が考えられる。素地の厚さからかなりの大形品が想定され、輪積成形されたものかもしれない。1193は内面に鉄絵が描かれるもので、内面見込み部分に砂岩目跡が残る。

1194～1202は国産陶器である。1090は肥前陶器の壺の蓋と思われ、刷毛目塗りが施さ

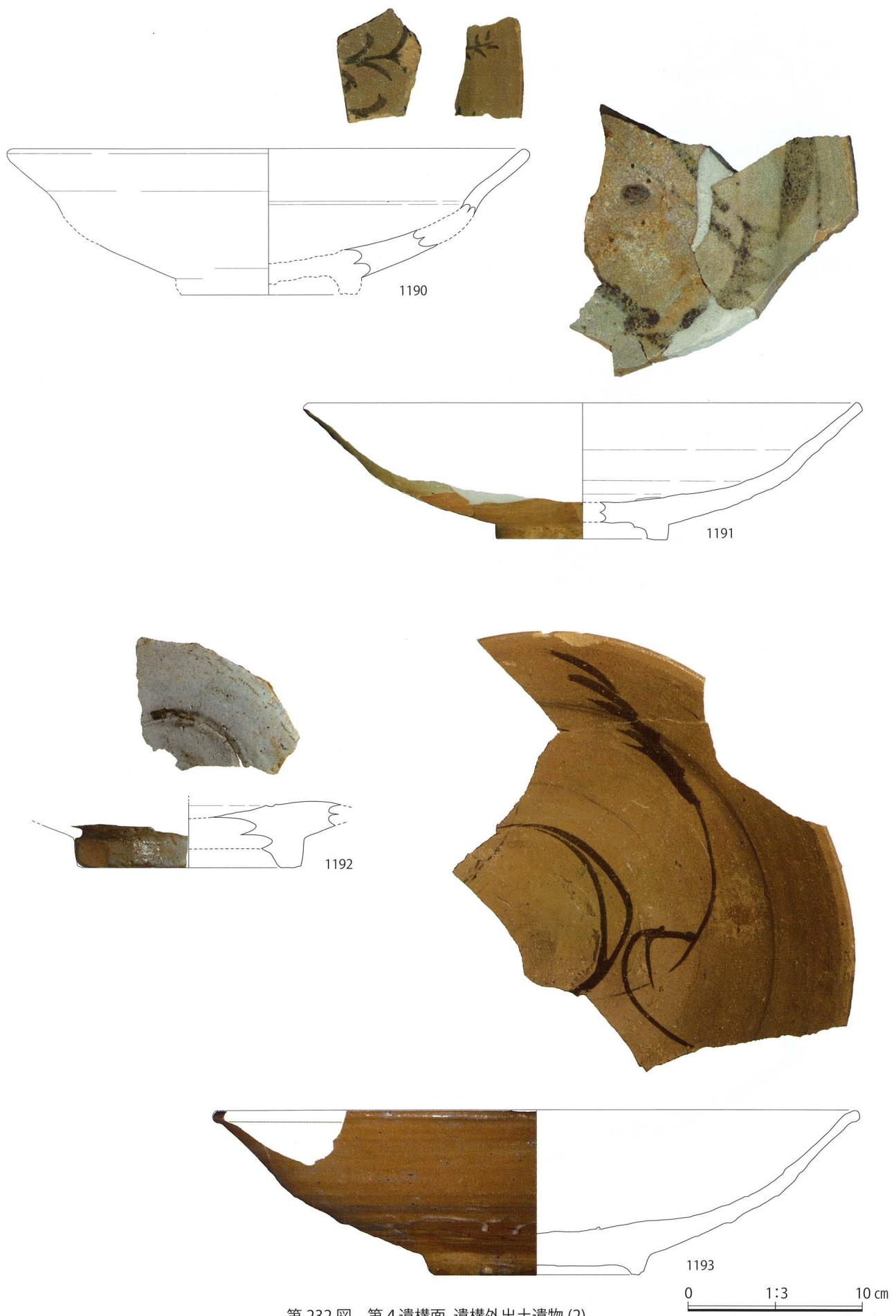


第231図 第4遺構面 遺構外出土遺物(1)

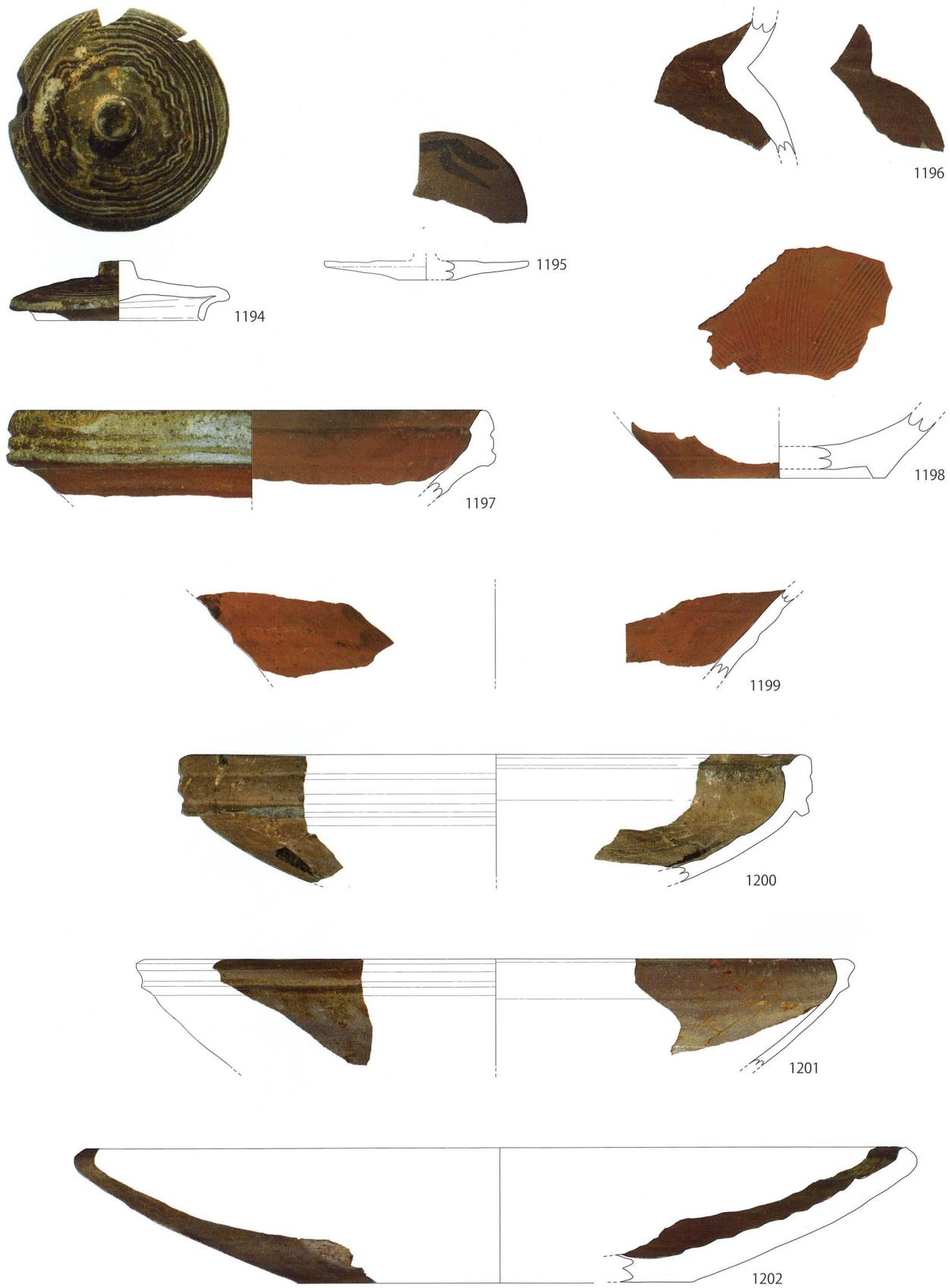
0 1:3 10 cm

れている。1195は肥前陶器の水注の蓋で、外面は鉄絵が施されており、内面は糸切りで仕上げてある。1196は備前の大甕である。1197は備前擂鉢である。1198と1199は肥前系擂鉢である。1200は産地不明の擂鉢である。1201は備前の鉢である。1202は備前のこね鉢である。

- 貿易陶磁 1203～1223は中国磁器、土器、石製品、金属製品である。1203～1210は中国磁器である。1203～1206は青花碗である。1207・1208は芙蓉手の青花鉢である。1209は青花皿あるいは鉢である。1210は景德鎮窯系の青花皿と思われる。1211は用途不明の瓦質土器である。1212・1213は手づくねの土師器皿である。いずれも大形のもので、口クロ成形した後に指押さえを施し手づくね風に見せている。1214～1221は金属製品である。1214と1215は鉄釘で、断面方形を呈する。1216・1217は切羽で、鉄と銅の合金製でその上から金メッキが施されるものである。1218は真鍮製の煙管の雁首である。1219は銅製の小柄と思われる。1220は銅製の水滴である。1221は1220の底板部分である。1222・1223は砥石で、1222は中砥と思われる。1223は砥石にしてはかなり薄いもので、仕上げに使用されたものと思われる。
- 瓦質土器 1224～1238は木製品、錢貨である。1224・1225は墨書の書かれた木簡である。1224は墨書がほとんど消えており、上部に「春」、中央部に「吉」とだけ読める。1225は両面に「九右□□」と書いてある。1226～1229は錢貨である。1226は北宋錢の「聖宋元寶」で、初鑄年は1101年である。1227は北宋錢の「元豐通寶」で、初鑄年は1078年である。1228は北宋錢の「大觀通寶」で、初鑄年は1107年である。1229は明錢の「永樂通寶」で、初鑄年は1408年である。1230は丸型の連歯下駄である。1231は角型の差込下駄である。1232は木製品の桶の蓋と思われ、面中央に穴が確認でき、紐を通した穴と思われる。1233は木製の桶の蓋あるいは底にあたるものである。1234は用途不明の木製品で、黒漆が塗っている。1235は木製の羽子板と思われ、羽部分と柄部分が半分欠損している。1236～1238は白木の箸で、いずれも両側の先端を細く加工している。
- 土師器皿 1239～1251は瓦である。1239～1246は軒丸瓦である。1239は中央に三巴文、その外側に圏線が入り、さらにその外側に珠文が17個配されるもので、頭部は右向き、尾部は左向きである。1240は中央に三巴文と圏線、そのまわりに珠文が配されるもので、約1/2が欠損しているが、珠文は7個認められる。巴文の向きは、頭部は右向き、尾部は左向きである。1241は三巴文の周りに珠文が配されるもので、6個確認でき、巴文の向きは、頭部は右向き、尾部は左向きである。1242も三巴文の周りに珠文が配されるもので、珠文は他のものよりやや小ぶりで7個確認できる。1243は三巴文と圏線の周りに珠文が配されるもので、珠文はやや小ぶりで7個確認できる。1244～1246も三巴文と圏線の周りに珠文が配されるものである。1244は珠文が6個、1245は珠文が4個、1246は珠文が5個確認できる。1247は軒平瓦で、中心飾りは葉脈のある三葉文が、その両側に2つずつ唐草文が施される。1248～1251は丸瓦で、1251は内面調整がコビキBである。1252は鬼瓦の一部と思われる。
- 金属製品
- 石製品
- 墨書木簡
- 錢貨
- 木製品
- 瓦

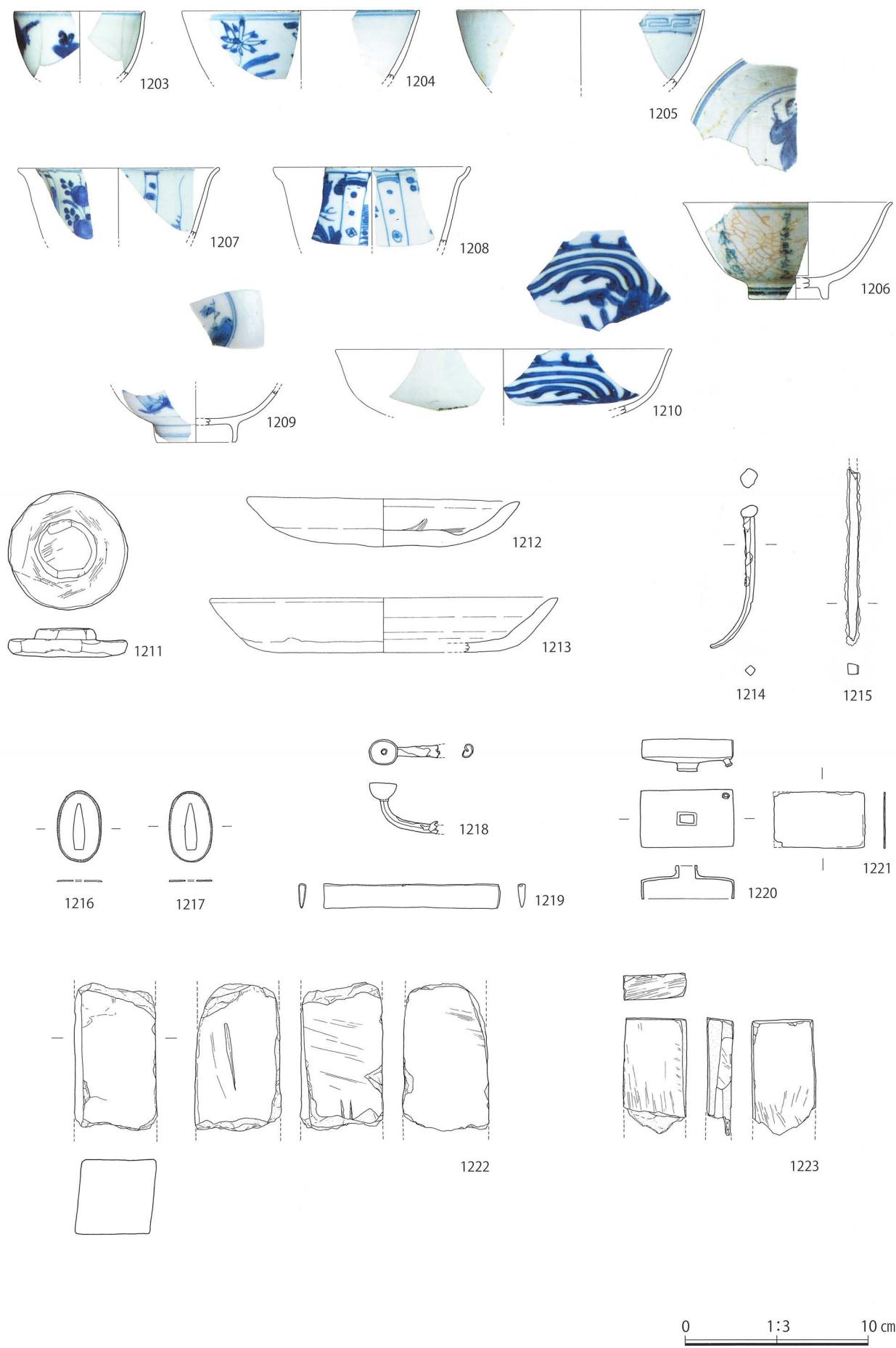


第232図 第4遺構面 遺構外出土遺物(2)

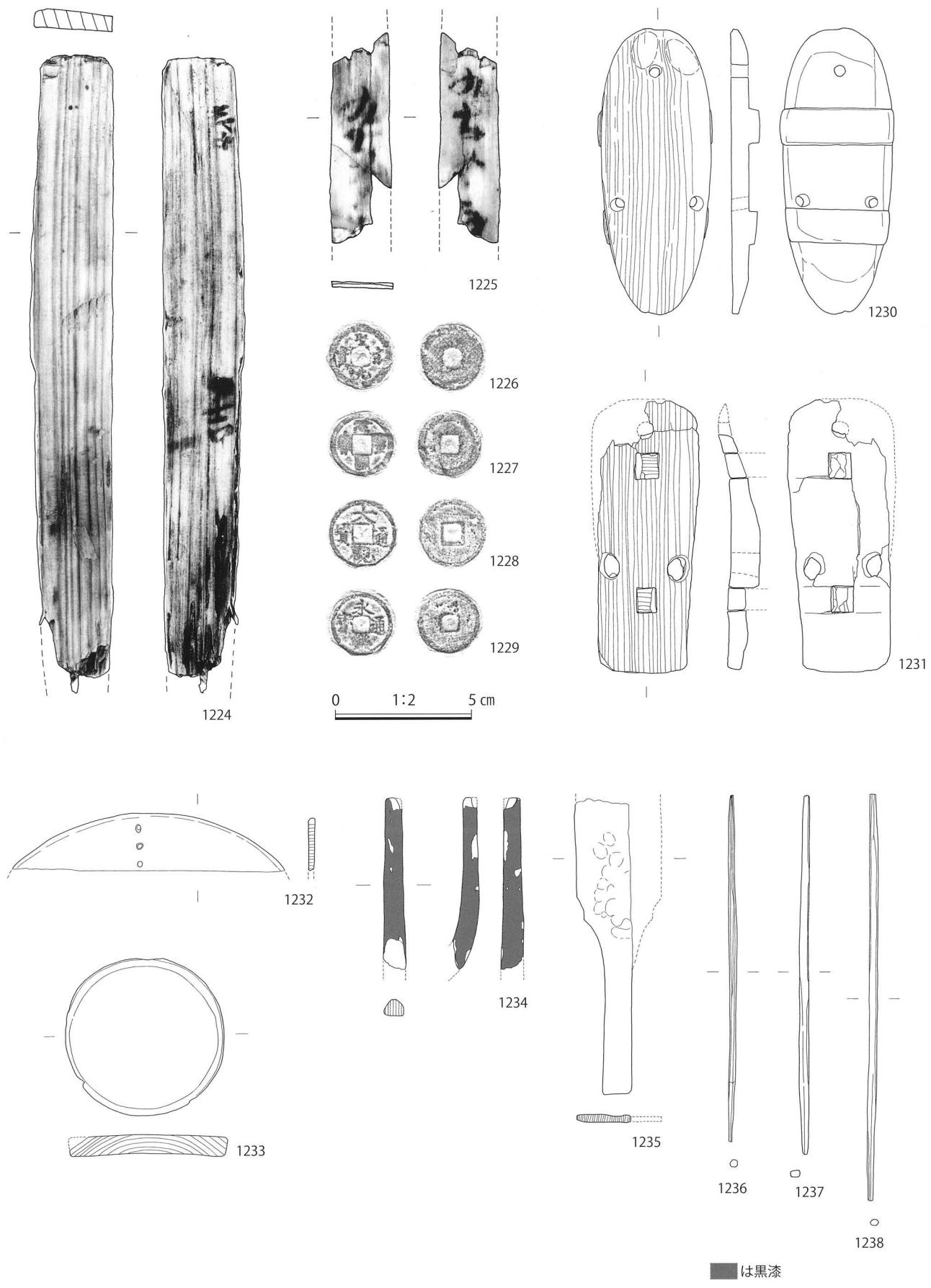


第233図 第4遺構面 遺構外出土遺物(3)

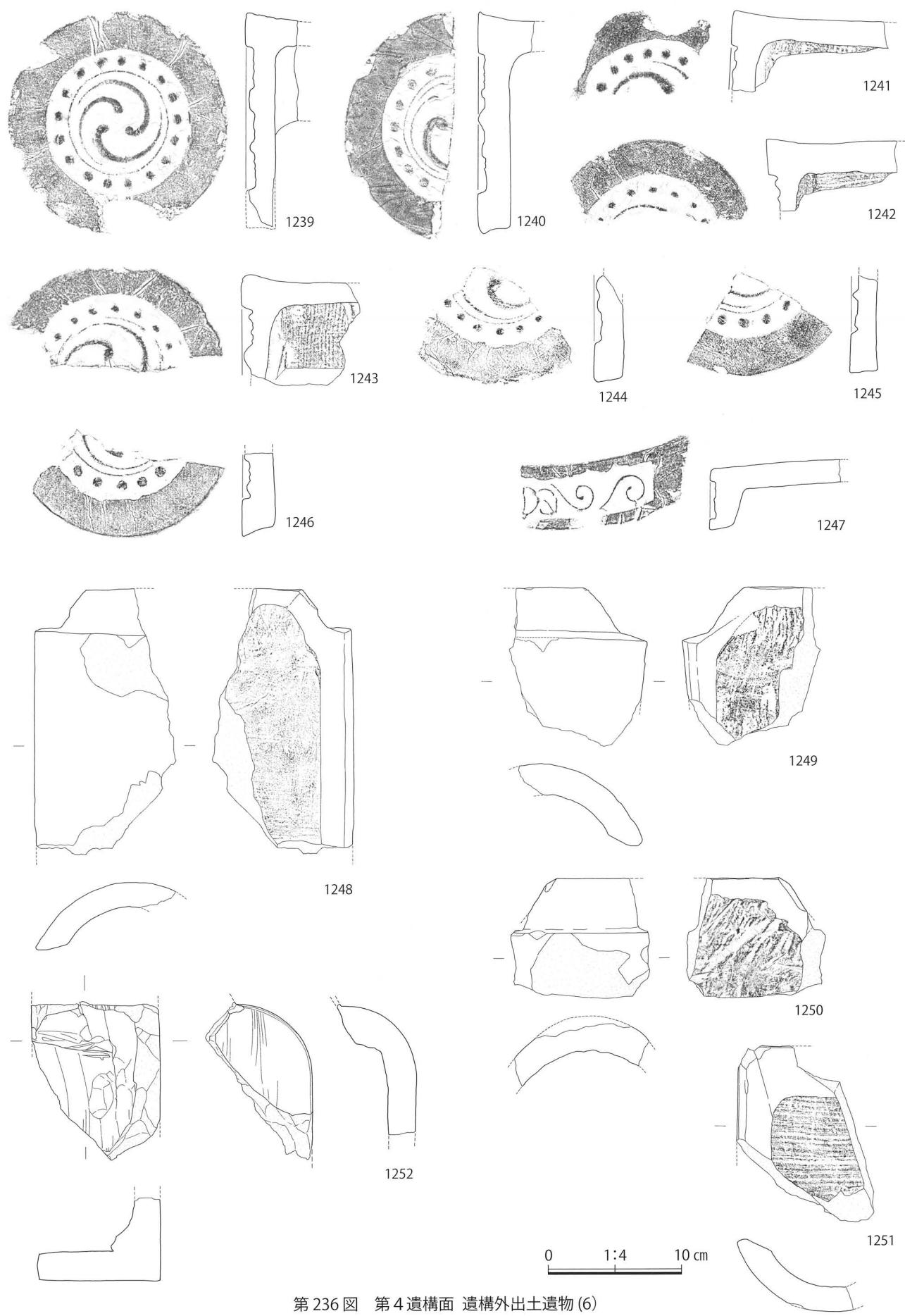
0 1:3 10 cm



第234図 第4遺構面 遺構外出土遺物(4)



第235図 第4遺構面 遺構外出土遺物(5)



第236図 第4遺構面 遺構外出土遺物(6)

第6節 小結

北屋敷では今回の調査により、遺構の残存状況が良好ではない遺構面があるものの、屋敷地の空間配置の変遷をある程度追うことができた。ただし、今回の調査の対象となっているのは、屋敷境から北側の屋敷地の約1/3の範囲であるため、屋敷地のすべての様相を表すわけではないことをお断りする。

まず、北屋敷における各遺構面の変遷について、屋敷地が形成された当初の遺構面である第4遺構面から順に説明していきたい。

屋敷地の変遷

第4遺構面は北屋敷の遺構面の中で最も遺構の残存状況が良く、屋敷地の空間利用について具体的に推定することができた。表向きの空間にあたる屋敷地の南側では、小型の池SG01とひょうたん型の池SG02をもつ庭園が備えられ、その北側には庭園が鑑賞できる建物跡SB03が存在したと思われる。また、この建物跡から渡り廊下SC01が伸びており、その先に茶室のような小規模な建物SB04が設置され、そこからも池が鑑賞できるようになっていたと思われる。庭園については、SG01とSG02がSD01で繋がった状態で検出されている。また、SG02の北側に比較的小さな植栽跡SX01が見つかり、小形の植物が植えられていたものと思われる。さらにSX01の北側に、建物本体が東西9間×南北4間あるいは6間の礎石建物が存在したことが明らかになった。この建物の西側と北東側にはそれぞれ溝SD02・04・05が検出され、この建物に付随するものと考えられる。さらに、この建物には周り縁があり、遺水SD01の上を渡り廊下SC01が走り、南側の礎石建物SB04と繋がっていたことも分かった。この他、SG02の東側からは、植木を中心とした花壇として造作された痕跡が見つかっている。また、SG02の南側は遺構らしきものがほとんど見られないことから、この空間に築山のようなものが想像される。

SB03の東側には空閑地が存在したようで、根石を持つ埠跡SA08が最初に検出され、それを取り除いた後に大きな廃棄土坑SK28が検出された。その他にも、比較的小型の廃棄土坑もいくつか検出されている。さらに、これらの遺構とSB03やSD04を隔てるように、2本の溝SD06・07を中心にして杭列SA07が並ぶのを確認できた。この溝と杭列の北側には、2間×3間と2間×4間の建物跡が検出され、規模が小さいことから長屋を想定している。これらの遺構が存在する部分は、奥向きの空間であったと推測する。

また、詳しくは第6章で述べられるが、屋敷境を示す素掘り溝(屋敷境SD01)が調査区に南端で検出されている。この北側には杭列が並ぶ部分(南SA02)が認められ、遮蔽施設が存在した可能性が考えられる。

松江城下町においては「有澤家」、「三谷家」などの屋敷絵図で、屋敷地に池を含む庭園を備えるものがあることが分かっているが、⁽¹⁷⁾今回の発掘調査により、それを証明する貴重な成果を得ることができた。また、庭園を備えた建物と空間を分ける遺構の検出により、表向きと奥向きの空間の存在を想定することができた。庭園を備えた建物のある空間を表向きとすれば、おそらく調査区の東側に奥向きの空間が広がることが推測される。

第3遺構面にも、第4遺構面から引き続き小型の池SG01とひょうたん型の池SG02が遺水SD01でつながって存在している。SG02は大形の割石を組んだ雄壮なものから、河原石を護岸として張り巡らした流麗なものに改修されている。改修に使用された土の中から桔梗文の瓦が出土しており、これと同様の瓦が第3遺構面に伴う屋敷境SD01の石積の裏込めからも出土していることから、SG02が第3遺構面の時期に改修した可能性が高い。このSG02と併

せて松江城を望むように、小規模な建物跡 SB04 が存在したことが判明した。また、SG01 と SG02 の北側にも渡り廊下 SC01 をもつ建物跡 SB02 の存在が想定される。この渡り廊下は、第4遺構面とは形状を変え、SG02 の東側の建物跡 SB01 とつながっていた可能性も考えられる。また、この建物には石積溝 SD02 が付随していたと考えている。さらに、この遺構面では塀 SA05・06 をはさんで、もう一つの池 SG03 を設けている。このように見していくと、調査区の南側が庭園とそれを鑑賞する建物といった表向きの空間で占められていることがわかる。SB02 の東側には、「佐々」名の荷札木簡が出土した廃棄土坑 SK23 や用途不明の土坑が検出された空間があり、この部分が屋敷地の中で空閑地であったと言える。調査区の北東側は礫敷が部分的に見つかり、この礫敷が建物の基礎構造物と考えれば、この空間にも建物が存在した可能性がある。

さらに、第3遺構面では屋敷境を示す素掘りの溝が埋め立てられ、石組の溝につくり替えられたことが分かっている。

第2遺構面では、遺構の残存状況が悪いものの、門柱を伴う柱列 SA01 の北側に建物を想定することができた。また、この建物には便槽 SK20・21 が付随していたものと考えている。さらに、この建物の東側に畠 SN01 が存在したことが判明した。第3遺構面まで存在していた池は、この遺構面では見られなくなり、その上に何らかの施設があったものと思われる。この他、空間を分けるための塀 SA03・04 が存在する。

屋敷境は調査区の東側では石積の溝が使用されなくなる。西側では新たに石積が積み直されている。

第1遺構面では、さらに遺構の残存状況が悪く、空間配置については検証できなかった。造成土とともに積み上げられた比較的大形の石積方形土坑2基について、南屋敷の第3遺構面では、小形の石積方形土坑がいくつか検出され、使用されている石も小形の割石や河原石が多いが、北屋敷の石積方形土坑では大形の大海崎石が使用されている。そのうちの1基からは、良好な一括資料を得ることができており、稻荷神社の存在を示す狐人形や石造物、屋敷地内で焼かれた可能性のある陶器（御庭焼）や、大工の名前や建築木材に関する墨書のある木製品が見つかっている。稻荷神社の存在に関しては、文献資料にも記述が残っており、それを証明することができた。また、御庭焼については、今のところ乙部家文書などの文献資料では確認されていないため、今後の検討課題である。さらに、大工の名前などの墨書資料についても、その内容についてさらに解説していくことも課題である。

また、松江藩主松平定安の八女「鑑子」出生時の胞衣箱埋納坑 (SK04) は、当時の習俗を知るうえで貴重な資料である。

この遺構面での屋敷境を示す遺構は確認できなかった。

各遺構面の年代	次に各遺構面から出土した陶磁器から、各遺構面の年代を推定することができた。（表6） 第4遺構面では出土した陶器の大半が肥前産のもので、九陶I - 2期（1594～1610年代）から九陶II期（1610～1650年代）に比定されるもので占められている。 第3遺構面は「佐々」名の荷札木簡が出土した廃棄土坑 SK23 の一括資料をもとに考えると、SK22 からは第4遺構面同様肥前陶器が中心に出土しており、九陶II期に比定されるものが多くなるが、肥前磁器は伴わない。しかし、池 SG02 の埋土や遺構面の包含層から 17世紀中頃に比定される肥前磁器が出土しているため、第3遺構面の年代を 17世紀前半から中頃と推定した。
---------	--

この第3遺構面の年代から考えて、第4遺構面が17世紀初頭から17世紀前半にあたると思われる。

第2遺構面は遺構面の残存状況が悪いが、九陶Ⅲ期(1650～1690年代)から九陶Ⅳ期(1690～1780年代)に比定される肥前磁器が多く出土しており、17世紀中頃から18世紀代にあたると考えられる。ここで見られる陶磁器の年代が第3遺構面と第1遺構面の推定年代の間を示すことから、第2遺構面の推定年代とする。

第1遺構面は遺構面全体では、九陶Ⅳ期(1690～1780年代)から九陶Ⅴ期(1780～1860年代)に比定される肥前陶磁器や19世紀代の瀬戸磁器などが見られるが、石積方形土坑SK02で九陶Ⅳ期(1690～1780年代)に比定される肥前磁器が主体となって出土していることと、胞衣箱(SK04)が明治4年の銘をもつことから、第1遺構面は18世紀代から明治初頭にあたると推定した。

居住者の変遷 この年代観に基づき、各遺構面に居住していたと思われる人物を推定してみた。(表7)

第4遺構面については、1620～1633年にかけての松江城下町絵図が残されており、⁽¹⁸⁾ 北屋敷にあたるところに堀尾采女の名前が書かれている。これより以前の絵図は見つかっていないが、1611年に松江城と城下町が完成したとされており、⁽¹⁹⁾ この時に堀尾采女の父である堀尾民部がこの屋敷に住んでいた可能性が高い。

第3遺構面については、この遺構面に伴う廃棄土坑SK23から「佐々九郎兵衛」名の荷札木簡が出土していることから、「佐々九郎兵衛」が住んでいたことは間違いない。また、この遺構面から17世紀中頃を示す肥前磁器が出土していることやSK23から「乙部」と書かれた可能性がある木簡も存在することから、「佐々」の次に入居したことが分かっている「乙部九郎兵衛」も第3遺構面に存在した可能性が高い。ここで問題となるのが、堀尾采女がこの遺構面にまで存在したかということである。第4遺構面、第3遺構面で出土した陶磁器の年代では確定はできなかった。しかし、1634年に藩主が替わるとともに入居した佐々九郎兵衛は、石高1万石を拝領し、松江藩主京極忠高に最も信頼された人物であったことが文献資料で分かっており、⁽²⁰⁾ 屋敷地を新たに造成する財力も十分兼ね備えていたと思われる。

また、第3遺構面でつくられた屋敷境の石組の裏込め土とともに桔梗文の瓦が出土しているが、桔梗文は揖斐姓の家紋とされており、⁽²¹⁾ 第4遺構面に住んでいたと思われる堀尾民部は出雲入部以前は揖斐宮内という名前であったことが分かっている。⁽²²⁾ 第4遺構面で堀尾民部が屋敷に桔梗文を使用していたとすれば、第3遺構面造成時に堀尾家の屋敷を解体した時に混ざったものである可能性が考えられる。

第2遺構面の造成は、乙部家の2代目あるいは3代目が行ったものと思われる。⁽²³⁾ 出土した陶磁器の年代から、この遺構面に4代目が住んでいたのは間違いないであろう。

第1遺構面の造成は、乙部家の5代目以降に行われたと思われる。それ以降は10代目が役儀御免になるまで乙部家が居住していたことが文献でも分かっている。

以上のように、今回の発掘調査により、文献と合致する資料も多く得ることができ、松江での上級藩士の屋敷の空間利用や生活の一端を知ることができたのは大きな成果と言える。しかしながら、墨書の内容など、今回解明できなかったこともあり、今後さらに検討が必要と思われる。

表6 北屋敷における遺構面の年代観

第4遺構面	17世紀初頭～前半
第3遺構面	17世紀前半～中頃
第2遺構面	17世紀中頃～18世紀代
第1遺構面	18世紀代～明治初頭

表7 北屋敷における居住者変遷案

遺構面	藩主時期	居住者		年代
第4遺構面	堀尾期	初代	堀尾民部	1611～1620?年
第4遺構面／第3遺構面		2代目	堀尾采女	1620～1633年
第3遺構面	京極期	初代	佐々九郎兵衛	1634～1637年
第3遺構面	松平期	初代	乙部九郎兵衛	1638年
第3遺構面／第2遺構面		2代目	乙部勘解由	1649年
第3遺構面／第2遺構面		3代目	乙部九郎兵衛	1662年
第2遺構面		4代目	乙部九郎兵衛	1693年
第2遺構面／第1遺構面		5代目	乙部九郎兵衛	1727年
第2遺構面／第1遺構面		6代目	乙部九郎兵衛	1736年
第2遺構面／第1遺構面		7代目	乙部九郎兵衛	1753年
第2遺構面／第1遺構面		8代目	乙部九郎兵衛	1786年
第1遺構面		9代目	乙部九郎兵衛	1791年
第1遺構面		10代目	乙部九郎兵衛	1844年

註

- (1)山陰近世考古学研究会会報 第1号 2010年
- (2)江戸遺跡研究会編「図説江戸考古学研究辞典」柏書房 2001年
- (3)滝川家旧蔵資料「新屋太助」の日記にその記述が残されているとのこと。松江歴史館学芸員 松原祥子氏の御教示による。
- (4)柚原恒平「松江城下町遺跡 殿町344番地外発掘調査概報」(財)松江市教育文化振興事業団 2010年
- (5)原宏ほか「日本やきもの集成8 山陰」平凡社 1981年
- (6)松江市市史編纂室 内田文恵氏の御教示による。
- (7)松平直亮「松平定安公傳」1934年
- (8)福井県産業労働部地域産業・技術振興課参事 田中照久氏の御教示による。
- (9)(2)と同じ。
- (10)大阪城天守閣館長松尾信裕氏の御教示による。
- (11)内田文恵氏、西島太郎氏の御教示による。

- (12)総合地球環境学研究所 石丸恵利子氏の御教示による。
- (13)乗岡実「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－』2002年
- (14)森村健一「福建省漳州窯系陶磁器(スワトウ・ウエア)について」『大阪城跡発掘調査報告I－大阪府庁舎・周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－自然科学・考察編』財団法人大阪府文化財センター 2002年
- (15)島根県埋蔵文化財センター丹羽野裕氏の御教示による。
- (16)足立正智氏(建築設計事務所 館屋工房)、後藤史樹氏(有限会社 後藤屋)の御教示による。
- (17)島根県立図書館所蔵「有澤権五郎屋舗絵図」は、描かれた年代は不詳、有澤家は一時期から2500石程度を拝領している。三谷家所蔵「三谷家屋敷絵図」は文化9年(1826年)に描かれたもので、三谷家は3670石を拝領していたことがわかっている。松江歴史館学芸員 松原祥子氏の御教示による。
- (18)島根大学附属図書館編「絵図の世界－出雲国・隠岐国・桑原文庫の絵図－」2006年
- (19)松江歴史館「雲州松江の歴史をひもとく－松江歴史館展示案内」2011年
- (20)西島太郎「京極忠高の出雲国・松江」松江市教育委員会 2010年
- (21)「日本家紋総覧」角川書店 1993年
- (22)松江歴史館「－平成23年度特別展春の巻－ 松江創世紀 堀尾氏三代の国づくり」2011年
- (23)島根県立図書館所蔵「松江藩士列土録」

表8 殿町 279 番地外（北屋敷）陶磁器・土器遺物觀察表

遺物番号	造構名	材質	器種	器形	法量(cm)				生産地	九陶編年	備考
					口径	底径	器高	その他			
250	SK01	陶器	鉢	変形	5.8	2.6	2.9		在地系	-	
251	SK01	陶器	水注	土瓶・上半部	2.7			胴部径5.1	不明	-	蓋(口径3.1/ 器高1.6/ つまみ径0.6cm)。
252	SK01	陶器	水注	土瓶・下半部	4.0				不明	-	
253	SK01	陶器	土瓶	蓋	かえり径7.4 外径10.4	3.2	つまみ径2.0		不明	-	
254	SK01	磁器	中碗	端反形	11.1	3.8	6.4		瀬戸・美濃	-	1850年代。
255	SK01	土器	焜炉	胴丸形	21.8	15.0	16.8		在地系	-	高台内部中央に墨書あり。スス付着。
256	SK01	土器	さな	円盤形	9.8	5.9	2.5		在地系	-	七厘の付属品。φ1.5cmの穴6個。
257	SK01	土師器	皿(小)	在地系	7.6	4.4	1.8		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。底部中央にφ0.4cmの穿孔。油煙痕。
258	SK01	土師器	皿(小)	在地系	7.7	3.4	1.8		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
265	SE01	陶器	中鉢	玉縁形	16.6				不明	-	
266	SE02	磁器	小碗			3.0			肥前	V	
267	SE02	陶器	小碗						布志名	-	
268	SE02	磁器	小碗	杉形	8.2	3.2	3.7~4.0		不明	-	近代。高台内に「月島」銘。
269	SE02	磁器	中碗	丸形					肥前	III	色絵。
283	SK02	陶器	小皿	丸形	10.2	4.7	3.0		京焼系	-	高台内に「○」印。鳥取県因久山焼の可能性あり。
284	SK02	陶器	灯明受皿	丸形	10.3	5.4	2.7		不明	-	油煙痕。
285	SK02	陶器	擂鉢			12.1			不明	-	スリ目單位8本。
286	SK02	磁器	小鉢	端反形	12.8				中国	-	景徳鎮窯系。
287	SK02	磁器	猪口	桶形	5.7	2.6	4.2		肥前	IV	雨降文。
288	SK02	磁器	中碗	筒形	9.9	5.8	7.4		肥前	IV~V	
289	SK02	土器	焙烙	無耳・底丸	33.2				在地系	-	外面にスス付着。
290	SK02	土師器	皿(大)	在地系	15.2	9.0	2.8		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
291	SK02	土師器	皿(中)	在地系	13.3	8.2	2.5		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
292	SK02	土師器	皿(中)	在地系	12.8	7.8	2.5		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
293	SK02	土師器	皿(中)	京都系	12.0	4.6	2.7		-	-	白色系。ナデ上げ端部不明。凹線状園線。
294	SK02	土師器	皿(中)	京都系	12.8	6.0	2.3~2.5		-	-	白色系。ナデ上げ端部不明。油煙痕。
308	SK03	陶器	香炉	無三足	5.3	3.6	4.1		不明	-	
309	SK03	陶器	小碗	丸形	7.0	3.4	3.9		京・信系	-	
310	SK03	陶器	小碗	腰張形		3.0			京・信系	-	
311	SK03	陶器	中碗	杉形	8.9	3.0	5.2		京・信系	-	
312	SK03	陶器	小碗	丸形		2.7			京・信系	-	型紙絵付。
313	SK03	磁器	小碗	端反形	8.8	2.9	5.0		信楽	-	19世紀前半。
314	SK03	陶器	中碗	端反形	9.0				信楽	-	19世紀前半。
315	SK03	陶器	小碗		3.8				萩・深川系	-	18世紀末~19世紀代。ピラ掛け。
316	SK03	陶器	小碗	杉形	9.8	3.4	4.9		萩・深川系	-	18世紀末~19世紀代。ピラ掛け。
317	SK03	陶器	土瓶	蓋	かえり径6.6 外径9.0	2.2	つまみ径1.6		不明	-	
318	SK03	陶器	土瓶	算盤玉形	7.5			胴部径14.6	京・信系	-	外面にスス付着。
319	SK03	陶器	中水注	後手半筒形	9.9				京・信系	-	
320	SK03	陶器	急須		5.6				万古	-	焼締陶器。
321	SK03	陶器	行平		15.7				不明	-	外面にスス付着。
322	SK03	陶器	土鍋	丸形	19.0				不明	-	外面にスス付着。
323	SK03	陶器	徳利	高円徳利形	4.5			胴部径8.9	瀬戸・美濃	-	
324	SK03	陶器	小瓶	ペコかん形		5.2			不明	-	
325	SK03	陶器	中碗	丸形	11.1	4.7	5.0		御庭焼	-	高台内に墨書あり。「大乙」。
326	SK03	陶器	中碗	丸形	11.3	4.6	5.4		御庭焼	-	高台内に墨書あり。「大乙/九月吉日」。
327	SK03	陶器	中碗	丸形	11.4	4.2	5.1		御庭焼	-	高台内に墨書あり。「乙作/子四月〇十之門」。
328	SK03	陶器	中碗	丸形	10.9	4.6	5.8		御庭焼	-	高台内に墨書あり。「大乙/九月吉日三十〇」。
329	SK03	陶器	中碗	丸形	11.4	5.2	5.1		御庭焼	-	高台内に墨書あり。「九月吉日三十〇〇〇」。
330	SK03	陶器	土瓶	算盤玉形	9.7			胴部径15.7	御庭焼	-	
331	SK03	陶器	小碗	端反形	8.6	3.6	4.8		布志名	-	
332	SK03	陶器	中碗	杉形	11.3	4.6	6.6		布志名	-	
333	SK03	陶器	中碗	筒丸形	11.0	5.1	8.2		布志名	-	
334	SK03	陶器	中鉢	匁干形	19.3	8.2	8.9		布志名	-	
335	SK03	陶器	中鉢	浅丸形	20.9				布志名	-	
336	SK03	陶器	土瓶	算盤玉形	10.8			胴部径18.0	布志名	-	
337	SK03	陶器	水鉢か			12.6			布志名	-	
338	SK03	陶器	大皿		16.8				在地	-	
339	SK03	陶器	中鉢	浅丸形	19.4				在地	-	
340	SK03	陶器	擂鉢	口線内折	18.0	6.7	7.2		在地	-	スリ目單位10本。内面に重焼痕。
341	SK03	陶器	擂鉢	口線無装飾	27.2	12.2	14.3		不明	-	スリ目單位22本。
342	SK03	陶器	擂鉢	口線無装飾	22.7	10.6	10.3		不明	-	スリ目單位21本。内面に重焼痕。
343	SK03	陶器	擂鉢		30.0	10.0			須佐	-	スリ目單位9本。高台内にカンナ痕。
344	SK03	陶器	擂鉢			12.8			須佐	-	スリ目單位9本。高台内にカンナ痕。
345	SK03	陶器	水鉢か		18.6				瀬戸・美濃系	-	
346	SK03	陶器	水鉢か						不明	-	獸面把手貼付。
347	SK03	陶器	火入	半筒形	13.6	12.6	12.0		在地	-	
348	SK03	陶器	焜炉			11.5			不明	-	上方部に窓。
349	SK03	土器	焜炉						在地系	-	
350	SK03	陶器	提かん七輪			27.1			脚3。	-	
351	SK03	陶器	植木鉢			12.8			不明	-	
352	SK03	陶器	植木鉢	鶴縁桶形	31.4	20.0	22.2		不明	-	
353	SK03	陶器	提かん			9.4			備前か	-	底部は回転糸切り。
354	SK03	陶器	中甕	口縁断面T字形	18.6				不明	-	
355	SK03	磁器	紅猪口	菊花形	4.2	1.4	1.6		肥前	V	19世紀前半。
356	SK03	磁器	紅猪口	端反形	4.8	2.0	2.8		肥前系	-	
357	SK03	磁器	蓋付鉢		6.0				肥前	IV	蓋と鉢セッテ。蓋(かえり径5.3/ 外径6.4/ 器高1.9cm)。
358	SK03	磁器	猪口	桶形	5.5	2.9	4.2		肥前	IV	省略雨降文。型紙絵付。
359	SK03	磁器	小碗	浅半球形	7.0	2.5	3.2		肥前	V	
360	SK03	磁器	紅猪口	浅丸形	8.3	2.6	3.7		肥前	IV	「小町紅」。
361	SK03	磁器	紅猪口	丸形	7.1	2.5	3.9		肥前	IV	
362	SK03	磁器	小碗	半球形	8.8	3.6	3.9		肥前	V	折松文。
363	SK03	磁器	小碗			3.4			肥前	-	焼継修理番号あり。
364	SK03	磁器	小碗	端反形	8.8	4.1	4.6		肥前	IV	
365	SK03	磁器	中碗	丸形	9.1				肥前	IV	白磁。
366	SK03	磁器	中碗	端反形	9.3	3.4	4.5		肥前	V	
367	SK03	磁器	蓋	広東形	10.3		2.7	つまみ径5.6	肥前	V	内面見込みに「さぎ文」。
368	SK03	磁器	中碗	広東形			6.2		肥前	V	

第4章 殿町279番地外調査(北屋敷)の概要

遺物番号	遺構名	材質	器種	器形	法量(cm)				生産地	九陶編年	備考
					口径	底径	器高	その他			
369	SK03	磁器	中碗	広東形	11.6	6.2	6.1		肥前	V	
370	SK03	磁器	中碗	広東形	11.4	6.2	6.4		肥前	V	
371	SK03	磁器	中碗	腰張形	10.5	3.8	6.0		肥前	V	
372	SK03	磁器	中碗	端反形	10.9	4.3	6.0		肥前	V	
373	SK03	磁器	中碗	端反形	11.5	4.5	6.4		肥前系	-	
374	SK03	磁器	中皿	内湾形	16.8				肥前	II-2	内青磁。
375	SK03	磁器	中皿	丸形底広		13.8			肥前	IV	高台内にハリ支え痕。
376	SK03	磁器	中皿	丸形	15.0	9.0	3.8		肥前系	-	蛇ノ目凹型高台。
377	SK03	磁器	小皿	丸形底広	10.2	7.0	2.4		肥前	V	蛇ノ目凹型高台。
378	SK03	磁器	小皿	丸形底広	10.8	7.1	2.1		肥前	V	蛇ノ目凹型高台。
379	SK03	磁器	中皿	丸形底広	14.6	7.9	3.5		中国	-	
380	SK03	磁器	蓋付鉢蓋	かえり径13.6 外径15.4					肥前	-	
381	SK03	磁器	中鉢	丸形・底浅-端反	16.4	6.5	8.0		肥前	V	高台内に番号あり。ガラス継ぎ痕。
382	SK03	磁器	小瓶	らっきょう形	1.8	3.4	9.3		肥前	IV	
383	SK03	磁器	小瓶	らっきょう形		4.0			肥前	IV	
384	SK03	磁器	中瓶			5.8			肥前	-	
385	SK03	磁器	中瓶			7.2			肥前	-	
386	SK03	磁器		外径7.0 内径2.1				厚1.9 不明		-	
387	SK03	磁器		外径5.0 内径1.4				厚1.2 不明		-	片面に墨書あり。「戸」か。
388	SK03	土師器	皿(小)	在地系	8.0	4.7	1.7		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。底部中央にφ0.4cmの穿孔。
389	SK03	土師器	皿(小)	在地系	8.2	3.2	1.9		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。内面に墨が残る。
390	SK03	土師器	皿(小)	在地系	8.2	5.0	1.5		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。スヌ付着。
391	SK03	土師器	皿(小)	在地系	7.5	3.0	1.6		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
392	SK03	土師器	皿(小)	在地系	8.8	5.5	1.6		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
393	SK03	土師器	皿(小)	在地系	8.3	5.2	1.6		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
394	SK03	土師器	皿(小)	在地系	8.2	4.9	1.5		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
395	SK03	土師器	皿(小)	在地系	9.9	5.6	1.9		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
396	SK03	土器	風炉		14.9	8.0			在地系	-	
397	SK03	陶器	中甕	変形無高台	19.3	10.0	23.1		不明	-	
398	SK03	陶器	大甕			20.4		頸部径32.0	不明	-	
399	SK03	土器	焙烙	底平坦	19.0	16.0	4.0		在地系	-	
400	SK03	土器	焙烙	無耳・底丸	31.8				在地系	-	外面にスヌ付着。釉薬一部比熱により剥落。
401	SK03	土器		不明	7.8				在地系	-	
402	SK03	土器	焼塗壺身		8.0				在地系	-	
403	SK03	土器	人形	狐		9.6	台座幅4.4		在地系	-	
404	SK03	土器	人形	狐			台座3.5×6.6		在地系	-	
405	SK03	土器	人形	狐					在地系	-	
406	SK03	土器	人形	狐					在地系	-	
407	SK03	土器	人形	狐			幅4.3		在地系	-	台座天井部に墨書あり。「西藏」。
408	SK03	土器	人形	着物・人			長8.1/幅3.4		在地系	-	
409	SK03	土器	人形	大黒天			長5.5/幅4.1		在地系	-	
517	SK04	土師器	胞衣皿(大)		14.4	6.0	3.1		-	-	蓋として使用。外面十字に縛った痕跡。外面回転ヘラ削り後回転ナデ、内面回転ナデ。
518	SK04	土師器	胞衣皿(大)		14.5	5.3	3.5-3.6		-	-	身として使用。外面十字に縛った痕跡。底面に纖維質付着。外面回転ヘラ削り後回転ナデ、内面回転ナデ。
519	SK05	磁器	中碗蓋	端反形	10.0		2.9 つまみ径4.0		肥前	V	
520	SK05	磁器	小皿	菊花形	10.2	6.0	2.6		肥前	V	
521	SK05	磁器	大瓶			8.3		胴部径17.0	肥前系	-	
522	SK05	陶器	灯明受皿		6.0	3.6	1.6 受部径9.8	不明	-	-	
523	SK05	陶器	灯明受皿	容器付立鼓形	4.2	5.0	5.5		京・信系	-	
524	SK05	陶器	擂鉢	口縁外帶形	33.1	14.4	16.7		不明	-	片口付。
525	SK05	土器	焙烙	無耳・底丸・浅め	35.6				在地系	-	外面にスヌ付着。
527	SK06	陶器	爛壺利			7.4			在地系	-	
528	SK06	土師器	皿(小)	在地系	10.0	5.5	2.0		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
529	SK06	土師器	皿(中)	在地系	11.6	7.0	2.0		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
532	SK07	陶器	土瓶	算盤玉形	10.2			胴部径17.3	不明	-	
533	SK07	陶器	擂鉢	口縁内折	19.4	6.8	8.8		不明	-	スリ目単位12本。
534	SK07	陶器	中碗	筒丸形	8.0	5.0			布志名	-	
538	SK08	磁器	人形	狐			7.5	不明	-	-	
539	SK09	陶器	水滴	碗と瓢箪	3.8	1.7	2.1		布志名	-	墨書あり。「出雲〇〇〇」。瓢箪(口径0.5/底径1.9/器高3.8 cm)。
541	SK11	磁器	中碗	広東形			5.9		肥前	V	
542	SK11	磁器	中鉢				8.2		肥前系	-	色絵。
543	SK11	磁器	仏飯器	台底輪高台	5.9	4.1	6.1		肥前	V	
544	SK11	磁器	猪口	桶形	7.4	4.8	5.5		肥前	V	
545	SK11	磁器	中皿	丸形底広	13.8	8.1	3.7		肥前	V	蛇ノ目凹型高台。高台内に「福」銘。
546	SK11	陶器	大鉢	丸形・玉縁	25.6	11.5	11.7		不明	-	
547	SK11	陶器	行平	丸形・無足	16.9	6.8	8.9		不明	-	
548	SK11	陶器	唾壺			4.4			不明	-	京・信系か。
549	SK12	陶器	小瓶	葉湯瓶	2.3	3.4	7.6		布志名	-	一畑薬師の文。
550	SK12	陶器	大鉢			10.8			不明	-	
551	SK12	陶器	蓋物	口縁施釉	5.9	3.6	5.0		布志名	-	色絵。
552	SK12	陶器	蓋物	口縁施釉			3.6		布志名	-	色絵。
553	SK12	陶器	大甕		45.0				在地系	-	越前と形状類似。
554	SK12	瓦質	火鉢		29.4				在地系	-	
555	SK12	土器	焙烙	無地・底丸・深め	28.8				在地系	-	外面にスヌ付着。
556	SK13	磁器	猪口	広東形端反	5.8	3.8	4.9		肥前	V	
557	SK13	陶器	小碗	浅半球形	6.3	2.5	3.3		京・信系	-	
558	SK13	陶器	小碗	浅半球形	6.1	2.6	3.4		京・信系	-	
559	SK13	陶器	行平		14.6				不明	-	
560	SK13	陶器	土瓶	丸形	9.4				京・信系	-	
561	SK14	陶器	大鉢	折縁形	33.6	16.7	13.0		在地系	-	
562	SK14	陶器	土瓶	算盤玉形	9.3	8.0	12.5 脇部径16.2		在地系	-	
563	SK14	陶器	擂鉢	口縁無装飾	29.1	14.0	15.3		不明	-	底部にφ5.0cmの穿孔。植木鉢に転用。
564	SK15	土師器	皿(小)	在地系	10.2	7.7	1.9		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
565	SK15	土師器	皿(中)	在地系	11.3	6.2	2.3		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
566	SK16	土器	焼塗蓋		6.0		1.9 外径7.8		在地系	-	
567	SK16	土器	焼塗壺身		5.6	5.9	7.4		在地系	-	
568	SK16	陶器	大鉢	丸形・折縁	32.0	12.0	12.6		肥前	IV	二彩。

遺物番号	遺構名	材質	器種	器形	法量(cm)				生産地	九陶編年	備考
					口径	底径	器高	その他			
572	SK17	土器	焰焰	無耳・底丸・深め	36.8				在地系	-	外面にスス付着。
573	SK17	土器	焰焰	無耳・底丸・深め	29.4				在地系	-	外面にスス付着。
574	第1遺構面 遺構外	陶器	鉢		2.3				不明	-	
575	第1遺構面 遺構外	陶器	茶釜		3.4	2.8	3.3		不明	-	
576	第1遺構面 遺構外	陶器	小碗	端反形	9.0				信楽	-	19世紀代。
577	第1遺構面 遺構外	陶器	中碗	呉器形	4.7				肥前	III	
578	第1遺構面 遺構外	陶器	中碗	筒丸形	5.0				不明	-	外面に鉄絵。
579	第1遺構面 遺構外	陶器	中皿		11.4				肥前	III~IV	見込み・高台に砂目痕。
580	第1遺構面 遺構外	陶器	大皿	折縁形	30.8				肥前	III	内面スタンプ文。
581	第1遺構面 遺構外	陶器	片口か		15.0				肥前	IV	
582	第1遺構面 遺構外	陶器	中鉢	甸干形	18.0	7.6	8.3		不明	-	上野・高取系か。
583	第1遺構面 遺構外	陶器	大鉢		31.6				在地	-	
584	第1遺構面 遺構外	陶器	急須	蓋	7.8		2.6		瀬戸・美濃	-	つまみは猿を模したもの。
585	第1遺構面 遺構外	陶器	香炉			6.6			肥前	IV	刷毛目塗り。
586	第1遺構面 遺構外	陶器	土瓶					胴部径18.8		-	
587	第1遺構面 遺構外	陶器	土瓶					胴部径20.2	不明	-	
588	第1遺構面 遺構外	陶器	土瓶	隱元形	14.2			胴部径16.0	不明	-	
589	第1遺構面 遺構外	陶器	餌擂鉢	口縁無装飾	10.2	3.6	3.0		備前	-	スリ目単位7本。
590	第1遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		12.8				須佐	-	
591	第1遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		11.5				須佐	-	
592	第1遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		10.4				須佐	-	スリ目単位9本。
593	第1遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		28.2	13.8	15.6		在地	-	スリ目単位7本。
594	第1遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		27.8	10.4	15.7		在地	-	スリ目単位22本。
595	第1遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		7.0				在地	-	
596	第1遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		5.6				在地	-	スリ目単位11本。高台内に墨書あり。
597	第1遺構面 遺構外	陶器	大瓶		4.8	11.7	24.1		在地	-	高台内に墨書あり。
598	第1遺構面 遺構外	陶器	大瓶	鶴首逆藤形	11.4				在地	-	底部に刻印「空口」。
599	第1遺構面 遺構外	陶器	燒坂蓋		6.8		1.5	外径7.8	在地系	-	
600	第1遺構面 遺構外	土器	火鉢		16.3				在地系	-	
601	第1遺構面 遺構外	土器	焜炉	かまど形	21.0	18.0			在地系	-	
602	第1遺構面 遺構外	土器	七厘	ざな				厚1.2	在地系	-	七厘の付属品。φ 0.9cmの穴。糸切り痕。
603	第1遺構面 遺構外	土器			9.4~9.8		3.0		不明	-	表面に墨書あり。
604	第1遺構面 遺構外	土器	蓋物	蓋	10.8				不明	-	型紙絵付。
605	第1遺構面 遺構外	磁器	小碗	平形	8.0	3.2	3.5		肥前	IV	
606	第1遺構面 遺構外	磁器	小碗	端反形	7.5	3.0	3.7		瀬戸・美濃	-	19世紀代。
607	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗蓋					つまみ径3.9	肥前	V	
608	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗蓋	端反形					在地	-	
609	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗蓋	広東形	10.1	3.1	つまみ径5.7		肥前	V	
610	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗蓋	端反形	10.3		2.9	つまみ径4.4	肥前	V	素描文。焼継ぎ番号あり。
611	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗	丸形	10.8	3.8	5.7		復興丸谷	-	色絵。高台内に「九谷」銘。
612	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗	端反形	11.6				肥前	V	色絵。
613	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗	広東形	6.2				肥前	V	
614	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗	広東形	11.3	6.6	6.1		肥前	V	
615	第1遺構面 遺構外	磁器	大碗	広東形		6.4			肥前	V	
616	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗	腰折形	9.8	4.2	6.2		肥前	V	
617	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗	端反形	12.6				肥前	V	
618	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗	腰張形	10.8	4.6	5.9		不明	-	
619	第1遺構面 遺構外	磁器	大椀	筒丸形	11.9	5.0	8.1		肥前	IV	陶胎染付。
620	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗		4.9				肥前	IV	陶胎染付。
621	第1遺構面 遺構外	磁器	小碗	端反形	11.8				中国	-	精製。
622	第1遺構面 遺構外	磁器	皿						肥前	-	
623	第1遺構面 遺構外	磁器	蓋物蓋	小形	かえり径4.3	外径5.6			肥前	-	白磁。
624	第1遺構面 遺構外	磁器	小坏	端反形	7.0				肥前	-	外面鉄袖。
625	第1遺構面 遺構外	磁器			かえり径13.6	外径15.8	3.4		肥前	-	青磁染付。
626	第1遺構面 遺構外	磁器	小皿	変形	10.6	5.4	2.5		肥前	V	
627	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗蓋					つまみ径4.8	肥前	V	焼継ぎ番号あり。「口 大三一」。
628	第1遺構面 遺構外	陶器	中鉢			8.8			肥前	V	見込みに「環状松竹梅文」。
629	第1遺構面 遺構外	磁器	猪口	桶形	4.9	2.8	3.4		肥前	-	白磁。
630	第1遺構面 遺構外	磁器	猪口	桶形	7.2	4.6	5.6		肥前	IV	
631	第1遺構面 遺構外	磁器	大鉢	甸干形	24.0				肥前	V	芙蓉手文。
632	第1遺構面 遺構外	磁器	水滴						肥前	-	
633	第1遺構面 遺構外	磁器	小瓶		1.4	3.3	9.1		肥前	V	
634	第1遺構面 遺構外	陶器	小瓶			3.6			肥前	-	
635	第1遺構面 遺構外	磁器			外径7.0	内径1.7		厚1.4	不明	-	
636	第1遺構面 遺構外	磁器			外径5.0	1.4		厚1.2	不明	-	
637	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	8.8	5.7	1.6			-	赤色系。2枚重ね。底部は回転糸切り。油煙痕。
638	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	8.2	5.6	1.3			-	赤色系。底部は回転糸切り。底部中央にφ 0.2cmの穿孔。
639	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	8.8	4.9	1.4			-	赤色系。底部は回転糸切り。
640	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	9.4	5.1	2.0			-	白色系。底部は回転糸切り。
641	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	9.8	6.2	2.2			-	白色系。ナデ上げ糸切り。
642	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	10.4	6.3	2.0			-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
643	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	10.2	5.0	2.2			-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
644	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	10.6	6.4	2.2~2.4			-	白色系。底部は回転糸切り。
645	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	11.0	3.0	2.8			-	白色系。ナデ上げ端部不明。回線状圈線不明瞭。
646	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	12.0	5.0	2.3~3.0			-	白色系。ナデ上げ「の」字状。回線状圈線。
647	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	12.4	7.2	2.2			-	白色系。ナデ上げ端部不明。回線状圈線不明瞭。油煙痕。
648	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	11.8	5.0	2.8			-	白色系。ナデ上げ「の」字状。回線状圈線不明瞭。
649	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	13.6	5.6	2.7			-	白色系。ナデ上げ端部不明。回線状圈線不明瞭。油煙痕。
661	SK18	陶器	中碗	呉器形		5.2			肥前	III	
662	SK18	陶器	中碗	丸形	10.4				肥前	III	
663	SK18	陶器	中碗		12.5				肥前	IV	刷毛目塗り。
664	SK18	陶器	中碗	腰折形	10.9		3.8		肥前	IV	刷毛目塗り。
665	SK18	陶器	中碗	丸形	14.1	5.7	7.4		肥前	IV	外面鉄絵。
666	SK18	陶器	大皿			12.4			肥前	-	
667	SK18	陶器			13.6				肥前	IV	銅線種。蛇ノ目釉剥ぎ。
668	SK18	陶器				5.6			京・信系	-	
669	SK18	陶器	中皿							-	
670	SK18	陶器	香炉		11.5				肥前	IV	
671	SK18	陶器	中鉢		12.2	6.0	6.2		肥前	IV	二彩。
672	SK18	陶器	香炉		12.2	5.3	6.7~6.9		布志名	-	青地釉。
673	SK18	陶器			6.6				肥前	IV	

第4章 殿町 279番地外調査(北屋敷)の概要

遺物番号	遺構名	材質	器種	器形	法量(cm)				生産地	九陶編年	備考
					口径	底径	器高	その他			
674	SK18	炻器	小瓶	ペコかん形		7.6			不明	-	
675	SK18	陶器	擂鉢	耳たぶ形	31.5				須佐	-	スリ目単位9本。
676	SK18	土器	焰焰		28.6				在地系	-	外面にスス付着。
677	SK18	土器	焰焰			8.1			在地系	-	外面にスス付着。
678	SK18	磁器	小碗	端反形	6.6				肥前	IV	18世紀前半。
679	SK18	磁器	小碗	端反形	7.0				肥前	IV	
680	SK18	磁器	中碗	平形	10.2	3.8	4.5		肥前	IV	白磁。型打陽刻。
681	SK18	磁器	中碗	丸形	11.6	4.8	5.9		肥前	III	白磁。
682	SK18	陶器	大椀	腰張形		4.9			肥前	IV	陶胎染付。
683	SK18	磁器	五寸皿	丸形底狭	13.0	4.4	4.2		肥前系	IV	波佐見。くらわんか手。
684	SK18	磁器	中皿	変形		8.2			肥前	IV	ヨンニヤク印判。
685	SK18	磁器	大皿	変形	16.4	9.5	4.3		肥前	IV	口錆あり。
686	SK18	磁器	大皿	変形		19.4			肥前	IV	
687	SK18	磁器	大鉢	浅丸形底狭	43.8				肥前	V	
688	SK18	土師器	皿(小)	在地系	9.7	6.5	1.7		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
689	SK18	土師器	皿(小)	在地系	9.4	6.2	1.7-1.9		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
690	SK18	土師器	皿(小)	在地系	10.2	7.4	1.5		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
691	SK18	土師器	皿(小)	在地系	10.0	6.4	1.7		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
692	SK18	土師器	皿(小)	在地系	10.1	6.1	1.9		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
693	SK18	土師器	皿(小)	在地系	10.0	5.1	2.2		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
694	SK18	土師器	皿(小)	在地系	10.0	5.3	2.1-2.3		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
695	SK18	土師器	皿(小)	在地系	10.3	5.2	2.4		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
696	SK18	土師器	皿(中)	在地系	13.8	8.0	2.5-2.7		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
713	SK19	陶器	中碗	丸形	11.4	4.5	6.3-6.7		不明	-	
714	第2遺構面 遺構外	陶器	小鉢			3.7			肥前	-	
715	第2遺構面 遺構外	陶器	小碗	端反形	8.1				不明	-	外面鉄絵。
716	第2遺構面 遺構外	陶器	中碗	丸形	11.2				布志名	-	青地釉。「ぼてぼて茶碗」。
717	第2遺構面 遺構外	陶器	中碗	丸形	10.2	4.4	8.4		不明	-	胴部部に玉文。高台内に墨書あり。
718	第2遺構面 遺構外	陶器	行平蓋		18.1				不明	-	
719	第2遺構面 遺構外	陶器	中皿		32.8				肥前	I-2	絵唐津。
720	第2遺構面 遺構外	磁器	中鉢		16.1	7.2	8.8		九谷	-	再興九谷。
721	第2遺構面 遺構外	陶器	大瓶	「御納戸徳利」形	4.7	11.2	24.0	胴部径16.5		-	
722	第2遺構面 遺構外	陶器	土瓶		8.0	8.2	13.0	胴部径16.7	不明	-	
723	第2遺構面 遺構外	陶器	土瓶					胴部径12.2	京・信系	-	
724	第2遺構面 遺構外	陶器			30.8				肥前	-	内面に同心円状タタキ目。
725	第2遺構面 遺構外	陶器	灯明漫皿	立鼓形・胴広	6.4	5.3	6.2	受部径9.6	不明	-	底部は回転糸切り。
726	第2遺構面 遺構外	土器	鉢		3.8	1.8	2.3		不明	-	
727	第2遺構面 遺構外	土器	焼塙蓋		6.8		1.0	外径7.0	在地系	-	
728	第2遺構面 遺構外	土器	七輪			14.0			在地系	-	
729	第2遺構面 遺構外	土器				9.6			在地系	-	
730	第2遺構面 遺構外	土器	焰焰	無耳	35.0				在地系	-	スヌ付着。
731	第2遺構面 遺構外	土器	さな	円盤形			厚1.0		在地系	-	回転糸切り。φ 1.5cmの穴4。
732	第2遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	在地系	10.9	7.3	1.9		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
733	第2遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	在地系	11.1	6.5	2.3-2.5		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
734	第2遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	在地系	11.6	6.6	2.6		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
735	第2遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	13.0	7.0	2.7		-	-	白色系。ナデ上げ端部不明。回線状圈線。
750	SG02	磁器	小皿	端反形	11.8	5.5	2.8		肥前	-	17世紀中頃。
751	SG02	土師器				6.0			-	-	白色系。底部は回転糸切り。
757	SD03	土師器	皿(中)	京都系	12.0	5.8	2.2-2.7		-	-	赤色系。ナデ上げ「ノ」字状。圈線不明瞭。油煙痕。
758	SD03	陶器	中碗	天目形	10.9				瀬戸・美濃系	-	
760	SK22	土師器	皿(中)	京都系	11.2	5.0	2.4		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。油煙痕。
761	SK22	陶器	大皿	折縁形	37.6				肥前	I-2	絵唐津。
769	SB02	陶器	小皿	折縁形	12.3	5.0	3.2		肥前	II	内面砂目跡あり。
770	SB02	陶器	中碗	天目形	12.4	5.3	7.0		肥前	II	
771	SB02	磁器	中碗						中国	-	精製。
772	SB02	陶器	大皿	折湾形	36.8				肥前	I-2	絵唐津。
773	SB02	土師器	皿(小)	在地系	10.3	7.0	2.0		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
774	SB02	土師器	皿(小)	在地系	10.8	6.4	2.4		-	-	白色系。底部は糸切り。
775	SB02	土師器	皿(中)	在地系	12.0	7.3	2.2		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
776	SB02	土師器	皿(中)	京都系	11.8	4.1	2.9		-	-	白色系。ナデ上げ不明。回線状圈線。油煙痕。
777	SB02	土師器	皿(中)	京都系	12.2	4.0	2.0-2.7		-	-	白色系。ナデ上げ端部不明。圈線なし。油煙痕。
778	SB02	土師器	皿(中)	京都系	12.3	5.3	2.5-2.9		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。油煙痕。
779	SB02	土師器	皿(中)	京都系	12.4	5.5	2.6		-	-	白色系。へそ皿。回線状圈線。油煙痕。
780	SB02	土師器	皿(中)	京都系	12.4				-	-	白色系。ナデ上げ、圈線不明。油煙痕。
781	SB02	土師器	皿(中)	京都系	12.6				-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。回線状圈線不明瞭。油煙痕。
784	SG03	陶器	大瓶			8.6			不明	-	
785	SG03	土師器	皿(中)	京都系	13.0	7.2	2.1		-	-	白色系。ナデ上げ不明。ナデによる圈線若干残る。
786	SG03	土師器	皿(大)	京都系	14.0				-	-	白色系。ナデ上げ、圈線不明。油煙痕。
790	SK23	陶器	中碗	天目形	9.9	4.1	8.3		肥前	II	
791	SK23	陶器	中碗	腰張形	11.0	4.6	8.8		肥前	II	青磁。
792	SK23	陶器	大皿	折湾形	36.8	10.4	8.6		中国	-	長石釉。
793	SK23	陶器				5.4			肥前	I-2	登窯1期。
794	SK23	陶器	手鉢				厚0.8		織部	-	取っ手部分。
795	SK23	陶器	手鉢				厚0.9-1.1		備前	-	
796	SK23	陶器	口縁部変形		18.0				備前	-	
797	SK23	陶器	火入		18.4				肥前	II	
798	SK23	陶器	瓶か壺			9.8			肥前	-	同心円タタキ目。
799	SK23	陶器			40.0				備前	-	
800	SK23	陶器	擂鉢		31.4				備前	-	スリ目単位12本。
801	SK23	磁器	小鉢		10.0				中国	-	精製。
802	SK23	磁器	中皿	折湾形	16.8				中国	-	漳州窯系。青花青海波文盤。
803	SK23	磁器			25.6				中国	-	漳州窯系。
804	SK23	土器	火入		14.4	13.2	5.3		在地系	-	三足か。油煙痕。
805	SK23	土師器	皿(中)	在地系	11.0	5.8	2.8		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
806	SK23	土師器	皿(小)	京都系	5.2	3.1	2.1		-	-	赤色系。ナデ上げ不明。圈線なし。
807	SK23	土師器	皿(小)	京都系	9.3	1.9	1.7		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。圈線なし。
808	SK23	土師器	皿(小)	京都系	9.2	2.8	1.8		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。圈線なし。油煙痕。
809	SK23	土師器	皿(中)	京都系	12.5	5.0	2.6		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。圈線不明瞭。油煙痕。
810	SK23	土師器	皿(中)	京都系	12.5	5.0	2.3-2.9		-	-	白色系。ナデ上げ逆「く」字状。ナデによる回線状圈線不明瞭。油煙痕。
811	SK23	土師器	皿(中)	京都系	12.3	6.0	2.2-2.6		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。回線状圈線。油煙痕。

遺物番号	遺構名	材質	器種	器形	法量(cm)				生産地	九陶編年	備考
					口径	底径	器高	その他			
812	SK23	土師器	皿(中)	京都系	12.6	5.3	2.6~2.8		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。圓線不明瞭。油煙痕。
813	SK23	土師器	皿(中)	京都系	12.8	5.3	2.5~3.4		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。凹線状圓線。灯芯痕。
814	SK23	土師器	皿(中)	京都系	12.1	5.4	2.4~2.7		-	-	白色系。端部不明。油煙痕。
815	SK23	土師器	皿(中)	京都系	12.6	6.0	2.3~3.0		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。凹線状圓線不明瞭。油煙痕。
816	SK23	土師器	皿(中)	京都系	12.9	5.3	2.8		-	-	白色系。ナデ上げ端部不明。ナデによる圓線明瞭。油煙痕。
817	SK23	土師器	皿(中)	京都系	13.0	5.5	2.3~2.7		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。凹線状圓線不明瞭。油煙痕。
818	SK23	土師器	皿(中)	京都系	13.1	4.9	2.4~2.6		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。凹線状圓線。灯芯痕。
819	SK23	土師器	皿(中)	京都系	12.2	5.3	2.4~2.6		-	-	白色系。炭と白色固着物。油煙痕。
820	SK23	土師器	皿(大)	京都系	14.5	6.6	2.4		-	-	白色系。ナデ上げ不明。凹線状圓線。油煙痕。
821	SK23	土師器	皿(大)	京都系	15.1	8.1	2.8~3.4		-	-	白色系。ナデ上げ「の」字状。凹線状圓線。油煙痕。
822	SK23	土師器	皿(大)	京都系	15.2	9.0	2.5~3.2		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。凹線状圓線。
823	SK23	土師器	皿(大)	京都系	15.0	8.0	2.6		-	-	白色系。ナデ上げ端部不明。凹線状圓線。
950	屋敷境溝SD01	陶器	中碗	丸形	11.4	4.9	6.9~7.3		肥前	II	
951	屋敷境溝SD01	陶器	大皿						肥前	I~2	絵唐津。
952	屋敷境溝SD01	陶器	擂鉢	口縁外帶三段	26.4				備前	-	乗岡編年近世I期C。口縁部外面にヘラ記号。
963	SK24	陶器	瓶					胴部径13.8	不明	-	
964	SK24	磁器	鉢か						中国	-	青磁。
965	SU01	土師器	皿	在地系		6.2			-	-	底部は回転糸切り。
966	SU01	土師器	皿(中)	京都系	11.7	7.2	2.4~2.6		-	-	磨減により調整不明。
967	SU01	土師器	皿(中)	京都系	11.6	4.6	3.0		-	-	ナデ上げ端部不明。工具による圓線。
969	SK25	陶器	中鉢		17.4	7.8	10.4		肥前	I	
970	SK25	磁器	小碗	腰張形		3.0			中国	-	精製。
971	SK25	陶器	中皿	折縁形	24.6	12.8	4.2		中国	-	漳州窯系。五彩。
972	SK25	土師器	皿(小)	京都系	9.8	1.1	2.3		-	-	白色系。ナデ上げ不明。圓線なし。油煙痕。
973	SK25	土師器	皿(中)	京都系	11.4	4.0	2.5		-	-	白色系。ナデ上げ不明。圓線なし。
974	SK25	土師器	皿(中)	京都系	12.0	3.5	2.3		-	-	白色系。ナデ上げ「の」字状。凹線状圓線。油煙痕。
975	SK25	土師器	皿(中)	京都系	12.7	5.2	2.1		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。圓線なし。底部外面に幅4ミリ程度の條線。油煙痕。
986	第3遺構面 遺構外	陶器	中碗	天目形	11.0	4.8	6.9		肥前	I~2	絵唐津。
987	第3遺構面 遺構外	陶器	中碗	天目形	12.1	4.6	7.5		肥前	II	
988	第3遺構面 遺構外	陶器	中碗		3.9				肥前	II	インチン掛け。
989	第3遺構面 遺構外	陶器	小鉢	変形	4.6				肥前	II	絵唐津。砂目跡あり。
990	第3遺構面 遺構外	陶器	中皿	溝縁形	12.9	4.6	3.8		肥前	II	
991	第3遺構面 遺構外	陶器	小皿		4.5				肥前	II	
992	第3遺構面 遺構外	陶器	中碗	天目形	10.4				瀬戸・美濃	-	
993	第3遺構面 遺構外	陶器	鉢						志野	-	
994	第3遺構面 遺構外	陶器		変形	22.6				志野	-	
995	第3遺構面 遺構外	磁器			7.6				中国	-	景德鎮窯系。
996	第3遺構面 遺構外	磁器	中皿	折縁形	25.8	13.0	3.8		中国	-	漳州窯系。五彩。
997	第3遺構面 遺構外	磁器	小碗	端反形	9.5				肥前	II~1	
998	第3遺構面 遺構外	陶器	小碗		11.3				肥前	II	
999	第3遺構面 遺構外	陶器	中碗		4.0				肥前	II	
1000	第3遺構面 遺構外	磁器	五寸皿	平形	14.6	5.6	2.4		肥前	-	17世紀中頃。
1001	第3遺構面 遺構外	陶器	盤		24.0	16.9	5.6		備前	-	足が付く。
1002	第3遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		30.0				備前	-	
1003	第3遺構面 遺構外	陶器	擂鉢	内折形	29.8				肥前	-	スリ目単位7本。
1004	第3遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		27.8				肥前	-	スリ目単位6本。
1005	第3遺構面 遺構外	土器	胞衣皿(大)	在地系	16.1	7.4	3.2		-	-	回転ヘラ削り。
1006	第3遺構面 遺構外	土器	胞衣皿(大)	在地系	16.1	7.6	3.7		-	-	回転ヘラ削り。
1007	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	在地系	11.6	7.1	1.9		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
1008	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	9.9	6.2	1.8		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1009	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	10.2	7.1	2.0		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
1010	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	12.4	5.0	2.6		-	-	白色系。へそ皿。凹線状圓線不明瞭。
1011	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	12.5	4.8	2.6		-	-	白色系。調整不明。
1012	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	12.2	4.8	3.0		-	-	赤色系。ナデ上げ。凹線状圓線不明瞭。油煙痕。
1013	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	12.4	4.3	2.9		-	-	赤色系。凹線状圓線。
1048	SX02	陶器	中皿	丸形	13.0	4.8	3.7		肥前	I~2	内面部土目跡。
1049	SX02	陶器	小皿	丸形		4.4			肥前	I~2	内面部土目跡。
1050	SX02	陶器	水指		15.2				肥前	-	底部外面貝目跡。内面同心円状のタキ目。
1051	SX02	陶器	中碗		3.9				志野	-	登窓1期。
1052	SX02	陶器							志野	-	
1053	SX02	土器	るっぽ		6.0				在地系	-	内面に銅成分付着。
1063	SD04	陶器	中碗	天目形	11.6				肥前	I~2	絵唐津。
1064	SD04	陶器	中碗	天目形	10.8				肥前	I~2	
1065	SD04	陶器	中碗	天目形	12.0	4.7	8.2		肥前	II	
1066	SD04	陶器	大皿		10.0				肥前	I~2	胎土目跡あり。
1067	SD04	陶器			12.2				備前	-	
1068	SD04	陶器	擂鉢	内折形	28.6				肥前	-	
1069	SD04	磁器	中碗		4.4				中国	-	漳州窯系。小野分類E群。
1070	SD04	磁器	中皿	丸形	27.6	13.8	5.0		中国	-	漳州窯系。
1071	SD04	磁器	小皿		9.0				中国	-	景德鎮窯。
1073	SD04	土師器	皿(中)	在地系	11.4	7.2	2.0		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
1074	SD04	土師器	皿(中)	在地系	11.3	7.0	2.3		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
1075	SD04	土師器	皿(小)	京都系	9.2	4.0	1.5		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。
1076	SD04	土師器	皿(中)	京都系	12.0	6.0	2.5		-	-	白色系。ナデ上げ端部不明。
1077	SD04	土師器	皿(中)	京都系	12.5	4.9	2.3~2.9		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。油煙痕。
1078	SD04	土師器	皿(中)	京都系	12.3	5.0	2.3~2.8		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。油煙痕。
1079	SD04	土師器	皿(中)	京都系	12.5	4.9	2.4~2.7		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。
1080	SD04	土師器	皿(中)	京都系	11.9	4.5	2.3~2.8		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。油煙痕。
1081	SD04	土師器	皿(中)	京都系	12.0	4.8	2.7		-	-	白色系。ナデ上げ端部不明。
1082	SD04	土師器	皿(中)	京都系	13.8	7.0	2.8		-	-	白色系。ナデ上げ端部不明。
1083	SD04	土師器	皿(中)	京都系	12.3	4.4	2.8		-	-	赤色系。ナデ上げ「2」字状。油煙痕。
1084	SD04	土師器	皿(大)	京都系	16.3				-	-	白色系。
1087	SD05	陶器	大鉢		30.2	18.4	9.9		肥前	I~2	底部外面貝目跡あり。
1089	SD07	陶器	中碗	筒丸形	11.0				肥前	-	
1090	SD07	土師器	皿(中)	京都系	11.5	4.2	2.6		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。圓線不明。油煙痕。
1091	SD07	土師器	皿(中)	京都系	12.3	4.3	2.3		-	-	白色系。ナデ上げ、圓線不明。油煙痕。
1092	SD07	土師器	皿(中)	京都系	12.5	4.2	2.3		-	-	白色系。ナデ上げ端部不明。凹線状圓線。
1093	SD07	土師器	皿(中)	京都系	13.1	4.6	2.5~2.7		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。凹線状圓線。油煙痕。
1094	SD07	土師器	皿(中)	京都系	12.4	5.0			-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。凹線状圓線不明瞭。油煙痕。

第4章 殿町 279番地外調査(北屋敷)の概要

遺物番号	遺構名	材質	器種	器形	法量(cm)				生産地	九陶編年	備考
					口径	底径	器高	その他			
1095	SD07	土師器	皿(中)	京都系	12.6	4.0	2.7		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。圓線不明瞭。
1097	SK26	陶器	中碗	半筒形	11.4	5.0	8.6		肥前	II	
1098	SK26	陶器	中碗	轆轤形	10.4	4.8	7.1		肥前	II	
1099	SK26	陶器	中瓶						上野・高取	-	
1100	SK26	陶器	大皿			10.5			肥前	I-2	
1101	SK26	磁器	大皿	折縁形	25.8	12.4			中国	-	漳州窯系。五彩。
1102	SK26	土師器	皿(小)	在地系	10.0	6.2	2.1		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
1103	SK26	土師器	皿(中)	在地系	11.0	7.2	1.8		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
1104	SK26	土師器	皿(中)	在地系	11.0	7.2	1.8-2.1		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1105	SK26	土師器	皿(小)	京都系	9.1	3.2	2.0		-	-	白色系。ナデ上げ「1」字状。回線状圓線。油煙痕。
1106	SK26	土師器	皿(中)	京都系	12.0	4.0	2.2-2.9		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。
1107	SK26	土師器	皿(中)	京都系	12.0	4.4	2.4-3.0		-	-	白色系。ナデ上げ「1」字状。回線状圓線。油煙痕。
1108	SK26	土師器	皿(中)	京都系	12.4	3.4	2.4-2.8		-	-	白色系。ナデ上げ不明。油煙痕。
1109	SK26	土師器	皿(中)	京都系	12.9	5.8	2.3-2.6		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。油煙痕。
1110	SK26	土師器	皿(中)	京都系	13.2	5.6	2.7		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。油煙痕。
1111	SK26	土師器	皿(大)	京都系	15.3	9.0	1.6-2.7		-	-	白色系。ナデ上げ不明。回線状圓線。
1121	SK27	陶器	小碗	丸形	7.6	3.8	3.7		肥前	-	底部は回転糸切り。
1122	SK27	陶器	中碗	筒丸形		4.2			肥前	II	高台砂付着。
1123	SK27	土師器		在地系		6.8			-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
1124	SK27	土師器	皿(中)	京都系	11.0	4.0	2.8		-	-	白色系。ナデ上げ不明。圓線なし。油煙痕。
1125	SK27	土師器	皿(中)	京都系	12.5	6.0	2.5		-	-	白色系。ナデ上げ不明。回線状圓線不明瞭。油煙痕。
1126	SK27	土師器	皿(中)	京都系	12.5	5.0	2.6-2.8		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。回線状圓線不明瞭。油煙痕。
1127	SK27	土師器	皿(中)	京都系	13.0				-	-	白色系。ナデ上げ不明。圓線なし。油煙痕。
1128	SK27	土師器	皿(大)	京都系	15.0	9.0	2.5		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。回線状圓線。
1139	SK28	陶器	中碗	端反形	10.3	3.8	6.5		肥前	I-2	
1140	SK28	土師器	皿(中)	京都系	11.3	4.7	2.0-2.6		-	-	白色系。へそ皿。ナデ上げ端部不明。
1141	SK28	土師器	皿(中)	京都系	12.8	6.4	2.8		-	-	白色系。ナデ上げ「2」字状。回線状圓線。
1159	SK29	陶器	小碗	丸形	7.8				肥前	I-2	
1160	SK30	陶器	中碗	天目形	12.0				瀬戸・美濃	-	大窯4期前半。
1161	SK31	磁器	中皿	端反形	16.7	10.0	3.8		中国	-	白磁皿小野分類C群か。
1162	SD08	陶器	擂鉢						肥前系	-	スリ目単位14本。内面貝目跡。
1168	SK37	陶器	小鉢	変形丸ぶり口	9.4				肥前	I-2	
1169	SK37	土師器	皿	在地系		5.2			-	-	赤色系。油煙痕。
1170	SK37	土師器	皿(小)	京都系	8.2	2.0	2.5		-	-	白色系。ナデ上げ端部不明。
1172	第4遺構面 遺構外	陶器	小碗	丸形	7.4	3.5	3.9		肥前	I-2	
1173	第4遺構面 遺構外	陶器	中碗	腰折形	9.5	4.6	8.0		肥前	-	
1174	第4遺構面 遺構外	陶器	中碗	腰折形	12.4	5.4	7.2		肥前	II	
1175	第4遺構面 遺構外	陶器	中碗	天目形	10.2				肥前	II	イッヂ掛け。
1176	第4遺構面 遺構外	陶器	中碗						瀬戸・美濃	-	
1177	第4遺構面 遺構外	陶器	中碗						肥前	II	初期伊万里の可能性あり。
1178	第4遺構面 遺構外	陶器	中碗	平碗形	11.0				肥前	II	上野・高取系か。
1179	第4遺構面 遺構外	陶器	小碗	丸形	7.8				志野	-	大窯4期後半。
1180	第4遺構面 遺構外	陶器	中碗	杏形か腰折形	12.4				織部	-	
1181	第4遺構面 遺構外	陶器	中碗	腰折形	3.3				織部	-	
1182	第4遺構面 遺構外	陶器	小皿	丸形	12.4	4.6	3.0-3.5		肥前	I-2	胎土目跡あり。
1183	第4遺構面 遺構外	陶器	小皿	丸形	11.6				肥前	I-2	胎土目跡あり。
1184	第4遺構面 遺構外	陶器	小皿	丸形	11.4	4.3	3.2		肥前	I-2	胎土目跡あり。
1185	第4遺構面 遺構外	陶器	中皿	折湾形	12.2	4.5	3.7		肥前	I-2	胎土目跡あり。
1186	第4遺構面 遺構外	陶器	小皿	折縁形	13.3	4.1	3.5		肥前	II	砂目跡あり。
1187	第4遺構面 遺構外	陶器	中皿	溝縁形	13.7	4.5	4.5		肥前	II	砂目跡あり。
1188	第4遺構面 遺構外	陶器			4.4			頸部径4.5	肥前	-	
1189	第4遺構面 遺構外	陶器	鉢		2.5×9.3			厚1.4	不明	-	取っ手。
1190	第4遺構面 遺構外	陶器	大皿	折縁形	29.6				肥前	I-2	絵唐津。
1191	第4遺構面 遺構外	陶器	大皿		31.6	9.6	7.8		肥前	I-2	絵唐津。漆緋ぎ痕。
1192	第4遺構面 遺構外	陶器	大皿			12.0			肥前	I-2	
1193	第4遺構面 遺構外	陶器	大皿	折縁形	36.8	11.8	9.5		肥前	I-2	砂岩目跡あり。
1194	第4遺構面 遺構外	陶器	壺蓋		かえり径8.8	外径11.8	3.1	つまみ径2.0	肥前	-	
1195	第4遺構面 遺構外	陶器	水注蓋		10.7	3.0	1.0		肥前	I-2	絵唐津。
1196	第4遺構面 遺構外	陶器	大甕						備前	-	
1197	第4遺構面 遺構外	陶器	擂鉢	口縁外帯三段	24.4				備前	-	
1198	第4遺構面 遺構外	陶器	擂鉢			11.0			肥前	-	スリ目単位9本。
1199	第4遺構面 遺構外	陶器	擂鉢						肥前	-	スリ目単位9本。
1200	第4遺構面 遺構外	陶器	擂鉢	口縁外帯三段	32.2				不明	-	スリ目単位5本。
1201	第4遺構面 遺構外	陶器	大鉢		34.8				備前	-	
1202	第4遺構面 遺構外	陶器	捏鉢		42.4	21.8	7.1		備前	-	
1203	第4遺構面 遺構外	磁器	中碗	丸形	7.2				中国	-	精製。
1204	第4遺構面 遺構外	磁器	大碗	丸形	13.0				中国	-	小野分類染付碗F群。
1205	第4遺構面 遺構外	磁器	中碗	丸形	13.6				中国	-	精製。
1206	第4遺構面 遺構外	磁器	中碗	端反形	11.5	4.3	5.3		中国	-	精製。
1207	第4遺構面 遺構外	磁器	小鉢	勺干形	11.0				中国	-	景德鎮窯。
1208	第4遺構面 遺構外	磁器	小鉢		10.8				中国	-	景德鎮窯。
1209	第4遺構面 遺構外	磁器	中碗			4.3			中国	-	景德鎮窯。
1210	第4遺構面 遺構外	磁器	中皿	端反形	18.4				中国	-	景德鎮窯。
1211	第4遺構面 遺構外	瓦質			6.6		1.6		在地系	-	突起部分はヘラで削り出す。
1212	第4遺構面 遺構外	土師器	皿(大)	京都系	14.8	6.9	2.5-2.7		-	-	白色系。回線状圓線。
1213	第4遺構面 遺構外	土師器	皿(大)	京都系	19.0	11.0	3.0		-	-	白色系。ナデ上げ不明。

表9 殿町279番地外（北屋敷）金属製品遺物觀察表

遺物番号	遺構名	種類	材質	法量		備考
				大きさ(cm)	重量(g)	
259	SK01	釘	鉄	長1.15/幅0.25/厚0.2	2.68	
260	SK01	釘	鉄	長2.3/幅(頭部)0.6/厚0.2	4.38	
261	SK01	釘	鉄	長1.9/幅0.2/厚0.15	1.75	
262	SK01	釘	鉄	長1.9/幅0.2/厚0.15	2.70	
263	SK01	釘	鉄	長3.2/幅0.15/厚0.15	3.35	
264	SK01	釘	鉄	長4.5/幅(頭部)1.05/厚0.3	9.06	
270	SE02	蓋	真鍮	かえり径8.0/外径10.0/高2.0/厚0.35	88.75	中央につまみ(釘状)。空気抜きのφ0.3cmの穿孔。
271	SE02	不明	鉄	長28.5/幅10.0/厚1.0	271.92	
295	SK02	飾具	銅	φ8.4/高2.0/厚0.05	35.96	中央に錫あり。
296	SK02	古錢	銅錢	厚1.28mm	3.38	寛永通宝 1期=古寛永(1636~59)
297	SK02	煙管(雁首)	真鍮	長6.9/火皿φ1.5/小口φ0.95	12.68	
		煙管(吸口)	真鍮	長6.9/小口φ0.95/口付φ0.3	8.24	
		煙管(羅字)		長8.7(復元推定長9.7)	1.28	
414	SK03	古錢	銅錢	厚1.31~1.37mm	8.14	寛永通宝 2期=(文錢) 文の字が見える2枚重なる。
415	SK03	古錢	銅錢	厚1.17mm	3.51	寛永通宝 1期=古寛永(1636~59)
416	SK03	古錢	銅錢	厚1.08mm	3.11	寛永通宝
417	SK03	古錢	銅錢	厚0.8mm/14.1mm	13.85	
418	SK03	煙管(雁首)	真鍮	長7.1/火皿φ1.85/小口φ1.1	7.7	
419	SK03	不明	鉄	φ3.8/厚0.9	16.07	
420	SK03	釘	鉄	長6.5/幅(頭部)0.9/(胴部)0.4/厚0.3	8.28	
421	SK03	釘	鉄	長6.7/幅0.4/厚0.2	6.78	
422	SK03	釘	鉄	長5.15/幅0.35/厚0.2	8.52	
423	SK03	釘	鉄	長4.55/幅0.5/厚0.3	11.96	
424	SK03	釘	鉄	長4.0/幅0.5/厚0.4	10.66	
425	SK03	釘	鉄	長4.4/幅0.45/厚0.3	4.53	
426	SK03	釘	鉄	長4.3/幅(頭部)0.65/(胴部)0.4/厚0.2	3.23	
427	SK03	釘	鉄	長2.8/幅(頭部)0.65/(胴部)0.25/厚0.2	2.91	
535	SK07	包丁か	鉄	長15.4/幅3.8/厚0.4	110.43	
536	SK07	釘	鉄	長5.4/幅0.5/厚0.4	9.59	
537	SK07	古錢	銅錢	厚1.34mm	2.97	寛永通宝 1期=古寛永(1636~1659)
654	第1遺構面 遺構外	鉄球	鉄	φ6.5(鏽ふくれ含7.7)	830.00	
656	第1遺構面 遺構外	古錢	銅錢	厚1.28mm	2.51	寛永通宝 1期=古寛永(1636~1659)
738	第2遺構面 遺構外	釘	鉄	長3.6/幅(頭部)1.0/(胴部)0.6	5.09	
739	第2遺構面 遺構外	不明	鉛	長2.5/幅0.6/厚0.5	7.70	耳環に類似。
824	SK23	釘	鉄	長5.8/幅(頭部)1.2/厚0.7	4.34	
825	SK23	釘	鉄	長5.6/幅0.8/厚0.7	3.05	
826	SK23	釘	鉄	長4.4/幅0.6/厚0.4	1.91	
827	SK23	釘	鉄	長3.6/幅0.6/厚0.5	4.94	
828	SK23	釘	鉄	長2.1/幅0.1/厚0.1	0.54	
829	SK23	釘	鉄	長4.3/幅(頭部)1.0/(胴部)0.6/厚0.3	3.13	
830	SK23	釘	鉄	長5.8/厚0.3	2.21	
831	SK23	釘	鉄	長3.6/幅0.3/厚0.3	1.53	
832	SK23	釘	鉄	長3.9/幅0.4/厚0.3	2.05	
833	SK23	不明	銅	長3.8/幅1.2/厚0.5, 材厚0.04	4.76	
834	SK23	鋳造品	鉄	長3.6/幅5.3/厚0.5	28.51	
835	SK23	煙管(雁首)	銅	長4.4/火皿φ1.3/小口φ0.5	4.35	錫少量あり。
836	SK23	煙管(吸口)	銅	長4.8/小口φ0.8/口付φ0.2	2.34	
837	SK23	煙管(吸口)	真鍮	長5.3/小口φ0.95/口付φ0.2	3.98	
838	SK23	煙管(吸口)	真鍮	長4.4/小口φ0.9/口付φ0.45	2.46	
839	SK23	不明	鉄	長6.2/幅0.8/厚0.8/材厚0.08	18.42	
840	SK23	古錢	銅錢	厚0.9mm	2.34	
841	SK23	古錢	銅錢	厚1.16mm	1.75	開元通宝 唐621年
976	SK25	酒壜器	銅	φ16.0(注口含20.0)/厚1.0	71.77	内面に黒漆を塗る。
977	SK25	釘	鉄	長5.1/幅(頭部)0.75/(胴部)0.45/厚0.3	3.22	
1017	第3遺構面 遺構外	古錢	銅錢	厚0.81mm	1.97	祥符元宝 北宋1009年
1018	第3遺構面 遺構外	古錢	銅錢	厚1.38mm	2.89	元豐通宝 北宋1078年
1021	第3遺構面 遺構外	煙管(雁首)	銅	長4.6/火皿φ1.5/小口φ0.55	7.15	本体は銅。飾り部分は真鍮に錫が入る。
1022	第3遺構面 遺構外	水滴	銅	長4.2/幅3.0/高2.15	36.35	
1023	第3遺構面 遺構外	円盤状	鉄	φ3.5/厚0.6	25.17	
1024	第3遺構面 遺構外	釘	鉄	長4.3/幅(頭部)1.0/(胴部)0.4/厚0.3	4.57	
1055	SX02	古錢	銅錢	厚1.33mm	1.93	□元通宝
1056	SX02	古錢	銅錢	厚0.81mm	1.40	
1057	SX02	古錢	銅錢	厚1.02mm	1.55	
1088	SD05	不明	鉄	長12.5/幅2.1/胴部1.3	58.36	
1112	SK26	鎚	鉄	長6.6/幅1.2/厚0.4	13.31	
1113	SK26	鎚	鉄	長9.4/幅1.2/厚0.45	23.72	
1129	SK27	不明	銅	長15.6/幅0.8/厚0.6	4.76	金メッキあり。
1163	SK32	煙管か	真鍮	長10.0/幅0.6	4.50	
1164	SK33	飾り物	銅	長5.65/幅1.1/厚0.01	1.26	
1166	SK35	古錢	銅錢	厚1.06mm	1.58	
1171	SK38	釘	鉄	長9.55/幅(頭部)0.9/(胴部)0.6/厚0.3	8.05	
1214	第4遺構面 遺構外	釘	鉄	長8.2/幅(頭部)0.9/厚0.45	5.18	
1215	第4遺構面 遺構外	釘	鉄	長9.5/幅0.6/厚0.5	13.93	
1216	第4遺構面 遺構外	切羽	鉄・銅	長3.9/幅2.4/厚0.07	5.26	鉄・銅の合金か。金メッキ施す。
1217	第4遺構面 遺構外	切羽	鉄・銅	長3.9/幅2.4/厚0.06	5.14	鉄・銅の合金か。金メッキ施す。
1218	第4遺構面 遺構外	煙管(雁首)	真鍮	長3.85/火皿φ1.5/小口φ0.7	2.98	
1219	第4遺構面 遺構外	小刀の鞘か	銅	長9.7/幅1.3/厚0.4/材厚0.05	13.00	
1220	第4遺構面 遺構外	水滴	銅	長3.1/幅5.1/厚0.1/高1.8	19.36	
1221	第4遺構面 遺構外	水滴	銅	長4.9/幅3.1/厚0.06	6.50	
1226	第4遺構面 遺構外	古錢	銅錢	厚1.35mm	2.24	聖宋元宝 北宋1101年
1227	第4遺構面 遺構外	古錢	銅錢	厚1.02mm	2.03	元豐通宝 北宋1078年
1228	第4遺構面 遺構外	古錢	銅錢	厚1.25mm	2.67	大觀通宝 北宋1107年
1229	第4遺構面 遺構外	古錢	銅錢	厚1.17mm	2.67	永樂通宝 明錢1408年

第4章 殿町279番地外調査(北屋敷)の概要

表10 殿町279番地外(北屋敷) 石製品遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	材質	法量		備考
				大きさ(cm)		
410	SK03	硯		縦13.4/横7.4/厚2.3	360.92	外面に黒色の塗り。
411	SK03	砥石		長5.7/幅3.0/厚0.8	22.79	仕上げ砥。
412	SK03	砥石		長5.6/幅4.1/厚1.2	29.97	仕上げ砥。
413	SK03	狐石造物	来待石	高6.7-20.3/幅11.6-11.9/厚8.5/奥行15.7	1728.00	脚部欠損。
512	SK04	墨		長4.1/幅1.6/厚0.95		512~516は同一個体。
513	SK04	墨		長3.9/幅1.75/厚1.0		512~516は同一個体。
514	SK04	墨		長3.9/幅1.6/厚1.0		512~516は同一個体。
515	SK04	墨		長3.65/幅2.9/厚0.55		512~516は同一個体。篆書「鶴川糸泉」の陽刻。
516	SK04	墨		長3.4/幅1.85/厚0.65		512~516は同一個体。
540	SK10	碁石		Φ2.5/厚0.9	8.48	白石。
650	第1遺構面 遺構外	碁石		縦5.5/横2.6/厚0.6	16.04	仕上げ砥。
651	第1遺構面 遺構外	碁石		Φ2.3/厚0.4	4.14	黒石。
652	第1遺構面 遺構外	碁石		Φ3.0-2.6/厚1.1	13.89	黒石。
653	第1遺構面 遺構外	碁石		Φ3.0-2.7/厚1.5	15.94	白石。
697	SK18	硯	貢岩か	長4.7/幅6.3/厚1.2	22.41	台部欠損。
698	SK18	砥石		長4.3/幅3.4/厚0.4	7.50	仕上げ砥。
736	第2遺構面 遺構外	碁石		Φ2.2/厚0.5	4.15	黒石。
737	第2遺構面 遺構外	火打石	赤めのう	長6.5/幅4.9/厚2.6	77.86	
752	SG02	石		長17.0/幅7.8/厚5.0	400.00	「おつる」「三久郎」、「○×」の墨書あり。
753	SG02	石		長17.0/幅8.4/厚2.8	810.00	「三久郎」の墨書あり。
764	SK22	碁石		Φ2.2/厚	1.94	白石。
1019	第3遺構面 遺構外	碁石		Φ2.0/厚0.45	2.78	黒石。
1020	第3遺構面 遺構外	硯		長4.2/幅2.3/厚0.85	12.43	
1072	SD04	火打石	青めのう	長3.1/幅3.6/厚2.4	31.48	
1165	SK34	碁石		Φ2.2-2.5/厚0.8	7.28	黒石。
1222	第4遺構面 遺構外	砥石		長8.0/幅4.4/厚4.1	247.63	中砥。
1223	第4遺構面 遺構外	砥石		長6.3/幅3.5/厚1.3	45.11	仕上げ砥。

表11 殿町279番地外(北屋敷) 木簡遺物観察表

*読みの表記は表裏の区別、○は解読不明の文字、/は改行を表す。

遺物番号	遺構名	読み	法量(cm)			木取り	備考
			長さ	幅	厚さ		
428	SK03	・伝印 大工長次	10.1	5.4	0.7	柾目	上端・下端は平らにカット。両面とも同じ内容の墨書。
429		・庄三郎 大工文助 文乃助事 ・庄三郎 大工庄文 文乃助事					
430	SK03	・大工弥市	8.6	6.3	0.8	柾目	上端・下端は平らにカット。片面のみ墨書。
431		・日雇才次郎					
432	SK03	・大工長○	9.8	4.7	0.5	板目	上端・下端は平らにカット。片面のみ墨書。
433							
434	SK03	・上右	11.5	19.8	1.2	柾目	下端欠損。片面のみ墨書。
435		・大尺カ 一/五寸 五/九寸 三					
436	SK03	・本柱 一 杉老/内〇〇所 一 同老/下柱 一 同一/O ○ ○同○	5.4	17.0	0.8	柾目	左端・下端欠損。片面解読不能。
437		・生馬村 良院					
438	SK03	・五間入	15.2	7.6	1.2	板目	上端欠損。片面のみ墨書。
439							
440	SK03	・末次北堀本郷〇〇〇〇/末治町 ・を/二/三	75.0	5.7	0.7	板目	両面墨書。
700		・一 十八通、一 十二通、一 十六通/三口〆 参拾六通					
701	SK18	・遊〇花〇〇 ・上	13.1	2.5	0.6	柾目	両端欠損。両面墨書。
702		・御定 松次郎					
847	SK23	・佐々九郎兵衛	14.2	2.9	0.4	板目	上端欠損。両面墨書。片面解読不能。
848		・佐々九郎兵衛 ・さゝ九郎兵衛					
849	SK23	・佐	4.7	2.5	0.2	板目	上端・下端欠損。両面墨書。片面解読不能。
850		・さゝ九郎兵衛 河村長三郎					
851	SK23	・乙部?	8.9	2.2	0.3	柾目	上部に切り込み。左端・下端欠損。片面解読不能。
852		・孫衛門					
853	SK23	・九ろう	6.4	1.8	0.3	柾目	両端・下端欠損。両面墨書。片面解読不能。
854		・善五郎					
855	SK23	・五郎衛門	11.3	1.7	0.4	板目	上部尖らせる。両面墨書。片面解読不能。
856		・乃木/角兵へ ・みそかうの物					

857	SK23	・古田助左衛門様之内 松本八左衛門殿(有田か)左兵衛へ ・大豆四拾俵ノ内 濱田より	19.3	2.9	0.5	柾目	上部に切り込み。下端やや尖らせる。両面墨書。
858	SK23	・○○四拾俵内(物か) 田樟(橋か)八 ・松○○左衛門津田殿	19.4	2.8	0.4	柾目	上部に切り込み。下端は平らにカットする。両面墨書。
859	SK23	・四拾俵ノ内 ・衛門	8.9	2.8	0.3	柾目	上端・下端欠損。両面墨書。
860	SK23	・六升入 ・○月十五日	14.2	2.4	0.5	柾目	両面墨書。
861	SK23	・丑ノ米四	16.5	2.7	0.5	板目	上部に切り込み。下端欠損。両面墨書。片面解読不能。
862	SK23	・四斗一升入中○○○(門か) ・九月十二日	19.4	2.3	0.6	柾目	両面墨書。
863	SK23	・三斗八升申米	18.9	3.2	0.5	柾目	下端は尖らせる。片面のみ墨書。
864	SK23	・様之内 本八左衛門殿 有田左兵衛へ ・拾俵ノ内 濱田方より	13.6	2.4	0.4	柾目	上部欠損。両面墨書。
865	SK23	・四拾俵數○	11.9	3.1	0.3	柾目	上端・下端欠損。片面解読不能。
866	SK23	・永	13.4	3.0	0.4	柾目	上部斜めにカット。片面解読不能。
867	SK23		2.8	2.4	0.4	板目	上端・下端欠損。解読不能。
868	SK23		6.4	1.4	0.1	柾目	片面のみ墨書。
869	SK23	・中左衛門	7.6	2.7	0.7	板目	下端欠損。片面のみ墨書。
870	SK23	・新(斯か)右衛門	8.5	1.8	0.3	板目	上端・下端欠損。片面解読不能。
871	SK23		8.0	1.7	0.4	板目	上端・下端欠損。両面解読不能。
872	SK23	・極月十四日 ・大万八	19.3	2.4	0.5	柾目	右端・下端欠損。両面墨書。
873	SK23	・さんのせし殿 九郎右	14.4	2.0	0.1	柾目	右端・下端欠損。片面のみ墨書。
874	SK23	・弥一 ・切	6.1	2.2	0.3	板目	下端欠損。両面墨書。
875	SK23		2.1	9.2	0.2	柾目	全面欠損か。解読不能。
876	SK23	・ん/頃/さ/為/与/そ	2.2	15.5	0.2	柾目	左端欠損。右端斜めにカット。
877	SK23	・無足	11.3	1.8	0.2	板目	上部に切り込み。右端・下端欠損。片面解読不能。
878	SK23	・大豆四	11.0	1.9	0.3	板目	上部に切り込み。右端・下端欠損。片面解読不能。
879	SK23	・こま	13.1	1.1	0.8	柾目	上部に切り込み。右端・下端欠損。片面解読不能。
880	SK23		19.5	2.4	0.5	板目	下端欠損。両面解読不能。
881	SK23	・大豆三俵之内	12.3	1.7	0.4	板目	上部に切り込み。片面のみ墨書。
882	SK23	・○に ・一人	11.5	3.0	0.2	柾目	上部に切り込み。右端・下端欠損。両面墨書。
883	SK23		9.9	2.0	0.4	板目	上端・下端欠損。片面のみ墨書。解読不能。
884	SK23		4.3	0.8	0.2	柾目	上端・下端欠損。片面のみ墨書。解読不能。
885	SK23		4.5	1.4	0.2	柾目	全面欠損か。解読不能。
886	SK23	・有	2.4	12.6	0.3	柾目	上端・下端欠損。片面解読不能。
887	SK23	・亥	2.9	5.4	0.3	柾目	右端・左端欠損。片面のみ墨書。
888	SK23	・次	1.0	3.8	0.2	柾目	片面のみ墨書。
933	SK23		8.7	1.6	0.1	柾目	両面とも墨書なし。
979	SK25	・堅奉	19.6	2.6	0.2	柾目	右端・左端欠損。片面墨書解読不能。
1014		・九郎兵衛	27.1	4.1	0.4	柾目	中央部に目釘穴1。上部に切り込み。下端は尖らせる。
1015		・古田助左衛門様之内 松本八左衛門殿 有田左兵衛へ ・大豆四拾俵ノ内 濱田より	19.3	2.8	0.6	柾目	上部に切り込み。下端やや尖らせる。両面墨書。
1016		・賣	7.8	1.3	0.3	板目	上部に切り込み。下端欠損。片面のみ墨書。
1096	SD07	・四月十七日	10.1	2.9	0.7	柾目	上端・下端欠損。片面のみ墨書。
1130	SK27	・戊霜月十	6.2	2.4	0.2	柾目	上端・下端欠損。片面解読不能。
1142	SK28	・御○み	17.6	5.0	0.2	柾目	片面のみ墨書。
1224		・春/吉	23.4	3.0	0.7	柾目	下端欠損。片面解読不能。
1225		・九右〇〇	7.7	2.3	0.2	板目	上端・下端欠損。両面とも同じ内容か。

表12 殿町279番地外(北屋敷)木製品遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	名称 部位	法量(cm)				木取り	備考
				長さ(口径)	幅	高さ(器高)	その他		
272	SE03	桶	側板	116.7	14.4		厚2.0	柾目	下端両側面に方形目釘1ずつ。下方・中央にタガ痕。
273	SE03	桶	側板	115.5	14.1		厚2.1	柾目	下端両側面に方形目釘穴1ずつ。中央にタガ痕。
274	SE03	桶	側板	105.7	12.2		厚2.3	柾目	下端片側面に方形目釘穴1。
275	SE03	桶	側板	110.5	13.4		厚2.1	柾目	下端両側面に方形目釘穴1。
276	SE03	桶	側板	109.4	13.5		厚2.2	柾目	下端両側面に方形目釘穴1。
277	SE03	桶	側板	113.0	15.0		厚2.4	柾目	下端両側面に目釘1、方形目釘穴1。下方・中央にタガ痕。
278	SE03	桶	側板	117.3	13.6		厚2.4	柾目	下端両側面に方形目釘1、目釘穴1。下方・中央にタガ痕。
298	SK02	刷毛		14.4	2.4-7.2		厚0.8	柾目	片面中央に「柾」が彫られる。柄部に穿孔1。刷毛部に溝1、目釘穴4。刷毛部を割って毛を挟む構造。
299	SK02	舟形木製品	板状底板か	16.1	3.8		厚0.3	柾目	櫓受・帆穴あり。船尾部両側に目釘穴2。
300	SK02	曲物	底板	Φ8.8	3.7		厚0.5	柾目	
301	SK02	曲物	底板	Φ10.3			厚0.7	柾目	
302	SK02	箸		22.2			厚0.6		
303	SK02	箸		22.3			厚0.5		
304	SK02	不明		Φ7.8		13.9			竹の筋を抜いて貫通させた製品。
305	SK02	部材		8.8	4.8		厚1.2	板目	隅丸形。長辺側面に目釘2。
441	SK03	桶か樽	蓋板か底板	17.8	8.9		厚0.8	追柾目	両面に墨書きあり。まじないに使用した物か。
442	SK03	漆椀		12.5					内:赤/外:黒。壺椀に類似した形状を呈する。
443	SK03	漆椀		11.0	5.8				内:赤/外:黒。外面に銀文。底面高台脇に漆溜り。
444	SK03	下駄	角型刺り下駄	24.2	8.4	3.7	厚1.5		歯高2.3cm。歯の磨り減り頗著。
445	SK03	下駄	角型刺り下駄	23.9	8.6	3.9	厚1.6		歯高2.6cm。歯の磨り減り頗著。
446	SK03	下駄	歯	7.3-8.9	8.8-11.7		厚1.2	柾目	ホゾなし。歯底面に砂付着。
447	SK03	下駄	歯	9.6-10.0	7.8-13.0		厚1.2	柾目	ホゾなし。歯底面に砂付着。
448	SK03	杓子		11.8	5.8		厚0.4	柾目	表裏:黒。身部が緩く湾曲する。
449	SK03	曲物	底板	Φ11.5			厚1.0	柾目	片面にホゾ溝。ホゾ溝に目釘穴1。
450	SK03	曲物	底板	Φ10.7	4.8		厚1.1	柾目	縁に段あり。側面に目釘2。
451	SK03	桶か樽	蓋板	17.5	6.9		厚1.6	板目	裏・側面:柿渋。中央に穿孔2。
452	SK03	栓(円柱状)		4.4			Φ1.2-2.6	柾目	
453	SK03	柄		11.7	3.1		厚2.4	柾目	片端面に蓋穴。側面に「木」が彫られる。
454	SK03	刷毛		14.3	1.6-12.2		厚0.8	板目	表裏:柿渋。柄部に穿孔1。刷毛部に溝3、溝に糸を通す目釘穴多數。刷毛部を割って毛を挟む構造。
455	SK03	不明		22.5			Φ5.0		竹の筋が抜かれていない。
456	SK03	茶筅か		17.1			Φ2.9		
457	SK03	扇子		6.6-22.7	0.4-0.6		厚0.1-0.3		下部にバーツを繋げる為のΦ0.2cmの穿孔。下部から11.8cmの位置より銀彩が施される。
458	SK03	不明		19.7	2.6		厚1.4		
459	SK03	不明		16.8	3.5		厚3.2	柾目	ホゾ溝。
460	SK03	不明		23.4	2.8		厚2.7	板目	ホゾ溝。
461	SK03	柄		24.5	2.3		厚1.6	柾目	片端面に蓋穴。
462	SK03	不明		14.3	5.3		厚1.4	柾目	半円状の抉り加工。左右に釘穴2。
463	SK03	不明		6.0	4.5		厚1.7	柾目	長方形の抉り加工。
464	SK03	箸		8.7			Φ0.5		全面:赤漆。
465	SK03	箸		3.7			Φ0.3	柾目	全面:赤漆。
466	SK03	不明		8.1	3.0		厚2.0	柾目	下部を窪ませる加工。
467	SK03	不明		42.9	4.6		厚5.1	柾目	片側面加工。
468	SK03	箱物	側板	47.2	17.2		厚0.9	柾目	両ホゾ面に目釘穴2。面下部に目釘1。
497	SK04	外箱	蓋	30.0	29.6	2.9		柾目	表面に墨書きあり。「明治三庚午年六月八日/亥ノ上刻誕生女子胞衣」各面目釘5ずつで蓋の側板を固定。
498	SK04	外箱	身	30.0	29.6	17.1		柾目	底面目釘5ずつで側板を固定。側板同士も目釘で固定。蓋と身を飾り金具で繋ぐ構造。
499	SK04	内箱	蓋	27.0	27.0	2.7		柾目	表面に「葵の御紋」。墨と金で手描きされたもの。各面目釘5ずつで蓋の側板を固定。
500	SK04	内箱	身	27.0	27.0	14.5		柾目	底面目釘5ずつで側板を固定。側板同士も目釘で固定。
501	SK04	曲物容器	蓋	Φ22.3		3.0		柾目	表面に「葵の御紋」。墨と金で手描きされたもの。稻穂を輪状に結んで置いた痕跡。
502	SK04	曲物容器	身	Φ22.3		11.3		柾目	側面にタガ痕10。
503	SK04	羽子板		24.0	9.3		厚0.5	柾目	片面に墨書きあり。「宝珠文」。
504	SK04	刀状木製品		21.3	1.4-1.6		厚0.4-0.5		竹製品。
505	SK04	筆		18.2			Φ0.6		竹製品。毛は残存せず。
506	SK04	クリ堅果		2.4	2.1				
507	SK04	クリ堅果		2.7	2.5				
508	SK04	ムクロジ種子					Φ1.5		羽を装着する為の穿孔。羽根つきの玉か。
509	SK04	サンショウの枝		6.2			厚0.2		
510	SK04	サンショウの枝		4.9			厚0.2		
511	SK04	サンショウの枝		3.8			厚0.2		
530	SK06	下駄	丸型差込下駄	20.9	8.2		厚2.5		全面:柿渋か。ホゾ穴前後1ずつ。前方に鼻緒残存。前歯に補修孔2。指の痕跡あり。
531	SK06	漆椀							内:赤/外:黒。赤絵で格子目模様。
569	SK16	漆椀	蓋	11.6		2.9			内外:赤。赤地に赤絵で模様が描かれる(身と一体の模様か)。高台端部内側に金が塗られ、漆塗の工程がわかるもの。
570	SK16	羽子板		26.6	6.6		厚0.5	柾目	墨で絵を描く。
571	SK16	樽	蓋板	32.5	8.5		厚1.9	板目	中央にΦ2.4cmの穿孔1、Φ0.4cmの穿孔5。断面に目釘4。
655		不明		51.5	2.5		厚2.5	柾目	二次加工による抉り痕。
699	SK18	漆椀		9.5					内:赤/外:黒。外面に銀丸文3。
703	SK18	下駄	丸型差込下駄	20.7	7.8		厚2.6		側面:漆。ホゾ穴前後1ずつ。指の痕跡あり。
704	SK18	下駄	丸型差込下駄	21.5	8.0	10.1	厚2.7		全面:黒。歯高7.4cm。ホゾ穴前後1ずつ。歯底面に砂付着。
705	SK18	下駄	角型差込下駄	21.2	4.8		厚1.6		鉄釘の補修孔3。指の痕跡あり。
706	SK18	不明		26.6	10.0		厚1.7	柾目	全体的に湾曲。細かい擦痕。
707	SK18	曲物	蓋か底	Φ13.7			厚0.7	柾目	Φ0.9の穿孔1。側面に目釘4。
708	SK18	曲物	蓋板か	Φ8.9			厚0.6	柾目	Φ0.9の穿孔1。
709	SK18	箱物か	側板か	13.8	2.5		厚0.5	柾目	両端ホゾに目釘穴1ずつ。側面に目釘3。
710	SK18	箸		23.7			厚0.6		
711	SK18	箸		25.4			厚0.6		
712	SK18	箸		26.2			厚0.6		
740	第2構面 遺構外	漆椀							内:赤/外:黒。赤絵で鶴丸紋3つ。
741	第2構面 遺構外	漆椀		14.0					内:赤/外:黒。赤絵。内面に焼き焦げ痕。腰部にΦ0.9~1.0cmの穿孔。

遺物番号	遺構名	種類	名称 部位	法量(cm)				木取り	備考
				長さ(口径)	幅	高さ(器高)	その他		
742	第2遺構面 遺構外	漆椀							内:赤/外:黒。外面に黄丸に丸内横3本線。
749	SG01	不明		13.2	5.4		厚0.7	柾目	
754	SG02	曲物	底板	Φ 19.7			厚1.1	柾目	裏:柿渋か黒。一部にヘギ側板が残る。片面にホゾ溝3。
765	SK22	栓(円柱状)		Φ 1.2~2.3		7.4		柾目	
766	SK22	曲物	底板	13.9			厚0.6	柾目	面に綴り皮。
767	SK22	箸		24.6			厚0.5		
768	SK22	不明		31.2	3.5~8.5		厚1.0	柾目	面に穿孔1。
782	SB02	鎧(両刃)		26.0	2.8~7.0		厚0.8	柾目	表・側面:漆。柄と刃部の境目に穿孔1。先端部は面取り。
783	SB02	鎧(両刃)		25.7	1.7~6.8		厚0.9	柾目	
787	SG03	不明		13.0	4.2		厚1.1	柾目	面にΦ 1.2cmの穿孔。側面の片方に抉り。
788	SG03	不明		17.7	10.2		厚2.0	柾目	寄棟形の形状。2.4×3.5以上×1.9cmのホゾ穴。
842	SK23	将棋駒		3.5	2.5		厚0.4	柾目	墨書きあり。「銀将」。
843	SK23	将棋駒		3.0	1.8		厚0.6	板目	墨書きあり。「〇将」。
844	SK23	将棋駒		3.6	2.0		厚0.5	柾目	墨書きあり。「香車//金」。
845	SK23	将棋駒		3.0	2.6		厚0.8	柾目	墨書きあり。「香車」。
846	SK23	将棋駒		3.1	2.8		厚1.0	板目	墨書きあり。「飛車」。
889	SK23	漆椀		13.0					内外:黒。
890	SK23	漆椀		11.3		4.2			内:赤/外:黒。黄丸に赤2黄1色で左三巴文。比較的上質に仕上げる。
891	SK23	漆椀							内外:赤。口縁部片。外面に金線。
892	SK23	漆椀							内:赤/外:黒。外面に赤絵の花模様。
893	SK23	下駄	丸型連歛下駄	16.3	6.4	3.5	厚1.0		歯高2.5cm。齒底面に砂付着。齒の磨り減り顕著。指の痕跡あり。
894	SK23	下駄	丸型連歛下駄	20.6	7.9	1.0	厚1.0		全面:柿渋か。
895	SK23	下駄	角型連歛下駄	21.0	8.0	2.0	厚1.5		歯高0.6cm。歯の磨り減り顕著。指の痕跡あり。
896	SK23	下駄	角型連歛下駄	20.9	7.8	2.7	厚1.2		歯高1.6cm。歯の磨り減り顕著。
897	SK23	下駄	角型割り下駄	22.2	8.7	3.6	厚0.8	板目	前縫穴の裏は不整六角形で2段状。
898	SK23	櫛			6.7	4.3	厚1.3		歯の間隔は0.2cm。
899	SK23	櫛			8.6	3.9	厚0.9		全面:柿渋か。方形の櫛。
900	SK23	櫛		7.4	3.7		厚0.8		方形の櫛。
901	SK23	箸		30.7			厚0.6		白木。
902	SK23	箸		26.4			厚0.6		白木。
903	SK23	箸		25.5			厚0.6		白木。
904	SK23	箸		20.5			厚0.5		白木。
905	SK23	楊枝か		13.1	0.8		厚0.5	柾目	
906	SK23	楊枝か		12.9	0.9		厚0.1	柾目	先端部が尖っている。
907	SK23	鎧(片刃)		21.5	0.9~2.8		厚0.4	柾目	
908	SK23	鎧(片刃)		25.0	1.9~3.6		厚0.6	板目	
909	SK23	鎧(片刃)		25.3	3.6		厚0.6	柾目	
910	SK23	栓				2.1	Φ 1.6~3.1		底面にΦ 0.5cmの穿孔。
911	SK23	栓(円柱状)			6.6	Φ 2.1~2.5		柾目	
912	SK23	折敷か箱物	側板か	29.0	4.7		厚0.7	柾目	表裏上侧面:黒。下侧面に目釘5。両端ホゾに目釘2ずつ。
913	SK23	折敷か		22.8	2.5		厚0.6	柾目	側面1面に目釘3。
914	SK23	折敷か	側板か	18.7	1.7		厚1.0	柾目	目釘5。
915	SK23	折敷か箱物		16.4	2.5		厚0.7	柾目	全面:黒。漆の無い側面に目釘2。側面に綴皮。
916	SK23	不明		9.3	1.0		厚0.4	柾目	下端を削る。目釘1、穿孔1。
917	SK23	折敷か箱物		28.2	2.6		厚0.8	柾目	全面:黒。漆の無い接合部に目釘穴1、目釘4。
918	SK23	折敷か箱物		13.3	2.4		厚0.6	柾目	側面:黒。漆の無い面に目釘2。
919	SK23	折敷か	側板か	15.8	2.2		厚0.8	柾目	端部に面取り。
920	SK23	柄杓	身部側板・底板	Φ 13.1				柾目	底板側面に目釘穴4(内3は目釘残存)身部側板に綴皮。
921	SK23	柄杓か	柄部か	42.3	1.9		厚1.2	柾目	端面斜めに加工。
922	SK23	曲物	底板	Φ 8.8			厚0.9	柾目	表裏:柿渋。断面に目釘痕4、縁に段状加工。
923	SK23	曲物(柄杓か)	底板	10.1	10.4		厚0.1	柾目	綴皮。
924	SK23	桶	蓋板	Φ 22.9			厚1.0	柾目	表側面:黒。表面に傷多数、断面に目釘穴2、縁に段状加工。
925	SK23	桶か樽	蓋板	36.6	13.1		厚1.0	柾目	表面に穿孔4、断面に目釘・目釘穴2。表裏に刀痕多数、また板に転用か。
926	SK23	桶か樽	底板	19.5	9.3		厚1.6	柾目	断面に目釘穴1、表面に焼き焦げ痕、火焼し痕跡。二次加工により切断。
927	SK23	柄か		13.0	3.5		厚1.1	柾目	中央に幅1.5cmの楕円形くぼみ。
928	SK23	鍔	身部	19.5	12.5		厚4.5	板目	ホゾに柄の一部残存。
929	SK23	不明		5.9	0.9		厚0.7	柾目	紡錘形。面取り加工。
930	SK23	扇か		6.5	0.7		厚0.1		竹製。
931	SK23	不明		26.4	7.3		厚1.0	柾目	長辺側面に目釘4。
932	SK23	舟形木製品		12.6	4.5		厚1.0	柾目	中央・下端にΦ 0.3cmの穿孔(中央は帆柱穴、下端は櫓穴か)。五角形、底面は平らな形状。側面に目釘穴19、裏面に鉄釘痕15。
934	SK23	鎧か		9.9	1.6		厚0.3		竹製。上端は木簡状に加工。下端にホゾ。
935	SK23	笛か		7.0	2.0		厚1.7		竹製。中央にΦ 0.8cmの穿孔。
936	SK23	不明		Φ 2.9	1.7		厚0.2	柾目	中央にΦ 0.7cmの穿孔。
937	SK23	不明		Φ 2.0			厚0.7	柾目	中央にΦ 0.6cmの穿孔。
938	SK23	帯		20.0	12.0				3条の紐で留められている。紐は縫ってつくられている。
939	SK23	刀代か		8.2	2.9		厚0.7	柾目	刀状の加工。
940	SK23	蓋か	蓋板	Φ 14.0			厚1.1	柾目	中央にΦ 3.8cmの穿孔。片面端部に段差。
941	SK23	円形飾り木か		13.8	3.4		厚1.4	板目	Φ 0.7cmの目釘穴1、目釘1、半載穴1。側面に目釘穴1。
942	SK23	脚の一部	脚部	6.9	2.4		厚2.5	柾目	全面:黒。楔形に加工。
943	SK23	不明		11.2	6.1		厚0.6	柾目	面に目釘穴1、長辺側面に長方形状の目釘2。
944	SK23	不明(板材)		12.2	4.9		厚0.9	柾目	不明部材。
978	SK25	漆椀		12.2					内外:赤。見付近に焼き焦げ痕。高台は凹形。
980	SK25	下駄	隅丸型連歛下駄	20.1	7.5		厚0.8		歯の磨り減り顕著。
981	SK25	下駄	隅丸型連歛下駄	18.3	8.0	3.5	厚1.7	板目	歯高1.0cm。歯の磨り減り顕著。
982	SK25	下駄	角型連歛下駄	18.6	8.9	4.0	厚1.9		歯高2.2cm。歯の磨り減り顕著。指の痕跡あり。
983	SK25	箸		24.9			厚0.7		白木。
984	SK25	箸		25.5			厚0.4		白木。
1025	第3遺構面 遺構外	漆椀		11.5					内:赤/外:黒。外面赤草文。
1026	第3遺構面 遺構外	漆椀		10.8		6.4			内:赤/外:黒。底面に穿孔。
1027	第3遺構面 遺構外	下駄	角型連歛下駄	18.4	7.0	2.1	厚2.2		歯高0.8cm。歯の磨り減り顕著。指の痕跡あり。
1028	第3遺構面 遺構外	下駄	丸型連歛下駄	21.0	8.0	2.0	厚1.1		歯高0.8cm。歯の磨り減り顕著。指の痕跡あり。
1029	第3遺構面 遺構外	陽物形(シンボル)		Φ 3.0		15.0			
1030	第3遺構面 遺構外	側板		5.9	4.4		厚0.5	柾目	表裏側面:黒。片面上面に目釘。
1031	第3遺構面 遺構外	不明		21.6	3.6		厚0.3	柾目	側面:黒。

第4章 殿町 279番地外調査(北屋敷)の概要

遺物番号	遺構名	種類	名称 部位	法量(cm)				木取り	備考
				長さ(口径)	幅	高さ(器高)	その他		
1032	第3遺構面 遺構外	栓か				6.5	φ2.0-7.2	柾目	
1033	第3遺構面 遺構外	樽	蓋板	32.8	10.8		厚2.2	柾目	中央にφ2.4cmの穿孔1、端部付近にφ1.3cmの穿孔1。
1034	第3遺構面 遺構外	箆(片刃)	刃部	16.8	2.0		厚0.4	柾目	
1035	第3遺構面 遺構外	羽子板		30.8	8.2		厚1.1	板目	片面に引つ搔き傷。片面に金彩。
1054	SX02	不明		10.9	11.0		厚0.9	柾目	片面に墨書き。目釘4。
1058	SX02	漆椀	蓋	10.6					内外:赤。把手:黒。
1059	SX02	鍤か		21.8	10.6		厚3.0	板目	4.5×6.0×3.0cmの台形状ホゾ穴。
1060	SX02	下駄	角型連齒下駄	19.8	7.6	1.9	厚1.6		歯の磨り減り顕著。
1061	SX02	下駄	丸型連齒下駄	14.8	5.6	2.2	厚0.9		全面:黒。歯高1.5cm。歯の磨り減り顕著。指の痕跡あり。小型、子供用。
1062	SX02	羽子板		34.4	8.6		厚1.4	板目	
1085	SD04	漆椀							内:赤/外:黒。外面に赤草と紅葉。17c後半。
1086	SD04	不明	脚部	7.0	2.2		厚1.4	柾目	上下側面に貫通する鉄釘2。
1114	SK26	漆椀	蓋	11.8		3.5			内外:赤。つまみ内:黒。黒地に赤色草文・果実。
1115	SK26	漆椀		14.2					内:赤/外:黒。黒地に赤で模様を描く。見込みにも模様か。
1116	SK26	箸		25.1			厚0.7		白木。
1117	SK26	箸		27.8			厚0.7		白木。
1118	SK26	曲物		φ12.3			厚0.9	柾目	片面:黒。面中央に目釘穴1。
1119	SK26	箆(片刃)		19.4	2.7		厚0.3	柾目	
1120	SK26	飾りか		7.9	3.5		厚1.0	板目	両側突出部に穿孔1ずつ。裏面に目釘穴1、接着剤付着。
1132	SK27	下駄	角型連齒下駄	17.3	8.1	2.3	厚1.8		歯高0.8cm。歯の磨り減り顕著。
1133	SK27	箆(片刃)		27.1	4.2		厚0.6	柾目	
1134	SK27	栓				6.5	φ1.5/厚2.0-2.5	板目	上方は角柱状、下方は円柱状。
1135	SK27	曲物	底板か蓋板	11.4	4.5		厚1.2	柾目	
1136	SK27	蓋か		4.7	2.6		厚1.5	柾目	ロクロ回転加工の痕跡。
1137	SK27	箸		26.0			厚0.7		
1138	SK27	箸		27.2			厚0.6		
1143	SK28	箸		30.6			厚0.6		
1144	SK28	箸		27.5			厚0.6		
1145	SK28	羽子板状		39.4	9.0		厚1.5	柾目	先端部を少し削る。
1146	SK28	漆椀	蓋	11.0		2.9			内外:赤、つまみ内:黒。
1147	SK28	不明		11.5	5.2		厚0.7	柾目	八角形状のものか。
1148	SK28	栓(円柱状)				8.5	φ1.6-2.8	柾目	
1149	SK28	下駄	丸型割り下駄	20.9	7.5	3.4	厚0.7		全面:黒。歯高2.2cm。歯の磨り減り顕著。指の痕跡あり。
1150	SK28	下駄	角型連齒下駄	21.5	9.4	4.7	厚1.4		歯高3.6cm。指の痕跡あり。
1151	SK28	曲物	底板か蓋板	φ14.3			厚1.4	柾目	片面に段状加工。
1152	SK28	曲物か柄杓	底板、側板の一部	φ7.8		1.9	底板0.4mm厚0.3	柾目	側板をとめる継ぎ皮と側板と底板をとめる目釘あり。
1153	SK28	不明		10.4	5.7		厚0.6	柾目	楕円形。工具痕が明確に残る。
1154	SK28	桶か樽	底板	21.4	3.2		厚1.2	柾目	断面に目釘2。1155と接合可。
1155	SK28	桶か樽	底板	30.1	6.6		厚1.2	柾目	断面に目釘穴2ずつ。1154と接合可。
1156	SK28	桶か樽	底板か蓋板	28.0	10.1		厚0.8	柾目	片面:柄済。断面に目釘穴1、面に直線状に並ぶ穿孔2。1157と接合可。
1157	SK28	桶か樽	底板か蓋板	32.3	10.0		厚1.0	柾目	片面:柄済。断面に目釘穴1、面に直線状に並ぶ穿孔2。1156と接合可。
1158	SK28	桶か樽	蓋板	28.6	10.9		厚0.9	柾目	直線状に並ぶ穿孔6、両端付近に穿孔1ずつ。断面に目釘2ずつ。
1167	SK36	不明		12.3	4.6		厚0.7	柾目	
1230	第4遺構面 遺構外	下駄	丸型連齒下駄	21.0	8.0	2.1	厚1.3		全面:黒。歯高0.8cm。歯の磨り減り顕著。指の痕跡あり。
1231	第4遺構面 遺構外	下駄	角型差込下駄	20.3	7.1		厚2.1		ホゾ穴前後1ずつ。
1232	第4遺構面 遺構外	桶	蓋板	20.0	4.2		厚0.5	柾目	直線状に並ぶ目釘3。把手痕。
1233	第4遺構面 遺構外	小型の桶か樽	底板	φ11.7			厚1.4	板目	端部に面取り。
1234	第4遺構面 遺構外	不明		12.6	1.6		厚1.3	柾目	全面:黒。柄か。緩やかなカーブを描く。
1235	第4遺構面 遺構外	羽子板		21.7	4.0		厚0.6	柾目	
1236	第4遺構面 遺構外	箸		25.6			厚0.5		
1237	第4遺構面 遺構外	箸		26.4			厚0.5		
1238	第4遺構面 遺構外	箸		29.8			厚0.4		

表13 殿町 279番地外(北屋敷) 瓦観察表

遺物番号	遺構名	種類	法量(cm)				色調	備考
279	SE03	棟瓦(左)	長29.2/幅20.1/厚1.9				外内)灰色	スタンプあり。銀化。
280	SE03	棟瓦(左)	長29.7/幅18.5/厚1.8				外内)灰・黄褐色	スタンプあり。
281	SE03	棟瓦(左)	長16.8/幅13.2/厚1.8				外内)灰色	スタンプあり。
282	SE03	棟瓦(左)	長19.7/幅11.6/厚2.0				外内)灰色	スタンプあり。
306	SK02	丸瓦	長24.2/幅15.0/厚1.9/玉縁長0.3/狭端径7.3				外内)灰・灰白色	コビキB。
307	SK02	鬼瓦	長7.1/幅13.1/厚4.3				外灰黄・暗灰色 内暗灰・灰白色	鬼瓦の一部分。銀化。
469	SK03	軒丸瓦	外径14.4/内径10.4/丸瓦厚1.8				外内)灰色	連珠三巴文。右巻。残存珠文13。
470	SK03	軒丸瓦	外径15.0/内径11.0/丸瓦厚2.0				外内)灰色	連珠三巴文。右巻。残存珠文8。縁が高い。
471	SK03	軒平瓦	上弦幅6.6/下弦幅6.8/瓦当高4.6/平瓦厚1.7				外内)純鈍・灰白色	スタンプあり。
472	SK03	軒平瓦	上弦幅5.9-9.0/下弦幅3.2-5.7/瓦当高4.4/平瓦厚1.6				外内)暗灰色	唐草文。キラ粉。
473	SK03	軒平瓦	上弦幅5.3/下弦幅5.1/瓦当高4.5/平瓦厚1.5				外内)暗灰色	唐草文。キラ粉。
474	SK03	軒平瓦	上弦幅13.2/下弦幅11.8/瓦当高4.8/平瓦厚1.6				外内)純鈍・灰・暗灰色	唐草文。文様は三葉系。キラ粉。
475	SK03	軒平瓦	上弦幅8.0/下弦幅8.0/瓦当高5.0/平瓦厚1.8				外内)灰・鈍黃橙色	唐草文。文様は三葉系。
476	SK03	唐草鎌軒瓦(左)	上弦幅19.7/下弦幅21.8/瓦当高4.7/平瓦厚1.6				外内)灰白・灰色	唐草文。文様は三葉系。
477	SK03	唐草鎌軒瓦(左)	上弦幅20.0/下弦幅15.9/瓦当高5.3/平瓦厚1.7				外内)灰色	唐草文。文様は三葉系。
478	SK03	軒平瓦	上弦幅10.5/下弦幅7.8-10.1/瓦当高4.5/平瓦厚1.9				外内)灰色	唐草文。
479	SK03	軒平瓦	上弦幅10.8/下弦幅10.7/瓦当高4.4/平瓦厚2.2				外内)暗灰色	唐草文。
480	SK03	唐草鎌軒瓦(左)	上弦幅8.9/下弦幅5.9/瓦当高5.2/平瓦厚1.9				外内)純鈍・灰・灰白色	唐草文。
481	SK03	唐草鎌軒瓦(左)	上弦幅18.3/下弦幅14.1/瓦当高5.0/平瓦厚1.6				外内)灰・灰白色	唐草文。キラ粉。銀化。
482	SK03	軒平瓦	上弦幅13.4/下弦幅12.8/瓦当高4.3/平瓦厚1.9				外内)暗灰色	唐草文。宝珠文。
483	SK03	巴唐草軒瓦(右)	外径8.3/内径5.4/上弦幅10.9/下弦幅11.6/瓦当高4.6/平瓦厚2.0				外内)暗灰・灰白色	唐草文。連珠三巴文。左巻。珠文12。

484	SK03	不明	外径8.0/内径5.8/丸瓦厚1.4	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。珠文12。
485	SK03	不明	縦10.3/横5.8/厚4.1	外)暗灰・灰白色 内)暗灰色	鬼瓦の一部分か。
486	SK03	丸瓦	長14.1/幅13.6/厚2.8/狹端径5.0/玉縁長3.9	外内)灰色	コビキB。
487	SK03	棟瓦(左)	長10.4/幅10.3/厚2.0	外内)灰色	スタンプあり。銀化。
488	SK03	棟瓦(左)	長8.0/幅10.5/厚1.7	外内)灰色	スタンプあり。
489	SK03	棟瓦(左)	長24.6/幅16.8/厚2.0	外内)灰色	スタンプあり。銀化。
490	SK03	棟瓦(左)	長27.5/幅26.0/厚1.6	外内)灰色	
491	SK03	棟瓦(左)	長29.5/幅15.2/厚2.2	外内)灰色	スタンプあり。
492	SK03	棟瓦(左)	長29.1/幅18.4/厚2.1	外内)灰色	スタンプあり。銀化。釘穴と思われる穴。
493	SK03	棟瓦(左)	長6.8/幅6.7/厚1.8	外内)灰色	スタンプあり。
494	SK03	棟瓦	長22.9/幅25.3/厚1.9	外内)灰色	スタンプあり。銀化。切込みがない為左右不明。
495	SK03	棟瓦(左)	長29.3/幅19.3/厚2.0	外内)灰・鈍橙色	スタンプあり。銀化の可能性あり。
496	SK03	棟瓦(左)	長24.9/幅11.2/厚2.1	外内)灰色	スタンプあり。
526	SK05	唐草鎌軒瓦(右)	上弦幅22.2/下弦幅22.8/瓦当高4.7/平瓦厚1.6	外内)暗灰色	唐草文。銀化。
657	第1遺構面 遺構外	丸瓦	長10.5/幅8.9/厚2.0/玉縁長2.5/狹端径3.8	外内)灰色	スタンプあり。
658	第1遺構面 遺構外	丸瓦	長12.0/幅8.3/厚1.8/玉縁長3.1/狹端径2.3	外内)灰色	スタンプあり。コビキB。
659	第1遺構面 遺構外	棟瓦	長6.1/幅9.3/厚2.4	外内)灰色	スタンプあり。銀化。左右不明。
660	第1遺構面 遺構外	鬼瓦の牙か	長8.3/幅5.1/厚1.7	外内)暗灰色	
743	第2遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径15.0/内径11.1/厚1.7	外)黄灰色 内)黄灰・灰白色	連珠三巴文。左巻。珠文19。
744	第2遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径14.8/内径10.8/厚1.9	外)灰・暗灰色 内)暗灰色	連珠三巴文。左巻。珠文19。
745	第2遺構面 遺構外	丸瓦	長8.2/幅11.3/厚2.1/玉縁長2.9/狹端径7.4	外内)灰色	コビキB。
746	第2遺構面 遺構外	丸瓦	長15.6/幅10.5/厚2.6	外)灰・灰白色 内)暗灰・灰色	
747	第2遺構面 遺構外	鬼瓦	縦16.0/横13.8/厚3.1	外)灰・暗灰・灰白色 内)黑色	
748	第2遺構面 遺構外	不明	縦13.8/幅10.5/厚2.5	外内)暗灰色	
755	SG02	軒丸瓦	外径6.6/内径4.2/厚1.8	外内)暗灰色	桔梗文。
756	SG02	軒丸瓦	外径10.3/内径7.7/厚2.4	外)灰・灰白色 内)灰色	桔梗文。
759	SB01	丸瓦	長17.8/幅10.1/厚2.4/玉縁長3.4/狹端径5.3	外内)暗灰・灰色	コビキB。根石として使用。
762	SK22	軒丸瓦	外径7.8/内径11.8/厚2.3	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文8。巴文・珠文間に圈線。
763	SK22	軒丸瓦	外径9.3/内径6.5/厚2.0	外)暗灰・灰白色 内)暗灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文8。巴文・珠文間に圈線。
789	SG03	棟込瓦	長13.8/幅14.6/厚1.9	外内)灰・暗灰色	コビキB。
945	SK23	軒丸瓦	外径17.8/内径12.2/丸瓦厚2.0	外内)暗灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文7。巴文・珠文間に圈線。
946	SK23	軒丸瓦	外径17.0/内径11.0/丸瓦厚2.1	外内)暗灰色	連珠三巴文。左巻。珠文17。巴文・珠文間に圈線。
947	SK23	丸瓦	長17.3/幅9.7/厚1.9/玉縁長3.0/狹端径2.3	外内)暗灰色	コビキの後タタキ調整。
948	SK23	丸瓦	長13.3/幅6.6/厚2.4/玉縁長3.2/狹端径2.8	外内)暗灰色	コビキB。
949	SK23	海鼠瓦か	長16.7/幅6.0/厚3.7	外内)黒色	
953	屋敷境溝SD01	軒丸瓦	外径14.4/内径10.0/丸瓦厚2.0	外内)暗灰色	桔梗文。
954	屋敷境溝SD01	軒丸瓦	外径9.8/内径7.4/丸瓦厚1.6	外内)暗灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文7。
955	屋敷境溝SD01	軒平瓦	上弦幅21.2/下弦幅20.6/瓦当高4.8/平瓦厚2.3	外)暗灰・灰白色 内)灰・灰白色	唐草文。文様は三葉系。スタンプあり。
956	屋敷境溝SD01	丸瓦	長7.0/幅12.0/厚2.4	外内)暗灰・灰色	コビキA。
957	屋敷境溝SD01	丸瓦	長10.3/幅9.3/厚1.9	外内)暗灰色	コビキA。
958	屋敷境溝SD01	丸瓦	長7.4/幅8.8/厚2.3/玉縁長3.2/狹端径2.1	外)灰・白・褐色	コビキB。スタンプあり。布目痕。
959	屋敷境溝SD01	丸瓦	長13.1/幅11.1/厚2.2	外内)灰色	コビキB。スタンプあり。
960	屋敷境溝SD01	丸瓦	長14.1/幅12.6/厚2.0/玉縁長4.1/狹端径0.9	外内)暗灰色	コビキB。布目・繩目痕。
961	屋敷境溝SD01	丸瓦	長16.5/幅15.8/厚2.4/玉縁長4.0/狹端径8.3	外)暗灰色 内)暗灰・灰白色	コビキB。布目痕。
962	屋敷境溝SD01	平瓦	長7.1/幅12.0/厚2.3	外内)暗灰色	スタンプあり。
968	SU01	軒丸瓦	外径17.2/内径11.0/丸瓦厚2.6	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。珠文17。巴文・珠文間に圈線。
985	SK25	軒丸瓦	外径8.7/内径6.1/丸瓦厚2.6	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文8。
1036	第3遺構面 遺構外	唐草鎌軒瓦(右)	上弦幅4.6/下弦幅4.2/瓦当高4.9/平瓦厚1.8	外内)純橙・鈍黃橙色	唐草文。
1037	第3遺構面 遺構外	軒平瓦	上弦幅3.0/下弦幅12.6/瓦当高4.3/平瓦厚1.9	外内)灰・鈍橙色	唐草文。文様は三葉系。
1038	第3遺構面 遺構外	軒平瓦	上弦幅9.2/下弦幅11.2/瓦当高4.5/平瓦厚2.0	外内)灰色	唐草文。
1039	第3遺構面 遺構外	軒平瓦	上弦幅12.2/瓦当高4.2/平瓦厚1.7	外)橙・鈍橙色 内)鈍橙色	唐草文。焼成不良。
1040	第3遺構面 遺構外	丸瓦	長13.0/幅13.5/厚2.7/玉縁長3.6/狹端径7.7	外内)灰・暗灰色	コビキB。
1041	第3遺構面 遺構外	丸瓦	長12.4/幅11.8/厚2.4/玉縁長3.6/狹端径7.7	外内)暗灰色	コビキB。
1042	第3遺構面 遺構外	丸瓦	長17.5/幅15.9/厚3.1/玉縁長4.4/狹端径7.0	外内)灰・灰白色	コビキB。
1043	第3遺構面 遺構外	海鼠瓦	長18.5/幅3.4/厚1.8	外内)暗灰色	
1044	第3遺構面 遺構外	不明	長10.3/幅7.1/厚2.0	(表裏)暗灰・灰・灰白色	
1045	第3遺構面 遺構外	不明	長8.4/幅9.0/厚3.0	外内)暗灰色	万十小巴部のみの為種類は不明。
1046	第3遺構面 遺構外	鳥伏間	瓦当長8.2	外内)暗灰色	コビキB。銀化。
1047	第3遺構面 遺構外	不明	円盤部径14.2/円盤部厚2.6/長9.5/厚1.9	外内)暗灰色	
1131	SK27	棟込瓦	長18.5/幅11.1/厚2.0	外内)灰色	コビキB。
1239	第4遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径16.2/内径10.7/丸瓦厚1.8	外)灰白・黃褐色 内)灰白色	連珠三巴文。左巻。珠文17。巴文・珠文間に圈線。
1240	第4遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径17.8/内径10.8/丸瓦厚2.5	外)暗灰・灰白色 内)暗灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文7。巴文・珠文間に圈線。
1241	第4遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径6.0/内径3.3/丸瓦厚1.9	外)暗灰・灰白色 内)暗灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文6。コビキB。
1242	第4遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径5.3/内径2.6/丸瓦厚2.3	外内)灰・黃褐色	連珠三巴文。左巻。残存珠文7。コビキB。
1243	第4遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径7.5/内径4.8/丸瓦厚1.8	外)灰色 内)灰・黃褐色	連珠三巴文。左巻。残存珠文7。巴文・珠文間に圈線。コビキB。
1244	第4遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径8.0/内径5.1/丸瓦厚2.2	外)灰・明黃褐色 内)灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文6。巴文・珠文間に圈線。
1245	第4遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径7.3/内径4.1/丸瓦厚2.1	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文4。巴文・珠文間に圈線。
1246	第4遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径6.2/内径3.3/丸瓦厚2.4	外)暗灰・灰白色 内)暗灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文4。巴文・珠文間に圈線。
1247	第4遺構面 遺構外	軒平瓦	上弦幅12.5/下弦幅11.8/瓦当高4.6/平瓦厚1.8	外内)灰・明黃褐色	唐草文。文様は三葉系。
1248	第4遺構面 遺構外	丸瓦	長19.8/幅10.6/厚1.8/玉縁長3.3/狹端径3.7	外内)灰色	コビキB。
1249	第4遺構面 遺構外	丸瓦	長11.0/幅10.2/厚2.3/玉縁長3.8/狹端径5.2	外内)灰・明褐色	コビキB。
1250	第4遺構面 遺構外	丸瓦	長9.0/幅10.0/厚2.4/玉縁長3.8/狹端径5.5	外内)橙・灰白・黃褐色	コビキB。
1251	第4遺構面 遺構外	棟込瓦	長11.1/幅9.2/厚1.8	外内)灰色	コビキB。
1252	第4遺構面 遺構外	不明	長11.6/幅9.6/厚2.4	外内)暗灰色	

第5章 殿町279番地外調査（南屋敷）の概要

第1節 基本層序：土層堆積状況と遺構面（第237図）

基本層序 第5章で扱う範囲は、第3章・第4章で詳細を述べた北屋敷地と屋敷境石積溝SD01を挟んだ南側に広がる。調査開始時、南屋敷地の西側に南北方向に長い41m×2mのトレーナーを掘削し、分層作業を行った。土層堆積状況から、遺構面と思われる造成土面を確認した。これらを上層面から第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面（第3遺構面は部分的に第3-1遺構面と第3-2遺構面に細分することを後に詳述する。）、第4遺構面と呼称する。各遺構面の年代については、遺構面直上から出土した遺物の年代観を主として考察した。なお、第4遺構面に関しては第6章でその詳細を述べる。

第237図の基本土層図は上図が南北トレーナー南側一部分、下図は北側一部分を掲載している。これは南側で第3遺構面が存在する間に、北側では第3-1・3-2遺構面が造成されることを示すために異なる位置の土層を掲載している。

第1遺構面 <第1遺構面より上層> 標高2.60～2.74m、第1層～第8層（近現代）

より上層 1～3層はいずれも黒色系の土層で、瓦礫やコンクリート片を多量に含む。4～6層は来待石製溜枡に伴う掘り込みである。

第1遺構面 <第1遺構面> 標高2.12～2.42m、第9層～第41層（18世紀後半～明治初頭）

9～16層は第1遺構面の南側に広がる形成土である。黒色・褐色系の土層で、厚い堆積の10層下には13～15層が薄く堆積する。15層は橙褐色を呈するシルト状の土層である。26～38層は北側の形成土で、灰色・黄橙色系を中心とした土層である。39層は40・41層が造成された時に掘られた土坑で幅約1.5m、深さ0.6mを測る。

第2遺構面 <第2遺構面> 標高1.98～2.06m、第42層～第57層（18世紀前半～後半）

42～49層は第2遺構面の南側に広がる形成土である。黄色・灰色の土色を示し、シルト系・粘質系の土層が水平に堆積している。45・48層はいずれも炭、地山ブロック、木片などを多量に含む土層である。50～57層は北側の形成土で、橙色・茶色系の土層が水平に堆積している。このうち50・51層は土中に炭を含んでいる。

第3遺構面 <第3遺構面> 標高1.56～1.90m、第64層～第68層（17世紀前半～18世紀前半）

64～68層は第3遺構面の南側に広がる形成土であり、64層は最大厚32cmを測る明黃褐色土である。65・66層はいずれも粘質土の塊りが64層中に入り込んだものである。67層は黒褐色土と灰褐色粘質土の混合土で、木片を多量に含んでいる。

第3-1遺構面 <第3-1遺構面> 標高1.80～1.90m、第58層～第63層（17世紀中頃～18世紀前半）

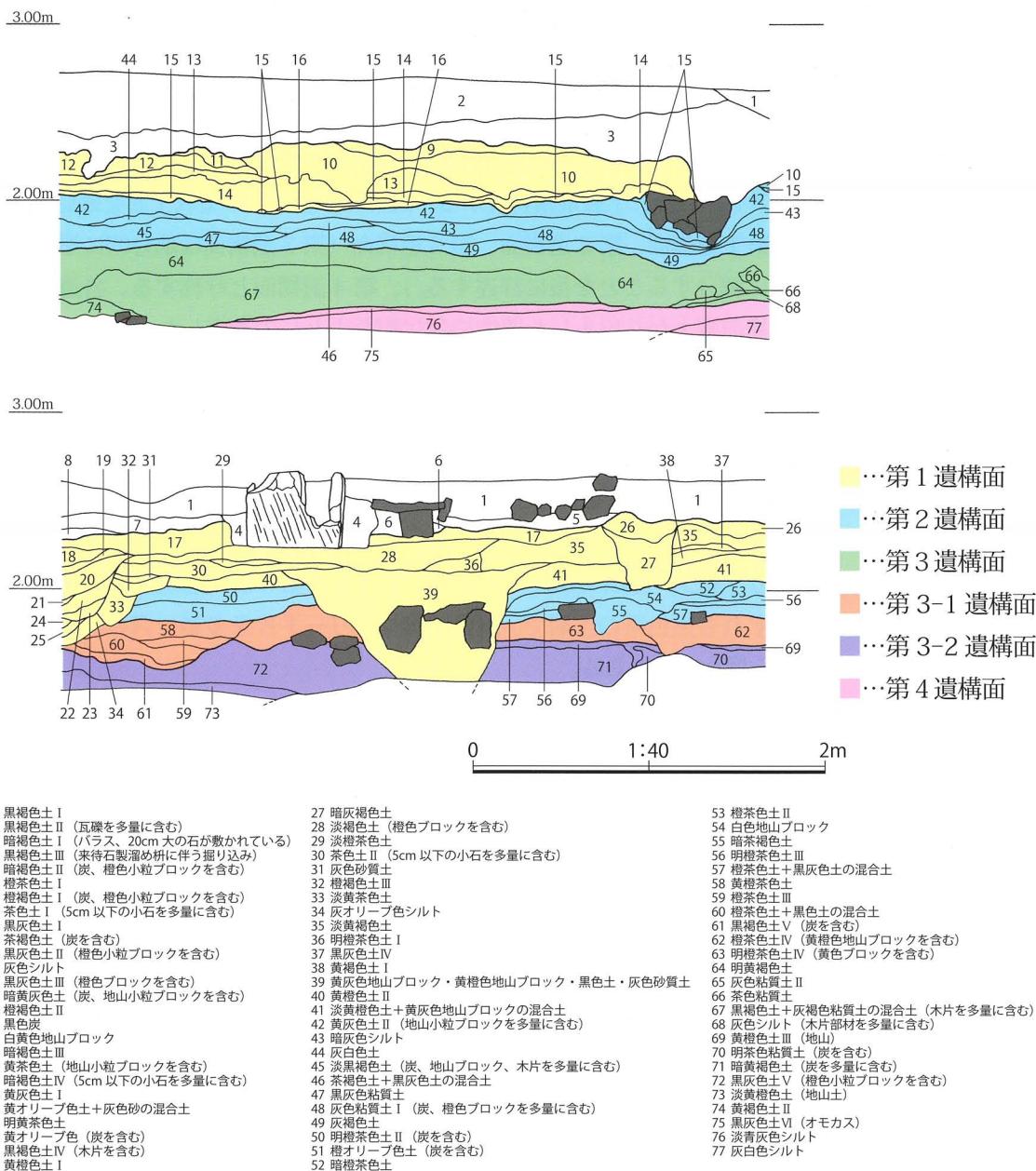
58～63層は北側のみに見られる土層で、第3-1遺構面形成土である。いずれもほぼ水平に堆積し、形成土の厚みは約16cmを測る。

第3-2遺構面 <第3-2遺構面> 標高1.56～1.75m、第69層～第73層（17世紀前半～中頃）

69～73層も北側のみに見られ、第3-2遺構面を形成する厚み約25cmの形成土である。このうち71層は炭を多量に含む暗黄褐色土、72層は最大厚32cmを測る黒灰色土である。

第4遺構面 <第4遺構面> 標高1.30～1.34m、第74層～第77層（17世紀初頭）

75層は約5cmの厚みを測る黒灰色土で、薄く水平に堆積する。76・77層は淡青灰色・灰白色シルトである。



第237図 基本土層図



基本土層断面 (北東から)

第2節 第1遺構面

第1遺構面の概要 第1遺構面はその大半が近代建築物の基礎によって搅乱を受けていた。これらが及ぼなかつた部分で以下の遺構を検出した。遺構面は標高2.12～2.42mを測る。

第1遺構面の遺構は、調査区南東側から建物跡SB01・02（第240～242図）、柵列SA01・02（第240図）、SB01・02の周囲からは土坑SK01・02・03（第240図）を検出した。調査区最東端からは陶器甕を埋設した土坑SJ01（第245図）、調査区中央部分から井戸SE01（第247図）・02（第248図）、調査区最西端からは土坑SK04・05（第251図）を検出した。

また、長方形祈禱具埋納土坑SK06（第254図）と八角形祈禱具埋納土坑SK07に関しては第1遺構面より下層面での検出（SK06は第3-2遺構面、SK07は第4遺構面）であったが、遺物の年代が明確に特定できていることと、第1遺構面の建物跡SB01・02との関係性が強く想定されることから、第1遺構面の遺構として扱っている。

第1遺構面の年代は遺構出土遺物、遺構外出土遺物の年代観から、18世紀後半～明治初頭を想定している。

SD01：屋敷境石積溝（第239図）

SD01 SD01は北屋敷と南屋敷を区切る石積溝であり、調査区のほぼ中央に東西方向に位置する。松江城下町形成時である第4遺構面では素掘溝の形態を取り（第365図）、遺構面の嵩上げに伴ってつくり変えられてきた石積を検出した。また、屋敷地を区切る境界線であるとともに、排水施設としても機能していたと考えられる。

第1遺構面時につくられた石積は検出しなかった。北側の石積も確認できなかったことから、第1遺構面時にSD01は存在していなかった可能性が考えられる。

SB01：建物跡（第240・241図）

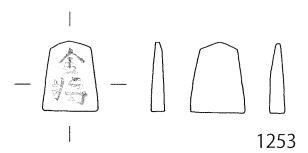
SB01 SB01は調査区の最南東域において検出した建物跡である。SB01は真北から東に4度傾く軸で、東西4間（1間2.08m）×南北5間（1間1.96m）の範囲を検出した。A-A'以西には礎石の並びが確認できなかったことから、SB01の西端はA-A'であると思われる。

礎石は50～70cmの大形の石で、石材は主に安山岩（通称：大海崎石）を使用している。礎石の下に根石が入れられているものの他に、礎石が抜き取られて根石のみが残るもの、礎石・根石が抜き取られ掘り方のみが残るものなどが見られた。

北側・南側・東側においては礎石が続いていく可能性があり、SB01の規模は現状より広がることが想定される。

礎石1 SB01内 紙石1 出土遺物（第238図）

石製品 1253は将棋の駒で、長2.75cm、幅2.0cm、厚さ0.5cm、重量2.88gを測る。表面には「金将」と彫られ、陰刻部分に墨が入れられている。材質は石製か骨製の可能性が考えられる。



第238図 紙石1出土遺物

SB02：建物跡（第240・242図）

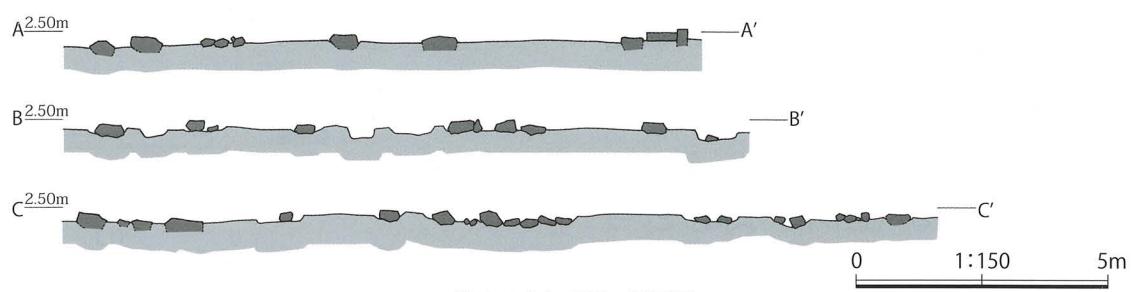
SB02 SB02はSB01と重なる位置で検出した建物跡である。SB02は真北から東に4度傾いており、SB01の軸とはわずかにずれている。D-D'・E-E'内の礎石間数を主として図上計算したところ、推定で東西6間（1間1.98m）×南北5間（1間2.00m）の建物跡が想定できた。



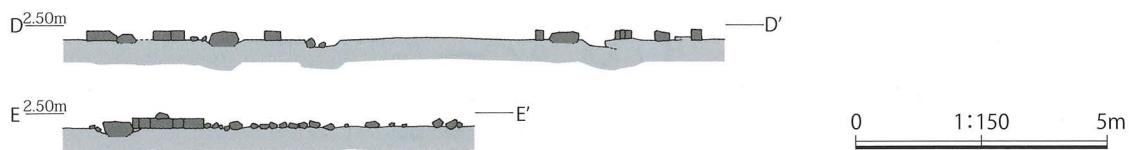
第239図 第1遺構面 全体図



第240図 SB01・02 平面図



第241図 SB01 断面図



第242図 SB02断面図

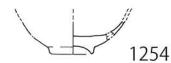
礎石はSB01と同様で、50～70cmの大形石を利用している。また、礎石間にはブロック状の来待石や30cmの大石が列状に並べられており、SB02の基礎構造の一部であったと思われる。SB02は推定範囲の東側・南側に広がっていくものと思われる。

SA01・02：柵列（第240図）

SA01・02 SA01はSB01・02の北側に東西方向に15個並ぶピット列である。長さ約15mを測り、ピットは1.1～1.5m間隔で並び、ピット径は0.20～0.35mの間におさまる。SA02はSB01・02の東側に南北方向に3個のピットが並ぶもので、長さ約5.5m、ピット間2.75m、ピット径0.3mを測る。どちらの列もピットの深さが0.10～0.15mと浅いことから、第1遺構面より上層から掘り込まれたピットの最深部である可能性が考えられる。これらは第1遺構面より上層面でつくられた塀などの遮蔽物であったと想定される。

SP01 SA02内 SP01 出土遺物（第243図）

国産磁器 1254は肥前系磁器の極小皿で、底径1.6cmを測る。丸形に近い第243図 SP01出土遺物形状であるが、底部のみの残存である。



0 1:3 10 cm

SB01・02に付属する遺構（第240図）

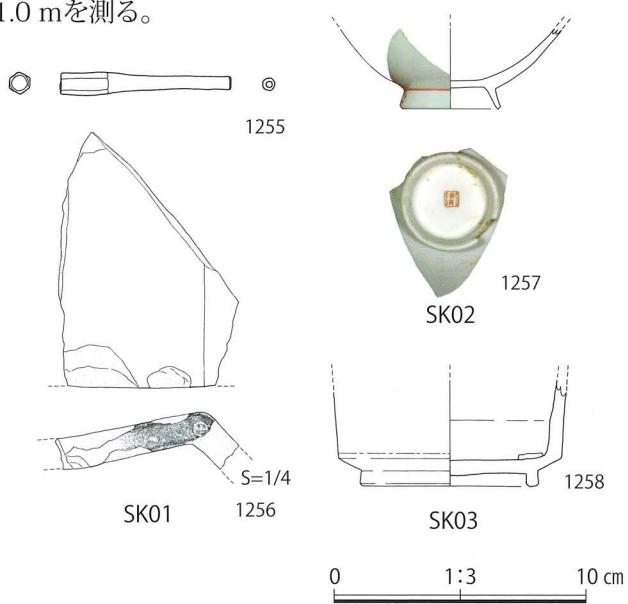
SK01 SB01・02の周囲には多数の土坑を検出している。SK01は調査区東端に位置する円形土坑で、直径0.9～0.95mを測る。**SK02**はSA01付近に位置する直径0.9mを測る円形土坑で、内部には20cmの大來待石などが入れられていた。**SK03**は調査区西端、SE01の南側に位置する不定形土坑で、長辺1.55m、短辺1.0mを測る。

SK01～03 出土遺物（第244図）

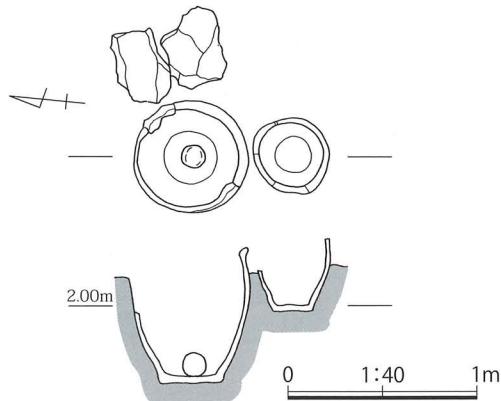
SK01 金属製品 1255は真鍮製の煙管で、吸口部分の完形である。長さ6.8cm、小口径0.9cm、口付径0.5cmを測る。口付部分約2.0cmの範囲が面取り状に加工されており、断面から見ると六角形を呈している。

瓦 1256は左棟瓦で、厚さ1.7cmを測る破片である。側面の屈折部分にスタンプが押されている。

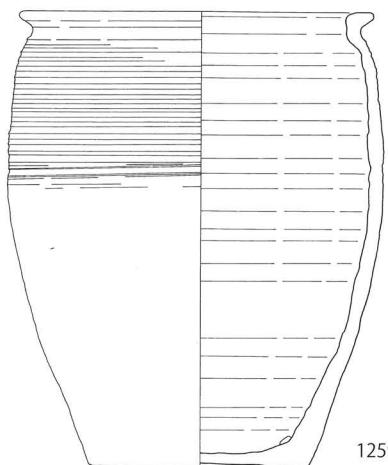
SK02 国産磁器 1257は産地不明磁器の平形中碗である。高台内に「東陶」という銘が入るもので、近代に近い年代を示す。



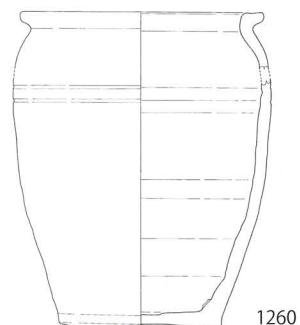
第244図 SK01～03出土遺物



第245図 SJ01 平面図・断面図



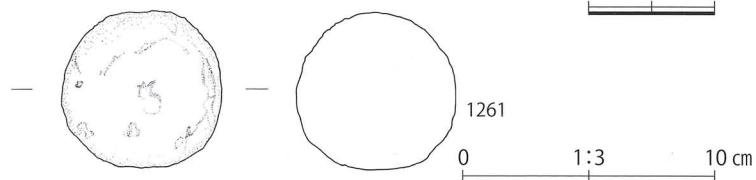
1259



1260



SJ01（北から）



1261

第246図 SJ01 出土遺物

SK03 SK03 1258は京都・信楽系陶器の筒形中碗である。外面は底部から高台にかけて無釉である。

SJ01：土器埋設土坑（第245図）

SJ01は調査区の最東端に位置する。大きさの異なる2個の陶器甕が水平に埋設されたもので、北側に大形甕、南側に小形甕が埋められていた。大形甕は口縁部が7cm、小形甕は半分以上が地上に出ている状態で検出した。また、大形甕の東隣には40cm大の石が2個並べるように置かれていた。2つの甕が同時期に埋められたものか、もしくは新旧関係があるものかについて、掘り方を確認することができなかつたため判断できていない。

大形甕の内部には鉄製の球体が1個入っていた。この鉄球は意図的に入れられた可能性が高いと考えており、地鎮や祭祀的な性格を示すものと思われる。

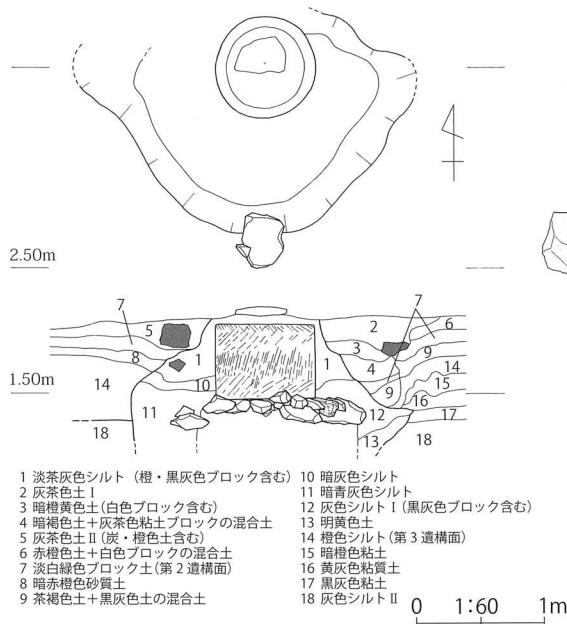
SJ01 出土遺物（第246図）

国産陶器 1259・1260は産地不明の陶器甕である。1259は口径28.0cm、底径17.4cm、器高35.8cmを測る大形のもので、胴部上方約10cm間に沈線が隙間なく引かれている。1260は口径19.2cm、底径12.8cm、推定器高25.0cmを測る小形の甕で、底部は回転糸切りで調整されている。いずれの甕も口縁部上面は水平で、端部を外側に引き伸ばす形状を呈する。

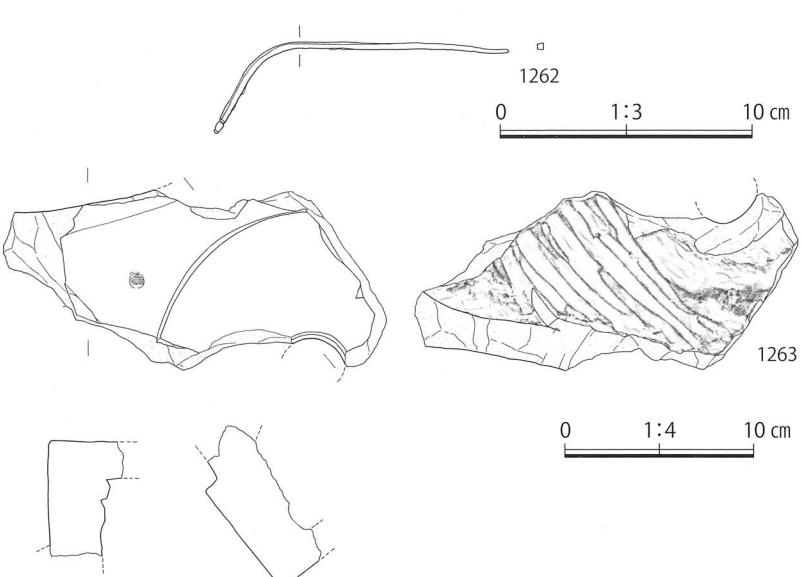
金属製品 1261は鉄製の球体で、直径6.25～6.35cm、ほぼ正円形を呈する。重量は980gを測る。

SE01：井戸（第247図）

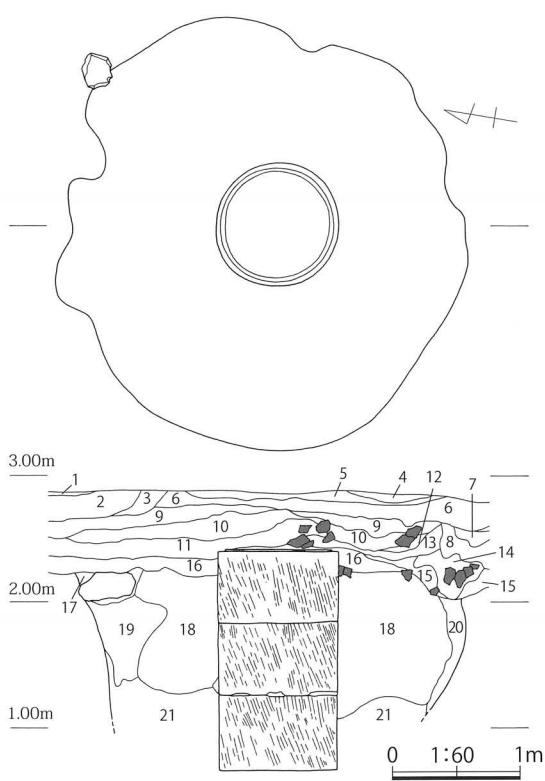
SE01はSB01・02の西側に位置する井戸である。最上部には来待石製の井筒が1個設置されており、直径0.8m、幅0.6m、厚み5cmを測る。外面には来待石特有の鑿加工痕が斜線状に見られる。この直下には、10～20cmの大海底石が輪状に積まれた状態を検出した。当初、海底石で輪積みの井戸をつくり、その後改修のため来待石製の井筒を置いた可能性が



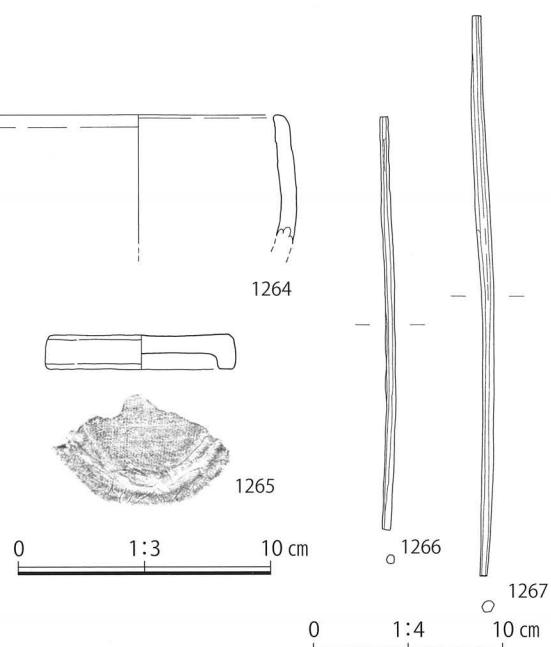
第247図 SE01 平面図・断面図



第248図 SE01 出土遺物



第249図 SE02 平面図・断面図



第250図 SE02 出土遺物

1 黄灰色土	8 茶褐色土	15 灰褐色土
2 黒褐色土 I	9 暗灰褐色土	16 黒褐色土 III（炭・小碟・貝殻含む）
3 黒色土 I	10 黒褐色土 II	17 褐灰色土（第2遺構面の礎石か）
4 暗茶褐色土 I	11 淡黑褐色土	18 淡灰褐色土
5 暗灰褐色土	12 黒褐色粘質土	19 暗灰褐色土
6 暗茶褐色土 II	13 淡灰色砂質土	20 淡灰色土
7 黒色土 II（炭多く含む）	14 淡赤橙色土（炭・瓦片多く含む）	21 淡青灰色土

推測される。井戸の内部には廃絶する際に竹筒を埋め込んで「息抜き」⁽¹⁾とする儀式の形跡は見られなかった。

SE01 出土遺物（第248図）

金属製品

1262は銅製品で、長さ11.8cm、直径0.25cm、重量4.66gを測る。全体の3分の1部分で約45度折れ曲がり先細る形状を呈する。火箸のようなものと考えているが、家屋の屋根瓦を葺く際に使用する止め具とも考えられる。

瓦

1263は鬼瓦の一部分で、最大長9.0cm、最大幅20.5cm、厚み3.5cmを測る。表面には

直径約16.4cmの浮き彫りがあり、その中央には直径3.6cmの穿孔が見られる。裏面は剥離した痕跡が認められる。

SE02：井戸（第249図）

SE02

SE02は第1遺構面（標高2.2m）からの掘り込みを確認した井戸である。来待石製の井筒が3個設置されており、直径1.0m、幅0.6m、厚み4cmを測る。井筒はSE01と比べてやや扁平な形状を呈する。SE02の掘り方は直径約3mを測る。

SE02 出土遺物（第250図）

国産陶器

1264は肥前系陶器の腰張形中碗で、推定口径11.4cmを測る。器壁は厚めで、口縁部は内湾し胴部はわずかに膨らむ。全面に緑黒色の釉薬が掛かる。

焼塩壺

1265は焼塩壺の蓋である。逆凹字形を呈し、受口側端部は面取りが施されている。形押し成形で、内面には布目痕が見られる。

木製品

1266・1267は白木の箸で、1266は長さ21.8cmと比較的短い。1267は29.6cmを測る長い箸で、両端が先細る。いずれも直径は0.5～0.6cmである。

SK04・05：土坑（第251図）

SK04

SK04・05は調査区最西端に位置する。北側のSK04を南側のSK05が切って掘り込んでいる。SK04はいびつな円形土坑で、掘り方直径0.75m、深さ約0.4mを測る。掘り方内には直径約0.55mを測る円形状の木枠らしきものが埋設されていた。この円形木枠内部には瓦の破片が多量に入り込み、焼土や粉状の炭化物も多く含まれていた。

SK05

SK05は不定形土坑で、長辺0.65m、短辺0.44m、深さ0.32mを測る。土坑内には陶器製の甕が水平に埋設されていた。甕の埋土は4層に分けることができ、第3層には瓦片や焼土・炭が含まれていた。第4層は、約8cmの厚みで砂が堆積している。この層から肥前磁器、瀬戸・美濃磁器が出土しており、その年代はおよそ1800年代頃を示す。また、甕内面の下方部分一方向には25×30cmほどのいびつな範囲で、白い石灰状の物質がこびり付いていた。これはトイレ遺構によく見られる尿石の痕跡と思われる。

SK04

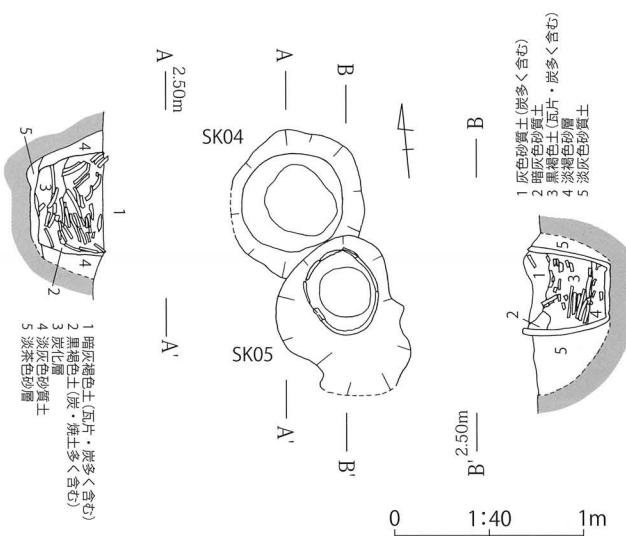
SK04 出土遺物（第252図）

国産陶器

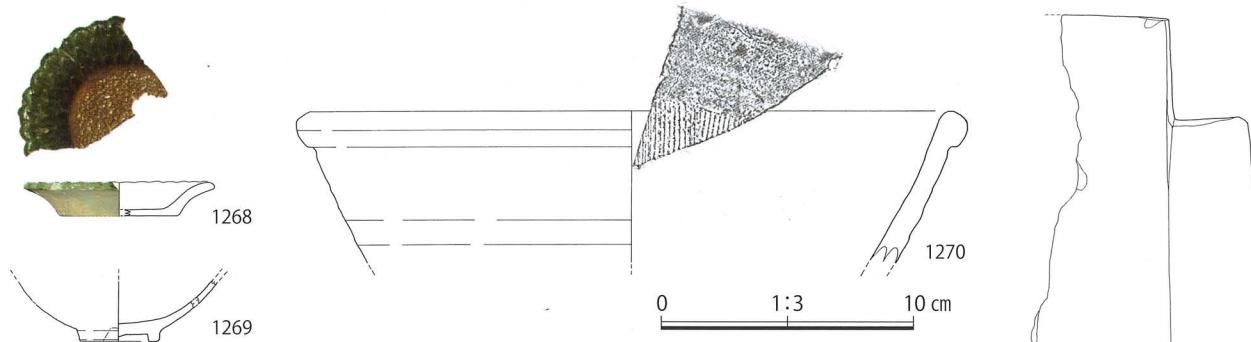
1268～1270は陶器である。1268は四国産ミニペイ焼の可能性が高いと思われる極小皿である。口縁部内面は葉の形状を型押ししてあり、緑色の釉薬が掛かる。底部内面一面には小さな凹凸が多い数あり、黄土色の釉薬が掛かる。1269は在地産の平形中碗である。1270は产地不明の擂鉢で、口径25.5cmを測る。口縁端部は粘土を折り曲げて丸くまとめている。

瓦

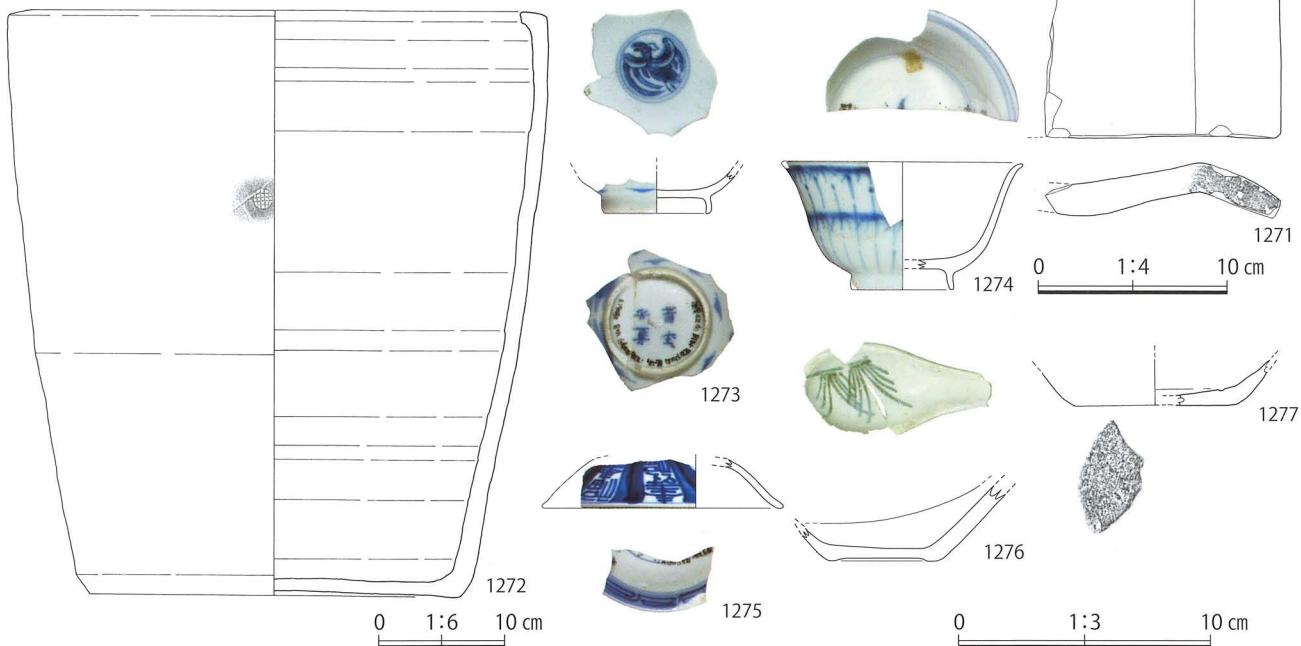
1271は長28.0cm、残存幅12.5cm、厚み1.7cmを測る左棟瓦である。右上には山状の屈折に合わせて5.4×4.0cmの抉りが入り、側面にはスタンプが押印



第251図 SK04・05 平面図・断面図



第252図 SK04出土遺物



第253図 SK05出土遺物

されている。

SK05 出土遺物（第253図）

国産陶器 1272は産地不明陶器の大甕である。口縁部から底部まで屈曲なく成形され、口縁部は橢円形を呈する。全面に施釉が見られる。

国産磁器 1273・1275・1276は肥前磁器である。1273は中碗で、見込みに鳳凰、高台内に「道光年寿」の銘が入る。中国・明末期の模倣品とも考えられる。1275は端反形の中碗蓋で、外面には「福寿」文、内面は端部に四方禪文が描かれる。1276は小形の散蓮華である。

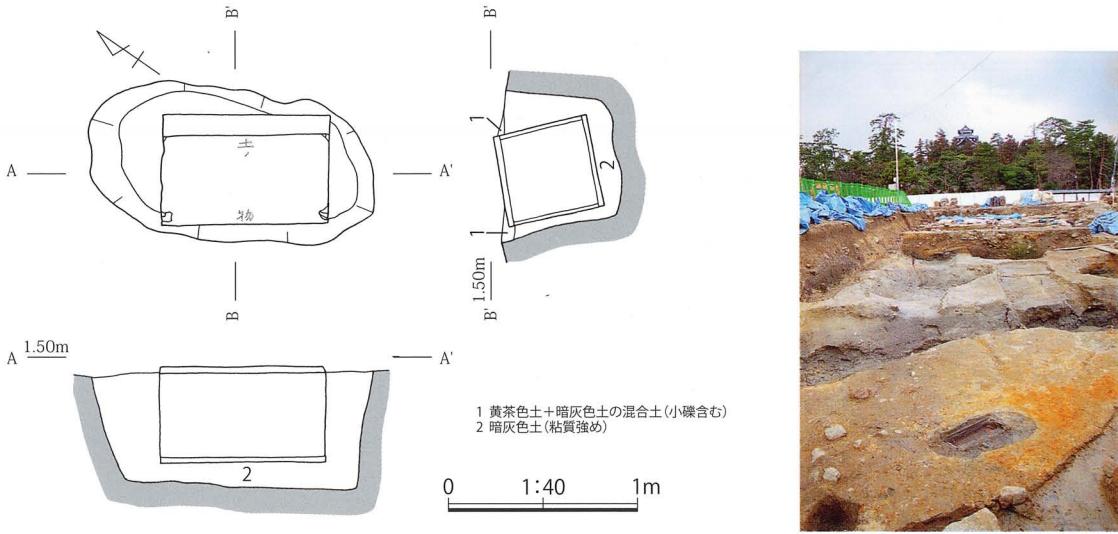
1274は瀬戸・美濃磁器の端反形小碗で、外面全面に雨降文に似た文様が描かれる。1825～1850年代を示す。

土師器皿 1277はロクロで成形された土師器皿の中皿で、底径6.2cmを測る。底部は回転糸切りで調整されている。

SK06：木箱埋納土坑（第254図）

SK06 SK06は調査区最東端に位置する。SK06を検出したのは第3-2遺構面であるが、土坑内に納められていた遺物の年代が第1遺構面の年代と合い、第1遺構面の礎石建物跡SB01・02との関係性が強く想定されるために、この面で取り扱うこととした。

SK06は北西—南東方向を長辺としたややいびつな橢円形を呈し、最大長0.75m、最大幅



第254図 SK06 平面図・断面図

SK06(東から)

0.41 m、底面長 0.6 m、底面幅 0.32 m、深さ 0.32 mを測る。検出面の標高は 1.45 mだが、本来はもっと上層から掘り込まれた土坑であったと思われる。土坑内の埋土は 1 層で、粘質が強めの暗灰色土が入れられていた。土坑内には長辺 44.0cm、短辺 24.4cm、高さ 26.0cm の木製箱が入っており、掘り方と同じ軸の北西—南東方向を向き、南西長辺側が沈み込み埋まっている状態で検出した。本来は水平に埋められていたが、水分を多く含む地盤であることを考慮すると、年月を経て自然に傾いたのではないかと推測する。

SK06 出土遺物(第255図～第263図)

外蓋

木製箱は二重のつくりになっていた。外蓋 1278 は長辺 43.5cm、短辺 24.4cm、厚み 2.0cm を測り、内面には箱の内法に合わせた「かえし」が両短辺に付けられていた。目釘で固定した痕跡が見られないことから、膠などで接着したと思われる。外箱 1279 は長辺 44.0cm、短辺 22.8cm、深さ 23.0cm、内法は長辺 40.8cm、短辺 19.6cm、深さ 21.4cm を測り、厚みは全てのパーツで 1.6cm である。1279 のつくりは長さ 3cm、直径 0.5cm の目釘が長辺 3 本、短辺 2 本ずつの計 10 本を底面から打ち込むことで側板 4 枚を固定している。また、長辺側板の角部分に溝が切ってあり、両端が加工された短辺側板をその溝に差し込むことによって、4 枚の側板が組み合う。

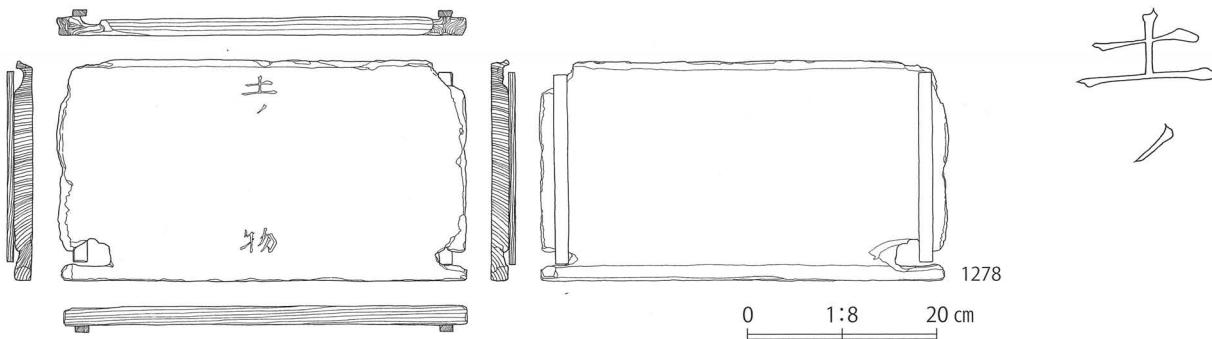
内蓋

内蓋 1280 は長辺 37.1cm、短辺 21.0cm、厚み 2.4cm を測り、内面には 1278 と同様の「かえし」が見られるが、1280 は目釘 2 本ずつで固定されていた。内箱 1281 は長辺 37.2cm、短辺 20.2cm、深さ 14.4cm、内法は長辺 32.8cm、短辺 15.8cm、深さ 12.2cm を測り、厚みは全て 2.2cm であった。1281 のつくりは底面から目釘を打ち込んで側板を固定する方法は 1280 と同様だが、側板 4 枚に加工した痕跡や目釘などが見られず、強力に密着している様子がうかがえた。おそらく、膠などを接着材として使用したものと考えている。

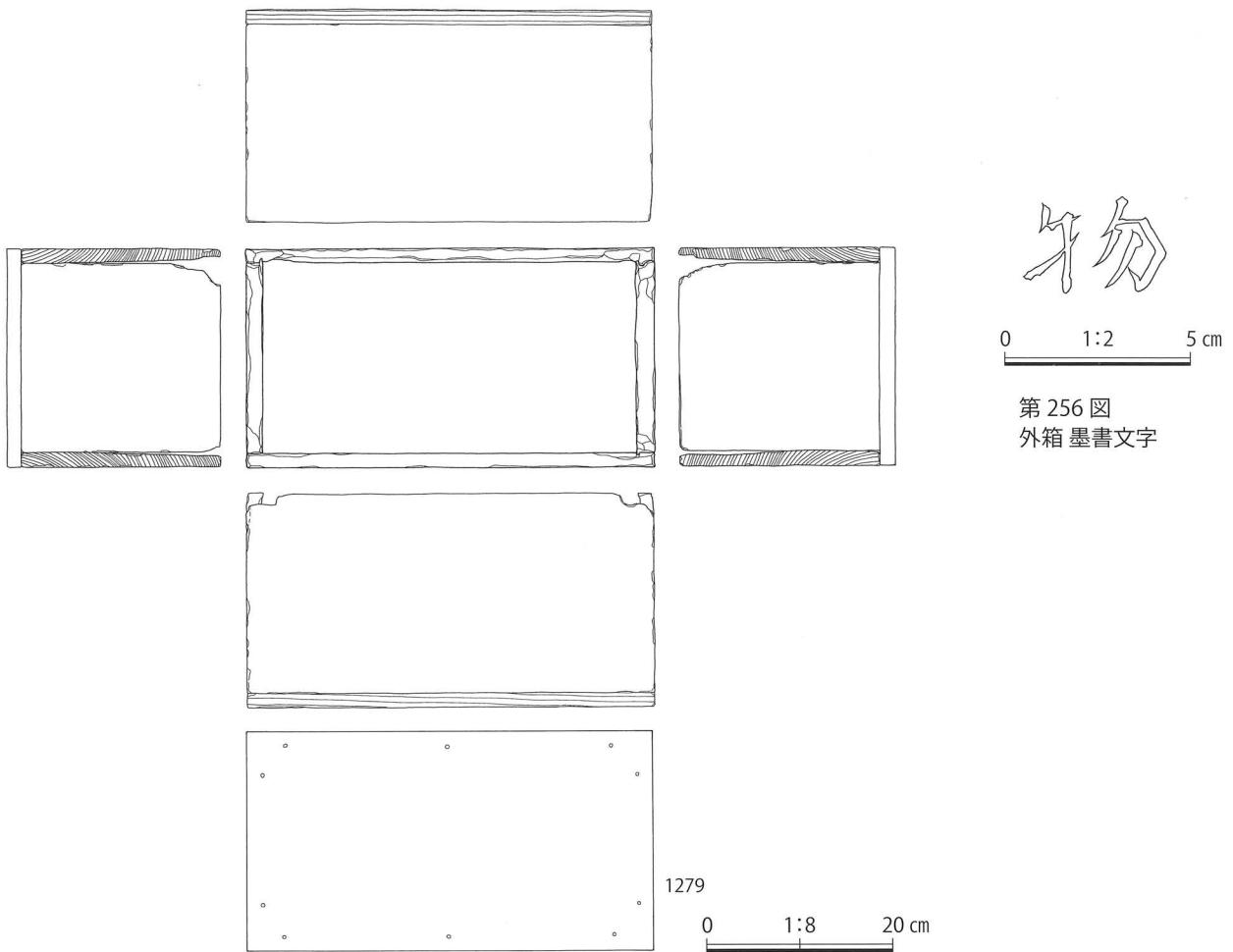
外箱 1278・1279、内箱 1280・1281 の木材は、各々一木から作り出したものであることがわかっている。いずれも側板 4 枚は木目を合わせてつくられている。

内箱外面の長辺面に、変色した縦ラインが両側に 1 本ずつ見られた。何らかの要因で内箱外面が変色した痕跡である。おそらく内箱を密閉する際に、幅 3cm ほどの帯のようなものを巻きつけ封じた痕跡ではないかと考えている。その確証となる物質等は検出されなかったが、可能性は高いと考える。

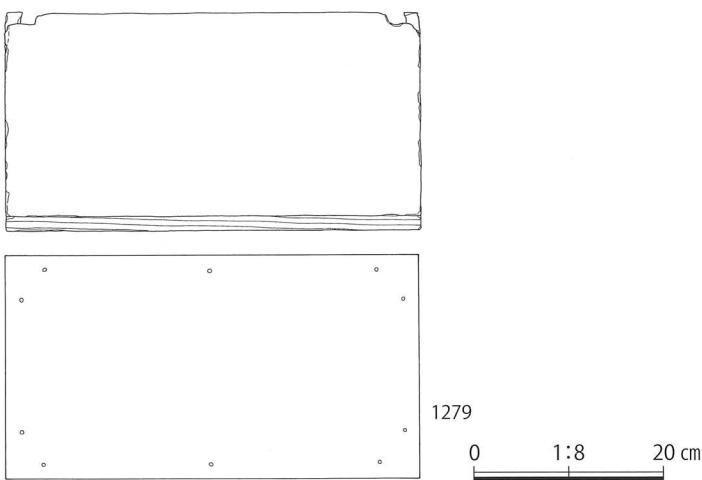
次に、外蓋 1278・内蓋 1280 に見られた墨書文字と朱印について述べる。いずれも長辺に



第255図 長方形祈禱具 外蓋 実測図



第256図
外箱 墨書文字



第257図 長方形祈禱具 外箱 実測図

対して垂直に書かれ、押印されていた。

墨書文字

外蓋1278は、中央上部に「土」、下部に「物」と書かれているのが確認できた(第255・256図)。2つの文字の間にはわずかな墨書の痕跡と、13cmほどの空白があることから、本来は「土□□物」というような5文字の言葉が書かれていたと推測する。空白部分は表面が劣化したことで墨書文字が消失した可能性が考えられる。

内蓋1280には右側から3列に渡って文字が書かれていた(第258・259図)。右側には一字約1.5cm四方のサイズで「□故實法除尅害」とあった。この文は「故實に□□□、尅害を除す法」と読み下すことができ、それにより「故」の上にはもう一文字書かれていたと推測している。「故實に基づいて害となるものを取り除く法」という意味であると推察すると「故

実に依(拠)りて」「故実を為(成)して」などが考えられ、「依」「拠」「為」「成」「基」などの文字が入る可能性が考えられる。⁽²⁾

中央には「□金祭鐵丸埴丸」とあり、一文字は両側の列よりも大きい約2.5cm四方サイズで書かれていた。「金」の上にはもう一文字書かれていたと考え、「土」ではないかと推測する。

左側は右側とほぼ同サイズの文字で、「橘明喬謹修行」とあった。「橘明喬」とは人名であり、「橘」が姓、「明喬」が名である。「橘明喬が執り行つた修行(もしくは祈祷)」という意味合いではないかと推測する。これらの文字は整った楷書体で書かれている。木材の表面に文字を書くことに長けた、あるいは手馴れた人物による墨書きであるということが言えよう。

また、旧字体を使っている漢字が目立ち、右側の「実→實」、「剋→尅」、中央の「鉄→鐵」、左側の「明」は「日」が「目」として書かれている。「謹」は草冠の下に「一」が足されているなどが挙げられる。

朱印 内蓋には墨書きの他に朱印が3ヶ所押印されていた(第259図)。中央文字列の「金祭鐵」に重なるように押されているのは、「土金両来」と篆書体で刻まれた印である。「土金」と「両来」を縦方向に配置しそれを2列に並べるもので、3.6cm四方の正方形の枠の中に入れられている。枠は四隅がわずかに丸みを帯び、文字の部分が凹んでいる陰刻でつくられている。この印は「土」の角を上にして、菱形状に押印されている。「土金両来」の「土金」は「□金祭」と結び付けて考えられ、また、「鐵丸」「埴丸」とも関連していると考えている。

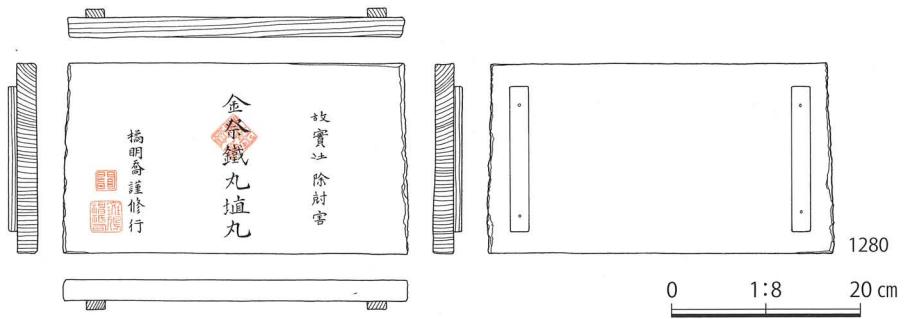
他の2個は文字左列の左側に、縦方向に並んで押印されている。いずれも四隅が丸味を帯び、上部の印は陰刻で、2.1cm四方の正方形を呈する。一見どのような文字が彫られているのか分からぬが、この字体は中国文字と思われ、「明喬」と刻まれている。「橘明喬」を表したものと思われる。下部の印は陽刻で、「斑鳩神祇司」と刻まれている。「斑鳩」と「神祇司」を縦方向に書き、それを2列に並べて、3.3cm四方の隅丸正方形の枠の中に入れている。「土金両来」と同じく篆書体で彫られている。

内容物 内箱1281の内部は開封時ほぼ満水の状態であり、地中で浸み込んだ水に保護される形で内部が残存していた。内部構造は複雑で、まず、内箱の内法に合うように切られた青竹1283・1284が半裁されており、その間に鉄製の球体1282が置かれていた。青竹の両側には紐が幾重にも巻かれていた痕跡が見られ、竹の外側にほどけた紐が落ちていた(第261図)。鉄球は箱の中心ではなく右寄りに置かれており、空いた左側には土が山状に積もっていた。この土は鉄球と同様のサイズで球状に固められていたものが崩れたと思われる。鉄の球と土の球が納められていることは、内蓋に書かれた「□金祭鐵丸埴丸」の「鐵丸」と「埴丸」が表していたと言えよう。

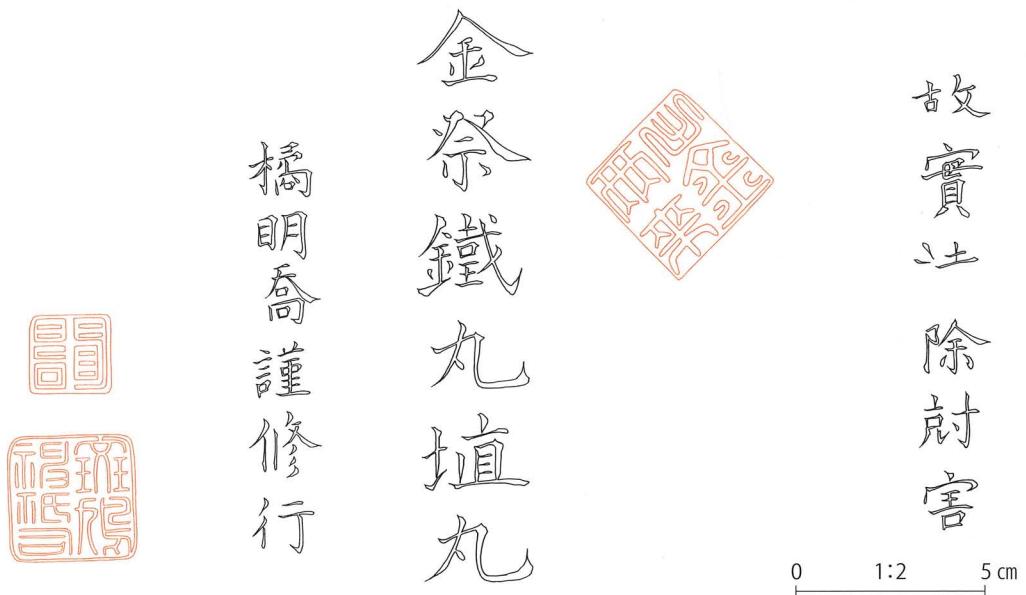
鉄球の下部には纖維状の痕跡が残されていた(第262図)。纖維状の物体は鉄球の鉄分による酸化で硬化し、一部は鉄球に付着していた。織物の布目や折り重なる状態を確認することができ、鉄球を納める際に下に敷かれた座布団のようなものではなかったかと推測している。

鉄球と土球が挟んでいた竹には、様々な印が付けられている(第263図)。2つの球を挟む際、球と竹が密着する位置を球の円弧形に合わせて抉っている。抉った中心には墨書きが見られ、球をその位置に合わせて安置する印であったのだろうと思われる。また、竹の両側に幾重にも巻かれていた紐の位置も、竹の表面に墨書きで印を付けていたのを確認した。これら墨書きによる印は、長方形祈祷具が入念な準備、段階を経てつくり出されたことを物語るものである。

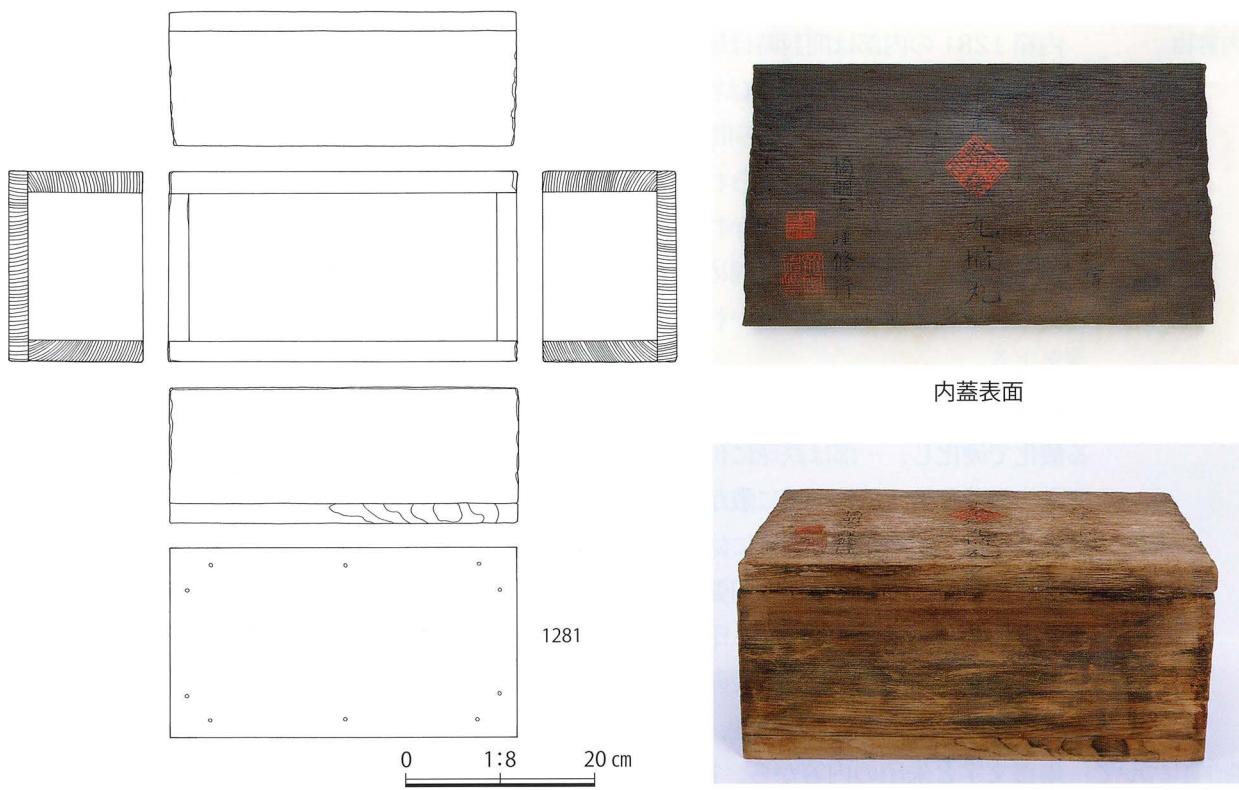
製作者について 墨書き文字と朱印の内容から、祈祷具の由来を辿っていくことが可能であった。まず、この祈祷具を製作した、もしくは依頼を託された人物は「橘明喬」という人物であろうと考える。



第258図 長方形祈祷具 内蓋 実測図

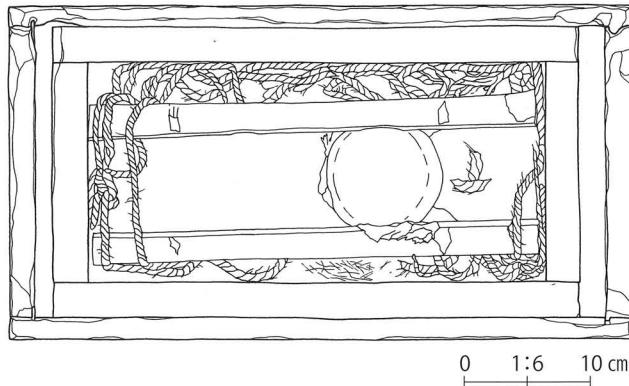


第259図 内蓋墨書文字・朱印

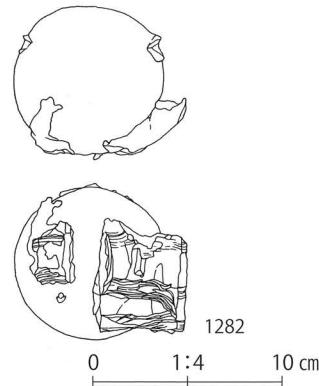


第260図 長方形祈祷具 内箱 実測図

内箱



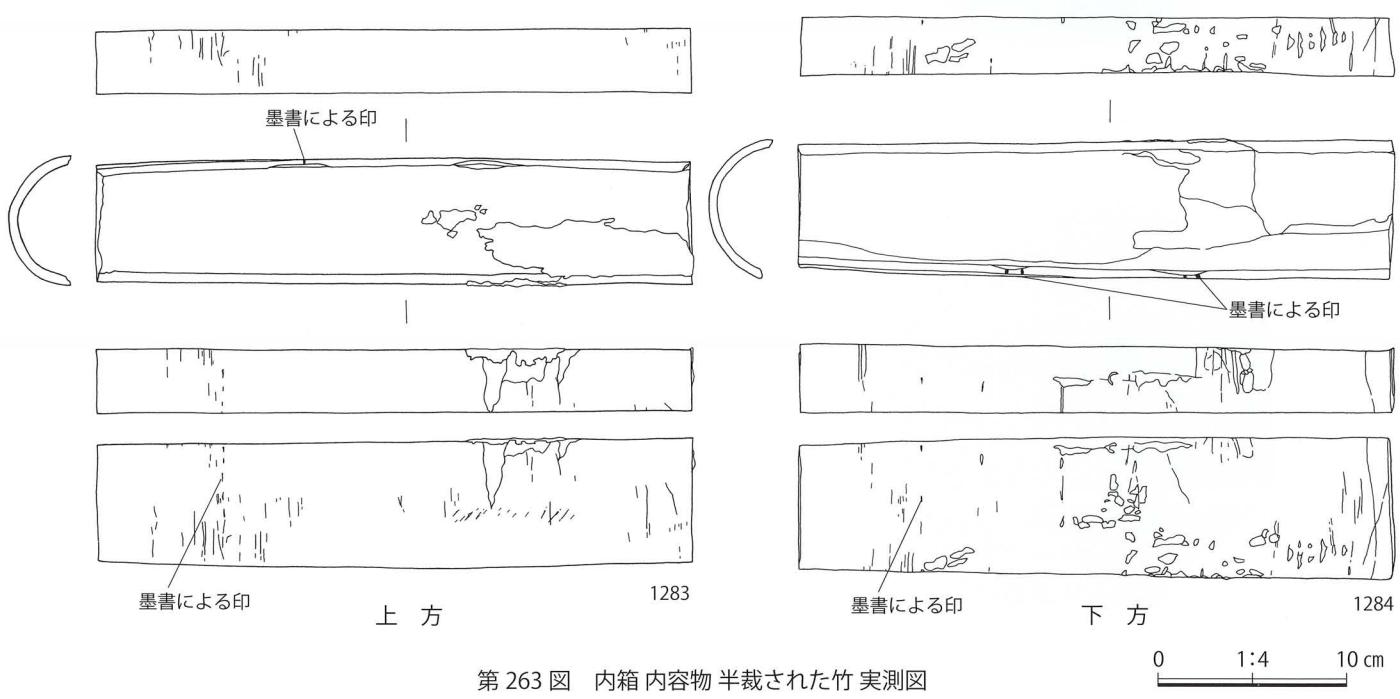
第261図 内箱開封状況実測図



第262図 内箱内容物 鉄球(鉄丸)実測図



内箱 開封状況



第263図 内箱内容物 半裁された竹実測図

0 1:4 10 cm

実際に明喬自身がつくり、祈祷を行ったかどうかまでは判別できないが、氏名が銘打たれることは祈祷の中心的な存在であったと考えられる。

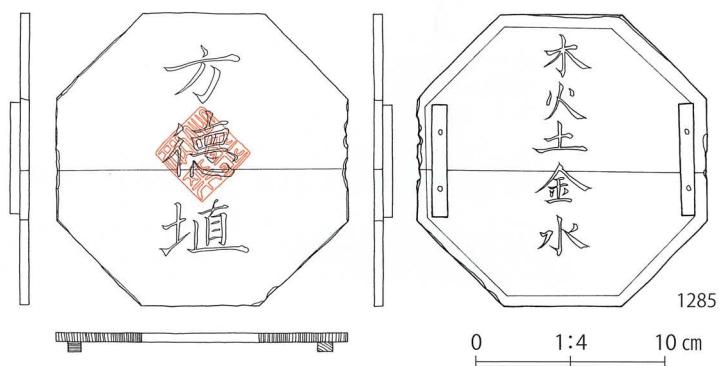
祈祷・風水・家相などの様々な分野を調べたところ、「松浦東鶴」⁽³⁾という人物に当たった。松浦東鶴は大坂で易学・易占学・家相学などを職にし、「松浦流」という家相学の流派を編み出した人物である。東鶴は「橘」姓を名乗っていたことがあり、斑鳩を拠点の1つとして活動していたと記されている。東鶴には「明喬（茂斎・明高とも）」という名の息子がいたことも記されている。東鶴の息子・明喬は、本遺跡で出土した祈祷具に名を刻まれた同一人物と考えてほぼ相違ない。

長方形祈祷具の構造は他に類を見ないものであり、どのような意義を込めて製作されたのかを把握するのはかなり困難である。祈祷具の製作過程を記した書物や、箱の内部構造を記録したものなどは現時点では見つけることができていない。鉄の玉を鍛えて地中に埋める祈祷法の記述は見られるが、具体的にどのような方法で行うのかまでは書かれていなかった。⁽⁴⁾また、祈祷具の中身を公にせずに製作していた可能性も考えられる。製作法は口伝に近い形で伝え継がれていたか、もしくは製作したのは一度きりであったか、様々なケースが考えられる。

SK07：木箱埋納土坑（第264～267図）



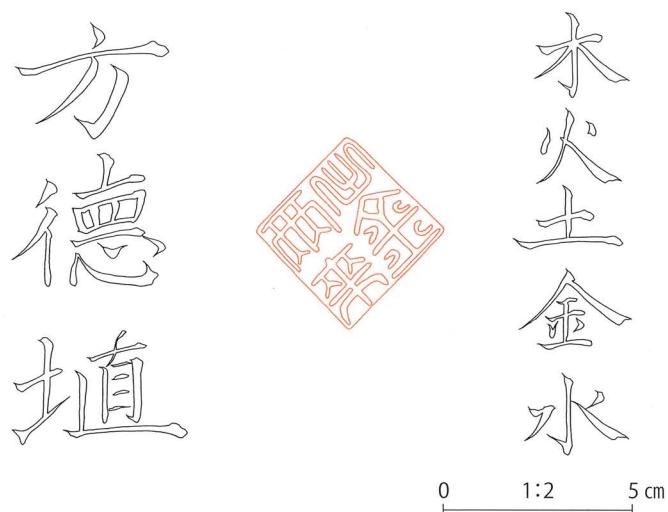
蓋 表面



第264図 八角形祈祷具蓋 実測図



蓋 裏面



第265図 蓋墨書文字・朱印

SK07

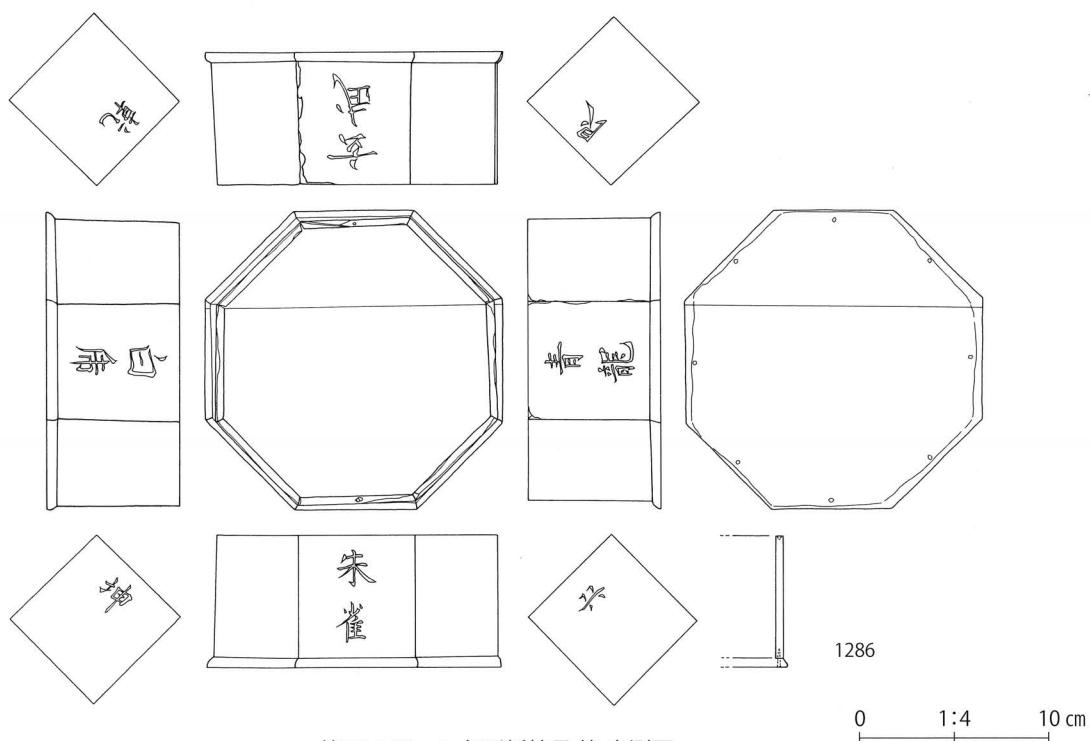
SK07は調査区最南端に位置する。SK07を検出したのは第4遺構面であるが、土坑内に納められていた遺物の年代が第1遺構面の年代と合い、第1遺構面の礎石建物跡SB01・02との関係性が強く想定されるために、この面で取り扱うこととした。これはSK06と同様の措置を取ったものである。

SK07は調査区最南端に位置する導水施設SX06（第4遺構面・第403図）を調査中に検出した土坑である。調査区南壁において上層から掘り込まれた土坑の断面を確認した。土坑内には木製の八角形状の箱が水平に埋められていた。

SK07出土遺物（第264～267図）

箱

木製箱1286は蓋1285が付くもので、一辺約6.4cmを測る面を8面持つ特殊なつくりで



第266図 八角形祈祷具 箱実測図

乾	白	坤	朱	六	青	艮	玄
☷	☲	☷	☲	☱	☵	☶	☵
☷	☲	☷	☲	☱	☵	☶	☵

第267図 側面墨書文字

0 1:2 5 cm



蓋箱

箱内容物

箱「朱雀」面

- ある。蓋を含むすべてのパーツは厚み0.4～0.6cmで合わせられていた。
- 蓋** 蓋1285は箱底面と同一サイズの八角形の板が使われている。内面には箱の内法に合わせて「かえし」を2ヶ所付けており、目釘2本ずつで固定されていた。箱1286は底面の八角形板に側板8枚が目釘各1本ずつで固定され、側板8枚は接着剤等は使用せずにつくられていた。
- 墨書文字・朱印** 蓋の表・裏面、箱の外面8面にはそれぞれ墨書文字が書かれていた（第265・267図）。蓋の表面中央には一文字約3.5cm四方の大きさで「方徳埴」とあり、「徳」は旧字体「徳」と書かれていた。また、「徳」の真上に重なるように、長方形祈祷具に押されていた朱印「土金両来」とほぼ同一のものが、同じく菱形状に押印されていた。
- 蓋の裏面中央には一文字約2.3cm四方の大きさで「木火土金水」と書かれていた。
- 箱の外面8面には「玄武」「艮」「青龍」「巽」「朱雀」「坤」「白虎」「乾」と書かれていた。旧字体での表記が多く、「玄武」の「武」内の「止」が「正」に、「青龍」の「龍」内右側一部分、「虎」は「虍」と書かれていた。
- 内容物** 「玄武」と「朱雀」が書かれた側板の上面には、目釘の痕跡が各1本ずつ見られた。また、蓋の同位置にも目釘が見られることから、箱と蓋は、対角線状の目釘2本で閉じられていたと考えられる。箱の内部には土の塊りが崩れたような状態で入っており、その中央部分が山状に盛り上がっていた。おそらく土の球体が崩壊したものではないかと推測する。地中の水分が箱の中に染み入り、球体だった土は形状を留めることができなくなつたと思われる。箱の内部に土で形成された球体が入っていたという推測は、蓋の表面に「方徳埴」と書かれていることを考慮して述べている。「埴」は土を示す文字であり、「土金両来」の「土」と考えられる。
- また、箱内でわずかな量の金箔を確認した。金箔は主に蓋の裏面に付着しており、箱の底部でもごくわずかに採取した。金箔を「金」の要素として取り入れるにはやや説得力に欠けるとも思われるが、箱の中に「土」と「金」を詰め、それを地中に埋めるという行為は長方形祈祷具と同様であると言えよう。
- 検出時、「玄武」面は北側に向けて埋められていた。陰陽五行説や四神思想では「玄武」は北、「青龍」は東、「朱雀」は南、「白虎」は西を司るものとして存在する。八角形祈祷具は四神が各方角に合わせて埋められていた。四神の間に書かれている「艮」「巽」「坤」「乾」は、方角や時間、暦を表す八卦思想の一部であり、四神思想との結びつきは強いものと言えよう。また、蓋の裏面に書かれていた「木火土金水」は、陰陽五行説に基づく五行循環の理りを表す言葉である。⁽⁵⁾
- 両祈祷具に押された朱印は同一のものである可能性が高く、また、墨書文字の字体・筆跡が同一人物によるものと推測されることから、長方形祈祷具に名を刻んだ「橘 明喬」が八角形祈祷具についても関与していたと考えられる。2つが同時期に埋められたかどうかを断定することはできないが、上記の事象は有力な要素であると考えている。さらに特筆すべきことは、両祈祷具が出土した位置についてである。建物跡SB01・02を中心として南北を軸にした場合、長方形祈祷具は北東に、八角形祈祷具は南西に埋められていた。この方角は陰陽五行説での「鬼門（北東方向）」と「裏鬼門（南西方向）」の位置に合致する。意図的に方角を合わせて埋める位置を選別したとも考えることができ、両祈祷具が同一の祈祷・祭祀において使われた可能性も示唆している。両祈祷具に共通して言えるのは「土」と「金」を地中に埋めていることである。これは五行思想の相生の理に沿っており、「土」→「金」への循環を具現化したものが今回出土した祈祷具に反映されていると考えている。
- 祈祷具は、吉相を願うためのものであったと思われる。⁽⁶⁾ 両祈祷具は屋敷地を挟むような位

置関係で鬼門一裏鬼門の方角に埋納されていたことから、家屋に対する吉相、もしくは家運長久・無病息災・子孫繁栄などの住人に対する広義の願いを叶えるものであったと考えられる。幕末期は様々な民間信仰が流行り広まっていた時期であり、五行思想だけではなく、風水的な意味合いも込められていたのではないかと推察する。

第1遺構面 遺構外出土遺物（第268・269図）

国産陶器

1287～1290は在地・布志名焼の陶器である。布志名焼はベージュと黄色を混ぜ合わせたような黄地釉と、薄暗い緑色と灰色を混ぜ合わせたような青地釉のものが代表的であり、1287・1289・1290は前者、1288は後者である。1287は筒形小碗で、緑色釉が口縁端部に部分的に掛けられる。1290は橙色を呈する土鍋で、外面底部に煤が付着している。1289は完形の鉢で、口形23.3cm、器高12.3cmを測る大形品である。外面は濃い赤茶色、内面は黄色を呈する。

1291・1292は産地不明の陶器で、1291は扁平な香炉、1292は擂鉢である。

国産磁器

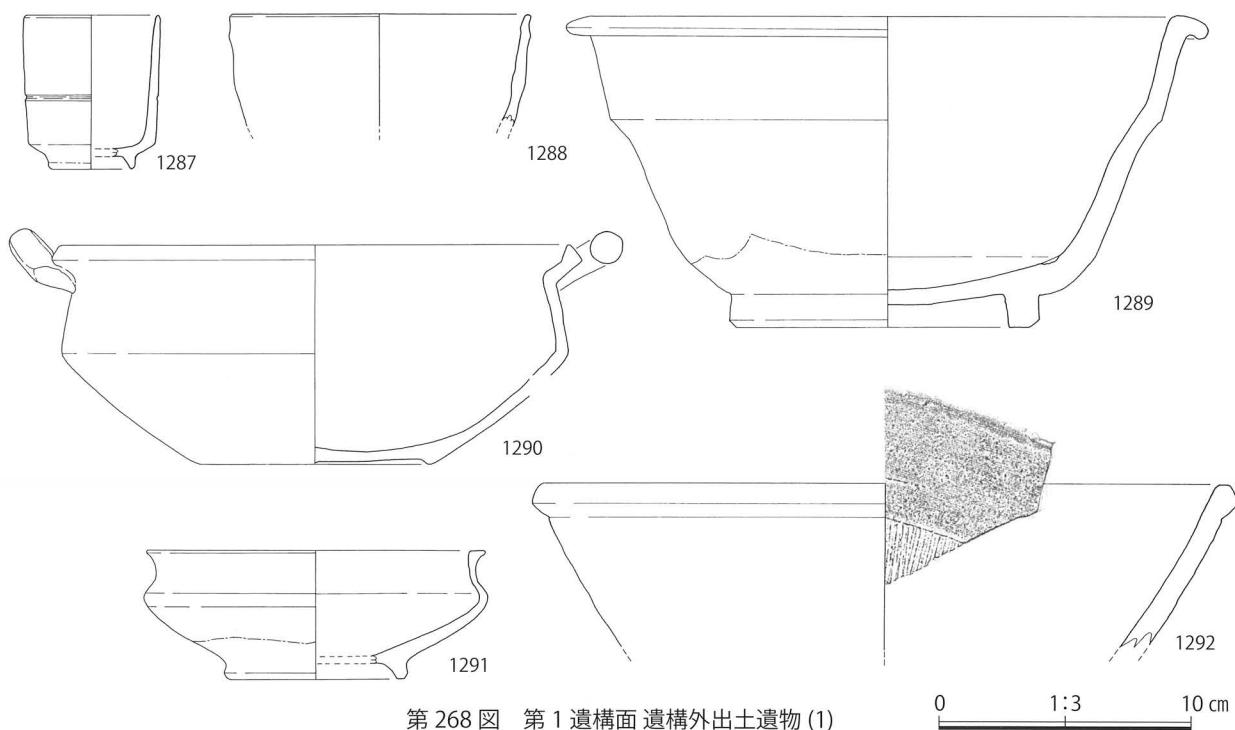
1293～1305は肥前磁器である。1293は紅猪口、1294は丸形小壺、1295は白磁の桶形小壺である。1297は平形中碗で、外面には色絵の痕跡が見られるが赤色の花文を残すのみである。1299は半筒形中碗で、窓絵内に赤絵の龍が描かれている。1300は合子で、省略したみじん唐草文が描かれる。1301は端反形の中碗蓋で、赤・緑・金色を使った色絵で鳥や花、草など様々な文様を描いている。1302は大碗で、断面には漆継ぎで補修した痕跡が見られる。1303は丸形底広の小皿で、見込みに稻穂が描かれる。1304は蛸唐草文が描かれた跳子の持ち手である。1305は置物の最下部の破片で、人形の足部分と推測するが全体像は判明していない。

土師器皿

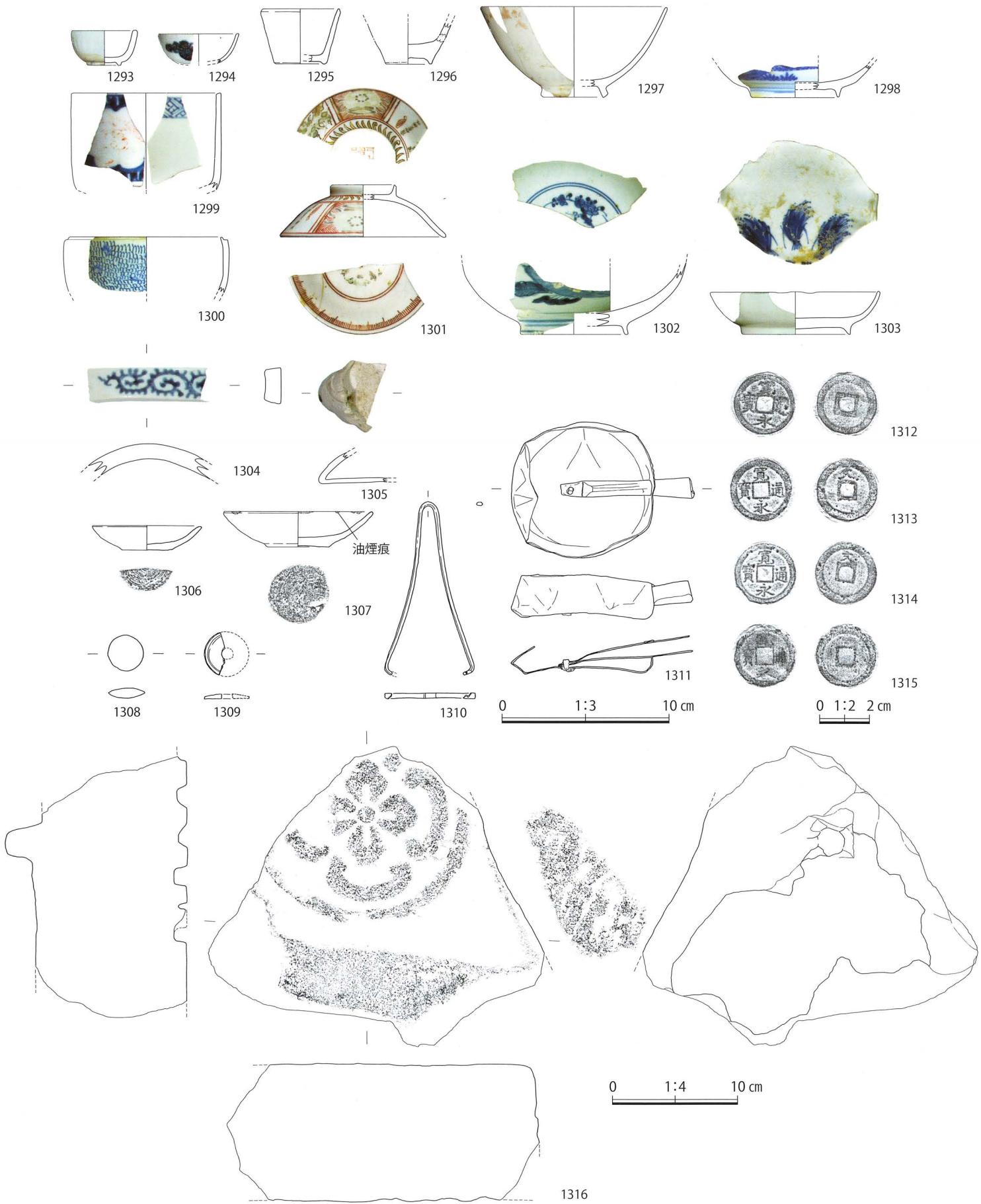
1306・1307は口クロで成形された土師器皿で、底部は回転糸切りで調整されている。1307は口縁端部に油煙痕があり、灯明皿として使われていたと思われる。

石製品

1308は直径2.0cmを測る黒色の碁石である。1309は滑石製の紡錘車で、復元直径2.6cm



第268図 第1遺構面 遺構外出土遺物(1)



第269図 第1遺構面 遺構外出土遺物(2)

を測る。中央部分に直径 0.6cm の穿孔が開いている。

金属製品 1310 は長さ 10.4cm を測り、鉄製の火バサミのような形状を呈する。1311 は銅製の柄杓である。1312～1315 は寛永通宝で、1312 は古寛永、1313・1314 は文銭、1315 は新寛永である。

瓦 1316 は来待石製の鬼瓦の一部で、中央に「丸に木瓜」紋が刻まれている。

第3節 第2遺構面

第2遺構面の概要 第2遺構面では近代の搅乱を受けた範囲は狭まり、それ以外で以下の遺構を検出した。遺構面は標高 1.98～2.06 m を測る。

第2遺構面の遺構は、屋敷境石積溝 SD01(第271図)を西半分の範囲で検出した。調査区南側では建物跡 SB03～07(第272～274図)、遮蔽物かと思われる SA03・04(第272・275図)、廃棄土坑 SK08(第280図)を検出した。調査区中央部分では石積溝 SD02(第279図)、廃棄土坑 SK15、調査区北～西端にかけては様々な大きさの土坑を多数検出した。

第2遺構面の年代は遺構出土遺物、遺構外出土遺物の年代観から、18世紀前半～後半と想定している。

SD01：屋敷境石積溝（第271図）

SD01 第2遺構面での SD01 は調査区西端から東へ約 28 m の範囲で検出した。以東は石積は見られず、直径 0.3～1.0 m の不定形土坑を多数検出した。

石積は北側のみの検出で、南側には小さな石が点在し、溝の掘り方がわずかに確認できた。石材は主に白大海崎石を使用しており、大小様々なサイズの石が検出された。南側の石積がわずかに見られる中央部分においての溝の幅は 0.6～0.8m を測る。石の天端の標高は西側が高く、東側が低いことから、SD01 は西から東へ水が流れていたものと思われる。

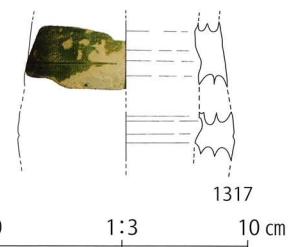
SB03：建物跡（第272・273図）

SB03 SB03 は調査区南東端に位置する建物跡である。真北から東に 4 度傾く軸で、東西 4 間（1 間 2.0 m）×南北 2 間（1 間 2.0 m）の範囲を検出した。礎石の並びが明確なのは C-C' の東側のみで、他は 1 間 2.0 m の距離で割り出した推定ラインである。

礎石 1 からは以下の遺物が出土している。

礎石 1 SB03 内 紣石 1 出土遺物（第270図）

軟質施釉陶器 1317 は産地不明の軟質施釉陶器で、香炉か火入れの可能性があるものである。

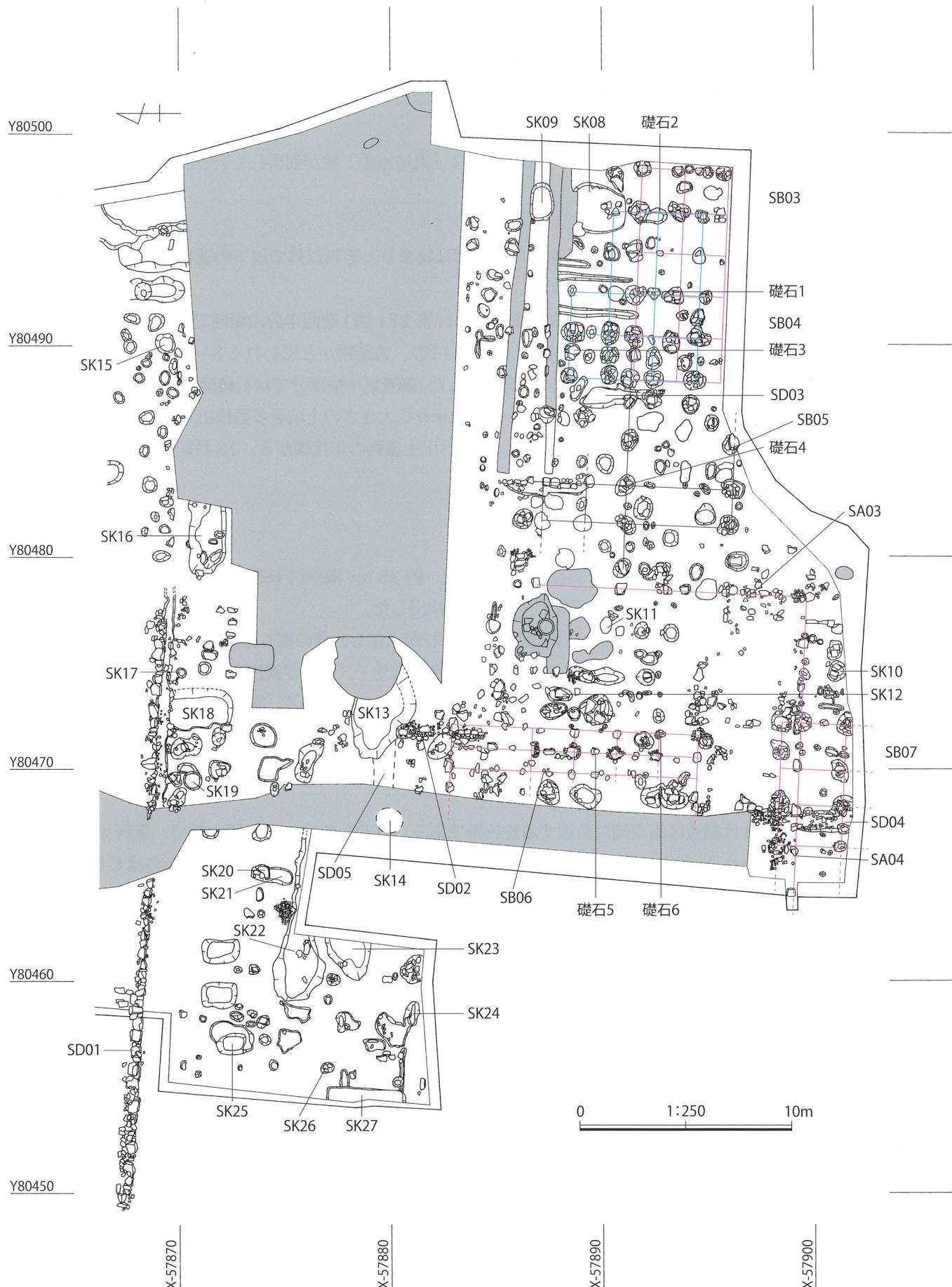


SBO4：建物跡（第272図）

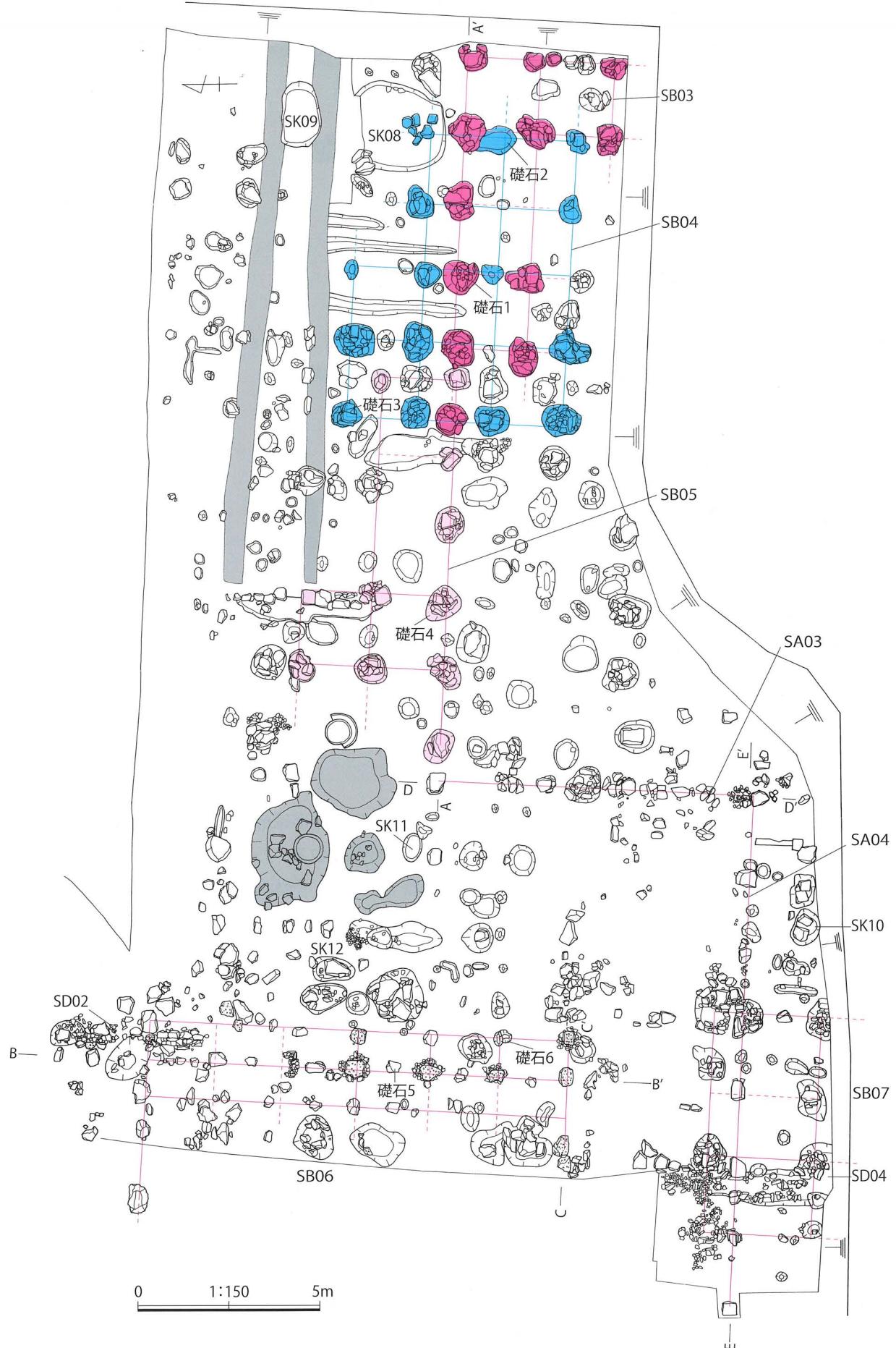
第270図 索石 1 出土遺物

SBO4 SBO4 は SB03 に重なる位置にある建物跡で、東西 4 間（1 間 2.0 m）×南北 3 間（1 間 2.0 m）の範囲を検出した。SB03 から北側に半間（1.0 m）移動しており、建物の軸は SB03 と同一である。

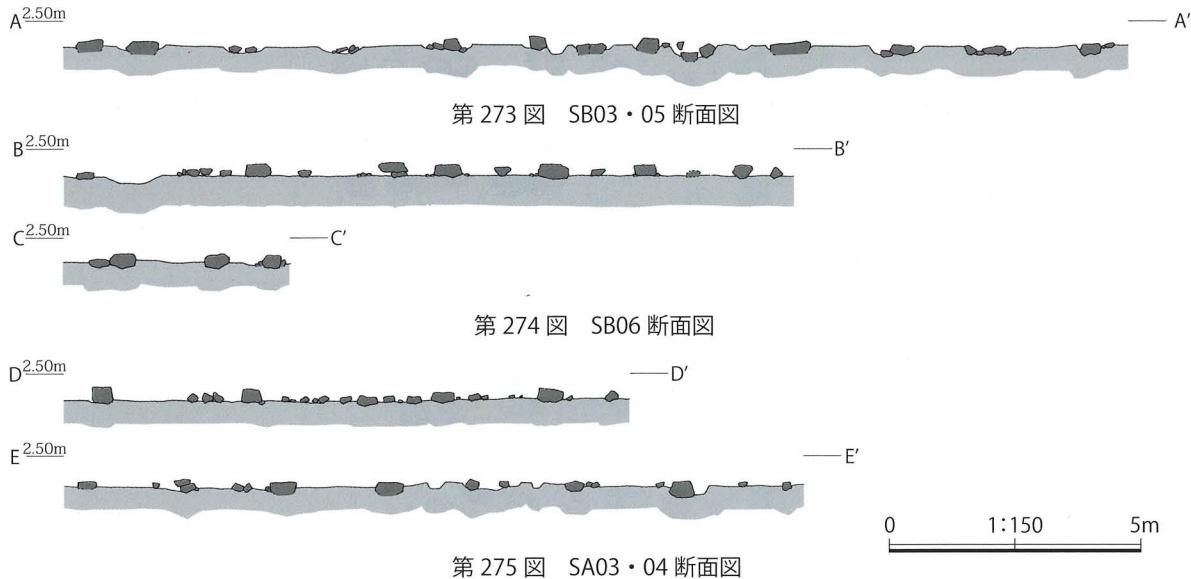
SBO4 を構成する索石 2・3 からは以下の遺物が出土している。索石 2 は東端にある索石の抜き取り痕、索石 3 は SBO4 の西隅にあたる索石で、掘り方内には 50～80cm 大の石が 4 個入れられている。遺物はいずれも肥前磁器が出土している。



第271図 第2遺構面全体図



第272図 SB03～07平面図



SB04内 磐石2・3出土遺物（第276図）

磐石2 国産磁器 1318～1320は肥前磁器である。1318は浅半球形小碗である。1319は腰張形小碗で、外面には赤・金色を取り入れた色絵で鳳凰が描かれる。1320は人形の胴部部分の破片で、外面には服の模様かと思われる色絵が描かれているが、全体像は判明していない。これらは概ね九陶IV期（1690～1780年代）のものである。

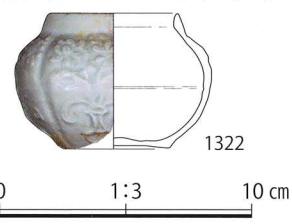
磐石3 国産磁器 1321は肥前磁器で、胴部部分の残存径17.3cmを測る水指である。外面には菊花文が描かれる。九陶III期（1650～90年代）を示す。

SB05：建物跡（第272・273図）

SB05 SB05は第1遺構面においてSB01・02が建っていた場所に位置する建物跡である。SB05の範囲は西側に移動しており、SB03・04と軸は変わらない。東西5間（1間2.0m）×南北2間（1間2.0m）の範囲で検出しているが、磐石がない部分が多く見られることから、あくまでも推定ラインであると付記しておく。また、建物範囲は現状よりも広がると思われる。

SB05を構成する磐石4は磐石は残っておらず、根石と思われる20～40cm大の石が数個入れられている。ここからは肥前磁器が出土している。

磐石4 SB05内 磐石4 出土遺物（第277図）



第277図 磐石4出土遺物

国産磁器

1322は肥前磁器の白磁小壺である。口径5.2cm、器高5.4cmを測るもので、外面は型打陽刻によって花の文様が象られている。白磁であるが真っ白ではなく、やや黄身がかかった色を呈する。

SB06：建物跡（第272・274図）

SB06

SB06は調査区西端に位置する建物跡である。SB03～05と建物の軸はほぼ同一である。東西2間半（1間1.95m）×南北6間（1間1.94m）の範囲で検出しており、西側へさらに続いていくものと思われる。B-B'東側には同一軸で並ぶ礎石列があり、B-B'と半間（0.975m）の間隔が空いていることから、この列は建物の庇部分ではないかと想定している。

B-B'・C-C'内の礎石は40～50cmの大形石を使用しており、石材は島石⁽⁷⁾である。礎石の下には拳大の栗石が敷き詰められていた。このような構造の礎石は第2遺構面ではSB06のみに見られるものである。また、礎石間の中心部には30～50cmの大いな礎石が均等間隔で置かれている。これらは安山岩（大海崎石）⁽⁸⁾であり、細い柱を支えるための束石であろうと思われる。

SB06を構成する礎石5・6の下部からは以下の遺物が出土している。

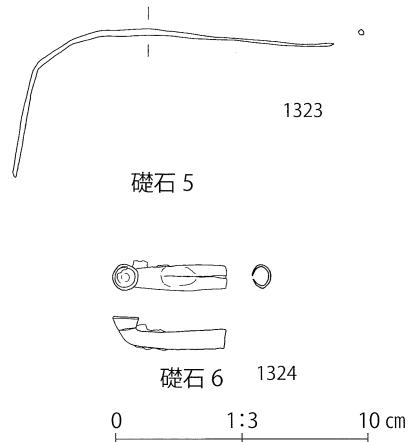
SB06内 紋石5・6 出土遺物（第278図）

礎石5

礎石5 1323は最大長12.8cm、直径0.2cm、重量2.83gを測る真鍮製品である。全体の3分の1部分で約90度折れ曲がり、長方が先細る。1262と類似する形状を呈する。

礎石6

礎石6 1324は真鍮製の煙管で、雁首部分である。長さ4.5cm、火皿径1.0cm、小口径0.9cmを測る。



SB07：建物跡（第272図）

SB07

SB07は調査区南西隅に位置する建物跡である。SB06の南側にあり、建物の軸は前述の建物跡とほぼ同一である。東西3間（1間2.0m）×南北1間（1間3.0m）の範囲で検出しており、南側へ続いていくものと思われる。

SB07は1間間隔が3.0mであること、また、礎石の掘り方が大形であることなどが他の建物跡と異なる点である。

第278図 紋石5・6出土遺物

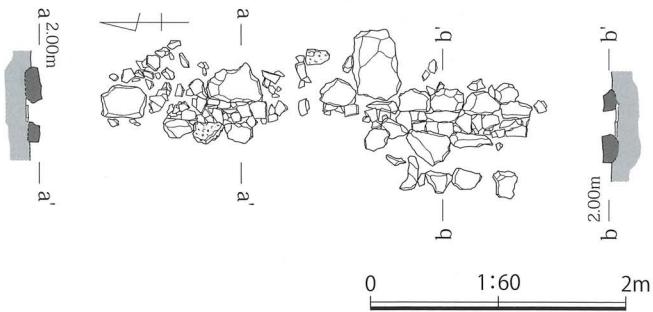
SA03・04：塀跡（第272・275図）

SA03・04

SA03（D-D'）は建物跡SB05の西側に隣接する礎石列である。軸は周囲の建物跡と同一で、南北4間（1間2.1m）の範囲で検出した。SA03と直角に繋がる形で、SA04（E-E'）を東西7間（1間2.02m）の範囲で検出した。

SA03・04の1間間隔は建物跡の1間よりも若干広いということが言える。また、SA03・04の付近に建物を構成する礎石が見当たらず、この2本が独立しているように見えることから、塀のような遮蔽物であった可能性が考えられる。

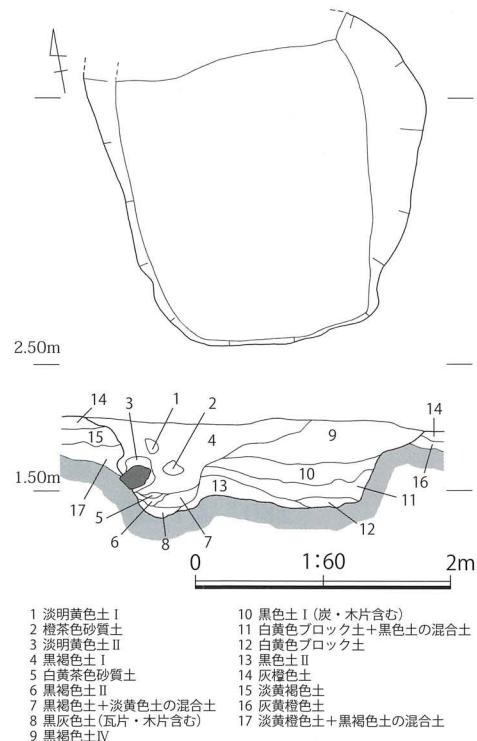
- SD02：石積溝（第279図）**
- SD02 SD02は調査区西側、SB06北側に位置する石積溝である。南北約4.3m、溝の幅は0.2mを測る。石材は20～30cmの大青海崎石を使用し、1段積みで高さは約0.1mを測る。
- 溝の底面には平瓦の破片が隙間なく敷き詰められていた。
- SD02の天端・瓦敷の底面レベルは南側より北側の方が約5cm低くなっていることから、水は南から北に向かって流れていたものと思われる。北側には屋敷境石積溝SD01が位置している。雨水や生活排水は様々な水路を通じて最終的にSD01に流れ落ち、排水されるしくみになっていたと思われる。
- SK08：廃棄土坑（第280図）**
- SK08 SK08は調査区東端、SB03の北側に位置する長方形に近い形状を呈する廃棄土坑である。南北約2.7m、東西約2.5m、深さ約0.8mを測る。
- 第13層は黒色土を呈するゴミ層であり、その上の第11・12層（白黄色ブロック土）でゴミを埋めていると思われる。第10層で再びゴミを入れ、その上から第9層で埋めている。最終的に第1層～第8層を掘り込んで、SK08は終了したものと思われる。
- SK08が掘られた位置は第3遺構面でも廃棄土坑SK41を検出している（第301図）。SK41に比べて規模は縮小しているが、同じ場所に廃棄土坑を掘り込んでいる。
- SK08からは陶磁器・土師器皿・焼塩壺・漆器・箸などの食器類、焙烙などの調理器類、金属製品・古銭・瓦などの生活用品が出土している。これらは主に陶磁器の年代観から、九陶IV期（1690～1780年代）のものと思われる。
- SK08 出土遺物（第281・282図）**
- 国産陶器 1325・1327は肥前陶器である。1325は京焼系の腰張形中碗で、九陶V期を示す遺物である。1327は胴部最大径15.4cmを測る大瓶である。外面には間隔の広い刷毛目文が全周し、その上から青緑色の釉薬が流れ落ちるように掛かる。



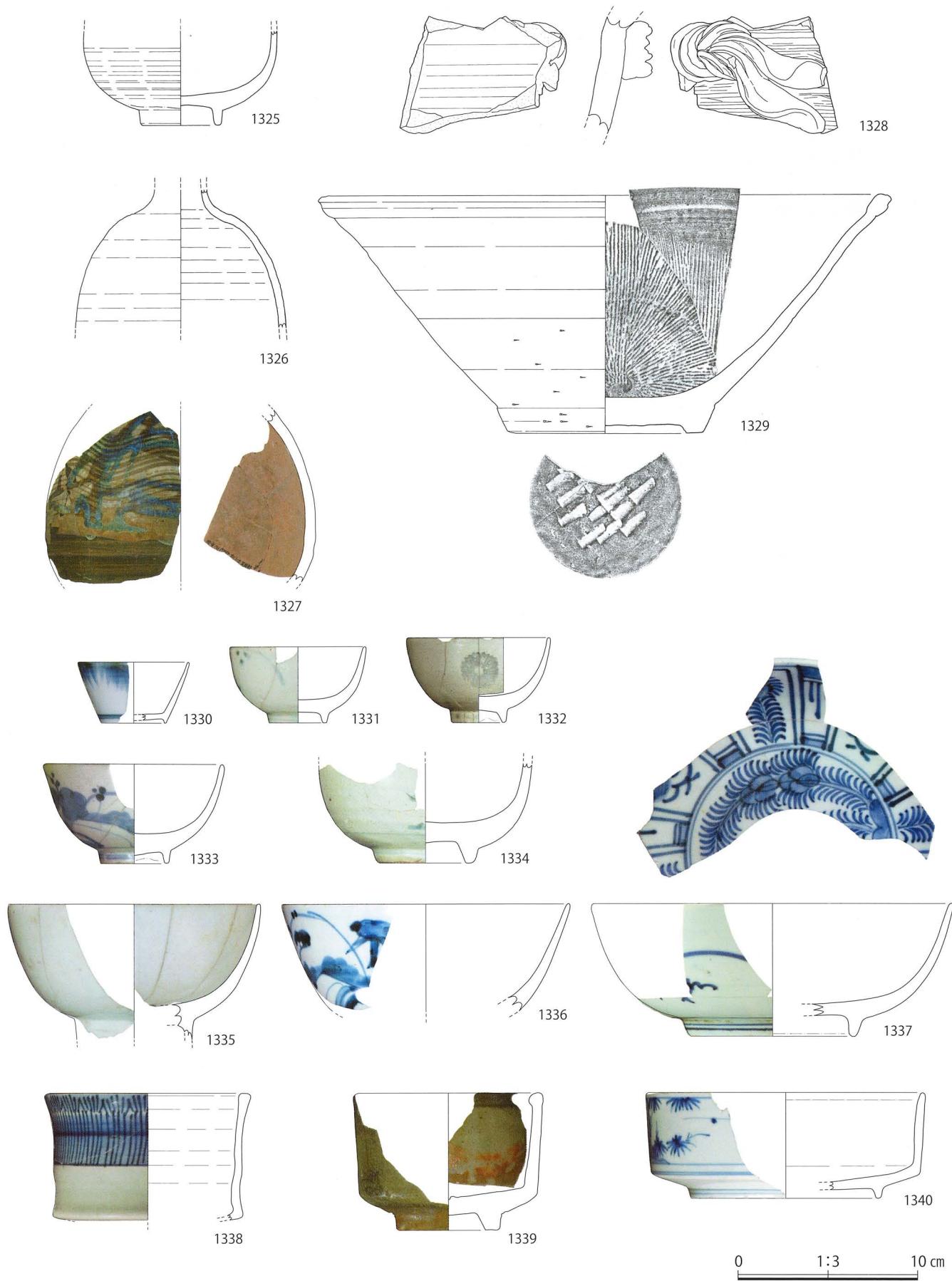
第279図 SD02 平面図・断面図



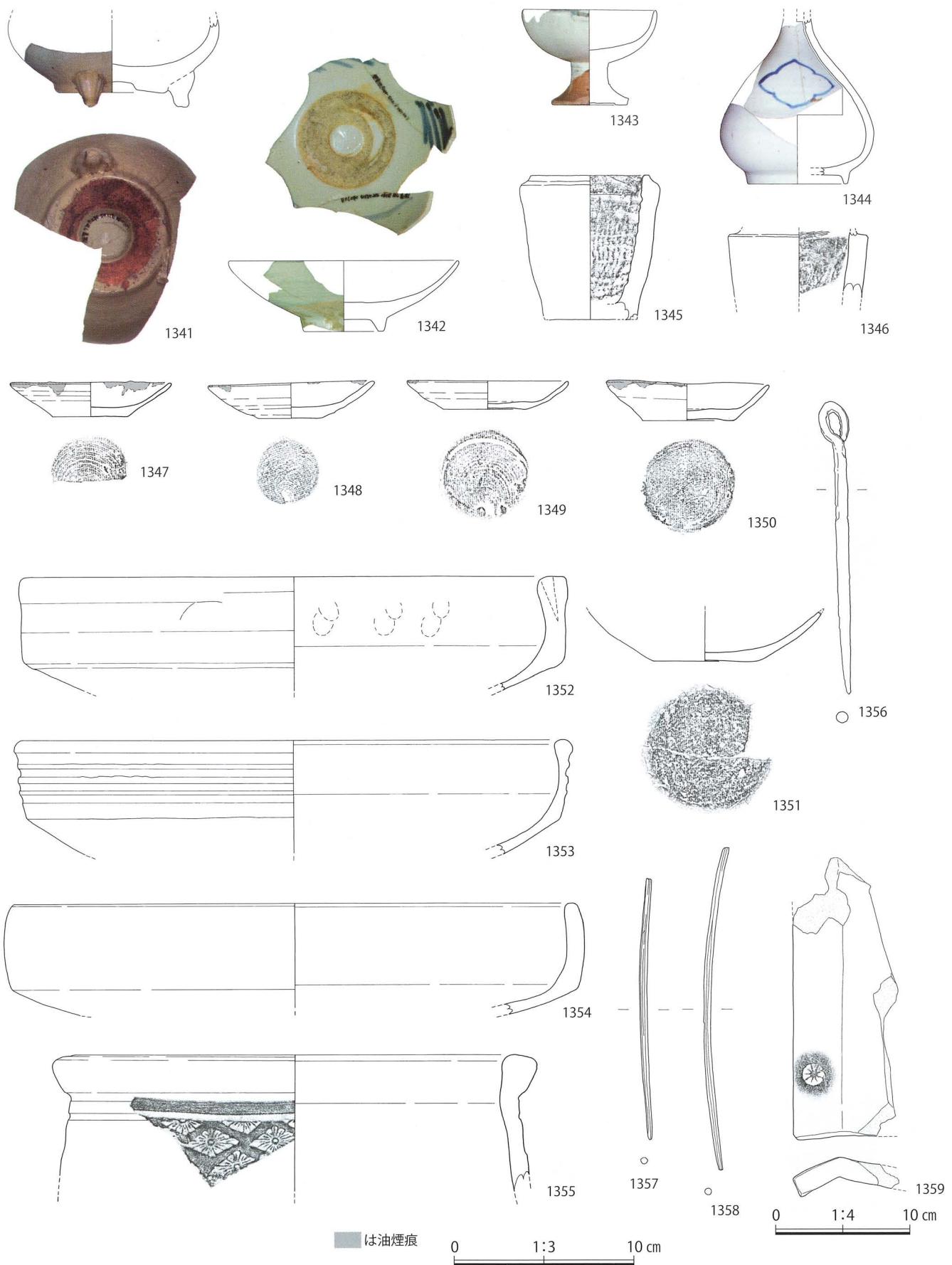
SD02（北東から）



第280図 SK08 平面図・断面図



第281図 SK08出土遺物(1)



第282図 SK08出土遺物(2)

1326は備前の可能性が考えられる陶器の中瓶（人形徳利）である。頸部は細く、肩部が大きく張り出す。

1328は産地不明の陶器で、鉢胴部の装飾部分か把手部分と思われる。布もしくは紐を結わいた状態を精巧に表現している。

1329は須佐唐津の擂鉢で、口径30.5cm、器高13.3cmを測る。高台内には須佐唐津特有のカンナ痕が見られる。

国産磁器 1330～1344は肥前磁器である。1330は雨降文が描かれる桶形小壺、1331は波佐見焼の丸形小碗、1332は丸形小碗、1333・1334は丸形中碗で、1333は波佐見焼、1334は陶胎染付である。1335・1336は大碗で、1335は白磁で漆継ぎによる補修の痕跡が見られる。1337は口径20.1cmを測る浅丸形の中鉢で、漆継ぎによる補修の痕跡が顕著に見られる。1338・1339・1341は香炉である。1338は青磁染付で、外面に柴垣文が描かれる。1339は陶胎染付、1341はくすんだ茶色に近い青磁で、蛇の目凹型高台に足が3つ付く。1340は口径15.3cm、器高5.9cmを測る段重で、外面には笹文が描かれ、腰部に加工がないつくりである。1342は丸形底狭の五寸皿で、見込みに蛇の目釉剥ぎが見られる。1343は口縁部に雨ふり文が描かれる仏飯器で、台底輪高台の形状を呈する。全体的に火を受けて白々としている。1344は腰丸形有首の髪油壺で、窓絵が枠のみ描かれる。窓絵は本来、中に赤絵を描くことが多いが、1344は何も描かれていない。

焼塩壺 1345・1346は焼塩壺の身である。いずれもコップ型を呈する。

土師器皿 1347～1351はロクロで成形された土師器皿で、底部はいずれも回転糸切りで調整されている。1347～1350は口縁部に油煙痕が見られることから、灯明皿として使用したものと思われる。1351は口径13.4cm、推定器高2.8cmを測る大皿である。

土器 1352～1354は焙烙で、1352は口縁部が肥厚して膨らみ、上部からの逆円錐状の穿孔が見られる。外面には煤が付着している。1353は口縁部付近に4条の沈線が廻り、外面に煤が付着している。1354は口縁部が内湾して立ち上がる形状を呈する。

瓦質土器 1355は瓦質土器の壺で、口径24.4cmを測る。口縁部下にはスタンプが押印される。

金属製品 1356は鉄製品で、長さ16.3cm、直径0.7cm、重量28.27gを測る。形状は頭頂部を丸く曲げて穴を成形しており、工具の一種ではないかと思われる。

木製品 1357・1358は箸で、1357は長さ19.4cm、1358は24.0cm、直径はいずれも0.5cmを測る。1359は右棧瓦の可能性が考えられる瓦で、側面にスタンプが押印されている。

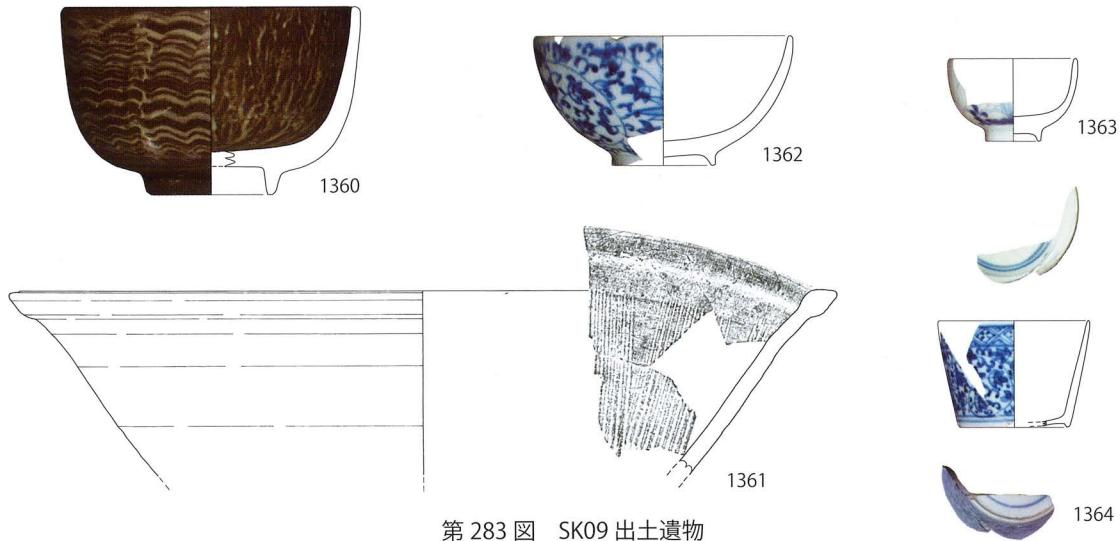
SK09：廃棄土坑（第272図）

SK09 SK09は建物跡SB03の北側に位置する楕円形の廃棄土坑である。東西長1.6m、南北1.1m、深さ0.6mを測る。遺物は肥前陶磁器が出土しており、時期は九陶IV期（1690～1780年代）を示す。

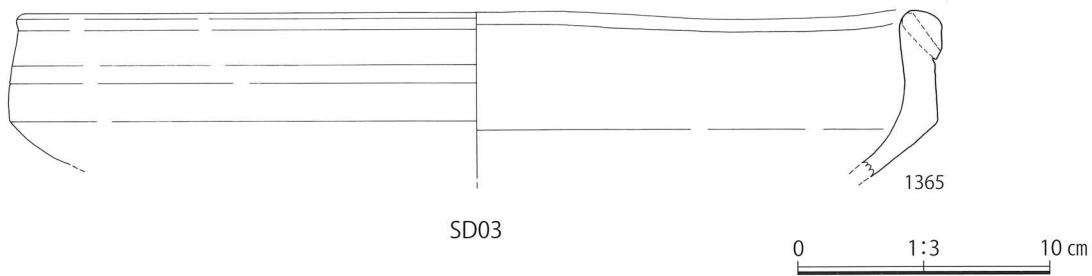
SK09 出土遺物（第283図）

国産陶器 1360・1361は肥前陶器である。1360は口径11.6cm、器高7.5cmを測る腰張形中碗で、外面は細かく波打つ刷毛目文、内面はやや乱れた細かい刷毛目文が施文される。1361は推定口径31.7cmを測る擂鉢で、釉葉は掛かっていない。

国産磁器 1362～1364は肥前磁器である。1362は丸形中碗、1363は丸形小壺、1364は口縁端部外面に四方櫛文が描かれる桶形猪口である。



第283図 SK09出土遺物



第284図 SD03出土遺物

SD03：素掘溝（第272図）

SD03 SD03は建物跡SB03～05が重なり合う部分に位置する素掘溝で、南北長2.7m、東西幅0.7～1.0m、深さ0.3mを測る。遺物は焙烙が1点出土している。

SD03 出土遺物（第284図）

土器 1365は焙烙で、口径34.7cmを測る。口縁端部は粘土を折り曲げて丸くしている。

SK10～12：その他の遺構（第272図）

第2遺構面の建物跡は東側にSB03～05、西側にSB06・07が見られる。建物範囲が途切れている中央部分で検出した多数の土坑の中から、SK10～12について触れる。

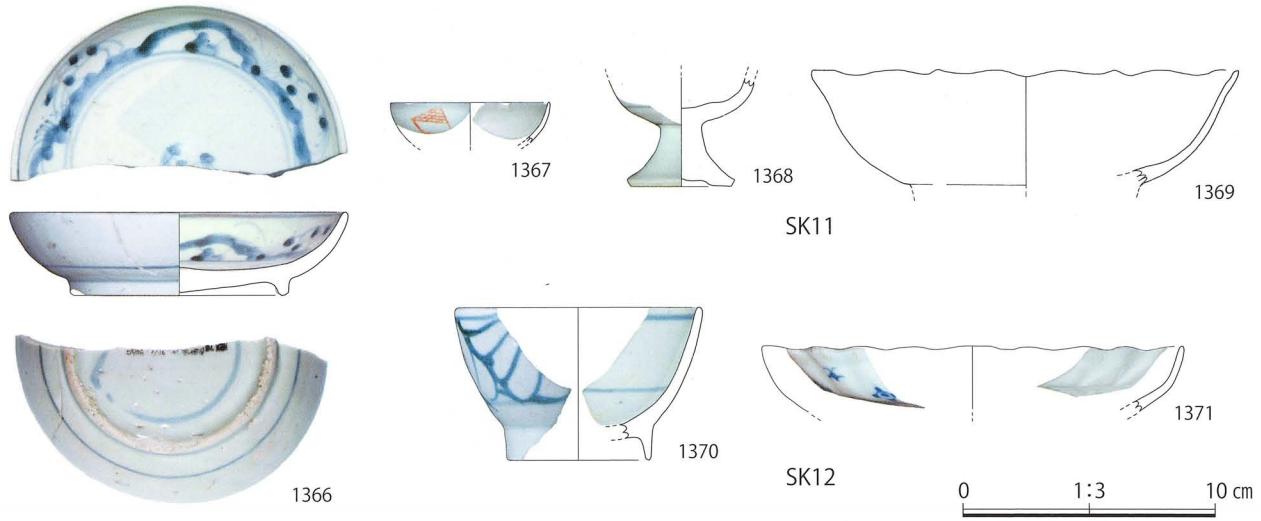
SK10 SK10はSB07の東側に位置し、調査区最南端で検出したいびつな円形土坑である。直径0.7～0.9m、深さ0.25mを測り、内部には大海崎石が2個入れられていた。遺物は肥前磁器が出土しており、時期は18世紀前半代を示す。

SK11 SK11はSB05とSB06の中間辺りに位置する楕円形土坑である。東西長0.78m、南北幅0.5m、深さ0.2mを測る。遺物は肥前磁器が出土しており、時期は九陶IV～V期（1690～1860年代）のものである。

SK12 SK12はSK11から約4mの北西方向に位置する楕円形土坑で、南北長1.1m、東西幅0.65m、深さ0.15mを測る。内部には70cmの大形石が入れられていた。遺物は肥前磁器が出土しており、九陶IV～V期（1690～1860年代）を示す。

その他の遺構 出土遺物（第285図）

SK10 SK10 1366は肥前磁器・波佐見焼の丸形底広五寸皿で、くらわんか時代のものである。高



第285図 SK10~12出土遺物

- 国産磁器 台に砂が付着している。
- SK11 SK11 1367~1369は肥前磁器である。1367は赤絵で羽子板と羽根が描かれた小碗、1368は台底輪高台の仏飯器、1369は口径16.9cmを測る白磁の変形鉢で、内面は型打陽刻で象られている。また、漆継ぎによる補修の痕跡が顕著に見られる。
- SK12 SK12 1370・1371は肥前磁器である。1370は広東形中碗で、大きな菊文が外面を埋め尽くすように何個も描かれる。1371は口縁部が波打つ菊花形の五寸皿で、口鋸が見られる。

SK13：廃棄土坑（第271図）

SK13 SK13は調査区中央、石積溝SD02の北側に位置するいびつな楕円形の廃棄土坑である。東西残存長1.1m、南北幅1.8m、深さ0.8mを測る大形の土坑で、東側はSE02（第249図）に切られている。

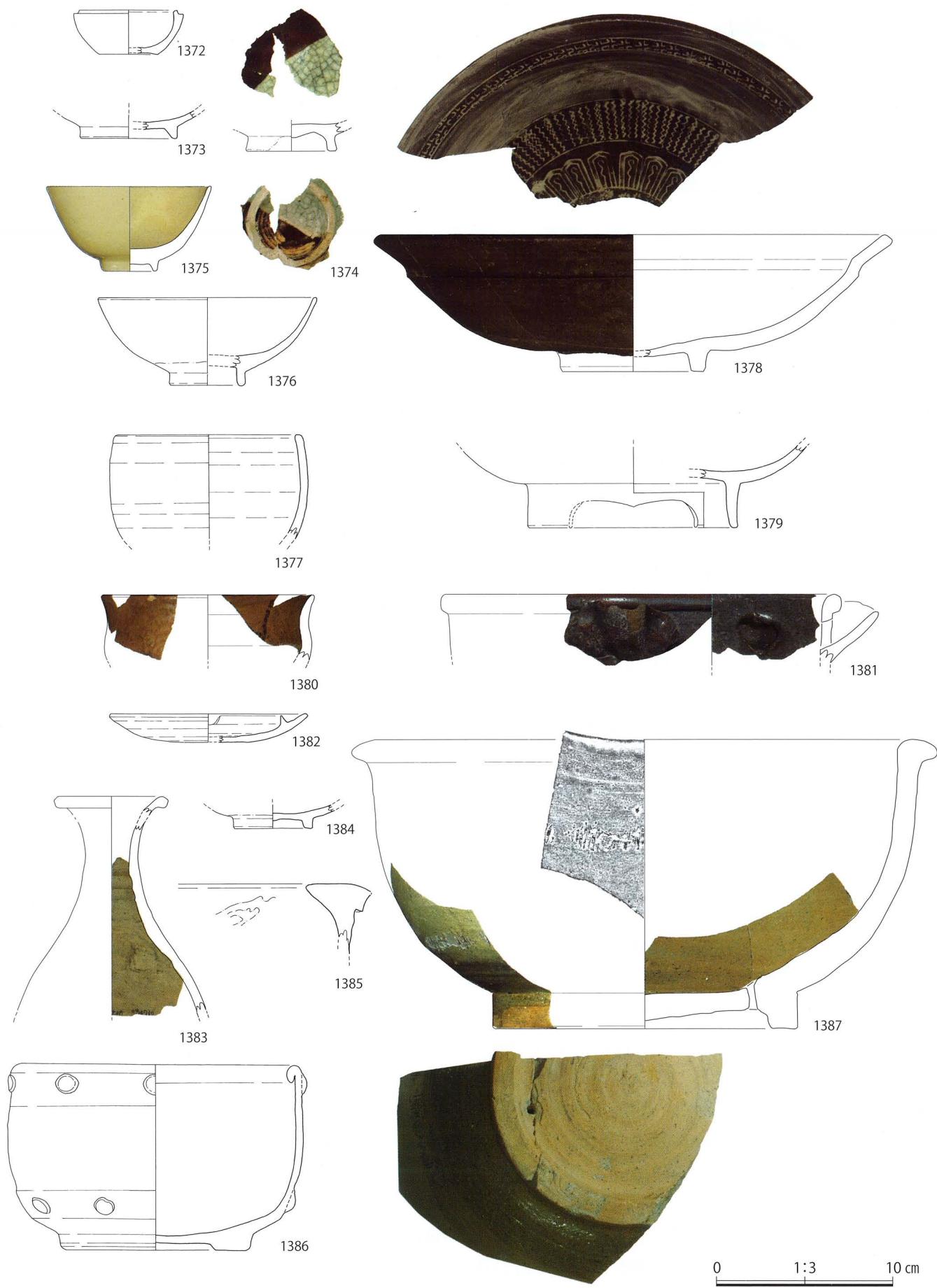
SK13が掘られている位置は第3-1遺構面においても廃棄土坑SK52~55が掘られる場所である（第320図）。さらに第3-2遺構面でも廃棄土坑SK71・72を検出しており（第378図）、造成面を嵩上げしても、同じ場所に同じ性格の土坑を掘るという意識が続いていることがわかる。

SK13からは陶磁器・土師器皿・土器・漆器・木製品・瓦など多数の遺物が出土している。遺物の時期は九陶II-2期からIV期の間で見られるが、年代の古いものは下層面を掘り込んだ際に上がってきたものと思われ、概ねIV期のものと考えている。

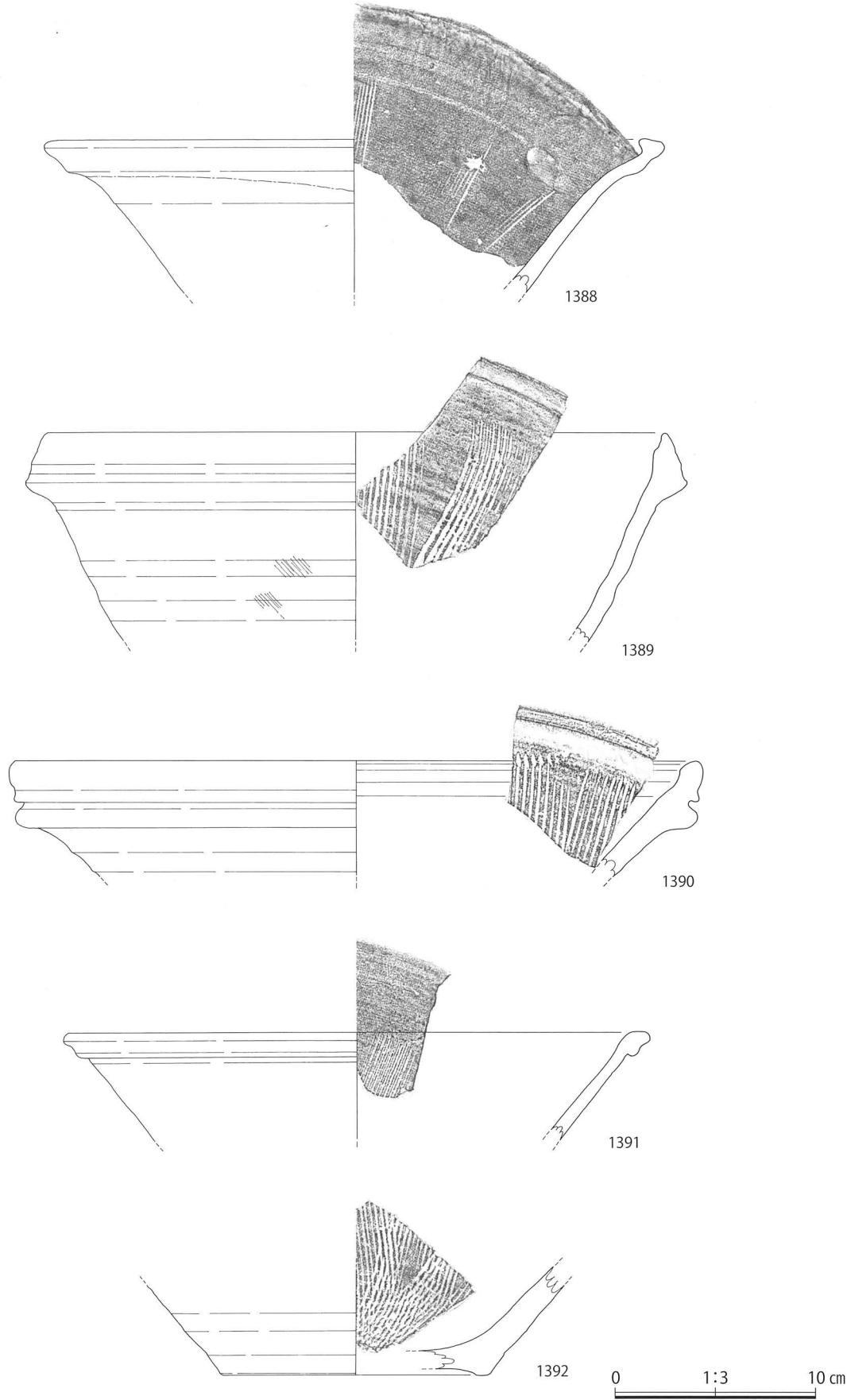
SK13出土遺物（第286~289図）

国産陶器 1372・1375~1379・1381・1384・1385・1387は肥前陶器である。1372は京焼系の小形合子、1375は丸形小碗、1376は口径12.3cmを測る平形中碗、1377は口縁部が内湾する中碗で、上野・高取系の可能性も考えられる。1378・1379は大皿である。1378は口径28.5cm、器高7.8cmを測る三島手の大皿である。1379は高台に透かしが入る木盆形の大皿である。高台が2.5cmと高く垂直に立ち上がる。1381は片口の口縁部分、1384は中碗の高台部分である。1385は推定口径48.6cmを測る大形の甕か鉢である。口縁端部は内面に大きく張り出し、上面に水平面を持つ。1387は口径30.0cm、器高17.0cmを測る大形の植木鉢で、高台の内側に直径0.4cmの穿孔が1ヶ所見られる。

1373は京都・信楽系の中碗である。高台径が5.4cmと大きい。



第286図 SK13出土遺物(1)

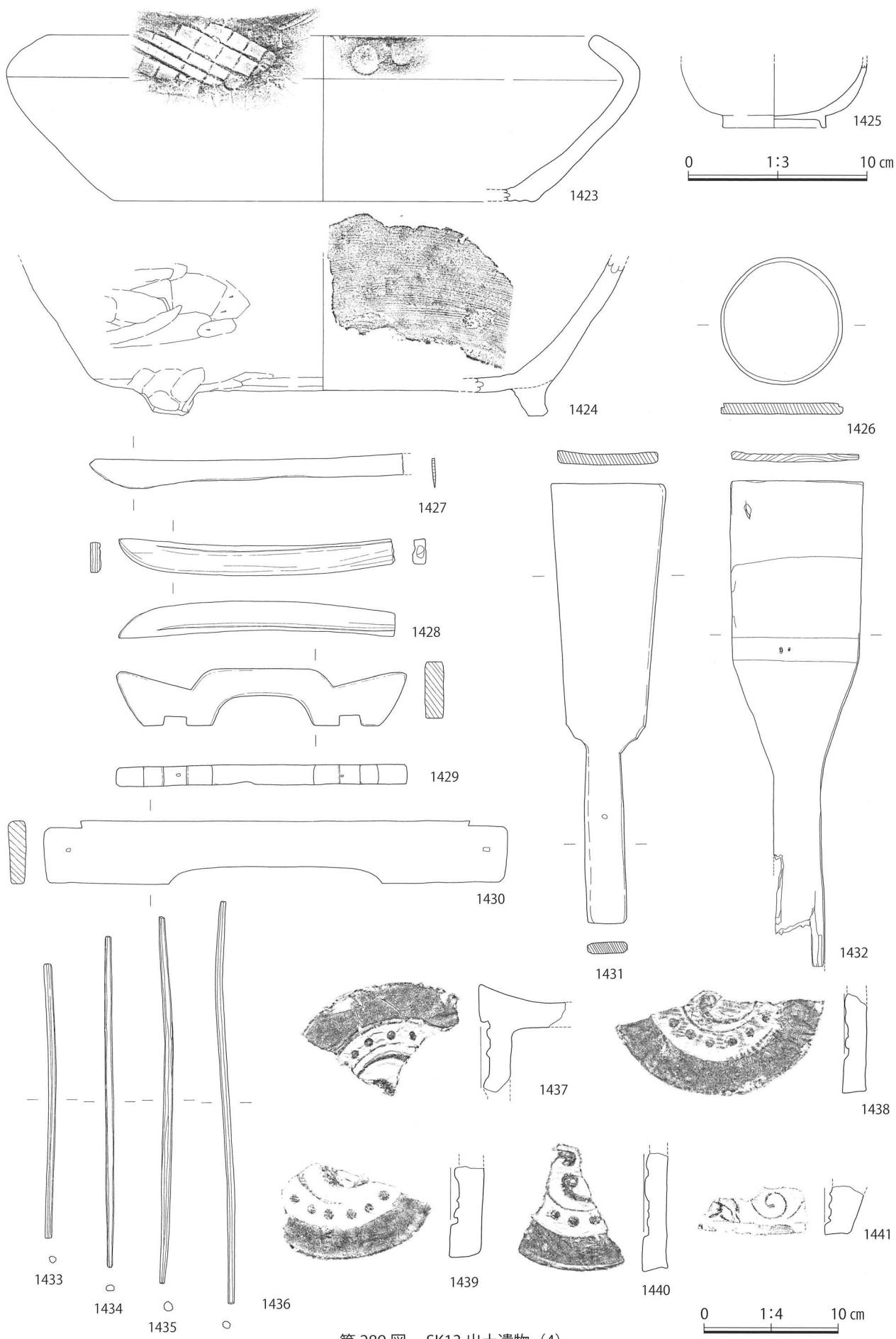


第287図 SK13出土遺物(2)

第5章 殿町 279番地外調査（南屋敷）の概要



第288図 SK13出土遺物(3)



第289図 SK13出土遺物(4)

1374は志野焼の向付である。高台部分のみの残存で、外内面ともに鉄釉が掛け分けられている。

1382は在地陶器と思われる灯明受皿である。口径8.6cm、受部径11.3cmを測る皿で、灯明皿を乗せて使用したものである。

1380・1383・1386は産地不明の陶器である。1380は口径12.1cmを測る甕形の中碗で、口縁部は緩やかに外反する形状を呈する。1383は瓶、1386は口径15.5cm、器高10.5cmを測る大鉢で、口縁端部が内側に折れ曲がって肥厚する。口縁端部外面と腰部外面には、等間隔に直径1.2cmのボタン状の装飾が貼り付けられている。

1388～1392は擂鉢である。1388は肥前陶器で、口縁部は外傾して端部に水平面を持つ。

1389・1390は備前陶器である。1389は口径30.4cmを測り、端部は三角形状の断面を呈する。1390は口縁部に明確な溝を持ち、全体的に肥厚する。

1391・1392は須佐唐津の擂鉢で、1391は薄手の口縁部、1392は底部部分の残存である。

国産磁器

1393～1400・1402～1412は肥前磁器である。1393は型押成形を施した菊花形紅猪口、1394は小壺で、外面全面に縦方向の深い溝が刻まれている。1395は端反形小碗で、高台無釉である。また、外面に「寿」の文字が書かれる。1396は丸形小碗、1397は腰張形小碗である。1398～1400・1402～1404・1410は中碗である。1398は冰裂文と萩文が描かれ、1399は外面全面に菊花文が描かれ、高台内には「福」の銘が入る。1400は赤・緑色の色絵が描かれる。1402・1403はいずれも高台に砂が付着し、無文である。1404・1410は半筒形で、1410は外青磁であり、口縁端部内面に四方擧文が描かれる。1405は蓋物の蓋、1409は小壺、1406～1408は五寸皿である。1406は見込みに手描きの五弁花文が見られ、高台内には「福」の銘が入る。1407は丸形底広の青磁で、口鋸が見られる。1408は丸形底広の蛇の目凹型高台で、高台内に「福」の銘が入る。1411は香炉、1412は香炉の蓋である。直径1.6cmと2.0cmの穿孔が2ヶ所見られるが、元来どのような形状であったかは判明していない。

貿易磁器

1401は中国磁器で、漳州窯系の中碗である。口径13.6cmを測る。

土師器皿

1413～1422は土師器皿である。1413・1414は手づくね成形、1415・1416は偽手づくね成形と呼ばれるもので、1417～1422は底部が回転糸切りで調整されているロクロ成形である。1414・1416・1417・1419～1421には油煙痕が見られることから、灯明皿として使用されていたと考えられる。

土器

1423・1424は土器で、火鉢である。1423は口径30.7cm、器高9.3cmを測る大形で、口縁部は内面に強く倒れるつくりになっている。いずれも外面に煤が付着している。

漆器

1425は腰丸形の漆椀である。外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られており、外面には赤絵、高台内に赤絵草文が描かれている。

木製品

1426～1436は木製品である。1426は曲物で、直径9.5cmを測る柄杓の底板である。1427は片刃のヘラである。1428は薙刀の模倣品と思われるもので、刀身部分が精巧につくり出されている。1429は桶に取り付けられた把手部分かと思われる。1430は膳か折敷の脚部ではないかと思われる。1431・1432は羽子板で、1431の把手には火起こしの痕跡が見られる。二次的に火起こしで使用したものと思われる。1433～1436は白木の箸で、1433は長さ20.5cmと短く、1436は長さ30.0cmを測る長い箸である。

瓦

1437～1441は瓦である。1437～1440は軒丸瓦で、いずれも左三巴文が中央に入り、その周囲を珠文が廻っている。1438は左三巴文・珠文の範囲に横方向の粗い線が入っている。

これは瓦を製作する際に使う木製の型が、劣化している状態のものを使ったことがわかる遺物である。使い古した型で瓦をつくるなければならなかったということから、当時の時代背景などを知ることができよう。⁽⁹⁾ 1441は軒平瓦で、唐草文様が刻まれている。

その他の遺構（第271図）

ここで触れる遺構は、建物跡が広がる範囲から北側に位置するものである。東側は大部分が近代の搅乱を受けていたが、西側では遺構面を確認し、土坑などを検出した。

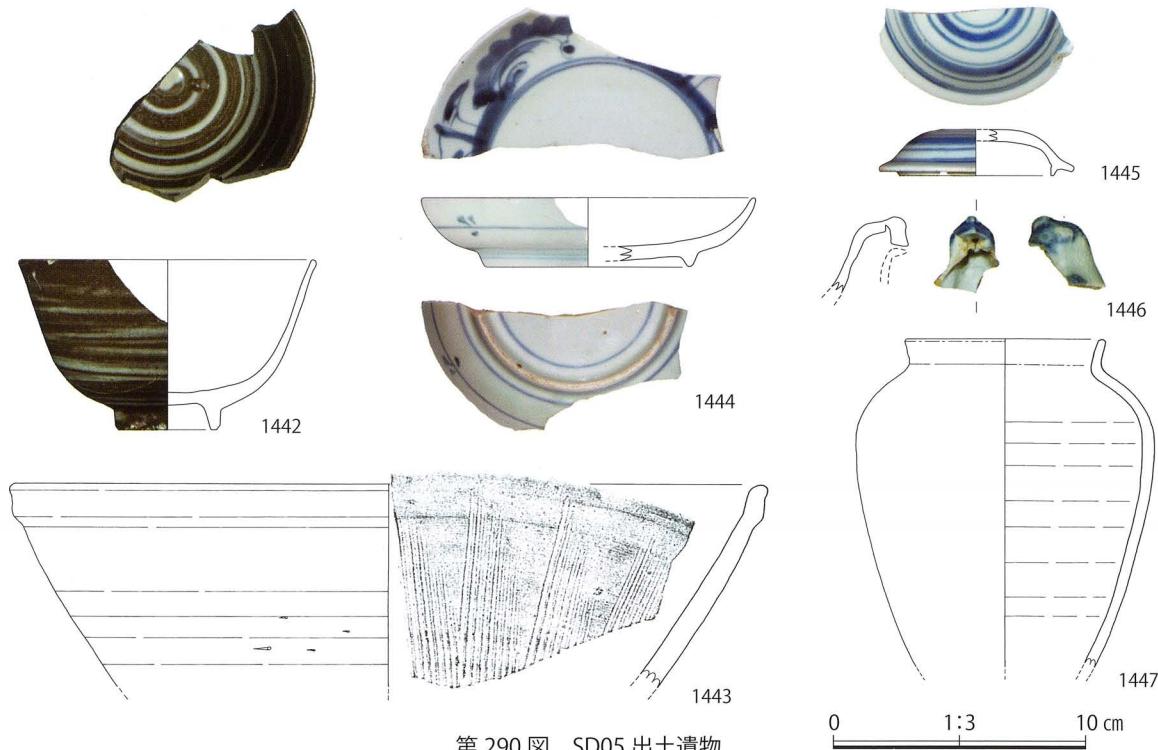
SD05・
SK14~27 SD05はSK13の西側に位置する溝で、東西方向に走る。SK14はSD05からさらに西側に位置する。SK15は調査区東側に位置する素掘の土坑で、SK16は調査区中央部分に位置するやや大形の楕円形土坑である。SK17は屋敷境石積溝SD01に隣接する小形土坑で、SK18は南北方向を長軸とする長方形に近い土坑である。SK19はSD01に程近い場所に位置する正円形の土坑で、底面は水平で板が敷かれていた。SK20~27は調査区西端に位置する一角で検出した土坑群である。以下、出土遺物の詳細を述べる。

その他の遺構 出土遺物（第290~293図）

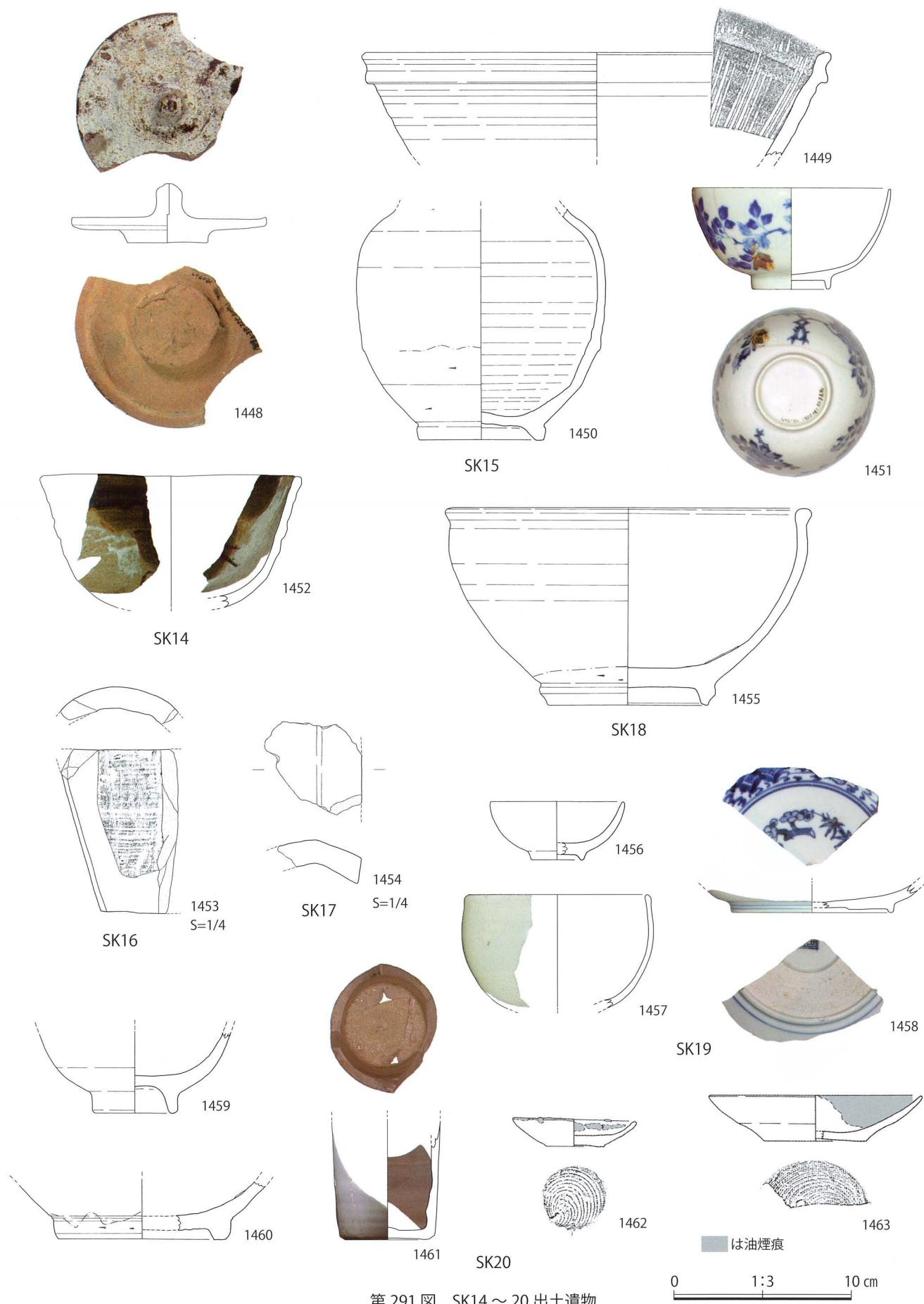
SD05 1442は肥前陶器の端反形中碗で、外内面ともに比較的間隔の大きな刷毛目文が施文される。また、高台に砂が付着している。1443は須佐唐津の可能性が考えられる擂鉢である。口径29.4cmを測る。

国産磁器 1444~1447は肥前磁器である。1444は丸形底広の五寸皿である。1445は小形の蓋物蓋で、外面には刷毛目文のような同心円文が描かれている。1446は鶏を模した水滴で、頭部部分が残存している。嘴部分から水を出すしづみでつくられている。1447は口径7.8cm、残存高13.0cmを測る白磁の小壺である。口縁部は外傾気味に開き、肩部は大きく張って最大径11.9cmを測る。底部部分を欠損しているが、全体的に卵形を呈する。

SD05から出土した遺物は概ね九陶IV期（1690~1780年代）のものが多い傾向にあった。
SK14 1452は在地陶器で口径14.8cmを測る中鉢である。外面には暗緑色の釉薬を掛けて

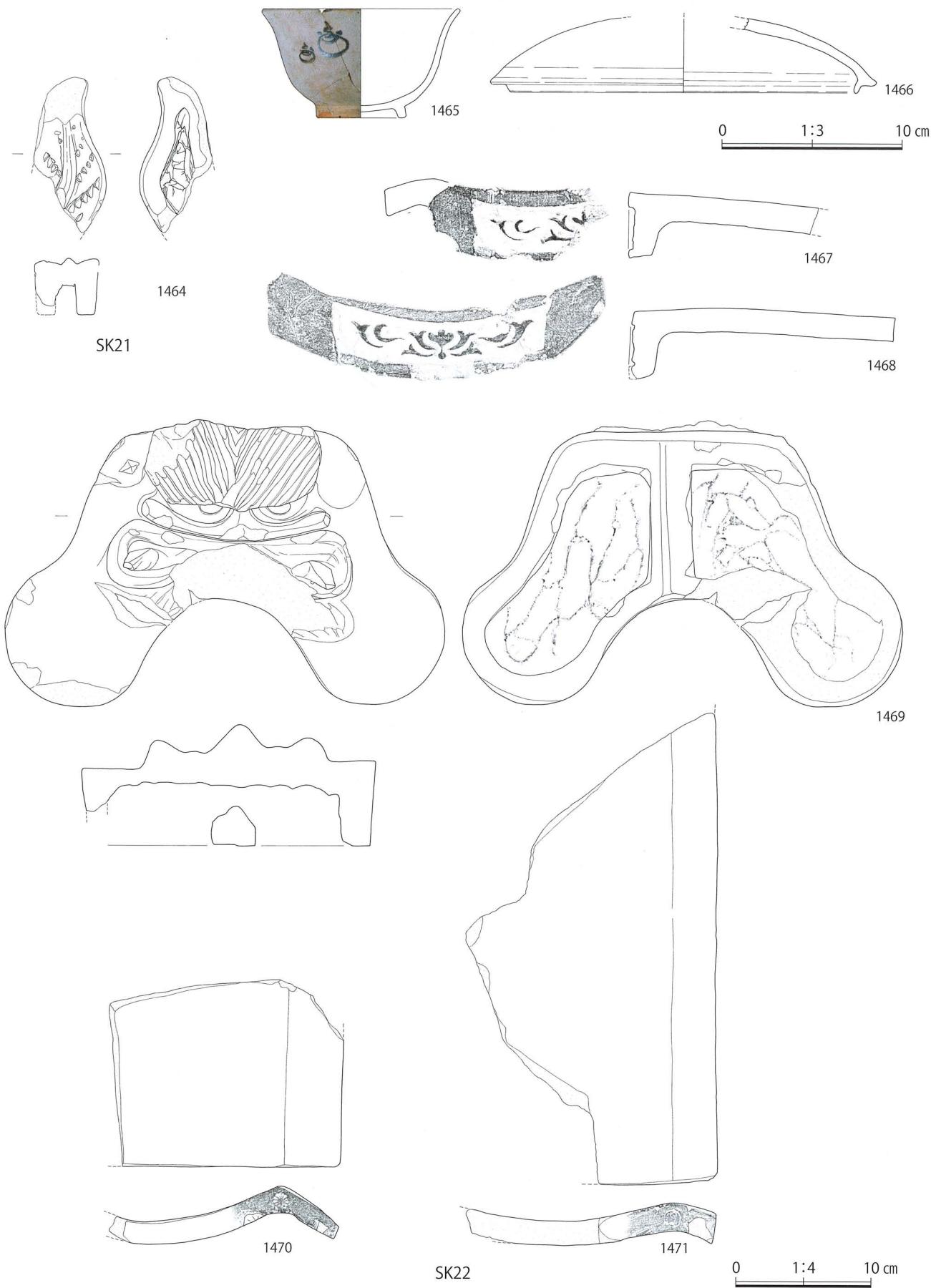


第290図 SD05出土遺物

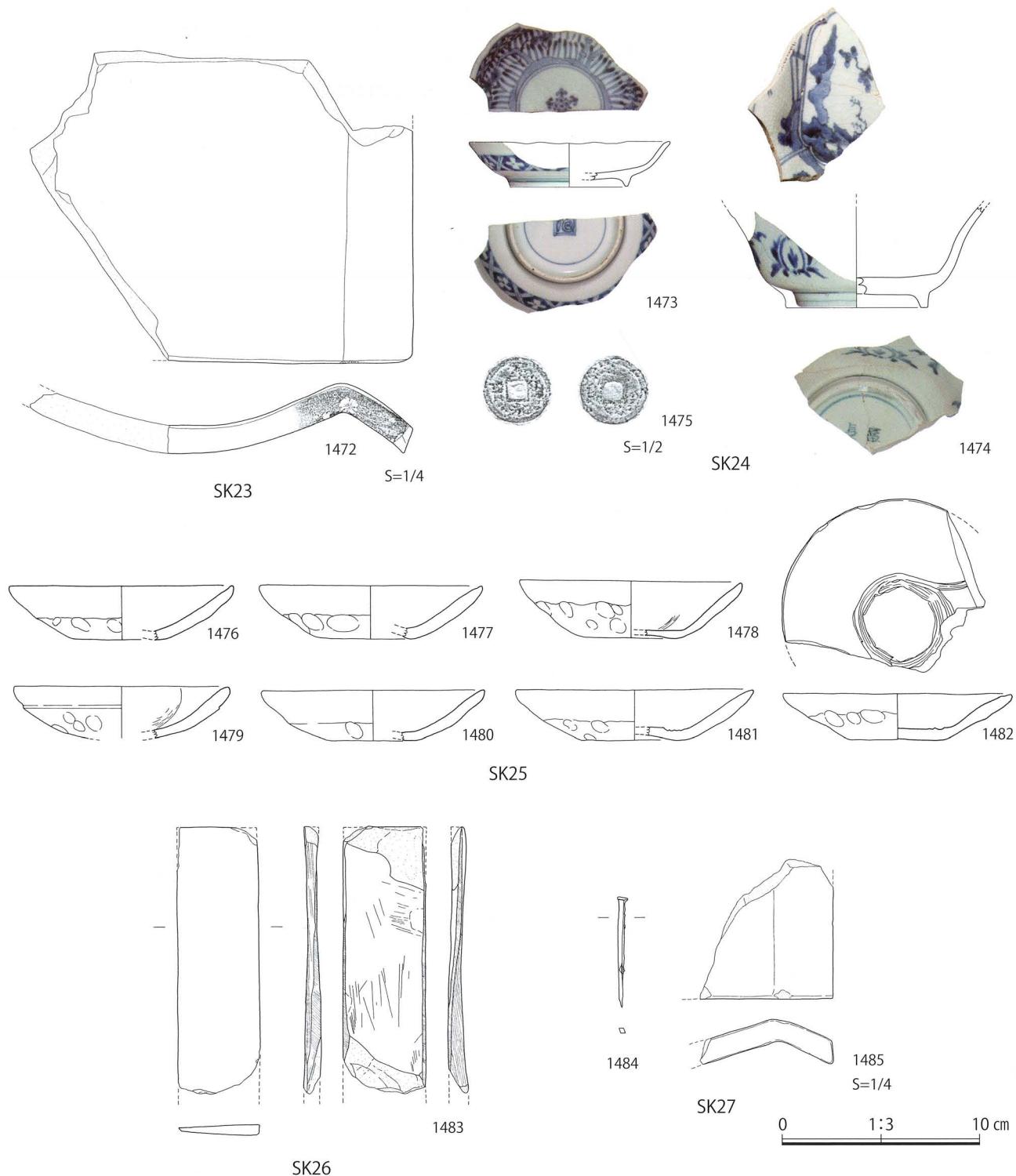


第 291 図 SK14 ~ 20 出土遺物

第3節 第2遺構面



第292図 SK21・22出土遺物



第293図 SK23～27出土遺物

国産陶器

おり、織部焼風を目指した復興織部と考えられる。

SK15

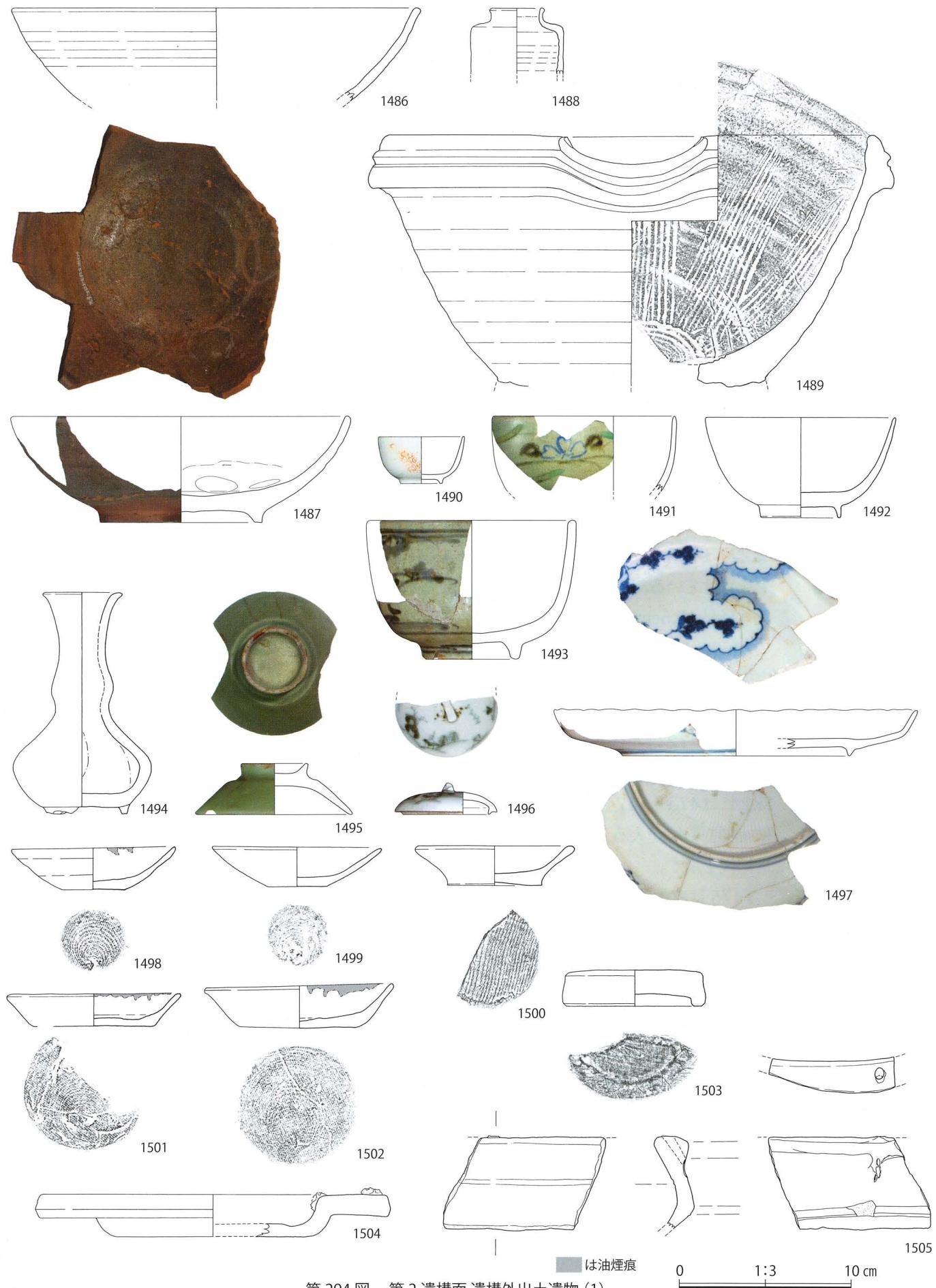
SK15 1448～1450は肥前陶器である。1448は急須の蓋で、底部は回転糸切りで調整されている。1449は口径25.9cmを測る擂鉢で、全面に施釉されている。1450は胴部が丸く張り出した瓶で、底部から高台にかけて無釉である。

国産磁器

1451は肥前磁器で、丸形中碗の完形品である。

SK15は九陶III期（1650～90年代）を示すと思われる。

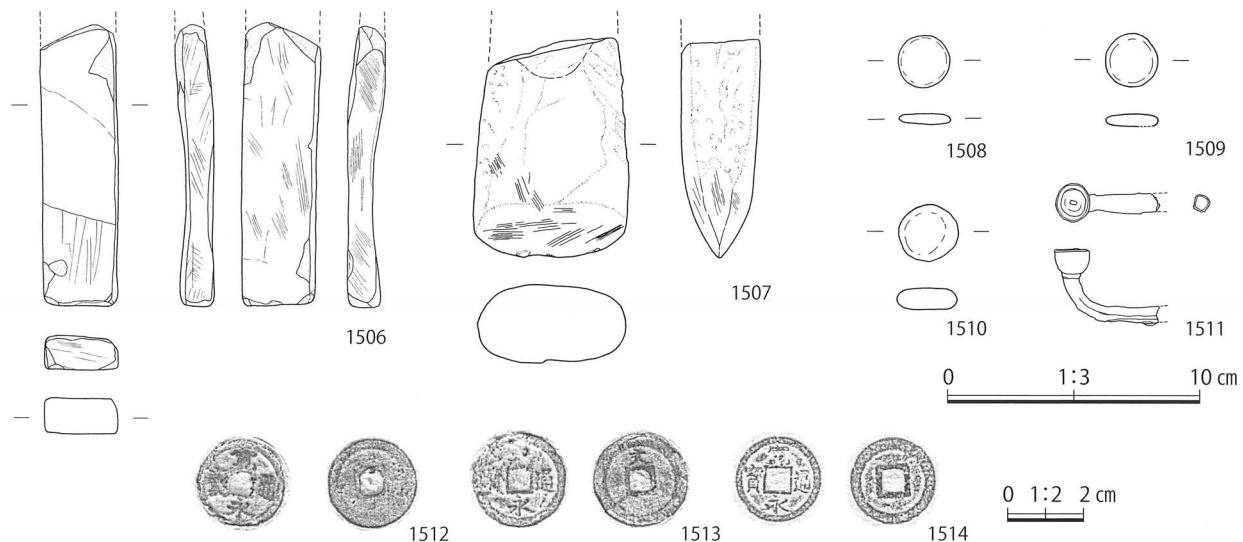
- SK16 SK16 1453は棟込瓦で、コビキBである。内面に布目が見られる。
- SK17 SK17 1454は棟瓦か軒瓦の小片である。
- SK18 SK18 1455は肥前陶器の片口で、内面に胎土目痕が見られる。九陶IV期(1690~1780年代)を示す。
- SK19 SK19 1457は京都・信楽系陶器で、半球形の中碗である。口縁部は内湾し、腰部は丸く張る。
1456・1458は肥前磁器である。1456は浅半球形の薄手酒杯か紅猪口である。1458は蛇の目凹型高台の五寸皿で、高台内に「福」の銘が入る。また、断面に漆継ぎによる補修の痕跡が見られる。SK19は九陶IV~V期(1690~1860年代)を示すものと思われる。
- SK20 SK20 1459・1460は肥前陶器である。1459は呉器形中碗で、全体的に厚手で重量感がある。
九陶III~IV期(1650~1780年代)を示す遺物である。1460は内面に胎土目痕が見られる鉢である。
- 国産磁器 1461は産地不明の青磁である。筆立てのような筒形を呈し、底部外面は釉剥ぎされている。
幕末期のものか。
- 土師器皿 1462・1463はロクロ成形による土師器皿である。いずれも口縁部には油煙痕が残り、灯明皿として使用されていたことが考えられる。
- SK21 SK21 1464は鬼瓦の一部分で、最大長11.5cm、最大幅5.0cmを測るものである。刻まれた文様が鱗のようにも見えるが、この破片が鬼瓦のどの部分なのかは判別できていない。
- SK22 SK22 1465・1466は在地陶器である。1465は端反形中碗で、外面に宝珠文が描かれる。
国産陶器 火を受けているため、全体的に光沢感が見られない。1466は在地・布志名焼の甕の蓋で、かえり径が19.5cmと大形のものである。
- 瓦 1467・1468は唐草鎌軒瓦である。1468は完形に近いものである。1469は鬼瓦で、ほぼ完形に近いため鬼の表情が見て取れる。1470・1471は左棟瓦で、側面にスタンプが押印されている。
- SK23 SK23 1472は左棟瓦である。最大長20.5cm、最大幅25.9cm、厚み2.0cmを測り、全体的に銀化している。側面にスタンプが押印されている。
- SK24 SK24 1473・1474は肥前磁器である。1473は菊花形小皿で、見込みに五弁花文、高台内に「福」の銘が入る。
国産磁器 1474は方形小鉢で、高台内に「富貴長春」の銘が入る。いずれも18世紀代を示す。
- 古銭 1475は寛永通宝で、裏面上部に「文」が刻まれる文銭である。
- SK25 SK25 1476~1482は手づくね成形による土師器皿である。口径11.5~12.0cm、器高2.3~2.9cmを測り、同法量の中皿がまとまって出土している。1482の底部内面ナデ上げ調整は、工具による角ばったものとなっている。
- SK26 SK26 1483は砥石である。最大長13.5cm、幅4.1cmを測り、厚みは均一ではなく最大で0.8cm、中央部分は薄くなり0.6cmである。刀用の砥石であると考えられ、使用する回数が多くかった中央部分が磨り減っている。
- SK27 SK27 1484は最大長5.5cm、重量0.42gを測る鉄製の釘である。
1485は左棟瓦右下部分の破片で、側面にスタンプは見られない。



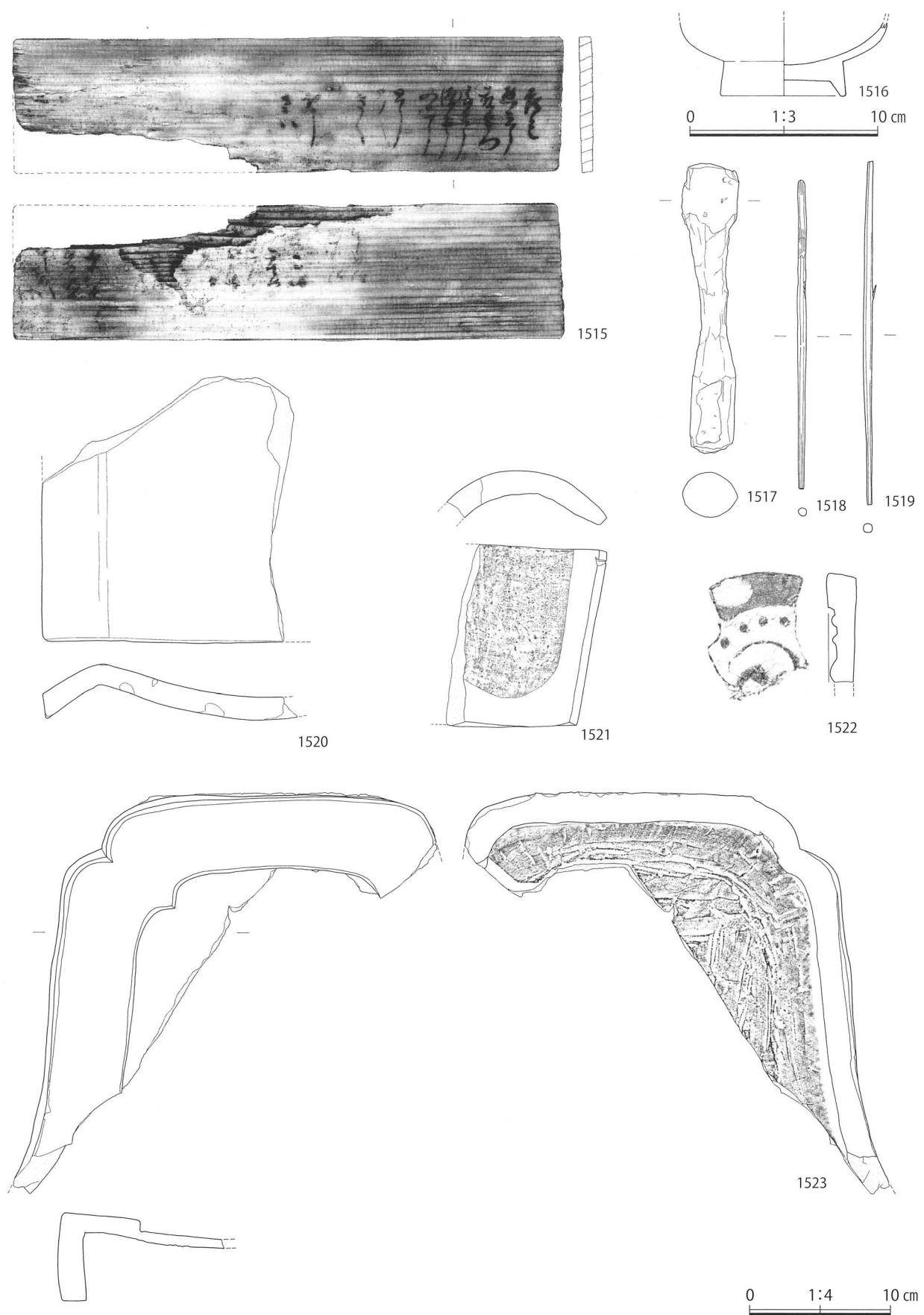
第294図 第2遺構面 遺構外出土遺物(1)

第2遺構面 遺構外出土遺物（第294～296図）

- 国産陶器 1486は須佐唐津陶器の中鉢で、灰釉捏ね鉢である。口径23.3cmを測る。
- 1487・1488は肥前陶器である。1487は中鉢で、内面に貝止めの痕跡が見られる。1488は小瓶で、肩部が直角的に屈曲する。
- 1489は備前の擂鉢で、8.6cmの片口を持つものである。
- 国産磁器 1490～1497は肥前磁器である。1490は赤絵の腰張形小壺、1491・1492は中碗である。1491は青磁染付で、外面に緑・青色などで花文が描かれる。1493は陶胎染付の大碗である。1494は瓢箪形三足の徳利である。外面には東屋山水文が描かれ、高台内には「大門成化」の銘が入る。1495は外青磁の中碗蓋、1496は小形の蓋物蓋、1497は変形形の五寸皿で、口鋸が見られる。
- 土師器皿 1498～1502は口クロ成形による土師器皿で、このうち1498・1501・1502には油煙痕が見られることから、灯明皿として使用されたものと考えている。
- 焼塩壺 1503は焼塩壺の蓋である。逆四字形を呈し、受口側端部は面取りが施されている。形押し成形で、内面には布目痕が見られる。
- 瓦質土器 1504は瓦質土器である。外面に煤が付着している。
- 土器 1505は焙烙である。外面に煤が付着している。
- 石製品 1506は砥石で、残存長11.2cm、幅2.9cm、厚みは1.3cmを測り、中央部分は使用の痕跡のため厚み1.0cmに達している。1507は蛤刃石斧で、残存長8.8cm、刃部幅6.2cmを測る。1508～1510は碁石で、いずれも直径2.1～2.4cm、厚みは1508・1509が0.5cm、1510が0.8cmを測る。
- 金属製品 1511は真鍮製の煙管で雁首部分である。最大長4.1cm、火皿径1.4cm、小口径0.6cmを測る。
- 1512～1514は古銭で、1512は古寛永、1513は文銭、1514は新寛永である。
- 墨書き木製品 1515は長さ7.3cm、幅29.2cmの大きな板の両面に墨書きが見られるもので、板の短辺に縦書きされている。このうち解読が可能であったのは片面で、左端から「庄三」「惣三郎」「藤右衛門」「弥三郎」「源二郎」「五口郎」と読める。わずかな空白を置いた隣には「とり」「とく」「きく」「きし」「さい」などと書かれている。人名は全員が男性であると思われる。右側の平仮名表記は、女性の名か、もしくは食材などの可能性が考えられる。



第295図 第2遺構面 遺構外出土遺物（2）



第296図 第2遺構面 遺構外出土遺物 (3)

瓦	1520は右棧瓦の可能性がある。1523は鬼瓦で、最大長28.5cm、最大幅30.0cmを測る大形のものである。1521は棟込瓦で、コビキAである。1522は軒丸瓦で、中央に左三巴文があり、その周囲を珠文が廻る。
漆器	1516は腰丸形の漆椀である。漆は外面を黒色、内面を赤色で塗られており、外面には黄色で二重丸、赤色で梅を3つ配置する文様が描かれている。
木製品	1517は杵型木製品で、長さ20.6cm、最大径3.9cm、最小径1.8cmを測る。中央部分が上方・下方よりも細く加工されているのは、この部分を握りやすくするためにと思われる。
	1518・1519は箸で、1518が21.9cmとやや短く、1519が24.3cmを測る。直徑はいずれも0.6cmである。

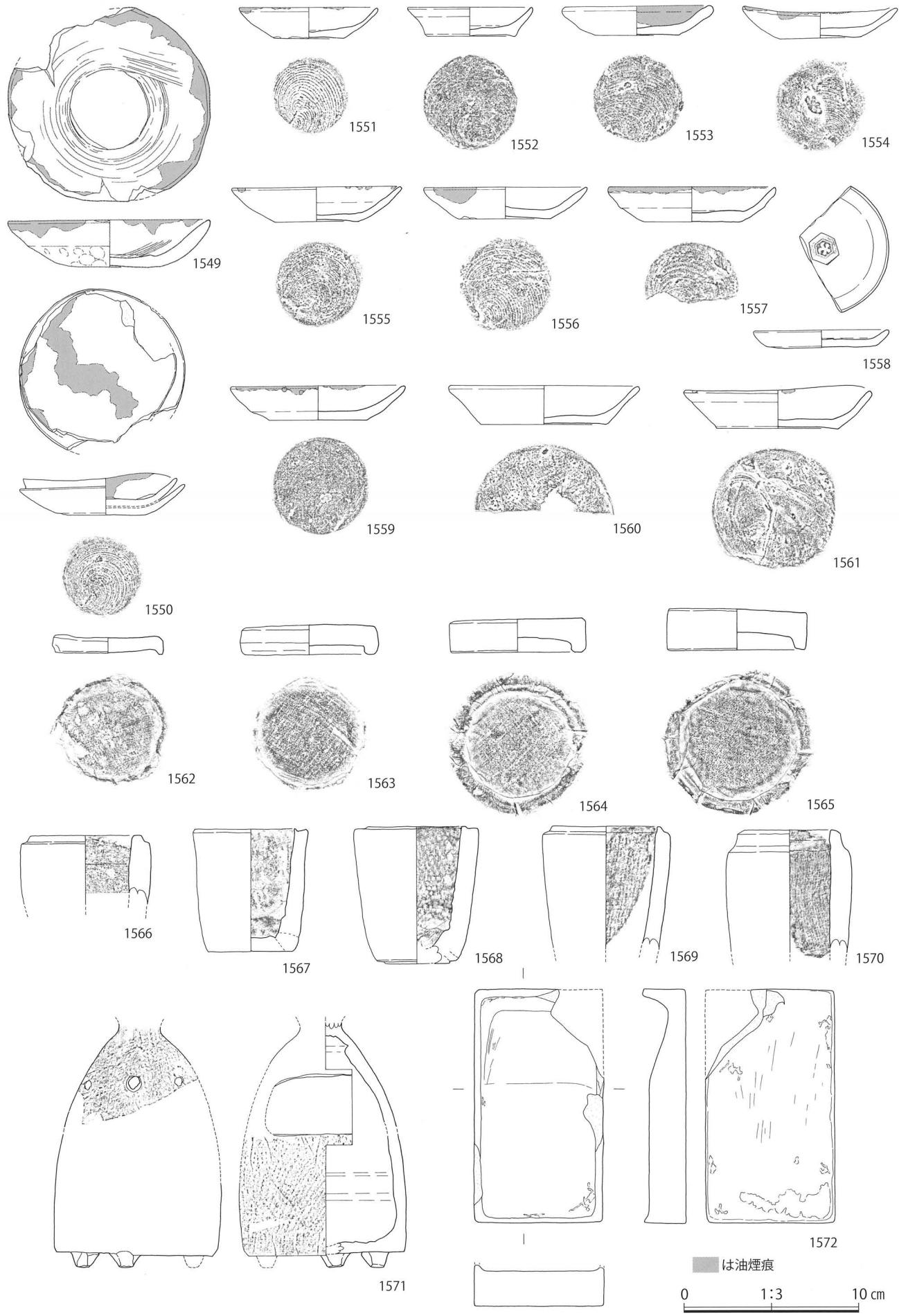
第2遺構面覆土 出土遺物（第297～299図）

国産陶器	ここで取り上げる遺物は、第2遺構面の上層から出土したものである。 1524～1526・1528・1532は京都・信楽系陶器である。1524の高台内には墨書文字が見られるが解読はできなかった。1525は杉形中碗、1526は半球形中碗である。1528は腰折形中碗で、外面に菊花文が描かれる。1532は蓋物の蓋で、かえり径7.7cm、器高2.0cmを測る。 1527・1529は瀬戸・美濃陶器である。1527は浅半球形中碗、1529は半球形中碗で、高台内に「○」のスタンプが押印されている。
国産磁器	1531は在地の轆轤形中碗である。口径12.5cm、器高8.2cmを測る。外面にスタンプ印が押してあり、おそらく「樂山」 ⁽¹⁰⁾ と刻まれていると思われる。
土師器皿	1533～1548は肥前磁器である。1533はミニチュア碗、1534～1538はいずれも白磁の小壺・小碗・中碗である。1535の外面は、型紙白絵技法で紅葉の葉が浮き出すように施されている。1536は口クロ型打技法で、外面全面に扇を散らした優美な器である。1538は断面に漆継ぎによる補修の痕跡が見られる。1539は陶胎染付白化粧の大碗である。1540は青磁の香炉で、蛇の目凹型高台に窯道具が付着している。1541は型打陽刻された白磁の極小皿、1542は青磁の仏花瓶で、漆継ぎによって補修されている。1543は水甕か大形の香炉で、口径27.6cm、胴部最大径28.8cmを測る。断面は漆継ぎで補修されており、絵付け・絵柄とともに秀逸である。1544は陶胎染付の建水で、器高15.6cmを測る。口縁部にかけて径が小さくなり、瓢箪形に近い形状を呈する。1545・1546は水滴か置物かと思われる。いずれも色絵で美しく施文されている。1547は鳥型の水滴で、嘴部分から水が出るしづみになっている。1548は鼠型の根付で、上方に紐を通すための穴が開けられている。
焼塩壺	1549は手づくね成形による土師器皿で、口縁端部に油煙痕が見られることから、灯明皿として使用されていたものと考える。1550～1561は口クロ成形による土師器皿で、この内1550・1551・1553～1555・1557・1559・1561は口縁端部に油煙痕が見られることから、灯明皿と考える。また、1558の底部内面には、六角形の中に「大」の文字が入っている印が押されている。
土器	1562～1570は焼塩壺で、1562～1565は蓋、1566～1570は身である。蓋は外径6.4cm～8.7cmの間でおさまり、いずれも逆四字形を呈する。内面には布目の痕跡が見られる。身は全てコップ形を呈し、端部の形状は様々である。

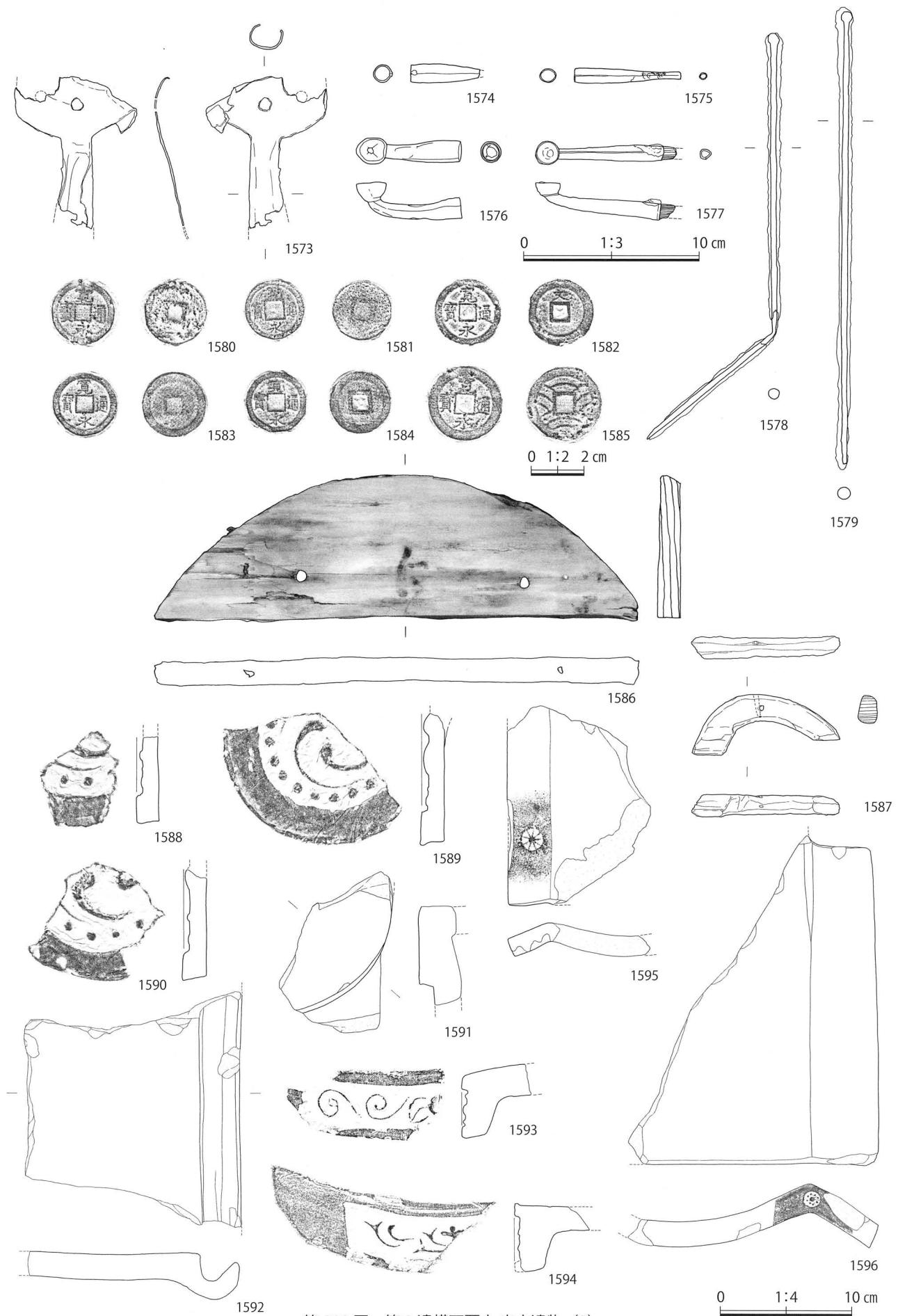


第297図 第2遺構面覆土出土遺物(1)

第3節 第2遺構面



第298図 第2遺構面覆土出土遺物(2)



第299図 第2遺構面覆土出土遺物（3）

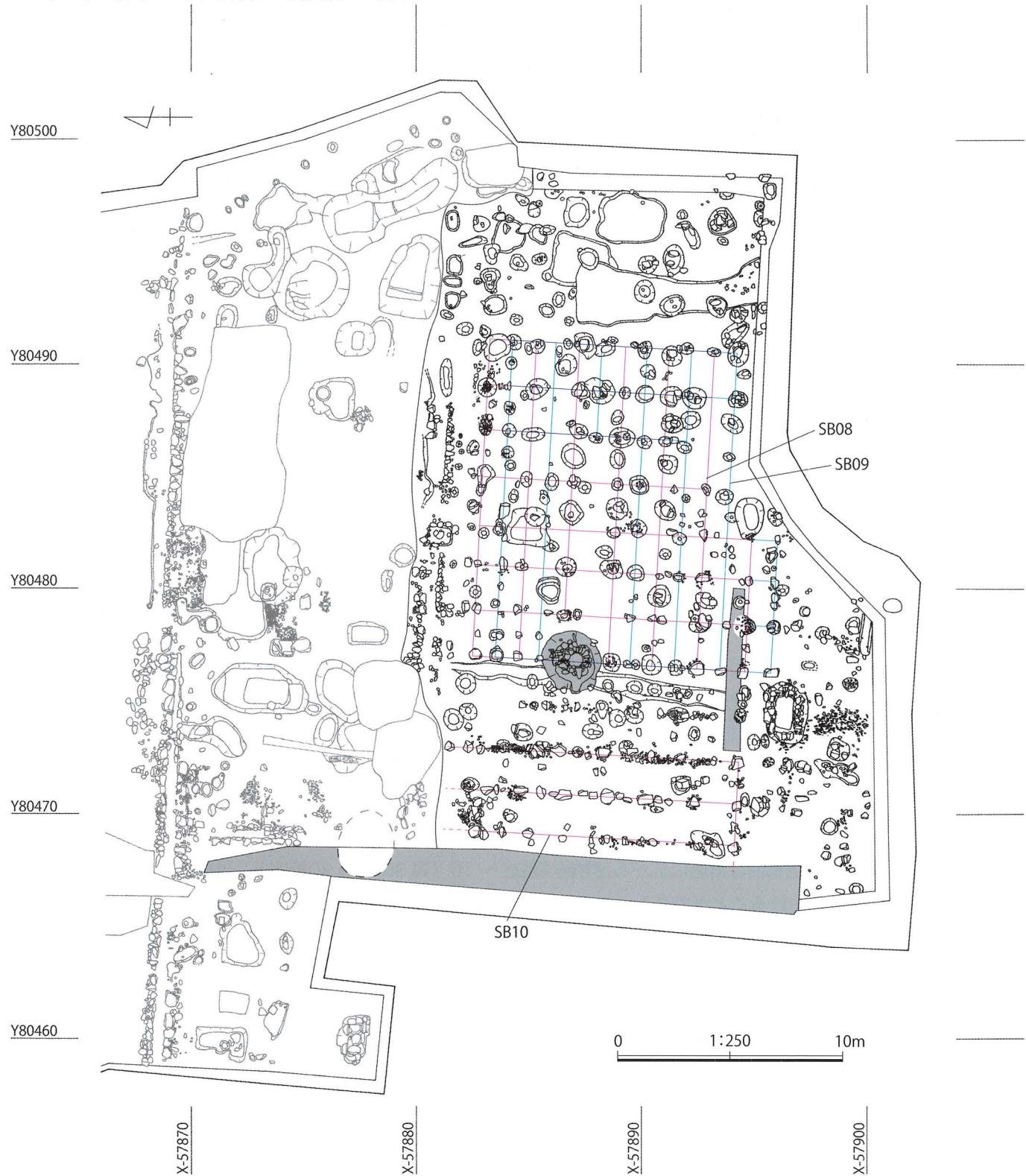
の跡が無数に見られる。装飾として付けられたものか。断面には漆継ぎによって補修された痕跡が確認できる。
石製品 1572は長さ13.4cm、幅7.4cm、厚み2.35cmを測る硯である。海最深部は1.4cmほど抉られている。
金属製品 1573は青銅製の十能で、最大長8.5cm、最大幅6.9cm、厚みは0.2cmを測る。 1574～1577は真鍮製の煙管で、1574・1575は吸口部分、1576・1577は雁首部分である。 1577は竹製の羅宇が残存している。
1578・1579は鉄製の火箸のようなもので、30cm前後の長さを測る。1578は全体の3分の1あたりで約50度屈折している。
1580～1585は古銭で、1580・1581は古寛永、1582は文銭、1583・1584は新寛永、1585は四文銭である。
墨書木製品 1586は桶の蓋か底板と思われる曲物の破片である。残存部分には両側に1ヶ所ずつ穿孔が開けられ、割れ口の側面には目釘の痕跡が確認できる。二次的に何かに転用された可能性が高い。さらに片面の中央部分には墨書文字が見られ、「白」と書かれている。
木製品 1587は把手状を呈する木製品である。全体を丁寧な面取りで仕上げてある。また、湾曲する部分に目釘の痕跡が見られる。
瓦 1588～1590は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲を珠文が廻る。1591は鬼瓦の一部分で、最大長7.7cm、最大幅12.0cm、厚み3.3cmを測る。表面には直径約17.0cmの浮き彫りが見られる。1592は右端に幅2.5cm、深さ1.8cmほどの溝を擁する瓦だが、どの種類であるかの判別はできていない。1593・1594は軒平瓦で、唐草文が刻まれている。1595は右棧瓦の可能性が考えられるもので、表面にスタンプが押されている珍しいものである。 1596は左棧瓦で、側面の屈折部分にスタンプが押されている。

第4節 第3遺構面

第3遺構面の概要 第3遺構面は南側に広がる建物跡SB08～10（第301図）の範囲と、北側の細長い帯状の区画に分けることができる。この帯状区画では多数の廃棄土坑を検出しており、南側とは違う空間であったと思われる。建物跡の北側に隣接する石積溝SD07（第321図）は建物に伴う雨落ち溝であると考えており、この溝を境に、南側は屋敷地、北側は廃棄土坑などをつくる場所、という認識があったように思われる。

帯状区画の直下にはもう一面遺構面が存在するのを確認した。SD07がつくられたほぼ同じ位置、東西軸は同じで若干北へ移動した位置に、素掘の浅い溝SD10（第366図）を検出した。溝の内部には拳大の石が多数入れられていることから、建物に伴う雨落ち溝の可能性が高いと考えられる。溝以外の他の遺構も上層面とは異なった様相を呈していた。この2面は建物跡が存在していた時期に2回造成を行ったと判断し、それぞれ第3-1遺構面、第3-2遺構面と呼称する。SD07・10に関してはそれぞれ異なる遺構面で検出していることから、建物跡に伴う溝であるが、各遺構面で詳細を記すこととする。なお、建物跡は第3-1・3-2遺構面時をまたいで継続していたことになり、この部分はそのまま第3遺構面として扱っている。

本節では第3遺構面の詳細を述べ、第3-1遺構面は第5節、第3-2遺構面は第6節でその詳細に触れる。



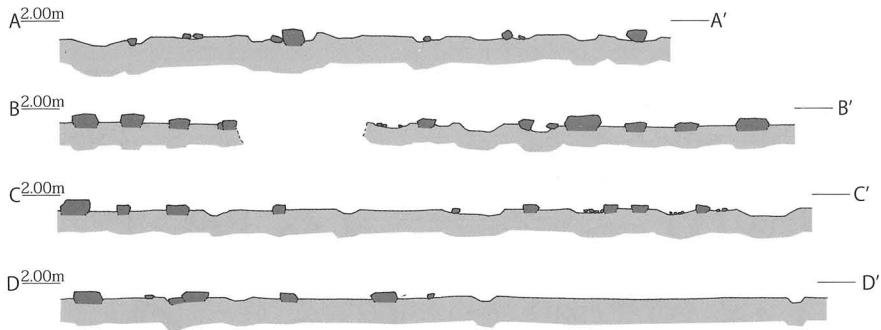
第300図 第3遺構面全体図

第3遺構面では調査区南側で建物跡SB08・09（第301～303図）、西側でSB10（第301・304図）を検出した。SB08・09とSB10の間にあたる位置では素掘溝SD06（第301図）、SB08・09の東側では廃棄土坑SK41、調査区最南端では木枠施設SK39（第309図）、石積方形土坑SK40（第310図）を検出した。

第3遺構面の年代は遺構出土遺物、遺構外出土遺物の年代観から、およそ17世紀前半～18世紀前半と想定している。第3-1・3-2遺構面はさらに細分化され、第3-1遺構面は17世



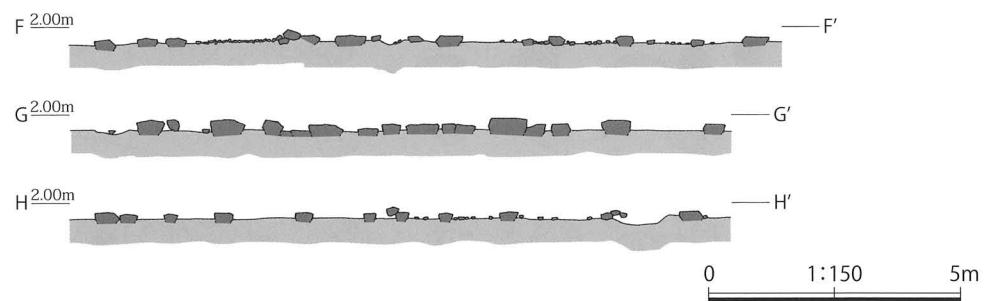
第301図 SB08・09・10平面図



第302図 SB08断面図



第303図 SB09断面図



第304図 SB10断面図

紀中頃～18世紀前半、第3-2遺構面は17世紀前半～中頃にあたると考えている。

SB08：建物跡（第301・302図）

SB08

SB08は第1遺構面ではSB01・02（第240図）、第2遺構面ではSB05（第272図）が建っていた場所に位置する建物跡である。建物の軸は第1・2遺構面とほぼ変わらず、真北から東へ4度傾く。東西7間（1間1.97m）×南北5間（1間1.97m）の範囲で検出し、南西隅は東西3間×南北1間の範囲が張り出すような形状であると考えている。建物の外縁ラインは、東側はA-A'、西側はB-B'、北側はC-C'、南側はE-E'である。

SB08の範囲を検討するにあたって参考にしたのは「墨書き」が見られる礎石が存在したことである。建物を構成する主要礎石に、墨で文字や記号が書かれていた。礎石5には正方形の中心に点を描いた記号、礎石6には「卍」、礎石7には「井」、礎石8には「三」、礎石9には「井」、礎石10には「十」と書かれていた。礎石5・10はSB08の枠内から外れているが、墨書きが見られるために建物と関連がある石と捉えている。上屋を建てる前段階において、大工達の共通認識のために書かれたものであろうと考えている。

建物の北・西側は礎石の残りが良く、墨書きされた石も多く見られるが、これに対して南・東側は礎石があまり見られないということが言える。建て替えの際に動かしたものと考えることができよう。また、SB08はA-A'が東端となり、建物の範囲を終了していると思われる。A-A'の東側にはSK41を含む大形廃棄土坑が検出されることから、以東は建物とは別の空間として分けられていたと推測する。

また、SB08内の西側には東西約6.3m×南北約6.3mの範囲で黒色土層が広がるのを確認した。黒色土層は主に炭が細かく碎けたような状態であり、火災の痕跡ではないかと考えている。

SB08の範囲は現状の復元案がすべてではなく、南側へ拡大する可能性が考えられるが、現時点ではこの復元案で留めておきたい。

SB08を構成する礎石のうち、礎石1は北側C-C'上に位置し、礎石2は中央から西寄りに位置する。いずれも礎石が抜き取られた痕跡が見られ、礎石2には栗石（根石）のみが残されていた。SK28は中央部分に見られるいびつな方形土坑で、東西1.6m、南北1.9m、深さ0.4mを測る。

SB08内 紣石1・2・SK28 出土遺物（第305図）

礎石1

礎石1 1597は中国磁器・精製で、漳州窯系の中碗である。

礎石2

礎石2 1598は銅製の煙管で、吸口部分である。最大長6.7cm、小口径1.0cm、口付径0.3cmを測る。

SK28

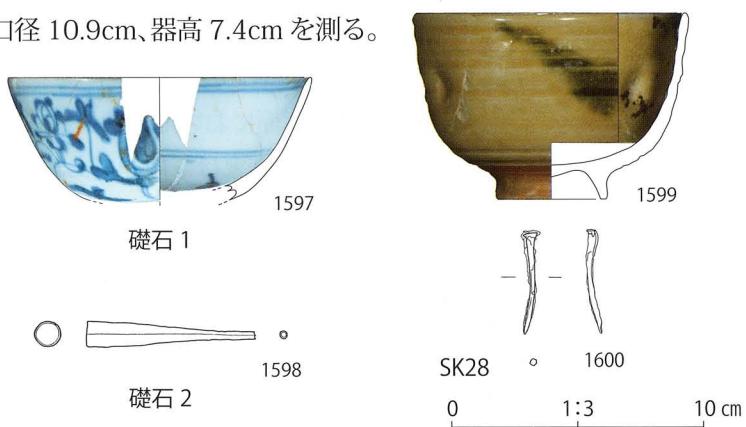
SK28 1599は肥前陶器の中碗で、口径10.9cm、器高7.4cmを測る。

国産陶器

外面には釉薬の掛け分けが施され、胴部部分は窪みが見られる。

金属製品

1600は最大長4.1cm、重量1.37gを測る鉄製の釘である。

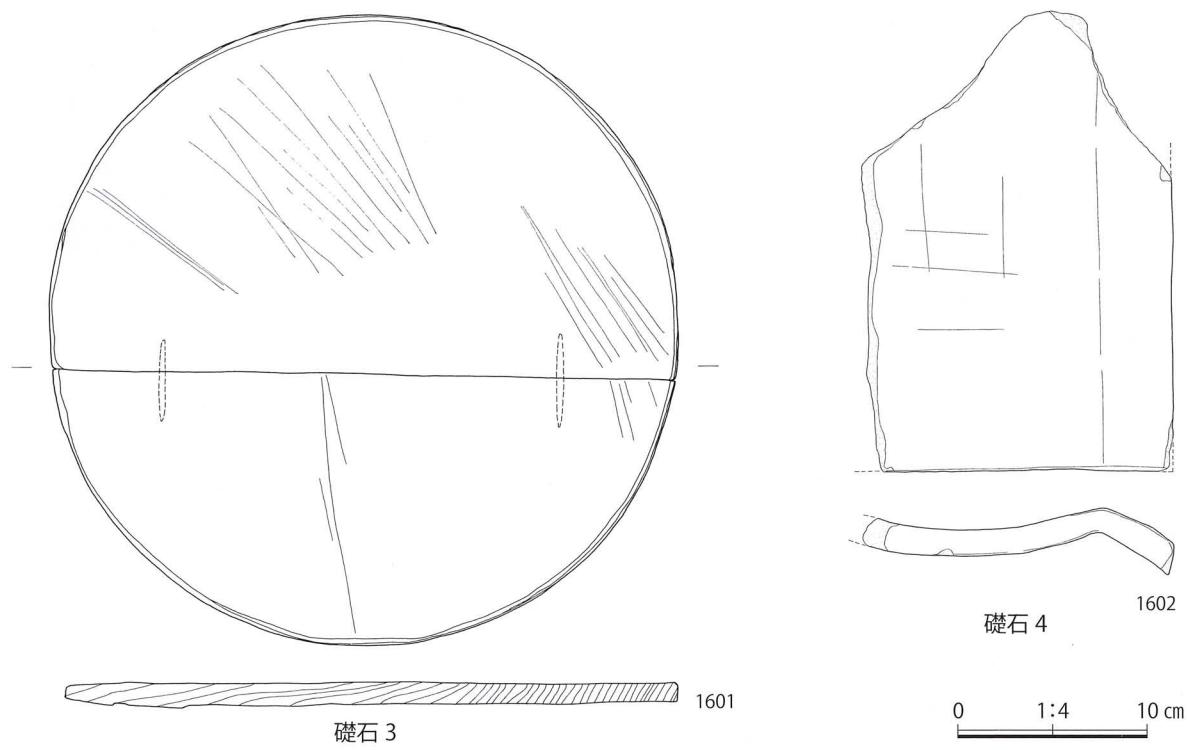


SB09：建物跡（第301・303図）

SB09

SB09はSB08と重なる形で検出した建物跡である。建物の軸はSB08とほぼ同一であり、SB08の礎石配列から南側に半間

第305図 索石1・2・SK28出土遺物



第306図 索石3・4出土遺物

(1.0m) ずつずれる位置に、礎石・礎石を抜き取った痕跡が見られる。東西 7 間（1 間 1.97 m）×南北 5 間（1 間 1.97 m）、南西隅の張り出しの範囲は SB08 と同じであり、一律して南側に移動している様相がうかがえる。

SB08 を 1 間 1.97 m で復元した後、これに当てはまらない礎石・抜き取り痕が同じ軸上で検出されており、SB09 として提示した。建物の詳細は明確ではなく、あくまでも可能性として SB09 を挙げたことを記述しておく。

SB09 を構成すると思われる礎石のうち、礎石 3 は北東隅で、礎石 4 は礎石 3 から西へ 1 間の位置にある。いずれも礎石は抜き取られており、小さな根石が残る状態であった。

SB09 内 紣石 3・4 出土遺物（第 306 図）

- 礎石 3 索石 3 1601 は桶か樽の底板で、直径 49.8cm、厚み 1.8cm を測る大形のものである。様々な部分に工具による加工痕が見られることから、二次的に使用された可能性が高いと思われる。
 索石 4 索石 4 1602 は左棧瓦で、残存長 24.2cm、残存幅 16.5cm、厚み 1.4cm を測る。側面にスタンプは見られない。

SB10：建物跡（第 301・304 図）

- SB10 SB10 は第 2 遺構面において SB06（第 272 図）が建っていた場所に位置する建物跡である。建物の軸は SB08・09 とほぼ同一であり、真北から東へ 4 度傾く。

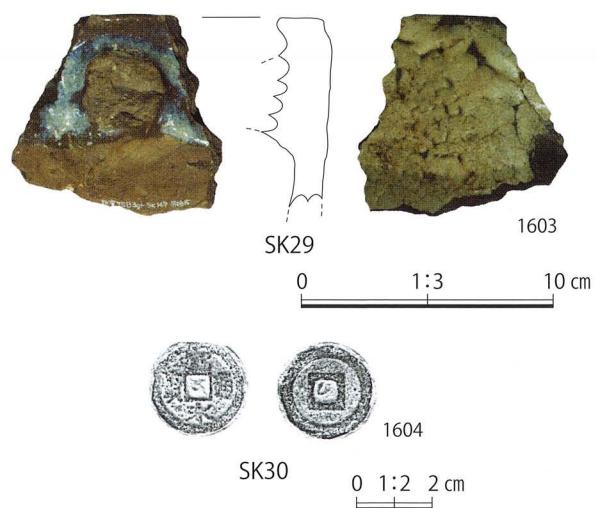
SB10 として検出したのは南北方向に並ぶ索石列 F-F'・G-G'・H-H' の 3 本と、これに直交する東西方向の索石列 1 本である。東西 2 間（1 間 1.90 m）×南北 6 間（1 間 1.90 m）の範囲で検出したが、南北方向にはこの数値を当てはめた位置に索石が置かれていなかった部分が見られた。よって、南北の間数は推定である。また、SB10 の範囲は北側・西側に広がる可能性が考えられる。

F-F'・G-G'・H-H' は 3 本とも 50～70cm 大の索石を使用しており、索石間に束石と思われる 20～40cm 大の小ぶりな石を配置している。また、F-F' には 10cm 以下の小礫が多数配置されており、他 2 本との様相の違いが見られる。

SB10 内の SK29・30 からは以下の遺物が出土している。SK29 は F-F' の北寄りに位置する土坑で、SK30 は H-H' の南側に位置するいびつな楕円形土坑である。

SB10 内 SK29・30 出土遺物（第 307 図）

- SK29 国産陶器 SK29 1603 は上野・高取系陶器で、鉢の口縁部であろうと思われる。残存状況が悪く全体像が掴めないが、内面に剥離の痕跡が見られる。
 SK30 古銭 SK30 1604 は寛永通宝で、いずれも古寛永である。



SD06：素掘溝（第 301 図）

- SD06 SD06 と SB10 の間には東西 2 間分（約 4.0 m）の空間が空いており、そこに素掘溝 SD06 が建物の軸に添って掘られている。残存長約 13m、幅 0.75～1.00m、深さ 0.15～0.20 m を測る。SD06 は SB08・09 の雨落ち溝であると思われるが、SB08・09 が建てられ

第 307 図 SK29・30 出土遺物

た東側とSB10が位置する西側とを区切る境界線のようにも見える。また、SD06を掘り込むようにして並ぶ土坑列があり、さらにその西側には半間（1.0 m）間隔で礎石列が並んでいた。これら3列の軸は建物跡と同じであり、SB08・09とSB10との関連性があると思われるが、詳細は判別していない。

その他の遺構（第301図）

ここで扱う遺構は建物跡SB08～10の周囲に見られる土坑である。建物と関連する可能性がある土坑も見られるが、建物範囲外の遺構として挙げている。

- SK31～38・
SP02 SK31～34・SP02はSB08・09の東側で検出した。このうちSK31～33はSB08・09の東西軸の延長線上に位置すると思われるが、建物配置に関わる遺構であるかの判断はできない。



第308図 SK31～38・SP02出土遺物

SK35はSB08・09の北側に位置する直径約0.6mを測る小土坑である。

SK36はSB08・09の南側に位置する小土坑である。付近にはSB08の礎石が見られる。

SK37はSB08・09の南西側に位置する円形土坑である。

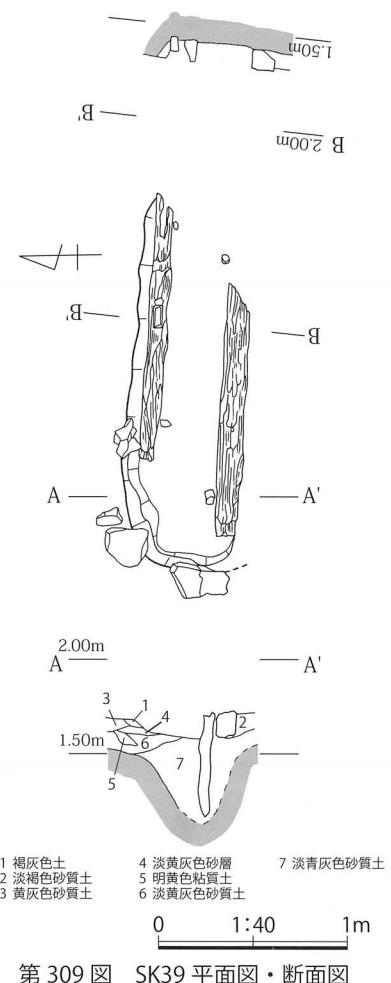
SK38はSB10の南側に位置する土坑で、G-G'の延長線上に見られる円形土坑である。

その他の遺構 出土遺物（第308図）

- SK31 SK31 1605は肥前陶器の蓋物の蓋で、かえり径6.9cmを測る。端部にかけて肥厚する。17世紀代のものである。
- SK32 SK32 1606は軒平瓦で、唐草文が刻まれている。
- SK33 SK33 1607は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲を珠文が残存で10個廻る。
- SK34 SK34 1611は瓦質土器で、口径9.6cm、胴部最大径18.3cmを測る壺である。器壁は全体を通して厚く1.2cmを測り、口径は小さく、胴部は強い丸味で横に張り出す形状を呈する。内面には煤が付着していることから、火消し壺として使用されたものであろうと思われる。
- 瓦質土器
- 漆器 漆器 1612は漆椀の平椀で、外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られている。胴部には明確な稜線が2本見られ、外面には黄色の草文が描かれている。
- SK35 SK35 1608は肥前磁器の腰張形小碗で、外面には折枝梅文が描かれている。1610～30年の間のものと思われる。
- SK37 SK37 1609は肥前陶器の中碗で、高台まで施釉するものである。高台内は浅く、漆継ぎで補修している部分が見られる。九陶Ⅱ期（1630～50年代）を示す。
- SK36 SK36 1613・1614は肥前磁器である。1613は腰張形の中碗で、外面には直径4.4cmの菊花文が型打成形で施されている。1614は水滴である。これらは17世紀中頃を示すものである。
- 国産磁器
- 土師器皿 土師器皿 1615～1618は土師器皿で、1615～1617は手づくね成形、1618は口クロ成形によるもので、底部は回転糸切りで調整されている。1616・1617は口縁部に油煙痕が見られることから、灯明皿として使われていたと考えられる。
- SK38 SK38 1619は肥前系陶器の壺で、底径11.0cmを測る大型のものである。胴部内面に叩き目が見られず、在地で作られた可能性も考えられる。17世紀後半を示す遺物である。
- 国産陶器
- 貿易磁器 貿易磁器 1620は中国磁器・精製の端反形中碗である。清朝の流れを汲む可能性が考えられる。
- SP02 SP02 1610は肥前磁器の白磁で、型押成形によって芋の葉の形状を象った小皿である。17世紀末～18世紀代を示す。

SK39：木枠施設（第309図）

- SK39 SK39は調査区最南端、SB08・09の南側に位置する東西方向に長い長楕円形の土坑である。土坑は東西1.95m、南北0.60～0.65m、深さ0.45mを測るもので、掘り方内の北側と南側に角材2本が置かれている。北側の角材を0.40m東にずらす形で、平行に置かれている。北側の角材は最大長1.44m、最大幅0.12m、厚み0.12mを測るもので、中央部分に貫通する9×2cmのホゾ穴が開けられており、東



第309図 SK39平面図・断面図



SK40 (北西から)

端部は $18 \times 3\text{cm}$ の抉り込みが見られる。南側の角材は最大長 1.34m 、最大幅 0.14m 、厚み 0.13m を測る。

角材を固定するためのものとして、角材の内側、北と南に長さ $0.20 \sim 0.55\text{m}$ 、直径 0.04m の杭を2本ずつ打ち込んでいる。

SK39の性格・用途は判然としないが、北側には礎石列が並び、石積方形土坑SK40とも近距離に位置している。また、SK39の東西軸がSB08・09と合うことから考えて、建物に付随する何らかの施設であったと考えられる。

SK40：石積方形土坑（第310図）

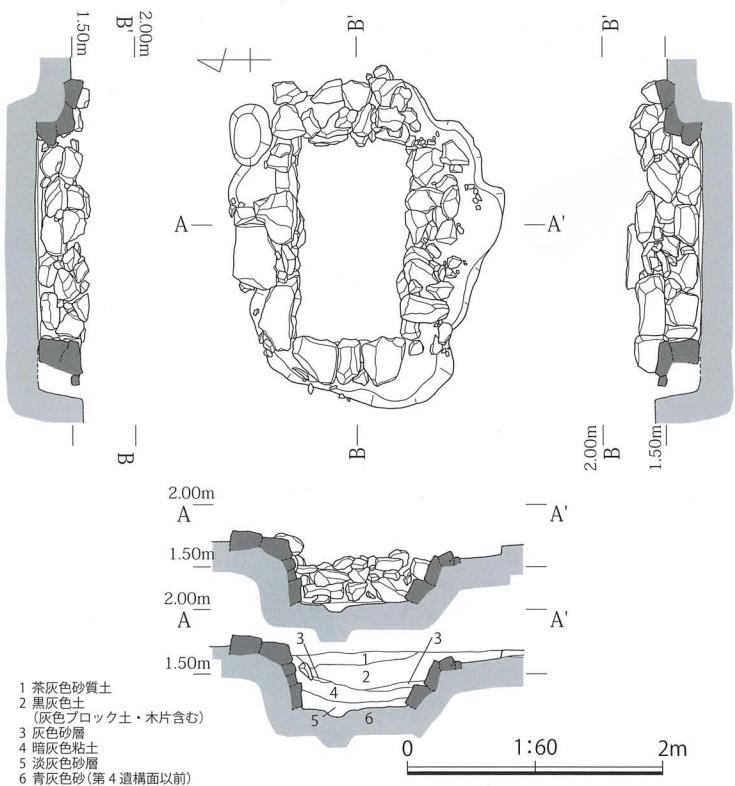
SK40

SK40は調査区南側、SK39から南西方向に約 3.5m の位置に設置された石積方形土坑である。SK40の位置はSB08・09とSB10の間に見られる東西2間分の範囲の延長部分に位置しており、建物跡との関連性も考えられる。

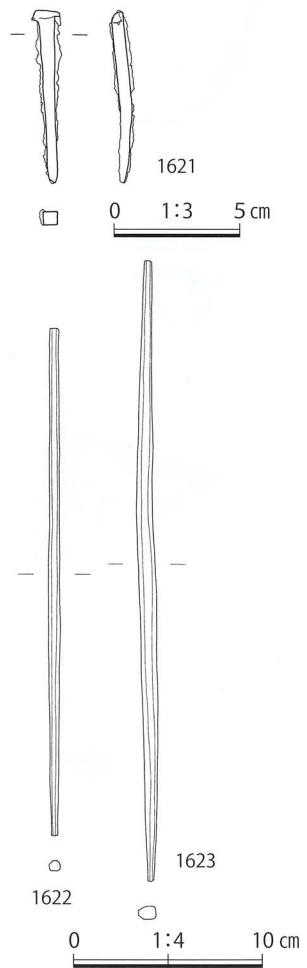
内法は東西長 1.55m 、南北幅 0.85m を測り、3段の石積による深さは約 0.6m である。石材は大海崎石などの $10 \sim 50\text{cm}$ 大の石を使用している。石の天端は標高 1.74m で、底面のレベルは標高 1.20m を測る。

北側長辺の石積上面には、礎石らしき石が2個設置されている。また、SK40の周囲にも礎石が並んでいることから、屋内施設であった可能性も考えられるが、その詳細は不明である。SK40の南側には南北長 1.1m 、東西幅 0.45m の範囲を測る小礎敷遺構SX01を検出した。SX01の北側が不自然な形で終了していることから、SK40がつくられたことによって壊された可能性が考えられる。

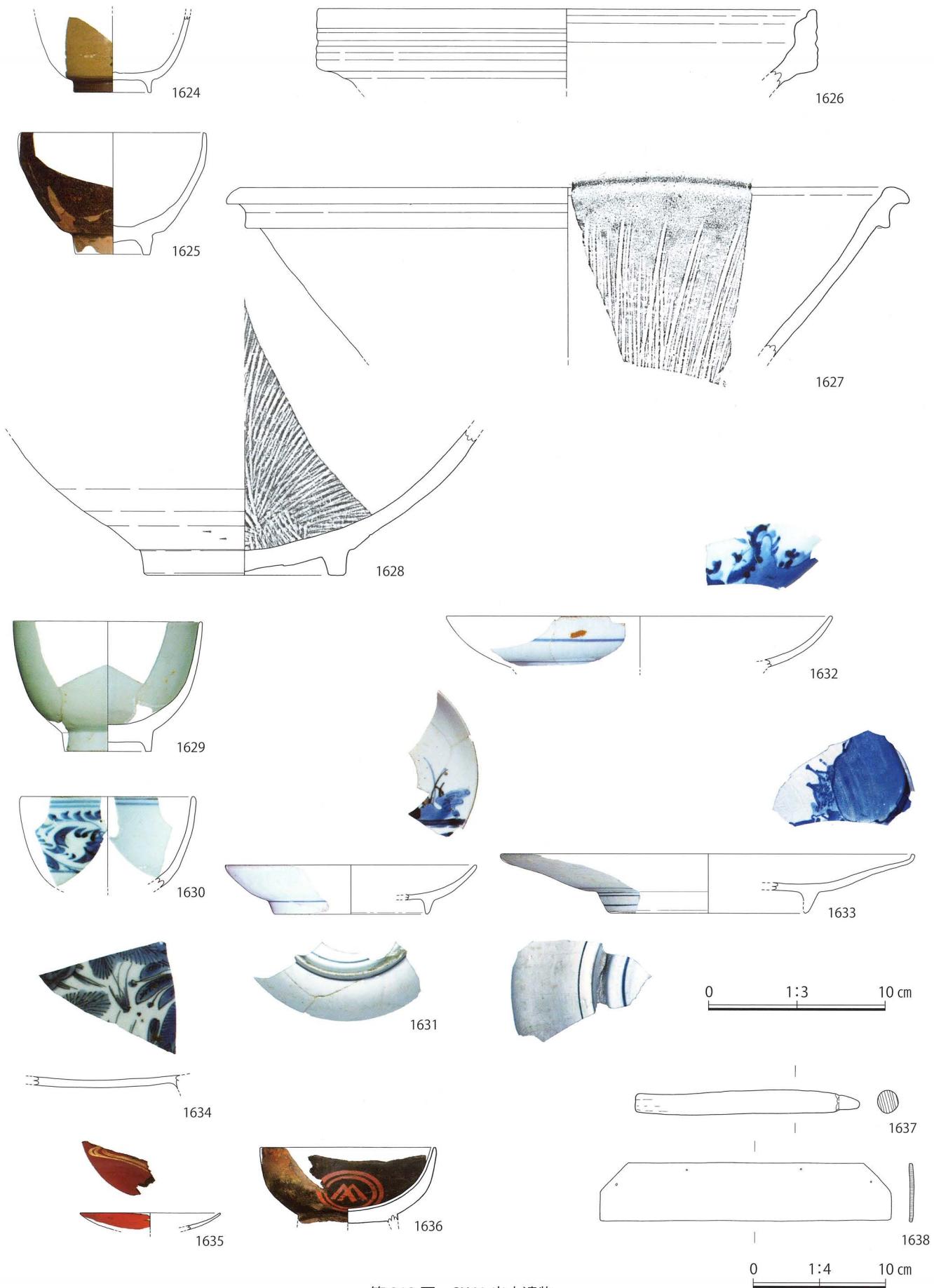
石積施設は貯蔵・水溜め・井戸などとしてつくられることが多いが、SK40についてはその性格は判明していない。出土遺物もわずかなも



第310図 SK40平面図・断面図



第311図 SK40出土遺物



第312図 SK41出土遺物

ので、その用途が分かるようなものは出土していない。

SK40 出土遺物（第311図）

金属製品

1621は最大長6.9cm、重量7.87gを測る鉄製の釘である。頭部に近い部分の断面は方形を呈する。

木製品

1622・1623は白木の箸で、1622は長さ26.8cm、1623は32.7cmを測るもので、いずれもやや長い形状を呈する。

SK41：廃棄土坑（第301図）

SK41

SK41は調査区東端、SB08・09の東側に位置する廃棄土坑である。南北長3.0m、東西幅2.4m、深さ0.5mを測る正方形に近い方形土坑で、南西隅を別の土坑に切られている。ここからは多量の遺物が出土しており、その時期はおよそ九陶Ⅲ期（1650～90年代）を示すものが多い。

SK41 出土遺物（第312図）

国産陶器

1624・1625は肥前陶器の中碗である。1624は京焼系で、外面は茶色の釉薬が掛かる。1625は杉形の中碗で、口径10.5cm、器高6.9cmを測る天目の名残りを持つ形態であり、若干古い九陶Ⅱ期にあたるものである。

1626～1628は擂鉢である。1626は産地不明で、口縁部に2条の凹線文が見られる。1627は肥前のもので、口径36.8cmを測る。口縁端部が耳たぶ状の形状を呈する。1628は須佐唐津で、底部部分の残存である。

国産磁器

1629～1633は肥前磁器である。1629は白磁の丸形中碗で、見込みの釉薬の掛かりがやや甘い。1630は丸形中碗、1631・1632は五寸皿、1633は口径23.5cmを測る中皿で、口縁端部がわずかに立ち上がり直立する。

貿易磁器

1634は中国磁器・精製の大皿である。残存部分は底部の破片で、厚さ0.8cmを測る。内面には文様が明確な線で描かれている。

漆器

1635は口径8.1cmの小形漆器皿か小杯で、全面に赤色の漆が塗られている。内面には金絵で流水文が描かれ、特別な時に使用するものであった可能性が考えられる。1636は扁平な漆器椀で、外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られている。外面には赤色の二重丸に山文が2つ描かれたものが3つ配置されている。

木製品

1637は最大長16.9cm、直径1.8cmを測る不明木製品で、片方の端部が段状に加工されており、先端は先細る。1638は長さ21.8cmの折敷の底板で、板の外周に目釘痕が見られる。

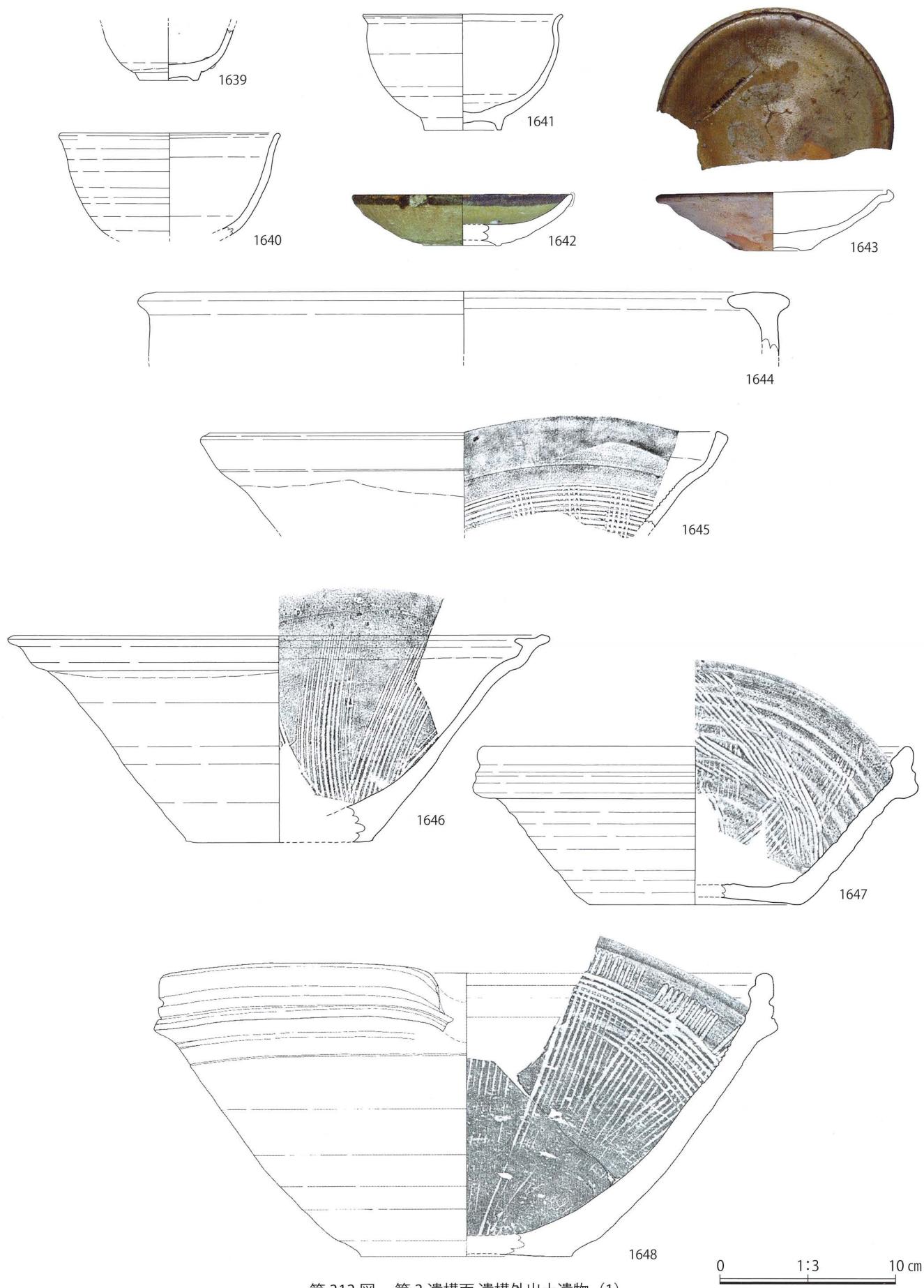
第3遺構面 遺構外出土遺物（第313～316図）

国産陶器

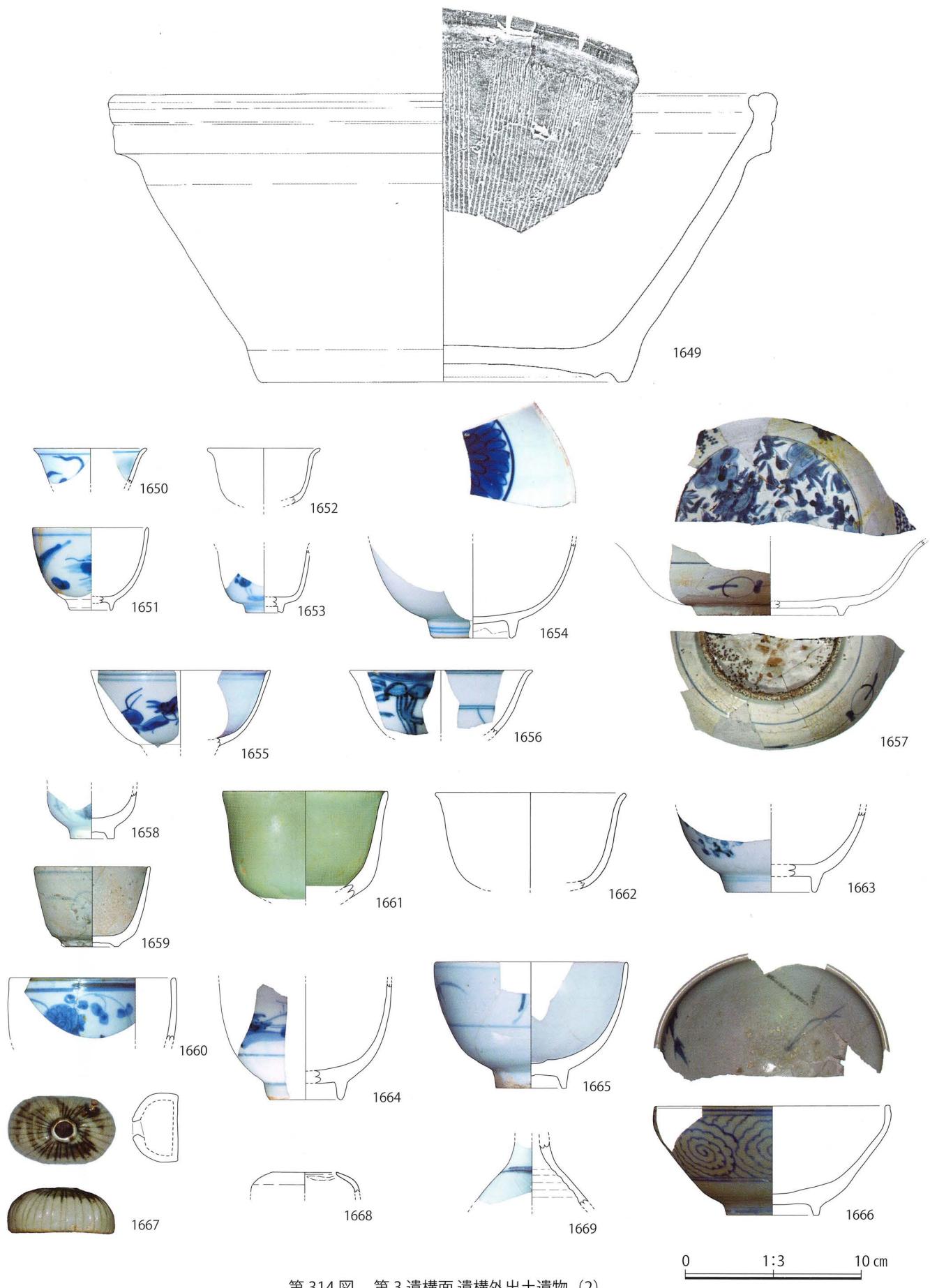
1639は萩焼の小碗で、高台が明瞭に削り出されたものである。内外面に胎土目痕が見られる。

1640～1644は肥前陶器である。1640・1641は端反形の中碗で、全面に細かい稜線に入る。外面に鉄釉が掛けられている。1641は高台に砂が付着している。1642・1643は小皿で、内面に胎土目痕が見られる。1644は推定口径35.0cmを測る大形の甕で、口縁端部上面に幅3.5cmの面を持つ。

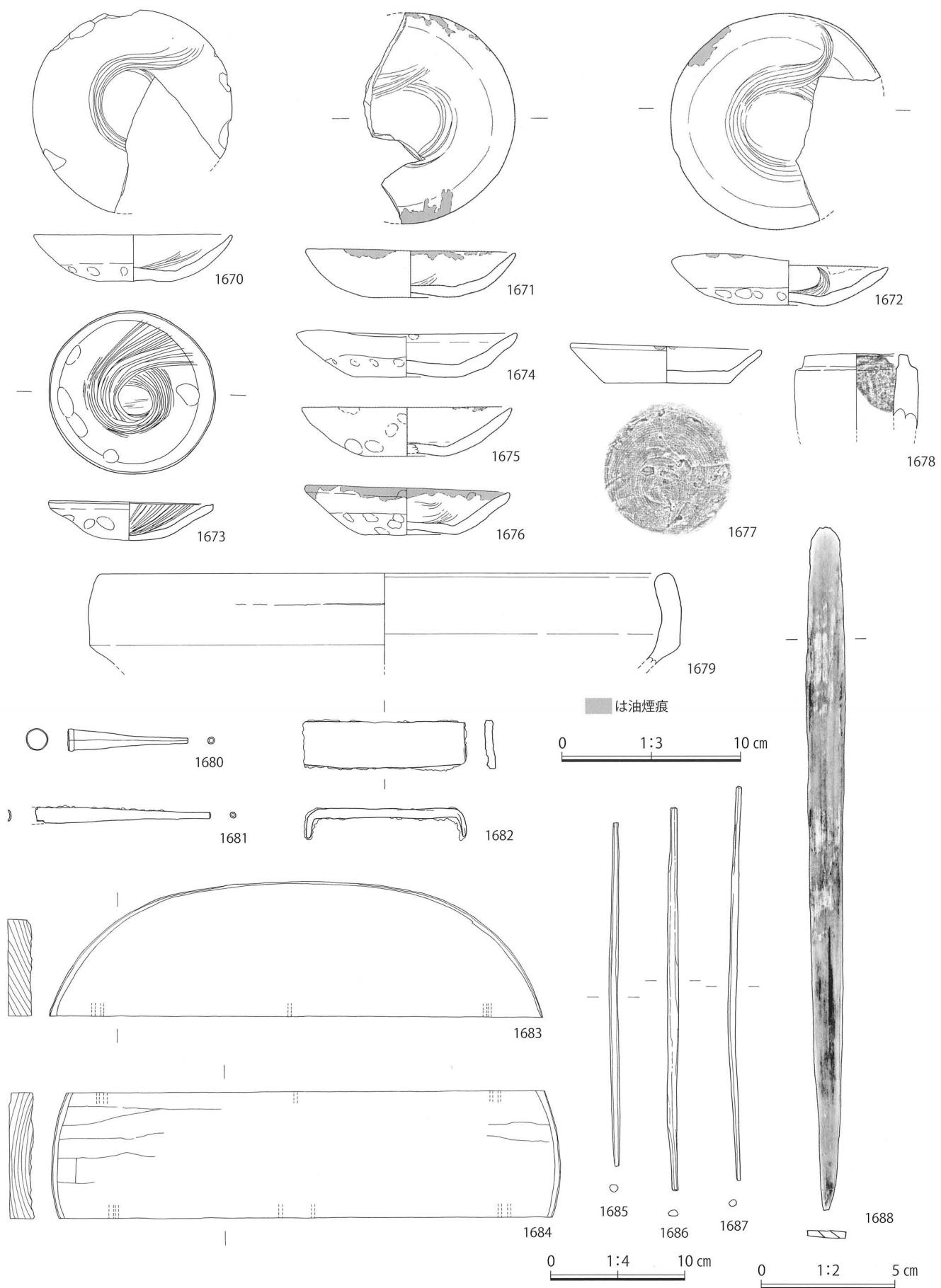
1645～1649は擂鉢である。1645・1646は肥前産で、口径は30cm前後を測る。1647・1648は備前産で、1647は口径24.0cm、器高9.0cmを測るやや小形のもの、1648は片口が付く。1649は備前系の模倣品と思われ、口径36.8cm、底径20.7cm、器高16.4cm



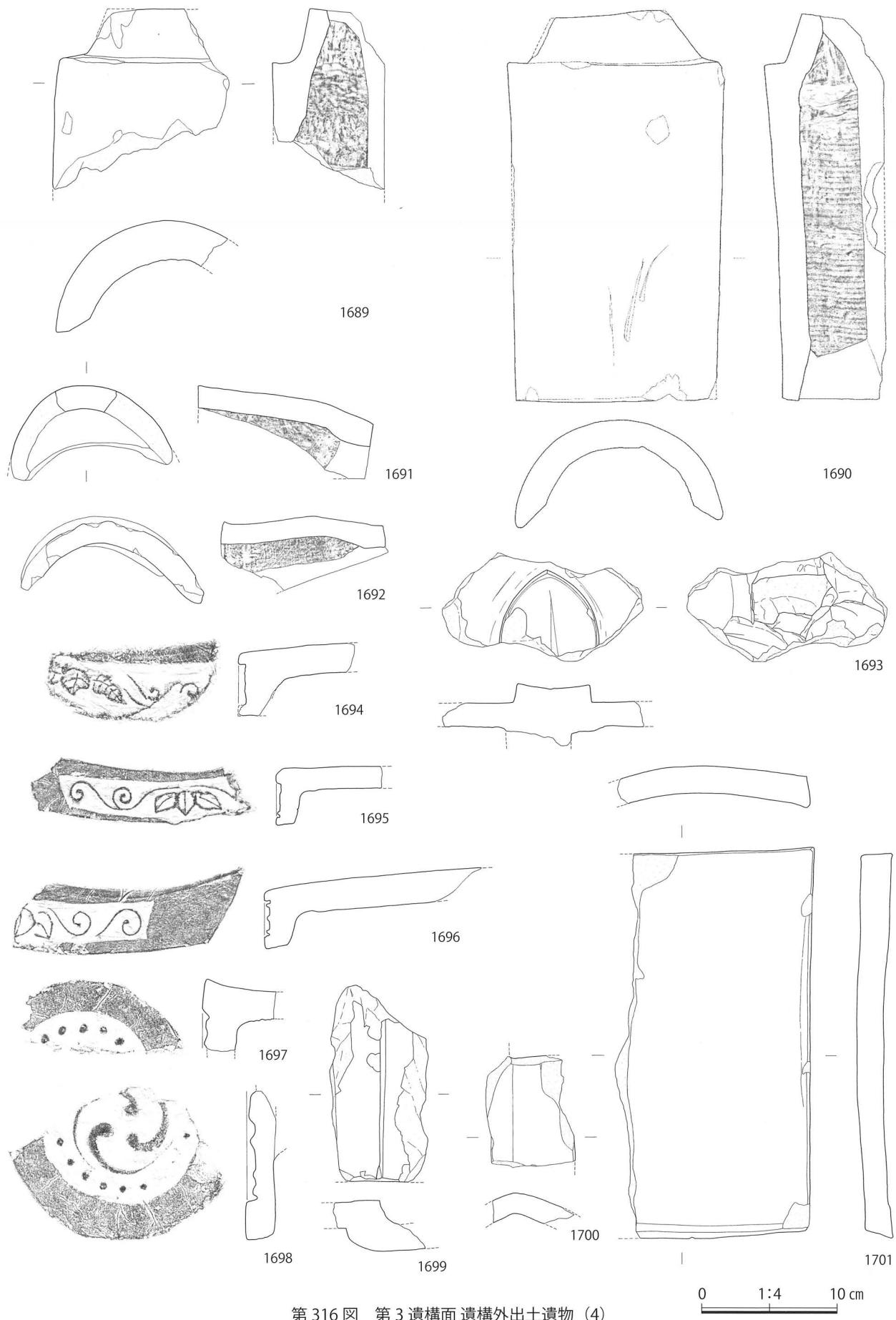
第313図 第3遺構面 遺構外出土遺物（1）



第314図 第3遺構面 遺構外出土遺物 (2)



第315図 第3遺構面 遺構外出土遺物 (3)



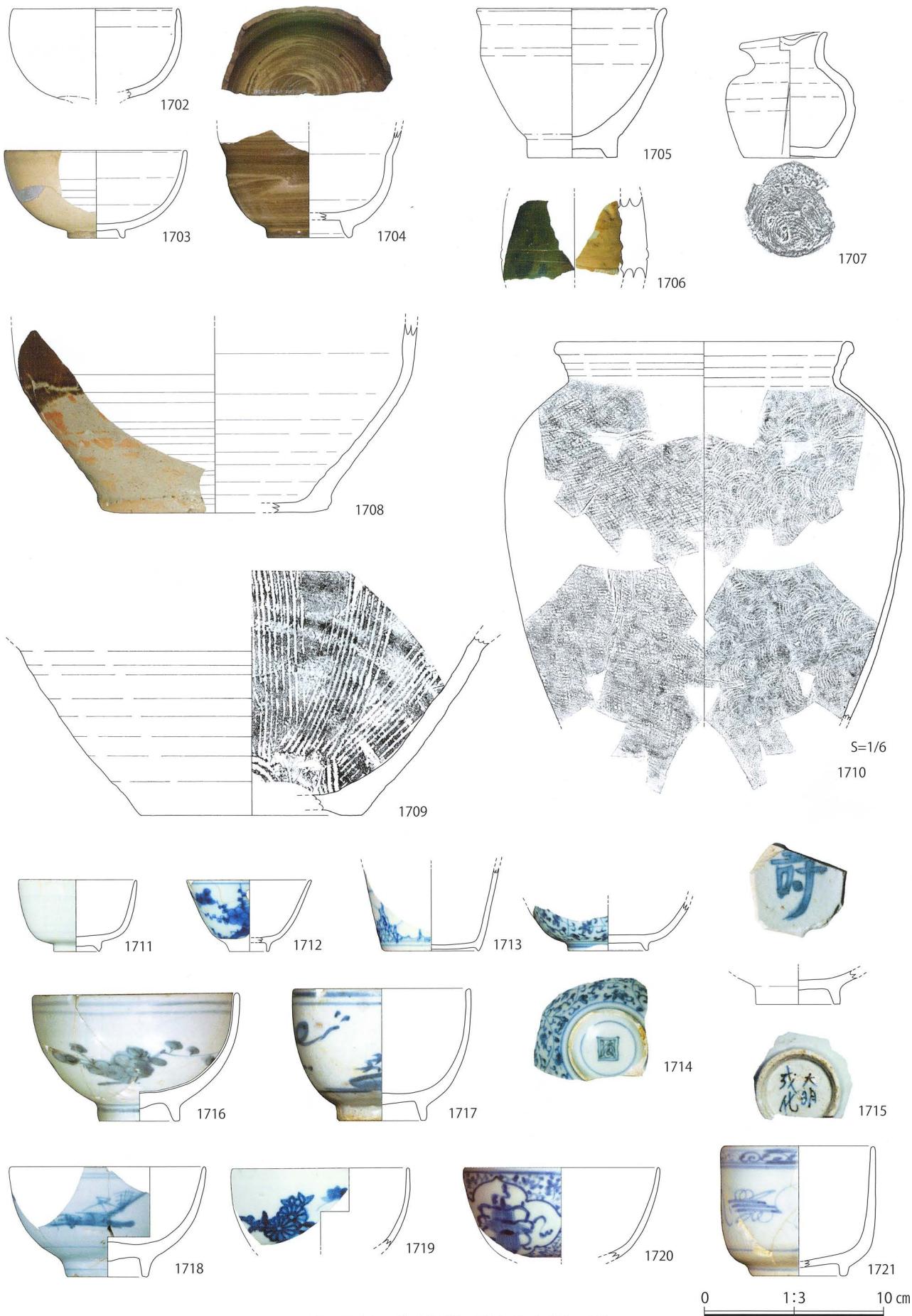
第316図 第3遺構面 遺構外出土遺物 (4)

	を測る大形品である。
貿易磁器	1650～1656は中国磁器・精製である。1650～1653は景德鎮窯系の小坏で、1650は端反形、1651は丸形、1652・1653は腰張形である。1654は丸形大碗、1655・1656は小碗である。1656は漳州窯系である。1657は中国磁器・粗製である。底径16.5cmを測る色絵の大皿であり、口縁部は強く外反する。高台には砂が多量に付着している。
国産磁器	1658～1669は肥前磁器である。1658は呉器形小坏で、外面には蘭文が描かれる。1659は腰張形の小碗で、高台内は浅く腰部から直線的に伸びる形状を呈する。1660～1665は中碗である。1661は腰部にかけて肥厚し、わずかに端反形を呈する。全面無文で、山辺田窯で焼かれた可能性が高いものである。1662は白磁の端反形中碗、1663は高台に二重の圈線が引かれるものである。1664・1665は丸形中碗、1666は口縁端部付近で直立し、わずかに内湾する形の大碗である。外面には雲氣文が描かれている。
	1667は水滴で、長楕円形のドーム状を呈する。最大長6.2cm、最大幅3.9cm、高さ2.6cmを測り、ドーム状の中心・頂点に直径1.0cmの孔が開いている。1668は茶入れで、口径3.6cm、肩部は推定6.2cmを測り、口縁部が強くすぼまる形状を呈する。1669は小瓶である。
土師器皿	1670～1676は手づくね成形、1677はロクロ成形による土師器皿である。1671・1672・1675～1677の口縁部には油煙痕が見られることから、灯明皿として使用されていたと思われる。
焼塩壺	1678は焼塩壺の身である。コップ形を呈し、口縁端部は明確に段が付く。
土器	1679は土器で、焙烙である。口径31.0cmを測るもので、外面に煤が付着している。
金属品	1680・1681は銅製の煙管で、いずれも吸口部分である。1680は長さ6.7cm、小口径1.25cm、口付径0.35cmを測る。1681は残存長9.8cm、小口径0.9cm、口付径0.4cmを測る長い吸口である。1682は最大長9.1cm、幅2.6cmを測る鉄製の鎌である。
木製品	1683・1684は桶の底板で、いずれも最大長70cmを超える大形のものである。断面に目釘痕が数ヶ所見られ、他でも加工痕が認められることから、桶の後に転用されていたと考えてよい。1685～1687は白木の箸である。
荷札木簡	1688は最大長25.6cm、最大幅1.5cm、厚み0.3cmを測る荷札木簡である。面に墨書があったと思われるが、劣化が激しく文字を読むには至らなかった。
瓦	1689・1690は丸瓦で、1690は最大長28.9cm、玉縁長3.9cmを測る完形のコビキBである。1691・1692は棟込瓦で、いずれもコビキBの布目である。1693は鬼瓦の一部であろうと思われる。1694～1696は軒平瓦でいずれも唐草文であり、1695・1696の唐草文は三葉系である。1697・1698は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲に珠文が廻る。1699は種類・部位が不明の破片、1700は左右不明の棟瓦である。1701は平瓦で、長さ28.6cm、残存幅14.5cm、厚み2.3cmを測る。

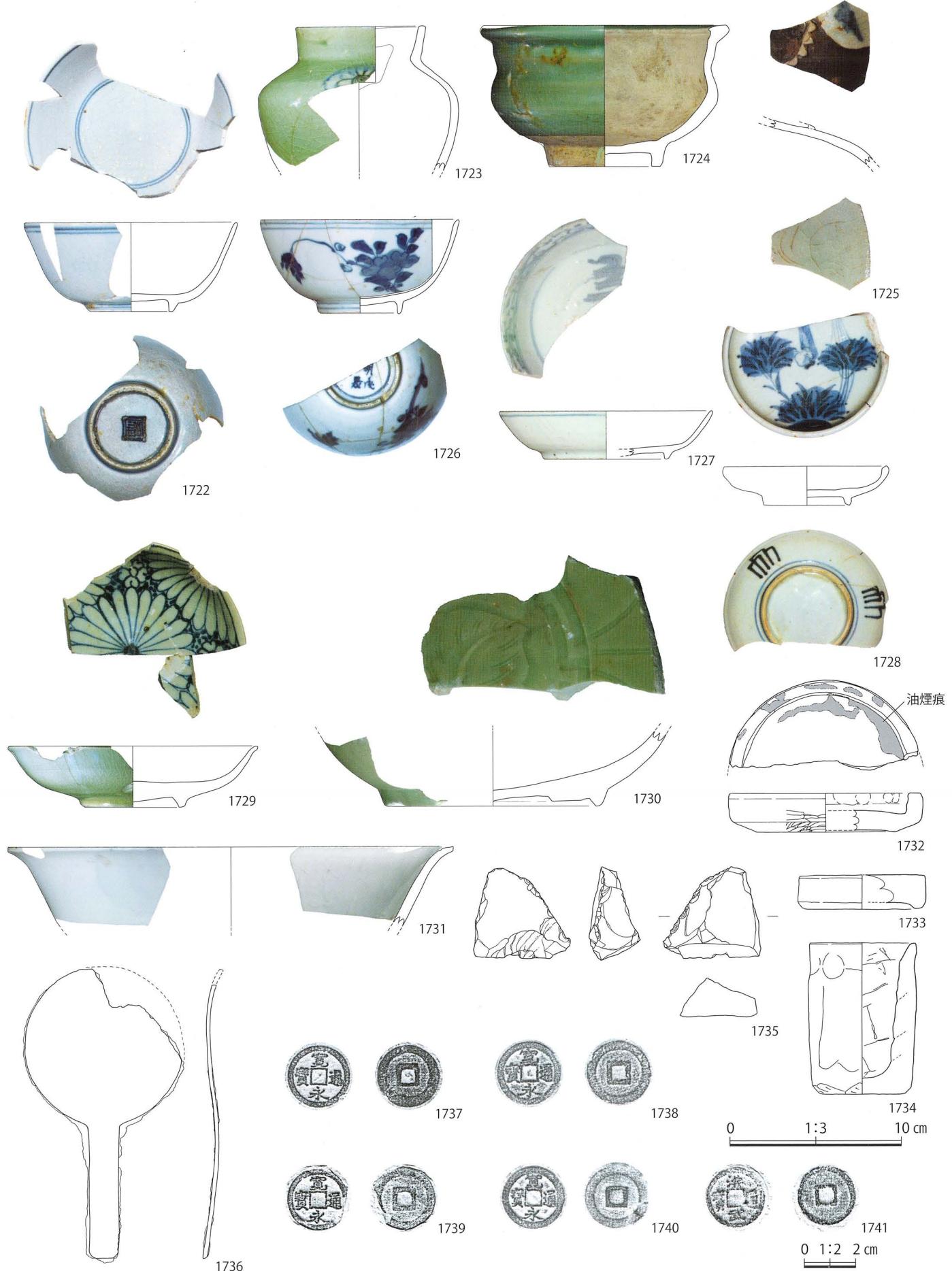
第3遺構面覆土 出土遺物（第317～319図）

ここで扱う遺物は、第3遺構面より上層で出土したものである。

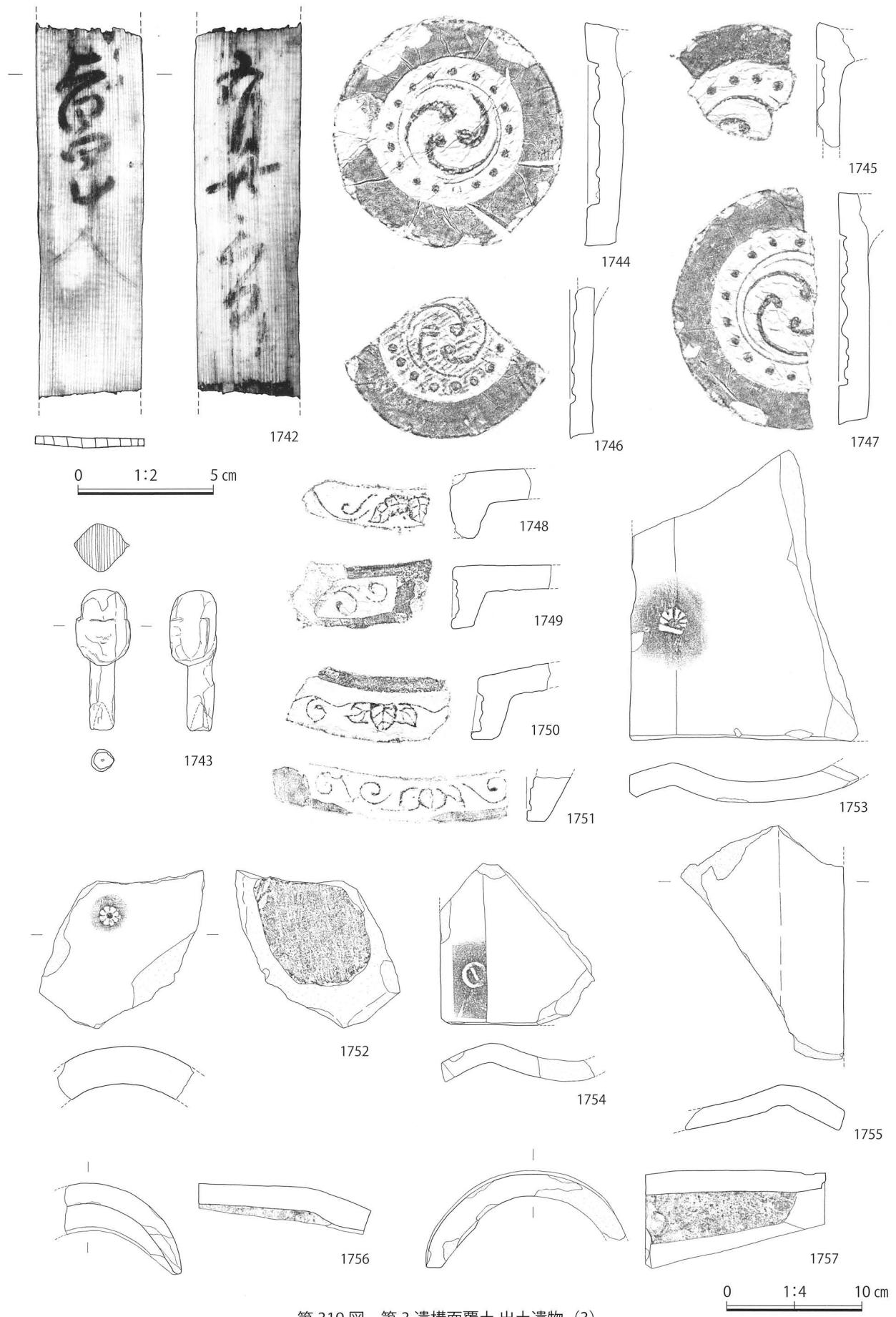
国産陶器	1702～1705・1708・1710は肥前陶器である。1702・1703は半球形の小碗、1704は腰折形の中碗で、外内面に刷毛目文が施文されている。1705は天目形の中碗で、口縁部がくびれる。1708は壺の胴部下方～底部にかけての残存で、底径は13.0cmを測る。1710は口径32.5cm、胴部最大径45.0cmを測る大形の甕で、内面には同心円状の叩き痕が残る。
------	---



第317図 第3遺構面覆土出土遺物 (1)



第318図 第3遺構面覆土出土遺物（2）



第319図 第3遺構面覆土出土遺物（3）

1706は産地不明の軟質施釉陶器で、器種は不明である。

1707は備前系の小壺である。口頸部は外反して立ち上がり、底部は回転糸切りで調整されている。外面に松の灰釉が掛かる。

1709は越前でつくられた可能性が指摘されている擂鉢である。底径12.4cmを測り、内面だけではなく見込みにもスリ目が入れられている。

貿易磁器 1711・1712・1715・1727は中国磁器・精製である。1711は白磁の小碗で、内面は型打陽刻で文様が浮き彫りになっている。1712は景德鎮窯系の小碗である。1711・1712にはいずれも漆継ぎによる補修の痕跡が見られる。1715・1727は漳州窯系で、1715は中碗で、見込みに「寿」、高台内に「太明成化」の銘が入る。1727は丸形底広の小皿で、見込みに「寿」と書かれている。

国産磁器 1713・1714・1716～1726・1728～1731は肥前磁器である。1713は桶形猪口、1714は浅半球形の中碗で、高台内に「福」の銘が入る。1716～1720は丸形中碗で、1717は高台無釉である。1719の外面にはコンニャク印判、また、漆継ぎで補修された痕跡が見られる。1721は半筒形中碗、1722は腰張形中碗で、高台内に「福」の銘が入る。1723は青磁染付の壺で、頸部は直線的に立ち上がる。肩部外面に菊花文が描かれている。1726は浅半球形の中碗で、高台内に「太明成化年製」の銘が入る。1724は口径14.2cm、器高8.3cmを測る青磁の香炉、1725は皿の一部で、外面には鉄釉が掛かり窓絵が立体的に貼り付けられている。1728は玉縁形の小皿で、外面に源氏香文が描かれている。1729は端反形の五寸皿で、内面には最大径7.5cmの菊花文を中央に配置し、その周囲に隙間なく菊花文を描いている。1730は青磁で、蛇の目凹型高台の大皿である。1731は白磁の端反形大皿で、内面は型打陽刻で文様が浮き彫りになっている。また、漆継ぎによる補修の痕跡も顕著に見られる。

土師器皿 1732は土器の小皿で、口径11.0cm、底径8.2cm、器高2.3cmを測る。全体的に約1.0cmの厚みを持ち、口縁部が直角に折れて直立する形状を呈する。口縁端部内面には指頭圧痕が見られ、また、底部内面には煤が付着していることから、灯明皿として使われていたと考える。

焼塩壺 1733・1734は焼塩壺である。1733は蓋で、逆凹字形を呈する。1734は身で、筒形を呈し口縁端部には指頭圧痕が見られる。

石製品 1735は最大長5.3cm、最大幅5.8cm、厚み2.2cmを測る石で、石材は玉髓である。火打ち石として使用したものと思われる。

金属製品 1736は銅製の手鏡で、鏡部分は直径9.3cmの正円形、柄部分は長7.4cm、幅1.8cmを測る。厚みは全体を通して0.2cmの薄さである。

1737～1741は寛永通宝で、全て古寛永である。1741は中国の明錢で、洪武通宝（1368）である。

墨書き木製品 1742は残存長14.0cm、幅4.0cm、厚さ0.4cmを測る木片で、おそらく桶蓋か底の切れ端を転用したものと思われる。両面に墨書きが確認でき、左面には「上田四斗入」、右面には「五月廿三日」とある。「上田」は人名か地名かを表し、「四斗」は約72リットルの容積物を示すものと推測する。右面は日付「5月23日」と明確に読み取ることができる。5月23日付けで、上田という人物か場所から何かを4斗ほど仕入れたことの記録であろう。

木製品 1743は木製の人形の頭部である。頭頂部～顎までは最大長5.7cm、幅は両耳で4.0cmを測るもので、表情にはあまり特化しないつくりになっている。目・鼻・口・耳は線刻とわずかな削り出しで表現し、顔立ちははっきりしていない。また、頸が5.0cmと長く、内部には円

錐状の穴が開けられている。この穿孔は指を差すものと思われ、指人形として使われた玩具であると推測している。

瓦

1744～1747は軒丸瓦で、いずれも中央に左三巴文、その周囲を珠文が16～17個囲んでいる。1744・1747は巴の周りに圏線があり、1746の巴文・珠文の面に入る斜線は、型が劣化している状態で瓦を制作すると、このような筋が入ることが分かる貴重な資料である。1748～1751は軒平瓦で、いずれも文様は三葉系の唐草文である。1752は丸瓦で、表面にスタンプが見られるコビキBである。1753～1755は棟瓦で、1753・1754は右棟瓦の可能性が考えられるもので、表面にスタンプが押印されている。1756・1757は棟込瓦で、1756はコビキBである。

第5節 第3-1 遺構面

第3-1 遺構面 第3-1 遺構面は建物跡SB08～10の北側に広がる遺構面で、東西間約40m、南北間約10mを測る帯状の区画である。遺構面の標高は1.80～1.90mを測る。

第3-1 遺構面では屋敷境石積溝SD01（第320図）を西端から東端まで検出した。中央部分では建物跡SB08・09の北側に位置する石積溝（雨落ち溝）SD07（第321図）を、調査区東端では廃棄土坑群1（第320・324図）、井戸SE03（第349図）を検出した。中央より西側では廃棄土坑群2（第337図）、性格不明の土坑SK56（第344図）・57、石積溝SD08、瓦敷遺構SU02を、調査区西端では石積方形土坑SK58（第346図）、土坑SK59・60を検出した。

第3-1 遺構面の年代は遺構出土遺物、遺構外出土遺物の年代観から、17世紀中頃～18世紀前半と想定している。

SD01：屋敷境石列溝（第320図）

SD01

SD01は第2遺構面時からかなり様相が変化している状態で検出した。石積は西端から東端まで途中やや歯抜けになる部分はあるが、ほぼ残存している。西側から約18m地点で北側に1.5mの距離で直角に折れる形態を取り、そこから再び東に向かって伸びる。この屈折点以東、北側の石列は掘り方のみの検出で、石はほとんど置かれていなかった。さらに東端に至ると、石列がわずかな角度で南下していき、微妙に屈折していた。この屈折は石が自然に動いたとは考えにくいもので、何かの意図の下にこのような形状を成したと推測している。

上記した屈折点のすぐ東側は、約2mに渡って石列が消失している。この部分だけ石が抜かれた、もしくは破壊されたものと思われる。石列の南側ではこの空白域を挟むような配置で、東側と西側に小礫が敷かれている部分が見られる。さらに、周囲には礎石らしき石や土坑を点々と検出し、SD01と関わりを持つ遺構ではないかと考えている。

SD01は屋敷地の境界線であるとともに、排水機能を携えた施設である。雨水や生活排水を敷地外に流すことによって、人の生活は成り立つと言っても過言ではない。よって、屋敷地の規模・形態に合わせてこのような溝をつくるものと思われる。SD01の屈折点は、南側に想定できる建物跡の規模や形態に合わせてつくられた可能性が高いと考える。石列の中に礎石としての石を置くことによって、建物と溝とが構成されていたのではないだろうか。第3-1 遺構面では明確な建物跡は確認できていないが、この下の第3-2 遺構面で、SD01に伴う建物跡SB11（第373図）が建っていたことが判明している。



第320図 第3-1 遺構面全体図

SD07：石積溝（第321図）

SD07

SD07は調査区中央部分、建物跡SB08・09の北側に隣接する石積溝である。屋敷境石積溝SD01から南方向へ約10mの位置にあり、東西方向に伸びる。SD07はSB08・09の軸に添ってつくられている。石材は大海崎石と島石が混在する状態で、石積は1段、所々石がない部分が目立つ。溝の両端は不自然な形状で終了しており、破壊及び攪乱で消滅したものと考え

る。SD07の規模は東西約14mで、溝の内法は0.4～0.6m、深さは0.25mを測る。

SD07の西側はSE02(第249図)、廃棄土坑SK13(第271図)に切られているため、どのような形状であったかは不明である。ただ、SK13の西側にわずかではあるが石積の名残りらしき石が散在している。これらの石はSD07からほぼ直線上に位置することから、SD07の一部であったものと考えている。SD07がどこまで続くのかは不明であるが、可能性として石積溝SD08と直交、もしくは直角にぶつかることが考えられる。両溝とも途中で分断されているため推測の域を出ないが、本来の姿はSD07からSD08に繋がり、さらにSD01へ通ることによって、屋敷地の排水機能を果たしたものではないだろうか。

東側も西側と同様で、石・掘り方ともに消滅している。約1.5mの空白域の東側に、廃棄土坑が集中する範囲を検出した。

SD07の底には第3層暗灰色砂質土が薄く堆積しており、水が流れていたことを示すと考えている。また、SD07の標高は西側が高く、東側が低いことから、西から東へ水が流れていったと思われる。

SD07からは肥前磁器、煙管、丸瓦が出土している。

SD07 出土遺物(第322図)

国産磁器

1758・1759は肥前磁器である。1758は端反形小壺で、高台無釉で砂が付着している。1759は色絵の中皿か大碗で、推定底径10.0cmを測る。1758は九陶II-2期(1630～50年代)を示すものである。

金属製品

1760は真鍮製の煙管で、雁首部分である。残存長3.5cm、火皿径1.6cmを測る。

瓦

1761・1762は丸瓦で、いずれもコビキBある。1762はほぼ完形品で、長さ24.5cm、幅13.5cm、厚み2.0cmを測る。

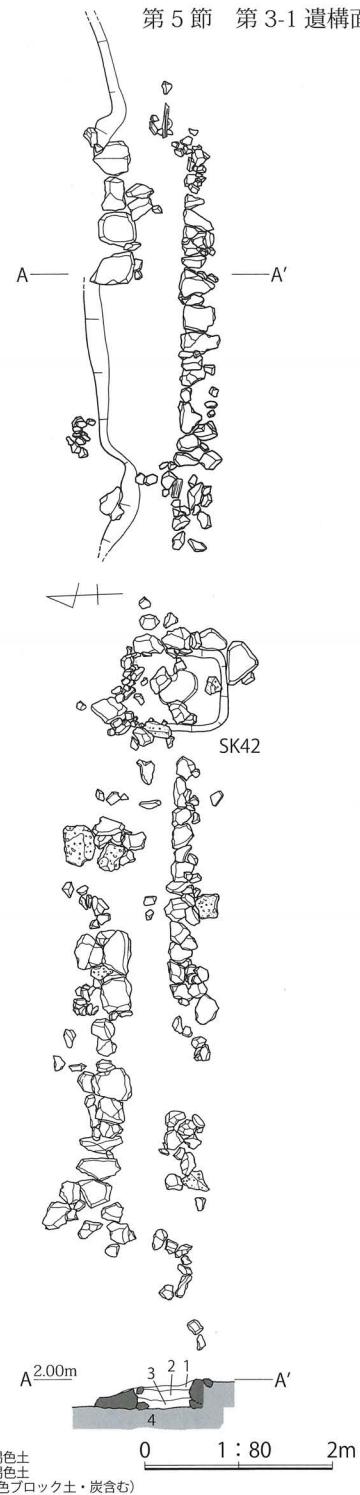
SK42：石積方形土坑(第321図)

SK42

SK42は石積溝SD07の中央部分につくられた石積方形土坑である。内法は南北長1.0m、東西幅0.9m、深さ0.01mを測る小形のもので、東側長辺には島石の石積が残存していることから、全面に石が積まれていた可能性が考えられる。

SK42の床面にはいびつな楕円形の掘り込みが見られるが、深さ0.10mと浅いものである。

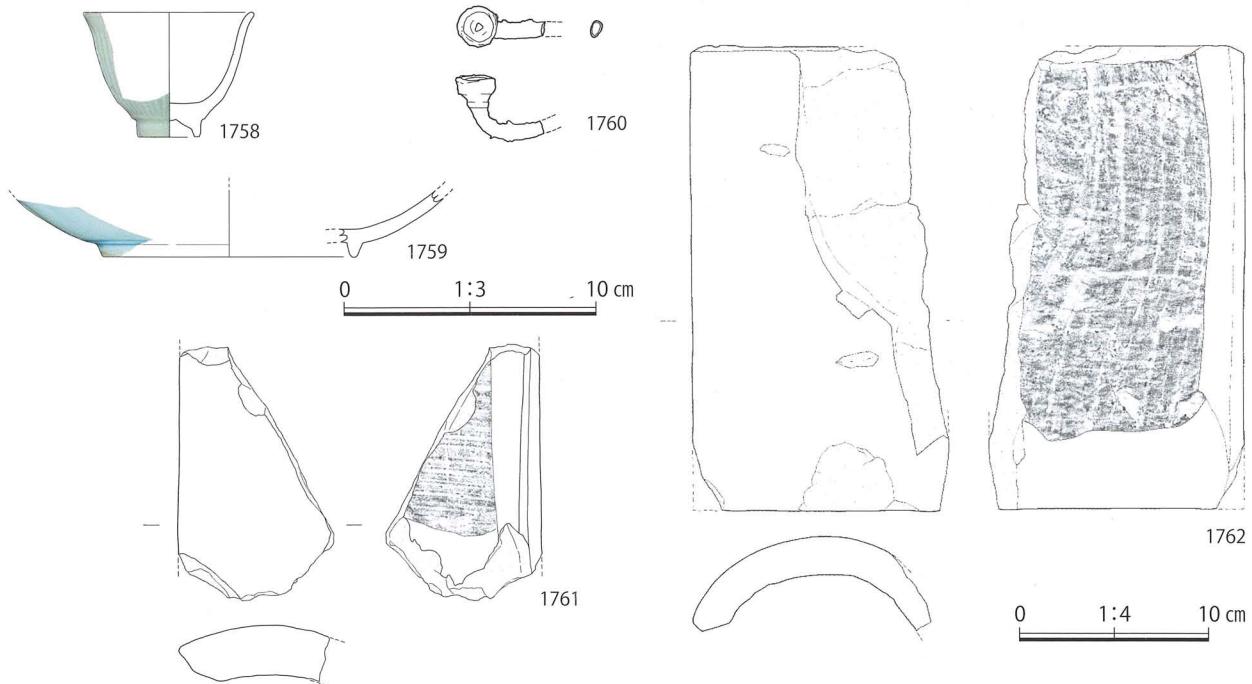
遺物は肥前磁器、土器、碁石などが出土地している。



第321図 SD07 平面図・断面図



SD07(西から)



第322図 SD07出土遺物

SK42 出土遺物（第323図）

国産磁器

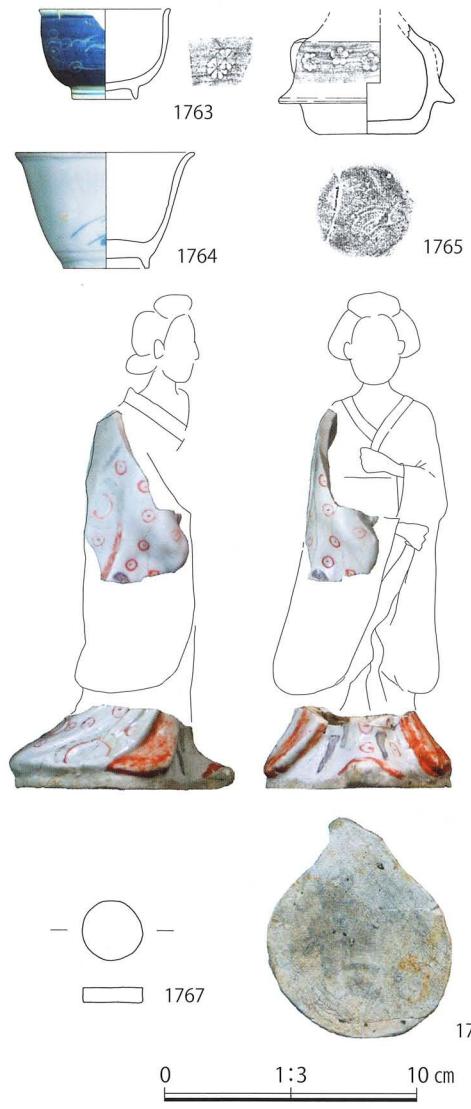
1763・1764・1766は肥前磁器である。1763は腰張形に近い形状を呈し、口縁部は端反形の小环で、瑠璃釉・墨はじきという技法が使われている優品である。1764は端反形の猪口か小环で、高台に砂が付着している。九陶II-2期(1630～50年代)のものと思われる。1766は色絵で装飾された女性像の人形である。残存部分は足元を含む底部部分と右腕部分であり、着物の装飾と思われる絵柄が色絵で描かれている。また、底部外面には墨書が見られるが、解読できなかった。

土器

1765はミニチュア土器の釜である。外面には花文のスタンプが押され、底部は回転糸切りで調整されている。

石製品

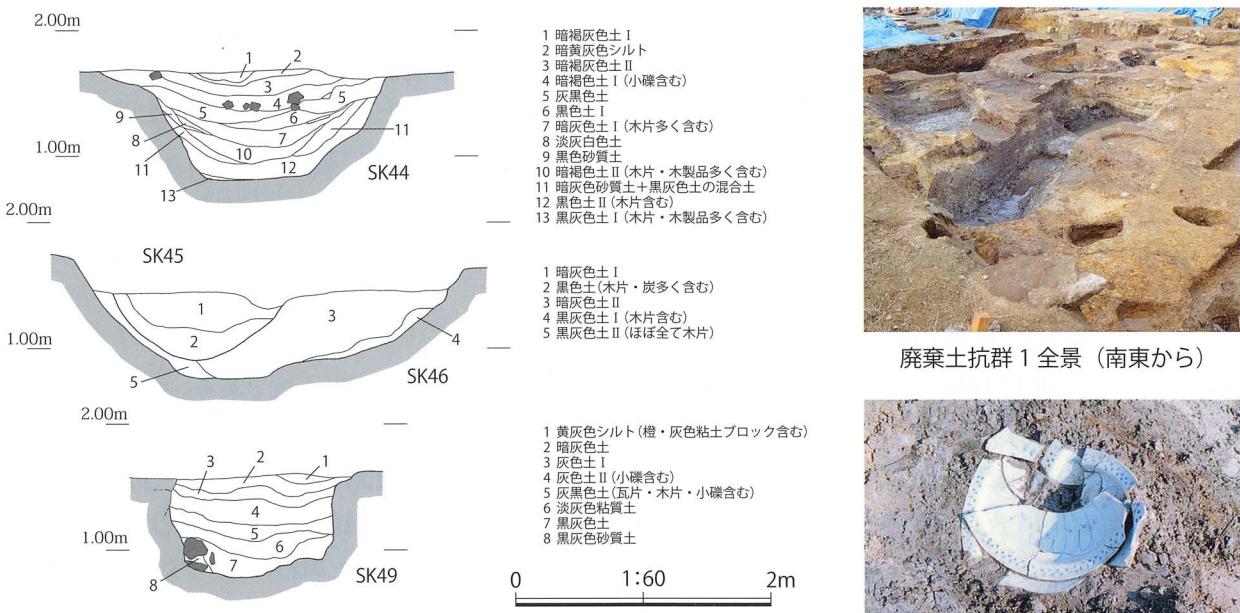
1767は直径2.3cm、厚み0.6cmを測るもので、双六の駒である可能性が考えられる。また、材質が鹿骨であるとも推測する。



第323図 SK42出土遺物

SK43～49：廃棄土坑群1（第320・324図）

廃棄土坑群1 SK43～49は調査区東端、帶状区画の東端一角で検出した廃棄土坑群である。東西約9m、南北約10mの範囲に大型廃棄土坑が集中して掘られている。その形状は多種多様であり、大形で不定形のSK44、その西隣にあるいびつな橢円形のSK43、SK43とSE03（第349図）に挟まれる形で位置す



第324図 SK44・45・46・49断面図

1787出土状況

る小形円形のSK47、SK44の南東側隣に位置するSK48、SK44とSK49の間に位置する正円形に近いSK45・46、SK45・46の北側に隣接し、勾玉状を呈するSK49の5個の廃棄土坑を検出した。いずれも隣接して掘られている状況から、廃棄土坑群1と呼称する。なお、各土坑の詳細は後述する。

廃棄土坑群1内の土坑群はゴミを捨てるために掘られた素掘りの穴である。いずれの土坑も覆土は黒色を呈し、灰や炭、木片等を多量に含んでいた。これは廃棄したゴミから発生する悪臭を防ぐため、またはゴミにたかる害虫等を寄せ付けないために、意識的に炭や灰を投棄する習慣に習ったものであると思われる。⁽¹¹⁾

土坑はSK45・46とSK49が若干密接する以外は独立しており、土坑の切り合い関係が見られない。土坑ごとの間隔は狭い所で0.5m、広い所では1.3mほど空いている。ゴミを捨てるために掘り、ゴミを捨て、埋めるという一連の作業を繰り返すのが廃棄土坑の性格と捉えられるが、ここではおそらく次々に土坑を掘り、短期間でゴミが満杯になったところで埋め、それ以降の掘り直しは行われなかつたことがうかがえる。穴を掘り分けた理由としては、ゴミの量が多かった、もしくは一度に大きな穴を掘るより小さな穴を何個も掘る方が効率が良かった、などが考えられる。

前述した土坑と土坑の幅についてであるが、ゴミを捨てる時に人が歩けるスペースを取っていたのか、偶然空いただけなのかは判断できていない。土坑が掘られた面の土は黄色シルト層であり、ゴミを捨てるたびに足元が弱くなる事態が予想できる。足場となるようなもの（木の板など）を敷いてゴミを捨てていたとも考えられる。

この土坑群の中でゴミを一括して埋めたと思われる土層を示すのはSK45・46である。廃棄された土層の細かい分層はできず、1層しか確認できなかったことから、一度にゴミを捨て埋めたものと考えられる。

各土坑から出土した遺物は多量で、陶磁器、土師器皿の他に、煙管・釘などの金属製品、火打石・砥石などの石製品、漆椀、墨書きが見られる荷札木筒、下駄・折敷・曲物・箸などの木製品、鬼瓦を含む瓦など、その種類は様々である。また、廃棄土坑でよく出土する貝殻や魚骨・獸骨などの動物遺体は廃棄土坑群1ではあまり出土していない。他の位置に掘られた廃棄土坑、

前述した第2遺構面のSK13（第271図）・後述する廃棄土坑群2（第337図）などからは多量の動物遺体が出土していることから考えて、廃棄土坑群1には食物残滓をあまり捨てなかった傾向を挙げることができる。⁽¹²⁾ これは、食生活に関わる生ゴミと、他の生活において発生するゴミは捨てる場所が分けられていた可能性を示唆していると思われる。生ゴミは台所の近くに捨て、それ以外のゴミは別のゴミ捨て場に捨てたということが分かれば、当時の人々のゴミ捨てに対する観念をわずかでも知ることができよう。

SK43：廃棄土坑（第320図）

SK43

SK43は廃棄土坑群1の範囲内の南側に位置するいびつな橢円形土坑である。東西長3.8m、南北幅1.4～2.7m、深さ0.2mを測る土坑である。

遺物は廃棄土坑群1内で最も多量に出土しており、陶磁器・土師器皿・金属製品・漆器・木製品・木簡・瓦などが出土している。遺物の時期は九陶II～IV期（1610～1780年代）のものが見られ、このうちIII期（1650～90年代）を示す遺物が最も多いと思われる。

SK43 出土遺物（第325～328図）

国産陶器

1768～1772・1774は肥産陶器である。1768は高台に砂目か胎土目痕が見られる中碗、1769・1770は呉器形中碗で、丸味が強い形状を呈する。1771はこげ茶色の外内面に白色刷毛目文が施文される中碗である。内面の施文は上から見ると見込み部分に花文が描かれているように見える優品である。1772は見込みに蛇の目釉剥ぎが見られる皿、1774は口縁部外内面に施釉が見られる擂鉢である。

1773は産地不明の陶器で、鉢か皿の底部である。高台が高く、内面に胎土目痕が見られる。

国産磁器

1775～1787は肥前磁器である。1775は丸形小碗で、高台内に「太明成化」の銘が入る。1776は腰張形の小碗で、口縁部がわずかに内傾する。外面に色絵が描かれる。1777は丸形中碗で、外面には所狭しと円形（菊花文など）の文様が描かれ、見込みに五弁花文、高台内に「太明成化年製」の銘が入る。1778は大碗で、外面四方に円形文、その周囲には「寿」の文字が数多く書かれている。1779は蓋物の蓋で、つまみは欠損している。1780は見込みに菊花文が描かれる小皿で、漆継ぎで補修された痕跡が見られる。1781は口縁部が直口気味に立ち上がる小壺である。口縁部外面には渦巻文が描かれている。1782は口縁部が明確に屈曲し、斜め上方に開く特徴的な小鉢である。1783は青磁で、蛇の目凹型高台の香炉である。胴部下方に明確な段を付ける。1784は波佐見焼・青磁の中鉢で、蛇の目凹型高台である。1785は徳利形の中瓶で、口径6.0cm、胴部最大径12.1cm、底径7.1cm、器高21.0cmを測る。胴部全面に網目文が描かれている。1786・1787は初期伊万里の優品である。1786は丸形底狭の五寸皿で、内面には鶴が描かれている。1787は直径36.0cmを測る大皿で、内面には皿のサイズに合った大きな菊花文が1つ描かれている。また、高台には砂目痕が見られる。

土師器皿

1788～1790は口クロ成形による土師器皿で、いずれも底部を回転糸切りで調整している。1788・1790には口縁端部に油煙痕が見られることから、灯明皿として使われていたものと考える。

金属製品

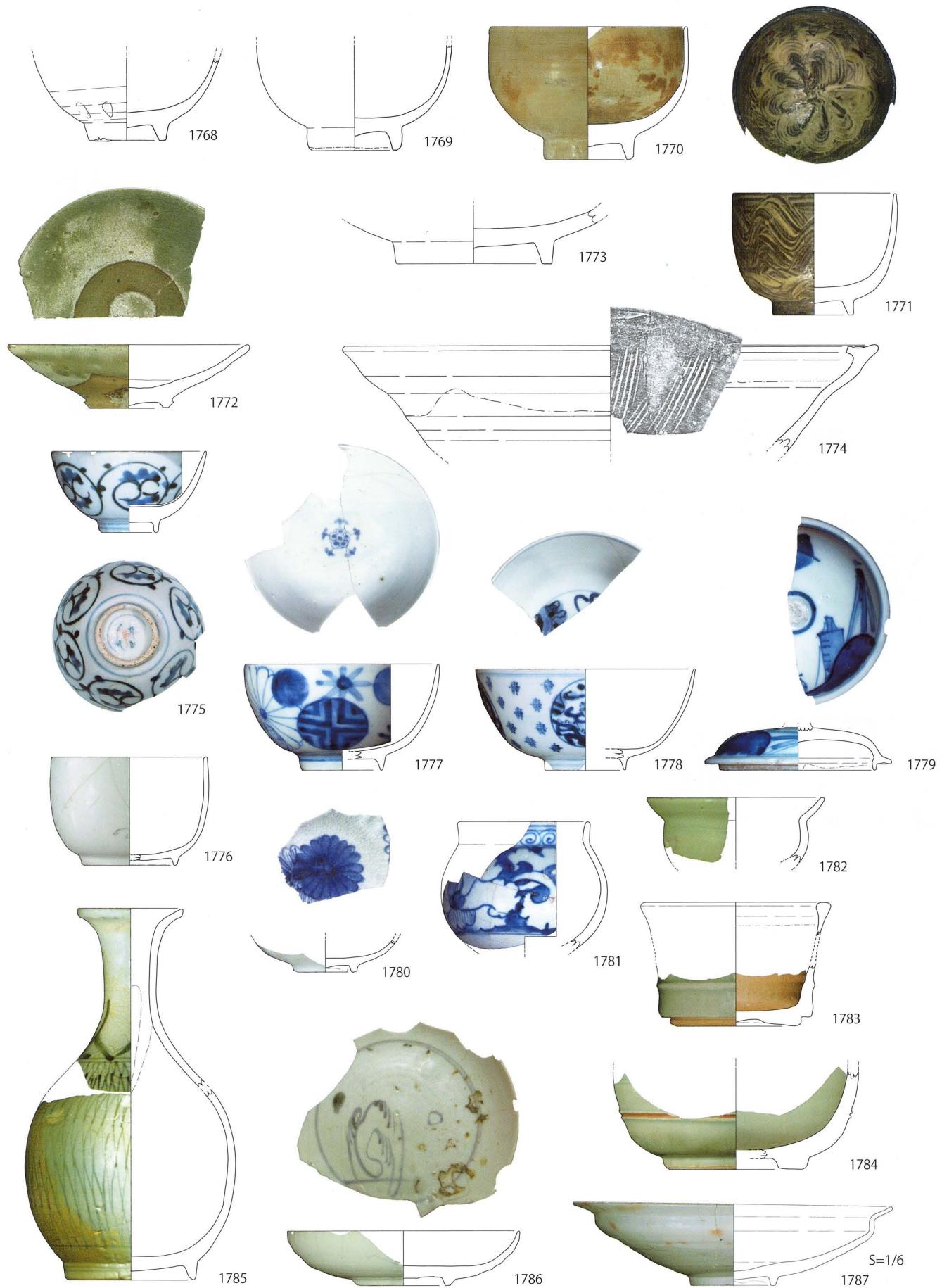
1791は真鍮製の煙管で、雁首部分であるが火皿が欠損している。残存長は6.9cm、小口径1.2cmを測る。

石製品

1792は火打ち石として使用されたもので、材質は不明である。最大長3.7cm、最大幅2.5cm、厚み2.2cm、重量20.39gを測る。

1793は石製の落款印である。落款印とは、書・絵・俳句などに作者の署名として押すもの

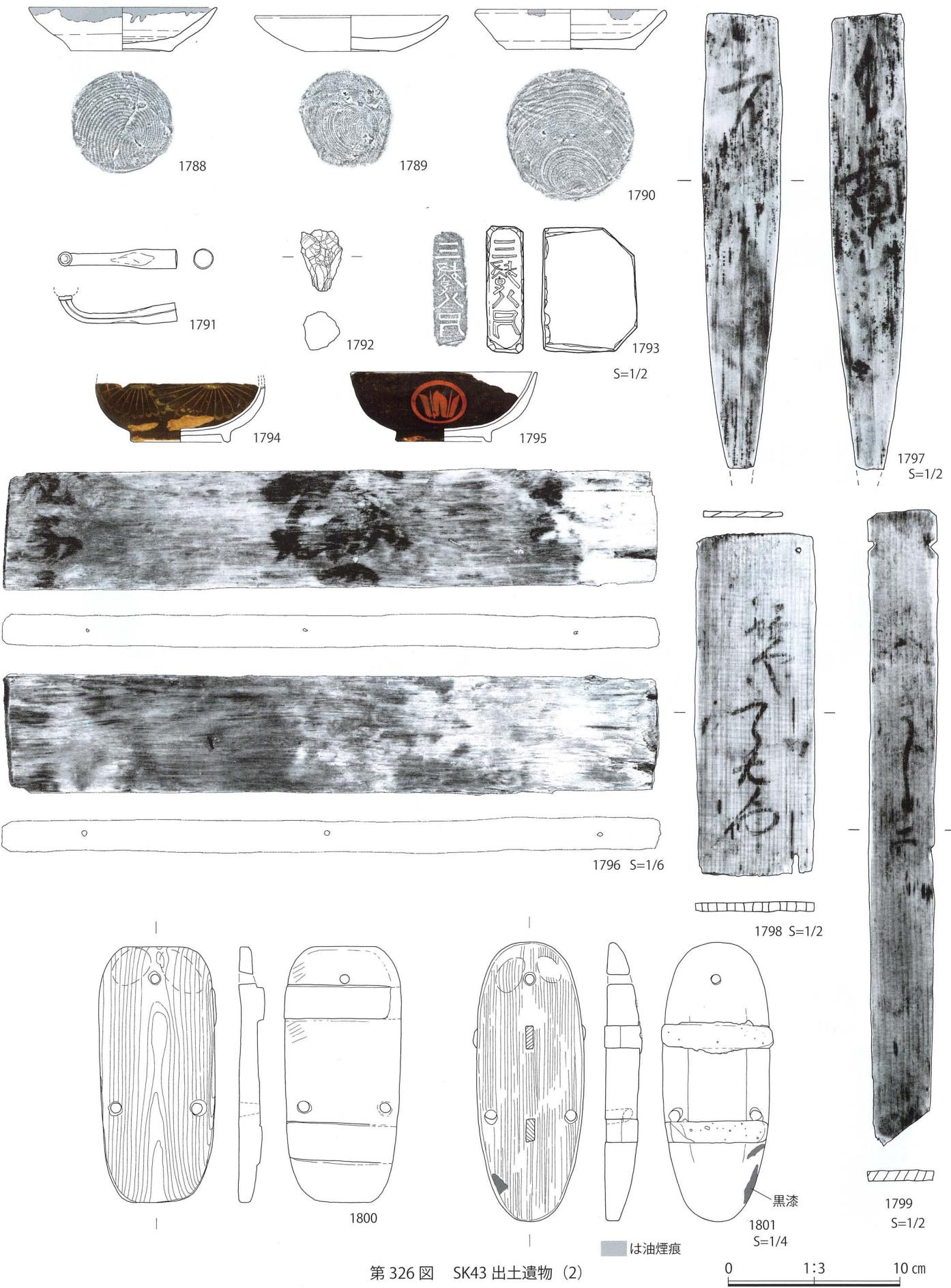
第5節 第3-1 遺構面



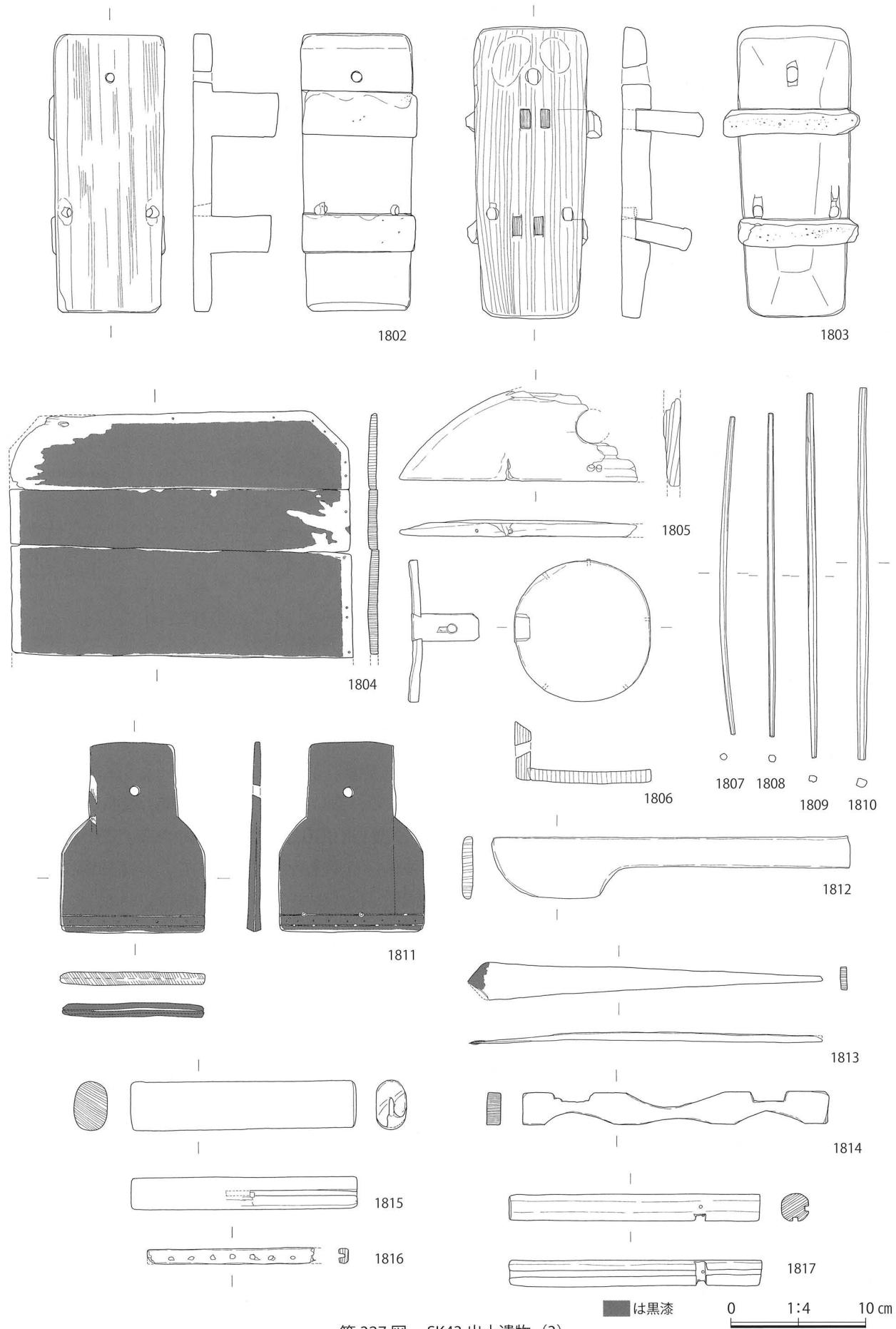
第325図 SK43出土遺物(1)

0 1:3 10 cm

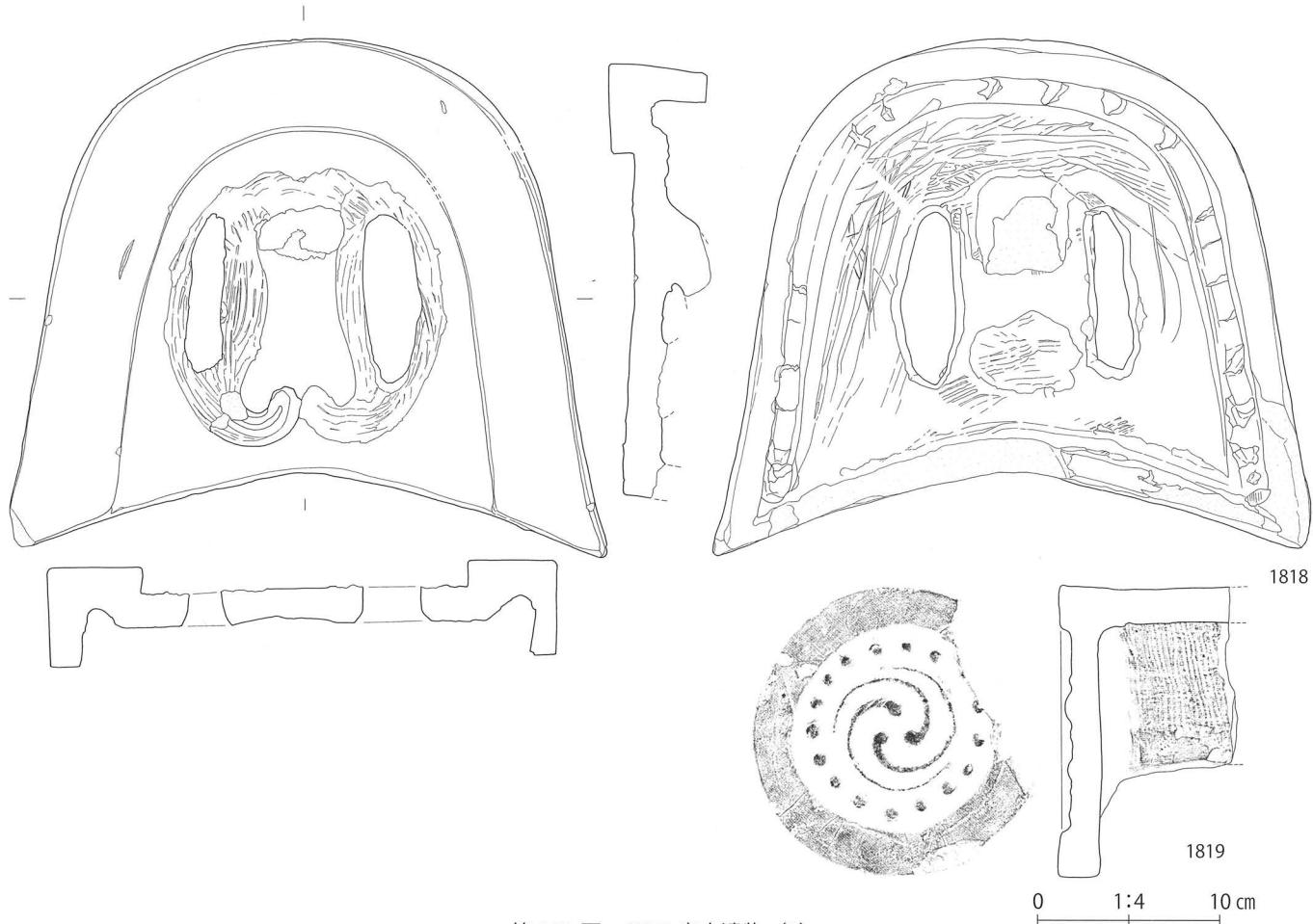
第5章 殿町 279番地外調査（南屋敷）の概要



第326図 SK43出土遺物(2)



第327図 SK43出土遺物(3)



第328図 SK43出土遺物 (4)

である。長さ 4.9cm、幅 3.7cm、厚み 1.4cm、重量 52.45g を測る。文字が刻まれていない方は持ち手であり、両角が斜めに削り落とされている。持つ際に握りやすいように加工されたものと考える。印文は、「三餐八尺」と陰刻されている。これは、「大廈千間 夜臥八尺 良田 千畝日食三餐」という四言詩から「八尺」と「三餐」を引用したものと思われる。この詩は「大きな屋敷が無くても寝るだけの広さがあればいい。千枚も水田が無くても、一日三度の食事ができればいい」という意味であり、贅沢をせずに質素儉約を貫くことを掲げている。この落款印がどのような境遇でつくられ、どのような意図の下に使われたかは判明していない。

漆器

1794・1795 は漆椀で、外面に黒色、内面に赤色の漆塗りを施す。1794 は黄絵で菊文が、1795 は赤絵の丸文に笹が、それぞれ外面に描かれている。

墨書木製品

1796 は最大長 37.9cm、最大幅 7.1cm、厚み 1.8cm の大形板に墨書が書かれている。文字の方向は板を横にした状態で縦書きされており、おそらくこの板 1 枚ではなく上下に何枚か繋げてあったものと思われる。

荷札木簡

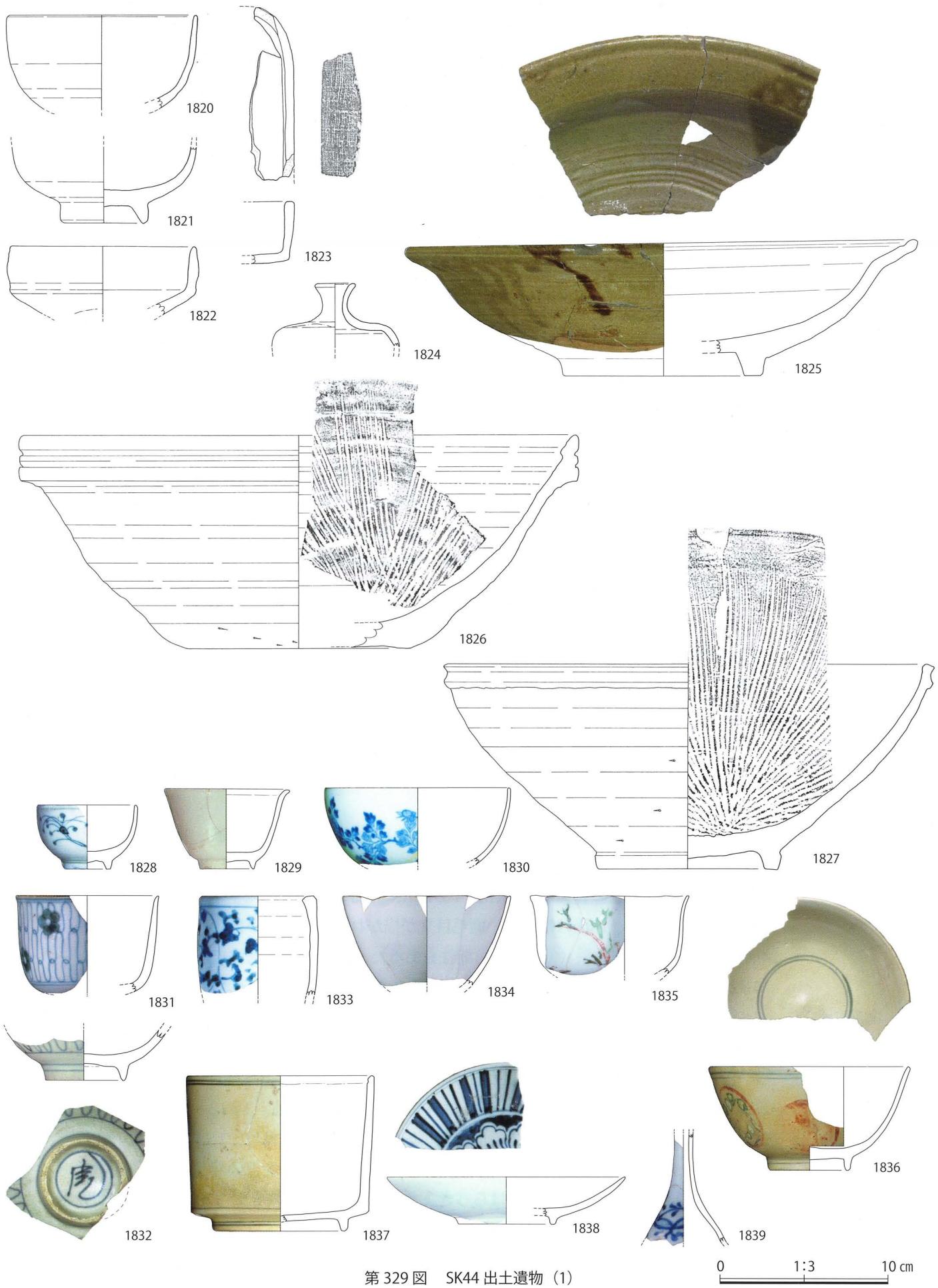
1797 は荷札木簡で、下方部が細く削られている。最大長 17.7cm、最大幅 3.1cm、最小幅 1.0 cm、厚み 0.3cm を測る。両面に墨書文字が見られ、左面には「二月（十一月か）四□」、右面には「上田□□」と書かれている。

1798 は最大長 13.3cm、最大幅 4.7cm、厚み 0.4cm を測る長方形の板で、右上に直径 0.2cm の穿孔が見られる。墨書文字があるのは片面のみで、「塩や一郎左衛門」と書かれている。

1799 は上方部に紐を巻き付ける挿りが入れられている荷札木簡である。最大長 24.6cm、最大幅 2.8cm、厚み 0.5cm を測る。墨書文字は片面のみに書かれ、「き□二」または「さら二」

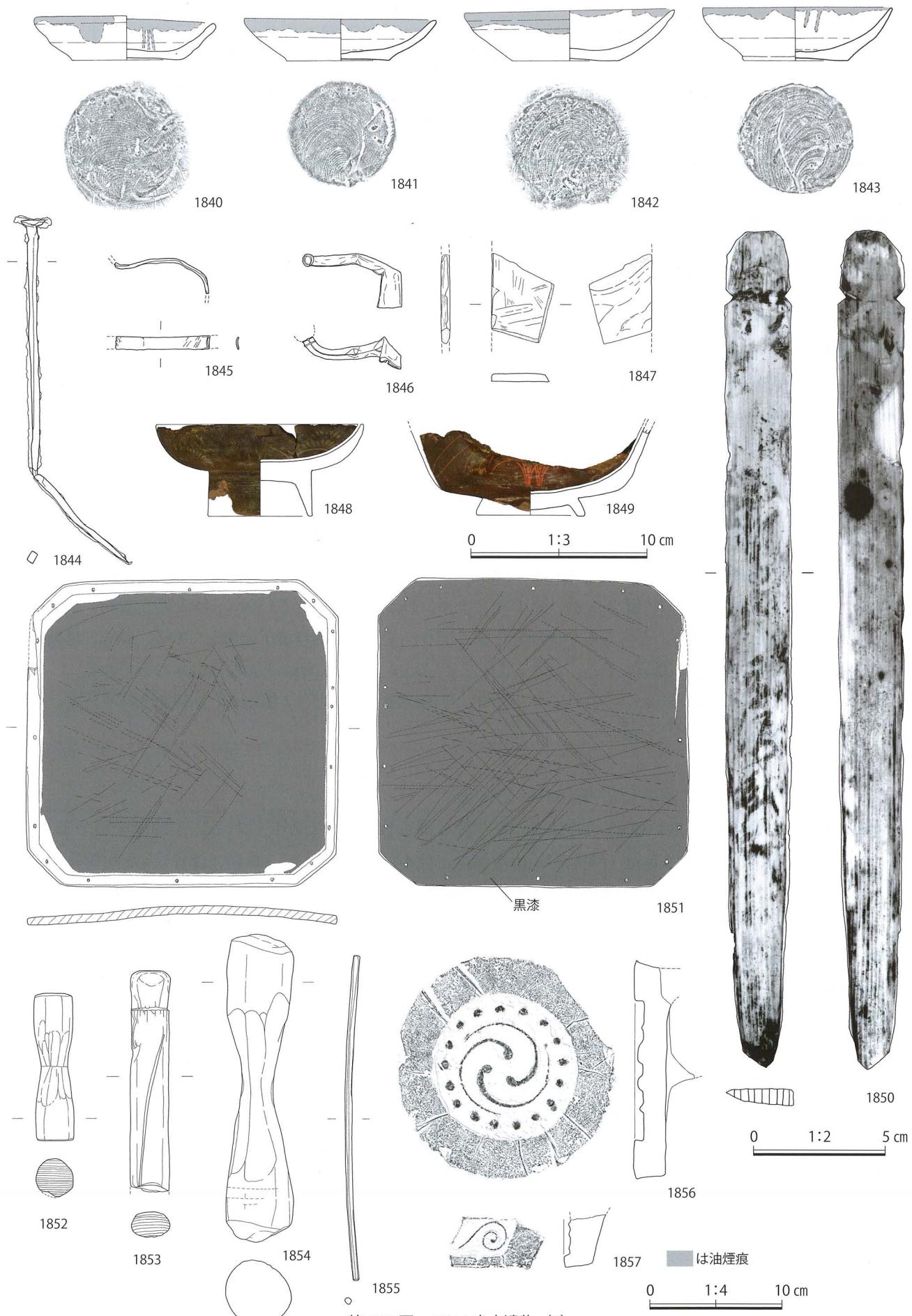
- と読める。
- 木製品**
- 1800～1803は下駄である。1800は連歯下駄で、角型と丸型の中間を示す隅丸型である。1801は角型の連歯下駄で、歯の厚みは前歯が3.2cm、後歯が2.6cmを測る。1802は丸型の差込下駄で、部分的に漆塗りの痕跡が見られる。1803は角型の差込下駄で、歯を差し込むホゾ穴が2個ずつ開けられている。1802・1803の歯裏には砂が密着しているのが見て取れる。また、前方鼻緒部分には指の跡が残っているものもあり、履かれていた當時を偲ばせるものである。
- 1804は長さ25.1cmを測る折敷の底部で、表裏両面に黒漆が塗られている。1805は樽の蓋板で、端部付近に直径2.5cmの孔が開いている。1806は直径10.5cmの柄杓で、身部側板と底板の残存である。1807～1810は白木の箸で、長さは24～27.5cm間にわたりますが、全体的に長い箸である。1811は全面に黒漆が塗られている刷毛で、柄の中央に直径0.6cmの穿孔が見られる。紐を通した孔であろうか。刷毛部分には毛を通すために付けられた線刻状の痕跡も見られる。1812は最大長26.5cm、刃部8.0cm、柄の幅2.2cmを測る片刃のへら、1813は最大長26.1cm、柄の先端は0.4cm、刃部にかけて太くなり幅2.8cmを測るへら状のものである。刃部の先端には漆が付着しているが、何に使用されたものかは不明である。1815・1817は柄となる部分であり、1814・1816は不明品である。
- 瓦**
- 1818は最大長28.5cm、幅32.9cm、厚み2.0cmを測る鬼瓦の一部で、鬼の顔を貼り付けた痕跡が顕著に見られる。1819は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲に珠文が17個廻る。巴文が通常より若干小さく、細い傾向にある。
- SK44：廃棄土坑（第320・324図）**
- SK44**
- SK44は廃棄土坑群1内の最東端に位置する不定形の大形土坑である。南西—北東方向を軸として、長辺6.5m、短辺1.5～2.6m、深さ0.85mを測る。
- 遺物はSK43に次いで多く出土しており、その時期は九陶Ⅲ～Ⅳ期（1650～1780年代）に渡るものが見られ、Ⅲ期（1650～90年代）が最も多いと思われる。
- SK44 出土遺物（第329・330図）**
- 国産陶器**
- 1820～1823・1825～1827は陶器である。1820は肥前の丸形中碗、1821は肥前の呉器形中碗である。1822は瀬戸・美濃の腰折形中碗で、腰部が強い稜線とともに明確に折れ曲がる。1823は在地産の鬚盥で、残存長10.4cm、器高3.7cmを測る。1825は口径30.5cmを測る肥前の大皿で、内面は幅の広い刷毛目文が描かれ、胎土目痕が見られる。1826・1827は擂鉢で、1826は肥前系（備前系の可能性もある）、1827は須佐唐津である。
- 1824は炻器のペコかん形小瓶であり、備前系の可能性が考えられる。
- 国産磁器**
- 1828～1839は肥前磁器である。1828は腰張形小壺、1829は白磁の端反形猪口である。1830～1832・1836は中碗で、1831は口縁端部に口鍤を施し、外面は形骸化された網目文に花文が点々と重なる美しい文様が描かれる。また、漆継ぎによる補修の痕跡が見られる。1832は外面に網目文が描かれる。1836は外面に色絵が見られる。1832・1836はいずれも高台に砂目痕が見られる。1833は外面に蓮華唐草文が描かれる香炉、1834は白磁の轆轤形向付、1835は色絵の八角形小鉢である。1837は口径11.2cmを測る半筒形の蓋物、1838は丸形底狭の五寸皿である。1839はらっきょう形の小瓶で、漆継ぎによる補修の痕跡が見られる。
- 土師器皿**
- 1840～1843は口クロ成形による土師器皿で、底部は回転糸切りで調整されている。すべて

第5章 殿町 279番地外調査（南屋敷）の概要



第329図 SK44出土遺物 (1)

第5節 第3-1遺構面

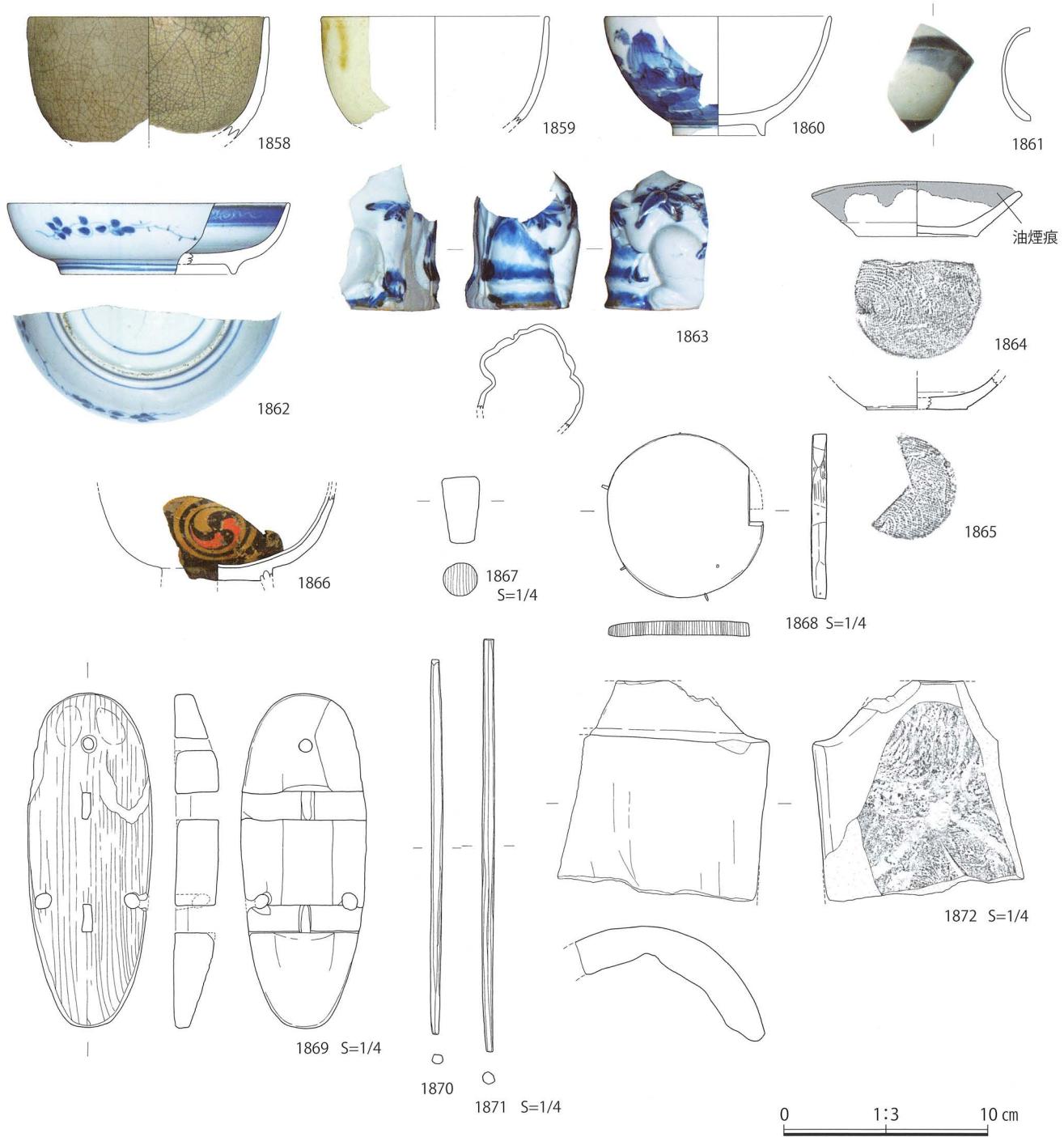


第330図 SK44出土遺物 (2)

	の口縁端部に油煙痕、1840・1842の底部に灯芯痕が見られることから、灯明皿として使用されていたと考える。
金属製品	1844は鉄製の釘で、下方部で折れているが復元最大長は22.3cmを測り、カサ部分は2.1cmの面を持つ。1845は銅製の不明品、1846は真鍮製の煙管で、吸口部分である。
石製品	1847は砥石で、残存長4.4cm、残存幅3.5cm、厚みは0.45cmを測る。小さい破片だが使用痕は顕著に見られ、刀用の砥石ではないかと推測する。
漆器	1848は足高漆椀で、高台部分と器部分がともに2.6cmを測る特殊な器形を呈する。外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られており、外面には黄色で草文が描かれる。1849は一文字椀と呼ばれる漆椀で、腰部が一文字に見えるほど明確に張っている。外内面は全て黒色の漆が塗られ、外面には赤色でススキ文が描かれている。
荷札木簡	1850は最大長31.9cm、幅2.5cm、厚み0.6cmを測る完形の荷札木簡である。上方部は紐を掛けるための挿りが両側から入り、下方部は先細るように加工されている。両面に墨書文字が見られ、このうち解説が可能であったのは左面のみであった。「□御収品 有沢織部」と書かれており、「有沢織部」という人物が何かの品を納める、もしくは贈答する、というような意味合いではなかろうか。
木製品	1851は折敷の底板で、長さ23.5cm、幅23.3cmを測り、ほぼ完全な形で残る。全面に黒漆が塗られており、周縁には竹釘の痕跡が18個見られる。両面には引っ掻いたような傷が多数付けられている。1852・1854はほぼ同一形状を呈する糸巻きである。1852は最大長11.2cm、最大径2.9cm、最小径2.0cm、1854は最大長23.3cm、最大径5.2cm、最小径2.5cmを測り、どちらも中央部分を細く削り、全面に面取り加工を施している。1853は何かの柄となる木製品である。1855は長さ24.7cm、直径0.5cmを測るの白木の箸である。
瓦	1856は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲を珠文が17個廻る。1857は軒平瓦で、唐草文が刻まれている。

SK45・46：廃棄土坑（第320・324図）

SK45・46	SK45・46はSK46の中にSK45が後に掘られた重なりが見られる円形廃棄土坑である。SK45は直径1.5m、深さ0.55mを測り、SK46は直径3.1～3.5m、深さ0.7mを測る。SK45・46の出土遺物はいずれも九陶Ⅲ期（1650～90年代）にあたると思われ、2つの土坑が掘られた期間は短い間に行われたものであったと言える。
SK45	SK45 出土遺物（第331図）
国産陶器	1858・1859は肥前陶器である。1858は丸形中碗で、1859は京焼系の丸形中碗である。
国産磁器	1860～1863は肥前磁器である。1860は丸形中碗で、高台に砂目痕が見られる。1861は合子の蓋、1862は丸形底広の五寸皿である。高台には砂が付着し、断面には漆継ぎによる補修が見られる。1863は猫が笹竹を抱いている様子を象った置物である。
土師器皿	1864・1865は口クロ成形による土師器皿で、底部は回転糸切りで調整されている。1864は口縁端部に油煙痕が見られることから、灯明皿として使用していたと考える。
漆器	1866は漆椀で、外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られており、外面には黄色の二重丸に一部赤色の左三巴文が描かれている。
木製品	1867は円柱状の栓で、長さ4.3cm、最大径2.5cm、最小径1.7cmを測る。1868は柄杓の底板で、直径10.7cmを測る。
	1869は丸型の差込下駄で、最大長21.8cm、最大幅8.2cmを測るやや小さいものであ



第331図 SK45出土遺物

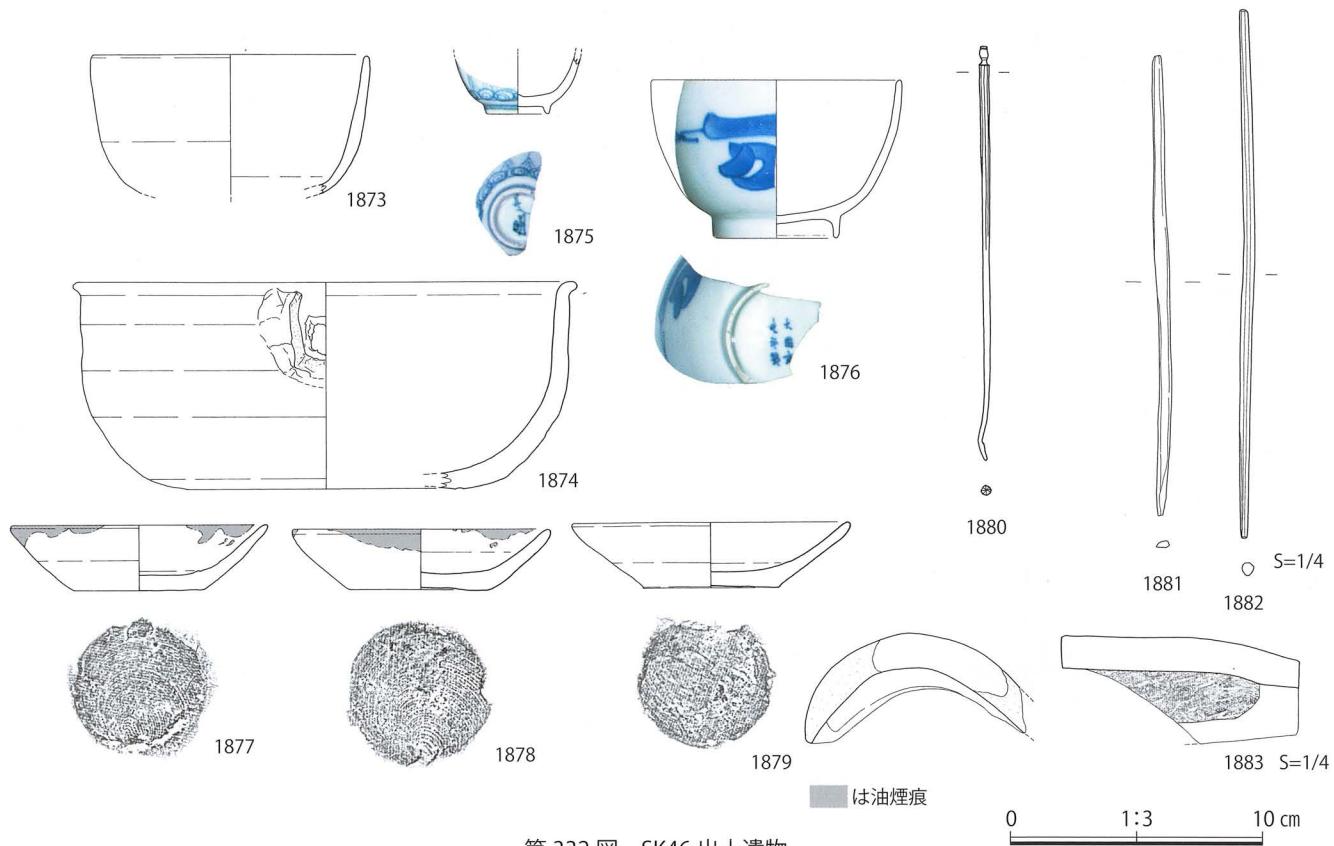
1870・1871は白木の箸で、1870は24.5cm、1871は27.0cmを測る。直径は0.6～0.8cmとやや太く、長い箸である。

瓦 1872は丸瓦で、コビキBである。

SK46 出土遺物（第332図）

国産陶器 1873・1874は肥前陶器である。1873は口径11.1cmを測る腰張形の中碗、1874は口縁切込丸形の片口である。腰部が大きく張り出す形状を呈する。

国産磁器 1875・1876は肥前磁器である。1875は丸形小杯で、高台内に「太明」の銘が入る。1876は半球形の中碗で、高台内に「太明成化年製」の銘が入る。



第332図 SK46出土遺物

- 土師器皿** 1877～1879はロクロ成形による土師器皿で、底部は回転糸切りで調整されている。1877・1878の口縁部には油煙痕が見られることから、灯明皿として使われていたと思われる。
- 金属製品** 1880は長さ16.5cm、直径0.4cm、重量10.95gを測るもので、材質は不明である。頂部は頸部分が削り出されており、また端部は緩やかに歪曲している。この形状から、簪ではないかと推測する。
- 木製品** 1881・1882は白木の箸で、1882は27.9cmを測る長い箸である。
- 瓦** 1883は棟込瓦で、内面に布目の痕跡が確認できる。

SK47：廃棄土坑（第320図）

SK47は廃棄土坑群1内で最も西側に位置する円形土坑である。直径1.6～1.8m、深さ0.65mを測る小形の土坑である。

遺物は陶磁器・土師器・漆器・木製品が出土しており、概ね九陶III～IV期（1650～1780年代）の時期を示すものと思われる。

SK47出土遺物（第333図）

- 国産陶器** 1884は肥前陶器の折縁形中皿で、口径18.8cmを測る。口縁端部は短く外反する。
- 国産磁器** 1885は肥前磁器で、白磁の端反形小壺である。
- 土師器皿** 1886は手づくね成形、1887はロクロ成形による土師器皿である。1887の底部は回転糸切りで調整されている。いずれも油煙痕が認められ、灯明皿として使われていたと考える。
- 漆器** 1888・1889は漆椀である。1888は器高3.0cmを測る椀で、外面に黄色二重丸に五弁花纹が3個描かれている。蓋の可能性も考えられる。1889は高台の高さ2.6cm、器高9.2cmを測る椀で、外面には黄色丸に鶴文が3個描かれている。いずれも外面は黒色、内面は赤色

の漆が塗られている。

木製品

1890は不明品、1891は何かの柄となる部分である。1892・1893は白木の箸で、いずれも長さ26cm前後、直径0.6～0.7cmを測るやや太い箸である。

SK48：廃棄土坑（第320図）

SK48

SK48は廃棄土坑群1内の最東端に位置し、SK44の南東側に掘られた方形に近い形状を呈する土坑である。SK48の東側は調査範囲を越えるため、すべてを掘り切るには至っていない。南北長2.5m、東西幅1.8m、深さ0.80mを測る土坑で、やや小さい土坑ながらも遺物は大量に出土した。

遺物の年代は九陶Ⅲ期が占めている様相である。

SK48 出土遺物（第334～336図）

国産陶器

1894～1898は肥前陶器である。1894・1895は口径11.0cm前後の呂器形中碗、1896は半筒形中碗である。1897は口径21.3cmを測る中鉢で、口縁部が外反しながら垂直に立ち上がる。外面には波打つ刷毛目文が描かれる。1898は折縁形の大皿で、口径28.4cmを測る。内面は大振りの刷毛目文が描かれる。

国産磁器

1899～1904は肥前磁器である。1899は丸形小杯で、外面に「遠山」が描かれる。1900・1901は白磁の端反形小碗、1902は丸形中碗で、色絵が入る。また、黒色の横隔線が引かれている。1903は浅半球形の大碗で、見込みに荒磯文が描かれる。1904は型押成形による菊花形の五寸皿である。

土師器皿

1905は口径7.2cm、底径3.1cm、器高1.7cmを測る小形の土師器皿で、手づくね成形による変形形のものである。器高が低く、口縁部も短く外反しない。1906～1912は口クロ成形による土師器皿で、底部は回転糸切りで調整されている。1906～1912は全て口縁部に油煙痕が見られ、灯明皿として使われていたと思われる。

焼塩壺

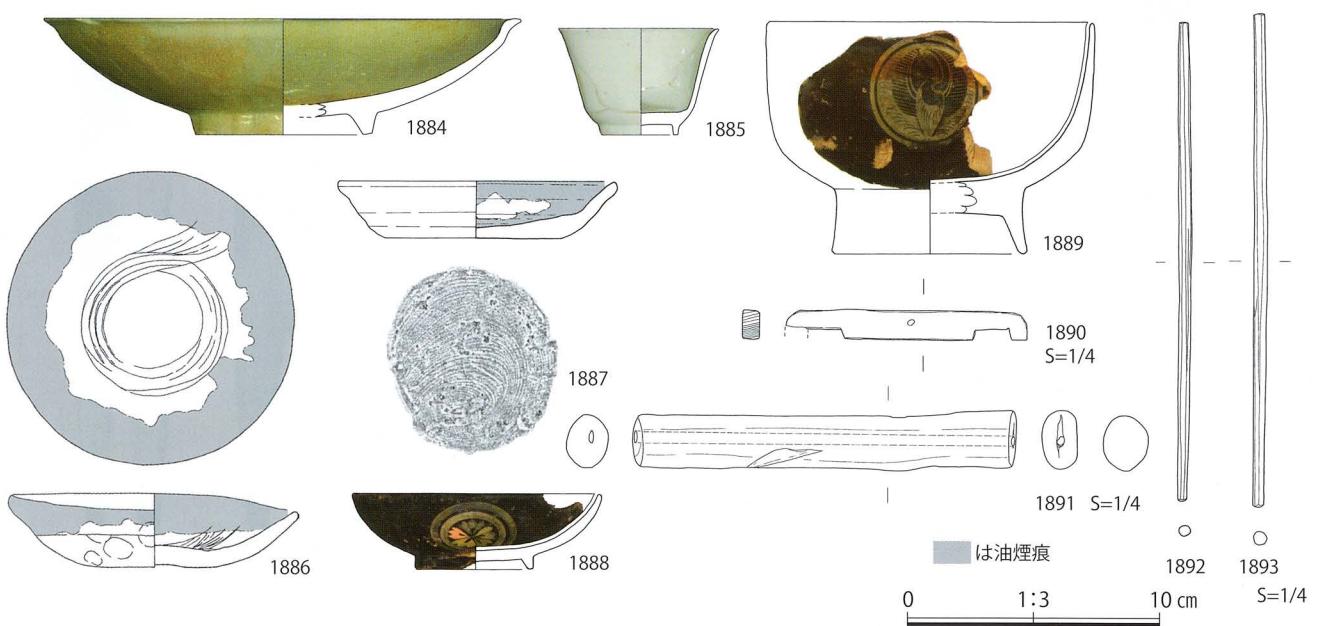
1913は焼塩壺の身である。筒形を呈し、口縁端部はわずかに外傾する。

金属製品

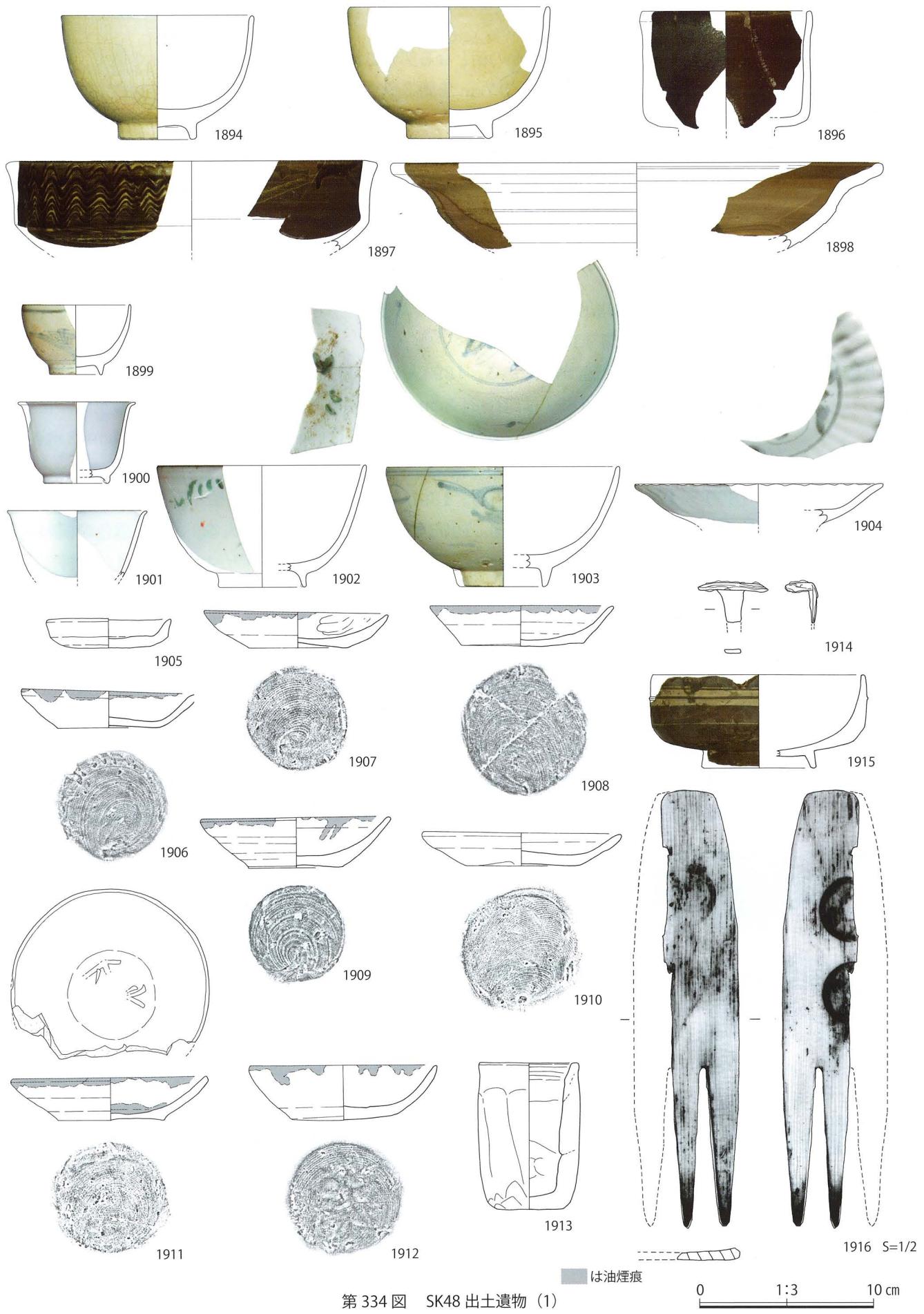
1914は鉄製の釘で、残存長2.3cm、カサ部分は4.0cmを測るものである。

漆器

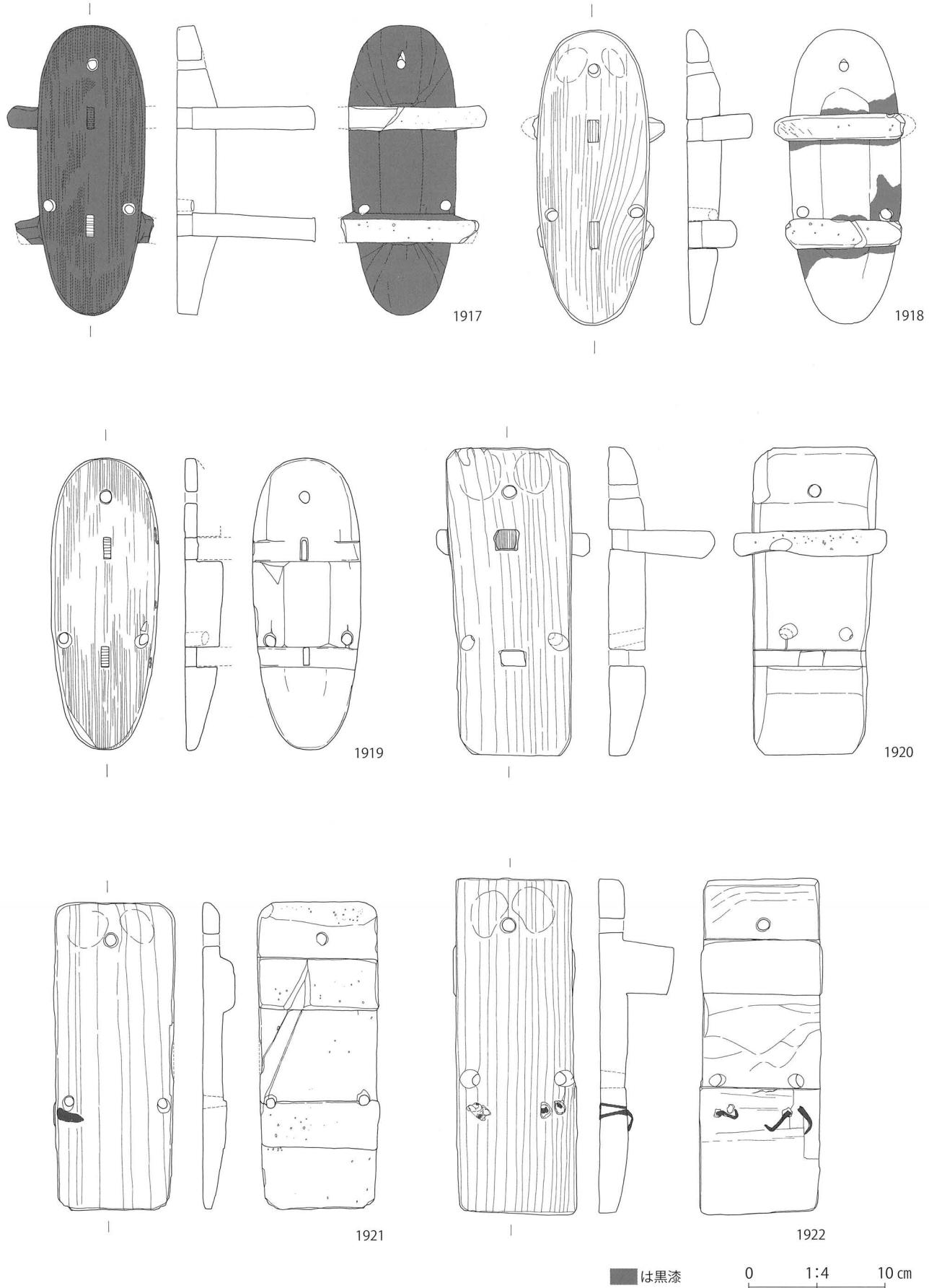
1915は平椀で、扁平な形状を呈する。全面に黒色の漆が塗られており、口縁端部のみに赤



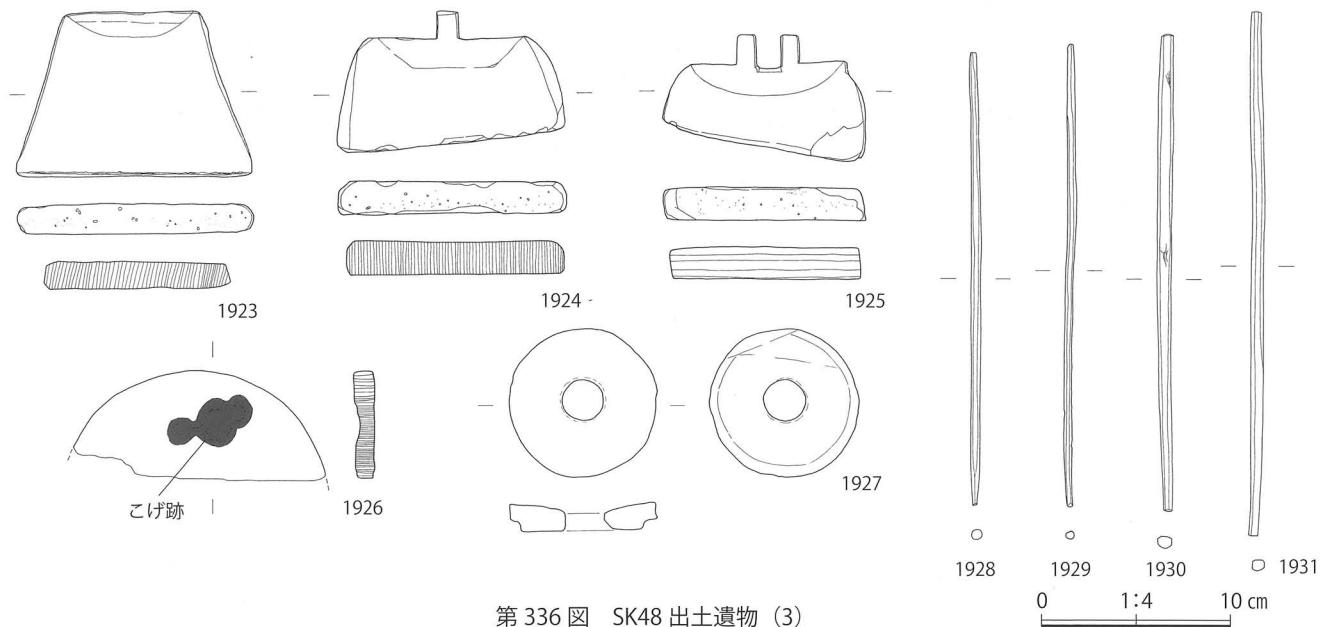
第333図 SK47 出土遺物



第334図 SK48出土遺物(1)



第335図 SK48出土遺物(2)



第336図 SK48出土遺物(3)

漆が塗られている。また、口縁部から1.3cm下方の位置に明確な稜線が巡り、その上下に黄色線が1本ずつ引かれている。

木製品

1916は下方部が三叉に分かれる加工が成されている板で、最大長16.7cm、残存幅3.0cm、厚み0.4cmを測る。復元最大幅は4.0cmを推定する。三叉に分かれる部分は櫛状に切り込みがあり、ほぼ均等間隔を保ってつくられている。両面に墨書文字は見られなかったが、貨幣（おそらく寛永通宝）の焼印が2ヶ所ずつ焼き付けられている。

1917～1922は下駄である。1917～1919は丸型の差込下駄で、いずれも最大長21cm前後を測る小さいものであり、黒漆が塗られている。1917は器高10.0cmを測るもので、歯の損傷があまり見られない完形に近いものである。1920は角型の差込下駄である。1921・1922は角型の連歯下駄で、1922の後歯には補修した痕跡が見られる。1923～1925は差込下駄の歯で、1923はホゾがなく大きな擦り減りが見られない。1924はホゾ1本、1925は2本で、歯部分はいずれも斜めに擦り減っている。

1926は曲物の底板で、焼き焦げ、火起こしの痕跡が見られる。1927は直径8.0cmを測る不明品で、中央に直径2.2cmの穴が開いている。1928～1931は白木の箸で、長さは24.0～27.7cmの間を測る長い箸である。

SK50～55：廃棄土坑群2（第320・337図）

SK50～55

SK50～55は調査区中央に近い西寄りの部分に見られる廃棄土坑群である。帯状区画東端にある廃棄土坑群1から西側に約10m離れた位置に、廃棄土坑が集中して掘られていることから、廃棄土坑群2と呼称する。

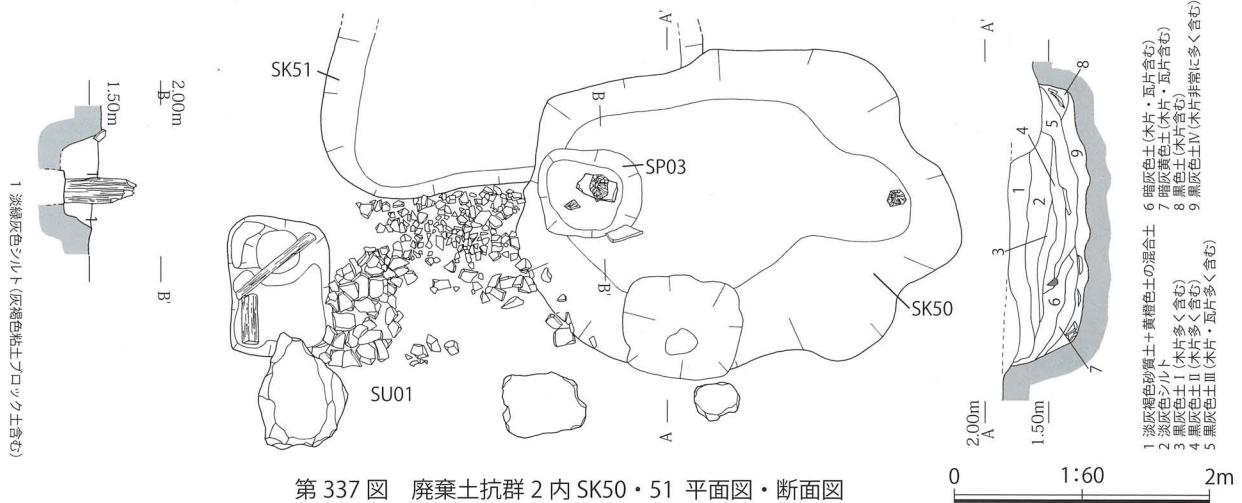
廃棄土坑群2は屋敷境石積溝SD01に程近い所にSK50・51、そこから約2m西側に離れた位置にSK52～54、さらに西側でSK55を検出した。なお、土坑の詳細については後述する。
SK50・51：廃棄土坑・SU01：瓦敷遺構（第337図）

SK50・51

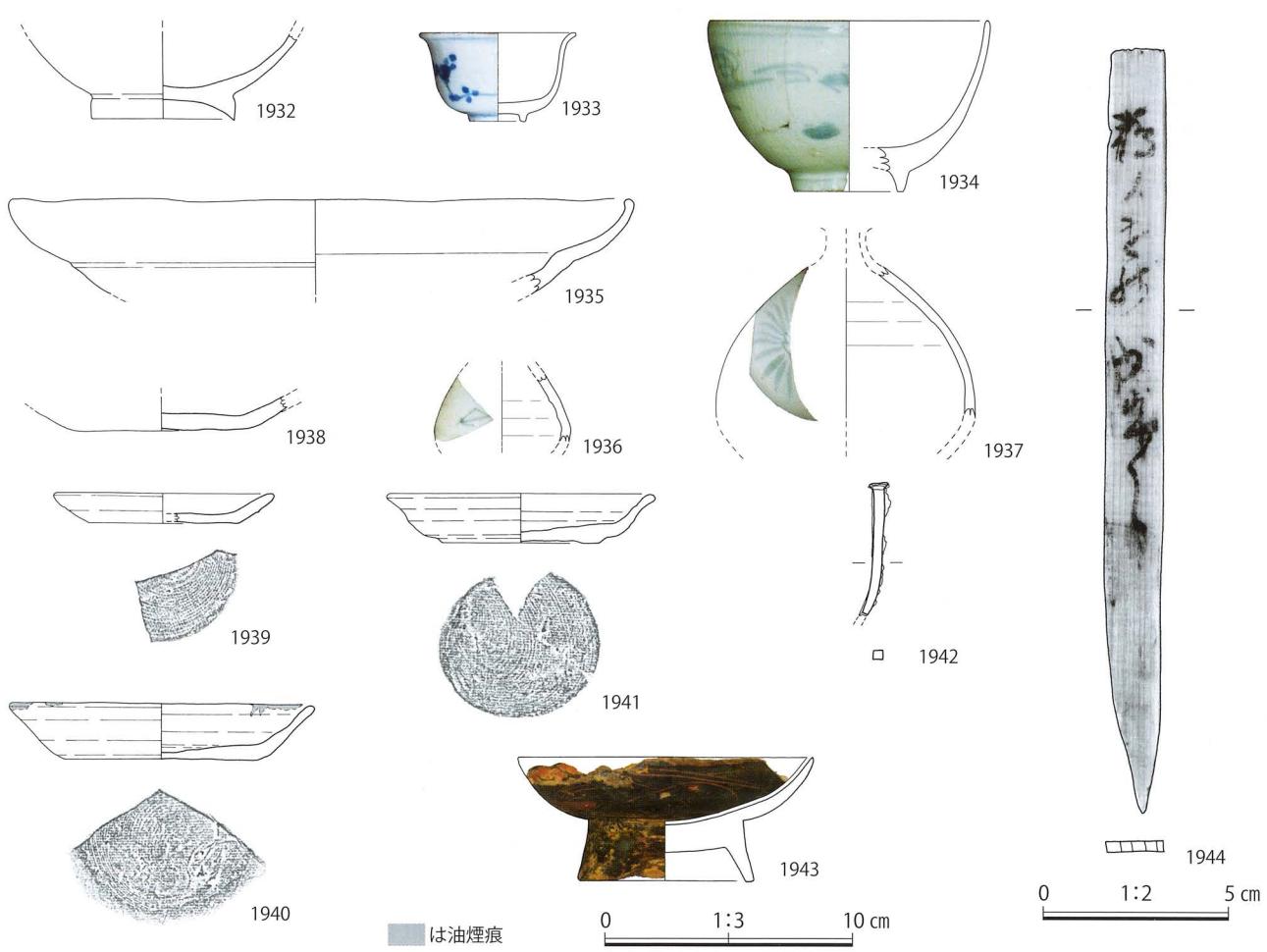
SK50は東西長3.5m、南北幅2.7m、深さ0.65mを測るいびつな楕円形土坑である。先に掘られたSK51（東西長3.0m、南北残存幅1.3m、深さ0.6m）を切って掘り込んでいるのを確認し、2つの土坑が重なる部分の西側には瓦敷SU01を検出した。

SU01

SU01は3～15cm大の瓦片が1.0m四方のいびつな範囲内に敷き詰められていた。おそ



第337図 廃棄土抗群2内 SK50・51 平面図・断面図



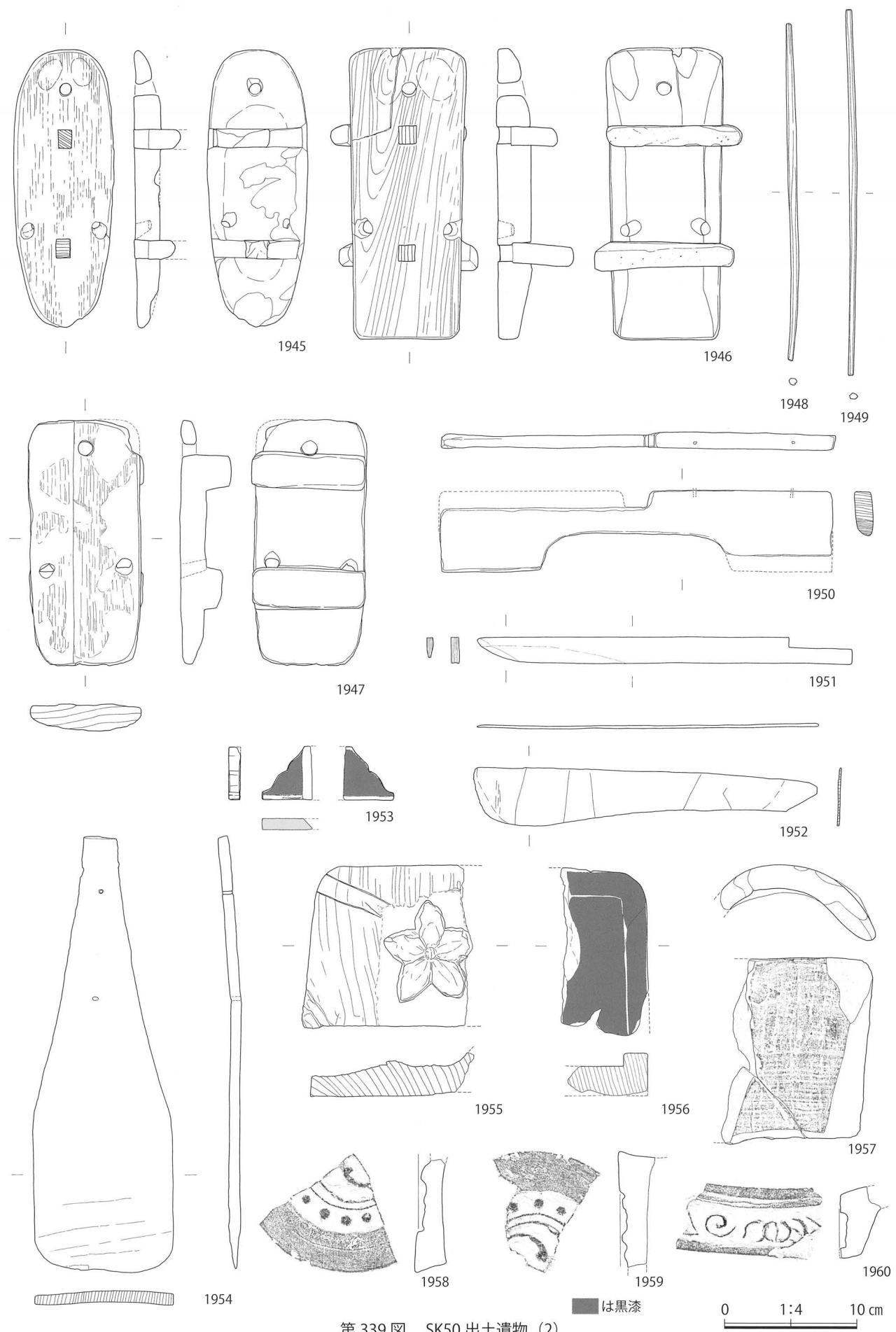
第338図 SK50出土遺物(1)

らくSK50・51を掘り込む際に壊されたものと思われ、掘り込みの際まで瓦が残存しているのを確認している。また、SK50の内面には瓦片が数点落ちていたことからも、SK50・51とSU01との新旧関係が見出せると思われる。SK50内の西側にはSK50を埋めた後に柱を立てるための穴SP03が掘り込まれており、柱の下には礎盤石として30cm大の赤大海崎石が入れられていた。

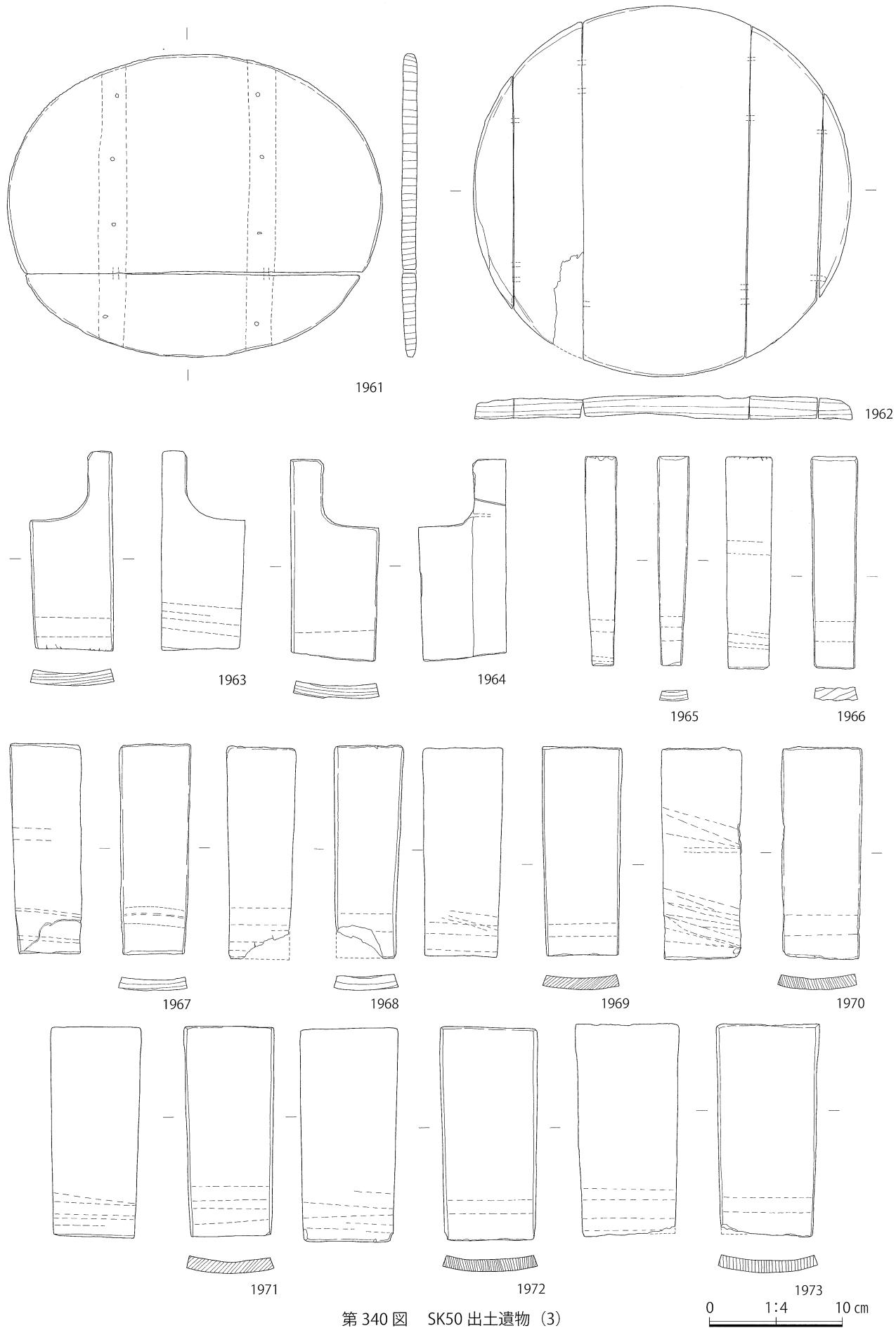
SK50・51から出土した遺物は陶磁器・土師器皿・漆器・荷札木簡・木製品・瓦片など様々である。遺物の年代は九陶Ⅲ～Ⅳ期（1650～1780年代）のものが主であると思われる。

SK50 出土遺物（第338～340図）

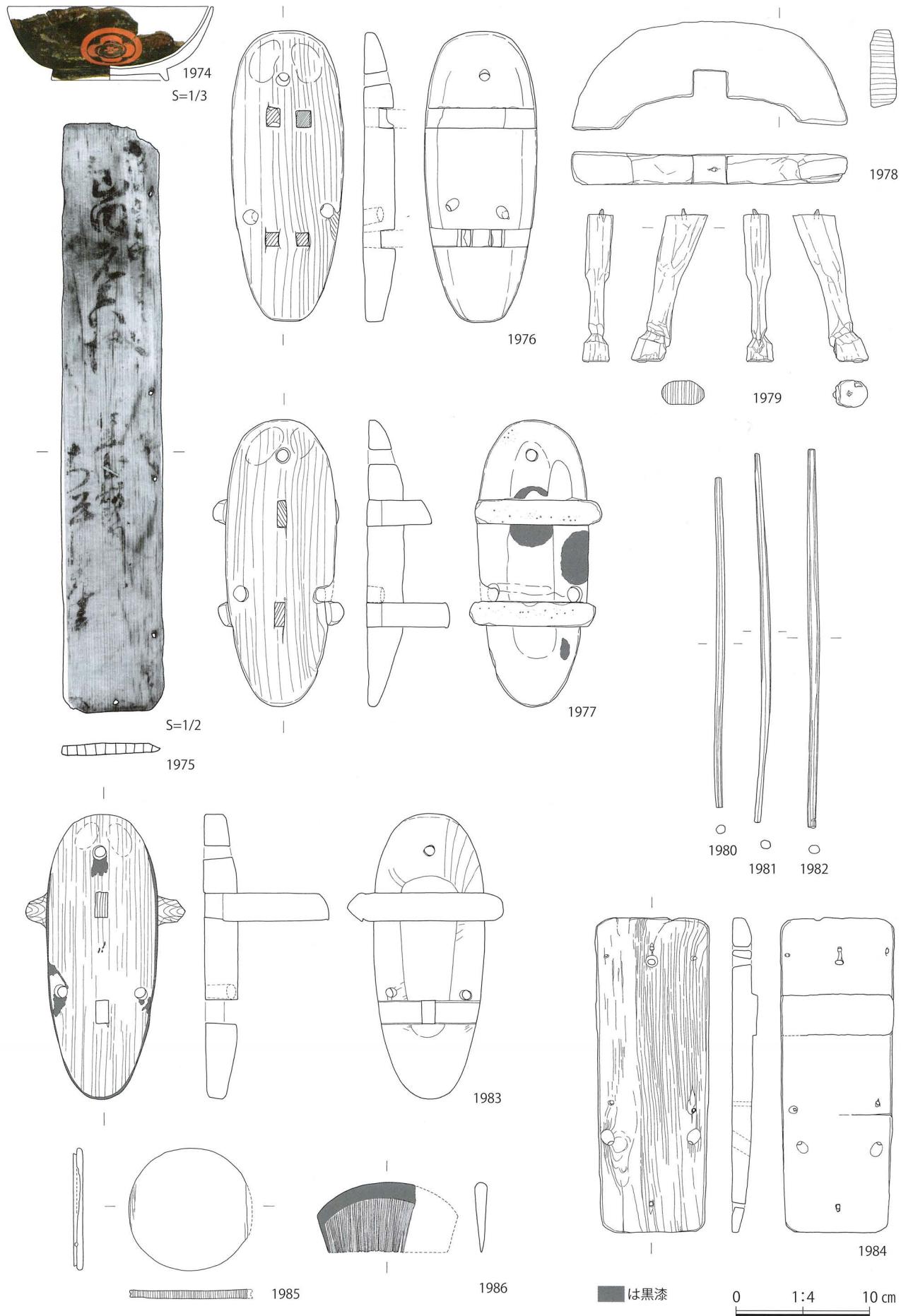
国産陶器	1932は肥前陶器の中碗で、高台には砂が付着している。高台内は明確な稜線が入っておらず、断面が三角形状を呈する。
貿易磁器	1933は中国磁器・精製で、景德鎮窯系の腰張形小杯である。口縁部は強く外反し、高台内は無釉である。
国産磁器	1934～1937は肥前磁器である。1934は丸形中碗で、高台内は無釉である。1935は口径25.2cmを測る白磁の中皿で、口縁部は外傾しながら内湾し、端部はさらに内湾する。また、口錫が施され、断面には漆継ぎによる補修の痕跡も見られる優品である。1936・1937は花瓶で、1936は胴部最大径5.4cm、1937は10.4cmを測る。いずれも胴部が張り出し丸味を持つ形状である。
土師器皿	1938は手づくね成形、1939～1941はロクロ成形による土師器皿である。後者の底部は回転糸切りで調整されている。1940・1941の口縁端部には油煙痕が見られることから、灯明皿として使われていたものと考える。
金属製品	1942は鉄製の釘で、残存長5.4cm、重量2.50gを測る。先端部を欠損している。
漆器	1943は漆椀で、高台部分が高く2.4cmを測るもので、「ハ」字状に開く。高台と器部分の深さがほぼ同じである。外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られ、外面には赤色で松が描かれている。
荷札木簡	1944は最大長20.6cm、最大幅1.6cm、厚み0.3cmを測る荷札木簡である。上方部には紐を付けるための抉りが片側のみわずかに入り、下方部は先細る。墨書文字は片面に見られ、「鶴ノけのつけし」と解読できた。この一文が何を表しているのかは現時点では不明であるが、「鶴」に関連する荷札であろうと思われる。
木製品	1945～1947は下駄である。1945は丸型の差込下駄で、長さ20.9cmを測る小さいものである。1946は角型の差込下駄、1947は角型の連歯下駄である。1948・1949は白木の箸で、1949は27.7cmを測る長いものである。1950は長さ29.5cmを測るもので、折敷の脚部ではないかと思われる。1951は刀身の模倣品と思われ、最大長28.1cm、幅2.0cmを測る。1952は刃部が擦り減っている片刃のヘラである。1953は三角形状を呈する小形木製品で、飾り彫りが施される丁寧なつくりだが、その用途は不明である。1954は最大長32.9cm、刃部10.5cmを測る大形の両刃ヘラである。1955は長さ12.3cm、残存幅12.9cm、厚み2.7cmを測る木製品で、中央に桔梗の花を象り彫ってある。また、隅にはホゾ溝が斜めに切られている。1956は不明木製品であるが、黒漆が塗られている。1961は桶の蓋板で、22.8×28.6cmの楕円形である。表面には目釘の痕跡が8ヶ所確認され、その並びに沿って変色している。1962は桶の底板で、直径約28.4cm、厚み1.7cmを測る。1963～1973はすべて桶の側板である。1963・1964は上部をL字状に丸く加工してある。
瓦	1957は棟込瓦で、長さ13.6cm、残存幅10.5cmを測り、コビキBである。1958・1959



第339図 SK50出土遺物 (2)



第340図 SK50出土遺物(3)



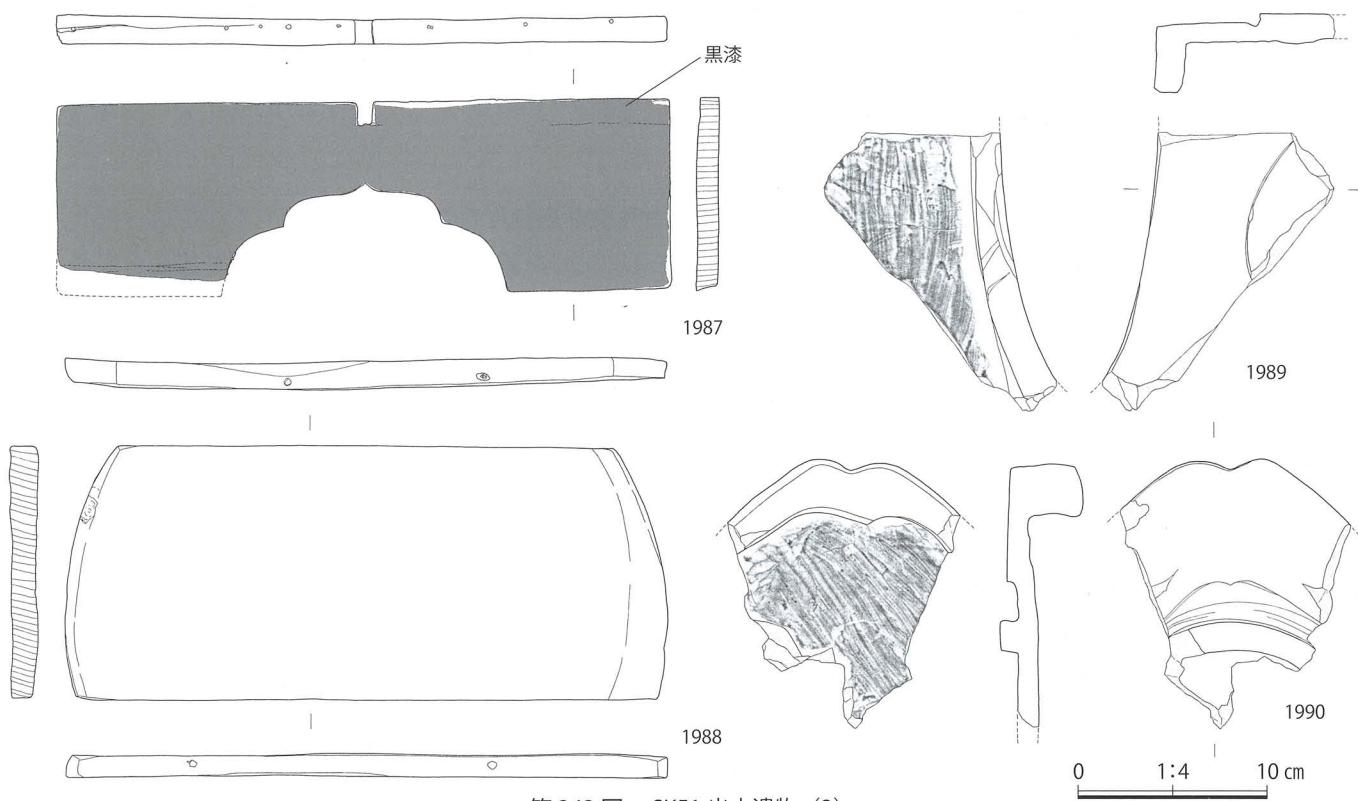
第341図 SK51出土遺物 (1)

は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲を珠文が廻る。いずれも巴文の周りに圈線が見られる。
1960は軒平瓦で、文様は三葉系の唐草文である。
SK51 出土遺物（第341・342図）
漆器 1974は漆椀で、器高が4.1cmと低く扁平な形状を呈する。外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られており、外面には赤色の丸の中に木瓜が描かれる。
墨書木製品 1975は長さ22.0cm、残存幅4.9cm、厚み0.4cmを測る長方形の板で、その片面に墨書文字が書かれている。上方に「□坂□□上町 山田元真様」とあり、下方に「歳□□町内 □□」とある。いずれも2列で書かれている。下方の文字は途中で途切れていることから、板は左側へ続くものと思われる。
木製品 1976・1977・1983・1984は下駄である。1976・1977・1983は丸型の差込下駄で、1984は角型の連歯下駄である。1978は灯明の台となる木製品の一部ではないかと思われる。1979は馬の置物の片脚部分である。脚の器高は11.0cmを測り、胴体部分との接合のための目釘が残っている。蹄の底部にも目釘穴があり、台座に接地させるためのものと思われる。脚の細部に渡るまで丁寧な面取りを施し、実物に近い造形が成されている。1980～1982は長さ24.8～28.4cmを測る白木の箸である。1985は曲物の底板か蓋板で、直径9.2cm、厚み0.7cmを測る。1986は櫛で、黒漆の皮膜が確認できた。1987は折敷か箱物の脚部、1988は桶か樽の底板と思われるもので、全面に柿渋が塗られている。
瓦 1989・1990は鬼瓦の一部であるが、詳細は判別できていない。

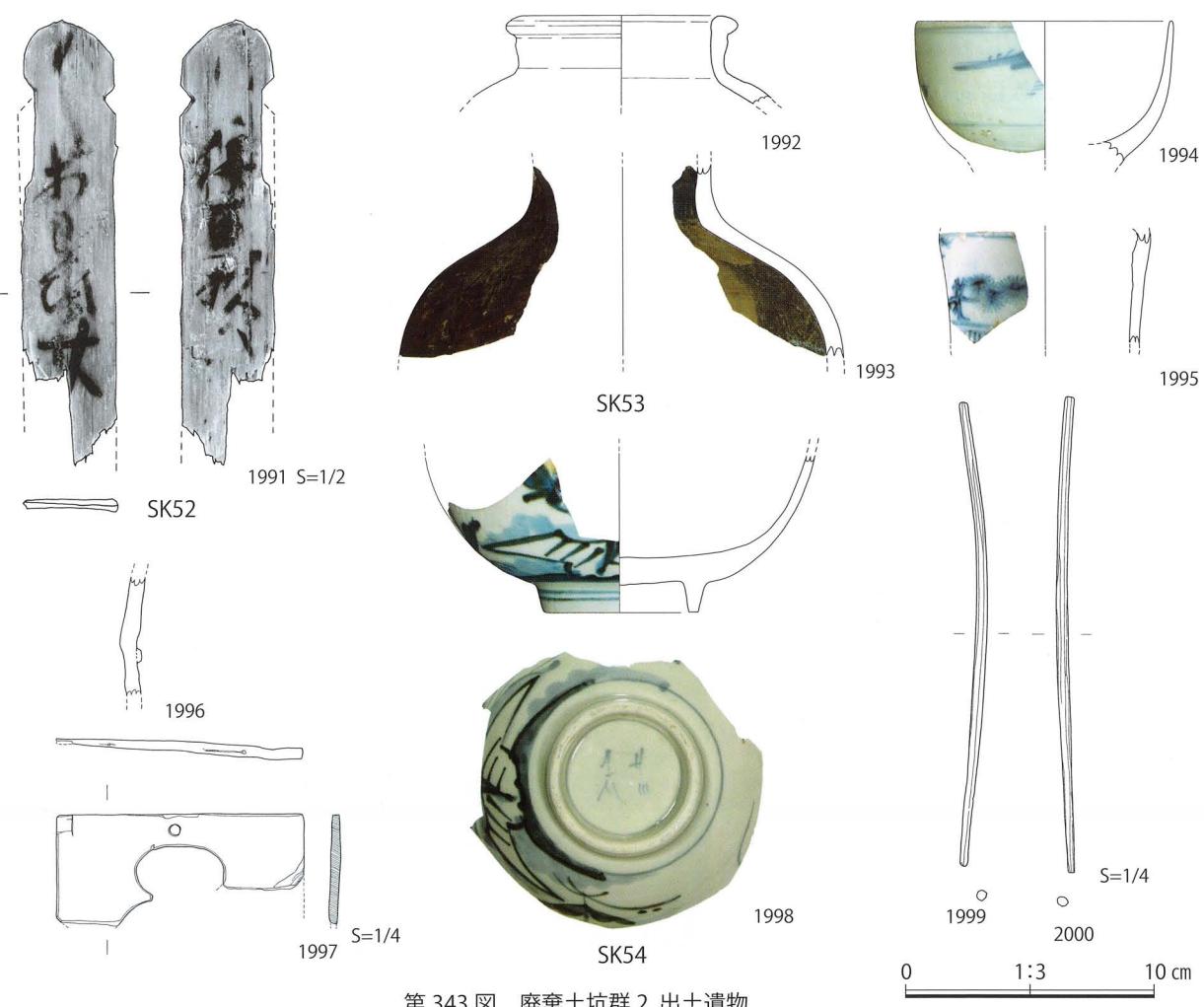
SK52 : 廃棄土坑（第320図）
SK52 は廃棄土坑群2内の中央部分に位置する楕円形土坑で、東西長1.5m、南北幅0.9m、深さ0.6mを測る。遺物は墨書文字が書かれた荷札木簡が出土している。
SK52 出土遺物（第343図）
荷札木簡 1991は残存長11.8cm、幅2.5cm、厚み0.3cmを測る荷札木簡である。上方部は丸く加工され、紐を付けるための抉りが入る。下方部は欠損しているため不明である。墨書文字は両面に見られ、解読できたのは左面のみであった。「おわひせ」もしくは「あわひ大」とも読み、後者ならば、大きな鮑を指すとも考えられる。

SK53 : 廃棄土坑（第320図）
SK53はSK51の西側に隣接し、南北長3.8m、東西幅2.2m、深さ1.0mを測るやや大型の楕円形土坑である。遺物は肥前陶磁器が出土しており、その時期はおよそⅢ期（1650～90年代）であろうと思われる。
SK53 出土遺物（第343図）
国産陶器 1992・1993は肥前陶器である。1992は垂直に立ち上がる壺の口頸部で、口縁端部は肥厚する。上野・高取系の可能性が考えられる。1993は頸部径7.1cm、胴部最大径18.2cmを測る瓶である。
国産磁器 1994・1995は肥前磁器で、1994は丸形中碗、1995は半筒形の中碗である。

SK54 : 廃棄土坑（第320図）
SK54はSK52の東側に隣接する楕円形土坑である。北東一南西を長軸とし、長辺3.0m、短辺2.1m、深さ0.9mを測る。土坑の南側はSE02（第249図）の掘り方によって壊され



第342図 SK51出土遺物(2)



第343図 廃棄土坑群2出土遺物

ている。遺物は志野、肥前磁器などが出土しており、時期は九陶IV期（1690～1780年代）を示している。

SK54 出土遺物（第343図）

国産陶器 1996は志野の碗で、胴部の破片である。

国産磁器 1998は肥前磁器の大碗で、見込みに五弁花文が崩れたものが描かれる。

木製品 1997は用途不明の木製品である。長さ13.2cmを測る中央には瓢箪形の削り抜きと直径0.7cmの穿孔が見られる。1999・2000は白木の箸で、いずれも25cm前後の長いものである。

SK56：土坑（第344図）

SK56 SK56はSE02（第249図）の東隣に位置し、南北方向を軸とした楕円形の土坑である。掘り方は南北長3.5m、東西幅2.24m、深さは0.2mを測る。

土坑内には大形板が4枚重ならないように敷いてあり、その上の中央部分には木片・土師器皿・古錢が散らばっていた。さらに、板の下部、南側の一部分には、部分的に小石が敷かれていた。

土坑内に敷かれて

いた4枚の板は、北

側と南側にある2枚

は幅0.5m、厚み

4cmを測るもので、

中に挟まれている2

枚は幅0.75～0.8m、

厚み2cmを測る。外

側と内側で幅が異な

っているが、長さはい

ずれも同一で、1.2m

を測る。また、4枚合

わせた状態の外側を

囲むように、ほぼ均一

の間隔で目釘の痕跡

が確認できた。目釘が

打ち込まれていた痕

跡はあるが、板の下に

目釘で固定するよう

な木製品は見られな

かったことから、4枚

並べて敷かれる以前、

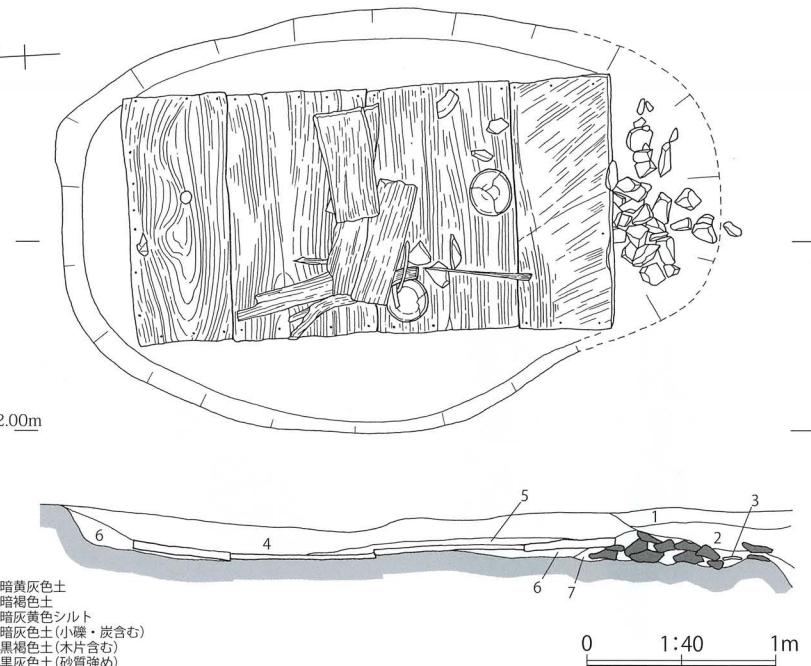
これらは別の用途の

ために組み合わされ

ていたのではないか

と推測する。その時

目釘の痕跡を残した



第344図 SK56 平面図・断面図



SK56（南西から）

まま転用されたものではないだろうか。

板の下、南側の一部分に小石が敷かれていたことに関しては理由は判然としないが、板を敷く前に石が置かれた状況と思われる。何らかの意図を持ったものだろう。

SK56の性格は現時点では不明な点が多く、また類例も乏しい。考えられるのは墓か地鎮関連の遺構ではないかと思われる。

SD08：石積溝

SD08

SD08は調査区西寄り、屋敷境石積溝SD01に直角にぶつかる場所に位置する石積溝である。石材は全て島石を使用しており、20～60cm大の石で構成されている。南北長5.05m、溝の幅0.3m、深さ約0.5mを測り、北側はSD01と直角にぶつかり、南側は廃棄土坑SK59の掘り込みによって消滅している。SD01付近の石積は乱れており、石が消失している部分が見られる。これはSD01をつくる際にSD08が破壊された痕跡と思われる。SD01が新しく、SD08が古い溝であることが分かる。

石積溝SD07（第321図）で前述したように、SD07とSD08は互いの延長線上でぶつかる可能性が考えられる。SD07はSD08と直角にぶつかった後、さらに西へ伸びていたことも考えられるが、推測の域を出ない。仮にSD07とSD08が合流する形でつくられていたとしたら、必然的にSD01とも繋がることとなり、南屋敷の排水施設として機能していたものと考えられる。SD08が暗渠であったか開渠であったかは判明していないが、排水施設であるとともに、区画を分ける意味合いを持つものであったことも考えられる。

遺物は瓦片が出土している。

SD08 出土遺物（第345図）

瓦

2001は軒平瓦で、文様は三葉系の唐草文である。

2002は右棧瓦の可能性が考えられるものである。

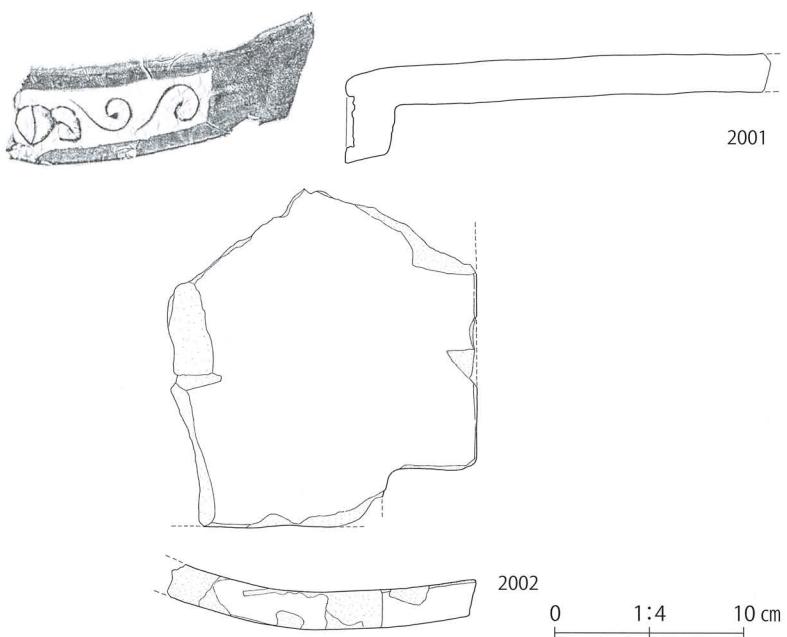
SK57：土坑

SK57

SK57は石積溝SD08の南東側に位置するいびつな楕円形土坑である。南北長2.6m、東西



SD08(南から)



第345図 SD08 出土遺物

残存幅 0.7 m、深さ 0.7 mを測り、土坑内には木製の厚い板が並んでいるのを確認した。板の下と横にはさらに板があることがわかり、横の板は縦に立てられている状況であった。下の板は上の板と同様な形態で敷かれていた。

SK57 の内部には板状木製品が煩雑に入っているのではなく、各パーツが組み合わさった浅い箱状の木製品が安置されていた。木製品は南北長 1.4 m、東西幅 0.3 m、深さは約 0.15 mを測る。

SK57 内にはこの木製品しか入っていなかった。木製品は土坑に投げ込まれ破壊を受けたような痕跡はなく、むしろ丁重に置かれ埋められたものだと判断した。他の廃棄土坑などから出土する木製品とは明らかに異なる様相であった。ただ、遺物の損傷が激しく、実測を行えなかったことを付記しておく。



SK57（北西から）

SK58：石積方形土坑（第 346 図）

SK58

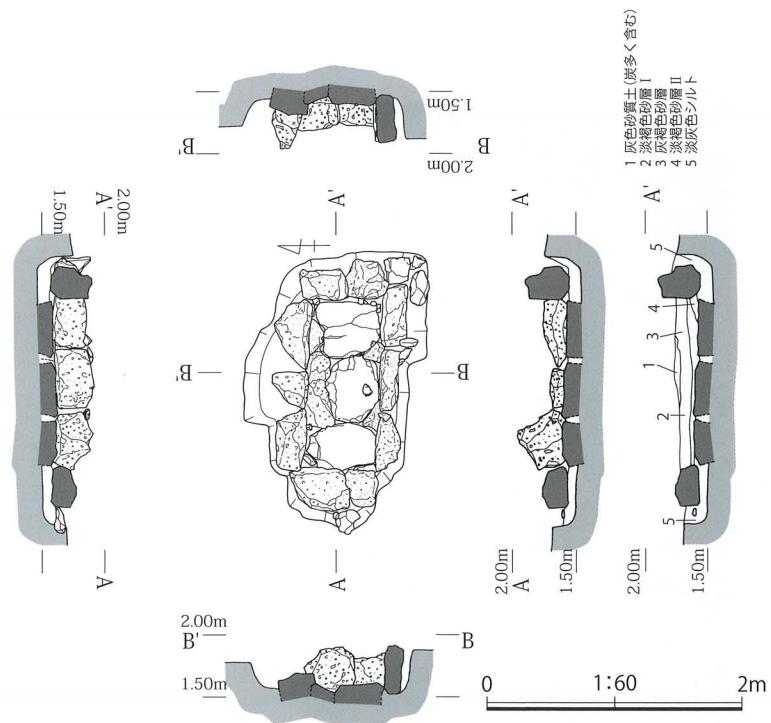
SK58 は調査区最西端に位置し、東西方向を長辺とした石積方形土坑である。使用されている石材は底面に敷かれている 50cm 以上の大形石 3 個が赤大海崎石、それ以外の石はすべて島石で構成されている。いずれの石も 30 ~ 50cm 大きなものを使用しており、現存で 1 段積みである。側面の石は内側で面を合わせて立ててあり、内法は東西長 1.32 m、南北幅 0.6 mを測る。北側長辺の石が不揃いであることから、後世に石が抜かれた可能性が考えられる。

石積方形土坑は多数検出しているが、その中で SK58 は他とは異なる様相を呈している。まず、石積施設を構成している石が全体的に大きい石を使用している。これに関しては石積が抜かれた可能性が考えられるので、現存するのは最下段の石で、本来はこれらの上に小さな石が数段積まれていたことも考えられる。

次に、石積内部の底面に 50cm 以上の大形石を設置しているのは他に類を見ない形態である。また、底



SK58（西から）



第 346 図 SK58 平面図・断面図

面には大海崎石、側面には島石を使用しており、意図的に石の種類を変えていると思われる。これらの要素は、SK58 が他の石積方形土坑とは異なる用途のためにつくられたことを示唆するを考えている。しかし、その用途の特定に至る決定的な確証は得られていない。

遺物は肥前陶磁器が出土しており、時期は 17 世紀代を示す。

SK58 出土遺物（第 347 図）

国産陶器

2003 は産地不明の陶器小壺で、茶入れの可能性が考えられる。口径 4.2cm、胴部最大径 7.8cm、器高 7.8cm を測り、全体的に肥厚し丸みを帯びる。

国産磁器

2004 は肥前磁器の端反形小壺で、高台に砂が付着している。

SU02：瓦敷

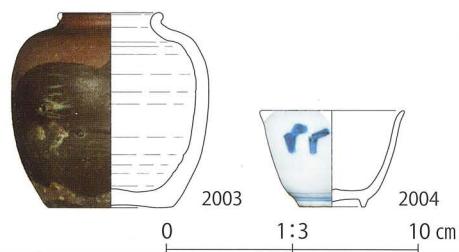
SU02

SU02 は石積溝 SD08 の東隣に位置する瓦片の集積遺構で、屋敷境石積溝 SD01 に近い北側に 1 ケ所と、そこから約 2 m 南に 1 ケ所見られる。

SU02 の形態は、細かく割れた 5 ~ 15cm 大の瓦片が、いびつな約 1 m 四方の範囲に密集して敷き詰めてられている。その検出状況から、瓦が自然に割れて留まつたものではなく、意図的に割れた瓦片を敷いたものと思われる。瓦片は平瓦が多いが、中には残存率の良い丸瓦 2005（第 348 図）なども含まれていた。

SU02 は検出した範囲が完存状態であると限らず、これらを含めた広範囲の瓦敷きの一部である、という可能性も十分考えられる。

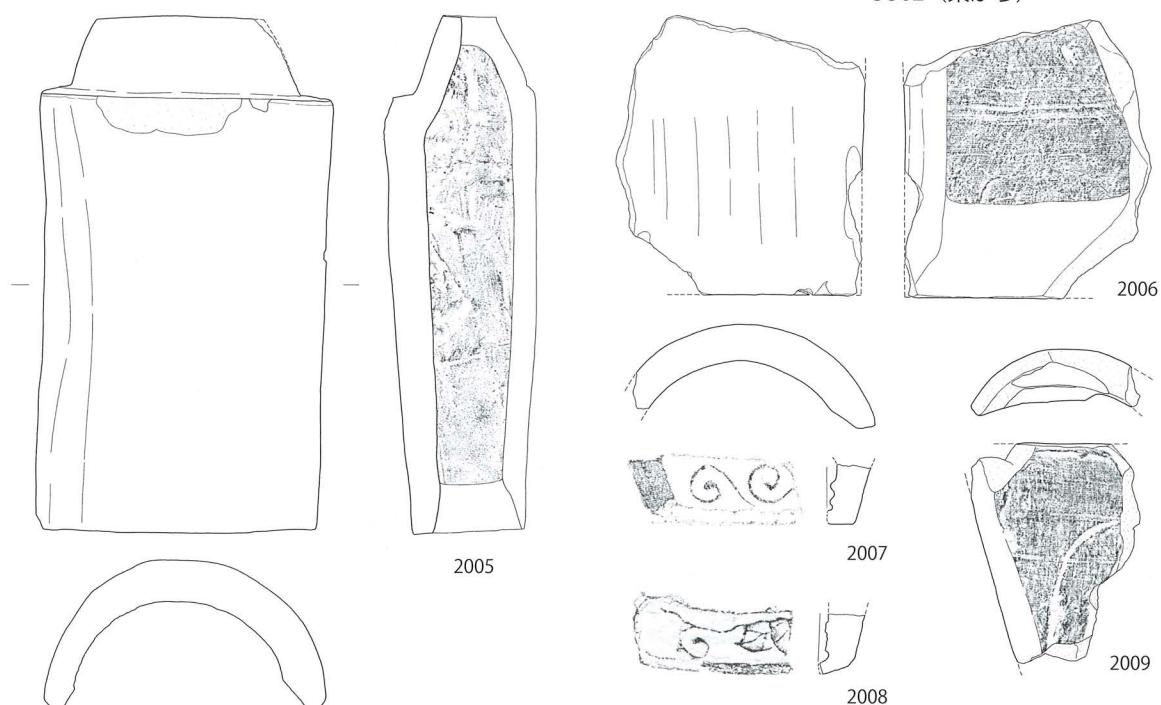
検出したのは瓦のみで、丸瓦、軒平瓦、棟込瓦



第 347 図 SK58 出土遺物



SU02 (東から)



第 348 図 SU02 出土遺物

など様々な種類が見られた。

SU02 出土遺物（第348図）

瓦

2005・2006は丸瓦で、2005は長さ27.2cm、幅14.8cm、厚み2.3cmを測る完形である。2006はコビキBである。2009は棟込瓦で、コビキBである。2007・2008は軒平瓦で、文様は三葉系の唐草文である。

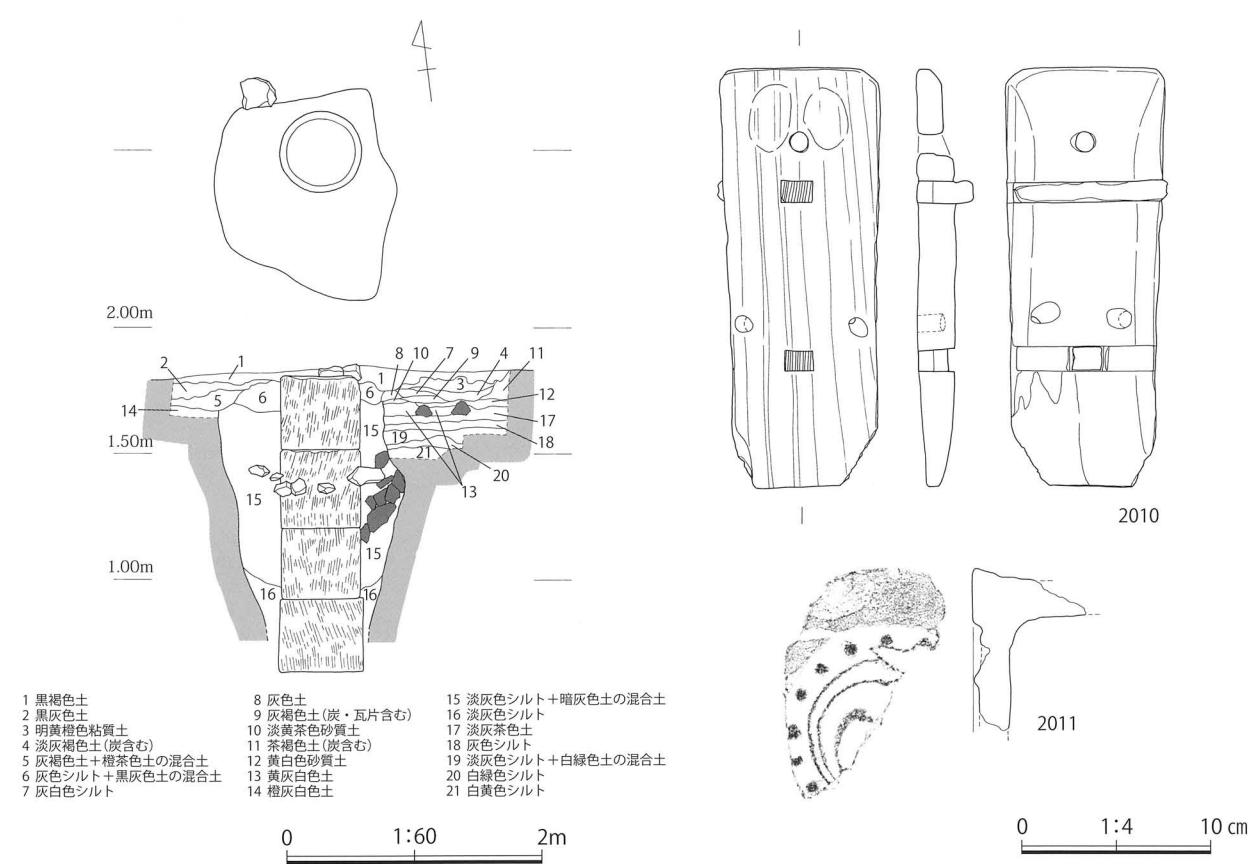
SE03：井戸（第349図）

SE03

SE03は廃棄土坑群1（第320・324図）一帯の西側に位置する井戸である。直径0.64m、深さ0.55mの来待石製井筒が4つ積み上げられており、最上部の井筒の標高は1.8m、4個目の最下部の標高は0.63mを測る。井筒2個目の途中に、10～30cmの大海底崎石が輪積みにされていたと思われる並びで見つかっていることから、元来は海底崎石の輪積み井戸であったと思われる。その後、おそらく改修するために来待石製の井筒を設置したと考えられる。掘り方は方形に近いびつなもので、南北長1.32m、東西幅1.45mを測る。

土層断面から、最深部の4個目まで掘り方が確認できている。また、井筒の埋土は黄色シルト1層が詰め込まれた状態であったことから、第3遺構面造成の際に廃絶されたと考えられる。

南屋敷地ではSE03を含めた3つの井戸を検出した。いずれも来待石製の井筒を利用し、SE01とSE03はその下に海底崎石による輪積みの井戸が存在した。井戸を廃絶する際には、「息抜き」のために細い竹を井戸の中心に差し込む儀式が行われることが多いが、南屋敷のSE01～03からはいずれもその痕跡が認められなかった。



第349図 SE03平面図・断面図

第350図 SE03出土遺物

SE03 出土遺物（第350図）

木製品 2010は最大長22.2cm、最大幅7.9cmを測る角型の差込下駄である。後方の角は斜めに落とされている形状である。前方鼻緒部分には指の痕跡が残る。

瓦 2011は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲を珠文が残存で8個廻る。巴文の周囲には圈線が見られる。

その他の遺構（第320図）

調査区最西端の一角では石積方形土坑SK58（第346図）の他に、素掘の土坑をいくつか検出した。そのうち、遺物が出土した土坑SK59・60について簡単に触れる。

SK59・60 SK59は屋敷境石積溝SD01から約2m南側に位置するいびつな楕円形土坑である。東西長2.6m、南北幅1.8m、深さ0.4mを測る。SK60はSK59から南西方向に約1.5m離れた位置にある土坑で、東西長1.6m、南北幅1.8m、深さ0.6mを測るいびつな土坑である。

SK59・60から出土した遺物はいずれも肥前磁器であり、年代は17世紀末～18世紀初頭にあたると思われる。

SK59 出土遺物（第351図）

国産磁器 2012は肥前磁器の猪口で、型紙白絵によって紅葉を表現したものである。

金属製品 2013は銅製の釘で、頭部に輪が付いている飾り釘である。最大長4.3cm、最大幅1.8cm、重量2.76gを測る。

SK60 出土遺物（第351図）

国産陶器 2014は瀬戸・美濃の腰張形中碗である。口径10.4cm、器高6.7cmを測る。

国産磁器 2015は肥前磁器の浅半球形中碗で、高台には砂が付着している。

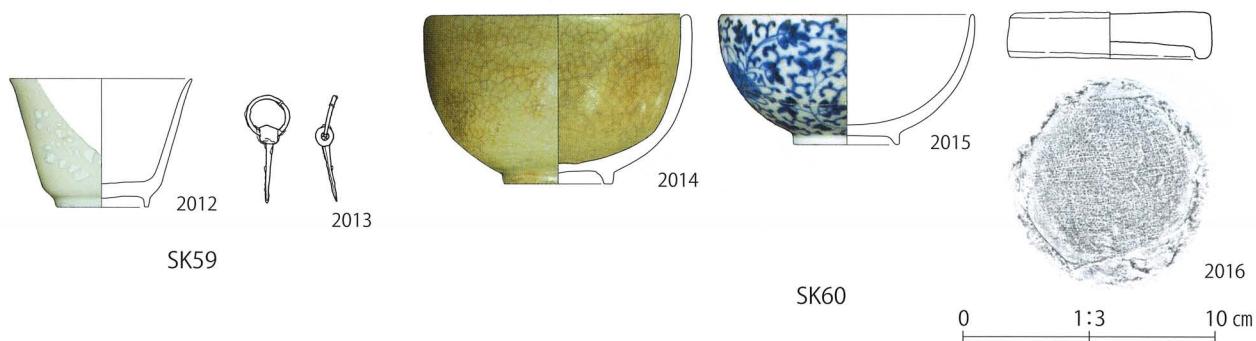
焼塩壺 2016は焼塩壺の蓋である。逆凹字形を呈し、内面には布目の痕跡が残る。

第3-1 遺構面 遺構外出土遺物（第352・353図）

国産陶器 2017～2019・2021・2022は肥前陶器である。2017は高台が内傾気味の中碗で、全体的に器壁が厚い。2018・2019は腰張形の中碗で、2018は内面に絵付けが見られる。2021は底径11.4cmを測る大皿で、内面に刷毛目文が描かれる。2022は胴部最大径34.5cmを測る大甕で、外面には縄状突帯を2条貼り付け、内面は格子目叩き痕が見られる。

2020は瀬戸・美濃・京焼系陶器の鳩笛で、最大長5.0cm、最大幅2.0cmの小形のものである。

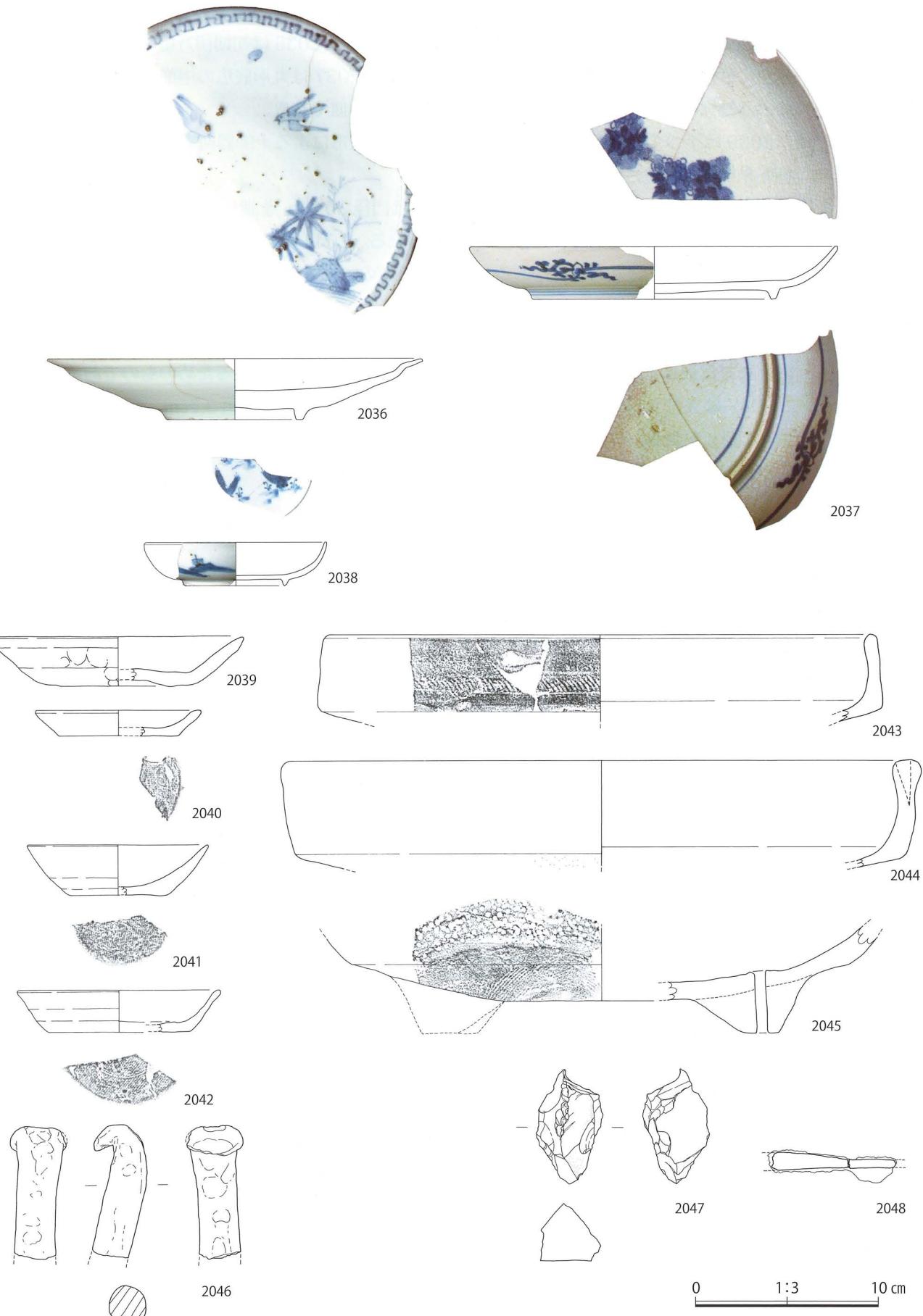
国産磁器 2023～2038は肥前磁器である。2023は端反形小杯で、器高が2.9cmと低く、扁平な形状を呈する。高台内が無釉であり、古い年代を示す。2024も端反形小杯で、直線的に開く形状を呈する。2025は浅半球形の小碗、2027は中碗で、外面にコンニャク印判が見られる。2029は丸形の中碗で、外面には菊花文と水裂文が描かれる。2031は陶胎染付の中碗で



第351図 SK59・60出土遺物



第352図 第3-1 遺構面 遺構外出土遺物 (1)



第353 図 第3-1遺構面 遺構外出土遺物(2)

ある。2028は口径13.0cmを測る大碗である。2033・2034は蓋物の蓋、2035は胴部最大径11.6cmを測る瓶か壺である。2036～2038は皿で、2036は初期伊万里・折縁形の中皿で、高台に砂付着、内面には灰降りの痕跡が見られる。2037は丸形底広の中皿で、断面に漆継ぎによる補修の痕跡が見られる。2038は丸形底広の小皿である。

土師器皿 2039は手づくね成形、2040～2042はロクロ成形による土師器皿である。後者の底部は回転糸切りで調整されている。

土器 2043・2044は土器で、焙烙である。2043は口径30.2cmを測り、内傾気味に立ち上がる。内面には煤が付着しており、使用の痕跡が見られる。2044の口縁端部は肥厚して立ち上がり、端部上面には逆円錐状の穿孔がある。2046は五徳の一部で、残存長7.2cm、直径2.0cmを測る。端部を折り曲げて成形している。

瓦質土器 2045は瓦質土器の土鍋か火鉢である。脚部に直径0.6cmの穿孔が開けられており、底部内面まで貫通している。この穴を通して外面から内面に空気が通じるためのものであろう。

石製品 2047は火打ち石で、材質は玉髓である。最大長6.3cm、最大幅3.7cm、厚み5.2cm、重量64.31gを測る。

金属製品 2048は銅製の煙管で、吸口部分である。

第6節 第3-2遺構面

第3-2遺構面 第3-2遺構面は第3-1遺構面の直下にあたる遺構面で、帯状の東西に細長い区画を呈する。この区画では以下の様々な種類の遺構を検出している。標高は1.56～1.75mの位置にある。

第3-2遺構面では屋敷境石積溝SD01（第354図）をほぼ完全な形で検出した。調査区中央ではSB08・09に伴う雨落ち溝SD10（第366図）、杭列SA05（第367図）、2つでセットと思われる石積方形土坑SK62・63（第359・360図）、トイレ遺構の可能性が高い土坑SK67（第369図）、円形礫敷遺構SX08（第354図）を検出した。調査区東端では土師器集積遺構SU03、素掘溝SD09（第354図）、石積方形土坑SK61（第358図）、廃棄土坑SK64～66（第354図）を検出した。

SD01に近接する東側では建物跡SB12（第354図）、その屋内に礫敷遺構SX07を検出した。

対する西側では礎石の並びが明らかな建物跡SB11（第373図）を検出し、SB11の屋内と思われる位置から礫敷遺構SX02、石積溝SD12、長楕円形の土坑SK70、地面に細竹を方形状に差し込んだ木舞状遺構SX03～06を検出した。

SB12とSB11の間からは木枠施設SK68（第371図）を、雨落ち溝SD10の延長線上西側からは大形廃棄土坑SK71・72（第378図）を検出した。

第3-2遺構面の年代は遺構出土遺物、遺構外出土遺物の年代観から、17世紀前半～中頃と想定している。



第354図 第3-2遺構面全体図

SD01：屋敷境石積溝（第354図）

SD01 第3-2遺構面のSD01は石が抜けることなくほぼすべて埋まる状態であり、完存に近い形で検出することが可能であった。

SD01は調査区西端から東端まで検出している。石材は主に10～50cmの大海底石を使用しており、2段で隙間なく積まれている。溝の幅は西側では0.4m、中央部分はやや広く

なって0.6m、東側では再び細くなり約0.4mを測る。溝の底面レベルは西側が高く、東側が低いことから、水は西から東へ流れていると思われる。

第3-1遺構面のSD01は西側から約18m地点で石積が屈折していた。第3-2遺構面ではこの屈折点が西側から約14m地点に移動する。石積の屈折点の移動は、南側に建つ建物に伴って改変されたものと考えている。屈折する地点の南側延長線上には、約半間（1.0m）間隔の礎石が5個並んでいる（第373図）。この礎石列を南北軸として建物跡を復元すると、西側に礎石が東西・南北軸に添って並ぶ。加えて建物跡の北端ラインは、SD01内の石を礎石として使用していることが判明した。これらは東西6間×南北2間半の建物跡SB11を構成する要素である。また、SB11の真向かいに当たる東側でも建物跡SB12が存在すると考えられる。

SD01の石積は建物跡と一体化しており、建物の様相が変わることによってSD01もつくり変えられていくものと思われる。

SD01の南側石積の裏込土中からは、陶磁器類、下駄などの遺物が出土しており、時期はおよそ17世紀前半～中頃と想定している。

SD01南側裏込 出土遺物（第355図）

国産陶器

2049は上野・高取系陶器の大皿である。底径は9.7cmとやや小さく、皿部分にかけて大きく広がる。外面に細かい稜線が均等に入る。

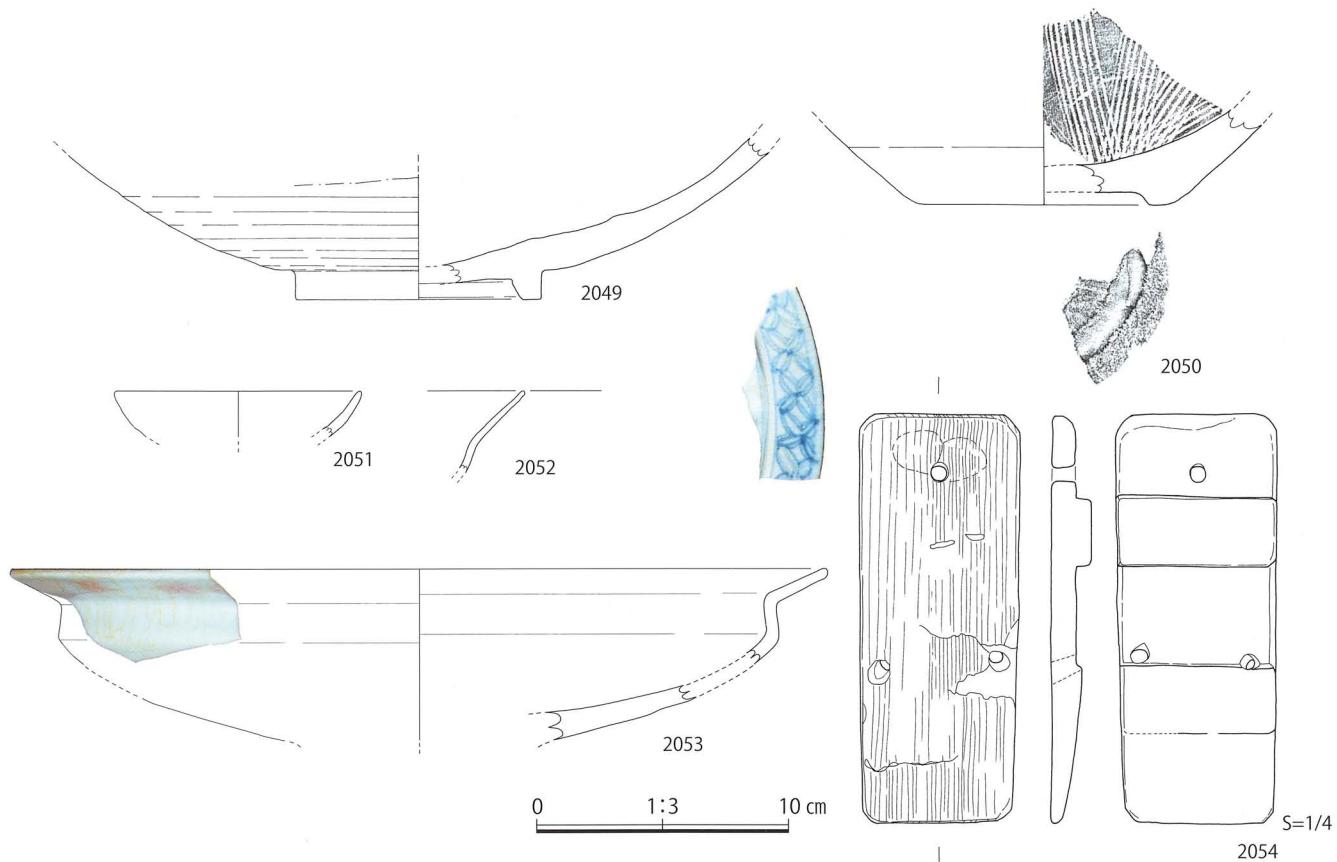
2050は産地不明の陶器で、擂鉢の底部である。

貿易磁器

2051・2052は中国磁器である。2051は精製で、漳州窯系の丸形小皿である。2052はおそらく景德鎮窯系の皿か鉢である。

国産磁器

2053は肥前磁器・初期伊万里の大皿で、口径32.4cmを測る。これは礫敷遺構SX08から出土した2139と接合が可能な同一個体である。



第355図 SD01南側裏込出土遺物

木製品 2054は角型の連歯下駄で、長さ21.5cm、幅8.5cmを測る。前方鼻緒部分に指の痕跡が見られる。

SU03：土師器溜まり

SU03 SU03は調査区最東端に位置し、直径約2mの範囲で土師器皿の破片がばら撒かれている状態で検出した。土師器皿はいずれも破片であり、密集度はそこまで高くない。また、すべてが手づくね成形によるものであった。

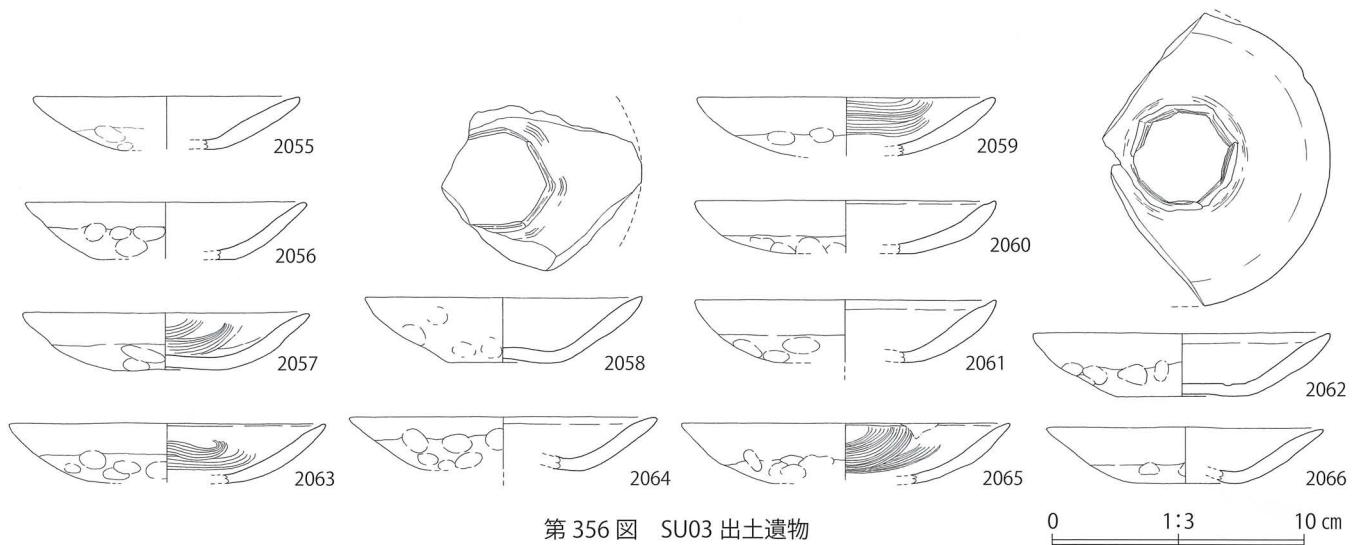
土師器皿のみの破片（故意に割った可能性も考えられる）を一定範囲に散在させるのは、偶然に起こったことではなく、意図的にこの場所に集中させたことがうかがえ、祭祀的な意味合いを持つ遺構であると考えられる。

SU03 出土遺物（第356図）

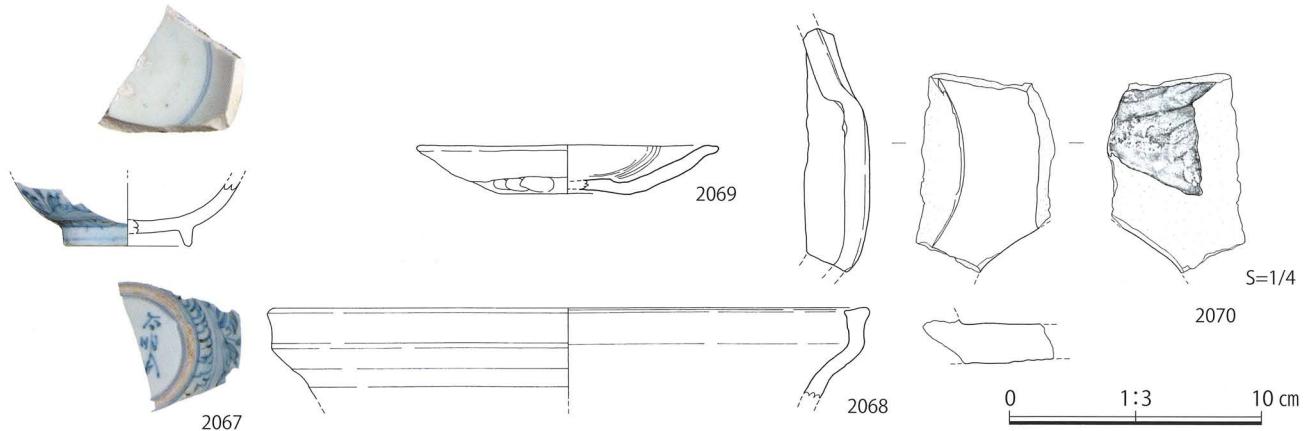
土師器皿 2055～2066は手づくね成形による土師器皿である。口径は10.6～13.0cmの間に集約され、ほぼ同形態を呈する。このうち2058・2062は、内面のナデ上げが円弧状ではなく角張っており、2058は八角形、2062は九角形状に施されている。

SD09：素掘り溝（第354図）

SD09 SD09は調査区東端に位置する素掘り溝で、北西—南東を軸にして掘られている。溝の形状は直線的であり、長さ残存10.5m、幅0.4～0.8m、深さ0.15mを測る。溝の底面には石



第356図 SU03出土遺物



第357図 SD09出土遺物

が約1.0m間隔（半間か）で置かれており、ばらつきはあるが並んでいる。

SD09の周囲には礎石と思われる石は見られないことから、SD09は建物跡ではなく、単独の塀のようなものではないかと推測する。屋敷境石積溝SD01・建物跡SB08～10らとは軸が全く異なっており、空間配置をどのように扱ってきたかを探る要素になり得ると考えている。ただ、周囲の他の遺構との関連性は不透明であり、異種的な遺構である。

SD09からは肥前陶磁器・土師器皿・瓦片などが出土している。

SD09 出土遺物（第357図）

国産陶器

2068は肥前陶器の擂鉢で、片口が付属する珍しいものである。

国産磁器

2067は肥前磁器の丸形中碗で、高台内に「太明成化年製」の銘が入る。

土師器皿

2069は手づくね成形による土師器皿の中皿である。

瓦

2070は鬼瓦の一部分であるが、どのような形態であったかは判別できていない。

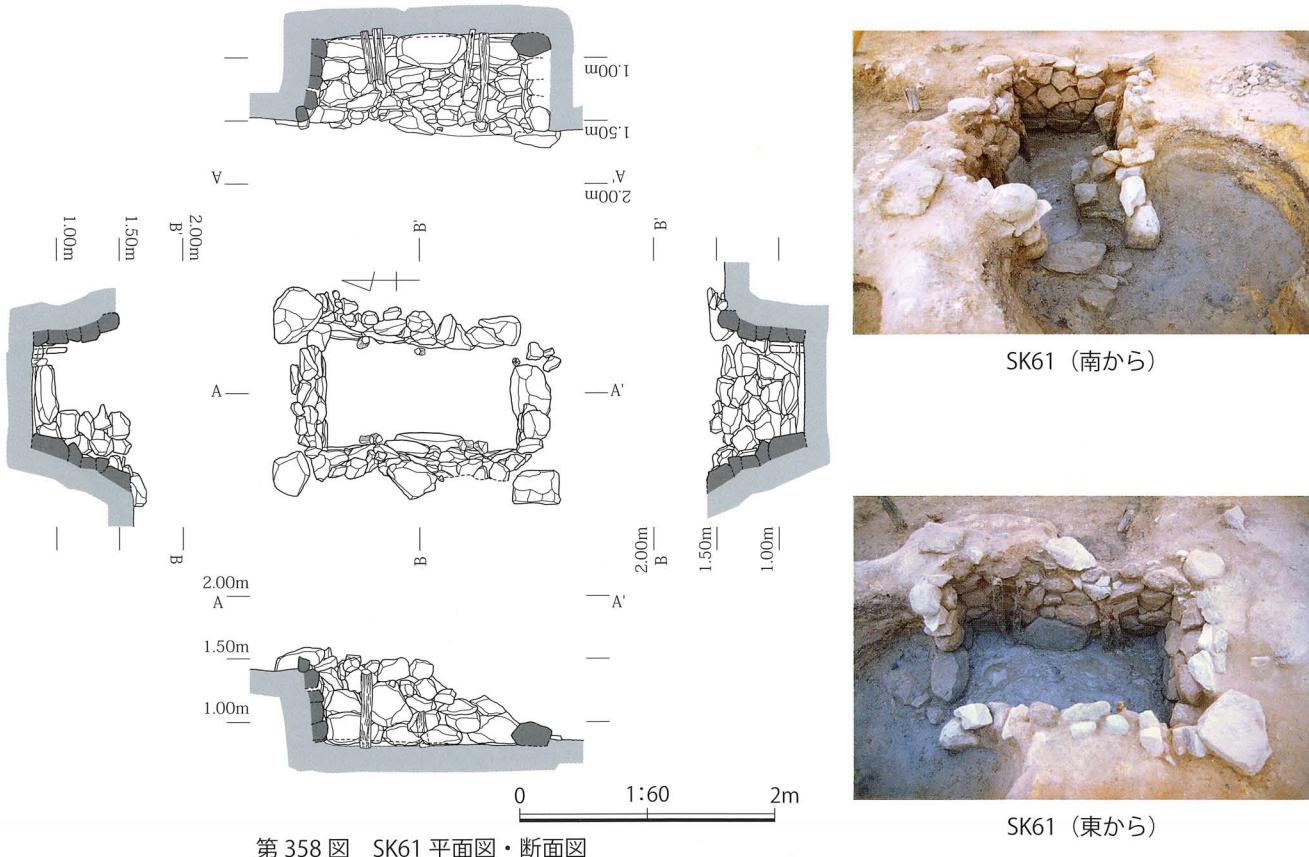
SK61：石積方形土坑（第358図）

SK61

SK61は屋敷境石積溝SD01の南側に位置する石積方形土坑である。内法は南北長1.5m、東西幅0.8mを測り、5段の石積みによる深さは0.75mである。5段積みが残存するのは北側短辺と西側長辺で、南側と東側は南東方向の隅にかけて崩れていた。石材はすべて大海崎石を利用しておおり、最下段には45～55cm大の大きな石を使っている。それより上段は10～30cm大の比較的小さな石を使い積み上げている。

SK61の長辺内側には長さ0.2～0.7m、直径7～10cmの木杭が打ち込まれており、西側に4本、東側に3本が確認できた。これは石積みが内側に崩れないようにするための処置であると思われる。

石積みの四隅には礎石のような石が配置されている。この石は北東隅に1個、北西隅に1個、



第358図 SK61 平面図・断面図

真西に1個、北西隅に1個、計4個がSK61の角・法量に合わせて置かれている。この礎石の並びから、SK61には同サイズの屋根があり、屋内施設であった可能性が推察される。

SK62：石積方形土坑（第359図）

SK62

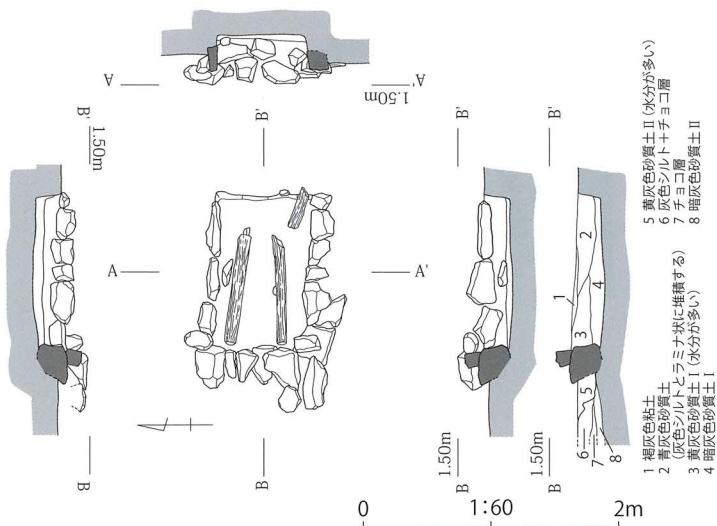
SK62とSK63は0.3mの間隔を取って、隣接した位置につくられた石積方形土坑である。このうち、北側に位置するのがSK62である。SK62は東西方向を長辺とし、東側を除く3辺に「コ」字状に石が積まれている。使われている石材はすべて20～40cmの大赤大海崎石であり、内法は南北0.65m、東西1.25m、深さ0.29mを測る。

石積は西側短边はやや雑な2段、北・南側は1段で積まれていた。本来は2段、もしくはそれ以上積まれていたと思われるが、北側と南側の石は取り外されたものと推測する。東側からは石が積まれた痕跡は検出しなかったが、細竹を突き刺したわずかな跡を確認した。

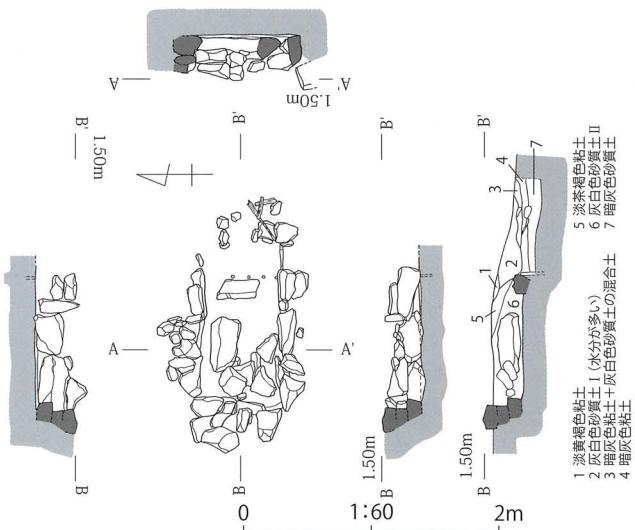
SK62検出時、内部に丸太材が2本、長辺に合わせて横たわっていた。北側の丸太材は最大長0.95m、直径0.10mで、片方の端部にホゾが見られた。南側の丸太材は最大長0.96m、直径0.09mを測る。これらは廃棄された状態なのか、もしくは意図的に設置されたものかは判別しかねるが、SK62に関連する構造体の一部であった可能性が考えられる。

SK62内からは肥前磁器が1点出土しており、時期は九陶Ⅲ期を示す。

SK62 出土遺物（第361図）



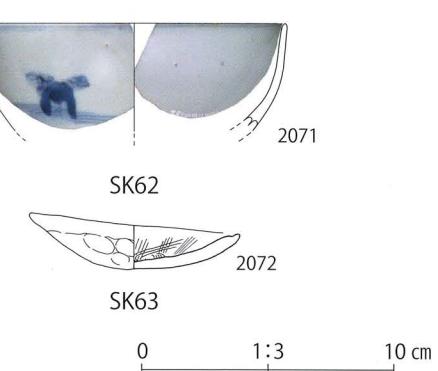
第359図 SK62 平面図・断面図



第360図 SK63 平面図・断面図



SK62・63（西から）



第361図 SK62・63 出土遺物

国産磁器 2071は肥前磁器の丸形か浅半球形の中碗で、口径 12.2cm を測る。

SK63：石積方形土坑（第 360 図）

SK63 SK63 は SK62 の南側に位置し、SK62 と同形態の石積方形土坑である。SK62 同様に東西方向を長辺として、東側以外の 3 辺に石が積まれている。使用石材はすべて赤大海崎石で、7 ~ 45cm 大の大きさである。内法は南北 0.60 m、東西 1.00 m、深さ 0.25 m を測り、SK62 よりも若干小さいつくりになっている。

3 辺はいずれも 2 段目の石が部分的に残存する状態であったが、全体的には SK62 よりも不揃いで、石が抜かれた痕跡が目立つ。外された石は SK63 の内部に乱雑に落ちたような格好で検出した。東側に石積みは見られなかったが、細い竹を編んで、そこに粘土を貼り付けた木舞状の遺構を検出した。これは SK62 でもわずかに検出しており、同様の施設があったと思われる。

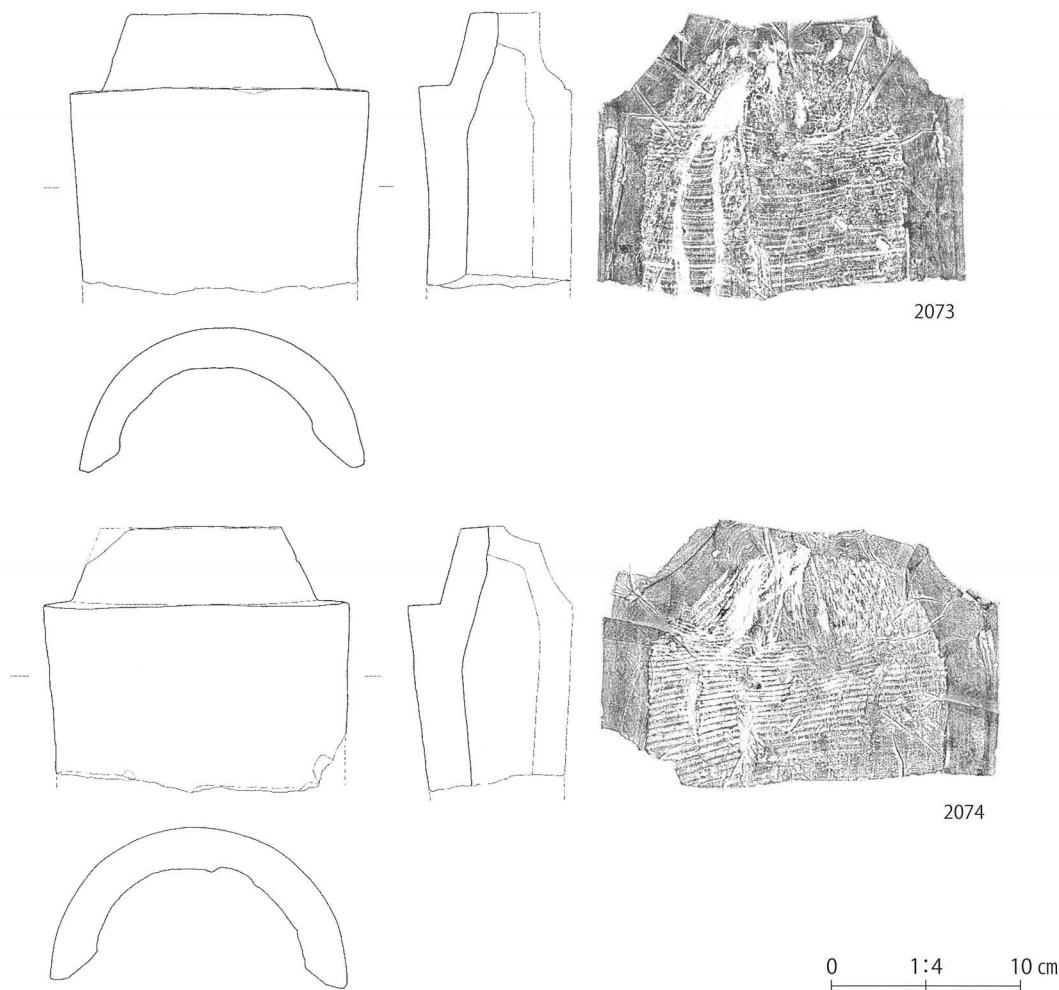
SK62・63 は近接する場所に位置しているが、切り合い関係はなく 2 つを 1 セットとして利用する施設だった可能性が考えられる。

遺物は内部に落ちた石材に混じって土師器皿や瓦などが出土している。

SK63 出土遺物（第 361・362 図）

土師器皿 2072 は手づくね成形による土師器皿で、口径 6.4cm、器高 1.4 ~ 2.3cm を測る小皿である。

瓦 2073・2074 は丸瓦で、どちらもコビキ B である。



第 362 図 SK63 出土遺物

SK64～66：廃棄土坑群3（第354図）

廃棄土坑群3 SK64～66は調査区東端、第3-1遺構面で多数の廃棄土坑を検出した一角（SK43～49：廃棄土坑群1・第307図）で、第3-2遺構面においても検出した廃棄土坑群である。なお、土坑の詳細は後述する。

廃棄土坑群3の土坑は廃棄土坑群1のものとは積極的に重ならない。SK65・66は上面の土坑に切られる部分があるが、土坑自体は敢えて重ならないように掘られていると考えられる。第3-2遺構面を整地する時に、廃棄土坑群1の各土坑の範囲を何らかの方法で示しておいて、整地後でもどこに土坑があったかを判断し重ならないように新たな土坑を掘り込んだのではないかと推測する。

SK64：廃棄土坑（第354図）

SK64 SK64は調査区東端、素掘溝SD09の南側に位置する土坑である。調査区域の端であったため土坑すべてを掘り切るには至っていない。SK64はいびつな円形を呈し、直径約1.5m、深さ0.8mを測る。

遺物は陶器・木製品の他に荷札木簡が多数出土しており、以下で4点詳細を述べる。

SK64 出土遺物（第363図）

国産陶器 2075は須佐唐津の擂鉢で、口径21.9cm、器高10.4cmを測る。内外面にそれぞれ胎土目痕が見られる。

木製品 2076・2077は下駄で、2076は角型の差込下駄である。2077は角型の連歯下駄である。いずれも前方鼻緒部分に指の痕跡が見られる。2078は曲物の底板か蓋板で、綴り皮が1枚残存していた。2079は最大長4.0cm、最大径1.3cm、最小径0.8cmを測る小形の糸巻き状製品である。全面に柿渋が塗られている。2080は櫛で、柿渋が塗られている。

荷札木簡 2081～2085は墨書文字が見られる荷札木簡である。2081は長さ32.4cm、最大幅3.4cm、厚み0.5cmを測る。上方部に抉りは見られず、下方部は先端を尖らせる。墨書文字は片面にあり、「阿之助」と書かれている。男性の名であると思われるが、それ以外の情報は得られなかった。

2082は長さ33.4cm、最大幅3.6cm、厚み0.6cmを測る。これも2081と同様で上方部に抉りは見られず、下方部は先端を尖らせる。墨書文字は片面にあり、「のりつね」と平仮名で書かれている。これも男性の名であると思われる。

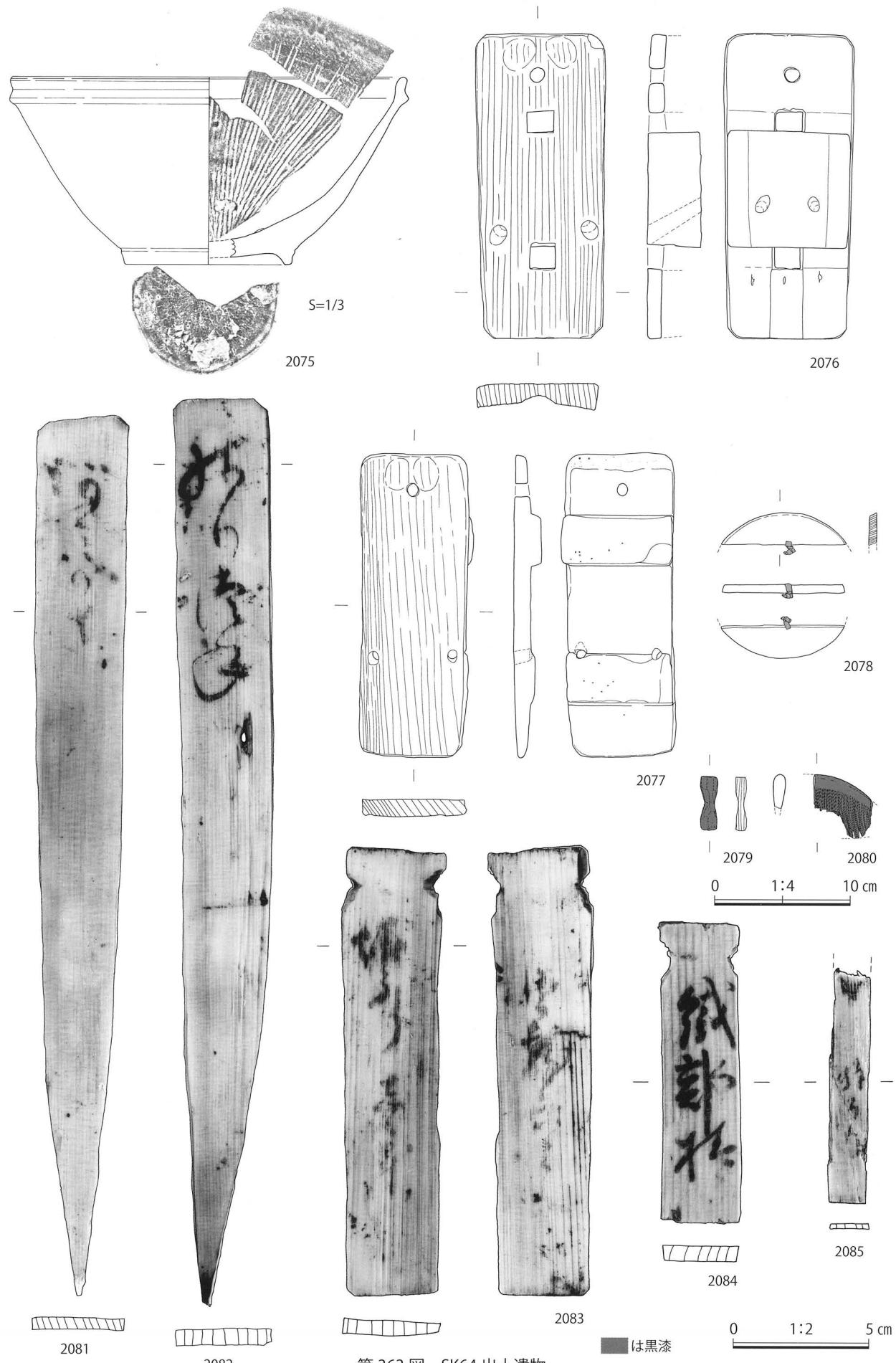
2083は長さ16.6cm、幅3.8cm、厚み0.6cmを測る。上方には抉りが入り、下方は削らずに長方形を呈する。墨書文字は両面に書かれていたが解読できたのは片面だけで、「掘水 壱本」と読むことができた。

2084は長さ11.1cm、幅3.0cm、厚み0.6cmを測る。上方には抉りが入り、下方は削らずに長方形を呈する。墨書文字は片面のみに見られ、「織部様」と書かれていた。

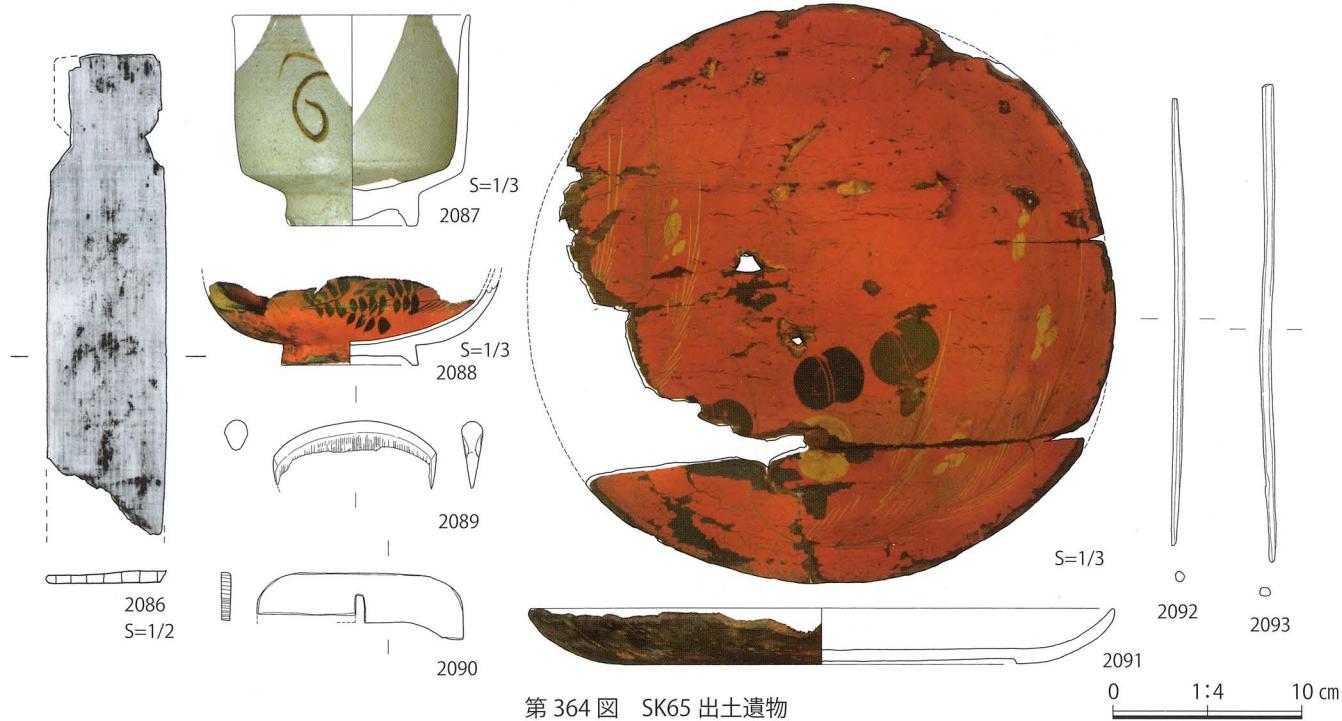
2085は、残存長8.7cm、幅1.5cm、厚み0.2cmを測る。抉りらしき痕跡はわずかに見られ、下方は欠損している。墨書文字は片面のみ確認でき、「特□□」と書かれていた。

SK65：廃棄土坑（第354図）

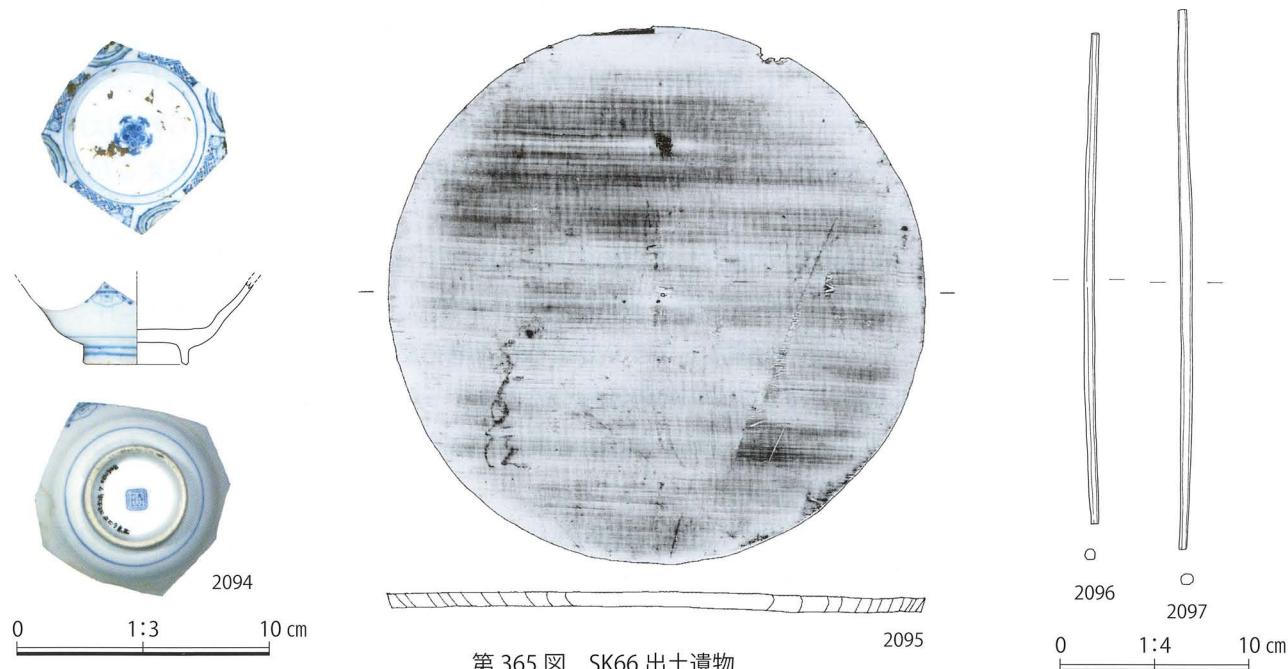
SK65 SK65は廃棄土坑群2の中央部分に位置する土坑である。東西に長い楕円形を呈し、東西3.4m、南北1.5m、深さ0.3mを測る。東側は第3-1遺構面のSK44によって切られているため、本来の範囲は定かではない。



第363図 SK64出土遺物



第364図 SK65出土遺物



第365図 SK66出土遺物

SK65からは陶器・漆器・木製品・荷札木簡が出土している。

SK65 出土遺物（第364図）

荷札木簡 2086は残存長12.7cm、幅3.2cm、厚み0.3cmを測る荷札木簡である。上方部は紐を付けるための抉りがやや大きく入り、下方部は欠損している。墨書文字は片面に見られるが、解読は不可能であった。

国産陶器 2087は肥前陶器の半筒形中碗である。高台には砂が付着している。

漆器 2088は漆椀で、全面を赤色の漆で塗っている。外面には黒色で草文を描いている。2091は直径23.2cm、底径15.0cm、器高2.2cmを測る漆器皿で、外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られている。内面には黄色でススキを描き、黒色でも何かを描いているが判別できていない。

木製品 2089は櫛で、刃の部分を欠損している。2090は不明品、2092・2093は白木の箸で、長

さは23.6～25.2cm、直径0.5cmを測る。

SK66：廃棄土坑（第354図）

SK66 SK66は雨落ち溝SD10（第366図）の西側延長線上に位置する土坑である。SK66の上層にSD10がつくられているため、土坑の範囲を明確にすることはできなかった。東側をSK43によって切られており、全貌は不明である。

遺物は肥前磁器・木製品が出土地している。

SK66 出土遺物（第365図）

国産磁器 2094は肥前磁器の色絵中碗で、見込みには五弁花文、高台内には「時」の銘が入る。

墨書木製品 2095は直径14.2cm、厚み0.5cmを測る桶か樽の底板で、片面に墨書文字が書かれている。文字は左下に「千手院」と書かれている。千手院とは松江城から北東方向の位置に鎮座する「高野山真言宗 尊照山 千手院」⁽¹³⁾のことを示すと思われ、本遺跡とも比較的近い位置にある寺である。千手院からの届け物を入れるために使われた桶であった可能性が考えられる。

木製品 2096・2097は白木の箸で、2096は25.7cm、2097は28.5cmを測る長いものである。

SD10：雨落ち溝（第366図）

SD10 SD10は第3遺構面の建物跡SB08～10（第301図）に伴う雨落ち溝であると考えている。溝の長さは東西長15.7m、南北幅1.5～2.5m、深さ約0.10mを測る。溝の内部には10～30cm大の石と、5～10cm大の小礫が煩雜に入り込む状況であった。これらの石は比較的溝の北側に集中しているようにも見える。また、単に石が入っているように見えるが、規則性があるとも考えられる。

SD10は第3-1遺構面で検出したSD07（第321図）がつくられていた位置から約2m北側にずれた位置につくられており、東西軸は変わらない。この軸はSB08・09に伴うものであり、SD07・10が時期を違えてつくり変えられた溝であると言えよう。SD10がつくられた時期に相当する建物の建て替えの痕跡は検出できなかった。しかし建て替えの際、建物の基礎から再度つくり直すことはかなりの労力と必要性がなければ行わないとも考えられる。

SD10 出土遺物（第368図）

国産陶器 2098～2103は肥前陶器である。2098は丸形小壺で、底部は回転糸切りで調整されている。外面に胎土目痕が見られる。2099は呉器形の中碗、2100は京焼系の中碗で呉須絵が描かれる。2101は小皿で、内面には胎土目痕、高台には砂目痕が見られる。李朝を真似てやや軟質に作られている。2102は壺か甕の胴部片で、内面に同心円叩き痕が見られる。2103は口径30.0cmを測る水甕で、口縁端部は2.7cmの平坦面を持つ。

貿易磁器 2104は中国磁器・精製の中碗である。口径は12.0cmを測るものである。

国産磁器 2105・2106は肥前磁器の中碗である。いずれも丸形か浅半球形と思われる。

土師器皿 2107～2112は土師器皿である。2107は手づくね成形、2110～2112は口径18.0～18.2cmを測る大皿である。2108・2109はロクロ成形によるもので、底部は回転糸切りで調整されている。2107の口縁部には油煙痕が見られることから、灯明皿として使用されていたと考える。

土器 2113は土器で、口径20.2cm、底径16.0cm、器高2.5cmを測るやや小形の焙烙である。

瓦 2114・2119・2120は丸瓦で、2119はコビキA、2114・2120はコビキBである。

2115・2116は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲に珠文が廻る。2115は珠文16個、

2116は巴文の周りに圈線が廻るものである。

2117・2118は軒平瓦で、文様は三葉系の唐草文である。

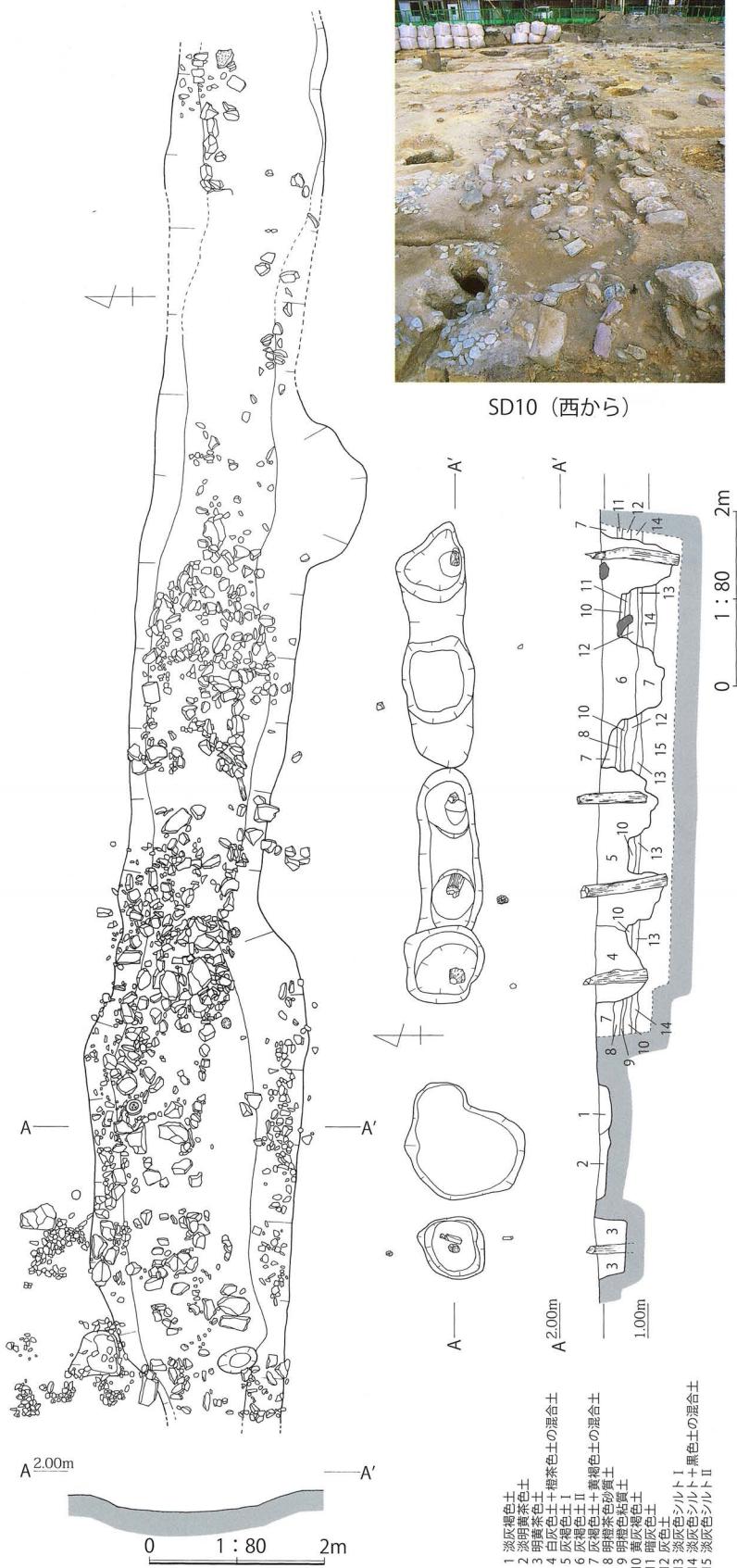
SA05:杭列（第367図）

SA05

SA05はSD10直下から検出した杭列である。SD10検出時、小石に紛れて杭の頭が何本か見えており、それらは等間隔で約1.0mおき（半間隔）に並んでいた。SD10と軸を変えずに東西方向に直線的に並び、最終的には西側に1本、中央に3本、東側に1本の計5本を検出した。

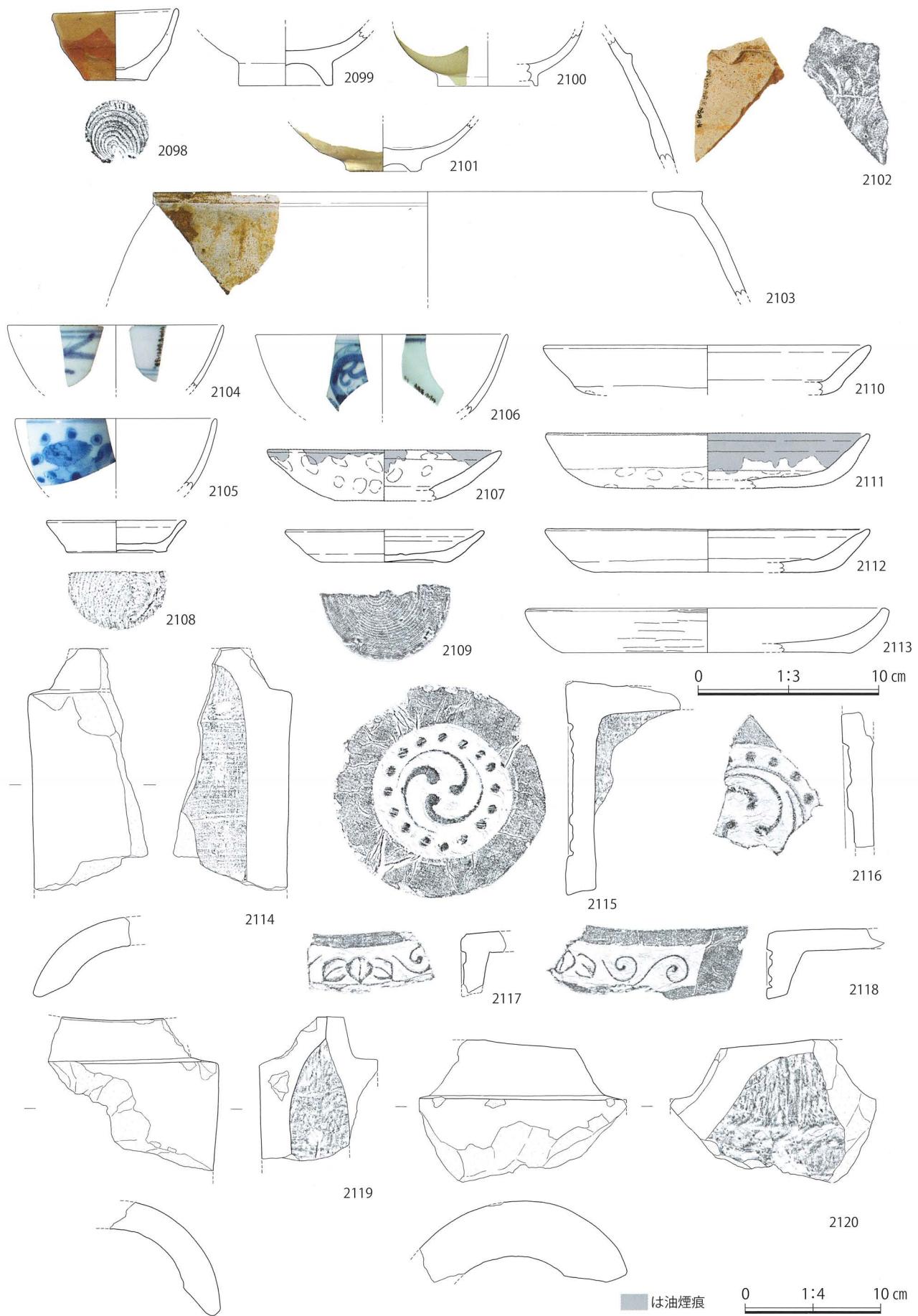
杭は長さ0.7～1.1m、直径0.17～0.19mを測り、先端の加工は尖るもの、平らなものなど様々である。いずれも直径0.7～1.0mの掘り方内の中心に埋められており、ほぼ垂直に立っている状態で検出した。杭が倒れないようにしつかり掘り固めた様子がうかがえ、この土地の脆弱な地盤の影響下にあったとも思われる。

SD07(第3-1遺構面)、SD10(第3-2遺構面)と、ほぼ同じ位置につくられた溝の直下での検出という位置関係から、SA05も建物跡に伴う柵か堀のような遮蔽物の一部ではないかと推測



第366図 SD10平面図・断面図

第367図 SA05平面図・断面図



第368図 SD10出土遺物

する。SA05はSD10よりも古いものであると言えるが、明確な時期差はわからない。

SK67：トイレ（第369図）

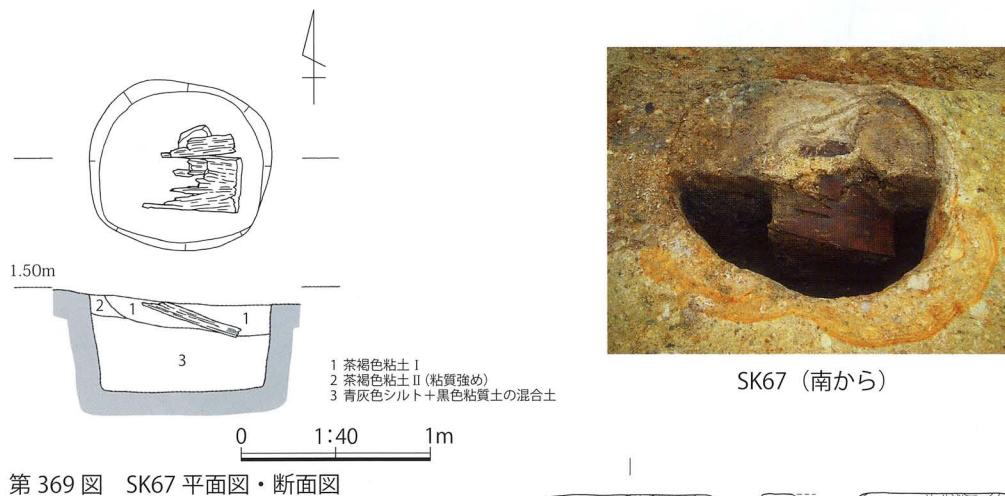
SK67 SK67は雨落ち溝SD10の南側に隣接しており、西寄りの位置にある円形土坑である。形状は正円形に近く、底面は水平を保っている。上端径0.92～1.00m、下端径0.81～0.88m、深さ0.50mを測る。埋土は3層に分層でき、第1層には40cm大の木の板が3枚入っていた。第1・2層はいずれも粘性の強い土質を示し、第3層は黄色シルト層と黒色粘質土が混じる土層が入り込んでいた。SK67は廁（トイレ）の可能性が高い遺構と考えているが、埋土の土壤分析による確認は行えていない。

遺物は第3層から中国磁器・木製品が出土している。

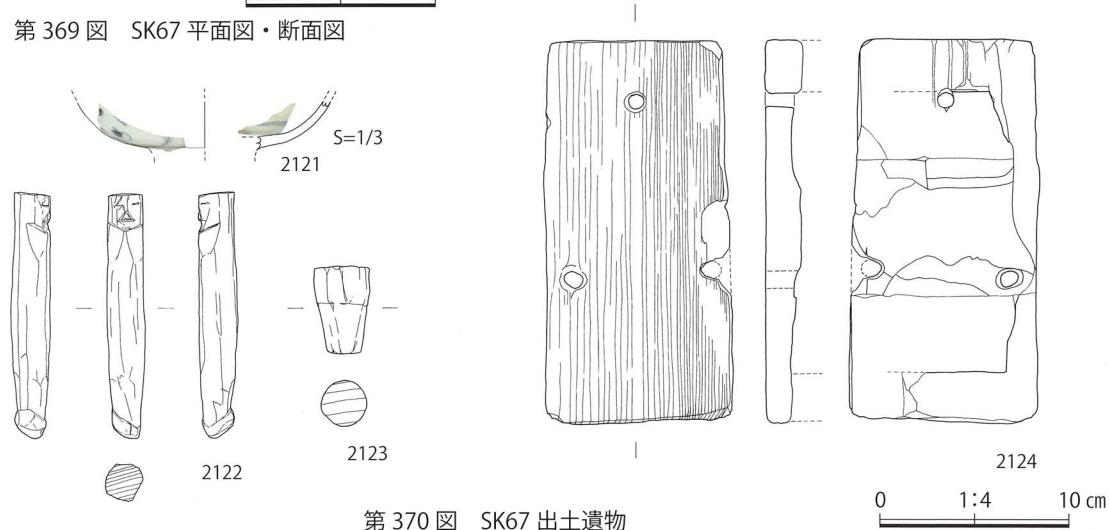
SK67 出土遺物（第370図）

貿易磁器 2121は中国磁器・精製の皿と思われるもので、焼かれた窯などは確定していない。

木製品 2122は最大長13.0cm、直径2.0cmを測る木製品で、上方部は人の顔、下方部は男性シンボルを模してつくられたものである。祭祀などに使用されたものか。2123は円柱状の栓で、長さ4.6cm、最大径3.0cm、最小径1.8cmを測る。上方から2cmの部分にわずかな段が付けられている。2124は角型の刳り下駄で、長さ20.3cm、幅9.9cmを測る。



第369図 SK67 平面図・断面図

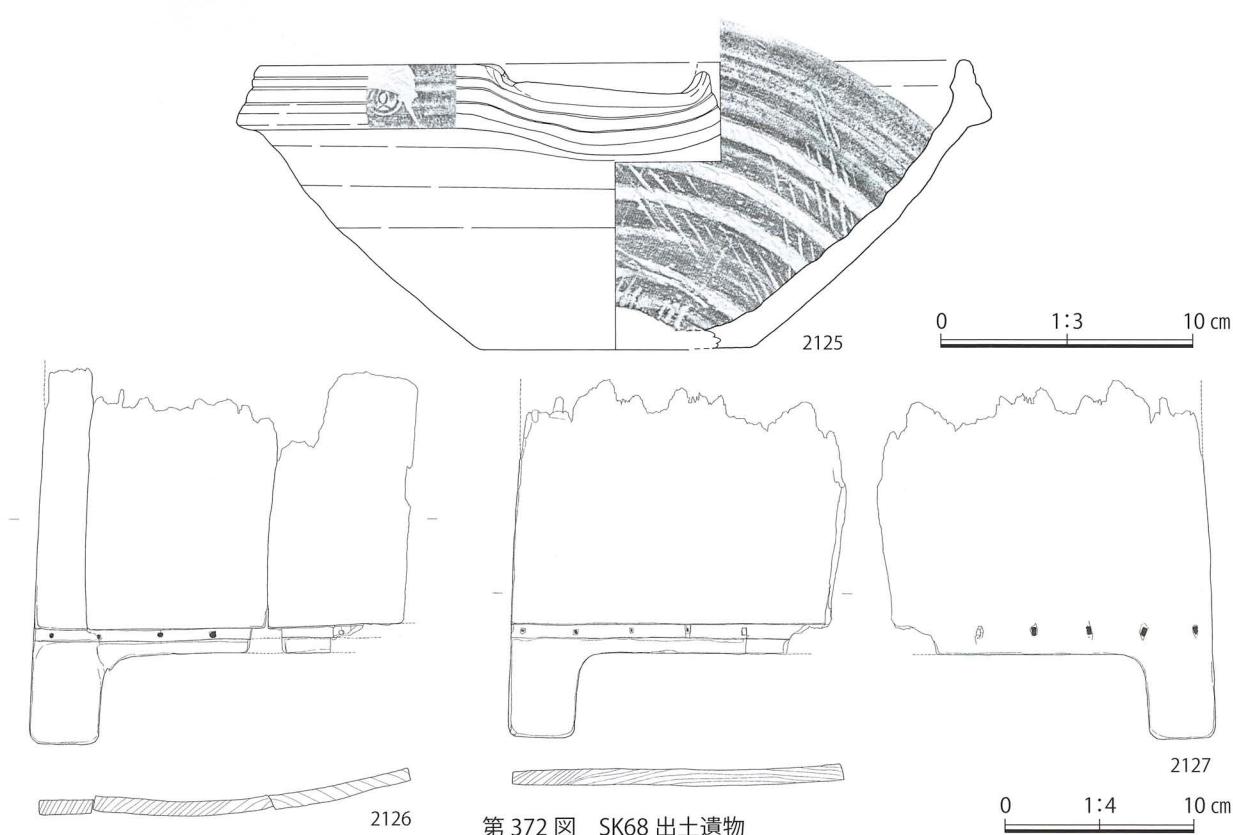
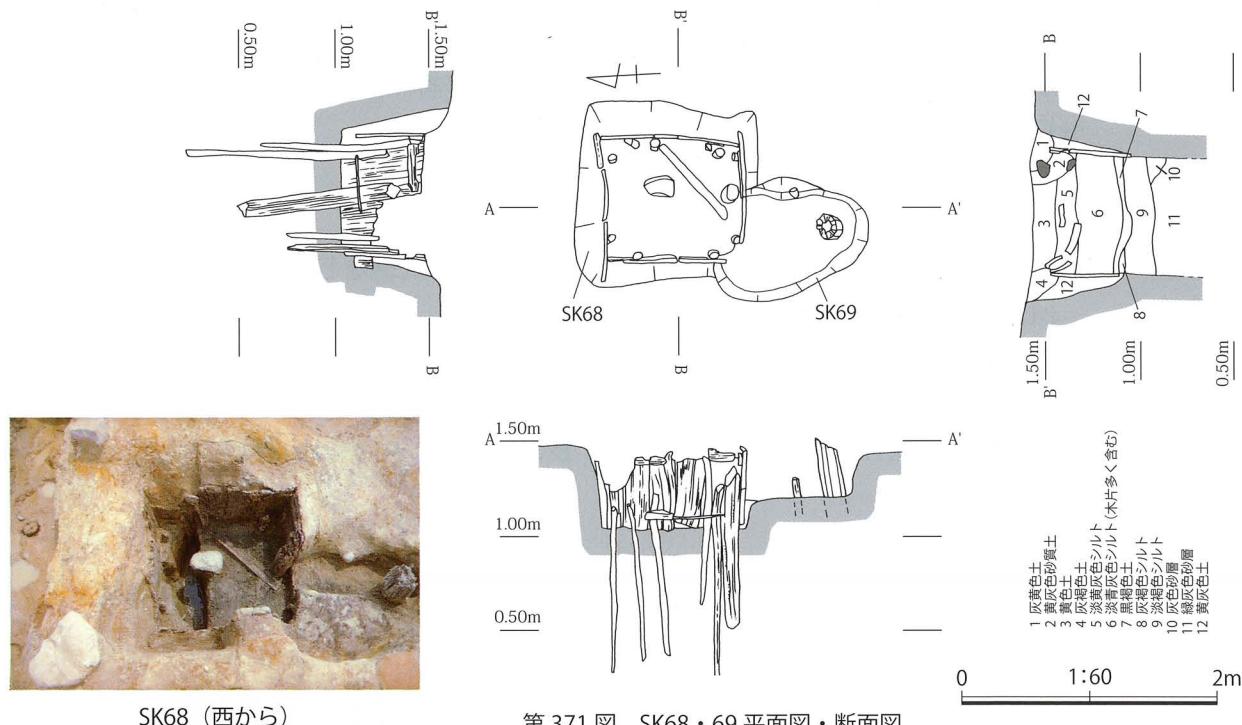


第370図 SK67 出土遺物

SK68・69：木枠施設（第371図）

SK68・69 SK68・69は屋敷境石積溝SD01のほぼ中央にあたる南側に隣接する2つの土坑である。

SK68はやや歪んだ正方形を呈し、南北長1.4m、東西幅1.45m、深さ0.9mを測る。SK69は長辺1.3m、短辺0.7～0.9m、深さ0.35mを測るいびつな橢円形を呈する。SK69の掘り方の南西部分を一部切ってSK68が掘られており、SK69内部南端には直径0.18mの杭が



打ち込まれていた。

SK68の内部には木枠と木杭で構成された方形の木枠施設がつくられていた。方形の四方は東西南北方向に合わせて設置されている。厚さ0.8cmの木の板が垂直に打ち込まれており、一側面につき3～4枚が使われている。木の板が合わさる隅部分には板と板を組ませる加工は成されておらず、直角にぶつかる方の板が数cm長めに設定されている。

また、板の一部分にタガの痕跡が見られることから、この板は桶か樽の側板を転用したものと思われる。

板の内法は南北1.05m、東西0.95mを測り、板を内側から支えるように長さ0.75～1.60m、直径0.05mの杭が北面に2本、東面に4本、南面に2本、西面に2本の計10本が打ち込まれ、南側にはこれらより太い直径0.14m、長さ1.3mの杭が打ち込まれていた。

SK68の底面に木材などは設置されていないことから、床面は明確なものではなかったと言えるが、第7層（黒褐色土）が床面としての役割を果たしていると考えている。第7層は厚さ約5cmを測る土層で、中央部分が窪む形で水平堆積している。その上には木片等を多量に包含した第6層（淡青灰色シルト）が35cmに渡り堆積している。更にその上にも第5層（淡黄灰色シルト）が水平に乗り、木枠の埋土となっている。

SK68の性格については様々な可能性が考えられる。板と杭を組み合わせた方形溜め枠のような構造を成しており、明確な床面は存在しない。地中1.3mまで深く打ち込まれた杭の長さを考えると、簡易的な施設ではなく、この場所に設置することに意義があったと捉えることができる。

遺物は備前産の擂鉢の破片が1片出土しているのみである。

SK68 出土遺物（第372図）

国産陶器

2125は備前陶器の擂鉢である。口径28.2cm、底径11.0cm、器高11.4cmを測り、口縁部分には幅10cm前後の片口が見られる。2125は第4遺構面検出の素掘溝SD01から出土した2206（第369図）と接合が可能であり、同一個体である。

木製品

2126・2127は木枠の一部に使用された木製品で、桶か樽の側板の転用品と考えられる。逆「L」字状を呈し、タガの痕跡が顕著に見られる。

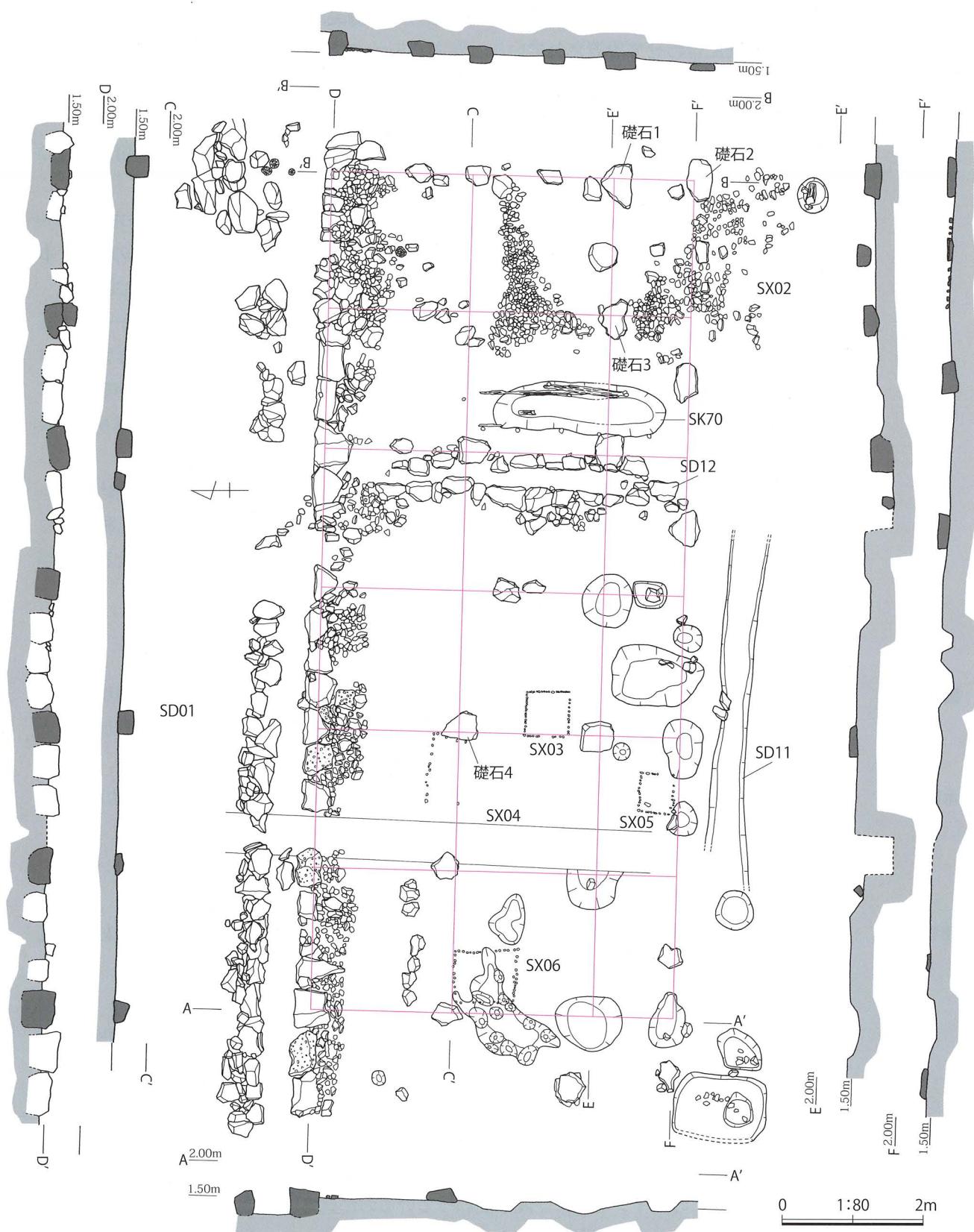
SB11：建物跡（第373図）

SB11

SB11は調査区西端の一角にあり、屋敷境石積溝SD01の南側に隣接する建物跡である。東西方向を長軸とし、いわゆる長屋風の建物が存在していたと考えている。

東西6間（1間2.0m）×南北2間半（1間2.0m）の範囲を持つ建物跡であり、建物の外縁ラインは東側はB-B'、西側はA-A'、南側はF-F'、北側はD-D'であり、A-A'より西側は建物が続いていると思われる。このうちD-D'は、SD01の中に礎石となる石が組み込まれている。よって、SD01の南側石積の真上に、建物の壁が建つ状態となる。また、E-E'・F-F'上には、礎石の合間に土坑が見られる。これは礎石を抜き取った痕跡と考えられる。

SB11の東側・北側・南側は、建物の外縁ラインと考えてよい。東側B-B'より東には礎石は一切見られず、このラインを境に空間が変わっているのが見て取れる。北側D-D'は前述通り屋敷境石積溝SD01の真上であり、ここで屋敷地が終わっている。南側F-F'の南隣には東西長約5.2m、南北幅0.5m、深さ0.14mの素掘溝SD11を検出した。SD11はSB11の雨落ち溝とも捉えられる。これらに対し西側は、調査範囲の限界のためこれ以上の検出は不可能であった。よって、SB11は東西方向に長く（間数は不明）、南北方向2間半で構成される「長屋」



第373図 SB11 平面図・断面図

であったと推測している。

SB11では、第3遺構面建物跡SB08（第301図）でも検出した「墨書き」が見られる礎石が4個あるのを確認した。礎石1～4はいずれもSB11を構成する主要礎石であり、礎石1には「夕七」、礎石2には「三」、礎石3には「カ七」、礎石4には「○」と書かれていた。「夕七」「カ七」は縦書きで書かれており、漢字の「夕」「力」なのか片仮名の「タ」「カ」なのかの判断はできていない。SB11が建てられた時代は17世紀代であり、この時代に片仮名で墨書きを行う例がないとも言われている。漢字であるならばその意味を考えなければならず、現状では「夕」と「力」にどのような意味が込められて書かれたのかは分かっていない。

SB11を構成する礎石、及び礎石を抜き取った土坑からは、以下の遺物が出土している。

SB11内 紣石1～4 出土遺物（第374図）

- | | |
|------|---|
| 礎石1 | 礎石1 2128は志野の陶器で、菊皿である。口径10.5cm、底径6.6cmを測り、全体的に肥厚したつくりになっている。 |
| | 2129は肥前陶器・絵唐津で、折縁形の中皿である。口縁端部内面には円弧状の文様が描かれる。 |
| 礎石2 | 礎石2 2130は肥前陶器の稜湾形小皿で、内面には胎土目痕が見られる。 |
| 礎石3 | 礎石3 2131は肥前陶器の壺で、胴部最大径13.3cm、底径9.2cmを測る。内面には同心円状叩き痕が見られ、底部には砂目痕が見られる。 |
| 国産陶器 | |
| 貿易磁器 | 2132は中国磁器・精製で、漳州窯系の大碗である。外面には漳州窯特有の文様が描かれている。また、断面は漆継ぎによる補修の痕跡が見られ、優品であったことが思われる。 |
| 礎石4 | 礎石4 2133は銅製の煙管で、吸口部分である。長さ6.5cm、小口径1.0cm、口付径0.4cm、重量6.12gを測る。 |

SB11に付属する遺構

SD12: 石積溝（第373図）

SD12はSB11の中央東寄りの位置する石積溝である。南北長5.0m、溝幅0.3m、深さ約0.2mを測り、F-F'以南は消滅している。石材はすべて大海崎石を使用しており、1段積みである。SD12の北側は屋敷境石積溝SD01に直角にぶつかっており、SD12の石積はSD01に切られる形で破壊されていた。



第374図 索石1～4 出土遺物

SD01とSD12が同時期に排水溝として機能していたとは考え難く、SD12がつくられた後にSD01をつくった様相がうかがえる。SD12はSD01・SB11を建築するのと時を同じくして廃絶されたものではないかと推測する。

SK70：土坑（第373図）

SK70

SK70はSD12の東隣に位置し、SD12と同じ軸で掘られている長楕円形土坑である。南北長2.5m、東西幅0.7m、深さ約0.12mを測り、土坑の西側長辺には0.5m間隔で杭が打ち込まれていた。東側には長さ2.0mの細い板が設置されている。この板の内側には板を支えるように杭が打ち込まれていた。

SD12・SK70は遺構の種類・形態は異なるが、南北方向の軸を意図的に合わせているようにも思われる。これらが位置する場所は、第3-1遺構面では石積溝SD08、第4遺構面では素掘溝SD11（第392図）が位置する。いずれも南北方向を軸にした溝が、形状と東西位置を少しずつ変えながらつくられることは興味深い一致である。

SX02：礫敷遺構（第373図）

SX02

SX02はSD12・SK70の東隣に位置し、東西1間（1間2.0m）×南北1間半（1間2.0m）の範囲に5cm大の小礫を敷き詰めた遺構である。SX02の範囲はかなりいびつな形状を呈している。小礫が最も密集しているのは北側で、南側はばらつきがあり乱れている。

SX02はSB11の範囲内に収まる部分が多いことから、SB11に関連する遺構と考えられる。建物の内部構造を検討する上での要素になり得るが、詳細は分かっていない。

小礫に混じって肥前磁器・土師器皿の破片が数点出土しており、時期は九陶Ⅲ期を示すものと思われる。

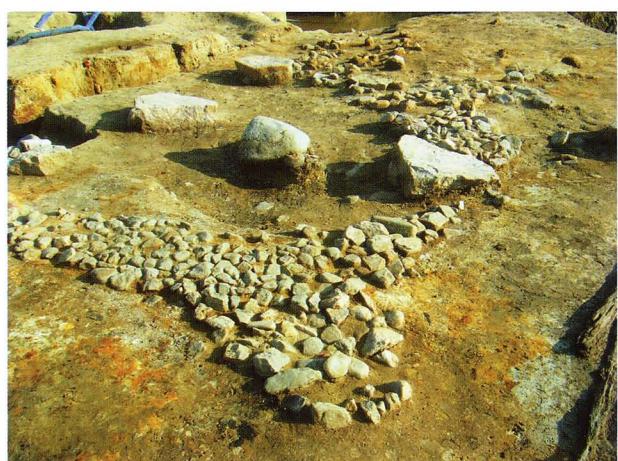
SX02 出土遺物（第375図）

国産磁器

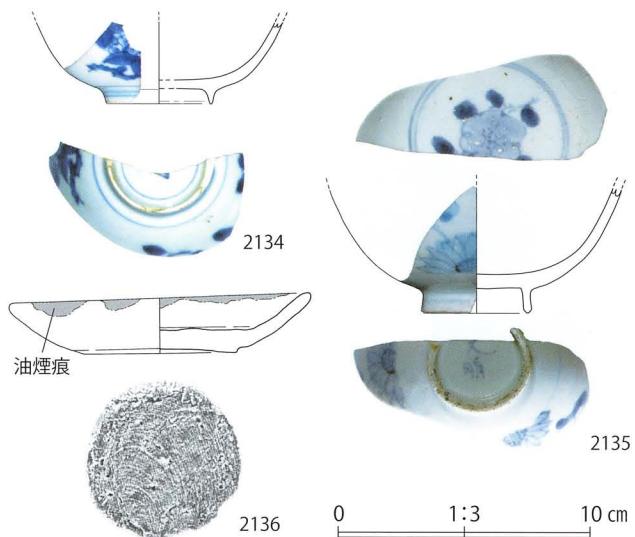
2134・2135は肥前磁器の中碗で、2135は高台内に「太明」の銘が入る。

土師器皿

2136は口クロ成形による土師器皿で、口径12.0cm、底径6.0cmを測る。底部は回転糸切りで調整されている。口縁部に油煙痕と煤が付着していることから、灯明皿として使用したものと考える。



SX02（北西から）



第375図 SX02出土遺物

SX03～06：木舞状遺構（第373図）

SX03～06 SD12以西には地面に細竹を垂直に差し込んで方形枠を形成する木舞状遺構 SX03～06 が点在している。

SX03～06 は SB11 の下部にあたる位置で検出し、いずれも礎石には重ならないつくりになっている。地中に竹が埋め込まれたような形状で検出し、本来どのような姿をしていたかは不明である。

SX03 は 0.6 m四方、SX04 は 1.0 m四方、SX05 は 0.45 m四方、SX06 はややいびつな 0.9 m四方を測るもので、いずれも正方形に近い形状を呈する。四方は東西南北の軸に合うように設定されている。この4ヶ所がつくられた位置関係に規則性を見出すことは現時点ではできない。

また、民俗例から考えると、細い竹を地面に突き刺して囲いとしその中で鶏を飼った、という一例もある。



SX05

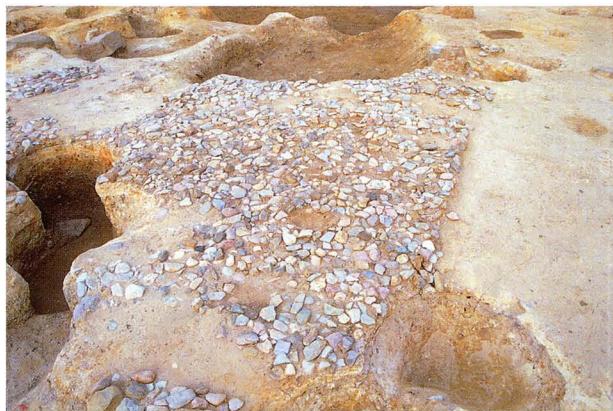
SB12：建物跡（第354図）

SB12 SB12は建物跡 SB11（第373図）と対になる形で位置すると思われる建物跡である。

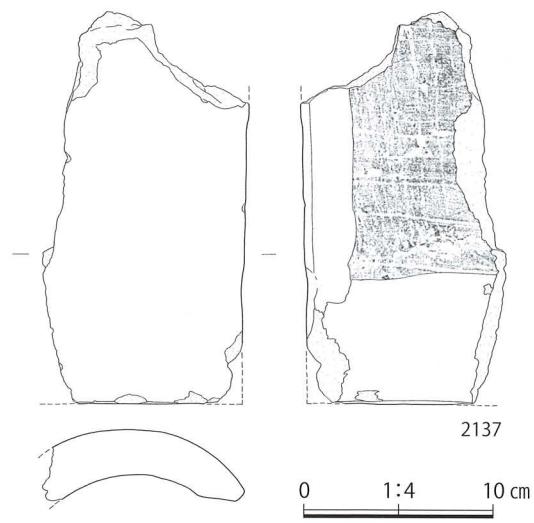
SB11 は調査区西側に建ち、屋敷境石積溝 SD01 内の石を礎石としている。これと同様に考えると、SD01 の屈折点以東の石積内には 1 間ごと（約 2.0 m）に大形の石が組み込まれているのがわかる。

また、SB11 内東端で検出した礫敷遺構 SX02 と対面になるように、SB12 内西端にも礫敷遺構 SX07 を検出した。SX07 の詳細については後述する。

SB12 の範囲を推定するための要素は SD01 内の礎石と SX07 のみで、面的に広がる礎石や土坑などは攪乱により検出できなかったが、SD01 内の礎石は少なくとも東西 7 間（1 間 2.0 m）あると思われる。南北方向は SX07 の範囲と周囲の土坑などから判断して、3 間半（1 間 2.0 m）



SX07（西から）



第376図 SX07 出土遺物

の範囲が想定され、SB11よりも南北に1間分広い建物であった可能性を考えている。

SX07：礫敷遺構（第354図）

SX07 SX07はSB12内の西端で検出した礫敷遺構である。5cmの大いな礫が3.5×3.5mの範囲に密集して敷き詰められていた。礫はSB12の推定外縁ラインの西側・南側に揃うような形状を呈している。

小礫に混じって瓦片が出土している。

SX07 出土遺物（第376図）

瓦 2137は丸瓦で、残存長20.7cm、残存幅10.1cm、厚み2.5cmを測る。コビキBである。

SX08：礫敷遺構（第331図）

SX08 SX08は建物跡SB08・09の北西隅、素掘溝SD06の下層で検出した礫敷遺構である。SX08は円形状を呈し、直径約2.5mの範囲に5cmの大いな礫が密集して敷き詰められていた。

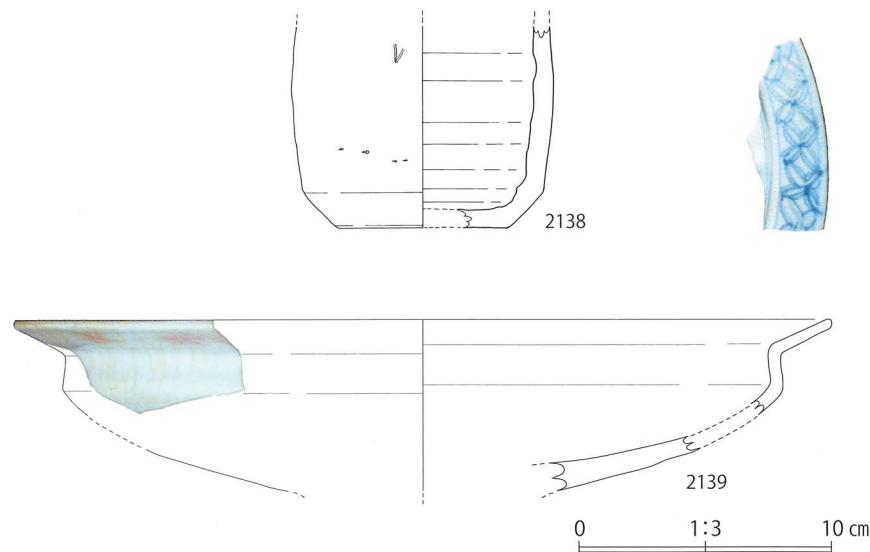
SX08と同様な形態である礫敷遺構SX07・02は建物跡の範囲内から検出していることから、屋内につくられた施設である可能性が考えられる。SX08はSB08・09と雨落ち溝SD10に近接してつくられている様相を呈しているが、建物とどのように関連するか、またはどのような性格の遺構かは定かではない。

遺物は小礫に混じって備前陶器・肥前磁器の破片が出土している。

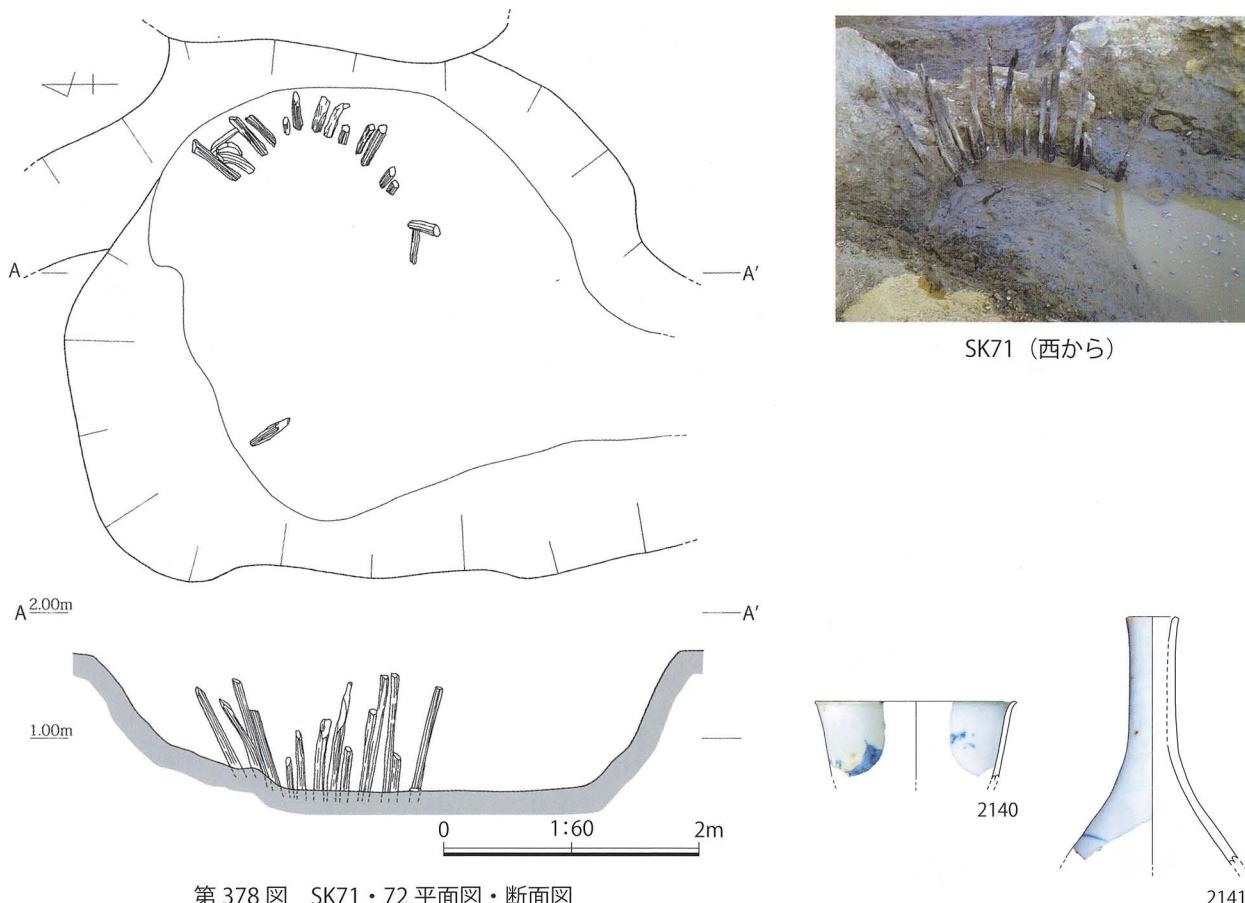
SX08 出土遺物（第377図）

国産陶器 2138は備前陶器の建水で、底部部分のみの残存である。底径6.6cm、胴部最大径10.5cmを測り、高台のない平底を呈する。

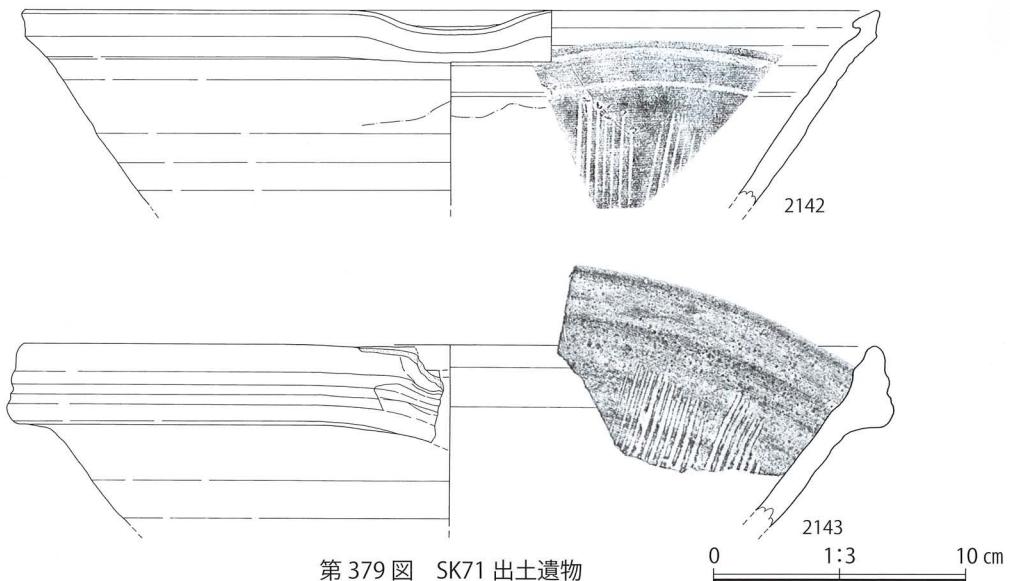
国産磁器 2139は肥前磁器の萼緑形大皿で、口径32.4cmを測る。1787（第3-1遺構面・廃棄土坑SK43出土）とよく似た大皿である。また、2139は屋敷境石積溝SD01から出土した2053（第355図）と接合が可能であり、同一個体である。



第377図 SX08出土遺物



第378図 SK71・72 平面図・断面図



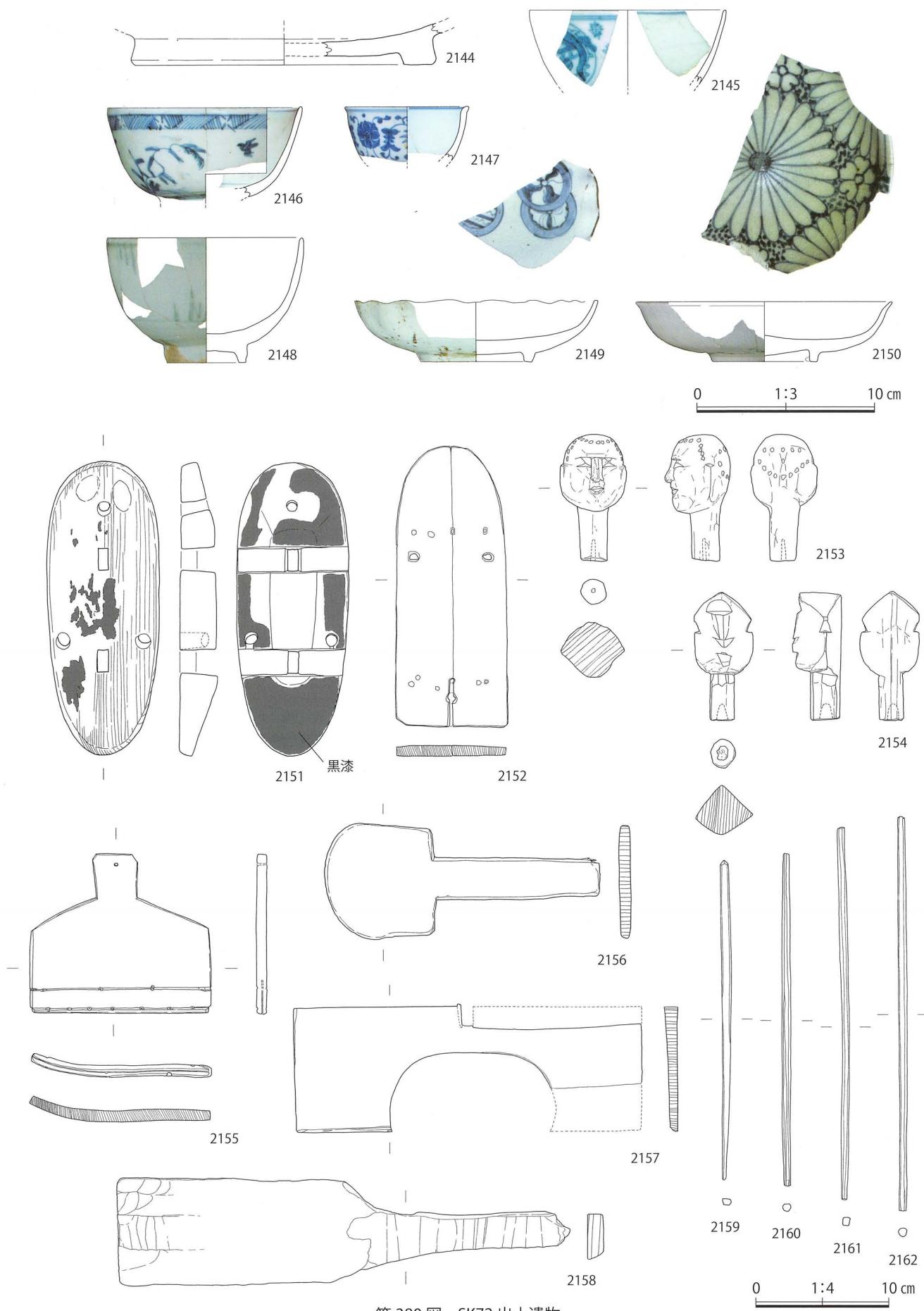
第379図 SK71 出土遺物

SK71・72：廃棄土坑（第378図）

SK71・72

SK71・72は調査区中央から西寄りに位置する大形廃棄土坑である。SK71・72は石積溝SD08の南側延長線上、雨落ち溝SD10の西側延長線上にあたる。SK72の後にSK71が掘り込まれている重なりが見られる。

SK72は直径約5m、深さ約1.0mを測る大形の円形土坑で、SK71はSK72の底面やや北東の位置に、直径約2m、深さ0.9mを測る円形土坑である。SK71の内部には土坑の直径に合わせて18本の杭が打ち込まれていた。杭は長さ0.35～0.95m、太さ0.07mを測るもので、



第380図 SK72出土遺物

東側に円弧状に打ち込まれ、その上方部は放射状に広がっていた。この杭は廃棄するゴミが散らばらないようにという意図で打ち込まれたものと思われる。

SK71・72 が位置する場所は、第3-1 遺構面で廃棄土坑群2が掘られた場所（第320図）である。廃棄土坑群2は、SK71・72の位置を踏襲して掘り込まれたものと考えてよい。

遺物は多量に出土しており、特にSK72の方が多い傾向にあった。遺物の年代はおよそ九陶II-2～III期間を示すと思われる。

SK71

SK71 出土遺物（第379図）

国産陶器

2142・2143は陶器で擂鉢である。2142は肥前、2143は備前産で、いずれも口径34.0cmを測り、片口を持つ。

国産磁器

2140・2141は肥前磁器である。2140は端反形の小碗で、中国磁器の可能性も考えられる。2141はらっきょう形の小瓶で、頸部は5.0cm以上を測る。

SK72

SK72 出土遺物（第380図）

国産陶器

2144は肥前陶器の大皿か鉢で、高台部分の残存である。底径16.7cmを測る大形で、接地面は1.6cmを測る。

貿易磁器

2145は中国磁器・精製の中碗である。口径11.0cmを測り、同様の文様が肥前磁器にも見られる碗である。

国産磁器

2146～2150は肥前磁器である。2146は丸形中碗、2147は端反形小碗で、外面に蘭文が描かれる。2148は丸形中碗で、高台内が無釉のものである。2149は丸形の五寸皿で、口鋸を施し、内面に円形文を描く。2150は端反形五寸皿で、内面の中心に直径8.5cmの菊花文を大きく描き、その周間に隙間なくサイズを変えた菊花文を描いている。

木製品

2151は丸型の差込下駄で、表面に黒漆、裏に下地が塗られている。2152は用途不明品で、一見下駄のようにも見えるが

下駄ではない。2153・2154は人形の頭で、2153は顔の部分を精巧に彫り出しており、頭部には髪の毛を刺す穴が開けられていた。また、白色の顔料もやや残存していた。2154は2153と比べると、模式的な顔となっており、故意にデフォルメして彫ったという印象を受ける。2153は目・鼻・口など、より本物の人間に近づけるようにつくられているのに対し、2154はパーツを荒く削つただけである。2154の首部分には0.9cmほどの穴が開けられることから、指人形として使用した可能性も考えられる。2155は刷毛で、毛を挟むための加工と、柄の部分に穿



第381図 SK73～76 出土遺物

孔が見られる。2156は両刃のヘラで、刃部分は幅7.5cmを測り丸い形状を呈し、柄部分は長さ10.2cmを測る。しゃもじに近い製品であると思われる。2157は折敷の脚部かと思われる。2158は羽子板に近い形状を呈しているが、面に二次加工の痕跡が見られ、ヘラとして使用されたものではないかと推測する。2159～2162は白木の箸である。いずれも真っ直ぐ伸び、長さ24.1～29.4cm、厚み0.4～0.6cmの間におさまる。

SK73～76：その他の遺構（第354図）

SK73～76 SK73～76は第2遺構面においてSK13（第271図）、第3-1遺構面において廃棄土坑群2（第302図）が掘られた場所に位置する土坑である。SK73～76の南西側には大形廃棄土坑SK71・72（第378図）も掘られている。SK73～76はこの近辺が廃棄土坑を掘る場所として認識される以前に掘られた土坑群であると思われる。

その他の遺構 出土遺物（第381図）

- | | |
|------|---|
| SK73 | SK73 2163は志野の陶器で小壺である。長石釉が掛かっており、古手の様相を示す。
2164は肥前磁器の半球形中碗で、高台には砂目痕が見られる。 |
| SK74 | SK74 2165は漆椀で、高台が2.7cmを測る。外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られている。
外面には黄色の二重丸に赤色で鶴文が3個描かれている。 |
| SK75 | SK75 2166は真鍮製の煙管で、雁首部分である。残存長9.6cm、火皿径1.5cm、重量5.40gを測る。 |
| SK76 | SK76 2167は肥前磁器の浅半球形中碗で、高台内に「太明」の銘が入る。 |

第3-2遺構面 遺構外出土遺物（第382・383図）

国産陶器 2168～2178は肥前陶器である。2168は腰折形の中碗で、口縁部は大きく外反する。
2169～2171は端反形の中碗、2172・2173・2175は絵唐津の小皿で、いずれも内面に胎土目痕が見られる。このうち、2175は方形の変形皿で、四方が伸びるように成形されている。
2174は口縁帯下注口の片口で、白土を塗っている可能性が考えられる。2176は中瓶の胴部で、最大径14.0cmを測る。内面には同心円状叩き痕が見られる。2177は口径5.5cm、器高5.9cmを測る小壺で、茶入れとも考えられる。外内面には粘土が付着・剥離した痕跡が残っており、凹凸や歪みが目立つ。2178は絵唐津の折湾形大皿で、内面には胎土目痕が見られる。
2179・2180は擂鉢で、2179は産地不明、2180は九州産の可能性が考えられる。

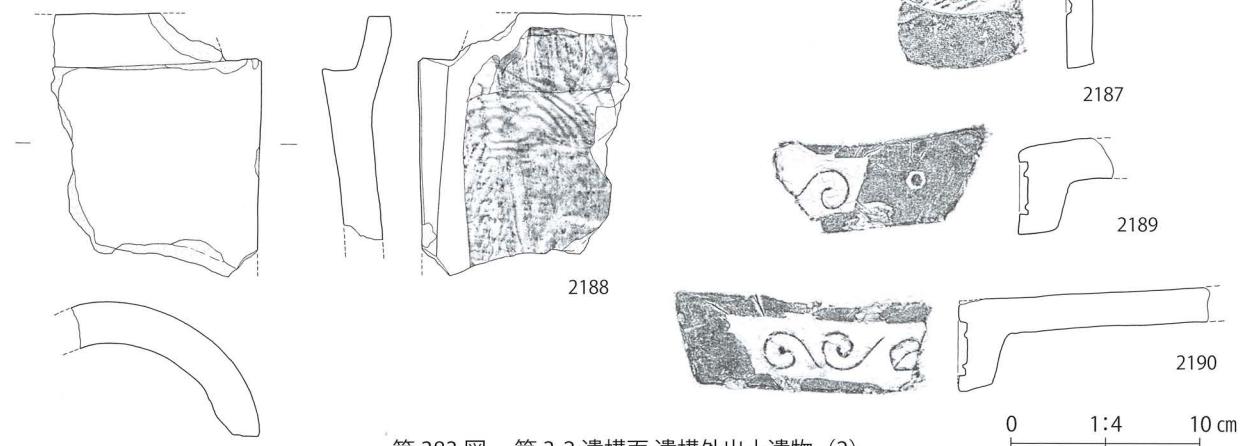
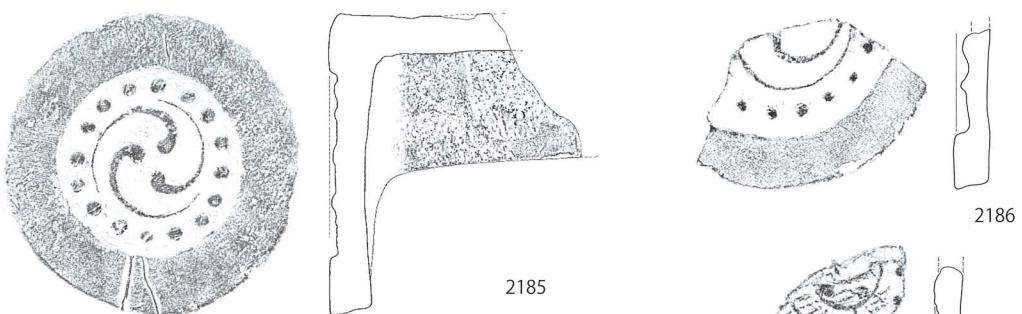
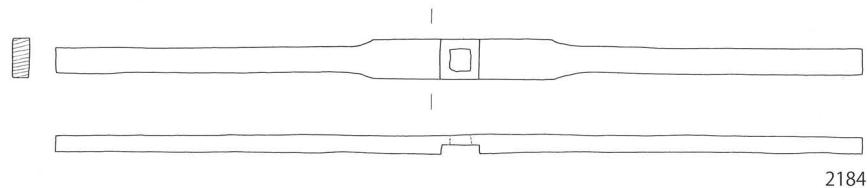
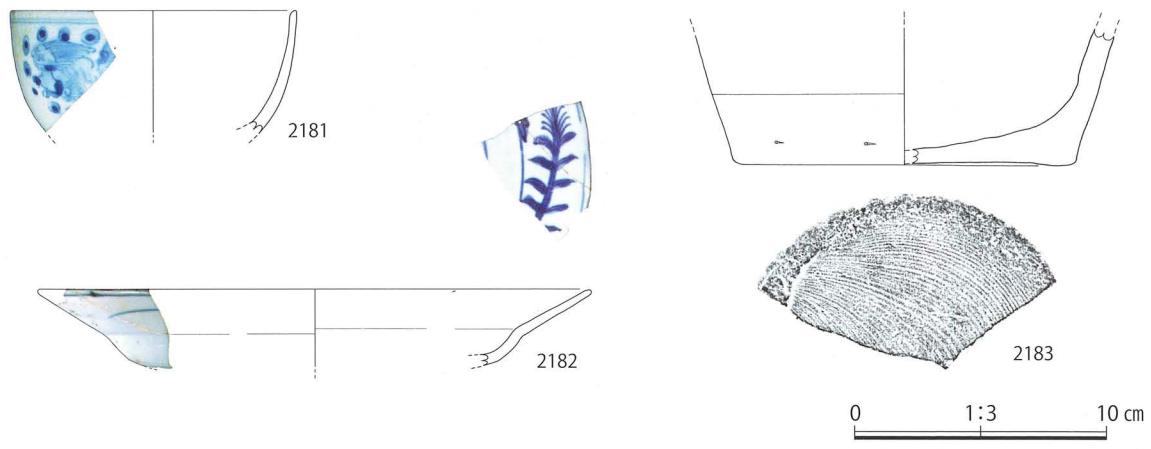
国産磁器 2181は肥前磁器の丸形中碗である。
貿易磁器 2182は中国磁器・精製で、景德鎮窯系の折縁形中皿である。
土器 2183は土器で、壺か甕の底部片である。底径13.6cmを測り、底部から直線的に上がる胴部である。底部は回転糸切りで調整されている。

木製品 2184は長さ42.7cm、最大幅2.1cmを測る不明木製品で、中央部分に四角形の穿孔が開いており、その左右は対照的なつくりになっている。

瓦 2185～2187は軒丸瓦で、いずれも中央に左三巴文、その周囲を珠文が廻る。珠文は、完形の2185で16個廻っている。2187は巴文と珠文の面に斜線が入っているが、これは瓦を作る際の型が劣化している証拠である。このように斜線が入るのは、使い古した型であることを物語り、引いては瓦製作時の状況、環境が劣悪なものであったとも考えることができる。
2180は丸瓦で、コビキBである。2189・2190は軒平瓦で、文様は三葉系の唐草文である。
また、2189には文様の外側に直径1.0cmの丸いスタンプが押印されている。



第382図 第3-2遺構面遺構外出土遺物(1)



第383図 第3-2遺構面 遺構外出土遺物 (2)

第7節 小結

南屋敷の調査におけるまとめとして、各遺構面の遺構配置、主に建物跡の変遷に重きを置いて述べる。また、出土遺物から見る年代の把握を行っていきたい。ここでは、年代が古い第3遺構面から述べる。

第3遺構面

第3遺構面は本文で述べた通り、調査区の南側に広がる建物跡SB08・09が建てられていた期間に、北側の細長い帯状区画（第3-1遺構面・第3-2遺構面）が2面に渡って造成された遺構面である。上層面からの掘り込みや攪乱が見られるが遺構の残存状況は良い。

SD01は第3-2遺構面時にはほぼ完全な形状で検出した屋敷地を仕切る石積溝である。SD01は溝としてだけではなく、石積の上に建物を建てる前提につくられた施設である。SD01の南側石積列の中に1間2.0m間隔で並ぶ石が見られ、西側に建物跡SB11、東側にSB12が建っていたことが想定できる。SB11・12はSD01とともにつくられ、建物と排水施設が1セットとなるものであった。SD01は第2遺構面に至るまで、つくり変えられながら同じ位置に存続する。

SB11・12の内部では礫敷遺構SX02・07を検出した。これらの性格は判明していないが、建物の内部構造を考える上で貴重な発見となった。また、東端には北西—南東方向を軸とする素掘溝SD09が見られ、底面に半間（1.0m）間隔で並ぶ礎石が置かれている。SD09は建物跡とは異なる軸であった。第3-2遺構面時には、南東側にSB08・09、南西側にSB10、そしてSD01に沿った東側にSB11、それと対面になるようにSB12が建っていたことが想定できる。SB08・09は母屋、SB11・12はその細長い形状から長屋風の建物であろうと思われる。いずれもほぼ同時期に存在していたと考えられる。

SB08とSB09はSB09が約半間分南に移動している状態で検出した。これは建て替えを示す痕跡である可能性が高い。また、SB08・09の範囲内には焼土が広がる部分があり、火災による建て替えであったことも考えられる。SB08・09の北側に隣接している石積溝SD07と素掘溝SD10はいずれも建物跡に付随する雨落ち溝と考え、これらのつくり替えは建物の建て替えを示唆し、以北の帯状区画にも少なからず影響を与えたと思われる。SB08・09の西側に見られる素掘溝SD06も雨落ち溝である可能性が考えられる。

第2遺構面

第2遺構面では礎石や抜き取り痕を多数検出し、その並びがやや煩雑になる傾向が見られた。これらがどのように建物を構成するかは、1間約2.0mを測る礎石間の距離で検討し、SB03～05の復元案を想定した。いずれも第3遺構面時の建物跡ほどの規模は持たず、全体像は明確に示せなかった。SB03～05はSB08・09とほぼ同一軸で建てられていた。

SB03～05の西側には建物跡SB06が見られた。SB06の位置は第3遺構面においてSB10を検出した部分と重なる。SB10は東西残存2間（1間1.90m）、南北の間数は明確に割り出せない礎石の並びになっているが、G-G'を構成する主要礎石は1間1.90m間隔で並んでおり、これらを基準とすると、SB10は残存で6間の南北幅を持つ建物であったと想定できる。このG-G'とSB06のB-B'はほぼ同一地点で重なっており、G-G'の礎石（大海崎石）が置かれた直上にB-B'の礎石（島石）が置かれていた。B-B'の礎石は1間1.95m間隔で明瞭に並んでおり、1つ1つに拳大の栗石（大海崎石）が敷かれるものであった。第2遺構面造成時、第3遺構面の礎石の直上に礎石が置かれることは意図的なものであり、建物の軸のみならず柱を建てる位置さえも踏襲した部分があることがうかがえる。

第1遺構面

第1遺構面では、東側に建物跡SB01・02を重なった状態で検出した。このうちSB02は

第2遺構面からの南北軸を引き継いでいるが、SB01はわずかに軸がずれていた。SB01の南北軸は、それまで踏襲してきた東へ4度傾く軸が、ここでわずかにずれたことを示すものと思われる。

石積方形土坑 第3遺構面の建物跡の周囲には石積方形土坑が多数配置されている。第3-2遺構面ではSD09西側にSK61が、南側にはSK62・63がつくられている。SK61は5段の石積みで構築されたもの、SK62・63は0.3mの間隔を取って隣接するもので、後者は2つで1セットとして利用されていた施設と思われる。第3-1遺構面では調査区西端でSK58を検出した。SK58は側面に島石、底面に大海崎石を利用した施設である。第3遺構面では調査区南端にSK40を検出している。SK40は建物跡SB08・09のすぐ南側に位置することから、建物と関連性がある施設とも考えられる。南屋敷では、上記の5個の他に第4遺構面でも4個の石積方形土坑を検出しており、年代は異なるが計9個つくられていた。

廃棄土坑 また、第3遺構面～第2遺構面までの間では計18個の廃棄土坑を検出している。大きさは様々であるが、いずれの土坑も埋土は炭が混じった黒色を呈し、その中には多量の遺物が捨てられていた。碗や皿・瓶・擂鉢（陶磁器・漆器）、箸・折敷（木製品）などの食器類、焙烙・土鍋（土器）、籠（木製品）などの調理器具の他、動物・魚の骨などの食物残滓が多量に見られ、食生活に伴う廃棄物が多く捨てられたことを示している。その他、香炉・火入れ（陶磁器）、灯明皿として使われた油煙痕が残る土師器皿、下駄・刷毛・桶（木製品）、煙管・釘（金属製品）、火打ち石、墨書きが残る荷札木簡、瓦の破片など、生活全般に関わる製品が廃棄されていた。

廃棄土坑は必然的に家屋が建っていない場所に掘られることになり、その状況は調査成果に表れている。また、家屋の玄関側（表）にゴミを捨てる習慣は通常考えられず、勝手口や台所の近くなどの裏側に捨てると思われる。南屋敷において廃棄土坑が掘られた場所は、大きく分けて東側と西側に集中している。東側は第3-1遺構面においてSK43～49が重ならないよう掘られた廃棄土坑群1が主となり、西側は第3-2遺構面時ではSK71・72、第3-1遺構面ではSK71・72とほぼ同一位置にSK50～55が密着して掘られた廃棄土坑群2、第2遺構面ではさらに同じ位置に大形廃棄土坑SK13が掘られている。廃棄土坑が同じ場所に掘られ続けることは、建物の場所が動いていないことを示すとともに、ゴミ捨て場としての位置を踏襲する認識があったと思われる。

祈祷具 第1遺構面においては本文中で詳しく述べた長方形祈祷具（SK06）・八角形祈祷具（SK07）が出土した。これらは過去に類を見ない遺物であり、幕末期の民間信仰・祈祷法などを知る上で貴重な発見であった。

南屋敷の年代観 各遺構面の年代観は、第3遺構面が松平期である17世紀前半～18世紀前半を示し、そのうち第3-2遺構面が17世紀前半～中頃、第3-1遺構面が17世紀中頃～18世紀前半であると判断している。第2遺構面は18世紀前半～後半、そして第1遺構面は18世紀後半～明治初頭であると想定している。

本章で扱った第1遺構面～第3-2遺構面の下には、次章第6章で取り上げる第4遺構面が存在する。第4遺構面は堀尾期・京極期に建てられた建物跡がほとんど手つかずの状態で残存しており、江戸時代初期の松江城下町の様相を色濃く提示している。

註

- (1) 井戸を廃絶する際に行われる宗教的儀式であり、中世以降、現代まで続くものである。井戸の中央に竹筒を立てて埋めることによって、水神の息を途切れさせないようにするという儀式である。
- (2) 長方形祈祷具・内蓋表面の墨書文字については、島根県教育委員会 文化財課 松尾充晶氏にご教示して頂いた。
- (3) 「橘 明喬」が「松浦東鶴」の息子であるという一連の流れについては、島根大学 法文学部 小林准士准教授にご教示して頂いた。
- (4) 「土金祭」などの祈祷法に関しては、水野正好氏にご教示して頂いた。また、鉄の球を鍛えて地中に埋める祈祷法については、宮永雄太郎『神道秘密集伝』八幡書店 1989年、村田あが「『匠家故実録』に見る建築儀礼」『跡見学園女子大学短期大学部紀要』36 2000年に記述が見られる。
- (5) 陰陽五行思想については、吉野裕子『吉野裕子全集2』人文書院 2007年を参考にした。
- (6) 陰陽五行思想・風水学・家相学について総括的に捉え、かつ松浦東鶴が興した「松浦流」について研究を行われている村田あが氏にご教示して頂き、その文献を参考にした。村田あが「江戸時代中・後期の住まいについての研究(第5報)ー『家相図解』その2ー」『東京家政学院大学紀要』31 1991年
- (7) 島石とは堅硬多孔質玄武岩の通称である。松江市大根島、もしくは嫁島で産出される火山噴火の折の噴石であり、表面は気泡のような孔が全面に見られる石材である。
- (8) 大海崎石とは安山岩の通称である。松江市大海崎町で産出されるものを使用しており、多くは赤色を呈する比較的柔らかく加工しやすい石材である。
- (9) 瓦製作時に木製型の劣化による粗い線が入ることについては、米子市歴史館 学芸員 伊藤創氏にご教示して頂いた。
- (10) 「楽山」とは松江市西尾町で現在も操業されている「楽山焼」のことである。
- (11) 廃棄土坑の性格については、江戸遺跡研究会『図説 江戸考古学研究辞典』2001年を参考にした。
- (12) 廃棄土坑に捨てられている食物残滓の種類の傾向については、総合地球環境学研究所 石丸恵利子研究員にご教示して頂いた。
- (13) 「高野山真言宗 尊照山 千手院」は、堀尾吉晴が松江に入国した折、築城時に本丸の鬼門(北東方向)にあたる位置に、広瀬から移された鬼門封じの寺である。

参考文献

- 竹内 誠『図説江戸4 江戸庶民の衣食住』学習研究社 2003年
 宮田 登『宮田 登 日本を語る4 俗信の世界』吉川弘文館 2006年
 梶川敦子『占いの原点「易經」』青弓社 2008年
 東京都建設局 新宿区内藤町遺跡調査会『東京都新宿区 内藤町遺跡』1992年
 汐留地区遺跡調査会『汐留遺跡－汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書－』1996年
 財団法人 首都圏不燃建築公社 株式会社四門『東京都新宿区 若葉三丁目遺跡』2008年
 財団法人 大阪府文化財センター『大阪市 大坂城址Ⅲ』2006年
 兵庫県赤穂市教育委員会『発掘された赤穂城下町』2005年
 財団法人 北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室『黒崎城跡1』2005年

第5章 殿町 279番地外調査（南屋敷）の概要

表14 殿町 279番地外（南屋敷）陶磁器・土器遺物観察表

遺物番号	遺構名	種別	器種	器形	法量(cm)			生産地	九陶編年	備考
					口径	底径	器高			
1254	SP01	磁器	極小皿	丸形か		1.6		肥前系	-	19世紀代。
1257	SK02	磁器	中碗	平形		3.8		不明	-	高台内に「東陶」銘。近代。
1258	SK03	陶器	中碗	筒形		6.8		京・信系	-	
1259	SJ01	陶器	大甕		28.0	17.4	35.8	不明	-	
1260	SJ01	陶器	中甕		19.2	12.8		不明	-	
1264	SE02	陶器	中碗	腰張形	11.4			肥前	-	全面に緑黒色釉。
1265	SE02	土器	焼塙蓋	逆回字形	6.2	1.4	外径7.6	在地系	-	
1268	SK04	陶器	極小皿	端反形	7.6	4.6	1.4	四国か	-	ミンペイ焼の可能性あり。
1269	SK04	陶器	中碗	平形		3.0		在地系	-	
1270	SK04	陶器	擂鉢		25.5			-	-	
1272	SK05	陶器	大甕		38.9	29.2	46.0	在地系	-	内面に石灰物質付着。胴部外面にスタンプ。
1273	SK05	磁器	中碗			4.2		肥前系	-	中国(明末)の模倣か。高台内に「道光年寿」銘。
1274	SK05	磁器	小碗	端反形	9.6	4.0	5.1	瀬戸・美濃	V	1825~50年代。
1275	SK05	磁器	中碗蓋	端反形	9.4			肥前	-	1820~60年代。
1276	SK05	磁器	散蓮華	小形				肥前	-	19世紀代。
1277	SK05	土師器	皿(中)	在地系		6.2		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
1287	第1遺構面 遺構外	陶器	小碗	筒形	5.2	3.1	6.1	布志名	-	黄地釉。口縁端部に緑色釉部分的。
1288	第1遺構面 遺構外	陶器	中碗		11.7			布志名	-	青地釉。
1289	第1遺構面 遺構外	陶器			23.3	11.6	12.3	布志名	-	完形品。
1290	第1遺構面 遺構外	陶器	土鍋		20.0	9.0	8.7	-	-	把手が付く。外面底部にスス付着。
1291	第1遺構面 遺構外	陶器	香炉		12.0	6.8	5.1	不明	-	
1292	第1遺構面 遺構外	陶器	擂鉢	玉縁形	27.2			不明	-	
1293	第1遺構面 遺構外	磁器	紅猪口	菊花形	4.0	2.0	2.1	肥前系	-	瀬戸・美濃系の可能性あり。
1294	第1遺構面 遺構外	磁器	小坏	浅半球形	4.8			肥前	IV	
1295	第1遺構面 遺構外	磁器	小坏	桶形	4.6	2.9	3.3	肥前	V	白磁。
1296	第1遺構面 遺構外	磁器	小碗	桶形		2.7		肥前	-	
1297	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗	平形	11.2	3.6	5.5	肥前	V	色絵。
1298	第1遺構面 遺構外	磁器				5.2		肥前	IV~V	
1299	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗	半筒形	9.0			肥前	V	赤絵。18世紀代。
1300	第1遺構面 遺構外	磁器	合子		9.0			受部径9.8	肥前	V
1301	第1遺構面 遺構外	磁器	中碗蓋	端反形	10.0		3.2	つまみ径3.8	肥前	-
1302	第1遺構面 遺構外	磁器	大碗	丸形か		6.3		肥前	V	色絵。上台部分の残存か。
1303	第1遺構面 遺構外	磁器	小皿	丸形底広	10.2	6.4	2.6	肥前	V	赤色系。底部は回転糸切り。
1304	第1遺構面 遺構外	磁器	土瓶	把手				肥前	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕あり。
1305	第1遺構面 遺構外	磁器	人形					肥前	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕あり。
1306	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	6.5	3.0	1.5	-	-	
1307	第1遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	9.0	3.8	2.1	-	-	
1317	SB03内 磁石1	陶器	香炉か				胴部径8.6	不明	-	軟質施釉陶器。緑釉火入れ(瀬戸・19世紀初頭~前半)に類似。
1318	SB04内 磁石2	磁器	小碗	浅半球形	7.9	3.1	3.8	肥前	IV	
1319	SB04内 磁石2	磁器	小碗	腰張形	9.0	5.1	5.2	肥前	-	赤絵・金入。
1320	SB04内 磁石2	磁器	人形		5.9×4.6			肥前	-	色絵。胴部部分の残存か。
1321	SB04内 磁石3	磁器	水指か				胴部径17.3	肥前	IV	
1322	SB05内 磁石4	磁器	小壺		5.2	4.2	5.4	肥前	IV	白磁。型打陽刻。
1325	SK08	陶器	中碗	腰張形		4.3		京焼系	V	
1326	SK08	陶器	中瓶か				胴部径11.8	備前か	-	人形徳利か。
1327	SK08	陶器	大瓶				胴部径15.4	肥前	IV	二彩。
1328	SK08	陶器						不明	-	鉢の把手か。布か紐を結わいた状態を模したもの。
1329	SK08	陶器	擂鉢		30.5	10.7	13.3	須佐	-	底部外面にカンナ痕。
1330	SK08	磁器	小坏	桶形	6.2	3.6	3.4	肥前	IV	雨降文。
1331	SK08	磁器	小碗	丸形	7.6	3.2	4.3	肥前系	IV	波佐見。
1332	SK08	磁器	小碗	丸形	8.0	2.9	4.8	肥前	IV	
1333	SK08	磁器	中碗	丸形	10.1	3.8	5.6	肥前系	IV	波佐見。
1334	SK08	磁器	中碗	腰張形		5.2		肥前	IV	陶胎染付。
1335	SK08	磁器	大碗	丸形	14.0			肥前	IV	白磁。漆継ぎ痕。
1336	SK08	磁器	大碗	丸形	16.0			肥前	IV	
1337	SK08	磁器	中鉢	浅丸形	20.1	9.2	7.4	肥前	IV	高台内染付園線1本。漆継ぎ痕。
1338	SK08	磁器	香炉		10.7			肥前	IV	青磁染付。柴垣文。
1339	SK08	磁器	火入小香炉		10.5	5.5	7.7	肥前	IV	陶胎染付。
1340	SK08	磁器	段重か		15.3	10.4	5.9	肥前	-	腰部無加工。笹文。
1341	SK08	磁器	香炉			5.9		肥前	-	青磁。蛇ノ目凹型高台。脚3。
1342	SK08	磁器	五寸皿	丸形底狭	12.8	4.4	4.0	肥前	IV	見込みに蛇ノ目袖剥ぎ。
1343	SK08	磁器	仏飯器	台底輪高台	7.5	4.2	5.4	肥前	IV	雨降文。
1344	SK08	磁器	髪油壺	胴丸形有首		5.6		肥前	IV	窓絵(枠のみ)。
1345	SK08	土器	焼塙蓋身	コップ型	6.6	5.2	8.0	受部径7.9	在地系	-
1346	SK08	土器	焼塙蓋身	コップ型			受部径7.8	在地系	-	
1347	SK08	土師器	皿(小)	在地系	9.0	4.2	1.9	-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕あり。
1348	SK08	土師器	皿(小)	在地系	9.4	3.5	1.8~2.1	-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕あり。
1349	SK08	土師器	皿(小)	在地系	9.0	4.6	1.6	-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕あり。
1350	SK08	土師器	皿(小)	在地系	9.1	5.1	2.0~2.2	-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕あり。
1351	SK08	土師器	皿(大)	在地系	13.4	5.8		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
1352	SK08	土器	焙烙	無耳	28.0			在地系	-	口縁端部上面に逆円錐状の穿孔。外面にスス付着。
1353	SK08	土器	焙烙	無耳・底丸	30.0			在地系	-	外面にスス付着。
1354	SK08	土器	焙烙	無耳・底丸	31.0			在地系	-	
1355	SK08	瓦質			24.4			在地系	-	
1360	SK09	陶器	中碗	腰張形	11.6	4.8	7.5	肥前	IV	刷毛目塗り。
1361	SK09	陶器	擂鉢		31.7			肥前	-	スリ目単位12本。
1362	SK09	磁器	中碗	浅半球形	10.1	4.1	5.2	肥前	IV	
1363	SK09	磁器	小坏	丸形	5.1	2.1	3.3	肥前	-	
1364	SK09	磁器	猪口	桶形	6.0	4.3	4.3	肥前	IV	四方襷文。
1365	SD03	土器	焙烙	無耳	34.7			在地系	-	口縁端部上面に斜め穿孔。
1366	SK10	磁器	五寸皿	丸形底広	13.4	8.1	3.3	肥前系	IV	波佐見。ぐらわんか手。

遺物觀察表

遺物番号	遺構名	種別	器種	器形	法量(cm)				生産地	九陶編年	備考
					口径	底径	器高	その他			
1367	SK11	磁器	小碗	浅半球形	6.3				肥前	IV	赤絵。18世紀。
1368	SK11	磁器	仏飯器	台底輪高台		4.0			肥前	IV	
1369	SK11	磁器		変形	16.9				肥前	-	白磁。漆継ぎ痕。
1370	SK12	磁器	中碗	広東形	9.6	5.6	6.1		肥前	V	菊花文。
1371	SK12	磁器	五寸皿	菊花形	16.7				肥前	IV	口錆あり。
1372	SK13	陶器	合子	口縁蓋受け	5.5	3.3	2.6	受部径6.2	京焼系	IV	
1373	SK13	陶器	中碗			5.4			京・信系	IV	
1374	SK13	陶器	向付			5.0			志野	-	鉄軸掛け分け。
1375	SK13	陶器	小碗	丸形	9.3	3.0	4.9		肥前	IV	
1376	SK13	陶器	中碗	平形	12.3	4.1	5.0		肥前	IV	
1377	SK13	陶器	中碗	腰張形か	10.0				肥前系	-	上野・高取系の可能性あり。
1378	SK13	陶器	大皿	折筋形	28.5	8.0	7.8		肥前	III	三島手。
1379	SK13	陶器	大皿	木盆形		11.7			肥前	-	
1380	SK13	陶器	中碗	甕形	12.1				不明	-	国産。17世紀代。
1381	SK13	陶器	片口		21.8				肥前	-	
1382	SK13	陶器	灯明受皿		8.6	4.2		受部径11.3	在地系	-	
1383	SK13	陶器			5.8			頸部径3.0	肥前	-	17世紀後半。
1384	SK13	陶器	中碗			4.4			肥前	-	
1385	SK13	陶器	大甕		48.6				肥前	-	
1386	SK13	陶器	大鉢	腰張形	15.5	10.2	10.5		不明	-	口縁部・腰部外面にφ1.2cmのボタン状装飾。
1387	SK13	陶器	大鉢	植木鉢	30.0	16.7	17.0		肥前	-	底部にφ0.4cmの穿孔1。胴部に重ね焼き痕。
1388	SK13	陶器	擂鉢		29.0				肥前	-	
1389	SK13	陶器	擂鉢		30.4				備前	-	スリ目単位10本。
1390	SK13	陶器	擂鉢		33.6				備前	-	スリ目単位8本。
1391	SK13	陶器	擂鉢		28.6				須佐	-	
1392	SK13	陶器	擂鉢			13.0			須佐	-	底部外面にカンナ痕。
1393	SK13	磁器	紅猪口	菊花形	4.8	1.8	1.5		肥前	IV	
1394	SK13	磁器	小壺	端反形	6.1	2.8	4.1		肥前	II-2	白磁。外面に縦溝。
1395	SK13	磁器	小碗	端反形	9.1	3.3	4.3		肥前	II-2	高台無釉。外面に「寿」文。
1396	SK13	磁器	小碗	丸形	8.2	3.0	4.4		肥前	IV	
1397	SK13	磁器	小碗	腰張形					肥前	IV	
1398	SK13	磁器	中碗	浅半球形	10.3				肥前	IV	氷裂文・萩文。
1399	SK13	磁器	中碗	浅半球形	10.6	5.1	5.6		肥前	IV	菊花文。高台内に「福」銘。
1400	SK13	磁器	中碗	丸形	11.8				肥前	-	色絵。
1401	SK13	磁器	中碗		13.6				中国	-	漳州窯系。
1402	SK13	磁器	中碗	腰張形		5.0			肥前	II-2	高台に砂目痕。
1403	SK13	磁器	中碗	腰張形	9.6	5.0	7.0		肥前	II-2	高台に砂目痕。
1404	SK13	磁器	中碗	半筒形	7.6				肥前	IV	
1405	SK13	磁器	蓋物蓋	かえり径11.8 外径13.5					肥前	IV	
1406	SK13	磁器	五寸皿	底広		7.5			肥前	IV	手描き五弁花文。高台内に「福」銘。
1407	SK13	磁器	五寸皿	丸形底広	13.0	8.6	4.0		肥前	IV	青磁。口錆あり。
1408	SK13	磁器	五寸皿	丸形底広	14.7	9.0	4.1		肥前	IV	蛇ノ目凹型高台。高台内に「福」銘。
1409	SK13	磁器	小壺		7.4				肥前	IV	
1410	SK13	磁器	中碗	半筒形	8.1	3.8	6.8		肥前	IV～V	外青磁。口縁端部内面に四方櫻文。
1411	SK13	磁器	香炉か			7.4			肥前	IV	蛇ノ目凹型高台。
1412	SK13	磁器	香炉蓋か					厚0.6	肥前	-	φ1.6～2.0cmの穿孔。
1413	SK13	土師器	皿(中)	京都系	12.0		2.5		-	-	白色系。ナデ上げ逆「く」字状。ナデによる凹線状圈線。
1414	SK13	土師器	皿(中)	京都系	12.7	6.3	1.8-2.4		-	-	白色系。ナデ上げ逆「く」字状。ナデによる凹線状圈線。油煙痕あり。
1415	SK13	土師器	皿(小)	京都系	9.6	3.0	2.1		-	-	白色系。圈線なし。内面中央に指圧痕。
1416	SK13	土師器	皿(大)	京都系	16.0	11.5	2.5		-	-	白色系。ナデによる凹線状圈線。スス付着。
1417	SK13	土師器	皿(小)	在地系	8.9	6.1	1.6		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1418	SK13	土師器	皿(小)	在地系	9.4	4.7	2.2		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
1419	SK13	土師器	皿(中)	在地系	10.2	6.0	2.1		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1420	SK13	土師器	皿(中)	在地系	11.1	7.5	2.1-2.5		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1421	SK13	土師器	皿(中)	在地系	11.2	7.2	2.3		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1422	SK13	土師器	皿(中)	在地系	11.8	7.4	2.3-2.5		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
1423	SK13	土器	火鉢		30.7	23.5	9.3		在地系	-	外面にスス付着。
1424	SK13	土器	火鉢			23.8			在地系	-	外面にスス付着。
1442	SD05	陶器	中碗	端反形	11.8	3.9	6.8		肥前	IV	刷毛目塗り。高台に砂目痕。
1443	SD05	陶器	擂鉢		29.4				須佐	-	スリ目単位8～9本。
1444	SD05	磁器	五寸皿	丸形底広	13.2	8.2	2.8		肥前	IV	
1445	SD05	磁器	蓋物蓋	小形	かえり径6.0 外径7.8				肥前	IV	頭部部分の残存。
1446	SD05	磁器	水滴	鶏形					肥前	III	白磁。朝鮮の模倣。
1447	SD05	磁器	小壺	卵形	7.8				肥前	IV	白磁。朝鮮の模倣。
1448	SK15	陶器	急須蓋		11.0	4.6	3.3	つまみ径1.4	肥前	-	底部は回転糸切り。
1449	SK15	陶器	擂鉢		25.9				肥前	-	
1450	SK15	陶器				7.0		胴部径14.0	肥前	-	高台が付く。底部～高台無釉。
1451	SK15	磁器	中碗	丸形	11.0	4.2	5.8		肥前	III	
1452	SK14	陶器	中碗		14.8				在地系	-	織部風を目指した復興織部か。
1455	SK18	陶器	中鉢	丸形	20.2	9.2	11.2		肥前	IV	見込みに胎土目痕。
1456	SK19	磁器	薄手酒杯	浅半球形	7.4	3.0	3.5		肥前	V	高台に砂目痕。
1457	SK19	磁器	中碗	半球形	10.1				京・信系	-	
1458	SK19	磁器	五寸皿	丸形底広	9.0				肥前	IV	蛇ノ目凹型高台。高台内に「福」銘。漆継ぎ痕。
1459	SK20	陶器			4.4				肥前	III～IV	
1460	SK20	陶器			9.4				肥前	-	見込みに胎土目痕。
1461	SK20	磁器			4.6				肥前	-	青磁。底部外面釉剥ぎ。19世紀代。
1462	SK20	土師器	皿(小)	在地系	7.0	3.3	1.4-1.6		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1463	SK20	土師器	皿(中)	在地系	12.1	5.8	2.6		-	-	底部は回転糸切り。スス付着。
1465	SK22	陶器	中碗	端反形	11.0	4.8	6.1		在地系	-	外面に宝珠文。
1466	SK22	陶器		かえり径19.5 外径21.6					布志名	-	青地釉。
1473	SK24	磁器	小皿	菊花形	10.3	5.7	2.3		肥前	IV	五弁花文。高台内に「福」銘。
1474	SK24	磁器	小鉢	方形		7.1			肥前	IV	高台内に「富貴長春」銘。
1476	SK25	土師器	皿(中)	京都系	11.4	4.5	2.7		-	-	白色系。

第5章 殿町 279番地外調査（南屋敷）の概要

遺物番号	遺構名	種別	器種	器形	法量(cm)				生産地	九陶 編年	備考
					口径	底径	器高	その他			
1477	SK25	土師器	皿(中)	京都系	11.4	4.4	2.7		-	-	白色系。
1478	SK25	土師器	皿(中)	京都系	11.4	4.8	2.9		-	-	白色系。ナデによる圈線なし。
1479	SK25	土師器	皿(中)	京都系	11.0	6.0			-	-	白色系。ナデ上げ逆「く」字状。
1480	SK25	土師器	皿(中)	京都系	11.4	4.6	2.6		-	-	白色系。ナデによる圈線。
1481	SK25	土師器	皿(中)	京都系	12.0	5.2	2.6		-	-	白色系。ナデによる凹線状圈線。
1482	SK25	土師器	皿(中)	京都系	11.6	4.8	2.3		-	-	白色系。工具による圈線。
1486	第2遺構面 遺構外	陶器	中鉢	浅丸形	23.3				須佐	-	
1487	第2遺構面 遺構外	陶器	中鉢か	浅丸形	19.8	9.4	6.2		肥前	IV	見込みに貝目痕。オオクサノ窯か。
1488	第2遺構面 遺構外	陶器	小瓶		3.1				肥前		
1489	第2遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		28.0			片口径32.0	備前	-	17世紀前半～中頃。
1490	第2遺構面 遺構外	磁器	小杯	腰張形	5.1	2.4	2.8		肥前	-	赤絵。
1491	第2遺構面 遺構外	磁器	中碗	丸形	10.6				肥前	IV	青磁染付。
1492	第2遺構面 遺構外	磁器	中碗	丸形	11.2	4.8	5.8		肥前	IV	白磁。
1493	第2遺構面 遺構外	磁器	中碗	腰張形	12.3	5.7	8.1		肥前系	IV	陶胎染付。
1494	第2遺構面 遺構外	磁器	徳利	瓢箪形	4.7	5.4	12.8		肥前	IV	脚3、「東屋山水文」。高台内に「大門成化」銘。
1495	第2遺構面 遺構外	磁器	碗蓋	杉形	9.2		3.0	つまみ径3.9	肥前	IV	外青磁。
1496	第2遺構面 遺構外	磁器	蓋物蓋	小形	かえり径5.0	外径6.0	1.8	つまみ径0.6	肥前	IV～V	
1497	第2遺構面 遺構外	磁器	五寸皿	変形	21.1	13.2	2.7		肥前	IV	高台内に放射状カンナ痕。口錆あり。
1498	第2遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	9.6	3.6	2.3-2.5		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1499	第2遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	9.9	3.5	2.3		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
1500	第2遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	9.4	5.6	2.3		-	-	赤色系。底部は静止糸切り。
1501	第2遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	在地系	10.2	7.0	1.9		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1502	第2遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	在地系	11.0	6.7	2.2-2.5		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1503	第2遺構面 遺構外	土器	焼塙壺蓋	逆凹字形	6.8		2.1	外径8.2	在地系	-	内面に布目痕。
1504	第2遺構面 遺構外	瓦質			20.0	11.0	2.5		-	-	外面にスス付着。
1505	第2遺構面 遺構外	土器	焙烙						在地系	-	外面にスス付着。
1524	第2遺構面覆土	陶器	小碗	端反形	9.0	3.5	5.1		京・信系	-	高台内に墨書あり。
1525	第2遺構面覆土	陶器	中碗	杉形	9.4	3.1	4.9		京・信系	-	
1526	第2遺構面覆土	陶器	中碗	半球形	8.8	3.7	5.2		京・信系	-	
1527	第2遺構面覆土	陶器	中碗	浅半球形	11.6				瀬戸、美濃	-	18世紀後半。
1528	第2遺構面覆土	陶器	中碗	腰折形	11.8				京・信系	-	菊花文。
1529	第2遺構面覆土	陶器	中碗	半球形			5.6		瀬戸、美濃	-	高台内にスタンプ「○」。
1530	第2遺構面覆土	陶器	中碗	杉形	10.2	4.6	7.1		不明	-	
1531	第2遺構面覆土	陶器	中碗	輪轂形	12.5	5.2	8.2		在地系	-	外面にスタンプ「楽山」。
1532	第2遺構面覆土	陶器	蓋物蓋		かえり径7.7	外径9.7	2.0		京・信系	-	
1533	第2遺構面覆土	磁器	碗		2.3	0.9	1.2		肥前	-	
1534	第2遺構面覆土	磁器	小杯	腰折形	5.2	3.6	1.9		肥前	-	白磁。
1535	第2遺構面覆土	磁器	小杯	端反形	6.5	2.8	4.2		肥前	IV	白磁。型紙白絵。
1536	第2遺構面覆土	磁器	小碗	端反形	8.1	3.8	5.1		肥前	IV	白磁。外面「扇面散らし」。
1537	第2遺構面覆土	磁器	小碗	吳器形	8.0	3.7	4.9		肥前	IV	白磁。
1538	第2遺構面覆土	磁器	中碗	丸形	9.9	4.9	6.5		肥前	IV	白磁。漆継ぎ痕。
1539	第2遺構面覆土	磁器	大碗	丸形	12.6	4.9	8.0		肥前系	III	白化粧の陶胎染付。
1540	第2遺構面覆土	磁器	香炉	浅筒形	10.6	6.3	6.7		肥前	-	青磁。高台に窯道具付着。蛇ノ目凹型高台。
1541	第2遺構面覆土	磁器	極小皿	丸形底狭	8.2	3.7	2.3		肥前	IV	白磁。型打陽刻。
1542	第2遺構面覆土	磁器	仏花瓶	盤口形				胴部径7.2	肥前	IV	青磁。漆継ぎ痕。
1543	第2遺構面覆土	磁器	香炉か		27.6			胴部径28.8	肥前	-	丁寧な絵付け。漆継ぎ痕。
1544	第2遺構面覆土	磁器	壺か建水		8.0	8.6	15.6		肥前	IV	陶胎染付。蓋が付く壺か。
1545	第2遺構面覆土	磁器	人形	鳥形	6.5×13.7				肥前	IV	色絵。
1546	第2遺構面覆土	磁器	水滴		5.9×5.9				肥前	IV	色絵。
1547	第2遺構面覆土	磁器	水滴	変形	3.0×5.2				肥前	-	白磁か。水鳥の頭部を模したもの。
1548	第2遺構面覆土	磁器	鼠形		1.8×2.5				肥前	-	白磁。鼠を象ったもの。
1549	第2遺構面覆土	土師器	皿(中)	京都系	11.7	5.0	2.8		-	-	白色系。ナデ上げ「の」字状。圈線なし。油煙痕。
1550	第2遺構面覆土	土師器	皿(小)	京都系	8.8-9.5	4.5	2.1-2.4		-	-	赤色系。2枚重ね。底部は回転糸切り。油煙痕。
1551	第2遺構面覆土	土師器	皿(小)	在地系	8.0	4.1	1.8		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1552	第2遺構面覆土	土師器	皿(小)	在地系	7.3	5.3	1.7		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
1553	第2遺構面覆土	土師器	皿(小)	在地系	8.5	4.8	1.7		-	-	白色系。底部は回転糸切り。スス付着。
1554	第2遺構面覆土	土師器	皿(小)	在地系	9.0	4.5	1.7-1.9		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。別個体の粘土付着。スス付着。
1555	第2遺構面覆土	土師器	皿(小)	在地系	9.8	4.8	2.0		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1556	第2遺構面覆土	土師器	皿(小)	在地系	9.4	5.2	1.8		-	-	白色系。底部は回転糸切り。外面スス付着。
1557	第2遺構面覆土	土師器	皿(小)	在地系	9.7	5.4	2.0		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1558	第2遺構面覆土	土師器	皿(小)	在地系	7.8	4.4	1.0		-	-	白色系。見込みにスタンプ「大」(メーカー印か)。底部は回転ヘラ削り調整。
1559	第2遺構面覆土	土師器	皿(中)	在地系	10.5	5.6	2.0		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1560	第2遺構面覆土	土師器	皿(中)	在地系	11.0	7.4	2.2		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
1561	第2遺構面覆土	土師器	皿(中)	在地系	10.6	7.0	2.2-2.5		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1562	第2遺構面覆土	土器	焼塙壺蓋	逆凹字形	5.7		1.0	外径6.4	在地系	-	内面に布目痕。
1563	第2遺構面覆土	土器	焼塙壺蓋	逆凹字形	6.3		1.7	外径8.0	在地系	-	内面に布目痕。
1564	第2遺構面覆土	土器	焼塙壺蓋	逆凹字形	6.4		1.9	外径7.9	在地系	-	内面に布目痕。
1565	第2遺構面覆土	土器	焼塙壺蓋	逆凹字形	6.8		2.4	外径8.7	在地系	-	内面に布目痕。
1566	第2遺構面覆土	土器	焼塙壺身	コップ形	5.4				-	-	
1567	第2遺構面覆土	土器	焼塙壺身	コップ形	5.0		7.0	外径6.6	在地系	-	
1568	第2遺構面覆土	土器	焼塙壺身	コップ形	5.8		8.7	外径7.2	在地系	-	
1569	第2遺構面覆土	土器	焼塙壺身	コップ形	5.8			外径7.2	在地系	-	
1570	第2遺構面覆土	土器	焼塙壺身	コップ形	5.0			外径7.2	在地系	-	
1571	第2遺構面覆土	土器	火もらい			8.9		胴部径9.5	在地系	-	上方に長方形窓、穿孔3。脚3。外面に細い工具で刺した無数の穴あり。装飾か。
1597	SB08内 磐石1	磁器	中碗		12.2				中国	-	精製。漳州窯系。
1599	SK28	陶器	中碗	吳器形	10.9	4.3	7.4		肥前	IV	外面釉掛け分け。
1603	SK29	陶器	火鉢か焜炉						上野・高取系	-	内面に剥離痕。
1605	SK31	陶器	蓋物蓋	かえり径6.9	外径9.4				肥前	-	17世紀代。
1608	SK35	磁器	小碗	腰張形	7.4	2.8	5.2		肥前	-	折枝梅文。1610～30年代。
1609	SK37	陶器	中碗	腰張形か		5.0			肥前	II	高台まで施釉。高台内深浅い。漆継ぎ痕。
1610	SP02	磁器	小皿	変形	4.7×4.0				肥前	IV	白磁。芋の葉を象ったもの。

遺物番号	遺構名	種別	器種	器形	法量(cm)				生産地	九陶 編年	備考
					口径	底径	器高	その他			
1611	SK34	瓦質	火消壺		9.6			胴部径18.3	在地系	-	内面にスス付着。
1613	SK36	磁器	中碗	腰張形	10.4				肥前	III	菊花文。
1614	SK36	磁器	水滴		3.7×4.4				肥前	-	17世紀中頃。
1615	SK36	土師器	皿(中)	京都系	10.6	4.0	2.1		-	-	白色系。圏線なし。
1616	SK36	土師器	皿(中)	京都系	12.0	8.0	3.0		-	-	白色系。外面口縁部付近横ナデしないタイプ。圏線なし。油煙痕。
1617	SK36	土師器	皿(中)	京都系	12.0	5.0	2.6		-	-	赤色系。ナデ上げ逆「く」字状か。工具による圏線。油煙痕。
1618	SK36	土師器	皿(小)	京都系	8.8	5.0	1.7		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
1619	SK38	陶器				11.0			肥前系	-	在地の可能性あり。17世紀後半。
1620	SK38	磁器	中碗	端反形	12.0				中国	-	精製。清朝の流れを汲むものか。
1624	SK41	陶器	中碗	腰張形		4.3			京焼系	IV	
1625	SK41	陶器	中碗	杉形	10.5	4.2	6.9		肥前	II	
1626	SK41	陶器	擂鉢		27.8				不明	-	焼成不良。
1627	SK41	陶器	擂鉢		36.8				肥前	-	
1628	SK41	陶器	擂鉢		11.4				須佐	-	
1629	SK41	磁器	中碗	丸形	10.7	5.0	7.3		肥前	III	白磁。
1630	SK41	磁器	中碗	丸形	10.0				肥前	III	
1631	SK41	磁器	五寸皿	丸形底広	14.2	8.6	2.8		肥前	III	
1632	SK41	磁器	五寸皿	丸形	21.8				肥前	-	
1633	SK41	磁器	中皿		23.5	11.0			肥前	V	
1634	SK41	磁器	大皿						中国	-	精製。
1639	第3遺構面 遺構外	陶器	小碗			3.4			萩	-	高台明瞭。胎土目痕。
1640	第3遺構面 遺構外	陶器	中碗	端反形	12.6				肥前	II	外面鉄軸。
1641	第3遺構面 遺構外	陶器	中碗	端反形	11.4	4.4	6.6		肥前	II	高台に砂付着。
1642	第3遺構面 遺構外	陶器	小皿	丸形	12.5	4.4	2.9		肥前	I-2	見込みに胎土目痕。
1643	第3遺構面 遺構外	陶器		溝縁皿	13.0	3.1	3.2-3.5		肥前	II	見込みに胎土目痕。
1644	第3遺構面 遺構外	陶器	大甕		35.0				肥前	-	
1645	第3遺構面 遺構外	陶器	擂鉢	口縁折縁	28.8				肥前	-	
1646	第3遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		30.0	10.6	11.8		肥前	-	スリ目単位12本。
1647	第3遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		24.0	12.0	9.0		備前	-	1600~20年代。
1648	第3遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		34.0	12.0	16.1-16.7		備前	-	スリ目単位10本。片口が付く。
1649	第3遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		36.8	20.7	16.4		備前系	-	スリ目単位11本。備前の模倣品か。
1650	第3遺構面 遺構外	磁器	小坏	端反形	6.4				中国	-	精製。景德鎮窯系。
1651	第3遺構面 遺構外	磁器	小坏	丸形	6.6	2.4	4.7		中国	-	精製。景德鎮窯系。
1652	第3遺構面 遺構外	磁器	小坏	腰張形	6.4				中国	-	精製。
1653	第3遺構面 遺構外	磁器	小坏	腰張形		2.0			中国	-	精製。景德鎮窯系。
1654	第3遺構面 遺構外	磁器	大碗	丸形		4.4			中国	-	精製。
1655	第3遺構面 遺構外	磁器	小碗	浅半球形	10.2				中国	-	精製。
1656	第3遺構面 遺構外	磁器	小碗	端反形	10.0				中国	-	精製。漳州窯系。
1657	第3遺構面 遺構外	磁器	大皿	折縁形分鋸縁形	16.5				中国	-	粗製。漳州窯系。色絵。
1658	第3遺構面 遺構外	磁器	小坏	吳器形	2.5				肥前	II-1	蘭文。
1659	第3遺構面 遺構外	磁器	小碗	腰張形	6.5	3.2	4.6		肥前	III	高台内浅い。
1660	第3遺構面 遺構外	磁器	中碗	腰張形	9.4				肥前	II-2	
1661	第3遺構面 遺構外	磁器	中碗	腰張形	9.4				肥前	II-2	山辺田窯(4か7号窯)の可能性あり。
1662	第3遺構面 遺構外	磁器	中碗	端反形	10.8				肥前	III	白磁。
1663	第3遺構面 遺構外	磁器	中碗	丸形		5.0			肥前	III	高台二重圏線。
1664	第3遺構面 遺構外	磁器	中碗	筒丸形		4.0			肥前	III	
1665	第3遺構面 遺構外	磁器	中碗	丸形	11.0	4.0	7.2		肥前	II-2	高台無釉。
1666	第3遺構面 遺構外	磁器	大碗	丸形	13.5	5.1	6.2		肥前	II-2	雲気文。
1667	第3遺構面 遺構外	磁器	水滴	長橪円形	3.9×6.2		2.6		肥前	-	ドーム状。中央にφ1.0cmの注口。
1668	第3遺構面 遺構外	陶器	茶入れか		3.6				肥前	-	
1669	第3遺構面 遺構外	磁器	小瓶						肥前	-	
1670	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	11.1	4.1	2.6		-	-	赤色系。ナデ上げや逆「く」字状。圏線なし。
1671	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	11.8	4.7	2.5-2.7		-	-	赤色系。ナデによる凹線状圏線。油煙痕。
1672	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	12.1	4.9	2.2-2.8		-	-	白色系。ナデ上げ逆「く」字状。ナデによる凹線状圏線。油煙痕。
1673	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	京都系	9.2	1.3	2.1		-	-	赤色系。ナデ上げ「の」字状。圏線なし。
1674	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	12.4	6.9	2.4-2.6		-	-	白色系。外面に規則的な指頭圧痕。内面に一部スス付着。
1675	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	11.8	4.6	2.7		-	-	白色系。外面口縁辺り横ナデしないタイプ。油煙痕。
1676	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	11.6	5.2	2.4-2.8		-	-	白色系。ナデ上げ逆「く」字状。ナデによる圏線不明瞭。油煙痕。
1677	第3遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	在地系	10.7	7.0	1.8-2.2		在地系	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1678	第3遺構面 遺構外	土器	燒爐壺身	コップ形	5.8			外径6.8	在地系	-	
1679	第3遺構面 遺構外	土器	焙烙	無耳・底丸	31.0				在地系	-	外面にスス付着。
1702	第3遺構面覆土	陶器	小碗	半球形	9.3				肥前	-	
1703	第3遺構面覆土	陶器	中碗	浅半球形	10.1	3.0	4.9		肥前	IV	
1704	第3遺構面覆土	陶器	中碗	腰折形		4.7			肥前	IV	刷毛目塗り。
1705	第3遺構面覆土	陶器	中碗	天目形	10.6	5.0	8.3		肥前	II	
1706	第3遺構面覆土	陶器	火入れか					胴部径8.3	-		軟質施釉陶器。
1707	第3遺構面覆土	陶器	小壺か		5.0-5.4	5.1	6.4-7.0		備前系	-	灰釉。底部は回転糸切り。江戸初期か。
1708	第3遺構面覆土	陶器				13.0			肥前	-	
1709	第3遺構面覆土	陶器				12.4			-		見込みにスリ目。
1710	第3遺構面覆土	陶器	大甕		32.5			胴部径45.0	肥前	-	内面に同心円状叩き痕。
1711	第3遺構面覆土	磁器	小碗	腰張形	6.6	2.5	4.1		中国	-	精製。白磁。漆継ぎ痕。
1712	第3遺構面覆土	磁器	小碗	平形	7.0	2.2	4.0		中国	-	精製。景德鎮窯系。漆継ぎ痕。
1713	第3遺構面覆土	磁器	猪口	桶形		5.3			肥前	IV	
1714	第3遺構面覆土	磁器	中碗	浅半球形		4.4			肥前	IV	高台内に「福」銘。
1715	第3遺構面覆土	磁器	中碗			4.7			中国	-	精製。漳州窯系。見込みに「寿」。高台内に「太明成化」銘。
1716	第3遺構面覆土	磁器	中碗	丸形	11.6	4.5	7.2		肥前	II-2	高台に砂付着。
1717	第3遺構面覆土	磁器	中碗	丸形	10.0	4.8	8.4		肥前	II-2	高台無釉。
1718	第3遺構面覆土	磁器	中碗	丸形	11.0	4.4	6.2		肥前	II-2	

第5章 殿町279番地外調査（南屋敷）の概要

遺物番号	遺構名	種別	器種	器形	法量(cm)			生産地	九陶 編年	備考
					口径	底径	器高			
1719	第3遺構面覆土	磁器	中碗	浅半球形	9.9			肥前	IV	コンニャク印判。漆継ぎ痕。
1720	第3遺構面覆土	磁器	中碗	丸形	11.0			肥前	IV	
1721	第3遺構面覆土	磁器	中碗	半筒形	8.5	5.2	7.3	肥前	II-2	高台に砂付着。
1722	第3遺構面覆土	磁器	中碗	腰張形	12.4	4.8	5.2	肥前	III	高台内に「福」銘。
1723	第3遺構面覆土	磁器			7.6			胴部径11.7	III	青磁染付。菊花文。
1724	第3遺構面覆土	磁器	香炉		14.2	6.4	8.3	肥前	-	青磁。
1725	第3遺構面覆土	磁器						肥前	-	鉄釉地窓絵貼り付け。
1726	第3遺構面覆土	磁器	中碗	浅半球形	11.4	4.6	5.5	肥前	III	高台内に「太明成化年製」銘。
1727	第3遺構面覆土	磁器	小皿	丸形底広	12.4	7.2	2.8	中国	-	精製。漳州窯系。見込みに「寿」文。
1728	第3遺構面覆土	磁器	小皿	玉縁形	9.6	5.0	2.3		V	外面に源氏香文。
1729	第3遺構面覆土	磁器	五寸皿	端反形	14.6	5.5	3.6	肥前	II-2	菊花文。
1730	第3遺構面覆土	磁器	大皿	丸形		12.4		肥前	-	青磁。蛇ノ目凹型高台。
1731	第3遺構面覆土	磁器	大皿	端反形	26.0			肥前	III	白磁。型打陽刻。漆継ぎ痕。
1732	第3遺構面覆土	土器	灯明皿	中形	11.0	8.2	2.3	在地系	-	底部内面にスス付着。
1733	第3遺構面覆土	土器	燒塗壺蓋	逆凹字形	6.0		2.0	外径7.5	在地系	-
1734	第3遺構面覆土	土器	燒塗壺身	コップ形	5.8		5.7	外径6.3	在地系	-
1758	SD07	磁器	小杯	端反形	6.7	2.4	7.0	肥前	II-2	高台無釉。砂付着。
1759	SD07	磁器	中皿か		10.0			肥前	-	色絵。
1763	SK42	磁器	小杯	腰張形	5.2	2.5	3.6	肥前	-	瑠璃釉。墨はじき技法。
1764	SK42	磁器	猪口	端反形	7.1	3.4	4.6	肥前	II-2	高台に砂付着。
1765	SK42	土器	釜		3.8			-	-	外面にスタンプあり。底部は回転糸切り。
1766	SK42	磁器	人形		7.4			肥前	-	色絵。濁手。底部に墨書きあり。
1768	SK43	陶器	中碗	丸形		4.3		肥前	II	高台に砂目痕。
1769	SK43	陶器	中碗	呉器形		4.8		肥前	III	
1770	SK43	陶器	中碗	貞器形	11.1	4.8	7.5	肥前	III	
1771	SK43	陶器	中碗	腰張形	9.2	4.5	6.9	肥前	IV	刷毛目塗り。
1772	SK43	陶器		底狭	13.7	4.5	3.6	肥前	III	蛇ノ目釉剥ぎ。
1773	SK43	陶器			8.7			肥前か	-	見込みに胎土目痕。
1774	SK43	陶器	擂鉢		30.0			肥前	-	スリ目单位10本。
1775	SK43	磁器	小碗	丸形	8.8	3.2	4.6	肥前	IV	高台内に「太明成化」銘。
1776	SK43	磁器	小碗	腰張形	8.8	5.2	6.1	肥前	IV	色絵。
1777	SK43	磁器	中碗	丸形	11.0	4.5	6.0	肥前	III	五弁花文。高台内に「太明成化年製」銘。
1778	SK43	磁器	大碗	浅半球形	12.4	4.4	5.7	肥前	III	
1779	SK43	磁器	蓋	蓋子蓋	かえり径8.7	外径10.6		肥前	III	
1780	SK43	磁器	小皿	丸形底狭		3.1		肥前	II-2	菊花文。漆継ぎ痕。
1781	SK43	磁器	壺か		7.5			胴部径9.4	肥前	IV
1782	SK43	磁器	小鉢か	腰張形	10.0			肥前	II-2	
1783	SK43	磁器	香炉		10.7	6.7	7.0	肥前	III	青磁。蛇ノ目凹型高台。
1784	SK43	磁器	中鉢	腰張形		7.4		肥前系	IV	青磁。蛇ノ目凹型高台。
1785	SK43	磁器	中瓶	徳利形	6.0	7.1	21.0	肥前	III	外面に網目文。
1786	SK43	磁器	五寸皿	丸形底狭	13.1	5.4	3.1	肥前	II-2	初期伊万里。鶴文。高台に砂付着。
1787	SK43	磁器	大皿	折縁形	36.0	9.5	10.0	肥前	II-2	初期伊万里。菊花文。高台に砂付着。
1788	SK43	土師器	皿(中)	在地系	10.9	5.8	2.6	-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1789	SK43	土師器	皿(中)	在地系	11.2	5.3	2.1	-	-	白色系。底部は回転糸切り。
1790	SK43	土師器	皿(中)	在地系	11.2	7.4	2.4	-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1820	SK44	陶器	中碗	丸形	11.3			肥前	III	
1821	SK44	陶器	中碗	呉器形		4.7		肥前	III	
1822	SK44	陶器	小碗	腰折形	11.1			瀬戸・美濃	-	18世紀後半。
1823	SK44	陶器	鬢型		3.7			在地系	-	
1824	SK44	炻器	小瓶	へこかん形肩張	2.4			備前系か	-	
1825	SK44	陶器	大皿	折縁形	30.5	11.6	8.1	肥前	III	刷毛目塗り。見込みに胎土目痕。
1826	SK44	陶器	擂鉢		33.0	13.2	12.6	肥前	-	備前系の可能性あり。
1827	SK44	陶器	擂鉢		29.0	10.6	12.1	須佐	-	スリ目单位7本。
1828	SK44	磁器	小杯	丸形	6.0	2.7	3.8	肥前	IV	
1829	SK44	磁器	猪口	端反形	7.4	3.2	4.8	肥前	-	白磁。
1830	SK44	磁器	中碗	浅半球形	10.2			肥前	III	
1831	SK44	磁器	中碗	筒丸形	8.5			肥前	-	口銷あり。外面に網目文。漆継ぎ痕。
1832	SK44	磁器	中碗	丸形		4.7		肥前	II-2	高台に砂付着。
1833	SK44	磁器	火入か香炉		7.0			肥前	IV	蓮華唐草文。
1834	SK44	磁器	中碗	輦輪形	10.0			肥前	-	白磁。向付。口銷あり。
1835	SK44	磁器	小鉢か	八角形	9.5			肥前	III	色絵。
1836	SK44	磁器	中碗	端反形	12.0	4.6	6.2	肥前	III	焼成不良。色絵。高台に砂付着。
1837	SK44	磁器	蓋物	半筒形	11.2	7.6	9.3	肥前	IV	
1838	SK44	磁器	五寸皿	丸形底狭	14.2	5.8	2.8	肥前	-	
1839	SK44	磁器	小瓶	らっきょう形				肥前	IV	漆継ぎ痕。
1840	SK44	土師器	皿(中)	在地系	10.3	6.1	2.1-2.5	-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕、灯芯痕。
1841	SK44	土師器	皿(中)	在地系	10.9	5.8	2.4	-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1842	SK44	土師器	皿(中)	在地系	12.0	6.0	2.7-3.0	-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1843	SK44	土師器	皿(中)	在地系	10.8	6.0	2.8-3.1	-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1858	SK45	陶器	中碗	腰張形	11.8			肥前	III	
1859	SK45	陶器	中碗	腰張形	11.2			肥前	IV	
1860	SK45	磁器	中碗	丸形	11.2	4.5	5.9	肥前	III	高台に砂付着。
1861	SK45	磁器	合子蓋か	5.4×4.1				肥前	-	17世紀代。
1862	SK45	磁器	中皿	丸形底広	13.9	8.4	3.5	肥前	-	高台に砂付着。漆継ぎ痕。
1863	SK45	磁器	人形	9.7×5.5				肥前	-	笹竹を抱く猫のモチーフか。
1864	SK45	土師器	皿(中)	在地系	10.4	6.0	2.2	-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1865	SK45	土師器	皿(小)	在地系		5.0		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
1873	SK46	陶器	中碗	腰張形	11.1			肥前	III	
1874	SK46	陶器	片口	口縁切込丸形	20.0			肥前	-	
1875	SK46	磁器	小杯	丸形		2.4		肥前	III	高台内に「太明」銘。
1876	SK46	磁器	中碗	半球形	10.0	4.8	6.3	肥前	III	高台内に「太明成化年製」銘。
1877	SK46	土師器	皿(中)	在地系	10.2	5.2	2.6	-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1878	SK46	土師器	皿(中)	在地系	10.3	5.6	2.4	-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1879	SK46	土師器	皿(中)	在地系	11.1	5.4	2.6	-	-	白色系。底部は回転糸切り。内外面にスス付着。
1884	SK47	陶器	中皿	折縁形	18.8	7.0	4.6	肥前	-	

遺物番号	遺構名	種別	器種	器形	法量(cm)				生産地	九・陶 編年	備考
					口径	底径	器高	その他			
1885	SK47	磁器	小壺	端反形	6.4	3.0	4.3		肥前	IV	白磁。
1886	SK47	土師器	皿(中)	京都系	11.5	4.5	2.3-2.9		-	-	白色系。ナデ上げ逆「く」字状。工具による囲線後ナデ上げ2回。油煙痕。
1887	SK47	土師器	皿(中)	在地系	11.1	6.9	2.3		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1894	SK48	陶器	中碗	眞器形	10.9	4.2	7.2		肥前	III	
1895	SK48	陶器	中碗	眞器形	11.4	4.6	7.6		肥前	III	
1896	SK48	陶器	中碗	半筒形	9.8				肥前	III	
1897	SK48	陶器	中鉢		21.3				肥前	III	刷毛目塗り。
1898	SK48	陶器	大皿	折縁形	28.4				肥前	III	刷毛目塗り。
1899	SK48	磁器	小壺	丸形	6.2	3.0	4.1		肥前	III	外面「遠山」。
1900	SK48	磁器	小碗	端反形	6.8	3.6	4.7		肥前	III	白磁。
1901	SK48	磁器	小碗	端反形	8.0				肥前	-	白磁。
1902	SK48	磁器	中碗	丸形	12.0	4.9	7.0		肥前	III	色絵。
1903	SK48	磁器	大碗	浅半球形	13.4	4.7	6.9		肥前	III	見込み「荒磯文」。
1904	SK48	陶器	五寸皿	菊花形	14.3				肥前	II-2	
1905	SK48	土師器	皿(小)	京都系	7.2	3.1	1.7		-	-	赤色系。ナデ上げなし。
1906	SK48	土師器	皿(中)	在地系	10.0	5.9	1.9-2.2		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1907	SK48	土師器	皿(中)	在地系	10.6	5.7	1.9-2.2		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1908	SK48	土師器	皿(中)	在地系	10.6	7.0	2.3		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1909	SK48	土師器	皿(中)	在地系	10.9	5.4	2.9		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1910	SK48	土師器	皿(中)	在地系	11.4	6.5	1.8-2.0		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。外端部にスス付着。
1911	SK48	土師器	皿(中)	在地系	11.3	6.1	2.5		-	-	赤色系。内面底部に墨書きあり。底部は回転糸切り。油煙痕。
1912	SK48	土師器	皿(中)	在地系	10.8	6.2	3.2		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。底部中央に指頭圧痕。油煙痕。
1913	SK48	土器	焼塙蓋身	筒形	5.6	3.8	8.8		在地系	-	
1932	SK50	陶器	中碗				5.8		肥前	III	高台に砂付着。
1933	SK50	磁器	小壺	腰張形	6.4	2.2	3.6		中国	-	精製。景德鎮窯系。高台内無釉。
1934	SK50	磁器	中碗	丸形	11.3	4.4	7.0		肥前	II-2	
1935	SK50	磁器	中皿		25.2				肥前	III	白磁。口錆あり。漆緋ぎ痕。
1936	SK50	磁器	花瓶か					胴部径5.4	肥前	IV	
1937	SK50	磁器	花瓶か					胴部径10.4	肥前	IV	
1938	SK50	土師器	皿(中)	京都系		6.8			-	-	白色系。
1939	SK50	土師器	皿(小)	在地系	9.0	6.2	1.2		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
1940	SK50	土師器	皿(中)	在地系	12.4	7.8	2.3		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1941	SK50	土師器	皿(中)	在地系	11.0	6.4	2.0		-	-	白色系。底部は回転糸切り。油煙痕。
1992	SK53	陶器			9.3				肥前	-	上野・高取系の可能性あり。
1993	SK53	陶器						頸部径7.1	肥前	-	
1994	SK53	磁器	中碗	丸形	10.4				肥前	II-2	
1995	SK53	磁器	中碗	半筒形					肥前	-	
1996	SK54	陶器							志野	-	
1998	SK54	磁器	大碗	丸形		6.2			肥前	IV	五弁花文ぐずれ。
2003	SK58	陶器	小壺	茶入れか	4.2	5.0	7.8		不明	-	
2004	SK58	磁器	小壺	端反形	5.8	2.6	3.9		肥前	-	高台に砂付着。
2012	SK59	磁器	猪口	端反形	7.3	3.6	5.1		肥前	-	型紙白絵。
2014	SK60	陶器	中碗	腰張形	10.4	4.3	6.7		瀬戸・美濃	-	
2015	SK60	磁器	中碗	浅半球形	10.0	4.1	5.2		肥前	IV	
2016	SK60	土器	焼塙蓋	逆凹字形	7.0	8.2	1.9		在地系	-	内面に布目痕。
2017	第3-1遺構面 遺構外	陶器	中碗	吳器形か		4.2			肥前	II	高台が高い。
2018	第3-1遺構面 遺構外	陶器	中碗	腰張形		5.6			肥前	IV	内面に絵付。
2019	第3-1遺構面 遺構外	陶器	中碗	腰張形	12.0				瀬戸・美濃	-	
2020	第3-1遺構面 遺構外	陶器			2.0×5.0				京焼系	-	
2021	第3-1遺構面 遺構外	陶器	大皿			11.4			肥前	III	二彩。見込みに砂目痕。
2022	第3-1遺構面 遺構外	陶器	大甕					胴部径34.5	肥前	-	外間に縄状突帯2条。内面に格子目叩き痕。17世紀後半。
2023	第3-1遺構面 遺構外	磁器	小壺	端反形	7.3	2.9	3.0		肥前	II	高台内無釉。
2024	第3-1遺構面 遺構外	磁器	小壺	端反形	6.7	2.7	5.0		肥前	IV	
2025	第3-1遺構面 遺構外	磁器	小碗	浅半球形		3.0			肥前	IV	
2026	第3-1遺構面 遺構外	磁器	小碗	丸形	9.0				肥前	-	
2027	第3-1遺構面 遺構外	磁器	中碗		7.5				肥前	IV	コンニャク印判。
2028	第3-1遺構面 遺構外	磁器	大碗	浅半球形	13.0				肥前	III	
2029	第3-1遺構面 遺構外	磁器	中碗	丸形	9.4	4.4	5.6		肥前	IV	菊花文・冰裂文。
2030	第3-1遺構面 遺構外	磁器	中碗	丸形	10.2	4.8	7.2		肥前	II-2	
2031	第3-1遺構面 遺構外	磁器	中碗	丸形	11.2	4.8	7.5		肥前	IV	陶胎染付。
2032	第3-1遺構面 遺構外	磁器	小碗		3.1×2.7			厚0.3	中国	-	精製。景德鎮窯系。
2033	第3-1遺構面 遺構外	磁器	蓋物蓋		かえり径11.7	外径13.8			肥前	IV	
2034	第3-1遺構面 遺構外	磁器	蓋物蓋		かえり径15.4	外径17.0			肥前	IV	
2035	第3-1遺構面 遺構外	磁器						胴部径11.6	肥前	II-2	
2036	第3-1遺構面 遺構外	磁器	中皿	折縁形	20.5	7.4	3.4		肥前	II-2	初期伊万里。高台に砂付着。灰降りの痕跡。
2037	第3-1遺構面 遺構外	磁器	中皿	丸形底広	20.1	13.2	2.9		肥前	IV	漆継ぎ痕。
2038	第3-1遺構面 遺構外	磁器	小皿	丸形底広	10.0	5.4	2.4		肥前	III	
2039	第3-1遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	京都系	13.8	6.2	2.7		-	-	白色系。ナデによる凹線状園線。
2040	第3-1遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	9.1	6.6	1.4		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
2041	第3-1遺構面 遺構外	土師器	皿(小)	在地系	10.0	5.4	2.8		-	-	赤色系。底部は回転糸切り。
2042	第3-1遺構面 遺構外	土師器	皿(中)	在地系	11.2	7.8	2.3		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
2043	第3-1遺構面 遺構外	土器	火鉢		30.2				在地系	-	内面にスス付着。
2044	第3-1遺構面 遺構外	土器	熔炉	無耳・底丸	34.2				在地系	-	口縁端部上面に逆円錐状の穿孔。
2045	第3-1遺構面 遺構外	瓦質	土鍋						在地系	-	脚部にφ0.6cmの穿孔。
2046	第3-1遺構面 遺構外	土器	五徳		7.2×2.8				在地系	-	端部を折り曲げる。
2049	SD01南側裏込	陶器	大皿			9.7			上野・高取	-	
2050	SD01南側裏込	陶器	擂鉢			10.4			不明	-	スリ目単位8本。
2051	SD01南側裏込	磁器	小皿	丸形	9.8				中国	-	精製。漳州窯系。
2052	SD01南側裏込	磁器							中国	-	精製。景德鎮窯系。
2053	SD01南側裏込	磁器	大皿	鏽綠形	32.4				肥前	II-2	初期伊万里。2139と同一個体。
2055	SU03	土師器	皿(小)	京都系	10.6				-	-	白色系。

第5章 殿町 279番地外調査（南屋敷）の概要

遺物番号	遺構名	種別	器種	器形	法量(cm)				生産地	九陶編年	備考
					口径	底径	器高	その他			
2056	SU03	土師器	皿(中)	京都系	11.2				-	-	白色系。
2057	SU03	土師器	皿(中)	京都系	11.4	4.2	2.3		-	-	ナデ上げ4回施す。
2058	SU03	土師器	皿(中)	京都系	11.0	4.2	2.6		-	-	圈線あり。
2059	SU03	土師器	皿(中)	京都系	11.8				-	-	白色系。ナデ上げあり。
2060	SU03	土師器	皿(中)	京都系	12.0				-	-	
2061	SU03	土師器	皿(中)	京都系	12.0				-	-	
2062	SU03	土師器	皿(中)	京都系	11.8	5.2	2.6		-	-	白色系。棒状のもので意図的に付けた圈線。
2063	SU03	土師器	皿(中)	京都系	12.6				-	-	白色系。ナデ上げ2回施す。
2064	SU03	土師器	皿(中)	京都系	12.2				-	-	
2065	SU03	土師器	皿(中)	京都系	13.0				-	-	白色系。ナデ上げ2回施す。油煙痕。
2066	SU03	土師器	皿(中)	京都系	11.0	4.0	2.2		-	-	白色系。
2067	SD09	磁器	中碗	丸形		4.9			肥前	-	高台内に「太明成化年製」銘。
2068	SD09	陶器	擂鉢		24.0				肥前	-	片口が付く。
2069	SD09	土師器	皿(中)	京都系	12.0	5.0	1.9		-	-	白色系。ナデ上げ。
2071	SK62	磁器	中碗	浅半球形	12.2				肥前	III	
2072	SK63	土師器	皿(小)	京都系	6.4	1.9	1.4-2.3		-	-	白色系。ナデ上げ「の」字状。圈線なし。
2075	SK64	陶器	擂鉢		21.9	9.0	10.4		須佐	-	耳たぶ状口線。17世紀代。胎土目痕。
2087	SK65	陶器	中碗	半筒形	9.5	5.0	8.4		肥前	-	高台に砂付着。1650年代。
2094	SK66	磁器	中碗			4.0			肥前	-	色絵。五弁花文。高台内に「時」銘。
2098	SD10	陶器	小坏	丸形	7.0	3.4	3.7-4.0		肥前	I-2	底部は回転糸切り。外面に胎土目痕。
2099	SD10	陶器	中碗	呉器形		5.1			肥前	III	
2100	SD10	陶器	中碗	丸形		5.5			肥前	III	吳須絵。京焼風。
2101	SD10	磁器	小皿	丸形底狭		3.6			肥前	II-2	李朝を真似て軟質に作る。見込みに胎土目痕、高台に砂目痕。
2102	SD10	陶器							肥前	-	内面に同心円叩き痕。
2103	SD10	陶器	水甕か		30.0		5.8		肥前	-	木製の蓋を使うものか。17世紀代。
2104	SD10	磁器	中碗		12.0				中国	-	精製。
2105	SD10	磁器	中碗	浅半球形	11.1				肥前	III	
2106	SD10	磁器	中碗	浅半球形	14.0				肥前	III	
2107	SD10	土師器	皿(中)	京都系	13.0	5.4	2.8		-	-	白色系。外面口縁部付近に横ナデを施さず。ナデによる圈線若干残る。油煙痕。
2108	SD10	土師器	皿(小)	在地系	7.7	5.6	1.8		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
2109	SD10	土師器	皿(中)	在地系	11.0	7.0	1.8		-	-	白色系。底部は回転糸切り。
2110	SD10	土師器	皿(大)	京都系	18.2				-	-	白色系。ロクロ成形後底部辺りナデで手づくね風に見せている。ナデによる圈線若干残る。
2111	SD10	土師器	皿(大)	京都系	18.0	13.0	3.1		-	-	白色系。ロクロ成形後底部辺りナデ・指押さえで手づくね風に見せている。
2112	SD10	土師器	皿(大)	京都系	18.0	14.0	2.4		-	-	白色系。ナデによる圈線。
2113	SD10	土器	焙烙	無耳	20.2	16.0	2.5		在地系	-	
2121	SK67	磁器	小皿か						中国	-	精製。
2125	SK68	陶器	擂鉢		28.2	11.0	11.4		備前	-	片口が付く。口縁部押印あり。2206(第4遺構面SD01)と接合可。
2128	SB11内 磯石1	陶器	菊皿		10.5	6.6	3.2		志野	-	
2129	SB11内 磯石1	陶器	中皿	折縁形	15.1				肥前	I-2	絵唐津。
2130	SB11内 磯石2	陶器	小皿	稜湾形	13.3	4.2	4.1		肥前	I-2	見込みに胎土目痕。
2131	SB11内 磯石3	陶器				9.2		胸部径13.1	肥前	-	内面に同心円叩き痕。底部に砂目痕。
2132	SB11内 磯石3	陶器	大碗	丸形	13.0				中国	-	精製。漳州窯系。漆継ぎ痕。17世紀初頭。
2134	SX02	磁器	中碗	浅半球形		4.2			肥前	III	
2135	SX02	磁器	中碗	丸形		4.2			肥前	III	高台内に「太明」銘。
2136	SX02	土師器	皿(中)	在地系	12.0	6.0	2.1-2.4		-	-	底部は回転糸切り。油煙痕。スス付着。
2138	SX08	陶器	建水			6.6		胸部径10.5	備前	-	
2139	SX08	磁器	大皿	鷲縁形	32.4				肥前	II-2	初期伊万里。2053と同一個体。
2140	SK71	磁器	小碗	端反形	8.0		3.1		肥前	-	中国の可能性あり。
2141	SK71	磁器	小瓶	らっきょう形	2.1				肥前	IV	
2142	SK71	陶器	擂鉢		34.0				肥前	-	片口が付く。スリ目単位7本。
2143	SK71	陶器	擂鉢		34.0		13.3		備前	-	片口が付く。
2144	SK72	陶器	大皿か鉢			16.7			肥前	-	
2145	SK72	磁器	中碗	丸形	11.0				中国	-	精製。
2146	SK72	磁器	中碗	丸形	11.0				肥前	III	
2147	SK72	磁器	小碗	端反形	7.0				肥前	II-2	1630~40年代。
2148	SK72	磁器	中碗	丸形	11.0	4.4	7.0		肥前	II-2	高台内無釉。
2149	SK72	磁器	五寸皿	丸形底狭	13.6	6.3	3.2-3.4		肥前	II-2	口錆あり。
2150	SK72	磁器	五寸皿	端反形	14.5	5.8	3.4		肥前	II-2	菊花文。
2163	SK73	陶器	小坏			2.8			志野	-	長石釉。
2164	SK73	磁器	中碗	半球形	10.6	5.0	5.9		肥前	II-1	高台に砂目痕。
2167	SK73	磁器	中碗	浅半球形	11.7	4.6	5.3		肥前	III	高台内に「太明」銘。
2168	第3-2遺構面 遺構外	陶器	中碗	腰折形	10.4	3.8	6.5		肥前	I-2~II	
2169	第3-2遺構面 遺構外	陶器	中碗	端反形	11.4				肥前	II	
2170	第3-2遺構面 遺構外	陶器	中碗	端反形	12.1	4.5	6.6		肥前	I-2~II	
2171	第3-2遺構面 遺構外	陶器	中碗		11.9				肥前	II	
2172	第3-2遺構面 遺構外	陶器	小皿	丸形	11.3	3.8	3.4		肥前	I-2	絵唐津。見込みに胎土目痕。
2173	第3-2遺構面 遺構外	陶器	小皿	丸形	11.8	4.5	2.7		肥前	I-2	絵唐津。見込みに胎土目痕。
2174	第3-2遺構面 遺構外	陶器	片口	丸形	14.0				肥前	-	白土を塗るか。口縁帶下注口。
2175	第3-2遺構面 遺構外	陶器	小皿	方形	12.2	4.4			肥前	I-2	絵唐津。見込みに胎土目痕。
2176	第3-2遺構面 遺構外	陶器	中瓶					胸部径14.0	肥前	-	内面に同心円叩き痕。
2177	第3-2遺構面 遺構外	陶器	茶入れか		5.5	3.7	5.4-5.9		肥前	-	17世紀代。
2178	第3-2遺構面 遺構外	陶器	大皿	折湾形					肥前	I-2	絵唐津。見込みに胎土目痕。
2179	第3-2遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		21.3				不明	-	
2180	第3-2遺構面 遺構外	陶器	擂鉢		30.0		7.2		九州か	-	スリ目単位11本。口縁外帯三段、口縁内凸帯大。
2181	第3-2遺構面 遺構外	磁器	中碗	丸形	11.3				肥前	III	精製。景德鎮窯系。
2182	第3-2遺構面 遺構外	磁器	中皿	折縁形	22.0				中国	-	
2183	第3-2遺構面 遺構外	土器					13.6	5.5		-	底部は回転糸切り。

表 15 殿町 279 番地外（南屋敷）金属製品遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	材質	法量		備考
				大きさ(cm)	重量(g)	
1255	SK01	煙管(吸口)	真鍮	長6.8/小口 ϕ 0.9/口付 ϕ 0.5	8.15	口付部分を六角形状に加工。
1261	SJ01	鉄玉	鉄	ϕ 6.25～6.35	980.00	
1262	SE01	火箸か	銅	長11.8(復元推定長13.8)/ ϕ 0.25	4.66	
1282	SK06	鉄玉	鉄	ϕ 8.2	1880.00	下部に繊維が硬化したものが付着。
1310	第1遺構面 遺構外	火鉄みか	鉄	長10.4/幅5.4/厚0.4	11.37	
1311	第1遺構面 遺構外	柄杓	銅	長10.9(柄8.0/身部 ϕ 8.5)/厚0.05	32.94	
1312	第1遺構面 遺構外	古銭	銅錢	厚1.21mm	2.98	寛永通宝 1期=古寛永(1636～59)
1313	第1遺構面 遺構外	古銭	銅錢	厚1.66mm	4.49	寛永通宝 2期=(文銭)(1668～83)
1314	第1遺構面 遺構外	古銭	銅錢	厚1.40mm	3.62	寛永通宝 2期=(文銭)(1668～83)
1315	第1遺構面 遺構外	古銭	銅錢	厚1.50mm	2.61	寛永通宝 3期
1323	SB06内 磐石5	火箸か	真鍮	長12.8(復元推定長16.8)/ ϕ 0.2	2.83	
1324	SB06内 磐石6	煙管(雁首)	真鍮	長4.5/火皿 ϕ 1.0/小口 ϕ 0.9	7.99	
1356	SK08	工具か	鉄	長16.3/ ϕ 0.7	28.27	
1475	SK24	古銭	銅錢	厚1.01mm	1.95	寛永通宝 2期以降
1484	SK27	釘	鉄	長5.5/幅0.5/厚0.25	0.42	
1511	第2遺構面 遺構外	煙管(雁首)	真鍮	長4.1/火皿 ϕ 1.4/小口 ϕ 0.6	4.53	
1512	第2遺構面 遺構外	古銭	銅錢	厚1.18mm	2.77	寛永通宝 1期=古寛永(1636～59)
1513	第2遺構面 遺構外	古銭	銅錢	厚1.35mm	3.65	寛永通宝 2期=(文銭)(1668～83)
1514	第2遺構面 遺構外	古銭	銅錢	厚1.07mm	2.06	寛永通宝 3期=新寛永(1697～1747、1767～81)
1573	第2遺構面覆土	十能か	青銅	長8.5/幅6.9/厚0.2	21.81	
1574	第2遺構面覆土	煙管(吸口)	真鍮	長4.0/小口 ϕ 1.1	5.26	
1575	第2遺構面覆土	煙管(吸口)	真鍮	長6.1/小口 ϕ 1.0/口付 ϕ 0.45	5.48	
1576	第2遺構面覆土	煙管(雁首)	真鍮	長6.0/火皿 ϕ 1.7/小口 ϕ 1.2		
1577	第2遺構面覆土	煙管(雁首)	真鍮	長8.1/雁首7.4/羅字0.7		
	*竹製の羅字残存			雁首:火皿 ϕ 1.3/小口 ϕ 0.9 羅字: ϕ 0.8	8.48	錫あり。
1578	第2遺構面覆土	火箸	鉄	長26.5(銷なし長26.0)/幅1.0(銷なし ϕ 頭部0.6/胴部0.35)	34.54	
1579	第2遺構面覆土	火箸	鉄	幅1.0(銷なし ϕ 頭部0.6/胴部0.35)	39.32	
1580	第2遺構面覆土	古銭	銅錢	厚1.50mm	4.26	寛永通宝 1期=古寛永(1636～59)
1581	第2遺構面覆土	古銭	銅錢	厚1.37mm	2.92	寛永通宝 1期=古寛永(1636～59)
1582	第2遺構面覆土	古銭	銅錢	厚1.62mm	2.80	寛永通宝 2期=(文銭)(1668～83)
1583	第2遺構面覆土	古銭	銅錢	厚1.39mm	3.16	寛永通宝 3期=新寛永(1697～1747、1767～81)
1584	第2遺構面覆土	古銭	銅錢	厚0.99mm	2.27	寛永通宝 3期=新寛永(1697～1747、1767～81)
1585	第2遺構面覆土	古銭	銅錢	厚1.38mm	4.32	寛永通宝 四文銭(1768～)(明和期 11波)
1598	SB08内 磐石2	煙管(吸口)	銅	長6.7/小口 ϕ 1.0/口付 ϕ 0.3	7.41	
1600	SK28	釘	鉄	長4.1/幅0.7/厚0.3	1.37	
1604	SK30	古銭	銅錢	厚1.22mm	2.68	寛永通宝 1期=古寛永(1636～59)
1621	SK40	釘	鉄	長6.9/幅(頭部)1.2/(胴部)0.6/厚0.5	7.87	
1680	第3遺構面 遺構外	煙管(吸口)	銅	長6.7/小口 ϕ 1.25/口付 ϕ 0.35	3.64	
1681	第3遺構面 遺構外	煙管(吸口)	銅	長9.8/小口 ϕ 0.9/口付 ϕ 0.4	5.73	
1682	第3遺構面 遺構外	鎌	鉄	長9.1/幅2.6/厚0.5	31.35	
1736	第3遺構面覆土	鏡	銅	長17.2/幅9.2	141.33	表裏に銀メッキを施しているか。
1737	第3遺構面覆土	古銭	銅錢	厚1.31mm	2.33	寛永通宝 1期=古寛永(1636～59)
1738	第3遺構面覆土	古銭	銅錢	厚1.30mm	2.11	寛永通宝 1期=古寛永(1636～59)
1739	第3遺構面覆土	古銭	銅錢	厚1.48mm	2.19	寛永通宝 1期=古寛永(1636～59)
1740	第3遺構面覆土	古銭	銅錢	厚1.29mm	1.72	寛永通宝 1期=古寛永(1636～59)
1741	第3遺構面覆土	古銭	銅錢	厚1.36mm	2.95	洪武通宝 明1368)(中国銭)
1760	SD07	煙管(雁首)	真鍮	長3.5/火皿 ϕ 1.6	3.75	
1791	SK43	煙管(雁首)	真鍮	長6.9/小口 ϕ 1.2	6.62	
1844	SK44	釘	鉄	長20.0(復元推定長22.3)/幅(頭部)2.1/胴部0.6	31.09	
1845	SK44	不明	銅	長5.3/幅0.7/厚0.06	4.20	
1846	SK44	煙管(吸口)	真鍮	長5.6	5.47	
1880	SK46	火箸か		長16.5/ ϕ 0.4	10.95	
1914	SK48	釘	鉄	長2.3/幅4.0/厚0.2	5.58	
1942	SK50	釘	鉄	長5.4/幅1.3/厚0.45	2.50	
2013	SK59	飾り釘	銅	長4.3/幅1.8/厚0.7	2.76	
2048	第3-1遺構面 遺構外	煙管(吸口)	銅	長6.8/厚1.0	11.02	
2133	SB11内 磐石4	煙管(吸口)	銅	長6.5/小口 ϕ 1.0/口付 ϕ 0.4	6.12	
2166	SK75	煙管(雁首)	真鍮	長9.6/火皿 ϕ 1.5	5.40	

表 16 殿町 279 番地外（南屋敷）石製品遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	材質	法量		備考
				大きさ(cm)	重量(g)	
1253	SB01内 磐石1	将棋の駒(金将)		縦2.75/横2.0/厚0.5	2.88	「金将」の陰刻部分に墨が入る。
1308	第1遺構面 遺構外	碁石	貝	ϕ 2.0/厚0.6	3.81	黒色。
1309	第1遺構面 遺構外	紡錘車	滑石	ϕ 2.6/厚0.28	0.62	中央に ϕ 0.6cmの穿孔。
1483	SK26	砥石		長13.5/幅4.1/厚0.8	62.31	刀用。中央部分の磨り減り顕著。
1506	第2遺構面 遺構外	砥石		縦11.2/横2.9/厚1.4	79.16	刀用か。中央部分の磨り減り顕著。
1507	第2遺構面 遺構外	蛤刃石斧		長8.8/幅6.2/厚3.0	261.24	
1508	第2遺構面 遺構外	碁石	石	ϕ 2.1/厚0.45	3.19	黒色。
1509	第2遺構面 遺構外	碁石	石	ϕ 2.1/厚0.5	3.42	黒色。
1510	第2遺構面 遺構外	碁石	石	ϕ 2.4/厚0.8	6.70	白色。
1572	第2遺構面覆土	硯		縦13.4/横7.4/厚2.35	355.50	
1735	第3遺構面覆土	火打石か	玉髓	長5.3/幅5.8/厚2.2	72.26	
1767	SK42	双六の駒か	鹿骨か	ϕ 2.3/厚0.6		
1792	SK43	火打石		長3.7/幅2.5/厚2.2	20.39	
1793	SK43	落款印		縦4.9/横3.7/厚1.4	52.45	「三餐八尺」の陰刻。
1847	SK44	砥石		長4.4/幅3.5/厚0.45	10.06	刀用か。使用痕顕著。
2047	第3-1遺構面 遺構外	火打石	玉髓	長6.3/幅3.7/厚5.2	64.31	

第5章 殿町279番地外調査（南屋敷）の概要

表17 殿町279番地外（南屋敷）木簡遺物観察表

※読みの・表記は表裏の区別、○は解読不明の文字、/は改行を表す。

遺物番号	遺構名	読み	法量(cm)			木取り	備考
			長さ	幅	厚さ		
1688	第3遺構面 遺構外		25.6	1.5	0.3	柾目	
1742	第3遺構面覆土	・上田四斗入 ・五月廿三日	14.0	4.0	0.4	柾目	
1797	SK43	・二(十九)月(日)カ四〇 ・上田[]	17.7	3.1	0.3	板目	
1798	SK43	・○(塩カ)や一郎左衛門	13.3	4.7	0.4	柾目	
1799	SK43	・き〇二	24.6	2.8	0.5	柾目	
1850	SK44	・〇〇〇〇 有沢織部	31.9	2.5	0.6	柾目	
1916	SK48		16.7	3.0	0.4	柾目	
1944	SK50	・鶴ノけのつけし	20.6	1.6	0.3	柾目	
1975	SK51		22.0	4.9	0.4	柾目	
1991	SK52	・おわひせ	11.8	2.5	0.3	板目	
2081	SK64	・阿之助	32.4	3.4	0.5	柾目	
2082	SK64	・のりつね	33.4	3.6	0.6	柾目	
2083	SK64	・掘水 壱本	16.6	3.8	0.6	柾目	
2084	SK64	・織部様	11.1	3.0	0.6	柾目	
2085	SK64	・特〇〇	8.7	1.5	0.2	柾目	
2086	SK65		12.7	3.2	0.3	柾目	

表18 殿町279番地外（南屋敷）木製品遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	名称 部位	法量(cm)			木取り	備考
				長さ(口径)	幅	高さ(器高)		
1266	SE02	箸		21.8			φ0.5	白木。
1267	SE02	箸		29.6			φ0.6	白木。
1278	SK06	祈祷具	外蓋	24.4	43.5	3.0	厚2.0	かえし部(長20.8/幅1.3/厚0.8cm)。かえしは膠などの接着剤で結合。表面に墨書あり。「土□□□物」。
1279	SK06	祈祷具	外箱	22.8	44.0	23.0	厚1.6	底面から目釘で固定(長辺3ずつ、短辺2ずつ)。
1280	SK06	祈祷具	内蓋	21.0	37.1	3.2	厚2.4	かえし部(長16.2/幅2.0/厚0.8cm)。かえしは目釘2ずつで固定。表面に墨書あり。「□故實法除剋害 □金祭鐵丸壇丸 橋明裔謹修行」朱印あり。「土金両来」「明裔」「班鳩神祇司」。
1281	SK06	祈祷具	内箱	20.2	37.2	14.4	厚2.2	底面から目釘で固定(長辺3ずつ、短辺2ずつ)。
1283	SK06	竹		31.5	6.6		厚0.5	祈祷具内容物。鉄玉・土玉が挟まれていた部分に円形の抉りと墨書による印あり。
1284	SK06	竹		31.8	7.2		厚0.5	祈祷具内容物。鉄玉・土玉が挟まれていた部分に円形の抉りと墨書による印あり。
1285	SK07	八角形祈祷具	蓋	15.5	15.5	1.0	厚0.5	かえし部(長5.9/幅0.8/厚0.5cm)。かえしは目釘2ずつで固定。両面に墨書あり。表面・「方徳壇」。朱印「土金両来」。裏面・「木火土金水」。
1286	SK07	八角形祈祷具	箱	15.8	15.8	6.9	底板厚0.5 側板厚0.4	底面から目釘で固定(8面1ずつ)。8側外面に墨書あり。「玄武」「艮」「青龍」「巽」「朱雀」「坤」「白虎」「乾」。
1357	SK08	箸		19.4			φ0.5	白木。
1358	SK08	箸		24.0			φ0.5	白木。
1425	SK13	漆器		10.4				内:赤/外:黒。外面に赤絵。高台内に赤絵草文。
1426	SK13	曲物	底板	φ9.5			厚0.8	柾目 側面に溝。
1427	SK13	箆(片刃)		23.4	1.3-2.3		厚0.2	柾目
1428	SK13	薙刀の模倣品		20.5	2.2		厚0.7	柾目 基部断面に目釘穴1。両面に溝。
1429	SK13	桶の把手か		21.6	2.0-4.2		厚1.3	柾目 抉り部に目釘1ずつ。
1430	SK13	膳か折敷	脚部か	34.5	3.5-4.7		厚1.3	柾目 両端に目釘穴1、目釘1。
1431	SK13	羽子板		32.9	2.6-8.8		厚0.9	柾目 把手部表裏に火起こし痕。
1432	SK13	羽子板		36.2	3.6-9.9		厚0.6	柾目
1433	SK13	箸		20.5			φ0.5	白木。
1434	SK13	箸		24.8			φ0.5	白木。
1435	SK13	箸		27.4			φ0.7	白木。
1436	SK13	箸		30.0			φ0.6	白木。
1515	第2遺構面 遺構外	板材		7.3	29.2		厚0.7	柾目 両面に墨書あり。上面・「庄三/惣三郎/藤右衛門/弥三郎/源二郎/五〇郎/きく/きし/さい」。下面解説不可能。
1516	第2遺構面 遺構外	漆器		11.0				内:赤/外:黒。外面に黄二重丸に赤梅文3。
1517	第2遺構面 遺構外	杵型木製品		20.6			φ1.8-3.9	
1518	第2遺構面 遺構外	箸		21.9			φ0.6	白木。
1519	第2遺構面 遺構外	箸		24.3			φ0.6	白木。
1586	第2遺構面覆土	曲物		5.5	18.3		厚0.9	板目 片面に墨書あり。「白」。両側に穿孔1ずつ。
1587	第2遺構面覆土	不明	把手か	11.2	3.3		厚1.5	柾目 面上に穴2。上下側面に目釘穴1ずつ。
1601	SB09内 確石3	桶か樽	底板	φ49.8			厚1.8	柾目 断面に目釘2、目釘穴2。面上に工具による加工痕。
1612	SK34	漆器	平椀	12.0				内:赤/外:黒。胴部に明確な稜線2本。外面に黄草文。

1622	SK40	箸		26.8		φ 0.5	白木。
1623	SK40	箸		32.7		φ 0.7	白木。
1635	SK41	漆器	小杯か小皿	8.0			内外:赤。内面に流水文。
1636	SK41	漆器		10.0			内:赤/外:黒。外面に赤二重丸(山2)3。
1637	SK41	不明		16.9		φ 1.8	柾目 端部が段状。
1638	SK41	折敷	底板	21.8	4.4	厚0.3	柾目 面の周縁に目釘2、目釘穴1。
1683	第3遺構面 遺構外	桶	底板	73.4	20.0	厚3.4	柾目 断面に目釘が3、目釘穴2。片面の周縁を面取り加工。
1684	第3遺構面 遺構外	桶	底板	75.5	18.5	厚3.3	板目 側面に目釘9、目釘痕9。
1685	第3遺構面 遺構外	箸		25.6		φ 0.6	白木。
1686	第3遺構面 遺構外	箸		28.6		φ 0.5	白木。
1687	第3遺構面 遺構外	箸		29.6		φ 0.5	白木。
1743	第3遺構面覆土	人形	頭部	10.4	4.0	φ 0.5/3.5/φ 0.2	頸に穴。指人形か。
1794	SK43	漆器		10.0			内:赤/外:黒。外面黄絵菊文。
1795	SK43	漆器		10.8			内:赤/外:黒。外面赤絵丸に筈3つ。
1796	SK43	板材		37.9	7.1	厚1.8	片面に墨書きあり。「屋○○/天○」。側面に目釘6。
1800	SK43	下駄	隅丸型連衝下駄	19.7	8.9	2.8	歯高0.6cm。歯の左側磨り減り顕著。指の痕跡あり。
1801	SK43	下駄	丸型差込下駄	21.5	8.1	2.6	ホゾ穴前後1ずつ。歯底面に砂付着。歯の磨り減り顕著。指の痕跡あり。
1802	SK43	下駄	角型連歎下駄	20.7	7.9	6.2	歯高5.0cm。歯底面に砂付着。歯の磨り減り顕著。
1803	SK43	下駄	角型差込下駄	21.5	8.0	7.0	全面に捕渉か。歯高4.0cm。ホゾ穴前後2ずつ。歯底面に砂付着。歯の磨り減り顕著。指の痕跡あり。
1804	SK43	折敷		25.1	18.4	厚0.7	柾目 表裏:黒。上面隅に目釘多数あり。
1805	SK43	樽	蓋板	17.7	6.6	厚1.2	板目 断面に目釘穴1、面上にφ 2.5の穿孔と鉄釘穴。端部に面取り加工。
1806	SK43	柄杓	身部側板・底板	φ 10.5		底板厚0.9 側板厚0.2	柾目 柄部を取り付けるバーツに穴。側面に目釘2、目釘穴2。
1807	SK43	箸		23.7		φ 0.5	白木。
1808	SK43	箸		24.1		φ 0.5	白木。
1809	SK43	箸		27.2		φ 0.5	白木。
1810	SK43	箸		27.6		φ 0.7	白木。
1811	SK43	刷毛		14.2	6.3~10.7	厚1.0	柾目 全面:黒。先端部に目釘穴2段(上3、下9)。紐穴。先端部に線状の溝。柄中央にφ 0.6の穿孔。
1812	SK43	箆(片刃)		26.5	4.5	厚0.8	柾目 柄部先端欠損。
1813	SK43	箆		26.1	2.8	厚0.1~0.6	柾目 先端:黒。
1814	SK43	不明		22.6	2.4	厚1.1	柾目
1815	SK43	柄		16.7	3.6	厚2.5	柾目 直線状の茎穴。
1816	SK43	不明		12.4	1.2	厚0.6	柾目
1817	SK43	柄か		18.7		φ 2.1	柾目 縦横に溝。
1848	SK44	漆器		11.8	5.1		内:赤/外:黒。外面に黄草文。特殊。
1849	SK44	漆器		12.0~14.0			内外:黒。外面赤絵草文(スキ)。
1851	SK44	折敷	底板	23.5	23.3	厚0.7	柾目 全面:黒。湾曲する。周縁に目釘痕多数。表裏に引掛け傷。
1852	SK44	糸巻きか		11.2	2.9	厚2.9	板目 端部に面取り。
1853	SK44	柄か		16.8	3.1	厚1.9	板目 基部付近に溝。
1854	SK44	糸巻きか		23.3	5.2	厚5.0	端部に面取り。
1855	SK44	箸		24.7		φ 0.5	白木。
1866	SK45	漆器		11.5			内:赤/外:黒。外面に黄二重丸に左巴文(一部赤)。
1867	SK45	栓(円柱状)		4.3		φ 1.6~2.3	柾目
1868	SK45	柄杓	底板	φ 10.7		厚0.9	柾目 側面に目釘穴4。目釘1、切り込み1。
1869	SK45	下駄	丸型差込下駄	21.8	8.0	厚2.6	ホゾ穴前後1ずつ。指の痕跡あり。
1870	SK45	箸		24.5		φ 0.6	白木。焼けた痕跡がある。
1871	SK45	箸		27.0		φ 0.8	白木。
1881	SK46	箸		24.4		φ 0.4	白木。
1882	SK46	箸		28.0		φ 0.7	白木。
1888	SK47	漆器		9.8	3.0		内:赤/外:黒。外面黄二重丸に五弁花文(花びら1枚は赤)3。
1889	SK47	漆器		12.9			内:赤/外:黒。外面黄丸に鶴文3。
1890	SK47	不明		12.6	1.6	厚0.9	面中央に目釘1。
1891	SK47	柄		20.2	3.1	厚2.4	両側側面に穴あり。
1892	SK47	箸		24.4		φ 0.6	白木。
1893	SK47	箸		26.1		φ 0.7	白木。
1915	SK48	漆器	平椀	12.6	5.4		内外:黒。口縁部:赤。腰部に棱線2本。外面に黄線。カツラあり。
1917	SK48	下駄	丸型差込下駄	21.2	7.9	10.1	厚2.9
1918	SK48	下駄	丸型差込下駄	21.6	8.3	4.8	厚2.5
1919	SK48	下駄	丸型差込下駄	21.4	7.9	厚2.7	
1920	SK48	下駄	角型差込下駄	22.5	9.1	9.9	厚2.6
1921	SK48	下駄	角型連歎下駄	22.5	8.9	2.4	厚1.4
1922	SK48	下駄	角型連歎下駄	24.5	8.6	5.5	厚2.0
1923	SK48	下駄	歯	7.0~12.4	8.8	厚1.6	柾目 ホゾなし。歯底面に砂付着。
1924	SK48	下駄	歯	8.0~11.9	5.5	厚1.9	柾目 ホゾ1。割り込み式。歯底面に砂付着。磨り減り顕著。
1925	SK48	下駄	歯	8.0~10.7	6.2	厚1.6	板目 ホゾ2。割り込み式。歯底面に砂付着。磨り減り顕著。
1926	SK48	曲物	底板	13.1	5.7	厚1.1	柾目 端部面取り。焼き焦げ痕、火おこし痕。
1927	SK48	蓋か		φ 8.0		厚1.4	中央にφ 2.2cmの穿孔。
1928	SK48	箸		24.0		φ 0.5	白木。
1929	SK48	箸		24.5		φ 0.4	白木。
1930	SK48	箸		25.2		φ 0.6	白木。
1931	SK48	箸		27.7		φ 0.6	白木。
1943	SK50	漆器		12.0			内:赤/外:黒。外面に赤草文(松)。
1945	SK50	下駄	丸型差込下駄	20.9	7.5	4.1	厚1.9
1946	SK50	下駄	角型差込下駄	22.0	8.8	5.7	厚2.5
1947	SK50	下駄	角型連歎下駄	18.5	8.4	4.2	厚2.0
1948	SK50	箸		25.6		φ 0.5	白木。
1949	SK50	箸		27.7		φ 0.5	白木。

第5章 殿町 279番地外調査（南屋敷）の概要

1950	SK50	折敷か	脚部か	29.5	6.2		厚1.3	柾目	側面に目釘2。
1951	SK50	刀等の模倣品	刃部	28.1	2.0		厚0.6	柾目	刀型に加工。木目が綺麗なもの。
1952	SK50	鎧(片刃)		26.0	4.4		厚0.2	柾目	刃部が磨り減る。
1953	SK50	不明		4.0	3.8		厚0.9	柾目	全面:黒。何かのバーツ。側面1面に接着剤。
1954	SK50	鎧(両刃)		32.9	10.5		厚0.8	柾目	鉄釘2。先端部が薄くなる。
1955	SK50	飾り板か		12.3	12.9		厚2.7	柾目	中央に桔梗文が彫られ、隅に溝が斜めに彫られる。
1956	SK50	不明		12.6	6.6		厚3.2	柾目	全面:黒。側面に鉄釘痕か。
1961	SK50	桶	蓋板	φ23.0~28.2			厚1.1	柾目	表面に目釘痕8、側面に2。
1962	SK50	桶	底板	φ28.4			厚1.7	板目	側面に目釘穴。
1963	SK50	桶	側板	15.1	5.8~1.8		厚1.0	板目	下部表面にタガ痕。
1964	SK50	桶	側板	15.1	6.3~2.5		厚1.0	板目	下部裏面に板の痕跡。
1965	SK50	桶	側板	15.7	2.4~1.6		厚0.8	板目	下端部を丸く仕上げる。上部裏面に板の痕跡。
1966	SK50	桶	側板	15.9	3.5~3.1		厚1.0	板目	下端部を丸く仕上げる。上部裏面に板の痕跡。上端部に砂付着。上部表面にタガ痕。
1967	SK50	桶	側板	15.8	5.4~4.7		厚0.9	板目	上下端部を丸く仕上げる。上部裏面に板の痕跡、表面にタガ痕。
1968	SK50	桶	側板	16.1	5.3~4.5		厚1.0	板目	上部表面にタガ痕。上下端部が丸く砂付着。上部裏面に板の痕跡。
1969	SK50	桶	側板	15.8	6.0~5.4		厚0.9	柾目	上下端部を丸く仕上げる。下端部に砂付着。上部表面にタガ痕、裏面に板の痕跡。
1970	SK50	桶	側板	15.9	6.0~5.7		厚0.9	柾目	上下端部を丸く仕上げる。上端部に砂付着。上部表面にタガ痕、裏面に板の痕跡。
1971	SK50	桶	側板	15.8	6.8~6.1		厚1.0	柾目	上下端部を丸く仕上げる。下部表面にタガ痕、裏面に板の痕跡。下端部に砂付着。
1972	SK50	桶	側板	16.1	7.4~6.8		厚0.9	柾目	上下端部を丸く仕上げる。下部表面にタガ痕、裏面に板の痕跡。下端部に砂付着。
1973	SK50	桶	側板	16.0	7.8~6.9		厚0.8	柾目	上下端部を丸く仕上げる。上部裏面に板の痕跡、下部表面にタガ痕。
1974	SK51	漆器		11.5		4.1			内:赤/外:黒。外面に赤丸に木瓜。
1976	SK51	下駄	丸型差込下駄	21.6	8.3		厚2.3		ホゾ穴前後2ずつ。指の痕跡あり。
1977	SK51	下駄	丸型差込下駄	21.3	8.2	6.0	厚2.4		全面:柿渋か。歯高3.5cm。ホゾ穴前後1ずつ。歯底面に砂付着。歯の磨り減り頗著。指の痕跡あり。
1978	SK51	灯明の台か		20.6	5.5		厚2.0	柾目	ホゾ穴中央に目釘穴1。
1979	SK51	置物	馬の脚部			11.0	φ1.8~3.1	柾目	体部に取り付け用の目釘、底に目釘穴。丁寧なつくり。
1980	SK51	箸		24.7			φ0.6		白木。
1981	SK51	箸		27.8			φ0.6		白木。
1982	SK51	箸		28.5			φ0.6		白木。
1983	SK51	下駄	丸型差込下駄	21.1	8.2	7.8	厚2.5		全面:柿渋か。歯高7.0cm。ホゾ穴前後1ずつ。歯底面に砂付着。歯の擦り減り頗著。指の痕跡あり。
1984	SK51	下駄	角型連歯下駄	23.5	8.1	1.8	厚1.4		歯高0.4cm。補修孔らしき釘穴4。歯の磨り減り頗著。
1985	SK51	曲物	底板か蓋板	φ9.2			厚0.7	柾目	底板がはまる段、側面に目釘3。
1986	SK51	櫛		7.4	5.2		厚0.9		全面:黒。漆の皮膜あり。
1987	SK51	折敷か箱物	脚部か	32.3	10.2		厚1.2	柾目	全面:柿渋。特殊品。中央にホゾ穴、上部側面に目釘8。
1988	SK51	桶か樽	底板	31.7	13.4		厚1.5	柾目	断面に目釘穴2ずつ(計4)。端部に面取り。
1997	SK54	不明		13.2	6.0		厚0.6	柾目	面中央に瓢箪形の割り抜き、φ0.7cmの穿孔。長辺側面に目釘4。
1999	SK54	箸		24.9			φ0.6		白木。
2000	SK54	箸		25.5			φ0.5		白木。
2010	SE03	下駄	角型差込下駄	22.2	7.9	3.8	厚2.1		歯高1.0cm。ホゾ穴前後1ずつ。指の痕跡あり。
2054	SD01南側裏込	下駄	角型連歯下駄	21.5	8.5	2.1	厚1.3		歯高0.8cm。歯の擦り減り頗著。指の痕跡あり。
2076	SK64	下駄	角型差込下駄	22.4	9.0		厚4.0	柾目	ホゾ穴前後1ずつ。指の痕跡あり。
2077	SK64	下駄	角型連歯下駄	22.3	7.5	2.1	厚1.0		歯高0.8cm。歯底面に砂付着。歯の擦り減り頗著。指の痕跡あり。
2078	SK64	曲物	底板か蓋板	9.1	2.4		厚0.6	柾目	綴り皮1。側面斜めにカット。
2079	SK64	不明		4.0	1.3		厚0.8	柾目	全面:柿渋。
2080	SK64	櫛		4.2	3.8		厚1.0		全面:柿渋か。
2088	SK65	漆器		11.5		8.6	厚1.2		内外:赤。外面黒絵草文。
2089	SK65	櫛							刃の部分欠損。
2090	SK65	不明		10.9	3.5		厚0.5	柾目	
2091	SK65	漆器	盆か	23.2					内:赤/外:黒。内面黄ススキ。
2092	SK65	箸		23.5			φ0.5		白木。
2093	SK65	箸		25.2			φ0.5		白木。
2095	SK66	桶	蓋板か	φ14.2			厚0.5	柾目	片面に墨書きあり。「千手院」。
2096	SK66	箸		25.8			φ0.6		白木。
2097	SK66	箸		28.5			φ0.6		白木。
2122	SK67	御神体	顔と男性シンボル	13.0	2.0		φ2.0		
2123	SK67	栓(円柱状)		4.6			φ1.8~3.0	柾目	
2124	SK67	下駄	角型削り下駄	20.3	9.9	3.5	厚1.9		
2126	SK68	桶	側板	29.6	29.5		厚1.3	柾目	抉り部分に鉄釘3。端部に面取り、弧状の加工、工具痕。
2127	SK68	桶	側板	29.6	29.2		厚1.3	板目	抉り部分に鉄釘5。端部が弧状に加工、湾曲している。
2151	SK72	下駄	丸型差込下駄	22.0	8.4		厚3.0		表:黒/裏:下地。ホゾ穴前後1ずつ。指の痕跡あり。
2152	SK72	不明		21.1	8.5		厚0.8	柾目	面上に方形の穿孔5、目釘穴6。
2153	SK72	人形	頭	9.5	5.0		厚4.9	柾目	出土時顔料(白)残存。非常に丁寧なつくり。髪の毛を入れる穴多数。首に差し込み穴。
2154	SK72	人形	頭	9.6	4.4		厚3.6	柾目	首に差し込み穴。
2155	SK72	刷毛	体部～把手部	11.9	13.6		厚0.9	柾目	柄部にφ0.15cmの穿孔1。刷毛部上段切り込みに目釘穴3、下段切り込みに目釘穴7。刷毛部を割って毛を挟む構造。
2156	SK72	鎧(両刃)		20.6	8.7		厚0.9	柾目	前面面取り加工。
2157	SK72	折敷か	脚部か	26.2	9.4		厚1.1	柾目	上部側面中央にホゾ痕。ホゾ痕に目釘1。
2158	SK72	羽子板状		33.9	2.4~8.2		厚1.2	板目	面上に工具による加工痕。
2159	SK72	箸		24.1			φ0.4		白木。
2160	SK72	箸		24.8			φ0.6		白木。
2161	SK72	箸		28.0			φ0.6		白木。
2162	SK72	箸		29.6			φ0.6		白木。

表 19 殿町 279 番地外（南屋敷）瓦観察表

遺物番号	遺構名	種類	法量(cm)	色調	備考
1256	SK01	棟瓦(左)	長13.5/幅9.4/厚1.7	外内)暗灰・黃灰色	スタンプあり。
1263	SE01	鬼瓦	縦9.0/横20.5/厚3.5	外内)暗灰色	鬼瓦の一部分。
1271	SK04	棟瓦(左)	長28.0/幅12.5/厚1.7	外)暗灰・黃灰色 内)灰黃褐色	スタンプあり。
1316	第1遺構面 遺構外	鬼瓦	縦21.8/横27.0/厚12.2	鈍黃褐色	来待石製。中央に「丸に木瓜」紋。
1359	SK08	棟瓦(右か)	長20.7/幅7.7/厚1.5	外内)灰色	スタンプあり。
1437	SK13	軒丸瓦	外径16.8/内径11.4/丸瓦厚2.2	外)灰・暗灰色 内)灰色	コピキB。連珠三巴文。左巻。残存珠文5。巴文・珠文間に圈線。
1438	SK13	軒丸瓦	外径16.8/内径11.2/丸瓦厚1.7	外)灰白・灰色 内)暗灰・黃灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文6。木目痕あり。
1439	SK13	軒丸瓦	外径16.8/内径11.6/丸瓦厚2.3	外内)暗灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文6。
1440	SK13	軒丸瓦	外径18.0/内径14.6/丸瓦厚1.8	外内)暗灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文3。
1441	SK13	平瓦厚2.5		外内)灰色	唐草文。
1453	SK16	棟込瓦	長12.2/幅8.7/厚1.7	外)灰・暗灰色 内)灰色	コピキB。内面に布目痕。
1454	SK17	棟瓦か	長6.8/幅6.9/厚1.8	外内)灰白色	小片の為左右不明。棟瓦か軒瓦も不明。
1464	SK21	鬼瓦	長11.5/幅5.0/厚4.1	外内)灰色	鬼瓦の一部分。
1467	SK22	唐草鎌軒瓦(右)	上弦幅8.3/下弦幅8.5/瓦当高4.9/平瓦厚2.1	外内)灰色	唐草文。
1468	SK22	唐草鎌軒瓦(右)	上弦幅24.5/下弦幅27.0/瓦当高5.0/平瓦厚1.8	外内)灰色	唐草文。b-3類。
1469	SK22	鬼瓦	長21.2/幅32.5/高12.2/厚4.7	外)暗灰・黃褐色 内)暗黃褐色・灰色	
1470	SK22	棟瓦(左)	長13.8/幅17.0/厚1.8	外内)暗灰色	スタンプあり。
1471	SK22	棟瓦(左)	長34.4/幅18.5/厚1.9	外内)灰色	スタンプあり。
1472	SK23	棟瓦(左)	長20.5/幅25.9/厚2.0	外)暗灰・黃褐色 内)暗灰・灰色	スタンプあり。銀化。
1485	SK27	棟瓦(左)	長9.4/幅9.0/厚1.5	外内)鈍黃橙色	
1520	第2遺構面 遺構外	棟瓦(右か)	長18.8/幅17.0/厚1.6	外内)灰色	
1521	第2遺構面 遺構外	棟込瓦	長12.6/幅9.0/厚1.8	外内)暗灰・灰色	コピキA。
1522	第2遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径15.6/内径10.2/丸瓦厚2.1	外)暗灰・黃褐色 内)暗灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文4。
1523	第2遺構面 遺構外	鬼瓦	長28.5/幅30.0/高6.3/厚1.8	外内)暗灰色	
1588	第2遺構面 覆土	軒丸瓦	外径18.0/内径13.6/丸瓦厚1.7	外内)鈍黃橙色	連珠三巴文。左巻。残存珠文3。
1589	第2遺構面 覆土	軒丸瓦	外径17.2/内径12.2/丸瓦厚1.8	外)暗灰・黃褐色 内)暗灰・灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文9。
1590	第2遺構面 覆土	軒丸瓦	外径17.8/内径13.2/丸瓦厚1.8	外)淡黃色 内)灰白色	連珠三巴文。左巻。残存珠文4。
1591	第2遺構面 覆土	鬼瓦か	縦7.7/幅12.0/厚3.3	外)灰・黃褐色 内)灰・黃褐色	鬼瓦の一部か。
1592	第2遺構面 覆土	不明	長17.8/幅16.5/厚1.9	黃灰・黃褐色	
1593	第2遺構面 覆土	軒平瓦	上弦幅8.0/下弦幅7.0/瓦当高4.7/平瓦厚2.4	外内)灰色	唐草文。
1594	第2遺構面 覆土	軒平瓦	上弦幅17.5/下弦幅10.0/瓦当高5.2/平瓦厚1.8	外内)灰色	唐草文。
1595	第2遺構面 覆土	棟瓦(右か)	長15.0/幅10.9/厚1.7	外)灰白・黃褐色 内)灰色	スタンプあり。
1596	第2遺構面 覆土	棟瓦(左)	長25.0/幅19.0/厚2.0	外)暗灰・黃褐色 内)暗灰色	スタンプあり。
1602	SB09内 碓石4	棟瓦(左)	長24.2/幅16.5/厚1.4	外内)暗灰色	
1606	SK32	軒平瓦	上弦幅12.8/下弦幅4.8/瓦当高4.3/平瓦厚1.5	外内)暗灰色	唐草文。
1607	SK33	軒丸瓦	内径10.6/丸瓦厚1.8	外)鈍黃色 内)灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文10。
1689	第3遺構面 遺構外	丸瓦	長13.5/幅12.8/厚2.9	外内)暗灰色	
1690	第3遺構面 遺構外	丸瓦	長28.9/幅16.0/厚2.1	外)暗灰・黃褐色 内)暗灰・灰色	コピキB。
1691	第3遺構面 遺構外	棟込瓦	長13.2/幅11.5/厚1.9	外)暗灰・黃褐色 内)暗灰・灰色	コピキB。布目痕。
1692	第3遺構面 遺構外	棟込瓦	長13.5/幅12.2/厚1.8	外)黑褐色 内)暗灰色	コピキB。布目痕。
1693	第3遺構面 遺構外	鬼瓦	縦6.8/幅14.8/厚4.6	外内)灰色	
1694	第3遺構面 遺構外	軒平瓦	上弦幅10.3/下弦幅6.3/瓦当高4.6/平瓦厚2.2	外内)暗灰色	唐草文。
1695	第3遺構面 遺構外	軒平瓦	上弦幅11.4/下弦幅9.9/瓦当高4.2/平瓦厚1.6	外内)暗灰・灰色	唐草文。文様は三葉系。
1696	第3遺構面 遺構外	軒平瓦	上弦幅14.4/下弦幅9.0-14.5/瓦当高4.5/平瓦厚2.3	外内)灰・白白色	唐草文。文様は三葉系。
1697	第3遺構面 遺構外	軒丸瓦	内径11.0/外径15.4/丸瓦厚2.1	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文5。
1698	第3遺構面 遺構外	軒丸瓦	内径10.6/外径16.2/丸瓦厚2.3	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文9。
1699	第3遺構面 遺構外	不明	長14.5/幅7.1/厚3.7	外内)灰色	
1700	第3遺構面 遺構外	棟瓦(右か)	長8.1/幅6.2/厚1.6	外内)灰・黃褐色	左右不明。
1701	第3遺構面 遺構外	平瓦	長28.6/幅14.5/厚2.3	外)暗灰・黃褐色 内)灰色	
1744	第3遺構面 覆土	軒丸瓦	外径16.5/内径10.5/丸瓦厚2.5	外)灰・暗灰色 内)暗灰色	連珠三巴文。左巻。珠文17。巴文・珠文間に圈線。
1745	第3遺構面 覆土	軒丸瓦	外径16.6/内径11.4/丸瓦厚1.8	外)暗灰色 内)灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文4。
1746	第3遺構面 覆土	軒丸瓦	外径16.2/内径10.8/丸瓦厚1.7	外)灰白色 内)灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文8。木目痕あり。
1747	第3遺構面 覆土	軒丸瓦	外径17.1/内径11.1/丸瓦厚2.2	外)灰色 内)暗灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文10。巴文・珠文間に圈線。
1748	第3遺構面 覆土	軒平瓦	瓦当高4.8/平瓦厚2.3	外内)灰色	唐草文。文様は三葉系。
1749	第3遺構面 覆土	軒平瓦	上弦幅6.4/下弦幅7.2/瓦当高4.7/平瓦厚1.8	外内)灰黃色	唐草文。文様は三葉系。
1750	第3遺構面 覆土	軒平瓦	上弦幅8.0/下弦幅7.7/瓦当高5.7/平瓦厚1.8	外内)灰色	唐草文。文様は三葉系。
1751	第3遺構面 覆土	軒平瓦	下弦幅18.0/平瓦厚2.3	外内)灰色	唐草文。文様は三葉系。
1752	第3遺構面 覆土	丸瓦	長11.0/幅10.1/厚2.8	外内)灰色	スタンプあり。コピキB。
1753	第3遺構面 覆土	棟瓦(右か)	長21.5/幅16.9/厚1.8	外)暗灰色 内)暗灰・灰白・黃褐色	スタンプあり。
1754	第3遺構面 覆土	棟瓦(右か)	長11.9/幅11.4/厚1.6	外)暗灰色 内)黃灰色	スタンプあり。
1755	第3遺構面 覆土	棟瓦	長15.4/幅12.0/厚1.7	外内)鈍黃・黃褐色	焼成不良。左右不明。
1756	第3遺構面 覆土	棟込瓦	長12.9/幅10.5/厚1.6	外)暗灰・黃褐色 内)灰色	コピキB。布目痕。
1757	第3遺構面 覆土	棟込瓦	長13.2/幅13.9/厚2.0	外)黑褐色・黃褐色 内)暗灰・黃褐色	布目痕。
1761	SD07	丸瓦	長13.3/幅8.2/厚2.6	外)暗灰 内)暗灰・黃褐色	コピキB。
1762	SD07	丸瓦	長24.5/幅13.5/厚2.0	外内)暗灰色	コピキB。布目痕。
1818	SK43	鬼瓦	長28.5/幅32.9/厚2.0	外内)暗灰色	
1819	SK43	軒丸瓦	内径11.2/外径16.0/丸瓦厚1.9	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。珠文17。巴文が小さい。
1856	SK44	軒丸瓦	内径10.5/外径16.5/丸瓦厚2.5	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。珠文17。
1857	SK44	軒平瓦	下弦幅6.0/平瓦厚2.4	外内)灰白色	唐草文。
1872	SK45	丸瓦	長14.4/幅12.4/厚2.6	外内)灰色	コピキB。
1883	SK46	棟込瓦	幅11.6/長12.6/厚1.9	外内)暗灰色	布目痕。
1957	SK50	棟込瓦	長13.6/幅10.5/厚1.7	外内)暗灰・鈍黃色	コピキB。
1958	SK50	軒丸瓦	外径16.2/内径10.0/丸瓦厚2.3	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文4。巴文・珠文間に圈線。
1959	SK50	軒丸瓦	外径15.2/内径9.2/丸瓦厚2.4	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文3。巴文・珠文間に圈線。
1960	SK50	軒平瓦	上弦幅8.0/下弦幅7.6/瓦当高5.1/平瓦厚2.0	外内)灰色	唐草文。文様は三葉系。
1989	SK51	鬼瓦	縦14.8/横9.4/厚1.7-2.3	外内)灰黃・黃褐色	
1990	SK51	鬼瓦	縦14.2/横12.2/厚1.2-3.9	外)淡黃褐色 内)灰黃・黃褐色	
2001	SD08	軒平瓦	上弦幅14.8/下弦幅13.6/瓦当高4.7/平瓦厚2.0	外内)灰・黃褐色	唐草文。文様は三葉系。
2002	SD08	棟瓦(右か)	長17.8/幅16.4/厚2.0	外内)灰色	切込みが平瓦にあれば平瓦になる。
2005	SU02	丸瓦	長27.2/幅14.8/厚2.3	外内)灰色	
2006	SU02	丸瓦	長14.7/幅13.1/厚2.1	外内)灰色	コピキB。
2007	SU02	軒平瓦	下弦幅7.7/平瓦厚1.8	外内)灰色	唐草文。文様は三葉系。

第5章 殿町 279番地外調査（南屋敷）の概要

2008	SU02	軒平瓦	下弦幅8.0/平瓦厚1.9	外内)灰色	唐草文。文様は三葉系。
2009	SU02	棟込瓦	長11.7/幅8.7/厚2.0	外内)暗灰色	コビキB。布目痕。
2011	SE03	軒丸瓦	外径15.2/内径9.6/丸瓦厚2.0	外内)灰・黄褐色	連珠三巴文。左巻。残存珠文8。巴文・珠文間に圈線。
2070	SD09	鬼瓦	縦10.5/横7.1/厚2.4	外内)暗灰色	
2073	SK63	丸瓦	長14.9/幅15.8/厚2.3	外内)灰色	コビキB。
2074	SK63	丸瓦	長14.2/幅16.0/厚2.2	外内)灰色	コビキB。
2114	SD10	丸瓦	長17.8/幅8.4/厚2.1	外内)暗灰・灰・鈍橙色	コビキB。
2115	SD10	軒丸瓦	外径15.6/内径9.8/丸瓦厚1.9	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。珠文16。
2116	SD10	軒丸瓦	内径11.4/丸瓦厚2.3	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文5。巴文・珠文間に圈線。
2117	SD10	軒平瓦	上弦幅6.1/瓦当高4.2/平瓦厚1.6	外内)暗灰色	唐草文。文様は三葉系。
2118	SD10	軒平瓦	上弦幅11.9/下弦幅4.2-11.3/瓦当高4.8/平瓦厚1.5	外内)灰・暗灰色	唐草文。文様は三葉系。
2119	SD10	丸瓦	長10.5/幅12.6/厚2.2	外灰黄・暗灰色 内暗灰・灰色	コビキA。布目痕。
2120	SD10	丸瓦	長10.4/幅15.2/厚4.1	外内)暗灰色	コビキB。布目痕。
2137	SX07	丸瓦	長20.7/幅10.1/厚2.5	外内)暗灰・灰色	コビキB。
2185	第3-2遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径15.8/内径9.8/丸瓦厚2.0	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。珠文16。
2186	第3-2遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径16.4/内径10.8/丸瓦厚1.9	外内)灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文6。
2187	第3-2遺構面 遺構外	軒丸瓦	外径14.0/内径8.4/丸瓦厚1.4	外)灰白色 内)黄灰色	連珠三巴文。左巻。残存珠文6。木目痕あり。
2188	第3-2遺構面 遺構外	丸瓦	長12.8/幅11.1/厚2.2	外内)暗灰色	コビキB。布目痕。
2189	第3-2遺構面 遺構外	軒平瓦	上弦幅10.7/下弦幅6.5/瓦当高4.3/平瓦厚2.1	外内)灰色	唐草文。丸いスタンプ押印。
2190	第3-2遺構面 遺構外	軒平瓦	上弦幅12.9/下弦幅10.4/瓦当高4.8/平瓦厚1.8	外内)暗灰・灰色	唐草文。文様は三葉系。

第6章 南屋敷第4遺構面

第1節 調査の経緯と経過

補足調査

本発掘調査が終了し、島根県教育委員会と遺跡の取り扱い協議を実施したところ「礎石の下部構造の補足調査」「北屋敷の池改修についての補足調査(P192 第4章 SG02)」「北屋敷炭層の補足調査(P457 第7章第1節)」「北屋敷用途不明土坑の補足調査(P164 第4章 SG03)」の指示があった。

第4面の発見

これを受け平成20年9月9日から礎石の下部構造の補足調査を実施していたところ、最終遺構面と考えられていた第3遺構面の下から新たに礎石1個が検出された。このため、第3遺構面の下に4枚目の遺構面があるのか確認するためのトレンチ調査を松江市教育委員会が直営で実施することとなった。設定にあたっては、あらかじめ地面にピンポールを突き立て、抵抗のあった部分にトレンチを設定し、翌9月10日から掘削作業に取り掛かった。調査の結果、設定した4本のトレンチ総てから礎石や石敷きなどの遺構を検出し、海拔1.30m前後の高さに4枚目の遺構面が存在することが確定的となった。

ピンポールによる礎石確認の有効性が確認できたことから、9月11日からは調査区全体に50cmメッシュを設定し、ピンポールを50cmの深さまで突き刺して礎石の有無を確認した。この結果、屋敷境を挟んだ南屋敷では整然と並ぶ礎石列を確認することができたが、北屋敷では礎石を確認することはできなかった。トレンチによる確認調査でも北屋敷からは礎石や柱穴等の遺構は確認できなかったため、南屋敷の1,027mについてのみ追加での本発掘調査を実施することとなった。本章ではこの南屋敷における追加調査結果についての概要を述べる。

追加調査

南屋敷地の第4遺構面の追加調査については松江市教育委員会が直営で実施し、北側屋敷での補足調査については、引き続き財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課が担当した。追加調査は範囲確認調査の結果を基に調査区を決定し、グリッドを設定することから始めた。基準杭B1(X=-57890 : Y=80500)の上にトランシットを立て、B2杭(X=-57890 : Y=80490)を睨んで直線を設け、これと直交するように10×10mの方眼を組み、南東の交点をグリッド名とした。包含層の遺物の取り上げはこのグリッドごとに行っている。次に、土層観察用の畦を設定し10月1日から掘削作業を開始した。隨時遺構の精査、写真撮影を実施し、11月22日に全体写真の撮影、11月27日に地形測量図を作成し、総ての調査を終了した。

なお、追加調査の段階で撤去した第3遺構面の礎石、工事で影響を受けるため現地での保存ができなかった第4遺構面の礎石については番付けをして持ち帰り、市有地の『八色谷市有地』で保管している。



第3面の礎石の下から最初に検出された礎石



ピンポールでの礎石の確認調査風景